宗典部

第廿一卷

BL 1411 T8J3 1929 v.45

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂

國譯大藏経

LIBRARY
MAY 3 1 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 45

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部 第二十一卷

大乘義章第三 目次

卷第十四……一
卷第十五……七九
卷第十六本……一三八
卷第十六末……一五四
卷第十七本……二一五
卷第十七末……二六七
卷第十八……三三六
卷第十九……四一六
卷第二十本……四八七
卷第二十末……五四一

大乘義章第三

宗典部
第二十一卷

【一】淨法聚を明す中、第八十一段に十想の義を釋す中に五門分別あり第一に釋名辨相、

【無常想とは等】下無常想を釋す。

【龍樹の等】大智論第二十三。

大乘義章　卷第十四

遠法師撰す

淨法聚因法の中、此卷に二十一門有り。十相の義。十一切入の義。十聖處の義。十種慰喩の義。十願の義。十種供養の義。十無盡藏の義。信等の十行の義。十明の義。十忍の義。十無生忍の義。十住の義。十行の義、十廻向の義。十地の義。十功德の義。見性十法の義。涅槃十因の義。菩薩十力の義。菩薩十無畏の義。三乘共十地の義。

十想の義に五門分別あり。名を釋し相を辨ず一。體性二。處に就いての分別三。人に就いての分別四。受に約しての分別五。

(一)初に、名を釋し、相を辨ず。心を觀じ法に於て相を取るを、想と名く。想別不同にして一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には無常想、二には苦想、三には無我想、四には厭食想、五には一切世間不可樂想、六には死想、七には不淨想、八には斷想、九には離想、十には滅想、亦は盡想と名く。』無常想とは、有爲の法を觀ずるに、遷流して恒に非ざるが故に、無常と曰ふ。無常に三有り。一には分段の無常、六道の果報三世に分異す。中に於て二有り。一には有餘の身死して、名のみ在り。二には無餘の身死して、名も滅す。二には念の無常、有爲の念念に四相遷變するなり。三には自性不成實の無常、有爲の法は因緣の虛集にして、定性有ること無し。生も卽ち無生、滅も卽ち無滅なり。龍樹の說くが如し。身の盡滅を見るは、卽ち是れ第一の分段の無常なり。新新に生滅するは、是れ念の無常なり。生の時にも來ること無く、滅の時にも去ること無き、是れ共自性不成實の無

【龍樹等】大智論第二十三。

【苦想と等】次に苦想を釋す。

【龍樹等】大智論第二十三。

常なり。此三觀を以て能く煩惱を滅す。問うて曰はく、『人有りて無常を見るに由りて、更に煩惱を增す。盛年の久しからざるを懼れて、深く染著を起す。今云何が無常の相能く煩惱を滅すと言ふ。』『龍樹、釋して言はく、是の如く見る者を、少分見と名け、具足と名けず。若し具に見る者は、則ち煩惱を破す。』『云何が具足する。』『佛、昔舍利弗に告げて言へるが如し、「當に具に無常の想を修習すべし。無常の故に空なり。空を得るの時、無常も亦無なり。生住滅等も不可得なるが故に、生住滅を不可得と見る時を、名けて究竟自性無常と爲す。性既に無常なり、何んが樂つて貪ぼるべけん」と。』問うて曰はく、『若し空を得るの時、無常も亦無しと言はば、何が故に佛無常の義を說いて、苦諦の實と爲す。』『論に言はく、「佛は邪見の人の世間は常なりと謂ふが爲の故に、無常を說いて苦諦の實と爲したまふ。無常は是れ實と爲すが故に說くにはあらず」と。』苦想と言ふは、有爲の法を觀ずるに、無常なるが故に苦なり。苦に三種有り。謂ゆる、苦苦、壞苦、行苦なり。是義は前の四諦章の中に、具に廣く分別するが如し。問うて曰はく、『若し法は皆是れ苦なりと言はば、云何が苦樂及び捨の三受の差別有ることを得る。』『涅槃』に說くが如し、「凡夫は苦の中に、妄に樂想を生ず。理實には是れ苦なり」と。』問うて曰はく、『若し法無常の故に苦ならば、聖道無常の體は是れ苦なるや不や。』『龍樹釋して言はく、「無常の故に苦なりとは、有漏の五受陰に爲つて說き、聖道に爲らず。然る所以は、道能く苦を破し、空無我の實義と相應するが故に、無常なりと雖も、而も是れ苦に非ず」と。』問うて曰はく、『聖人の五陰無常

【龍樹等】大智論第二十三。
【論に等】大智論第二十三。
【無我想とは等】次に無我想を釋す

ならば、五陰壞する時、聖人は苦なるや不や。』『龍樹釋して言はく、「著心有る者は、法壞するとき則ち苦なり。聖人は著無きが故に、無常なりと雖も、而も苦を生ぜず」と。』問うて曰はく、『若し聖に苦無しと言はば、經の中に說くが如く、舍利弗は風病の苦を患ひ、畢陵伽婆蹉は眼病の苦を患ひ、婆羅那比丘は痔病を患ふの苦あり。云何が無しと言ふや。』『論に言はく、「聖人は但心苦無けれども、身苦無きに非ず」と。』問うて曰はく、『聖人に若し心苦無ければ、何が故に智を滅して、而して滅度を取るや。』釋して言はく、『無しとは、但道變敗壞の苦無く、苦苦厭行の苦無きに非ず。』無我想とは、有爲の法は無常にして苦なるが故に、自在なることを得ず。故に我有ること無し。又一切の法は、皆定性無きが故に我有ること無し。無我に二有り。一には衆生無我、二には法無我なり。此義は前の無我章の中に、具に廣く分別するが如し。問うて曰はく、『現に見るに爲作する所有り。云何が我無き。』『論に言はく、「但是れ五陰和合因緣の起作なり。實に我有ること無し」と。』問うて曰はく、『無常苦と無我とは、一と爲んや、異と爲んや。體若し是れ一ならば、應に三と說くべからず。體若し是れ異ならば、佛、應に「無常は卽ち苦、苦は卽ち無我なり」と說くべからず。』『論に言はく、「事は一なりとも、義に隨つて三を分つ。五義に之を分つ。一には觀に隨つて三を分つ。無常の行の爲に觀察せらるる者を說いて無常と爲し、苦の行觀の者は、之を說いて苦と爲し、無我の行觀を、名けて無我と爲す。二には所爲に三を分つ。無常想を修するは、三界に入らざらんが爲、苦想を修習するは、三界の過を知らん

【厭食想とは等】次に厭食想を釋す

【一切世間不可樂とは等】次に一切世間不可樂想。

が爲、無我想を修するは、三界を捨せんが爲なり。三には見を治むるに三を說く。無常想を修して常見を對治し、苦想を修習して樂見を對治し、無我想を修して我見を對治す。四には障を除くに三を說く。無常想を修して愛心を斷除し、苦想を修習して慢高を斷除し、無我想を修して諸見を斷除す。五には本末に三を分つ」と。論に「五陰は是れ其無常、無常は是れ苦、苦は是れ無我なり」と說く。此諸義を以ての故に、三種を分つ。「厭食想とは、所食の物を觀るに、多くは不淨の因緣より生ず。肉の如きは精血より生じ、乳酪の屬は血より生じ、餘食は多く虫鼠の爲に垢汚せらる。種種の汚穢其口中に至つて、胸涎流下して唾と和合し、腹に入つて糞と成る。貪樂すべきこと無し。又所食を觀るに、多くの功力もて得。是食を求めんが爲に、種種の苦を受くるが故に、應に厭離すべし。復應に食貪の罪過を觀察すべし。地獄の中に生じて、鐵を呑み、銅を飲み、餓鬼の中に生じて、飢渴の苦を受け、畜生の中に生じて、諸の糞穢を食す。是の如く一切無量の諸苦は、多くは食に由つて生ず。故に應に厭を生ずべし。一切世間不可樂とは、諸の世間を觀るに、皆無常苦なり。貪樂すべきこと無し。此世間の中に、其二種有り。一には衆生世間、二には器世間なり。衆生世間に五種の事有り。貪樂すべからず。一には八苦を具するが故に、樂ふべからず。二には無量の煩惱結使を具するが故に、樂ふべからず。三には諸の惡業を具するが故に、樂ふべからず。四には好事を具し難きが故に、樂ふべからす。或は善を行ずること有つて而も身苦惱し、或は身安樂にして而も行良からず、或は施を好んで而も貧しく、

【死想と等】 次に死想を釋す。

【不淨想とは等】 次に不淨想を釋す。

【三十六物】 吾人の內身にある外相の十二（髮、毛、爪、齒、涕、淚、涎、唾、屎、溺、垢、汗）身器の十二（皮膚、血、肉、筋、脈、骨、髓、肪、膏、腦、膜）內含の十二（肝、膽、腸、胃、脾、腎、心、肺、生藏、熟藏、赤痰、白痰）の三十六をいふ。

【斷離滅想とは等】 次に斷離滅想を釋す。

或は富有つて而も慳み、或は柔軟にして而も貪し、或は少欲にして多瞋なり。是の如きの一切具に備ふべきこと難し。五には稱可し難きが故に、樂ふべからず。或は卑下を見て諂曲と謂ひ、或は端直を見て慢高と謂ひ、或は親附を見て貪求と謂ひ、或は疏遠を見て憎嫌と謂ふ。是の如く一切の衆生世間に是五事有つて、貪樂すべからず。器世間の中にも、亦多種有つて、貪樂すべからず。或は熱、或は寒、或は水、或は旱、或は厄、或は嶮、或は不善を增し、或は恐怖多し。是の如きの一切なり。故に樂ふべからず。問うて曰はく、『前に無常苦等を說く。即ち是れ樂ふべからず。何んが別に、一切世間不可樂を說くことを須ふる。』『論に言はく、「觀行に總有り別有り」と。前の無常苦は是れ共總觀、此は別觀なり。又復前に無常苦等を說くは法の過を呵すと爲し、此不可樂は衆生の過を觀ずるなり。又前は有漏、此は是れ無漏なり。又前は見道、此は是れ修道なり。故に復之を說く』。死想と言ふは、是身を觀察するに、久しからずして摩滅す。當に無量の狐狼野干の爲に食噉せらるべし。不淨想とは、是身を觀察するに、五種の不淨あり。一には種子不淨、是身の過去の業煩惱等を以て種子と爲し、現に父母の精血を以て種と爲す。二には住處不淨、母の腹中の生藏の下、熟藏の上に在つて己身を安置す。三には自體不淨、三十六物集つて己體を成ず。四には自相不淨、九孔より常に流る。五には終竟不淨、是身死し已つて、埋むれば則ち土と成り、燒かば則ち灰と爲り、虫食して糞と成り、竟に一の淨きもの無し。斷離滅想とは、釋に通別有り。言ふ所の通とは、『成實』に說くが如し、「一切の行を斷ず、之を

【龍樹の等】大智論第二十三。

【大智論】第二十三。

名けて斷と爲し、一切の行を離す、之を說いて離と爲し、一切の行を滅す、之を目けて滅と爲す」と。此等は同體にして、義に隨つて三を分つ。龍樹も亦言はく、「涅槃の法を緣じて諸の結使を斷ず、之を名けて斷と爲し、諸の結使を離る、之を說いて離と爲し、諸の結使を滅す、之を名けて滅と爲す」と。同體義もて分つ。苦無常無我法等の同體義分の如し。言ふ所の別とは、『成實』の中の如く、五義に之を辨ず。一には勤めて已生未生の惡を斷ず。之を名けて斷と爲す。惡業を斷ずるなり。其欲をして盡して更に重ねて生ぜざらしむ。之を說いて離と爲す。煩惱を離るるなり。因を斷ずるを以ての故に、五陰の生ぜざる之を名けて滅と爲す。二には無明漏を斷ずる、之を名けて斷と爲し、欲漏有漏を離るる、之を說いて離と爲し、此二果を滅する、之を稱して滅と爲す。三には無明を斷じて慧解脫を得る、之を名けて斷と爲し、貪愛を除離して心解脫を得る、之を名けて離と爲し、俱解脫を得て癡愛を滅盡するを、說いて以て滅と爲す。四には聖道を以て諸の煩惱を斷ずる、之を名けて斷と爲し、有餘涅槃を得るを說いて以て離と爲し、無餘涅槃を得る、之を稱して滅と爲す。五には盡智を得る、之を名けて斷と爲し、無生智を得るを、說いて以て離と爲し、身智俱に亡ずるを、說いて以て滅と爲す。『大智論』に依らば、三義に異を辨ず。一には三毒を斷ずる、之を名けて斷と爲す。三塗の因を斷ずるなり。愛を離するを、離と名く。人天の因を離るるなり。苦盡くるを、滅と名く。五趣の果を滅するなり。二には四現忍を修して煩惱を遠離す、之を名けて離と爲し、無漏道を修して諸の煩惱を斷ずる、之

【二】第二に十想の體性を辨ず。
【論】大智論第二十三。
【三】第三に處に就いて分別して論ず。

を說いて斷と爲し、涅槃に入る時諸の苦を滅盡するを、說いて名けて滅と爲す。三には有餘涅槃を得て諸の煩惱を斷ずる、之を名けて斷と爲し、無餘涅槃を得て諸苦を滅盡する、之を說いて滅と爲し、此二の方便を說いて、名けて離と爲す。此一門竟る。

(二)次に、體性を辨ず。中に於て二有り。一には心法に就いて分別す。論の中に說くが如し。『此十は是れ共智慧の自性なり。』問うて曰はく、『若し此は是れ智慧の性ならば、何が故に想と名くる。』『釋に三義有り。一には心心法に更相に名を受く。四念處の體實に是れ慧なれども、而も名けて念と爲すが如し。此も亦是の如く體實に是れ慧なれども、而も名けて想と爲す。二には作に從つて名と爲す。慧と想とは俱なり。故に名けて想と爲す。故に論に釋して言はく、「無常を觀ずる慧と相應するの想を、無常想と名く。餘も亦是の如し」と。第三の義は、時に隨つて名を受く。行に三時有り。初に善法を習ひ法を受けて失せざる、之を名けて念と爲し、修行の次に相を轉じ心を轉ずる、之を說いて想と爲す。相を轉ずと言ふは、昔の凡の時の所取の定相を轉じ、心を轉ずと言ふは、先の凡の時の定計の心を轉ず。行修終に成じ、諸法の中に於て、決定して疑無きを、名けて智慧と爲す。』二には有漏無漏に就いて分別す。論に自ら釋して言はく、「初の三と後の三は、漏無漏に通ず。初は有漏を學し、終は無漏を成ず。中間の四種は一向に有漏なり」と。此二門竟る。

(三)次に處に就いて論ず。處別に三有り。一には禪地處、初の三と後の三は若し有漏なるは十一地に在り。謂はく、欲界地と八禪と未來と中間となり。若し無漏ならば、諸宗門じか

【大乘法】大智論第二十三。

【四】第四に人に就いて論ず。

【五】第五に五受に約して分別す。

【六】淨法乘第八十二段に十一切入の義を明すに四門の分別あり、第一に釋名辨相。

【經】北本涅槃經第三十一。

【涅槃】南本第二十八。北本第三十一。

らず。毘曇法の中には、唯九地に在り。根本の四禪と未來と中間と及び三無色となり。成實法の中には、七依處及び欲界の電光に在り。大乘法の中には、十一地に在り。有漏と同じ。大乘は欲界及び非想地に無漏有るが故に。中間の四種は是れ有漏なるが故に、十一地に在り。二には境界處、食の不淨を厭ふは、唯欲界を緣ず。餘は三界に通ず。三には道位處、龍樹の說くが如し。初の三は見道、次の四は修道、後の三は無學なり。處別是の如し。此三門竟る。

(四)次に、人に就いて論ず。龍樹の說くが如し。凡聖通じて起す。此四門竟る。

(五)次に、五受に約して、十想を分別す。龍樹の說くが如し。初の三と後の三は若し無漏なれば、喜樂及び捨の三根相應す。初二禪に在れば、喜根相應し、第三禪に在れば、樂根相應し、餘禪の中に在れば、捨根相應す。自餘の一切は四根相應す。一切の苦根を除く。十想是の如し。

十一切入の義に四門分別あり。一には名を釋し相を辨ず。二には體性。三には處に就いての分別。四には餘門に約對して優劣を辨定す。

(六)初に、名を釋し、相を辨ず。一切入とは、經の中に、亦は一切處と名く。入とは、猶是れ處の別稱なり。定心自在にして、能く所緣の相をして、在らずといふこと無からしむるを、一切處と名く、處別不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』一には青、二には黃、三には赤、四には白、五には地、六には水、七には火、八には風、九には空、

【雜心】第七。

十には識なり。若し『涅槃』に依らば、火の一切を去り、無所有を加へて、合して以て十と爲す。行者初に先づ意を繫け、安靜に己が身分に於て、少靑の相を取つて極めて明了ならしめ、明鏡の中に諸の色像を見るが如く、以て漸く之を廣くし、世界に周滿して同じく一の靑と爲るを、靑一切處と名く。黃赤白等の類も亦同じく然なり。此靑黃等は四大造に由るが故に、次に之を觀ず。始め自身に於て、少地の相を觀じて極めて明了ならしめ、以て漸く之を廣くし、世界に周滿して悉く一地と爲るを、地一切處と名く。水火風等の類も亦同じく然なり。色の多過を患ひて、次に色相を捨して無邊の虛空を緣ず。先に咽喉鼻口等の空を緣じて、極めて明了ならしめ、以て漸く之を廣くし、一切界を見て同じく一空と爲すを、空一切處と名く。彼空觀外緣の惱を患ひて、次に空相を捨して無邊の識を緣ず。始め一識を觀じて、極めて明了ならしむ。謂ゆる、一空を緣ずる識を觀じて、以て漸く之を廣くし、無邊の識を緣じて皆明了ならしむるを、識一切處と名く。問うて曰はく、『心識は云何が無邊なる。』『論に言はく、「其空無邊なるを以ての故に、空を緣ずるの識も亦復無邊なり」と。』問うて曰はく、『何が故に受等を觀ぜざる。』『成實』に釋して言はく、「地等を取るは其れ唯心識なるが故に、偏に識を觀ず。又識は是れ主なるが故に、偏に識を觀ず」と。』問うて曰はく、『何が故に偏に空識を說いて一切處と爲し、非想及び無所有を說いて一切處と爲さざる。』『雜心』に釋して言はく、「行者先に前の三解脫に入つて、勝進すること能はず。次に八勝に入る。勝處に入ると雖も、無邊なること能はず。故に靑等

【龍樹等】大智論第二十一。

【涅槃】南本第二十八。

【七】第二に十一切入の體性を釋す

の四の一切處に入る」と。』『此青黃等は何の所にか依止する。』『四大造に依るが故に、地等の四の一切處を觀ず。』『云何が此に於て勝進を得る。』『謂ゆる、覺知なり。無邊の空を知る。』『此知は何にか依る。』『謂はく、心識に依る。』『識は復何にか依る。』『更に所依無きが故に、上に立てず。龍樹釋して言はく「虛空は廣多なり。佛は虛空は無量無邊なりと說きたまふ。故に虛空を說いて一切處と爲す」と。向前の九種の一切觀の中に、皆心識有り。心識は能く一切の諸法を緣ず。一切法の中に、皆識有るを見る。故に心識を說いて、一切處と爲す。無所有の中には、多識を略去して、唯一識を緣ず。一識は廣ならず。是故に說いて一切處と爲さず。非想地の中には、心志微細にして、而も復精純なり。相を取ること得難く、廣ならしむべきこと難し。故に亦說いて一切處と爲さず。又復空處の方便道の中には、能く下地の無邊の色を緣じ、之に就いて空を觀ず。識處の方便には、能く下地の無邊の色空を緣じ、之に就いて識を觀ず。故に此二地を一切處と名く。上は是の如くならず。是が爲に立てず。』『涅槃』は何が故に、火一切を除き、無所有を立てて一切處と爲すや。』『增集論』に釋するが如し。彼は事火婆羅門の爲の故に、是の如きの說を作す。若し當に火一切處を宣說すべくんば、彼邪見を增す。是を以て之を去る。無所有處は多識無しと雖も、少識無きに非ず。十數を成ぜんが爲の故に、通じて之を說いて一切處と爲す。

此一門竟る。

(七)次に、體性を辨ず。中に於て二有り。一には心法もて分別す。相に隨つて別して分たば、

【八】第三に處に就いて十一切入を論ず。

【九】第四に餘門に對しての優劣を辨ず。

前の八種は是れ無貪の性なり。貪欲の治なるが故に、後の二は想の性なり。通じては則ち十種皆想の自性なり。假想の觀なるが故に。『成實』にも亦云はく、「十皆慧の性なり。觀法を以ての故に」と。二には有漏無漏に就いて分別す。此十は有漏なり。意解の觀なるが故に。此二門竟る。

（八）次に、處に就いて論ず。處の中に三有り。一には禪地處、十が中の前の八は第四禪に依る。空處、識處は各當地に說く。彼前の八種は、第四禪解脫道に依つて起す。過を防がんが爲の故に、後の二は是れ空處、識處の方便道に攝す。方便道の中には、能く廣く緣ずるが故に。二には境界處、『阿毘曇』及び『大智論』に依らば、前の八は欲界の淨色を境と爲す。欲界の貪欲の過を防がんが爲の故に。『成實』には、前の八は欲色界の中の色法を境と爲す。故に彼『成實』の一切入品に云はく、「若し欲界、色界の色を緣ずるに、復何の咎か有らん」と。後の二は皆當地の法を緣ず。問うて曰はく、『所緣は虛とや爲ん、實とや爲ん。』『論に言はく、「初は實、後は則ち虛假なり。意解して見るが故に」と。』問うて曰はく、『所見と彼神通の所作とは、何んが別なる。』釋して言はく、『神通所作の色像は、能く他をして見せしむ。此は但自ら見るのみ。又通の所作は、實の受用を得。此は但意解にして、實の用を得ず。斯異有るのみ。』三には人位處、凡夫聖人皆修起することを得。此三門竟る。

（九）次に、餘門に對して、優劣を辨定す。中に於て初の八一切處を以て、八勝處及び八解の中の初の三解脫に對して、優劣を辨定す。『成實』の如きに依らば、一切處は下なり。一向

【大智論】第二十一。

【一〇】淨法聚第八十三段に十聖處の義を明す。

有漏にして、起ること外凡に在り。八勝を中と爲す。初は有漏を學し、終は無漏を成ず。起ること内凡に在り。解脱は最上なり。一向無漏にして、起ること修道に在りと。若し『毘曇』に依らば、前の三解脱は總相觀の故に、說いて最下と爲す。八勝は次に廣し。說いて以て中と爲す。一切入とは最も廣觀と爲し、說いて上と爲す。『大智論』の中も亦此說に同じ。故に彼文に言はく「下品の行を名けて背捨と爲し、中品の行を名けて勝處と爲し、上品の行を一切處と名く」と。『是義云何。』『始に背捨を修して、五欲の事の中に復喜樂せず。未だ漏を盡さざるが故に、中間に結を生じて、淨色を愛著す。復勤めて精進して此著心を斷じて、此淨色は心想より生ずと知る。譬へば幻師の幻事を見て、著心を生ぜざるが如し。是時背捨を轉じて勝處と名く。然るに此れ勝なりと雖も、未だ寬廣なること能はず。是時行者還つて淨相を取り、以て漸く之を廣くし、虛空に周遍して悉く青黃赤白等の相を見、及び地水火風等の相を見る。是時勝處を轉じて一切處と名く。十一切處、之を辨ずること略して爾なり。

十聖處の義。

〔一〇〕十聖處の義は『成實』に說くが如し。生聖の處を、名けて聖處と爲す。又聖の依處も亦聖處と名く。聖處不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には五法を斷じ、二には六法を成じ、三には一法を守し、四には四法に依り、五には僞諦を捨し、六

【前に等】本章第十二卷。

【二】淨法聚第八十四段に十種慰喩の義を明す。

には諸求を捨し、七には濁思惟せず、八には身行を離し、九には善く心解脱を得、十には善く慧解脱を得。五法を斷ずとは、五上分結を斷じて阿羅漢を得。五上結の義は、前に廣く釋するが如し。六法を成ずとは、六妙行を成ずるなり。廣くは前に解するが如し。一法を守すとは、念を繋けて身の無常、苦等を觀ずるなり。四法に依るとは、四聖種に依る。盡形乞食乃至有病服陳棄藥なり。僞諦を捨すとは、能く實相に達して一切見を斷じ、初果を證得す。諸求を捨すとは、彼論に說くが如し。求に三種有り。一には欲求、欲界の法を求む。二には有求、上二界を求む。三には梵行求、學道を求む。此三求を捨して無學果を得るを、諸求を捨すと名く。濁思惟せずとは、欲界の中の修道の煩惱を滅して前三果を得。身行を離すとは、欲界の結を除いて四禪を獲得す。心解脱とは、謂はく、盡智を得。慧解脱とは、無生智を得。十が中の前の二は、阿那含より阿羅漢を得、次の四聖處は、外凡夫より次第に增進して阿羅漢を得、後の四聖處は、須陀果より終羅漢を得。十聖處の義、之を略して云ふこと爾なり

十種慰喩の義。

（二）十種慰喩は『中阿含舍利弗教化病經』に出づ。彼に長者有り。須達多と名く。身重病に遇つて、遂に便ち使を遣して世尊に問訊し、幷に舍利弗を請ず。「願くは一顧を垂れよ」と。舍利遂に往く。須達遙に見て、卽ち床を下りんと欲す。舍利之を止めて別に一床に坐

【斯陀】斯陀含のこと。

【那含】阿那含のこと。

【三】淨法聚第八十五段に十願義を明すに五門の分別あり。第一に釋名。

【十地經】論第三

し、之を慰喩して曰はく、「長者怖るること莫れ。怖るること莫れ。所以は何ん。愚癡の凡夫は不信を成就す。身壞し命終して惡道に墮し、地獄の中に生ぜん。長者今日不信有ること無し。唯上信のみ有り。上信に因るが故に、或は苦痛を滅して極快樂を生じ、或は斯陀を得、或は那含を得ん。長者先づ須陀洹果を得ん」と。是が爲に說かず。此れ初慰喩なり。善戒を具足するを、以て第二と爲す。多聞は第三、慧施は第四、善慧は第五、正見は第六、正志は第七、正解は第八、正脫は第九、正智は第十なり。一一の中の慰喩の法と初とは相似す。十が中の前の五は是れ世間の善、後の五は出世なり。出世の中に就いて、正見、正志は是れ無礙道なり。慧を正見と名け、正思惟をば、名けて正志と爲す。正解、正脫は是れ解脫道なり。慧を正解と名け、餘の心心法をば、名けて正脫と爲す。學等見をば、名けて正智と爲す。學人重ねて四諦の理を觀ずるを、學等見と名く。十種慰喩、之を釋すること麤爾なり。

十願の義に五門分別あり。一には名義を釋す。二には修に據っての分別。三には行に就いての分別。四には行位の分別。五には因果の分別。

(三)第一に、名を釋す。十願の義は『十地經』に出づ。隨求の義、之を名けて願と爲す。願別不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には供養佛願、亦は攝功德願と名く。二には護正法願、亦は攝智慧願と名く。三には攝法上首願、四には增長衆生心行願、五には知衆生願、亦は化衆生願と名く。六には知世界願、七には淨佛土願、八に

は同心同行願、九には三業不空願、十には成菩提願なり。『第一に一切の樂具を以て一切佛を供養せんと願ずるを、供養願と名く。此功德を以て勝功德を攝す。是故に亦は攝功德願と名く。問うて曰はく、『五度皆是れ功德なり。何が故に是中に偏に供養を願じて、以て功德を攝する。』釋して言はく、『初地は檀度を宗と爲す。供養は是れ其檀度の所收なり。故に偏に之を論ず。理實には齊く具す。』又問ふ、『諸處に多く三寶を供養す。今此には何が故に偏に供佛を願ずる。』釋して言はく、『道理は供三寶を願ずれども、初に就き勝に就いて、略して供佛と言ふ。又佛は是れ其所求の果、亦趣求する所なれば、偏に供佛と言ふ。』第二に諸佛の敎法、行法、證法に於て、攝持して失せざらんと願ずるを、護法願と名く。此護法を以て智慧を增長す。是故に亦は攝智慧願と名く。第三に一切の諸佛に於て八相成ずる時、盡く往いて供養せんと願ず。攝法を首と爲れば、攝法上首願と名く。第四に一切の菩薩所修の諸行を以て、一切を敎化して、其をして受行して心に增長を得しめんと願ずるを、增長衆生心行願と名く。第五に一切所化の衆生の差別を知らんと願ずるを、知衆生願と名く。其所知に隨つて、化して信を生じ三乘の道に入らしむ。是故に亦は化衆生願と名く。第六に衆生所居の一切世界の淨穢の差別を知らんと願ずるを、知世界願と名く。第七に諸佛の淨土を求め、衆生を攝取せんと願ずるを、淨佛土願と名く。第八に一切の菩薩と同心同行ならんと願ずるを、同心同行願と名く。同心と言ふは、智慧の心同じく、同行と言ふは、功德行同じ。第九に常に身口意の中に、物を益して空しからざら

【一三】第二に修の義に依て十願を分別す。

【一四】第三に行に就いて十願を論ず。

【一五】第四に行位に就いて十願を分別す。

んと願ずるを、三業不空願と名く。第十に無上菩提を成じ、菩提道を以て衆生を利益せんと願ずるを、成菩提願と名く。名義此の如し。此一門竟る。

（一三）次に、修の義に據つて、十願を分別す。修は頓に成ぜず。必ず藉るに漸を以てす。初の七は修始、次の二は修熟、後の一は修成なり。究竟じて果を得。此二門竟る。

（一四）次に、行に就いて論ず。行は、謂はく、自利利他の道なり。十が中の初の二は、是れ自行なり。始の自行は功德智慧を出づること無し。次の五は是れ共外化の行願なり。化に約する中、初の一は物の爲に法を求め、第二は法に依つて、化して善心を增し、第三は共所化の衆生を知り、第四は共所化の住處を知り、第五は自ら淸淨の佛土を求めて、衆生を攝取す。後の三の願は、自他不定なり。相に隨つて別して分たば、第八の一願は自利の行成じ、第九の一願は利他の行成じ、第十は自利利他の得果なり。菩提自體は是れ自利の果、菩提の作業は是れ利他の果なり。通じて論ずれば、後の三は皆是れ自利にして、並に是れ利他なり。故に『地論』に釋して言はく「此後の三種は自身並に利他を顯示す」と。故に『地論』に釋して言はく「此後の三種は如實に敎化することを得」と。若し復通じて論ずれば、十倶に自利、十倶に利他なり。故に『地論』の中に大願を解釋するに、二種の勝行り。一には常に無量の行を懃行するが故に、即ち是れ自利なり。二には一切衆生と同行す。同行と言ふは、十盡く示現す。即ち是れ利他なり。此三門竟る。

（一五）次に、行位に就いて分別す。十願の中、前の七の行に就いて分別す。行は上に辨ずるが

如し。後の三種は位に就いて分別す。『位は何の處にか在る。』『地論』に說くが如し。第八の願は地校量勝を得、第九の願は菩薩地盡校量勝を得、第十の願は一切地盡校量勝を得。始め初地より乃ち九地に至り、行修漸く增すを、地校量勝と名け、十地の學窮まるを、名けて地盡校量と爲し、佛地窮滿するを、名けて一切地盡校量と爲す。此等は皆所願に就いて言ふのみ。此四門竟る。

（一六）次に、因果に就いて、所願を分別す。前の九は因を求め、後の一は果を願ふ。亦前の七は、以て一分と爲すべし。初の六を因と爲し、後の一を果と爲す。後の三の一分は、前の二を因と爲し、後の一を果と爲す。前の果は依報、後は是れ正果なり。十願是の如し。

十種供養の義に兩門分別あり。一には供養を明す。二には供心を明す。

（一七）十種供養は『地持論』に出づ。『十名は是れ何ん。』『一には身供養、二には支提供養、三には現前供養、四には不現前供養、五には自作供養、六には他作供養、七には財物供養、八には勝供養、九には無染供養、十には至處道供養なり。』十が中の初の二は、所供の差別なり。佛の色身に於て供養を設くるを、身供養と名け、佛の靈廟を供するを、支提供養と名く。『僧祇律』に依らば、舍利有る者を、名けて塔婆と爲し、舍利無き者を、說いて支提と爲す。『地持論』の中には、通じて支提と名く。次の二は時處に約就して分別す。門別二なりと雖も、事に隨つて三を分つ。一には現前供養、面り佛身、及與支提に對して供養

【一六】第五に因果に就いて所願を分別す。

【一七】淨法業第八十六段に十種供養の義を明すに二門の分別あり、先づ供養に就いて釋す。【地持論】第六。

【僧祇律】第三十三。

【地論】第三。

を設く。二には不現前供養、不現前の佛及び支提に於て、廣く供養を設く。三には共現前不現前供養、現前に佛及び支提を供養し、并に不現の佛及び支提を供す。現前供養は大功德を得、不現供養は大大功德を得。境界寛廣なるが故に。共現前不現前は、最大の大功德を得。次の二は共供人に就いて分別す。門別二なりと雖も、事に隨つて三を分つ。一には自作供養、自身に佛及び支提を供養す。二には他作供養、小財物有り、懈怠に依らずして教化施作す。三には自他供養、彼此同じく爲す。自作供養は大功德を得、教化供養は大大功德を得、自他供養は最大の大功德を得。次の二の一對は、心事に分別す。己が財事を以て供養を爲すを、財物供養と名く。財に三種有り。一には資具供養、謂はく、衣食等なり。二には敬具供養、謂はく、香華等なり。三には嚴具供養、謂はく、餘の一切の寶莊嚴等なり。殊勝の心を以て前供養を爲すを、勝供養と名く。勝心に三有り。一には專精解心、善く施設を解して種種に供養す。二には純淨信心、佛德の重くして、理供養に合するを信ず。三には廻向心、佛を求むる心中に供養を設く。後の二の一對は、行に就いて分別す。供行過を離るるを、無染供養と名く。無染に二有り。『地持』に說くが如し。一には心無染、一切の過を離る。二には財物無染、非法の過を離る。供行果に順ずるを、至處道供養と名く。佛果は是れ共所至の處なり。供養の行能く彼處に至るを、至處道と名く。此至處道供養を、『維摩經』の中には、法供養と名け、『地論』の中には、行供養と名く。中に於て三有り。一には財物供養を至處道と爲し、二には隨喜供養を至處道と爲し、三には修行供養を

【一八】第二に供心を明す。

【一九】淨法藏第八十七段に十無盡藏の義を明す。

至處道と爲す。佛の供養に於て、既に此十有り。法僧に於けるも、類して亦同じく然なり。供養法の十とは、一には供養法、佛所說の理教行法を供す。二には供養經卷なり。餘の八は上の如し。供僧の十とは、一には供養僧、謂はく、一切の三乘の聖衆を供す。二には支提供養、三乘衆の形象塔廟を供す。又聖僧及び凡夫僧を供するに、亦二を分つことを得。餘の八は前に同じ。此一門竟る。

(一八)次に、供心を明す。供心に六有り。『地持』に說くが如し。一には福田無上心、生福の中に勝る。二には恩德無上心、一切の善樂三寶に依つて出づ。三には生一切衆生最勝心、四には如優曇鉢華難遇心、五には三千世界獨一心、六には一切世間出世間具足依義心なり。此は如來の世間出世間の法を具足して、能く衆生の與に依止處と爲るを、具依義と名くることを明す。此六心を以て、少物の供養能く無量無邊の功德を獲。何に況んや多をや。供養の義略して辨ずること是の如し。

・十無盡藏の義。

(一九)十藏の義は、『華嚴經』無盡藏品に出づ。德廣くして窮め難きを、名けて無盡と爲し、無盡の德を包含するを、藏と曰ふ。藏別不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には信、二には戒、三には慚、四には愧、五には多聞、六には惠施、七には慧、八には念、九には聞持、十には辨なり。』法に於て決定する、之を名けて信と爲す。『何等の法をか

信ずる。」「彼經に説くが如し、「一切法の空無相の願を信じ、及び種種差別の法門を聞き、不可思議を聞いて、皆能く信を生ず」と。「防禁を戒と曰ふ。戒に十種有り。一には饒益戒、衆生を饒益す。二には不受戒、一切の外道の邪法を受けず。三には無著戒、三有に著せず。四には安住戒、淨法に安住す。五には不諍戒、常に他をして喜ばしめ、物と諍はず。六には不惱害戒、呪術、諸の藥草等もて、衆生を惱害することを學ばず。七には不雜戒、異見を雜へず。八には離邪命戒、菩薩は淨戒を持する相もて、他をして知らしめんと欲し、亦内は無實にして詐つて德相を現ずることを作さず。專ら正法の爲にして、心に異求無し。九には離憍慢戒、自ら貢高して、他人を輕賤せず。十には淸淨戒、十惡を捨離す。斯十種を具するを、名けて戒藏と爲し、過に於て自ら羞づる、之を名けて慚と爲す。過に多種有り。廣くは經に説くが如し。過を作して他に羞づる、之を稱して愧と爲す。亦多種有り。備には經に説くが如し。一切の法に於て具足して聞知するを、多聞藏と名く。所聞は經の如し。惠捨を施と名く。施に十稱有り。一には施法、菩薩の施儀所畜の諸物を、悉く衆生の爲にして、自ら己が爲にせず。二には最後難施法、菩薩に物有り、自ら用ふれば則ち樂、他に施せば即ち死なり。寧ろ自身は死すれども、衆生に施與するを、最後難施と名く。三には内施法、菩薩所受の上妙の身を、他の求むれば施與す。四には外施法、王位及び外の財物を求むること有らば、菩薩は施與す。五には内外施法、身及び外の財並に皆施與す。六には一切施法、若し他の求むる所の國城、妻子、頭目支節、一切の諸物を、悉く皆盡

【二〇】淨法聚第八十八段に信等の十義を明すに九門の分別あり、先づ第一に釋名。

【地經】第三。

く施す。七には過去施法、過去の法を聞いて心に取著無く、但生を化せんが爲に、隨順して說法す。八には未來施法、未來の法を聞いて、心に取著無し。九には現在施法、現在の法を聞いて心に取著無し。十には究竟施法、衆生行つて來つて身分を求むるを見れば、則ち自ら觀察して、當に必ず磨滅すべし。畢竟じて一念の貪惜有ること無く、而して彼に施與するを、究竟施と名く。斯十種を具するを、名けて施藏と爲し、一切法に於て悉く如實に知るを、名けて慧藏と爲し、過去世の一切の諸法に於て、悉く能く念知するを、名けて念藏と爲し、佛所說の一切の教法に於て、悉く能く憶持して一句をも失せざるを、聞持藏と名け、深廣の智を得て、一切の法を說くこと無礙自在にして、一切諸佛の所說に違はざるを、名けて辯藏と爲す。十無盡の義、之を釋すること略爾なり。

信等の十行の義に九門分別あり。一には名を釋す。二には相を辨ず。三には對治。四には因起の次第。五には修行の分別。六には所成の分別。七には六度に約對して共に相收攝す。八には階位辨立。九には淺深の分齊。

〔二〇〕第一に、名を釋す。信等の十行は、『地經』に說くが如し。『名字は是れ何ん。』『一には信、二には悲、三には慈、四には捨、五には不疲倦、六には智經書、亦は知經論と名く。七には知世智、八には慚愧、九には堅固力、亦は不動力と名け、亦は勇猛力と名け、亦は勇健力と名く。十には供養諸佛如說修行なり。』決定を信と名け、惻愴を悲と稱し、愛憐を慈と曰ひ、惠施を捨と名け、策修して惰せざるを不疲倦と名け、善く五明に達するを知經

【三二】第二に信等の十相を辨ず。

智と名け、亦は知經論と名け、善く時宜を解するを知世智と名け、過に於て羞恥するを稱して慚愧と曰ひ、所修の善根を緣の爲に壞せざるを堅固力と名け、緣に隨つて變せざるを稱して不動と曰ひ、緣に於て退せざるを勇猛力と名け、心怯弱ならざるを勇健力と名け、行修上に獻ずるを供養佛と名け、敎に順じて奉修するを如說行と名く。此等の十稱は造緣集起するが故に、通じて行と名く。此一門竟る。

〔三二〕次に、共相を辨ず。『地經』の如きに依らば、信に二種有り。一には信因、二には信果なり。『地持論』の中には、信に八有りと說く。一には佛を信じ、二には法を信じ、三には僧を信じ、四には諸佛菩薩の神通の力を信じ、五には眞實義を信じ、六には種種の因果を信じ、七には得義を信ず。義は、謂はく、菩提なり。八には得方便を信ず。謂はく、菩薩所修の學道を信ずるなり。悲に三種有り。一には衆生緣の悲、苦の衆生を緣じて濟拔を爲さんと欲す。『地經』の如きに依らば、諸の衆生の十二因緣生死流轉を觀じて、而して悲心を起す。『地持論』に依らば、諸の衆生の百一十苦を緣じて、而して悲心を修す。二には法緣の悲、諸の衆生は俱に是れ五陰因緣の法數にして、我無く人無しと觀じて、而して悲心を起す。『我人無しと觀じて、云何が悲を起すや。』『釋に兩義有り。一には衆生妄に我人の爲に繫縛せられて、生死の苦を受く、深く哀愍すべしと念ず。故に悲心を起す。二には生の爲に斯の如きの法を說かんと念ず。是れ則ち眞實にして、衆生の苦を拔く。故に名けて悲と爲す。三には無緣の悲、諸の衆生の五陰の法數は畢竟空寂なりと觀じて、

而して悲心を起す。『法空寂なりと觀じて、云何が悲を起すや。』『還兩義有り。一には衆生妄に有法の爲に纒縛せられて、生死の苦を受くと念ず。故に悲心を起す。二には衆生の爲に斯の如きの法を說かんと念ず。是れ則ち眞實にして、衆生の苦を拔く。故に名けて悲と爲す。』慈にも亦三有り。一には衆生緣の慈、諸の衆生を緣じて共樂を與へんと欲す。二には法緣の慈、諸の衆生は但是れ五陰の因緣の法數にして、我無く人無しと緣じて、而して慈心を起す。三には無緣の慈、一切の法は畢竟空寂なりと觀じて、而して慈心を起す。『法緣、無緣は云何が慈を起すや。』『釋は悲と同じ。』捨に二種有り。一には內施、謂はく、一切の頭目、支節、手足、耳、鼻を捨す。二には外施、餘の資生を施す。不倦に二有り。一には世間行の中に精勤して倦まず。廣くは則ち無量なり。知論に四有り。『地持』に說くが如し。一には五明處に於て聞慧を成就し、二には思慧を成じ、三には修慧を成じ、四には隨行を成ず。知世智の中に、其二種有り。『地持』に說くが如し。一には世間の如くに知り、二には世間の如くに轉ず。世間の如くに知るは、是れ其伴なり。世間の如くに轉ずるは、是れ其行なり。如世知の中に、其二種有り。一には世間の事を知る。謂はく、衆生及び器世間を知るなり。二には世間の義及び第一義を知る。謂はく、世間に於て八行を觀察す。『何者か八行なる。』『廣くは上に說くが如し。謂はく、世間の苦、世間の集、世間の滅、世間の道、世間の味、世間の過、世間の出、世間の第一義を觀ずるなり。此八行の中、前の七は世間の義を觀察し、後の一は世第一義を觀察す。』如世尊の中にも、

【地經】論第三。

【三】第三に對治を明す。

亦二種有り。一には自らの所宜に隨ひ、二には他の所宜に隨ふ。宜を量つて他を攝するなり。慚愧に四有り。『地持』に說くが如し。一には應に作すべからざるの所にして、而も故らに之を爲して、心に慚愧を生ず。二には應に作すべき所なるも、隨つて建立せずして、心に慚愧を生ず。三には應に作すべからざるの所を作し已つて、覆藏して慚愧を生ず。四には應に作すべき所を作し已つて、反つて悔ひて慚愧を生ず。勇猛力の中に、其に二種有り。一には不退力、自分失はず。二には不轉力、勝進して能く入る。供養に二有り。『地論』に說くが如し。一には利養供養、財物を施す。二には行供養、行修上に順ず。亦三を分つことを得。『地經』に說くが如し。一には利養供養、謂はく、衣食等なり。二には敬供養、謂はく、香華等なり。三には行供養、謂ゆる、信戒施等を修行するなり。或は十種を說く。『地持論』の如し。此二門竟る。

（三）次に、對治を明す。『地持』に說くが如し。放逸懈怠にして菩薩戒を受けず、佛菩提に違するを、信を以て對治す。問うて曰はく、『信心は應に不信を治すべし。何に緣つて、乃ち放逸、懈怠、不受戒等を治する。』釋して言はく、『其內心に信ぜざるを以ての故に、放逸を爲し、禁戒を受けず。此を舉げて、爲に內心の不信を彰す。諸の衆生に於て殺害の想有るは大悲に違す。大悲以て對治す。諸の衆生に於て瞋恚の心有るは、大慈に違す、慈を以て對治す。身命財を顧るは、惠施に違す。捨を以て對治す。諸の衆生に於て多く衆具を求むるは、不倦に違す。不倦もて對治す。』問うて曰はく、『不倦は應に懈怠を治す

【二三】第四に因起次第の義を明す。

【二四】第五に行修に據つて十行を分別す。

べし。何に縁つて多く樂具を求むるを對治する。』釋して言はく、『世間の事を求むるを以ての故に、出道を修することを妨ぐ。故に不倦を以て求樂具を對治す。方便智無きは、知論に違す。知論を以て對治す。善く隨順せざるは、他に隨順するに違す。隨順を以て對治す。修善の法に於て放逸懈怠なるは、慚愧に違す。慚愧を以て對治す。生死の苦に於て其心怯弱なるは、勇猛に違す。勇猛もて對治す。佛に於て疑惑するは、供養に違す。供養を以て對治す。』對治是の如し。』此三門竟る。

(二三)次に、因起次第の義を明す。『地持』に說くが如し。菩薩藏を聞いて菩提有りと信ずるが故に、先づ信を明す。菩提を信ずるが故に、諸の衆生は生死の苦に在つて、彼法を得ざるを念ず。故に悲心を起す。衆生を悲むが故に、之を度脫せんと欲す。故に慈心を起す。悲慈を以ての故に、慧施を修行す。故に次に捨を明す。法施の爲の故に正義を修行し、心に厭惰無し。故に次に不倦なり。不倦を以ての故に能く聖教を知る。故に次に論を知る。經論を知るが故に、善く時宜を解す。故に世間を知る。世間を知るが故に、久しく世間に在り。喜んで深過を生ずるが故に、慚愧を起す。慚愧を以ての故に、煩惱に隨はず、勇健力を得。勇健力の故に、能く善法を修し、多く財利を獲て如來を供養す。次第是の如し。此四門竟る。

(二四)次に、行修に據つて、十行を分別す。行は、謂はく、自利利他の道なり。『地論』に說くが如し。初の一は信心、是れ自利の行なり。諸佛の法を信じて必ず得んと求むるが故に。

悲慈は利他なり。能く安穩に樂を與ふる心なるを以ての故に。捨とは、財を以て利他の行を攝す。不疲倦とは、自ら法行を攝す。知經、知世とは、法を以て他行を攝す。後の三種は前の七を攝護して、通じて自他を利す。慚愧、勇猛は前の七種を護す。問うて曰はく、『慚愧は云何が前を護する。』『慚愧を以ての故に、前の七種をして離障清淨ならしむ。故に名けて護と爲す。』問うて曰はく、『信心は能く不信を治す。乃至知世は能く不知を治す。何んが慚愧を須つて、慚愧は前の七種を護して、其をして障を離れしむと言ふ。』釋して言はく、『對治に、遠有り、近有り。信は不信を治し、乃至知世は不知を對治す。是れ近對治なり。慚愧を以ての故に、前をして障を離れしむ。是れ遠對治なり。』『治相は云何。』『慚愧を以ての故に、信心を修起して不信を遠離す。慚愧を以ての故に、悲慈の心を起して瞋恚を遠離す。乃至慚愧心行るを以ての故に、世間を學知して不知を遠離す。六度の中の如く、精進を以ての故に、施を修して慳を治す。乃至精進の心行るを以ての故に、慧を修して癡を離す。此も亦是の如し。』問うて曰はく、『勇猛は云何が前を護する。』『勇猛を以ての故に、前の七種の善法をして壞せざらしむ。故に名けて護と爲す。』第十の供養如說修行は、前の七種を攝す。問うて曰はく、『供養は云何が前を攝する。』『釋に兩義有り。一には之を攝して生ぜしむ。菩薩は供養を修行せんが爲の故に、前の七種を起す。二には攝して果を得しむ。二種の供養は二種の身を得、前の七種をして、同じく二身を得しむ。』『何者か二身なる。』『地論』に說くが如し。一に利養供養は上妙の身を得。此も亦名けて功德色身と

【二五】第六に所成に就いての分別を明す。

【二六】第七に六度に約して十行を相攝するを明す。

爲す。二に行供養は調柔の心を得。此も亦名けて智慧法身と名く。』問うて曰はく、『修行は云何が前を攝する。』釋して言はく、『菩薩は說の如く行ずるが故に、前の七種を起す。』若し復通じて論ずれば、十倶に自利なり。此を修して自ら菩提の果を求むるが故に。十倶に利他なり。此を修して佛を求め、衆生を利するが故に。此五門竟る。

(二五)次に、所成に就いて、十行を分別す。『地論』に說くが如し。初の三種は深心成就、後の七種は修行成就なり。『地持論』の中には、說いて二淨と爲す。前の三は心淨、後の七は名けて行方便淨と爲す。善法建立を、名けて成就と爲す。出障無染なるが故に、淸淨と云ふ。通じては則ち十種倶に皆是れ心なり。並に是れ其行なり。但今相を分たば、前の三は是れ其行方便心なり。說いて心成と爲し、說いて心淨と爲す。後の七は是れ其造緣正行なり。故に行成行方便淨と名く。所成是の如し。此六門竟る。

(二六)次に、六度に約して、共に相收攝す。初の一の信心は、起行の方便なれば六度に收めず。餘の九は是れ其六度の所攝なり。悲慈の二門は是れ禪度の攝なるが故に。彼十二門禪の中の八禪、及與四無量心を、通じて名けて禪と爲す。捨は是れ檀度、不疲倦は是れ精進度、知經、知世は是れ其慧度、慚愧は戒度なり。堅固力の中、義に兩兼有り。苦に處して動ぜざるは是れ其忍度、諸の善法に於て勇猛不退なるは、是れ精進度なり。第十門の中、如說修行は通じて六度を攝す。供養諸佛は義に兩兼有り。財物供養は是れ其檀度なり。行供養は通じて六度を攝す。此七門竟る。

【一七】第八に離合廢立の義を辨ず。先づ離合に就いて

【次に等】次に廢立を辨ず。

【一八】第九に十行の淺深の分齊を明す。

(一七)次に、離合廢立の義を辨ず。先に離合を釋す。問うて曰はく、『悲慈は心數法の中、一の無瞋の性なり。何が故に二を分つや。慚と愧とは心數法の中、是れ別の心數なり。何が故に合するや。』釋して言はく、『悲慈は心法一なりと雖も、四義同じからず。故に二種を分つ。一には功能の不同、悲は能く苦を拔き、慈は能く樂を與ふ。二には治患の不同、悲は害覺を止め、慈は貪欲を息む。又悲は能く微細の瞋を除き、慈は麁重を遣る。三には境界の不同、悲心は多く苦の衆生を緣じて起り、慈は無樂の衆生を緣じて起る。四には得報の不同、悲は空處を得、慈は遍淨を生ず。慚と愧とは心法別なりと雖も、四義同じ。故に之を合して一と爲す。一には功能の同、同じく諸行をして出障清淨ならしむ。二には治過の同、同じく殺盜邪婬等の過を離る。三には境界の同、同じく離過集善の行の中に於て、慚愧の心を生ず。四には果報の同、所得の果報は異處無きが故に。』離合是の如し。次に廢立を辨ず。問うて曰はく、『經に四無量心を說いて、利他の行と爲す。今此には何が故に偏に悲慈を說いて、喜捨を論ぜざる。』釋して言はく、『法門に其二種有り。一には具義門、行有れば皆說く。二には隱顯門、立有り、廢有り。今は隱顯に據つて、偏に悲慈を立して其喜捨を廢す。良に悲慈は正しく是れ拔苦與樂の行なるを以ての故に、所以に偏立す。喜捨は助行にして、正しく益することを能はず。故に廢して論ぜず。』此八門竟る。

(一八)次に、十行淺深の分齊を明す。分齊に三有り。一には緣修の十行、謂はく、六識七識心の中に於て信等を修行す。二には是れ眞實行作の十行、謂はく、六識七識心の中に於て諸

行を修習し、眞心を勸發して眞心の中の諸德をして集起せしむ。三には眞實無作の十行、眞識の心體は是れ一切功德の性なり。煩惱覆ふが故に、已に於て用無し。後對治を修して煩惱を斷ずる時、本隱の眞心、今德を顯成するを、說いて信等と爲す。德は緣に從つて顯るれども、緣に從つて生ぜざるが故に、無作と名く。三が中の初の一は義等しく火の如し。次の一は金莊嚴具の如似く、後の一は金の如し。故に『地論』に言はく「信等の善法は猶眞金の如し。德を攝して體に從ふ。後の二種は、通じて金の如しく說く。眞金の如くなるが故に、說いて地體と爲す」と。十行是の如し。

【二九】淨法聚第八十九段に十明の義を明す。【華嚴經】第二十九。

十明の義。

（二九）十明の義は、『華嚴經』に出づ。法を知ること顯了なり。故に名けて明と爲す。明の義不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には他心智明、一切衆生の心心數法悉く如實に知る。二には天眼智明、一切の色像は明了無礙なり。三には宿命智明、過去世に於て他及び自身八種の事、六種の同行皆如實に知る。四には入未來際無礙智明、一切衆生の未來世の中の生死流轉の、若は出、若は沒を皆如實に知る。五には天耳智明、十方界に於て、一切の音聲の、若は聞不聞、意に隨つて自在たり。六には安住無畏神力智明、無量不可思議大神通力を具足して、十方界に於て、若は來、若は去、自在無礙なり。七には分別一切音聲智明、一切衆生の語言の差別を皆如實に知る。八には出生無量色身

智明、種種の色像悉く能く現化す。九には知一切法眞實智明、一切法に於て悉く如實に知る。十には入一切法滅定智明、一切法の寂滅正受に入つて、一切の所行を捨せず。此十は猶是れ六通の所攝なり。初の一は是れ其他心智通、第二、第四は是れ天眼通、第三は是れ其宿命智通、第五、第七は是れ天耳通、第六第八は是れ其身通、後の二は是れ其漏盡智通なり。若は第九を分つて、法智通と爲す。此十は便ち是れ七通の所攝なり。十明是の如し。

【三〇】淨法聚第九十段に十忍の義を明す。【華嚴經】第二十九。

十忍の義。

(三〇)十忍の義は、『華嚴經』に出づ。慧心、法に安んずる、之を名けて忍と爲す。忍行不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には隨順音聲忍、二には順忍、三には無生忍、四には如幻忍、五には如炎忍、六には如夢忍、七には如響忍、八には如電忍、九には如化忍、十には如空忍なり。』隨聲忍とは、一切眞實の法を說くを聞いて、驚かず、怖れず、信解受持し、愛樂順入して修習安忍するを、隨聲忍と名く。順忍と言ふは、一切の法に隨つて、若は深、若は淺、若は理、若は事、若は眞、若は妄、實の如く觀察して諸法に違せざるが故に、順忍と名く。無生忍とは、一切法の無生無滅平等寂靜を觀ずるを、無生忍と名く。如幻忍とは、一切の法は皆悉く幻の如く、一に一切を備へ、一切に一を成じ、因緣虛集して定性有ること無しと觀ずるを、如幻忍と名く。如炎忍とは、菩薩一切世間

は熱時の炎の如く、誑相虚集して眞實有ること無く、定れる方處無しと覺悟するを、如炎忍と名く。如夢忍とは、菩薩一切世間は夢の所見の如く、有に非ず、無に非ずと解知して、壞せず、著せざるを、如夢忍と名く。如響忍とは、菩薩善く究竟の彼岸を覺し、一切の法は皆悉く響の如く、分別の衆聲は呼ぶ聲の響の如く、内より出でず、外より出でず、内外より出でず、但緣より起ると知つて、能く巧便して種種に說法するを、如響忍と名く。如電忍とは、世の電光の衆の色像を照して、分別無きが如し。菩薩是の如く、一切の法を照して無別なるを、如電忍と名く。如化忍とは、世の化法の有に非ず、無に非ざるが如し。菩薩是の如く、一切の法は有に非ず、無に非ずと知つて、取らず捨てざるを、如化忍と名く。如空忍とは、世の虚空寂として所有無きが如く、菩薩も是の如く、一切法空にして所有無しと知り、又虚空の體性清淨なるが如く、菩薩も是の如く、一切法の體性清淨なりと知り、又虚空の差別有ること無きが如く、菩薩も是の如く、一切の法等くして差別無しと知り、又虚空の不生不滅なるが如く、菩薩も是の如く、一切の法は不生不滅なりと知り、又虚空の分別する所無きが如く、菩薩も是の如く、心に分別無く、又虚空の容れざる所無きが如く、菩薩も是の如く、一切の法に於て攝受せざること無く、又虚空の廣大無邊なるが如く、菩薩も是の如く、身口及び意は廣大無邊なり。又虚空の不生不死なるが如く、菩薩も是の如く、不生不死なり。是の如き等の無量種の義有ること、世の虚空の如くなるを、如空忍と名く。十が中の初の一は詮を尋ねて悟解し、後の九種は義に依つて以て

成ず。十忍の義廣く釋すること經の如し。但名字に隨つて、略して宗を擧げて況す。

【三】淨法聚第九十一段に十無生忍を明すに三門の分別あり。先づ第一に釋名。

十無生忍の義に三門分別あり。一には名を釋す。二には相を辨ず。三には位に就いての分別。

(三)十無生忍は、『地經』に說くが如し。無生忍と言ふは、汎く釋するに三有り。一には法に就いて分別し、二には因に就いて分別し、三には果に就いて分別す。法の中に二有り。一には妄想の法互に相集起す。之を名けて生と爲す。生の體は虛無なり。故に無生と曰ふ。此れ即ち經の中の空如來藏なり。二には眞實の法用起るを、生と名く。體寂無生なり。此れ即ち不空如來藏なり。因の中に四有り。一には修に據つて分別す。六地已還は次第の修道にして、地地の中に諸行新に起るを、之を名けて生と爲す。七地已上は諸行頓に修して、新に起る者無きが故に、無生と曰ふ。二には空有の二行に約して分別す。六地已前は空有間り起る、之を名けて生と爲す。七地已上は寂用雙行して、間り起ること無きは、稱して無生と曰ふ。三には修行の始終に就いて分別す。七地已還は行修未だ熟せず、之を名けて生と爲す。菓の未熟なるが如きを、說いて生菓と爲す。八地已上は行報純熟す。故に無生と名く。四には義に隨つて分別す。教行集起する、之を名けて生と爲す。諸行寂滅を、名けて無生と爲す。果の中に三有り。一には體用の分別なり。化用集起する、之を名けて生と爲す。德體常寂なるが故に、無生と號す。二には體德の分別なり。有作の行德は本無今有にして、方便修起す、之を名けて生と爲す。性淨の體は本隱今顯にして、

【三】第二に十無生忍の相を辨ず。

縁に從つて造せざるが故に、無生と號す。三には智斷の分別なり。智德集起する、之を名けて生と爲す。斷德寂滅なるを、說いて無生と爲す。今此に論ずる所は、法に就いて言ふのみ。法の中にも亦無成無出及び無滅等有り。今一門に據つて、且く無生と說く。又此十の中、無生は初に在り。始に從つて名と爲すが故に、無生と名く。心此理に安んずるを、無生忍と名く。此一門竟る。

〔三〕次に、其相を辨す。無生一味は、詮に隨つて十を分つ。『十名は是れ何ん。』『一には無生、二には無成『大本』の中には說いて無起と爲す。三には無相と名け、四には無出と名く。『大本』の中には名けて無成と爲す。五には無失と名け、六には無盡と名け、七には無行と名け、八には非有有性、九には初中後本等し、十には眞如無分別入一切智智なり。』『地論』に說くが如くんば、十が中の前の七は事無生と名け、第八を名けて自性無性と爲し、第九を名けて數差別無生と爲し、第十を名けて作業無生と爲す。四が中の初の二は、相を破して如に入る。染淨差別の事相を破遣して、以て無生に入るを、事無生と名け、一切の諸法の體性を破遣して、以て無生に入るを、性無生と名く。後の二種は實に契つて相を離る。彼因の中の三世の分異を離るるを、數差別無生と名け、其果中の佛智作業を捨するを、作業無生と名く。事無生の中の初の無生とは、初地の相を遣る。事の分齊に於て、初地は淨起す、之を名けて生と爲す。理に就いて恒に如なるが故に、無生と曰ふ。無成と言ふは、其二地より七地に至る相を遣る。若し初地の淨法始めて生ずることを有らば、則ち二地乃至七

地の行修漸成すること有り。彼生既に無し。寧ろ此成有るが故に、無成と曰ふ。行修漸次の相起無きを以ての故に『大本』の中には說いて無起と爲す。無相と言ふは、八地上の無功用の相を遣る。若し生成有らば、則ち彼に從つて八地上の無功用の相を得べし。生成既に無し。焉んぞ此相有らん。故に無相と曰ふ。無出と言ふは、佛地の相を遣る。若し前相有れば、則ち彼に從つて後際の果を得べし。之を名けて出と爲す。彼相既に無し。焉んぞ後出あらん。故に無出と言ふ。究竟所成の果無きを以ての故に『大本』の中には亦無成と名く。無失と言ふは、外凡の相を遣る。事に據れば外凡に其の染過有り。之を名けて失と爲す。理實には本無なり。故に無失と曰ふ。無盡と言ふは、内凡地の斷煩惱の相を遣る。若し染失有らば、則ち斷盡すべし。染失本無し。寧ぞ所盡有らんや。故に無盡と曰ふ。無行と言ふは、内外凡地の對治の行相を遣る。若し所盡有らば、則ち能盡對治の行有り。所盡既に無し。寧ぞ治行有らん。故に無行と曰ふ。問うて曰はく、『事に於て既に生成乃至盡行有り。何が故に理に於て所有無きことを得るや。』釋して言はく、『人の夢の中の所作の如し。其寤者に於て之を觀ずれば、本無し。此も亦是の如し。故に理に就いて、說いて無失と爲すことを得。』性無生の中の非有有性とは、法の體性を遣る。世諦の中に於て、一切の諸法に各體性有り。色礙性心知性等の如し。理に據れば、此性本無所有なり。是の故に名けて非有有性と爲す。此非有性は、論の中には、之を說いて法無我と爲す。我は猶し性のごときなり。數差別の中、初中後等しとは、其因中の時の差別の相を遣る。實を以

【三三】第三に位に就いて十無生忍を論ず。

て緣に從はば、因中に則ち三世の分異有り。數差別と名く。七地已前を、名けて過去と爲し、八地の中に於て起觀の處を、說いて現在と爲し、九地、十地を、名けて未來と爲す。緣を廢して實を論ずれば、三世に反無きを、初中後一切時等しと名く。業無生の中、眞如無分別入一切智とは、實に緣に從つて起り、佛果の德を成ずるを、一切智と名く。此智能く一切の諸法を解す。之を說いて入と爲す。緣を廢して實を論ずれば、性平等にして公別有ること無きが如し。佛智得べきが故に、眞如無分別入一切智と言ふ。謂はく、眞如の中に分別有ること無ければ、一切智なり。體相是の如し。此二門竟る。

〔三三〕次に、位に就いて論ず。『此無生忍の位は、何の處にか在る。』『義釋するに三有り。一には五忍に約して分別す。五忍は上の如し。此無生忍は、七地、八地、九地に在り。七地に始得、八地に淸淨、九地に滿足なり。二には勝を簡んで劣に異にす。六地已前は一切未だ得ず。七地已上は一切之を得。』問うて曰はく、『無生と空無我とは、同じく是れ道理なり。空と無我とは前地に已に得。何が故に無生は、要ず七地上に方に乃ち得るや。』釋して言はく、『通じて論ずれば、體一にして名異なり。得るに先後無し。義に隨つて分別すれば、因緣の相を觀じて定性を破遣するを、名けて無我と爲す。初地の中に、因緣の相を遣つて法平等に入ることを得。之を名けて空と爲す。謂はく、前の四五六地の中に、法の本如を證して相として起すべきもの無きことを得るを、方に無生と名く。故に七地上に始めて能く證會す。三には實に就いて通じて辨ず。初地已上に皆無生を得。故に釋論の中に

【三四】浄法聚第九十二段に十住の義を明すに四門の分別あり。第一に釋名。
【華嚴經】第八十住品。

說かく「初地上に無生忍を得」と。初地の菩薩も亦能く法の不生滅を見る。故に若し復通じて論ずれば、種性已上にも亦分に之を得。『十無生忍』、略して辨ずること是の如し。

十住の義に四門分別あり。一は名を釋す。二には相を辨ず。三には位を定む。四には起說の因緣。

（三四）第一に、名を釋す。十住の義は、「華嚴經」に出づ。行成不退、之を名けて住と爲す。又復自德相應の處所も、亦名けて住と爲す。通じては則ち諸位是れ住にあらざること無し。故に『地持』の中には、十三住を說く。別しては則ち習種に初めて住分に入る。離退の首なれば、偏に名けて住と爲す。故に『地持』に云はく「善趣の人は數退し數進む。種性の菩薩は決定堅固にして、退轉行ること無し」と。住の義不同にして、一門に十を說く。『十住は是れ何ん。』『一には初發心住、二には治地住、三には修行住、四には生貴住、五には方便具足住、六には正心住、七には不退住、八には童眞住、九には法王子住、十には灌頂住なり。』住分の始め大菩提に於て、意を起して趣求するを、初發心住と名け、善く自利利他の道を修して住處を淨治するを、治地住と名く。護煩惱離小乘の行を修するを、修行住と名け、聖法の中より生じて種性尊貴なるを、生貴住と名け、善巧に衆生を度する行を具足するを、方便具足住と名け、決定智を得て、佛法の中に於て邪說を聞くと雖も、正見不動なるを、正心住と名け、異說を聞くと雖も、正願不動なるを、不退住と名け、所行眞實にして過を離れ、淸淨なること世の童子の心欲染無きが如くなるを、童眞住と名

け、亦は菩薩の行業清淨なるべきこと世の童子の眞淨無染なるが如きを、童眞住と名け、佛法王の所行の住處に於て、正智を出生して究竟の無上菩提に住するに堪ゆるを、法王子住と名け、行修上に順じて佛智現前するを、灌頂住と名け、亦は菩薩一切智を學して、能く佛記を受くべきを、灌頂住と名く。』名字是の如し。此一門竟る。

【三五】第二に十住の相を辨ず。

(三五)次に、共相を辨ず。住に二分有り。』一には是れ修分、二には是れ成分なり。諸住の前に於て方便造修するを、名けて修分と爲し、德成じて實を證し、廣大不動なるを、名けて成分と爲す。故に經に說いて言はく「菩薩の種性甚深にして廣大なること、法界の虛空と等し」と。成は則ち證實分にして可言に非ず、造修は緣に在れば、言を以て顯すべし。故に『地持』に云はく「種性の麤相、我已に略して說く。諸餘の實義は唯佛世尊のみ能く決定して知りたまふ」と。修分の不同に略して二種有り。一には同相、二には別相なり。佛所說の一切法の中に於て、解觀成就するを名けて同相と爲す。故に經には彼十住の中に於て皆云はく「菩薩は所聞の法に隨つて卽ち自ら開解し、他に由つて悟らず」と。一一の住の中所修各異なるを、名けて別相と爲す。發心住の中、相別に三有り。一には發心相、佛法僧を緣じ、及び衆生を緣じて菩提心を起す。二には所成相、前の發心に因つて十力分を得、處非處より乃ち漏盡に至る。三には所學相、十種の法を學して、菩提心をして轉た勝れて堅固ならしめ、無上道を成ず。經に廣く說くが如し。治地住の中、相別に二有り。一には利他行、諸の衆生に於て、十種の心を發す。經に廣く說くが如し。二には自利行、十種の

法を學して、始め多聞より乃ち安住に至る。亦經に說くが如し。修行住の中、別相に二有り。一には護煩惱行、一切の法に於て、十種觀察す。謂はく、苦、無常、空、無我等なり。二には護小乘行、衆生界、法界、世界に於て、十種分別す。生貴住の中、相別に二有り。一には聖法の中より具足行を出生す。彼經に說くが如し。聖教の中より生じて、十種の法を修す。一には信佛不壞、二には究竟於法、三には寂然定意、四には分別衆生、五には分別佛刹、六には分別世界、七には分別諸業、八には分別果報、九には分別生死、十には分別涅槃なり。十が中の初の一は是れ同徹智、第二の一句は是れ自住處畢竟智、第三の一句は是れ眞如智、後の七は是れ其分別所說智なり。二には上佛法を求めて厭足有ること無く、十種の法を學す。謂はく、三世諸佛の法の中に於て、能く解し能く修し、能く具足するに堪えたり。即ち以て九と爲す。等く諸佛を觀ずるに、以て第十と爲す。方便具足住の中、相別に二有り。一には化衆生行、廣く十種有り。謂はく、衆生を救ひ、一切の生を饒益し安樂する等なり。經に廣く說くが如し。二には知衆生行、十種を修學して衆生法を知る。備には經に說くが如し。正心住の中、相別に二有り。一には決定信、異說を聞くと雖も、佛法の中に於て正信不動なり。二には決定智、十種の智を學し、一切法の無相無性不可修等を觀ず。不退住の中、相別に二有り。一には不退願、異說を聞くと雖も、佛法の中に於て求心退せず。廣くは十種有り。備には經に說くが如し。二には不退智、具に十種を有し、一切の法を知る。亦經に說くが如し。童眞住の中、相別に二有り。一には得勝

【三六】第三に十住の位を定む。

行、十種の法に於て、心に安住を得。謂はく、身行淨、口行淨、意行淨、隨物受生、知衆生等なり、二には淨土佛國土、一切の佛刹に於て、皆悉く能く知り、能く動じ、能く持し、能く觀じ、能く詣り、能く遍く至る等なり。法王子住の中、相別に二有り。一には化衆生行、善く十種の化衆生法を解す。二には求菩提行、法王の處に於て十種の智を學す。灌頂住の中、相別に三有り。一には度衆生堪能修行、十種の智を成じ、能く衆生を度す。二には得甚深所入境界、一切の衆生乃至第九の法王子菩薩も測量すること能はず。三には所知廣學、十種の智一切の法を知る。十住の位の中、曠く法界一切の行德を備ふ。略して斯を擧ぐるのみ。體相是の如し。此二門覺る。

(三六)次に、其位を定む。『位は何の處にか在る。』『有人釋して言はく、「菩薩十住は即ち是れ十地なり。所行は彼十地と同じきが故に」と。』問うて曰はく、『若し此は是れ十地なりといはば、何が故に經に「此菩薩の種性甚深廣大なること、法界の虛空と等し」と言ふ。』『經に種性と言ふは、十地に非ざることを明す。今正く之を論ずれば、習種に在り。良に習種は離退の始なるを以ての故に、說いて住と爲す。』問うて曰はく、『若し爾らば、何が故に所行は十地と同じき。』釋して言はく、『地法は上下同じく依る。之に依つて信を生ずるを、說いて賢首と爲し、之に依つて解を生ずるを、說いて十住と爲し、之に依つて行を起すを、說いて十行と爲し、之に依つて以て如實の正觀を起すを、說いて解行と爲し、之に依つて證得するを、說いて十地と爲す。故に『地經』に言はく、「譬へば一切の書字數

說は皆初章に攝し、初章を本と爲すが如し」と。十地是の如し。是れ一切の佛法の根本なり。行は是れ能く一切の佛法を得。是れ所學なるを以て、是れ地法なりと雖も、行は習種に在り。』此三門竟る。

(三七)次に、起說因緣の相を明す。六句に分別す。一には說時を明す。經に論ぜずと雖も、『地經』に准依するに、應に第二七日の宣說に在るべし。二には說處を明す。忉利天の妙勝殿の上に在り。三には說人を明す。法慧菩薩の宣說する所なり。四には說人所入の三昧を明す。法慧菩薩佛の神力を承けて、菩薩無量方便三昧に入る。五には加入を明す。十方の各の千佛世界の外に、各百佛世界塵數の諸佛有り。同じく法慧と名く。相與に加被す。六には證人を明す。十方の各の萬佛世界の外に、十佛世界塵數の菩薩有り。同じく法慧と名く。雲のごとく集つて證を作す。十住の義、之を辨じて云ふこと爾り。

十行の義に六門分別あり。一には名を釋す。二には體を辨ず。三には修起の所爲。四には起行の所依。五には位を定む。六には起說の因緣。

(三八)第一に、名を釋す。十行の義は『華嚴經』に出づ。修起を行と名く。行別不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には歡喜行、二には饒益行、三には無恚恨行、四には無盡行、五には離癡亂行、六には善現行、七には無著行、八には尊重行、九には善法行、十には眞實行なり。』喜心に施を行じ亦他をして喜ばしむるを、歡喜行と名け、淨戒を持するを以て自他を饒益するを、饒益行と名け、忍を修して瞋を離するを、無恚恨行と

【三七】第四に起說因緣の相を明す。

【三八】淨法聚第九十三段に十行の義を明すに六門の分別あり。第一に釋名。

【華嚴經】第十一

【三九】第二に十行の體を辨ず。

名け、勤修精進して廣く善法を攝するを、無盡行と名け、常に定意を修して愚癡虛妄分別を遠離するを、離癡亂行と名け、法の實相を知つて般若現前するを、善現行と名け、無著の心を以て諸の所行を起すを、無著行と名け、種種殊勝の善根を成就するを、尊重行と名け、種種化他の善法を成就するを、善法行と名け、第一誠實の語を成就して、說の如く能く行じ、行の如く能く說くを、眞實行と名く。名義是の如し。此一門竟る。

(三九)次に、行體を辨ず。行に二分有り。一には修分、緣に隨つて進習す。二には成分、證實平等にして廣大不動なり。故に經に說いて言はく「是菩薩の行、業廣大にして法界の如く、究竟じて虛空の如し」と。成分は卽ち實なり。言を以て論じ難し。修分は緣に在り。言を以て曉め易し。今修分に依つて次第に辨釋せば、歡喜行とは、布施を體と爲す。故に經に說いて言はく「歡喜を行ずる時、大施主と爲つて悉く所有を捨し、等く衆生に施す」と。但行施の時喜を生ずるに二有り。一には自喜を生ず。故に經に說いて言はく「施し已つて悔ゆること無し。煩惱を以て而も憂惱を生ぜず。倍復歡喜す。我善利を得たり」と。二には他喜を生ず。故に經に說いて言はく「歡喜を修する時、一切衆生歡喜愛敬す」と。饒益行とは、戒を以て體を爲す。故に經に說いて言はく「持戒淸淨にして、色聲等に於て心に染著無し。設ひ諸の魔の諸の天女及び餘の樂具を將ること有るも、惡念を起さず」と。但持戒の時所益に二有り。一には自益す。故に經に說いて言はく「我淨戒を持ちて一切の纒憂悲苦惱を離れ、菩提を成就せん」と。二には他を益す。故に經に說いて言はく、

「一切衆生の未だ度せざる者をば度し、未だ解せざる者をば解す」と。是の如きの一切なり。無恚恨とは、忍を以て體と爲す。故に經に說いて言はく「常に忍辱を修して、設ひ無量無數の衆生有つて、一一に各の無數の舌、無數の手を以て毀辱すとも、菩薩は瞋惱を生ぜす」と。無盡行とは、精進を體と爲す。故に經に說いて言はく「勤修精進最勝第一大精進等なり」と。離癡亂とは、定を以て體と爲す。故に彼經に言はく「第一の正念未だ曾て散亂せず。一切の行、一切の法の中に於て、皆癡亂無し」と。善現行とは、智慧を體と爲す。中に於て分別するに、略して二種有り。一には順空行、寂靜の身口意業を成就し、一切の法は皆所有無しと知る。故に經に說いて言はく「一切の衆生は、無性を體と爲し、一切の諸法は無爲を性と爲し、一切の佛刹は無相を相と爲し、三世を究竟して皆悉く無性なりと知る」と。是の如きの一切なり。二には隨有行、故に彼經に言はく「亦復菩提の心を捨せず。一切の衆生を教化することを捨せず。悲慈を增長す」と。是の如きの一切なり。無著行とは、大方便慧、勝行を發起す。之を以て體と爲す。故に彼經に說かく「無著心を以て諸の所行を起す」と。無著心とは、是れ方便智なり。有に於て染せず、空に於て住せず。故に能く行を起す。所起の諸行は、即ち是れ殊勝行を發起するなり。尊重行とは、一切種の成就善根を以て體と爲す。故に經に說いて言はく「菩薩は尊重の善根、不壞の善根、最勝の善根、不可思議無盡無退無比寂靜、乃至一切の佛法の善根を成就す」と。中に於て分別するに、略して二種有り。一には報行成、先に修し今熟す。二に

【四〇】第三に十行の所爲を辨ず。

【四一】第四に十行の所依を明す。

は發起勝、曠く衆行を進めて菩提に趣向す。善法行とは、一切種を以て衆生を化する行を體と爲す。故に經に說いて言はく「天人等の一切衆生の爲に淸涼池と作り、一切種の陀羅尼門、無礙辯才、種種の音聲、種種の身等を具す」と。眞實行とは、修習する所の諸佛如來の一切種の德を以て體と爲す。故に經に說いて言はく「三世の諸佛の眞實の語を學し、三世の諸佛の性に入り、三世の諸佛の善根と等しく、佛の十力、四無畏等を具す」と。是の如きの一切なり。體相是の如し。此二門竟る。

(四〇)次に、所爲を辨ず、所爲に四有り。一には有爲を厭はんが爲の故に諸行を修し、二には菩提を求めて、佛德を具足せんが爲の故に諸行を修し、三には衆生を益し、現在及び未來世に於て、衆生を求度せんと欲するが爲の故に、諸行を修し、四には實際を求めんが爲、法如を證せんが爲の故に、諸行を修す。故に彼經に言はく「淸淨平等の法を知らんと欲するが故に、精進を修行す」と。理實には諸行皆此四を具す。但經文の中には、說不說有り。隱顯の故に爾なり。四が中の前の三は爲に世法を求め、後の一は理を求む。所爲是の如し。此三門竟る。

(四一)次に、所依を明す。所依に二有り。一には世諦に依つて、諸行を修習し、二には眞諦に依る。歡喜の中の如き、施者受者の財物に依つて布施を修行す。是れ世諦に依る。施者受者の財物の、若は業、若は果を見ざる、是の如きの一切を、眞諦に依ると名く。歡喜既に然なり。諸行も類して爾なり。此四門竟る。

【四二】第五に十行の位を定む。

(四二〇左)次に、其位を定む。『位は何の處にか在る。』『有人釋して言はく、「初地上に在り。所行は卽ち是れ十地の法なるが故に」と。』問うて曰はく、『若し此は是れ十地とならば、何が故に經に「菩薩の種性清淨にして、願種不轉、行種不斷ならしめんと欲す」と言ひ、偈を以て頌するや。』『經の中に說いて云はく、「種性清淨は十地に非ざることを明す」と。今正しく之を論ずれば、位は性種に在り。性種の中の行種建立を以ての故に、十行と名く。』問うて曰はく、『經の中には直に、「種性清淨ならしめんと欲す」と云ふ。云何が知ることを得ん、偏に性種に在りと。』釋して言はく、『文の中に此判無しと雖も、說の因緣に准ずるに、前の十住に過ぎ、後の廻向及與十地に劣る。明けし、性種に在ること。』問うて曰はく、『若し此は是れ性種ならば、何が故に所行は十地と同じき。』釋して言はく、『此義は前の十住の中に、已に廣く分別せり。十地の法は上下同じく依なるが故に、此所學は是れ地法なりと雖も、成行の性種に在るを妨げず。』位分是の如し。此五門竟る。

【四三】第六に十行の起說因緣の相を明す。

(四二〇)次に、起說因緣の相を明す。六句に之を辨ず。一には說時を明す。文に辨ぜずと雖も、『地經』に准依するに、當に亦第二七日に在るべし。二には說處を明す。炎摩天宮寶莊嚴殿に在り。三には說人を明す。功德林菩薩の宣說する所なり。四には說人所入の三昧を明す。此法を說く時、佛の威神を承けて菩薩善伏三昧に入る。五には加人を明す。十方の各萬佛世界塵數界を過ぎて、外に各萬佛世界塵數の諸佛有り。同じく功德林と名く。相與に加被す。六には證人を明す、十方の各の十萬佛刹塵數界を過ぎて、外に各の十萬

【四四】淨法聚第九十四段に十廻向の義を明すに四門の分別あり。第一に釋名。

【華嚴經】第十五

【經】華嚴經第十六。

佛刹塵數の菩薩有り、同じく功德林と名く。雲のごとく集つて證を作す。十行是の如し。

十廻向の義に四門分別あり。一には名義を釋す。二には相を辨ず。三には位を定む。四には起修の因緣。

(四四)十廻向の義は、『華嚴經』に出づ。己が善法を廻して趣向する所有るが故に、廻向と名く。廻向不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には救護一切衆生離衆生相廻向、二には不壞廻向、三には等一切佛廻向、四には至一切處廻向、五には無盡功德藏廻向、六には隨順一切堅固善根廻向、七には等心隨順一切衆生廻向、八には如相廻向、九には無縛無著解脫廻向、十には法界無量廻向なり。』「救護衆生離衆生相とは、所廻に就いて以て名く。菩薩六波羅蜜を修行して衆生を攝取し、一切の煩惱業苦を離れ、菩提に安住せしむるを、救衆生と名け、等く救濟して怨親、善惡等の別を簡ばざるを、離衆生相と名く。此善根を廻して趣向する所有るを、救衆生離衆生相廻向と名く。不壞廻向とは、亦所廻に就いて以て名く。經の中に說が如し。佛菩薩及び一切の法に於て、不壞の信を得るを、名けて不壞と爲し、此善根を廻して趣向する所有るを、不壞廻向と名く。等一切佛廻向とは、所學に就いて名と爲す。經に言はく、「菩薩過去未來現在の諸佛所作の廻向を學するを、等一切佛廻向と名く」と。此門の中に於て、上は諸佛は一切の佛の十種の快樂を具することを願ず。謂はく、不思議三昧解脫大悲樂なり。廣くは經に說くが如し。次に菩薩一切の行を滿じ、佛德を究竟することを願じ、下は衆生一切の煩惱業苦を出離して菩薩の行を具し、佛

の功德を備へんことを願ず。至一切處廻向とは、其所成の行德に就いて名と爲す。經の中に說くが如し。菩薩所修の一切の善根を用て、以て廻向す。廻向力を以て、此善根をして一切處に至らしむ。譬へば實際は所として至らざること無きが如きを、至一切處廻向と名く。謂はく、一切の佛法僧の處に至つて無盡供養し、一切の行處に至つて具足修習し、一切の果處に至つて具足成滿し、一切の佛刹處に至つて具足莊嚴し、一切の衆生處に至つて具足攝化し、一切法處に至つて具足解知す。是の如き等なり。無盡功德藏廻向とは、廻向する所に就いて名と爲す。經の中に說くが如し。己が所修の無盡の功德を廻して趣向する所有るを、無盡功德藏廻向と名く。亦は所求所成に從つて、以て其名を立つることを得、佛菩薩無盡の功德を求め、能く無盡の功德善根を成ずるを、無盡功德廻向と名く。隨順一切堅固善根廻向とは、所成に從つて名を彰す。己が所修の施等の善根を廻して趣向する所有り、佛の爲に守護せられて、能く一切堅固の善根を成ずるを、隨順一切堅固善根廻向と名く。故に經に說いて言はく、「此廻向に住して無量の佛の爲に守護せられて、堅固の法、堅固の善根、堅固の願を得ん」と。等心隨順一切衆生廻向とは、所益に就いて名を彰す。菩薩一切の善根を增長して、廻して以て等く一切の衆生を益するを、等心隨順一切衆生廻向と名く。如相廻向とは、所依に就いて名を彰す。菩薩所成の種種の善根同じく一如を證す。故に如相と曰ふ。故に經の中に說かく、「種種の善根は一觀不二なり」と。此善根を廻して趣向する所有るを、如相廻向と名く。又復菩薩廻向の心は、種種の眞如門に依つて起る。是

【四五】次に十廻向の相を辨ず。

【四六】第三に十廻向の位を明す。

故に亦如相廻向と名く。亦は此れ譬況に就いて名と爲すべし。一切法に隨つて、以て眞如を辨ず。如の義は無邊なり。經に廣く說くが如し。謂ゆる、性如、相如、法如、行如、境界安立如、量如、充滿如、久住如等なり。廻向善根は彼如相に同じ。一切の法に於て差別異求するを、如相廻向と名く。故に經に說いて言はく、「性如の如く、善根も亦爾なり。廻向して一切の法性を知らんと求む。相如の如く、善根も亦爾なり。廻向して一切の法相を知らんと求む」と。是の如き等なり。無縛無著解脫廻向とは、廻向心に就いて以て名を立つるなり。一切の法に於て心に取執無きを、無縛無著と名け、法に於て自在なるを、稱して解脫と曰ふ。菩薩一切の善法を輕んぜず、無縛無著解脫の心を以て、彼善法を廻向して普賢の行を求め、能く普賢の一切種の德を具するを、無縛無著解脫廻向と名く。法界無量廻向とは、所求に就いて名を彰す。菩薩無盡の善根を修習して之を廻し、法界差別の無量の功德を願求するを、名けて法界無量廻向と爲す。名義是の如し。此一門竟る。

(四五つぎ)次に、其相を辨ず。此十廻向は大別するに三有り。一には廻向盡生所修の善根なり。廻向して衆生に施し、一切の煩惱業苦を出離して菩薩の行を具し、佛德を滿足せしめんと願ず。二には廻向菩提所修の善根なり。一切智を求む。三には廻向實際所修の善法なり。實際を證して、一切の法に於て不取不捨ならんと願ず。廻向衆しと雖も、要ず此を出でず。體相是の如し。此二門竟る。

(四六つぎ)次に、其位を定む。義に隨つて通じて論ずれば、廻向の心は處として有らずといふこと

無し。今此に辨ずる所は解行に在り。前の種性に過ぎ、十地に劣れり。此を以て測尋するに、解行に在ること明けし。解行の中出道に隣るを以ての故に、廻向を修して隨順趣入す。位別是の如し。此三門竟る。

(四七) 次に、起說因緣の相を明す。六句に之を辨ず。一には說時を明す。文中には辨ぜず。『地經』に準依するに、當應に亦第二七日に在るべし。二には說處を明す。兜率天の一切寶莊嚴殿に在り。三には說人を明す。金剛幢菩薩の宣說する所なり。四には說人所入の三昧を明す。菩薩明智三昧に入る。五には加人を明す。十方の各の百萬佛刹塵數界を過ぎて、外に各百萬佛刹塵數の諸佛有り。同じく金剛幢と名く。相與に加被す。六には證人を明す。十方の各の百萬佛刹塵數界を過ぎて、外に各百萬佛刹塵數の菩薩有り。同じく金剛幢と名く。雲のごとく集つて證を作す。廻向の義廣し。以て具に論じ難し。今宗要に隨つて之を辨ずること、略爾なり。

十地の義に四門分別あり。一には名を釋す。二には體を辨ず。三には位を論ず。四には起說の因緣。

(四八) 第一に、名を釋す。言ふ所の地とは、論釋不同なり。『毘婆沙』に依らば、住處もて地を解す。故に彼論に言はく、「十階の住處を、名けて十地と爲す」と。若し『地持』に依らば、兩義に辨釋す。一には、持の義もて地を解す。故に彼論の首に、地法を標擧するに、持を以て之を釋す。二には、能生もて地を釋す。彼論に言はく、「自ら受行する故に、之を名

【四七】第四に十廻向の起說因緣を明す。

【四八】淨法聚第九十五段に十地の義を明すに四門に分釋あり、第一に釋名、中に先づ地の義に就いて諸釋を擧ぐ。

【毘婆沙】十住毘婆沙論第一入初地品。

【地持】論第一。

【地法不同等】次に正して十地の名を釋す。

けて住と爲し、衆生を攝受す、之を目けて地と爲す」と。若し『地論』に依らば、四義に辨釋す。一には生、二には成、三には住、四には持なり。故に彼論に言はく、「佛智を生成して住持するを、地と名け、生と成とは佛果に望めて始起するを、生と名け、終滿を成と曰ひ、亦は佛に望めて因と爲すを生と名くべし。緣と爲すを成と稱す」と。『地の一法を、云何が因と爲し、而も復緣と稱する。』『今因の時に據らば、果全く未だ有らず。無を辨じて有ならしむるが故に、名けて因と爲す。彼當果に據らば、果は是れ可有なり。可有の法は、地能く現ぜしむ。之を目けて緣と爲す。亦地に證敎の別有り、果に性淨方便の異有るべし。性淨の果に望めて、證道を因と爲し、敎道を緣と爲す。方便の果に望めて、敎道を因と爲し、證道を緣と爲す。故に地に就いて、因と說き、緣と說くことを得。』言ふ所の住とは、當分に言を爲す。德成の處之を名けて住と爲す。言ふ所の持とは、通じて因果に望む。初地を二地に望めて持と說くが如し。乃至佛に望めて諸地とす。後に望むる次第例して然なり。眞に地中に備に多義を含むを以ての故に、釋を致す者の種種別異なり。地法不同にして、一門に十を說く。『十名とは是れ何ん。』『一には歡喜地、二には離垢地、三には明地と名け、四には炎地と名け、五には難勝地、六には現前地、七には遠行地、八には不動地、九には善慧地、十には法雲地なり。歡喜地とは經の中には、亦は淨心地と名くるなり。無上自利利他の行を成就す。初めて聖處を證して多く喜を生ずるが故に、歡喜と名く。此地に住する時、眞如の中に於て證心清淨なるを、淨心地と名く。又三寶に於て清淨の信を得

るを亦淨心と名く。然るに此初地を前の凡位に對すれば、應に聖地と名くべし。彼凡夫の取我の障に對すれば、應に無我地と名くべし。前の信位に對すれば、應に證地と名くべし。後の修道に對すれば、應に見地と名くべし。是の如く多義なり。並に陳ぶるべからず。且く利益に就いて、名けて歡喜と爲す。離垢地とは、『起信論』の中には、具戒地と名け、『地持』には、增上戒地と名く。能く誤心犯戒を起して、煩惱の垢等を離れ、淸淨戒具足するを、離垢地と名く。淨戒を具するが故に、具戒地と名く。戒行殊勝なるを、增上戒と名く。明地と言ふは、釋するに三義有り。一には他の上地を得て光明の相を證す。故に明地と名く。『地持論』に言はく「彼四地上の無生の行慧、此を光明と名く。彼光明に因るが故に、明と名く」と。二には此地の中に、禪方便決定の慧明を得。故に明地と名く。故に『地持』に言はく「三昧照明を、名けて明地と爲す」と。三には聞思修に隨つて、照法顯現す。故に明地と名く。故に『地持』に云はく「法照明なるが故に、名けて明地と爲す」と。炎地と言ふは、釋するに兩義有り。一には證體に就いて釋す。『地論』に說くが如し。不忘煩惱の薪を智火能く燒くが故に、炎地と名く。前三地の中の分別の解を、名けて不忘と爲す。此れ四地の智火の爲に焚かる。義もて說いて薪と爲す。四地の證地を前惑の薪に對し、義もて說いて火と爲す。前の分別を捨するが故に、能燒と曰ふ。此之治の能は世の火炎諸物を焚燒するが如し。故に炎地と名く。二には用に就いて解釋す。『地論』に說くが如し。證智法明摩尼寶の中に、阿含の光を放つが故に、炎地と名く。此れ菩薩の證智

【地持論】第七。

【地論】第一。

【地論】第六。

【地持】第七
【地論】第一。

の體に依つて起す所の阿含教知の作用、珠の光炎の如くなるを、名けて炎と爲すことを明すなり。難勝地とは、論釋不同なり。若し『地持』に依らば、決定智を得て勝過すべきこと難し。故に難勝と名く。若し『地論』に依らば、出世智の方便善巧を得て、能く度し難きを度するを、難勝地と名く。出世智の方便善巧を得るは、其難を釋するなり。能く度し難きを度するは、其勝を解するなり。度を名けて到と爲す。出世の難に到つて。前三地に勝り、彼方便善巧の難に到つて第四地に勝る。彼は世間に隨ふこと能はざるを以ての故に。現前地とは、般若波羅蜜間に有つて、大智現前するを、現前地と名く。遠行地とは、『起信論』の中には、方便具足地と名く。『地持』には、名けて有行有開發無相住と爲す。善く無相行を修し、功用究竟じて能く世間と二乘の出世間道とを過ぐるを、遠行地と名く。修道畢竟を方便具足と名け、功用未だ捨せざるを、有行有開と名く。功用の行有るが故に、有行と名け、功用の修有つて共に相開發するを、名けて有開と爲す。寂用雙行して間隔の相を離るるが故に、無相と名く。不動地とは、『起信論』の中には、色自在地と名く、『地持論』の中には、決定地と名け、亦は無行無開發無相住と名く。報行純熟して無相無間なるを、不動地と名く。此地の中に於て、淨土の行を修して色の中自在なるを、色自在と名く。法流水の中、決定上昇するを、決定地と名く。功用を捨離するを、無行無開と名く。其間隔及び功用の相を離るるが故に、無相と名く。善慧地とは、『起信論』の中には、心自在地と名く。『地持』には、決定行地と名け、亦は無礙住と名く。無礙力もて法を說

【四九】第二に十地の體相を辨ず。

【地論】第三。

いて利他の行を成就す。慧用善巧なるを、善慧地と名く。此地の中に於て善物の心を知れば、心自在と名く。前の決定に依つて上上進求するを、決定行と名け、此無礙辨才を具足するを、無礙住と名く。法雲地とは、『地持論』の中には、究竟地と名け、亦は最上住と名く。菩薩の大法身を得て自在を具足するを、法雲地と名く。學の中究滿するを、究竟地と名け、菩薩の中の極を、最上住と名く、名義是の如し。此一門竟る。

(四九)次に、體相を辨ず。十地は是れ位なり。位に別體無し、行を攬つて以て成ず。位を成ずるの行は、開合不定なり。或は總じては一と爲す。謂ゆる、菩薩願善く決定して衆生を海納し、萬德を備荷す。諸德相攝して皆一と爲すことを得。願は行の主なるを以ての故に、偏に之を論ず。或は分つて二と爲す。謂ゆる菩薩證教兩行なり。備に前に辨ずるが如し。或は離して三と爲す。謂はく、同相の三道なり。一には證、二には助、三には是れ不住なり。亦上に釋するが如し。又戒定慧も亦三を分つことを得。或は別つて四と爲す。謂はく、聞思修證なり。教を飡するを聞と名け、義を求むるを思と曰ひ、行を進むるを修と名け、實を得るを證と云ふ。或は說いて五と爲す。謂はく、聞、思、修、報生識智及與び證行なり。又五方便も亦五を分つことを得。『地論』に說くが如し。一には觀方便、諸地の觀解なり。二には得方便、諸地の得證なり。三には增上方便、證に依つて成ずる所の一切の行德なり。四には不退方便、前の四堅固なり。五には盡至方便、前の三滿足なり。或は分つて六と爲す。謂はく、六決定なり。前の六種決定章の中に、具に廣く分別するが如し。

【五〇】第三に十地の位を辨ず。先づ位の開合不同を明す。

【仁王】第十二に五忍章。

又六波羅蜜も亦六を分つことを得。或は說いて八と爲す。彼『相續解脫經』に說くが如し。一には方便淨、趣地の方便なり。二には心淨、初入地の心なり。三には悲心淨、正住地の中の起行の方便なり。四には波羅蜜淨、諸地の中に於て、修する所の諸度なり。五には見佛淨、地果の中に於て、多く諸佛を見る。六には成熟衆生淨、諸佛を見る時、四攝法を起して衆生を成熟す。七には生淨、謂はく、十王等なり。八には力淨、謂はく、攝根中の神力十事及び願智の果なり。或は說いて十と爲す。謂はく、信等の十行なり。故に『地持』に云はく「信等の十法一切地を淨む」と。又十波羅蜜も亦十を分つことを得。並に前に釋するが如し。或は復分つて三十七品と爲す。亦は離して八萬四千諸度の法門と爲すことを得。廣くは則ち無量なり。此等の開合は各一門に據る。廣くも畢に異盈無く、狹くも減小無し。地の體是の如し。此二門竟る。

(五〇)次に、地位を辨ず。開合不定なり。或は說いて一と爲す。彼證信二地の分別の如し。初地已上は、同じく證地と名く。或は分つて二と爲す。謂はく、見と修となり。初地を見と名け、二地已上を、同じく名けて修す。又復功用及び無功用も、亦二に分つことを得。七地已還を名けて功用と爲し、八地已上を無功用と名く。或は分つて三と爲す。謂ゆる、見修及び無功用なり。廣くは上に釋するが如し。或は離して四と爲す。四が中に乃ち四門の不同有り。一には解に約して分別す。『仁王』に說くが如し。初二三地を、名けて信忍と爲し、四五六地を、名けて順忍と爲し、七八九地を、無生忍と名け、十地を名けて寂滅忍と

【地持】第十四末

【地持】第八。

【故に經と等】次に十地位の十門階別を釋す。

爲すなり。二には修に據つて分別す。『地持』に說くが如し。初より五地に至るを、無相修と名け、六地七地は無相修淨、八地九地は無相修果、亦は名けて廣と爲す。十地を名けて無相修果成と爲す。三には所依に就いて、以て四種を分つ。彼『相續解脫經』に說くが如し。一には願淨、謂はく、初地の中に十大願を起す。二には戒淨、第二地の中に淨戒成就す。三には定淨、第三地の中に禪定增上す。四には增上慧及び上上出生淨、謂はく、四地上所起の行德なり。四五六地を增上慧と名け、餘を上上出生淨と名くるなり。四には依相に就いて、以て四種を別つ。『地持』に說くが如し。一には淨心地、局つて歡喜に在り。二には行迹地、謂はく、二地より乃ち七地に至る。此れ修道を起すが故に、行迹と曰ふ。三には決定地、謂はく、八地上なり。四には究竟地、謂はく、第十地なり。或は分つて五と爲す。『地持』に說くが如し。前の末後の四種の中に就いて、決定地を分つて、以て二種と爲す。第八の一地を決定地と名け、第九の一地を決定行と名く。餘に通じて五と說く。或は說いて八と爲す。『地持』に說くが如し。四五六地を、同じく正見と名く。餘は各一と爲す。故に八と爲すことを得。或は說いて十と爲す。始め歡喜より乃ち法雲に至る。行に隨つて細分すれば、亦無量なるべし。今は一門に據つて、且く十種を論ず。此十分ち難し。故に經と論とは、十門に階別す。『其十とは是れ何ん。』一には趣地方便の不同なり。『地持』に說くが如し。菩薩先づ解行地の中に於て、世俗禪に依つて一切菩提分法を修習し、廣く大願を興し、惡趣の報を轉じて歡喜地に入る。餘地の

方便は、『地持』に說くが如く、十眞心を修して離垢地に入り、十種深念の心を修習して第三地に入り、十思量を起して第四地に入り、十平等深淨の心を修して第五地に入り、十平等法を修して第六地に入り、十方便慧勝行を發起して第七地に入り、前の諸地を總じて以て方便と爲し、及び十種の無生忍の行を修して第八地に入り、十の自利利他の行を修して第九地に入り、總じて方便を修し、地分滿じて第十地に入る。二には初住に異有り。歡喜地の中の菩提心生ずるを以て初住と爲し、第二地の中の律儀戒淨を以て初住と爲し、第三地の中護煩惱護小乘心方便攝行を修するを以て初住と爲し、第四地の中の十種の法智教化成就を以て初住と爲し、第五地の中に十種順如道行を成就するを以て初住と爲し、第六地の中の大悲を首と爲し、大悲增上し大悲滿足して世の生滅を觀ずるを以て初住と爲し、第七地の中の無量種無功用行を修するを以て初住と爲し、第八地の中の無生忍淨及び得勝行を以て初住と爲し、第九地の中の得智成就を以て初住と爲し、第十地の中の三昧滿足を以て初住と爲す。三には正住に殊有り。歡喜地の中信精進、迴向善根を修するを以て正住と爲し、第二地の中の攝善根戒淨及び攝衆生方便の行を以て正住と爲し、第三地の中世の八禪を修するを以て正住と爲し、第四地の中の道品行觀を、以て正住と爲し、第五地の中に不住道を修するを以て正住と爲し、第六地の中に廣く因緣を觀ずるを以て正住と爲し、第七地の中の二行無間なるを以て正住と爲し、第八地の中に淨佛土及び十自在を修するを、以て正住と爲し、第九地の中善く十一稠林の行を知るを以て正住と爲し、第

十地の中に佛智識職を受くるを以て正住と爲す。四には地果に別有り。歡喜地の中に十大願を起し、十行を修行するを、以て地滿と爲し、第二地の中に攝生戒成ずるを以て地滿と爲し、第三地の中に四無量、五神通等を得るを以て地滿と爲し、第四の中に煩惱業を離れて增上の欲を起し、報恩精進本心界滿ずるを以て地滿と爲し、第五地の中に德を攝して修を起し、生を化して世に隨ふを以て地滿と爲し、第六地の中に滅障を對治し、三昧を修行して不壞自在なるを以て地滿と爲し、第七地の中に業淨三昧過地の勝行を以て地滿と爲し、第八地の中の大勝行を以て地滿と爲し、第九地の智成口成法師自在を以て地滿と爲し、第十地の中の智慧解脫三昧總持神通行等を以て地滿と爲す。廣くは經に說くが如し。五には修に據つて以て分つ。初地には願を修し、二地には戒を修し、三地には定を習ひ、四地には道品の慧を修習し、五地には諦相應の慧を修行し、六地には緣起の慧を修習し、第七地の中には無量種及び無功用を修し、第八地の中には淨佛土を修し、第九地には說法智行を修習し、第十地には微細智行を修習す。六には行に就いて以て別つ。行は、謂はく檀等の十波羅蜜なり。初地に檀を起し、二地に戒を起し、乃至十地は智波羅蜜なり。廣くは經に說くが如し。七には報に就いて異を顯す。初地に多く閻浮提王と作り、二地に多く轉輪聖王と作り、乃至十地に多く摩醯首羅天王と作る。八には數に寄つて別を彰す。初地に百三昧を得、百佛神力等を知り、乃至十地に十不可說百千佛國土微塵三昧等を得。九には喩に就いて差を論ず。喩別に六有り。謂はく、胎藏、練金、山、河、海、珠なり。胎藏

【五一】次第四に十地の起說因緣の相を明す。

【五二】淨法聚第九十六段に十功德の義を明すに三門の別あり。一に釋名。

【涅槃經】北本第二十一より第二十六に至る。南本は第十九より第二十四。高貴德王菩薩品。

の一喩は、論家況を爲す。後の五喩は、經家譬と爲す。十には障に對して、以て分つ障に十種有り。始め凡夫成相障より、乃ち第十の諸法の中の不得自在障に至る。廣くは上に釋するが如し。此障に翻對するが故に十地を說く。位別是の如し。此三門竟る。

(五一)次に、起說因緣の相を明す。七句に之を辨ず。一には說時を明す。佛成道し已りて、第二七日に即便ち宣說す。二には說處を明す。他化天自在宮摩尼藏殿に在り。三には說人を明す。是れ金剛藏菩薩の宣說なり。四には請主を明す。謂はく、解脫月なり。五には請人所入の三昧を明す。大智慧光明三昧に入る。亦は大乘光明三昧と名く。六には加人を明す。十方の各の十億佛土微塵數の世界を過ぎて、十億佛土微塵數の佛有り。同じく金剛藏と名く。相與に加被す。七には證人を明す。十方の各の十億佛土微塵數界を過ぎて、十億佛土塵數の菩薩有り。同じく金剛藏と名く。雲のごとく集つて證を作す。十地の相之を辨ずること已闌なり。

十功德の義に三門分別あり。一ては名を釋す。二には相を辨ず。三には五行に約對して其位分を定む。

(五二)初に、其名を釋す。十功德の義は、『涅槃經』に出づ。功は、謂はく、功能なり。能く生死を破し、能く涅槃を得、能く衆生を度す、之を名けて功と爲す。此功は是れ其善行が家の德なり。故に功德と云ふ。清冷等は是れ水の德なるが如し。此德淵深にして妙に情取に過ぎ、體寂無爲にして諸相も及ばず。故に經に說いて言はく、「聲聞辟支佛と共ならず。不

【五二】第二に十功德の相を辨ず。先づ第一の入智功德に就いて。

可思議にして聞く者驚怖す。內に非ず、外に非ず、難に非ず、易に非ず。相に非ず、非相に非ず。是世法に非ず。相貌有ること無く、世間に無き所なり」と。然るに德體寂なりと雖も、而も義は法界に充つ。法界の體德以て定論し難し。今は一門に據つて、且く十種を說く。『其十とは是れ何ん。』一には入智功德、二には起通功德、三には大無量功德、四には十利益成就功德、五には五事報果功德、六には心自在功德、七には修習治功德、八には對治成就功德、九には修習正道功德、十には正道成就功德なり。此れ乃ち釋する者、義に隨つて以て名く。經の中に辨ぜず。十が中の前の六は自分の功德、後の四は勝進なり。觀解實に趣くを、名けて入智と爲し、妙用緣に隨ふを、稱して起通と曰ひ、化心深廣なるを大無量と名け、行德建立するを、利益と名け、勝報圓に具するを、報果成と名け、金剛定を具して所爲無礙なるを、心自在と名け、善く四種の離過道を修するを、修對治と名け、解脫の德立するを、對治成と名け、起修上に順ずるを、習正道と名け、道品の德備はるを、正道成と名く。名義是の如し。此一門竟る。

(五三)次に、其相を辨ず。初の功德の中、差別するに五有り。一には聞かざる所の者は而も能く聞くことを得。二には聞き已つて能く利益と爲す、三には能く疑惑の心を斷じ、四には慧心正直にして曲ならず、五には能く如來の密藏を知る。五が中の初の一は是れ其聞慧次の二は思慧、次の一は修慧、後の一は證智なり。初に聞かざるもの而も能く聞くと言ふは、聖道佛性菩提涅槃三寶性相なり。諸餘の凡夫二乘の法の中には、未だ曾て聞かざる所な

【第二德の等】 次に起通功德を釋す

り。今此經に因つて悉く之を聞くことを得る、是を聞かざるもの而も能く聞くことを得と名く。思慧の中に就いて、初門は益を成じ、後門は疑を遣る。言ふ所の聞き已つて能く益を爲すとは、此經を聞き已つて、書寫讀誦して他の爲に廣說し、其義を思惟して能く一切諸法の義理を見、自ら無上菩提に近くことを得ることを知り、其法其義の二種の無礙一切說に於て無所畏を得るを名けて利益と爲す。疑心を斷ずとは、義を思ふを以ての故に、諸法の中の種種の疑惑に於て、悉く永く斷ずることを得。慧心正道とは、凡夫二乘の虛妄分別、斯を邪曲と名く。菩薩『大涅槃經』に依つて、聖行を修行して法の實相を見、邪曲永く斷ずるが故に、正直と云ふ、能く如來の深密藏を知るとは、菩提涅槃佛性業果は是れ其密藏なり。此經に依つて、窮盡相應するが故に、能く知ると曰ふ。第二德の中、差別するに五有り。一には昔得ざる所なるも、而も今は之を得、二には昔到らざる所なるも、而も今は之に到り、三には昔聞かざる所なるも、而も今は之を聞き、四には昔見ざる所なるも、而も今は之を見、五には昔知らざる所なるも、而も今は之を知る。五が中の初の二は是れ其身通、次の一は天耳、次の一は天眼、後の一は他心及與び宿命なり。昔得ざる所なるも而も今は得とは、是れ身通の中の轉變の神通なり。此通外道聲聞辟支等と共ならざるを、昔は得ざるも而も今は今を得と名く。『云何が共ならざる。』『略して六種有り。一には緣心の不同、用百變すと雖も、都て分別無し。餘人は爾らず。二には心不隨身餘人に異なる菩薩は復身を變じて小と爲すと雖も、心亦小ならず、身を化して大と爲すとも、心

【第三德とは等】次に大無量功德に就いて。【第四德の等】次に十利益成就功德に就いて。

亦大ならず。餘人は爾らず。三には多小の不同、菩薩は一心一時に能く五趣の身を作す。餘人は堪えず。四には所入の不同、菩薩能く廣大の身を以て一塵の中に入る。餘人は能はず。五には應現の不同、菩薩は一身能く衆生をして種種に異見せしむ。餘人は堪えず。六には虛實の不同、菩薩の變化は一切の種物皆實用を得。餘人は能はず。昔到らざる所なるも而も今は到るとは、是れ身通の中の飛行神通なり。菩薩の神通は一念に能く恒河沙剎に至つて、而も去心無し。餘人は爾らず。昔聞かざる所なるも而も今は聞くとは、十方の諸聲、近遠麤細一時に悉く聞いて、而も分別無し。昔見ざる所なるも而も今は見るとは十方界に於て、一切の色像、近遠麤細一時に悉く見て、都て見想無し。昔時に知らざるも而も今は知るとは、中に於て二有り。一には他心通、能く十方の諸の衆生の心を知る。二には宿命通、今現在より過去世に及びて、他及び自身八種の事、六種の同行一切悉く知る。第三德とは、謂ゆる、菩薩無緣の大悲心は虛空の如く、分別する所無くして、而も能く普く一切衆生を益す。第四德の中、差別するに十有り。一には根深くして拔き難く、二には自身に於て決定の想を生じ、三には福田及び非福田を觀ぜず、四には佛の淨土を修し、五には有餘を滅除し、六には業緣を斷除し、七には淸淨心を修し、八には諸緣を了知し、九には怨敵を離し、十には二邊を除く。十が中の前の二は起行の根本、後の八種は所起の行德なり。起行の本の中、根深くして拔き難しとは、能立の始を明す。『其體は是れ何ん。』『謂はく、菩薩の不放逸根なり。般若の過を離るるを、不放逸と名く。能く無上

菩提の與に本と爲るが故に、說いて根と爲す。又一切の諸行の與に本と爲るも、亦名けて根と爲す。堅、實相、窮むる之を目けて深と爲す。能く信戒施聞智慧忍進念定一切の善法を增して、惡の爲に敗られざるを、名けて拔き難しと爲す。自身の中に於て定想を生ずとは、能く終りに趣くことを明す。自ら己身を念じ、未來世に於て必ず無上菩提の法器と爲す心も亦是の如し。終に異求無きを、自身に於て決定の想を生ずと名く。後の八が中に就いて前の五は是れ其攝功德の行、後の三は是れ其攝智慧の行なり。攝功德の中、初の二は是れ其淨佛土の行、後の三は是れ其起法身の行なり。淨土の行の中、福田及び、非福田を觀ぜずとは、能く等く施すことを明す。此は即ち是れ其穢土を捨するの行なり。等施を修するを以ての故に、凡夫の障礙の穢土を離る。淨土を修すとは、能く戒を持することを明す。此は即ち是れ其淨土を嚴るの行なり。十善を修して十惡を離するを以ての故に、佛を得るの時、具に衆生來つて其國に生ず。法身行の中、前の二は是れ其穢身を捨するの行、後の一は是れ其法身を嚴るの行なり。穢身を捨する中、有餘を滅すとは、淺苦を離るるなり。業緣を離ずとは、殘業の因、煩惱の緣を除くなり。此等通ずる時は、俱に有餘と名く。故に『涅槃』の中に、餘を說くに三有り。一には煩惱の餘報、二には餘業、三には餘有るなり。煩惱の餘報は、凡夫に就いて說く。一切の凡夫は貪瞋、癡慢、增上力の故に、地獄に墮し、地獄より出でて、畜生の中に於て種種の身を受け、乃至人中に惡の果報を受けて四禁罪を犯ず。餘業と言ふは、學人に就いて說く。須陀洹の人は七有業を受け、斯陀含の

人は欲界の中に於て二行業を受け、阿那含の人は色有無色有業を受く。餘有と言ふは、無學に就いて說く。羅漢、辟支は業無く結無くして、而も結業二家の果在ること有り。更に須らく轉滅すべし。故に經に說いて言はく「業無く、結無くして、而も二果を轉ず」と。此三種の餘を菩薩皆捨す。問うて曰はく、『何れの處にか菩薩能く捨する。』謂はく、『初地上より地前に捨すと雖も、而も未だ能く盡さず。初の二種を捨するは、猶是れ向前の斷除業緣なり。後の一種を捨するは、猶是れ向前の滅除餘有なり。淨身を修すとは、十善を修行し、十惡を遠離して諸の相好を得るを、淨身を修すと名く。十善の中に於て、一一に各五心を以て修習す。謂はく、下、中、上、上中、上上を則ち五十と爲す。始修の五十、終成の五十を合して百福と爲す。此百福を以て一相を成ず。是の如く具に三十二相を修す。世間の事の八十神を破せんが爲に、八十好を修す。下智を修する中の初の一は攝治、後の二は離障なり。緣を了知すとは、因緣の法は空にして所有無しと知つて、因相を取らず、生相を取らず、滅相を取らず、一異を取らず、有等の相無きを、因緣を了すと名く、怨對を離るとは、八種の魔有り。是れ菩薩の怨なり。菩薩は之を離る。八魔と言ふは、一には煩惱魔、貪瞋癡等なり。二には陰魔、謂はく、五陰の身なり。三には死魔、謂はく、身の滅壞なり。四には天魔、第六天子なり。無常、無樂、無我、不淨の此四倒の心を、復四魔と爲す。前に通じて八と說く。魔羅とは胡語にして、此には殺者と云ふ。此八は善を害するが故に、殺者と名く。又復四地已還の菩薩は、諸の煩惱は悉く是れ已が怨なりと觀

【第五德の等】次に五事報果功德に就いて。

【第六德とは等】次に心身在功德に就いて。

【第七德の中等】次に修習對治功德に就いて、

【第八德の等】次に對治成就功德に就いて。

じて、常に遠離を修す。五住已上は不住道を得、世に隨つて化益して、一切の煩惱を以て怨と爲さず。隨つて身を受けて衆生を化するが故に、唯方等經を誹謗する者を用て、以て大怨と爲し、畏れて之を離る。經說是の如し。二邊を離るとは、生死の有果、是れ其一邊なり。愛煩惱の因を復一邊と爲す。菩薩は皆離る。第五德の中、差別するに五有り。一には諸根完く具して六根缺かず。二には邊地に生ぜず。常に中國の際に處し、化、物に隨ふ。三には諸天愛念す。四には一切人天大衆の爲に恭敬供養せらる。五には宿命智を得。初の二は是れ報、中の二は是れ福、後の一は是れ智なり。第六德とは、謂はく、金剛定なり。前の金剛三昧章の中に、具に廣く分別するが如し。第七德の中、差別するに四有り。一には善知識に近き、二には專心に法を聽き、三には念を繫けて思惟し、四には法の如く修行す。此四種を以て諸過を對治す。故に經に說いて言はく、「譬へば病人良醫の所に至り、醫爲に藥を說き、至心に善く受け、敎に隨つて合藥し、之を服せば病愈ゆるが如し」と。病人は起行の菩薩に喩へ、醫に至るとは、善知識に近くに喩へ、敎を受くとは、專心に法を聽くに喩へ、合藥すとは、思に喩へ、服すとは、修行に喩へ、病は身に喩へ、藥は涅槃を得るに喩ふ。第八德の中には、具に八門有り。一には五事を斷じ、二には五事を離れ、三には六事を成じ、四には五事を修し、五には一事を守り、六には四事に近き、七には一實を信順し、八には心善解脫、慧善解脫なり。五事を斷ずとは、謂ゆる、五陰なり。陰の義は前の五陰章の中に、具に廣く解釋し分別するが如し。菩薩は推求して所有無しと知るが

【第九德の等】次に修習正道功德に就いて。

故に、能く之を斷ず。五事を離るとは、謂ゆる、五見なり。身、邊、邪見、戒、見の二取は、是れ其五なり。此等は前の十使の中に釋するが如し。菩薩は之を離る。六事を成ずとは、謂はく、六念心なり。念佛、法、僧、戒、施及び天は、是れ其六なり。亦前に釋するが如し。五事を修すとは、一には是れ知定、謂ゆる、初禪なり。彼に覺觀有るが故に、名けて知と爲す。二には寂定、謂はく、第二禪なり。彼に覺觀を滅するが故に、寂定と云ふ。三には身心樂定、謂はく、第三禪なり。彼には樂殊勝なるが故に、快樂と云ふ。四には無定、謂はく、四禪より乃ち悲想に至る。彼には四受を絶するが故に、無樂と云ふ。此れ四事定なり。五には首楞嚴、是れ其理定なり。首楞嚴とは、此に一切事竟と名く。楞嚴とは、此に堅固と云ふ。一事を守るとは、謂はく、菩提の心なり。亦前に釋するが如し。四事に近くとは、謂はく、四無量なり。亦上に解するが如し。一實を信ずとは、謂はく、一大乘なり。他に隨つて三を說く。實には唯一大なるが故に、一實と云ふ。心解脱とは、貪瞋癡を滅すれば、心に解脱を得。一切の法に於て、知ること無礙なるが故に、慧に解脱を得。貪瞋癡を滅すれば、即ち是五住の性結亡するなり。所得を名けて眞諦の心慧と爲す。一切法に於て知ること無礙なりとは、即ち是事中の無知盡くるなり。所得を名けて世諦の慧脱と爲す。第九德の中、差別するに五有り。一には信心、二には直心、三には戒心、四には近善友、五には多聞なり。故に經に說いて言はく、「大涅槃を修する初に五事を發す」と。初發を以ての故に、判じて勝進と爲す。信とは、謂はく、三寶、二諦、施有果報及び善方

（五三）第十德とは等　次に正道成就功德に就て。

（五四）第三に五行に對して十功德の位分を定む。

便究竟一乘を信ず。此等は猶是れ『地持論』の中に八解處を信ずるなり。三寶を三と爲す。二諦と言ふは『地持論』の中には、眞實義と名く。施有報とは、『地持』に名けて種種因果と爲す。善方便とは、『地持論』の中には、得方便と名く。究竟一乘は、『地持論』の中に、名けて得義と爲す。彼菩提の因を得方便と名け、菩提の果を、名けて得義と爲す。此中には、略して諸佛菩薩神通の力無し。直心と言ふは、自らの所犯に於て發露悔除して、過を藏するの意無きが故に、直心と名く。又實心を以て衆生の過を覆ひ、其善事を讃ず。謂ゆる、佛性共をして發心せしむるを、亦直心と名く。戒とは、菩薩堅く禁戒を持して、正く菩提に向ひ、心に異求無く、外道の鳥雞の戒等を受けず。近善友とは、諸佛菩薩は是れ其善友にして、常に之に親近す。多聞と言ふは、凡そ六種有り。一には涅槃の爲に十二部經を受持讀誦し、書寫供養するを、多聞を具すと名く。二には十一部を除いて、唯方廣を持するを、多聞を具すと名く。三には十二部を除いて、但涅槃を持するを、多聞を具すと名く。四には涅槃を除いて全體を具足し、其れ唯一四句偈を受持するを、名けて多聞と爲す。五には一四句偈を除いて、但如來常住不變を持するを、名けて多聞と爲す。六には是事を除いて、若し如來常に說法せずと知らば、亦多聞と名く。『云何が說かざる。』『經に自ら釋して言はく、「諸法は性無し。諸法を說くと雖も、常に所說無し」と。』（五三）第十德とは、謂ゆる、菩薩三十七品なり。是義は後の道品章の中に、具に廣く辨釋するが如し。此二門竟る。

（五四）次に五行に對して、其位分を定む。五行と言ふは、一には是れ聖行、二には是れ梵行、三

には是れ天行、四には是れ病行、五には嬰兒行なり。此義は前の五行章の中に、已に廣く解釋するが如し。通じて之を論ずれば、五行十德皆始終に遍ず。是れ諸菩薩の常に修する所なるが故に、相に隨つて別して分たば、五行は地前、十德は地上なり。『云何が知ることを得る、五行は地前なりと。』『涅槃』の中に說くが如し。初地上の不動の地、堪忍、無畏、極愛の地、空平等地を五行と爲す。是れ地前なること明かなり。『云何が知ることを得る、十德は地上なりと。』『經の中に說くが如し。菩薩の十德は不可思議にして、是れ世法に非ず。世間に無き所なり。地前に非ざること明けし。』十德是の如し。

見性十法の義。

(五五)見性十法は、『涅槃』に說くが如し。一には少欲、二には知足、三には寂靜、四には精進、五には正念、六には正定、七には正慧、八には解脫、九には讚歎解脫、十には大涅槃を以て衆生を敎化す、此十名の中には、備に多義を含む。如來は自ら五番を以て之を釋す。中に於て、義雜つて以て名を別ち難し。第一番の中に、小欲知足は相對して辨釋す。經の中には、先に不善の法に對して菩薩の少欲知足を辨明し、後に善法に對して其菩薩の多欲不足を明す。不善の中に就いて、四義もて異を辨ず。其第一義とは、少しく所求有るを、名けて少欲と爲す。若し乏少有れば、但善法を念じて心に愁惱無きを、說いて知足と爲す。第二義とは、他に從つて求めず、亦自ら取らざるを、名けて少欲と爲し、得少の時

【五五】淨法聚第九十七段に見性十法の義を明す。

【涅槃經】北本第二十七師子吼菩薩品。

【如來は等】此義を釋するに五番相對ある中、先づ第一番相對。

心に悔恨せざるを、說いて知足と爲す。第三義とは、未得法の中に能く三欲を破するを、名けて少欲と爲し、得て著せざるを、說いて知足と爲す。三欲と言ふは、一には是れ惡欲、一切大衆の上首と爲つて、一切の僧をして己に隨逐せしめ、我所說をして四衆に信受せしめ、一切の天人我を尊敬、讃歎、供養せんことを欲す。二には是れ大欲、世人をして咸く皆已に須陀洹乃至羅漢を得、初地乃至佛果に住することを得、禪解脫一切の功德を得たりと、謂はしめんと欲す。三には是れ欲界、刹利、婆羅門家に生ぜんと願ひ、天上乃至梵天に生ぜんと願ふ。第四義とは、他敬を求めざるを、名けて少欲と爲し、所得の物を積聚することを爲さざるを說いて知足と爲す。上來は惡に對して菩薩の少欲知足を辨明す。今次に善に對して其多欲不知足の義を明す。四句に之を辨ず。一には少欲不知足、謂はく、須陀洹は、小涅槃を求むるが故に、學心未だ止まざるを、不知足と名く。且く須陀洹を論ず。斯陀那含は類して亦同く然なり。二には知足にして少欲に非ず。謂はく、辟支佛は自の所得に於て究竟の想を生ずるが故に、知足と名け、辟支の人を化するに、但神通を現じて說法することを知らず、說を求むる心多きが故に、少欲に非ず。三には亦少欲にして亦是れ知足なり。謂はく、阿羅漢更に所求無きを、名けて少欲と爲し、自ら究竟と謂ふが故に、知足と曰ふ。四には不少欲にして亦不知足なり。謂ゆる、菩薩、大菩提無量の善法を求むるが故に、少欲に非ず。自の所得に於て足想を生ぜざるを、不知足と名く。然るに此二行に、善、不善有り。凡夫の所行を名けて不善と爲す。他の知ることを求むるが故に。聖人

【第二番の中等】次に第二番相對を明す。

の行ずるは之を名けて善と爲す。所行を他をして知らしめんと欲せざるが故に。寂靜と言ふは、近く論ずるに四有り。一には身靜にして心靜ならず。謂はく、比丘有り、空閑處に在って、心に貪瞋癡等を積聚す。二には心靜にして身靜ならず。謂はく、比丘有り、四衆に親近して心に煩惱無し。三には身心倶に寂靜ならず。謂はく、餘の凡夫なり。四には身心の二倶に寂靜なり。謂はく、佛菩薩なり。身寂靜なるが故に、殺盜婬を離れ、心寂靜なるが故に、貪瞋癡を離る。又復菩薩の三業に過無きを、亦寂靜と名け、三業策懃して過を離れ、善を修するを、名けて精進と爲し、六念心を具するが故に、正念と云ひ、勝三昧を得るを、名けて正定と爲し、諸法の空を觀ずるを、說いて正慧と爲し、諸の煩惱を斷ずるを、名けて解脫と爲し、諸の衆生の爲に解脫は常恒不變なりと稱美するを、讃解脫と名く。煩惱を斷ずるが故に、大涅槃を得、大願力を捨せざるが故に、衆生を教化す。此一門竟る。第二番の中に、四依を修習して四惡欲を破するを、名けて少欲と爲す。四惡欲とは、一には衣の爲の惡欲。糞掃衣を著して之を對治す。二には食の爲の惡欲。乞食して之を治す。三には臥具の惡欲。樹下に之を治す。四には有の爲の惡欲。有の爲に業を造る。身心寂靜にして之を對治す。四聖種に住するを、說いて知足と爲し、四種の樂に住するを、名けて寂靜と爲す。四樂と言ふは、一には出寂樂、謂はく、持戒樂なり。二には寂靜樂、『地持論』の中には、遠離樂と名く。謂ゆる、初禪には欲惡不善を離るるが故に、寂靜と名く。三には永滅樂、『地持論』の中には、寂靜滅樂と名く。二禪已上

は覺觀止息するが故に、永滅と云ふ。四には、畢竟樂、『地持論』の中には、菩提樂と名く。出世の聖道一たび得て退せざるが故に畢竟と云ひ、四正懃を具するを精進と爲し、四念處を具するを、名けて正念と爲し、四禪を得るが故に、名けて正定と爲し、四聖諦を具するを、名けて正慧と爲し、長く煩惱を斷ずるを、名けて解脫と爲し、煩惱の過を呵して解脫の勝を顯すを、嘆解脫と名く。第十は前の如し。竟る。

【第三番の中等】次に第三番相對に就て。

此兩門第三番の中に、世間の事を離するを、名けて少欲と爲し、既に出家し已つて悔心を生ぜざる、是を知足と名く。空閑處に近きを、說いて寂靜と爲し、已に未だ沙門の道果を得ざるに、妄に他人をして已已に得と謂はしめんと念じ、慚愧心を生じて疾疾に懃修するを、名けて精進と爲し、大涅槃に近くを、說いて正念と爲し、天行に隨順するを、名けて正定と爲す。菩薩の八禪は、是れ其天行なり。正見、正知を、說いて正慧と爲し、正知見の故に能く煩惱を破するを名けて解脫と爲し、十住の菩薩衆生の爲の故に、涅槃を稱美するを、嘆解脫と名く。第十は上の如し。竟る。

【第四番の中等】次に第四番相對に就て明す。

此三門第四番の中に、十二頭陀を行ずるを、名けて少欲と爲し、是事を行ずる時悔心を生ぜざるを、說いて知足と爲す。空三昧を修するを、名けて寂靜と爲し、四果を得已つて、大菩提に於て心休息せざるを、名けて精進と爲し、如來の常恒不變を思惟するを、說いて正念と爲し、八解脫を修するを、名けて正定と爲し、四無礙を得る、是を正慧と名け、七漏を遠離するを、稱して解脫と曰ふ。七漏は前の煩惱聚の中に、具に廣く分別するが如し。涅槃を嘆美するを、讚解脫と名く。第十は前の如し。竟る。

【第五番の中等】次に第五番相對に就て明す。

此四門第五番の中に、諂曲を破壞する

【五六】淨法聚第九十八段に涅槃十因の義を明す。
【涅槃】北本第三十一師子吼菩薩品

を、名けて少欲と爲し、如來の行を學するを、稱して知足と曰ふ。涅槃門及び五種の樂に近くを、說いて寂靜と爲す。五樂と言ふは、『地持論』に說くが如し。一には同樂、二には受樂、三には苦對治樂、四には斷受樂、五には無罪樂なり。亦は四禪及び首楞嚴を五樂と名くべきなり。堅く禁戒を持するを、名けて精進と爲し、慚愧有る者を、說いて正念と爲し、心想を見ざるを、名けて正定と爲し、諸法因緣の性相を求めざるを、名けて正慧と爲し、諸の煩惱を斷ずるを、說いて解脫と爲し、他の爲に稱美するを、嘆解脫と名く。第十は上の如し。是の如き十法は佛性を見ると雖も、而も明了ならず。未だ佛に同じからざるが故に。十法是の如し。

涅槃十因の義。

(五六)涅槃の十因は、『涅槃』に說くが如し。一には信、二には戒、三には近善友、四には寂靜、五には精進、六には正念具足、七には軟語、八には、護法、九には布施、十には正慧なり。信とは、菩薩、佛法僧は常恒不變なり、一切衆生は悉く佛性有りと信ず。戒とは、菩薩堅く禁戒を持して一切の爲にせず。唯最上第一義の爲にするが故に。近善友とは、若し能く信戒施聞智慧等の法を說いて、人をして行ぜしむる者有れば、常に之に親近す。寂靜と言ふは深法界を觀じて、身心動ぜず。精進と言ふは、常に四諦を觀じて頭を火に投じ、燃ゆれども終に放逸捨せず。正念具とは、六念心を具し、佛法僧戒施及び天を念ず。濡語

と言ふは、口の四過を離して、衆生と與に語す。護法と言ふは、常に自ら法を樂んで、受持讀誦、書寫供養し、其義を思惟して他の爲に廣く說き、人の護法を見ては種種に供養し、施者菩薩は同法の者に於て、其所須に隨つて一切給與す。慧とは、如來は常住にして變易有ること無く、一切衆生悉く佛性有りと觀察す。一切法の若は空、若は有、若は常、若は無常、是の如く二諦に種種の差別を觀ず。此十種を以て能く涅槃を見る。十因是の如し。

【五七】次に淨法聚第九十九段に菩薩十力の義を明す。【大智論】第二十五。

菩薩十力の義。

（五七）菩薩の十力は、『大智論』に出づ。行心堅固にして魔法も壞せざる、之を名けて力と爲す。力の義不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には發心堅固力、一切智を求めて退轉せざるが故に。二には大慈力、常に能く諸の衆生を捨せざるが故に。三には大悲力、利養を求めずして衆生を化するが故に。四には精進力、能く諸佛を出生する法を信ずるが故に。五には禪定力、智慧を起すと雖も、威儀の行を失壞せざるが故に。六には智慧力、二邊を遠離し、十二緣に隨つて諸の邪見を斷じ、戲論を滅するが故に。七には不厭力、常に生死を受けて衆生を敎化し、諸の善行を集めて疲厭無きが故に。八には無生忍力、法の實相を觀じて無我を知るが故に。九には解脫力、三解脫門に入り、及び二乘の得る解脫を知るが故に。十には無礙智力、法に於て自在にして、衆生心の趣向する所を知るが故に。』又『華嚴』の中に、更に十力を說く。前の十種と同有り、異有り。『十名

は是れ何ん。』『一には直心力、一切世界に染著無きが故に。二には深心力、一切諸佛の法を壞せざるが故に。三には方便力、一切菩薩の行を究竟するが故に。四には智慧力、衆生の心を知るが故に。五には願力、一切衆生をして願を滿足せしむるが故に。六には行力、盡未來際まで斷絶せざるが故に。七には乘力、出生して普く一切の乘を現ずるが故に。八には神通力、一毛道に於て、一切の清淨世界に一切の如來の世に出興したまふことを示現するが故に。九には菩提力、菩提と一切衆生とは心念等きことを覺悟するが故に。十には轉法輪力、一句の法に於て分別演說して、一切衆生の悕望及び諸根に隨順するが故に。』此十種の中、初の直心力は、是れ前の十の中の具智慧力、及び無生忍力なり。第二の深心は、是れ前の十の中の精進の力なり。第三の方便、第六の行力は、是れ前の十の中の不疲厭力なり。第四の慧力、第十の轉法輪力は、是れ前の十の中の無礙智力なり。第五の願力は、是れ前の十の中の初發心なり。第七の乘力は、是れ前の十の中の解脫力なり。三乘の解脫の法を知るを以ての故に。後の十種の中の神通力、菩提力には、前の十を論ぜず。前の十種の中の慈悲定力には、後の十を說かず。又『首楞嚴』の中に、更に十力を說く。一には菩提心力、堅く守つて失はず。二には不思議の佛法に於て深信力を得れば、深く信じて疑はず。三には多聞に於て不忘力を得れば、堅く持つて失はず。四には生死に往來して無疲力を得れば、常に能く之に處す。五には衆生に於て大悲力を得れば、常に能く攝化す。六には布施に於て堅捨力を得れば、恒に施して休まず。七には持戒に於て不壞力を得

【五八】淨法聚第百段に菩薩十無畏の義を明すに二門の別あり。一に辨相。

【五九】第二に菩薩の四無畏と對比して其同異を辨ず。

れば、堅く持つて犯さず。八には忍辱に於て堅受力を得れば、常に能く忍受す。九には魔も壞すること能はず。智慧力を得て魔の爲に動かされず。十には諸の深法に於て信樂力を得れば、樂求して厭ふこと無し。此十種は『大智論』所說の十力と、同有り、異有り。初の菩提心力は、是れ彼第一の發心の力なり。第二の深信は、是れ彼第四の精進の力なり。能く諸佛を出生するの法を信ず。第四の無疲は、是れ彼第七の無厭力なり。第五の生に於て大慈を得るは、是れ彼第二の大慈の力、及び第三門の大悲の力なり。第九の魔に於て智慧力を得るは、是れ彼第六の具智慧力、及び第十門の無礙智力なり。第十の深法に信樂を得るは、是れ彼第八の無生忍力、及び第九門の解脫力なり。此中の多聞、布施、持戒、忍辱の力は、彼中には論ぜず。彼中の定力は、此處には說かず。十力是の如し。

菩薩十無畏の義に兩門分別あり。一には相を辨ず。二には四無畏に對して其同異を辨ず。

(五八)此十無畏は、『華嚴經』に出づ。『名字は是れ何ん。』一には悉能聞持問答無畏、二には除滅衆生疑惑無畏、三には見一切空離邪見無畏、四には得佛威儀無畏、五には三業淸淨離過無畏、六には諸天善神一切諸佛護念無畏、七には悉能受持一切佛法無畏、八には示現受生不爲生死惑亂無畏、九には安住大乘悉能示現諸乘無畏、十には隨化衆生普爲應現不斷菩薩願行無畏なり。此一門竟る。

(五九)次に、菩薩四種の無畏に對して、其同異を辨ず。四無畏の義は、前に廣く說くが如し。

【六〇】淨法聚第百一段に三乘共地の義を明すに三門の別あり。一に釋名の辨相。【大品經】　正智論第七十五。

一には總持說法無畏、二には知法藥及び知衆生根欲性心說法無畏、三には善能問答說法無畏、四には能斷物疑說法無畏なり。十が中の第一は、即ち是れ四が中の第一、第三なり。十が中の第二は、即ち是れ四が中の第四無畏なり。十が中の第三、第七、第九は、即ち是れ四が中の第三無畏なり。法藥を知るが故に、餘は同じからず。無畏是の如し。

三乘共地の義に三門分別あり。一には名を釋し相を辨ず。二には小に約して大を論ず。三には菩薩行の通別を辨明す。

【六〇】三乘共地は、『大品經』燈炷品に說くが如し。一切の賢聖の住處を地と名く。地別不同にして、一門に十を說く。三乘地を說いて、共して此十と爲すは、共十地と名く。菩薩獨法の十地に別せんが爲の故に、共と云ふなり。『十名は是れ何ん。』『一には乾慧地、二には性地、三には八人地、四には見地、五には薄地、六には離欲地、七には已作地、八には辟支佛地、九には菩薩地、十には佛地なり。』此十の中に於て、得名に二有り。乘別に三を分ち、因果を六と爲し、地別に十を說く。得名の二とは、前の七種は法に據つて名を彰し、後の三種は人に就いて稱を立つ。互に從つて皆直に得。立名の不同を以ての故に爾り。乘別の三とは、初の七は小乘、次の一は中乘、後の二は大乘なり。因果の六とは、初の七は是れ共小乘の因果、次の一は是れ共中乘の因果、後の二は是れ共大乘の因果なり。地別の十とは、名は上に列するが如し。乾慧と言ふは、謂はく、聲聞の中の五停心觀、總別念處なり。此位の中に於て、精進持戒の行を勤修し、或は不淨を觀じ、或は慈悲を修し、或は

因緣を觀じ、或は界を分別し、或は數息を爲し、或は復念佛三昧を修習す。四念處に於て總別して觀察す。總別の相は後の道品の中に、具に廣く分別す。此等は皆是れ假總の觀行なり。智慧有りと雖も、未だ定水を得ざるが故に、乾慧と云ふ。又此事觀未だ理水を得ざれば、亦乾慧と名く。未だ四諦十六行を觀ぜざるが故に。性地と言ふは、論に言はく「煗より世第一法に至つて、禪に依つて四眞諦觀を修習して、聖人の性を成ずるが故に、性地と云ふ」と。『何等の禪に依るや。』『謂はく、四根本、未來、中間なり。』八人地とは、論に言はく、「苦忍より道比忍に至つて、具に八忍を修するを、八人地と名く」と。見地と言ふは、論に自ら釋して言はく「初めて聖果を得。謂はく、須陀洹の道比智心、理を見ること周く盡すが故に、見地と云ふ」と。問うて曰はく、『何が故に見修無學三道の中に、須陀洹向を、名けて見道と爲し、此十地の中に、須陀洹果を、名けて見地と爲すや。』釋して言はく、『見の義に共に二種有り。一には推求を見と名く。多く諸忍に在り。二には明白を見と名く。多くは諸智に在り。須陀向の中に推求して義足るが故に、三道の中に、名けて見道と爲し、須陀洹果の中には、明白方に具するを、說いて見地と爲す。各一義に據り、相乖背せず。』薄地と言ふは、論に自ら釋して言はく「或は須陀洹、或は斯陀含、能く欲結を薄くするが故に薄地と名く」と。須陀と言ふは、欲界の九品の修道の惑の中に、一品を斷ずるより乃ち第六無礙道に至る來は、是れ其進向の須陀洹果なり。故に須陀と名く。斯陀含とは、六品を斷ずるより乃ち第九無礙道に至る來は、通じて斯陀と名く。第六品を斷ずる

は、守果の斯陀なり。第七品を斷じてより乃ち第九無礙道に至る來は、進向の斯陀なり。離欲地とは、謂はく、阿那含なり。欲界の第九品の結を斷ずるより乃ち那含金剛三昧に至るを、通じて那含と名く。欲界の欲を離るるは、離欲地と名く。此人も亦能く上の煩惱を斷ず。始に從つて言を爲し、且く離欲と云ふ。已作地とは、謂はく、羅漢果なり。盡智、無生智を成就するが故に、名けて已作と爲す。盡智と言ふは、現に諸漏を盡す。無生智とは、保つて更に起さず。辟支地とは、緣覺の人の中に、因より果に至つて、通じて辟支と名く。辟支は胡語にして、此には方に翻譯して因緣覺と名く。現の事緣に藉つて覺悟を得、他教を假らざれば、因緣覺と名く。又十二因緣の法の中に於て、覺悟を得るも、亦緣覺と名く。菩薩地とは、初發心より乃ち法雲に至る。菩薩は胡語にして、此には方に翻譯して道衆生と名く。具に自利利他の道を修すれば、道衆生と名く、又復此人解會の中に、道を共所會に從へて、道衆生と名く。佛地と言ふは、金剛心の後種智の德備り、法性を覺窮するを、名けて佛地と爲す。問うて曰はく、『何が故に小乘には七を分ち、中乘を一と爲し、大乘には二を說くや。』釋して言はく、『此等は互に從へて指得。但今は且く離合の法門に據るが故に、此說を爲す。聲聞人の行は麁にして別ち易きを以ての故に、分つて七と爲し、緣覺の人は一たび無漏に入り、果に至つて乃ち出で、異相分ち難きが故に、合して一と爲し、大乘法の中には、果德高く出でて特り衆聖に異り、理は須く別つて樹つべきが故に、分つて二と爲す。蓋し乃ち且く一門に據つて、說いて言ふのみ。若し餘門に入れば、或は

【涅槃經】第三十五迦葉菩薩品。

【六二】第二に小乘に約して大乘を論ず。

【龍樹の等】大智論第七十五。

大乘を分つて中小を合す。『地經』に說くが如し。聲聞法行、緣覺法行、菩薩法行、如來法行なり。或は小乘を分つて中小を合す。『涅槃經』の如し。彼恒河の中の七人是なり。彼は小乘を分つて、之を以て五と爲す。始め住人より乃ち第七に至る。水陸俱行とは、辟支菩薩及與び如來を、同じく皆說いて水陸俱行と爲す。此の如く離合は經の中には大多し。具に論ずべからず。此一門竟る。

(六二)次に第二門に、小に約して大を論ず。龍樹の說くが如し。聲聞の乾慧は、菩薩の中に於て初發心と名け、種性已前の善趣の人は、始め菩提を求むるを、初發心と名く。聲聞の性地は、菩薩の中に於て、柔順忍と名け、種性、解行の出道に隨順するを、柔順忍と名く。聲聞の八人は、菩薩の中に於て、無生忍と名け、菩薩の位に入る、此を初地と名け、始め入地の心を、無生忍と爲す。『仁王』『地經論』等に、七地已上を方に無生と名くるに同じからず。聲聞の見地は、菩薩の中に於て、阿毘跋致と名く。此れ乃ち初地の正住已後なり。乃ち地滿安住不退に至るを、阿毘跋致と名く。聲聞の薄地は、菩薩の中に於て、阿毘跋を過ぎて、諸の煩惱を斷じて、餘氣も亦薄し。此れ二地より乃ち七地に至る。道を修して障を剪るを、斷煩惱と名く。聲聞の離欲は、菩薩の中に於て、欲の因緣を離れ。五神通を得。此れ八地より乃ち十地に至る。愛佛の心斷ずるを、名けて離欲と爲す。佛國土を淨め、神變自在にして、衆生の心を知つて如應に說法するを、五通を得ると名く。聲聞の已作は、大乘の中に於て、名けて佛地と爲す。斯れ乃ち論主、小が中の七地の差別を解するに因つて、

【六二】第三に菩薩行の通別を明す。

【大品】大智論第七十五。

【龍樹も等】同論第七十五。

乘じて以て大乘の位分を類顯す。前の七が中に、已に大乘を含むに非ず。若し前の七が中に、已に大乘を含まば、何ぞ後に在つて、更に菩薩及與佛地を說くを須ひんや。人惑斯に在り。最も須く識知すべし。此二門竟る。

(六二)次に、菩薩行の通別を明す。別しては則ち菩薩は、唯第九を行ず。是故に第九を菩薩地と名く。通じては則ち十地の菩薩は皆行ず。故に『大品』に云はく、「菩薩は應當に具に十地を行ずべし。始め乾慧より乃ち佛地に至る」と。問うて曰はく、『菩薩後の二地を行ずる義は、則ち知るべし。何の義を以ての故に、前の八地を行ずるや。』『釋するに兩義有り。一には自行に就て以て論ず。自の所行の中に、麁近の者は、相、二乘に同じ。故に通行と曰ふ。二には外化に就て、以て釋す。衆生を化せんが爲の故に、之を行ずることを現ず。故に『天女』に云はく、「聲聞の法を以て衆生を化するが故に、我聲聞と爲り、因緣の法を以て衆生を化するが故に、我辟支と爲る」と。『法華』にも亦云はく、「衆生の小を樂つて大智を畏るるを知る。是故に菩薩は聲聞、緣覺と作る」と。龍樹も亦云はく、「文殊は過去七十億に、變じて辟支佛と作り、衆生を敎化す」と。且く過去に辟支佛と作ると言ふ。理實には、過去に亦聲聞と作るなり。三乘共の地之を辨ずること略爾なり。

大乘義章卷第十四

【一】淨法聚第百二段に十智の義を明すに八門の分別ある中、先づ第一に釋名辨相。初に釋名。

【成實法】論第十九

大乘義章 卷第十五

遠法師撰す

淨法聚因法の中、此卷に九門有り。十智の義。十一智の義。十一淨の義。十二頭陀の義。十二巧方便の義。十三住の義。十四離垢業の義。離隱六方離同惡友攝四善友の義。十四化心の義。

十智の義に八門分別あり。名を釋し相を辨ず一。體性二。同異相攝三。境を辨ず四。處に就ての分別五。諸智の相緣六。諸根の相應七。境修智を辨ず八。

第一門の中、先に其名を釋し、後に其相を辨ず。言ふ所の智とは、論釋不同なり。『毘曇』の如きに依らば、決斷を智と名く。諸忍に異るが故に。成實法の中には、無著を智と名く。相識に異るが故に。大乘には俱に有り。智別不同にして、一門に十を說く。『十名は是れ何ん。』『一には是れ苦智、二には是れ集智、三には是れ滅智、四には是れ道智、五には是れ法智、六には是れ比智、七には是れ盡智、八には無生智、九には是れ等智、十には他心智なり。』此十の中に就て、初の五、後の一は、境に從つて名と爲し、等智の一種は境に約して稱を立て、比智は其方便に從つて目と爲し、盡無生智は能彰に就いて號く。逼惱を苦と名け、聚積を集と稱し、寂泊を滅と名け、虛通を道と曰ふ。斯を照すの解を、名けて苦智乃至道智と爲す。法智と言ふは、亦は現智と名く。軌則を法と名く。又論に釋するが如く、自體を法と名く。初めて法を知るが故に、名けて法智と爲し、現法を知るを

【次に等】次に十智の相を辨明す。一に苦等の四智の相に就て。

以ての故に、現智と名く。比智と言ふは、前に准じて後を度る、之を目けて比と爲し、比に因つて智を得るが故に、比智と云ふ。又復即ち此比度の解を、亦比智と名く。盡智と言ふは、無學の聖慧能く諸漏を盡すが故に、盡智と名く。無生智とは、若し『成實』に依らば、無學の聖慧能く當苦をして、永く更に生ぜざらしむるを、無生智と名く。大乘も亦爾なり。毘曇法の中にも、亦此義有り。但此に就かずして、無生智を說く。彼宗の中に於て、利根の羅漢が所斷の結に隨つて、保つて更に生ぜざるを、無生智と名く。等智と言ふは、世俗の慧等しく諸法を知るが故に、等智と名く。他心智とは、己に非ざるの慮を、稱して他心と曰ひ、斯を照すの解を、他心智と名く。理實には亦他の想受等を知る。心は是れ主なるが故に、偏に他心と云ふ。又想受等を通じて心と名くるが故に。此一門竟る。次に其相を辨ず。先に苦集滅道の四智を論ず。宗別不同にして、所說各異なり。若し『毘曇』に依らば、有漏の果は苦と無常と、空と無我との四義實に通ずと知るを、名けて苦智と爲し、有漏の因は因集有緣の四義實に通ずと知るを、名けて集智と爲し、無漏の果は盡止妙出の四義實に通ずと知るを、名けて滅智と爲し、無漏の因は道如迹乘の四義實に通ずと知るを、名けて道智と爲す。若し『成實』に依らば、四諦の名用は虛假無性の空と了知するを、名けて苦智乃至道智と爲す。大乘法の中に、止有り、觀有り。若し止門に入らば、四眞諦に於て一相を收めず。故に『地持』に云はく、「身等に於て妄想して苦を觀じ、若し妄に集を觀せざれば、亦因に於て滅の妄想を起さず。得因に於て道の妄想を起さず」と。

【涅槃】第十三聖行品。
【涅槃】第十三。
【涅槃】第七如來性品。
【涅槃】第十三。

亦復一切の非性を取らず。若し觀門に入れば、種種悉く知る。中に於て、所說開合不定なり。如し苦の中に就かば、或は總じて一と爲し、或は分つて二と爲す。『地持』に說くが如し「聲聞の性を知り、及び無量處方便の法を知ると離言の性を知るは、猶是れ眞諦なり」と。故に『涅槃』に云はく「菩薩の人は苦は無苦なりと解して而も眞諦有り」と。無量方便は、猶是れ世諦たり。故に『涅槃』に云はく「此苦を分別するに、無量の相有り。是れ上苦と名く」と。或は分つて三と爲す。『涅槃』に說くが如し。謂ゆる、苦を知り、諦を知り、實を知るなり。三苦及び八苦の相を了知するを、名けて知苦と爲し、彼苦法の因緣の有無を知るを、名けて知諦と爲し、苦の實性を知るを、知苦實と名く。此實は即ち是れ如來の藏なり」と。故に『勝鬘』に云はく「聖諦の處に於て如來藏を說く」と。亦此れ法身なり。故に『涅槃』に云はく、「如來祕藏の法身を知らざる、是を名けて苦と爲し、聖諦と名けず。若し如來常住の法身を知らば、苦聖諦と名く。此を苦實と名け、以て諦と爲すなり」と。亦是れ如來の虛空佛性なり。故に『涅槃』に云はく「如來は苦に非ず、諦に非ず是れ實なり。虛空、佛性も亦復是の如し」と。凡佛同體にして、佛に據つて之を望むれば、本より已來淸淨無染なり。須く更に滅すべからず。是故に苦は實に、即ち是れ如來なり。凡に據つて之を望むれば、現に惑染と爲せども、後顯の時の淨德の與に本と爲る。是故に此實を名けて佛性と爲す。體、相を離るるに就くが故に、復空と名く。菩薩は此に於て皆如實に知る。或は分つて五と爲す。一には苦事を知る。苦とは、實に苦にして

【法智比智は等】二に法智比智の相を辨ず。

樂ならしむべからず。二には虚假を知る。假に四重有り。一には因和合假、別を攬つて總を成ず。二には法和合假、苦、無常等、同じく體相成ず。三には妄相虚假、幻の如く、化の如し。四には妄想虚假、夢の所見の如し。但心に從つて現じ、心外に法無し。此は是れ第二なり。三には苦空を知る。空に五種有り。一には苦法を知る。我我所に非ざるが故に名けて空と爲す。二には因和合の中の無性を空と名け、三には法和合の中の無性を空と名け、四には妄想の法無相を空と名く。陽炎の水の近く見れば全く無きが如し。五には妄想の法無實なるを空と名く。夢の所見の如く、寤に於て全く無し。此は是れ第三なり。四には苦實を知る。謂く、如來藏なり。中に於て二有り。一には如實空、本より已來一切の相を離れ、一切の性を離る。二には如實不空、本より已來無量の過恒沙の法を具足す。此義は前の四諦章の中に、具に廣く分別するが如し。此は是れ第四なり。五には苦の用を知る。如來藏は不染にして染し、生死を緣起すと知る。或は分つて十と爲す。『地經』に說くが如し。始め世諦より乃ち第十如來智諦に至る。廣くは則ち無量なり。菩薩此に於て悉く如實に知るを、名けて苦智と爲す。苦を知ること既に然なり。餘諦類して爾なり。

法智比智は宗別不同にして、所說も亦異なり。毘曇法の中には、時は通じ、處は別なり。並に三世の苦集滅道を知るが故に、時通と曰ひ、處に上下を分つを、名けて處別と爲す。法智は唯欲界の法を知り、比智は唯上二界の法を知る。問うて曰はく、『何が故に欲界の法を知るを、偏に法智と名け、上界の法を知るを、偏に比智と名くるや。』『毘婆沙』に

云はく「初めて聖道に入るは、必ず欲界に在り」と。欲界の苦に於て、二の現見有り。一には知苦現見、二には知輕重現見なり。此二現を具するが故に、現智と名く。上界の苦に於ては、但一種のみ有り。知苦現見なり。輕重を知らざるが故に、現と名けず。之を說いて比と爲す。故に彼立喩は二の擔物の如し。一をば則ち自ら持し、二は他をして持せしむ。自持に於ては、二の現知有り。一には是物を知り、二には輕重を知る。他持に於ては但是物を知つて、輕重を知らず。欲界の苦を知るは、自ら物を持つが如きが故に、現知と名け、上界の苦を知るは、他の物を持つが如く、一の現知を少くが故に、現と名けず。但比と稱することを得。知苦既に爾なり。集等も亦然なり。』若し『成實』に依らば、義別に二有り。第一には時處に約就して、法比の二智を分別す。處は通、時は別なり。並に三界に通ずるを、名けて處通と爲し、法智唯現在の法を知り、比智唯過未の法を知るを、說いて時別と爲す。『何が故に法智は唯現在を知るや。』現有の法體は現知し易きが故なり。『何が故に比智は偏に過未を知るや。』『過未の法は現に其體無く、現見すべきこと難し。要らず現在に依つて、比度して知るが故なり。』二には法に約して分別す。時處俱に通ず。現法の中に於て、隨つて一法の虛假無性を觀じて、三世一切の諸法の虛假無性を比知するを、悉く名けて比と爲し、三世一切の法空を現見するを、同じく名けて現と爲す。前の門の中には、先に現、後に比なり。此後の門の中には、先に比、後に現なり。猶象の人の先づ象跡を觀て、後に象の身を見るが如し。跡を觀るは比の如く、身を見るは現の如し。大乘

法の中には、義別に三際あり。一には修始に據る。法智の一種は、時處倶に別なり。唯現在同處の法のみを知るが故に。比智の一種は、時處倶に通ず。一切時、一切處の法に於て比度して知るが故に。故に彼『相續解脫經』に言はく、「現前の得相は、現在世の苦、無常等を知り、依現の得相は、餘處及び他世の事中の苦、無常等を比知す」と。現前の得相は猶是れ現智なり。依現の得相は、猶是れ比智なり。良に始修は現智成じ難きを以ての故に、唯現在世の中の同處の法のみを知るなり。二には修次に據る。法智の一種は、時處不定なり。一切時、一切處の法に於て、前に在つて知る者を、即ち名けて現と爲す。此を以て餘の三界、三世の一切諸法を類するを、悉く名けて比と爲す。修轉勝なるを以て、一切時、一切處の法に於て、能く現知するが故に。三には修成に據る。唯一の現智は通じて三世一切、一切處の法を知る。更に比知無し。故に『地持』に云はく、「十方の諸佛は、一切の生、一切の諸法に於て、現知見覺す」と。問うて曰はく、「佛に至つて、若し比智無くんば、佛智應に少くべし。」釋して言はく、『比度して方に能く法を知るは、此智微劣なり。少くとも復何ぞ患へん。又佛は比知の法を假らずと雖も、而も諸法の彼此相似を知る。此の如きの比智は、諸佛最も多し。故に智少くるにあらず。』問うて曰はく、『法、比は前の四に異らず。何んが勞しく別說する。』釋して言はく、『義を辨ずるに、二種の門有り。一には攝相門、前の四種を擧げて、即ち法比を攝す。須く更に立つべからず。二には分義門、前の四種は、境に約して智を分つ。法と比とは、時に約し、處に約し、修に約して智

【言ふ所の等】三に盡智、無生智の相を釋す。

を別つ。前の義と異なるが故に、須く別說すべし。『成實』は時に約し、『毘曇』は處に約し、大乘は修に約す。一切の法に於て、先に觀ずるを現と名け、後に知るを比と稱す。言ふ所の盡智、無生智とは、『毘曇』の如きに依らば、前の六智を用て、之を以て體と爲す。若し苦智を以て非想の結を斷じ、彼惑盡き已れば、即ち彼智を說いて盡無生と爲す。集滅道智も類して亦同じく然なり。若し欲界の滅道の二諦を觀じて、非想の惑を斷ずれば、即ち滅道の法智を用て體と爲す。若し上界の苦集滅道を觀じて、非想の惑を斷ずれば、即ち四比を用て、之を以て體と爲す。此前の諸智無學果に至つて、鈍根の人に在りては、唯盡智と名く。此人保ち已つて當結永く更に生ぜざること能はざれば、無生智に非ず。利根の人は、初を盡智と名け、後を無生と名くることを得。若し出觀の後重ねて更に中に入れば、則ち無學等見の智と名け、盡無生に非ず。十智の中に於て、前の六に收むるが故に。若し『成實』に依らば、彼四諦の現智を用て體と爲す。現に諦空を觀じて諸結を盡すが故に。彼宗の中に於て、此智は但伏して永く斷ずること能はず。是故に說いて盡無生と爲さず。彼盡無生は、體同じく義別なり。無學聖智の能く有因を盡すを、即ち盡智と名け、苦をして生ぜざらしむるを、即ち無生と名く。大乘法の中には、亦四諦の現智を用て體と爲す。現に諦實を見て諸結を盡すが故に、此は伏して永からず。『成實』と同じ。同中の義分も亦『成實』に似る。問うて曰はく、『盡智及び無生智は、前の六に異らず。何んが須く別說すべき。』『果德を分つて前の因に異するが爲の故に。前の四門の佛果の德

【等智と等】四に等智の相を明す。

【他心智とは等】五に他心智の相を明す。

に至るを、名けて佛眼と爲すが如し。此も亦是の如し。』等智と言ふは、成實法の中には、名字智と名く。聖に在つて、凡に非ず。聖人、其名用の解を以て、世俗假名の法を知るを、名字智と名く。毘曇法の中には、凡聖を簡ばず。有漏の慧を以て等しく諸法を知るを、名けて等智と爲す。大乘法の中には、義に通別有り。通は『毘曇』に說くが如し。故に『涅槃』に云はく、「一切衆生に三の等智有り」と。別しては則ち法の幻有を知るを、等と名く。『此れ何等をか知る。』『解脫するに、通有り。通は則ち能く二諦の諸法を知る。問うて曰はく、『等智は云何が能く第一義諦を知るや。』『證することを能はずと雖も、解すること能はざるには非ず。故に之を知ることを得。』別は則ち唯世俗等諦を知る。問うて曰はく、『等智は二諦俱に緣ず。云何が說いて、唯等諦を知ると言ふや。』釋して言はく、『等智は世俗の法に於ては、緣じて能く了するが故に、說いて知と爲し、第一義に於ては緣じて了せざるが故に、知と名けず。』他心智とは、『成實』の如きに依らば、聖人其名用の解を以て他心を了知するを、他心智と名く。凡夫の人は他心を知ると雖も、是れ他心通にして、他心智に非ず。取著するを以ての故に。毘曇法の中には、凡聖を簡ばず。但他心を知るを、悉く皆名けて他心智と爲すなり。大乘法の中には、通は『毘曇』の如く、別は『成實』の如し。問うて曰はく、『此智は唯他心を知るや、亦所緣を知るや。』『論說不同なり。毘曇法の中には、唯他心を知つて所緣を知らず。若し所緣を知らば、名けて他心智と爲すことを得ざるなり。成實法の中には、通じて所緣を知る。故に『成實』に云は

【二】第二に十智の體性を辨ずるに五あり、一に有漏無漏の分別に就て。

く「通じて知るに何の咎あらん」と。』『若し所緣を知らば、何が故に偏に他心智と名くるや。』「彼解釋に依るに、知に兼正有り。正しくは他心を知り、兼ねては所緣を知る。正に從へて稱を立てて、他心智と名く。大乘法の中には、文に定判無し。多くは『成實』に同じ。」

（三）第二門の中に、其體性を辨ず。中に於て五有り。第一には有漏無漏の分別、二には三性の分別、三には見智慧忍の四義分別、四には學無學非學非無學の三義分別、五には見斷修斷無斷の分別なり。漏無漏とは、初に四諦の智なり。義釋不定なり。『云何が不定なる。』『四諦の智に、汎く兩門有り。一には獨法、但諦を觀ぜしめ、淺深を問ふこと莫く、有漏無漏一切通じて皆四諦智と名く。此門の中に於て漏無漏に通ず。二には共法、餘に約對して解す。共して十智と爲し、或は復說いて十一智等と爲す。此門の中に於て、無漏を分取して四諦智と爲す。其有漏をば判じて等智に屬し、四智に收めず。法智比智は、義に亦兩門あり。一には獨法、一切の觀行を通じて法比と爲す。此門の中に於ては、法比の兩智は漏無漏に通ず。二には共法、餘に約對して解す。共して十智と爲す。此門の中に於て、無漏を分取して法比智と爲す。其有漏をば判じて等智に屬す。盡無生智は、一向に無漏なり。等智の一種は、『毘曇』には有漏、成實法の中には、名用の無漏なり。是れ觀空斷結の無漏に非ず。大乘法の中には、漏無漏に通ず。事を知るは有漏、法の幻有を知るは、是れ其無漏なり。他心智とは、成實法の中には、等智と同じく名用の無漏なり。毘曇法の中

【次に等】二に三性分別。

【次に等】三に見智慧の四義分別に就いて。

には、漏無漏に通ず。他の衆生の有漏の心を知るは、是れ其有漏なり。等智の攝なるが故に。他の衆生の無漏の心を知る者を、名けて無漏と爲す。是れ其道智、法智、比智の三智の攝なるが故に。問うて曰はく『若し此れ前の九智の攝ならば、何ぞ勞しく別說する。』『解するに三義有り。一には勝の故に別して立つ。離欲の人の所得なるを以ての故に。盡無生の如し。二には通の故に別して立つ。前の九は漏無漏の隔別有り。此智は合通す。三には要の故に別して立つ。他心を了知するは、人を化するの要なるが故に。此一門覺る。次に三性に就いて、十智を分別す。成實法の中には、十智は唯善、毘曇法の中には、前の八は唯善なり。等智の一種は、義三性に通ず。他心の一種は、修得は是れ善、報得は無記なり。此二門覺る。次に見智慧忍に就いて分別す。推求を見と名け、決斷を智と稱し、觀緣を慧と名け、安法を忍と曰ふ。先に見と非見とに就いて分別す。『毘曇』の如きに依らば、他心智とは一向に是れ見なり。推求の性なるが故に。盡無生智は一向に非見なり。息求の心なるが故に。餘の七智は見非見に通ず。彼四諦智、法智、比智を盡無生に攝するは一向に非見、餘は悉く是れ見なり。等智の中の一切意地の善相應の慧は、皆悉く是れ見なり。推求を以ての故に。五邪見の慧も亦皆是れ見なり。其捷疾推求の性なるを以ての故に。意地の鈍使相應の慧は一切非見なり。捷疾ならざるが故に。彼貪使相應の慧の如きは、二使覆するが故に、所以に非見なり。謂はく、貪及與び相應無明なり。瞋慢癡等は類して亦同じく爾なり。獨頭無明相應の慧は、二使無しと雖も、一の無明使極めて深く覆ふが故に、所以に

【次に等】四に學無學非學非無學の三義に就いて分別す。

非見なり。一切の五識相應の慧は、悉く皆非見なり。推求に非ざるが故に。不隱沒の慧も亦皆非見なり。捷疾ならざるが故に。若し『成實』に依らば、一切の十智皆通じて見と名く。境を照すを以ての故に。次に智と非智とに就いて分別す。『毘曇』の如きに依らば、無漏慧の中の八忍は智に非ず。疑の與に得るも俱に決斷せざるが故に。餘は皆是れ智なり。有漏慧の中の一切の五識相應の慧を、皆名けて智と爲す。決斷するを以ての故に。意識地の中の善相應の慧も亦皆是れ智なり。染汙法の中、五見は是れ智なり。邪決斷の故に。餘は皆智に非ず。決斷せざるが故に。成實法の中には、一切の意地の無漏の聖慧及び隨名用照有の慧は、悉く皆是れ智なり。著を離るるを以ての故に。一切の凡夫取性の解は、悉く皆智に非ず。取著するを以ての故に。大乘法の中には、一切の無漏は通じて皆是れ智なり。有漏の法の中、有決斷の者は亦皆智と名く。決せざる者は非なり。次に忍と非忍とに就いて分別す。毘曇法の中、八忍は是れ忍、餘は悉く非なり。成實法の中、一切の十智は通じて皆忍と名く。心理に安んずるが故に。大乘も亦爾なり。五忍等の如し。次に慧と非慧とに就いて分別す。一切の十智通じて皆是れ慧なり。是れ通數なるが故に。此三門竟る。次に學等の三義に就いて分別す。『毘曇』の如きに依らば、初の四諦智、法智、比智の此六は、學と無學とに通ず。盡無生智は一向に無學なり。等智は一向に非學、非無學なり。果に向ふに非ざるが故に、名けて學と爲さず。果を得るに非ざるが故に、無學と名けず。他心の一智は備に三義を含む。阿那含人の無漏の他心は、之を說いて學と爲す。是れ學人等見の

【次に等】五に見斷修斷無斷の三義に就いて分別す。

【三】第三に十智の同異相攝の義を明す。先づ異に就いて。

攝なるを以ての故に、學人の無礙解脱心の後の遊觀の無漏を、學等見と名く。阿羅漢の人の無漏の他心を、名けて無學と爲す。是れ其無學等見の攝なるが故に、阿羅漢の人の盡無生の後の遊觀の無漏を、無學等見と名く。有漏の他心は非學非無學なり。成實法の中には、初の四諦智、法智、比智は、之を說いて學と爲し、盡無生智を、名けて無學と爲す。等智、他心を、名けて非學非無學と爲すなり。若し大乘に依らば、因中の十智を通じて名けて學と爲す。菩薩は一切智を修學するが故に、果中の十智は、斯を無學と名く。成滿するを以ての故に。彼等智及び他心の中に於て、無記なる者有るを、說いて非學非無學と爲すなり。此一門竟る。次に見斷修斷無斷の三義に就いて分別す。見諦の所除を名けて見斷と爲し、修道の所離を名けて修斷と爲し、二道に遣らざるを名けて無斷と爲す。『毘曇』の如きに依らば、前の八智は一向に無斷、等智の一種は備に兩義有り。五邪見等は是れ其見斷、自餘の一切の有漏の等智は、悉く是れ修斷なり。中に於て若し染汙の者有らば、其體性を斷じ、不染汙の者は、其繫縛を斷ず。他心の一智は義亦兩兼なり。有漏の他心は是れ其修斷なり。繫縛を斷ずるが故に。無漏の他心は是れ其無斷なり。若し『成實』に依らば、十智皆是れ無漏の法なるが故に、斯を無斷と名く。無斷を以ての故に、滅盡定を得。及び無餘涅槃を得るの時、方に始めて之を滅す。大乘法の中には、備に三義有り。若し是妄想緣心を體と爲せば、通じて其見斷及與び修斷なり。眞心を體と爲せば、一切無斷なり。

(三)第三門の中、其同異相攝の義を明す。先に其異を論ず。初の四諦智及與び等智の此五を

【四次に等】二に共同異を辨ず。

相望するに、一向に別體にして相通ずる理無し。苦等の四智は境界別なるが故に、相通ずることを得ず。等智を前の漏無漏の別に望むるに、亦相通ぜず。法智、比智の二種を相望するに、亦一向に別にして相通ずることを得ず。『毘曇』の如きに依らば、上下別なるが故に、相通ずることを得ず。法智は下を縁じ、比智は上を縁ず。若し『成實』に依らば、時別に隨ふが故に、相通ずることを得ず。法智は現を縁じ、比智は過未を縁ず。盡無生智及び他心智は、『毘曇』の如きに依らば、此三相望するに、亦一向に別にして相通ずることを得ず。彼宗の所說は現に諸の過を盡すを、名けて盡智と爲し、當過を保ち已つて永く更に生ぜざるを、無生智と名く。兩義全く別なるが故に、相通ぜず。此二は是れ其息求の心なり。他心智は是れ推求の性なるが故に、通ずることを得ず。異相是の如し。（此二門竟る）

次に共同を辨ず。法智、比智は四諦智と同體にして義分す。『毘曇』の如きに依らば、前の四諦智の欲界に在る者を、名けて法智と爲し、上二界に在るを、名けて比智と爲す。若し『成實』に依らば、現在を知る者を、亦法智と爲し、過未を知る者を、亦比智と爲す。盡無生智は前の六智と同體にして義分す。彼前の六智無學果に至るを、盡無生と名く。『成實』の如きに依らば、盡無生智は同體にして義分す。無學の聖人能く惑因を盡すを、名けて盡智と爲し、能く當果をして永く更に起らざらしむるを、無生智と名く。大乘も亦爾なり。他心智は彼道智、法智、比智及與び等智と同體にして義分す。共有漏なる者は、彼等智と同體にして義分し、共無漏なる者は、彼道智、法智、比智と同體にして義分す。

法智品の無漏の他心を知るを、即ち法智と名け、比智品の無漏の他心を知るを、即ち比智と名け、前の二品を知るを、通じて道智と名く。問うて曰はく、『彼無漏の他心を知るを、即ち道智、法智、比智と名け、彼有漏の他心を知る者は、何が故に苦集智と名けざるや。』釋して言はく、『有漏の他心智は有漏の事を知り、苦集の二智は有漏の理を知る。事は淺く、理は深し。是故に有漏の他心を知ると雖も、苦集智に非ず。無漏の他心は彼道如跡乘等の理を知る。淺深[illegible]同じ。是故に彼無漏の他心を知るを、即ち道智と名く。』問うて曰はく、『何が故に有漏の他心は苦集よりも[illegible]にして、無漏の他心は道よりも[illegible]ならざる。』釋して言はく、『有漏の他心の名は、事を緣じて生ず。是故に苦集の理よりも[illegible]なり。無漏の他心は、理を緣じて起る。是故に彼道如等の理と[illegible]細相似す。』問うて曰はく、『無漏の他心智は、當に他の無漏心の事を知るべしと爲んや、當に道如等の理を知るべしと爲んや。』釋して言はく、『方便は道如跡乘等の理を觀じ、究竟終成して他心の事を知る。』問うて曰はく、『論に「十六行は但是れ聞を除くと雖も、而も無漏に非ず」と說く。他心の事を知るは、旣に無漏に非ず。云何が道智と同體なることを得ん。』釋して言はく、『始に從つて、說いて道智と爲す。先に道の理を觀じ、後に道の上に就いて他心を測知す。剋論終成して道に近く道に似るを、名けて道智と爲す。正しき道の體には非ず。』問うて曰はく、『若し無漏の他心をして理觀の後に起らしめ、始の方便に從つて道智と名くることを得ば、有漏の他心は何が故に然らざる。』釋して言はく、『無漏の他心智は、必ず無漏の

【次に等】三に十智の相攝を辨ず。

道觀に從つて後に起るが故に、方便に從つて道智と名くることを得。有漏の他心は、必要ず苦集の觀に從つて起らず。是が爲に不同なり。『何が故に然るや』。『無漏法の中の道如等の理は、煩等より來常に學し、觀察す。久觀純熟して心を凝すれば、即ち見る。無漏の他心は、那含果の後方に始めて學觀す。始觀は成じ難し。故に先に道を觀じ、上に就いて心を測る。有漏法の中の苦集の理は、煩等已上方に始めて學觀す。有漏の他心は本來數見れば、苦集二智の開導を假つて、方に始めて能く見るにあらず。故に初に從つて苦集智と爲さず。同の義是の如し。此二門竟る。次に相攝を辨ず。『大智論』に說くが如し。苦、集智は彼法智、比智及び盡智無生の四智の少分を攝す。欲界の苦を觀じて彼法智を攝し、上界の苦を觀じて彼比智を攝し、上界の苦を觀じて漏を盡す者は、即ち盡智及び無生智を攝總す。故に少分と言ふ。集智も亦爾なり。滅智も亦法智、比智及び盡無生の四智の少分を攝す。法比智を攝すること前と相似す。三界の滅を觀じて上界の結を斷じ、漏盡を證する者は、即ち盡智及び無生智を攝す。道智は彼法智、比智、盡無生智、他心の少分を攝す。法を攝し、比を攝し、盡無生を攝すること、滅智と同じ。他心を觀ずる中、無漏心の者は亦道智の收なるが故に、他心を攝す。法智、比智は四諦智、盡無生智、他心の少分を攝す。前に準じて知るべし。盡無生智は四諦智及與び法智、比智の少分を攝す。彼欲界の滅道二諦を觀じ、上界の結を斷じて漏盡を得るは、即ち法智を攝す。上の四諦を觀じ、結を斷じて盡を證するは、即ち比智を攝す。此等は即ち四諦智を攝するなり。他心智の中に

【四】第四に十智の境界を辨じ、次に智に約して論ず。一に境界を辨ず。

【次に等】二に智に約して論ず。

は、彼道智、法智、比智、等智の少分を攝す。無漏心を知るは、即ち道智、法智、比智を攝し、有漏心を知るは、即ち等智を攝す。等智は即ち他心の少分を攝す。相攝是の如し。

(四)第四門の中に、其境界を辨じ、後に智に約して論ず。境別に二有り。一には事、二には理なり。陰界入等は之を名けて事と爲し、理は則ち不定なり。『毘曇』の如きに依らば、十六聖行之を名けて理と爲す。十六聖行は廣くは上に辨ずるが如し。苦の下に四有り。謂はく、苦と無常と空と無我となり。集の下に四有り。因集有緣なり。滅の下に四有り。滅止妙出なり。道の下に四有り。道如迹乘なり。若し『成實』の說に依らば、一切法の因緣假有無性の空を、方に名けて理と爲す。大乘法の中には、因緣の有無を二諦の理と名け、非有非無如來藏性を一實の理と爲す。境別是の如し。此一門竟る。次に智に約して論ず。『毘曇』の如きに依らば、有漏の慧を以て彼苦下の四行の理を知るを、名けて苦智と爲し、彼集下の四行の理を知るを、名けて集智と爲し、彼滅下の四行の理を知るを、名けて滅智と爲し、彼道下の四行の理を知るを、名けて道智と爲す。無漏の慧を以て彼四諦の十六行の理を知るを、法比智と名け、無漏の慧を以て彼四諦の十四行の理を知るを、盡無生と名け、空無我を除く。『何が故に是の如くなる。』『盡無生智は是れ息求の心にして、等智に近く、深く空無我の理を察すること能はず。所以に之を除く。有漏の慧を以て他人の有漏の心事を知り、及び無漏の慧もて他人の無漏の心事を知るを、他心智と名け、有漏の慧を以て一切の法の若は理、若は事を知るを、名けて等智と爲し、煖等の四心、及び餘

【五】第五に處に就いて分別す。中に四、一に所依の處。

【雜心】第七。

の等智の諦理を緣ずる者を、名けて理を知ると爲し、餘は事を知ると名く。若し『成實』に依らば、無漏の慧を以て四諦の名用假有無性の空を了知するを、四諦智、法智、比智と名け、無漏の慧を以て、現に諦空を見るを、盡無生と名け、有の義を緣ぜず。聖人は其名用の解を以て他人の心を知るを、他心智と名け、名用の智を以て一切の事を知り、及び諦理を緣ずるを、名字智と名く。若し諸の凡夫の取性の心一切の法を緣ずれば、但想識と名けて、十智の收に非ず。若し大乘に依らば、聖人其無漏の聖慧を以て諦理を知るを、四諦智、法智、比智、盡無生智と名け、無漏の慧もて他心の事を知るを、他心智と名け、世俗智を以て一切の法幻化の有を緣ずるを、名けて等智と爲す。

(五)第五門の中、處に就いて分別す。處は、謂はく、欲界乃至非想なり。分別するに四有り。一には所依の處、二には所緣の處、三には起處を明し、四には成就の處なり。所依處とは、智は定に依つて生ず。『毘曇』の如きに依らば、初の四諦智及び比智并に盡無生は九地禪に依る。未來、中間、根本、四禪及び四空の中の下三空處なり。無漏の大王は邊地に居せず。是が爲に依らず。欲界の非想は、是れ其邊地なり。法智は唯未來、中間、根本、四禪に依る。無色は心微なれば、下を緣じて法智觀を爲すこと能はず。所以に依らず。欲界は前の如し。等智は遍く一切地の心に在り。他心は局つて根本、四禪に在り。餘は悉く依らず。故に『雜心』に云はく、「五通は四禪、根本に在つて餘地に非ず」と。離欲の人は方に他心を知る。是故に欲界未來に依らず。眷屬の定は支因具せず。通を起すに

【所縁の等】次に所縁の處を明す。

力無きが故に、中間を除く、夫れ他心を修するは、要ず先に色を觀じて、後に其心を測る。無色は他人の色を緣ぜざるが故に、亦心を知らず。是が爲に四無色定に依らず。若し『成實』に依らば、前の八智は幷に四禪及び三無色に依り、幷に欲界如電三昧に依る。彼四禪の法比智の中に於て遊觀の無漏は亦非想に依る。故に彼論に說かく「非想地の無漏心より、後滅盡定に入る」と。未來、中間は彼說に說かず。等及び他心は『毘曇』と同じ。大乘法の中には、前の八智は欲界定乃至非想に依る。諸佛菩薩は一切地の心皆如理實相と合するが故に。等智は前の如し。他心の一智は、始修の時は聲聞と同じく、唯四禪に在り。究竟終成は、一切地に在り。諸佛菩薩は一切地に在つて、皆能く衆生の心に了達するが故に。此二門竟る。所緣の處とは、『毘曇』の如きに依らば、初の四諦智及び等智は、通じて三界を緣じ、法智の一種は唯欲界を緣じ、比智の一種は上二界を緣ず。盡無生智は、義は則ち不定なり。若し滅道の法智を以て體と爲さば、欲界對治の法を緣ず。若し比智を用て體と爲さば、上二界の四眞諦の法を緣ず。他心の一智は人に隨つて不定なり。願智を得る者は、能く三界の心心數法を知り、願智を得ざる者は、四禪の中に於て何れの地に隨つて他心智を起すとも、唯自地及び下地の心を緣じて、上地を知らず。地度を以ての故に。若し『成實』に依らば、十智皆三界の法を緣ず。大乘法の中には、初の四諦智、盡無生智、等及び他心は、通じて三界を知る。法比の二智は、始は『毘曇』の如く、久修純熟は、通じて三界の一切處の法を知る。三界の中に於て、先に在つて觀ずる者を、即ち法智

【次に等】四に成處を論ず。

と名け、前を以て後を類するを、通じて比智と名く。此三門竟る。次に起處を明す。身に隨つて生を修するを、名けて起處と爲す。『毘曇』の如きに依らば、初の四諦智、比智、等智、盡無生智は一切地に起す。他心智は欲色の修起なり。法智は唯欲界に在つて修起す。成實法の中には、前の九智は一切地に起す。他心の一智は應に『毘曇』に同ずべし。大乘法の中には、前の九智は『成實』と同じく、他心の一智は、始は『毘曇』に同じ。究竟終成は一切地に起す。諸佛菩薩は身に隨つて、何の處にも、皆一切衆生の心を知るが故に。此四門竟る。

次に成處を論ず。所得失せざるを、名けて成處と爲す。『毘曇』の如きに依らば、前の六智は修得する所に隨つて、倶に退失せざるは、一切處に成ず。無漏は上に生じて下を失せざるが故に、退すれば則ち成ぜず。盡、無生智は身に隨つて成就す。更に生ぜざるが故に、他地に成ずること無し。等智の中、差別するに四有り。一には不善等智、唯欲界に成ず。上界に無きが故に。二には善等智、下に在つて上を成ず。上は下を成ぜず。若し上に生ずること有れば、則ち下を失するが故に。三には穢汚等智、一切地に於て未斷處に成ず。斷處には成ぜず。四には不隱沒無記等智、身に隨つて成就す。上に生じ下に生じて、悉く皆成ぜず。他心智の中、無漏の他心は但修得をして退失せざらしむるは、一切處に成ず。有漏の他心は、四禪已還は身に隨つて何處にても、下に在つて上を成ず。上は下を成ぜず。初禪に依つて發す所の他心の如きは、大梵已還は一切處に成じ、第二禪に依つて發す所の他心は、光音已下は一切處に成ず。餘は類して知るべし。成實大乘は一切處に於て、一

【六】第六に其諸智の相緣ずることを明す。

【七】第七に十智の根相應を明す。

切を成就す。彼には「上に生じて下を失せず」と說くが故に。

(六)第六には、其諸智の相緣ずることを明す。苦集の二智は各二智を緣じ、等智及び他心の中の有漏の智を緣ず。此二智は苦集の性なるを以ての故に。滅智の一種は、十智の中に於て、一切緣ぜず。無爲を緣ずるが故に。道智、法智、及與比智は、各九智を緣ず。彼は道を緣ずるが故に。等智を除却す。有漏の法なるが故に。法智は九を緣ず。比智を除却す。比智は九を緣ず。法智を除却す。界處別なるが故に。盡、無生智、他心、等智、此四種は、各十智を緣ず。『毘曇』是の如し。若し『成實』に依らば、苦集滅智は前と相似す。道智は八を緣ず。等と他心とを除く。彼は道に非ざるが故に。法智、比智、盡、無生智及び他心智は、齊しく十智を緣ず。智を緣ずること是の如し。

(七)第七門の中に、根相應を明す。同時に共に緣ず。是れ相應の義なり。中に於て、二十二根に約就して智相應を明す。二十二根は上に廣く辨ずるが如し。眼等の六根を男女根幷に及び命根に通じて、之を以て九と爲す。五受根及び信、進、念、定、慧根を加へて、合して十九と爲し、三無漏を加へて二十二と爲す。根別是の如し。次に智に約して論ず。『毘曇』の如きに依らば、初の四諦智、法智、比智は、十一根と相應す。謂ゆる、意根、喜、樂、捨根、信、進、念、定及び三無漏根なり。初二禪に在つては喜根と相應し、第三禪に在つては樂根と相應す。若し未來及び中間禪に依り、幷に及び四禪已上に攝すれば、捨根と相應す。一切地に在つて皆意根、信、進、念、定の五根と相應す。見道の中に在つては未知

【八】第八に修智の義を明す。先づ二修の不同に就て

相應し、修道の中に在つては知根と相應し、無學果に在つては無知相應す。此三位の中、慧數は餘の心法と相應す。智の體は是れ慧なり。是故に慧根相應を說かず。是意地は無漏の法なるを以ての故に、彼憂根と相應することを得ず。餘の非心の法も、同じく緣ずること能はず。是故に眼等の五根、男根、女根、命根と相應せず。盡無生智は九根と相應す。前の十一の中には、未知根、及與知根を除く。無學に在るが故に。他心智の中、是れ無漏なる者は十根と相應す。前の十一の中に、未知根を除く。見道位の中には、他人の心に了達すること能はざるが故に。『云何が無知と相應することを得る。』『彼他心智は彼盡と無生との二智に相應せずと雖も、無學等見の傍邊の心法と相應することを得。是故に亦無知相應と名く。』是れ有漏なる者は八根と相應す。前の十一の中に三無漏を除いて餘と相應す。等智の一種は十一と相應す。謂ゆる、意根、信、進、念、定及び五受根なり。成實法の中には、諸の心心の法前後に別生して、相應を說かず。大乘の所說は、多く『毘曇』に同じ。言ふ所の異とは、無漏の他心通じて見道に在り。菩薩は見に在つて、亦能く他人の心を了達するが故に。

(八)第八門の中に、修智の義を明す。『毘曇』の如きに依らば、要ず唯二有り。廣く分たば十有り。言ふ所の二とは、中に於て兩門あり。一には行修、得修に就て二を分つ。現在の修起を、名けて行修と爲す。現の所起に依つて、種類增明なり。未來に在つて現に彼法を成ずるを、名けて得修と爲す。『相狀は如何。』『苦諦の下に苦無常空無我等の四種の聖

【次に等】次に十修を期するに三あり。一に十修を列す。

行を具するが如く、現に一行を觀ずるを、名けて行修と爲し、未來の苦の下の四行增明なるを、亦得修と爲す。若し『成實』に依らば、但行修を立てて、彼得修を破す。故に彼『成實』九智品に云はく「未來未起は云何が得有らん。若し未來の業已に得有らば、一切の未來、未起の法は、皆應に得有るべし。何の障を以ての故に、得不得有らん」と。此は是れ初の門なり。二には得修、習修に就て二を分つ。先に曾て修得し、中間に退失し、後に還得る者を、名けて得修と爲す。人先に初禪定を得竟つて、後に欲を起して彼定を退失するが如し。後欲結を斷じて彼第九解脫道に至る時、先に失ふ所の者を、今還之を得、未だ現に入らずと雖も、而も得已に屬するを、說いて得修と爲す。是の如きの一切なり。現在世に於て方便修起するを、名けて習修と爲す。『成實論』の中には、但習修を立てて彼得修を破す。故に彼『成實』九智品に云はく「若し現に入らずんば、云何が得と名けん。人自ら我善く書を知るも、而も一字を成ぜずと言ふが如く、彼も亦是の如し。何んが此義有らん」と。二修の不同に此兩門有り。』次に廣く十を論ず。中に於て、略して三門を以て分別す。一には十修を列し、二には所修の心智の差別を明し、三には廣く修を明す。十修と言ふは、『毘曇』に說くが如し。一には身分修、見道の中の如く、現に苦諦を觀じ、未來に還つて苦の行に於て、增明して餘諦に及ばざるを、自分修と名く。餘も亦是の如し。二には增觀修、見道の中の如く、彼苦集滅比智の邊に於て、兼ねて等智を修するを、增觀修と名く。『是義云何。』『人の未來禪上地に依つて、見諦道に入るが如し。後苦集滅比智に至る時、

能く欲界及び未來禪の等智をして、增明せしむ。上智を修せず。乃至四禪も皆亦是の如し。唯自地及び下の等智を修して、而も上を修せず。』『何が故に唯此三比智の邊に、等智を修することを得る。』『凡夫は本來曾て等智に依つて、下の苦集を厭ひ、上の滅を欣求して、而も得ること能はず。後見道の三比智に入る時、上二界の迷諦の惑を斷じ盡して、彼所作に適ふが故に、能く彼等智をして增明ならしむ。』『何が故に彼道比智の邊に於て、等智を修せざる。』『凡夫は本來聖道を修せざるが故に、道起る時、等智を修せざればなり。』三には離欲修、欲結を離るるが如く、第九品の解脱道に至る時、初禪地の中の有漏の功德悉く皆之を得。是の如きの一切なり。四には同治修、人義を以て目く。論の中には名無し。『其義云何。』『欲界の中の修道の煩惱の如く、未來禪の中の漏、無漏の德の同じく能く治斷するを名けて同治と爲す。』『修相は云何。』『彼無漏の中に、四法智及與等智有り。此五種の中に趣かに一種を起して彼欲結を斷ずれば、餘は悉く得。障無きを以ての故に。』欲結是の如し。初禪には七を修す。二禪地の家の方便等智及び彼初禪、未來、中間の無漏の功德、齊しく能く治斷するを、名けて同治と爲す。彼無漏の中の滅道法智及び四比智、并に上の等智の此七種の中、趣かに一種を起して初禪の結を斷ずれば、餘は悉く得るを、同治修と名く。問うて曰はく、『初禪、未來、中間の無漏の功德、欲結を離るる時、應に先に得竟るべし。今云何が初禪の結を斷じ、方に始めて得と言ふや。』釋して言はく、『一切の下地の無漏能く上地の修道の惑を斷ずる者の下結を斷ずる時悉く皆未だ得ず、上結を斷ずる

時に方に始めて之を得るが故に、此說を爲す。欲界初禪同治既に然なり。餘地も類して爾なり。』『五には依本修、四法智を修して、上比智をして增明なることを得しむるを、依本修と名く。良に法智は是れ比智の本なるを以ての故に、法智を修すれば比智增明なり。六には乘上修、上の功德を修して、下をして增明ならしむるを、乘上修と名く。見修不同なれば、所修も亦異なり。』『異相は如何。』『見道の中には所依の禪に約し、及び下地に望めて、以て修の義を辨ず。斷處に望めず。前に說く所の如し。未來禪に依つて見諦道に入り、三界の一切の見惑を斷除するは、唯未來欲界の等智を修して上地を修せず。乃至四禪も類して亦同じく爾なり。修道の中には斷に約して修を辨じ、所依に約せず。未來に依つて無漏慧を發し、欲界及び初禪の惑を斷除するが如きは、初禪已下の功德增明なり。二禪の惑を斷ずるは、二禪已下の功德增明なり。乃至非想の修惑を斷除するは、三界の功德齊しく得て增明なり。未來に依り斷に約して下を修するが如く、乃至彼無所有處に依つて修斷すること例して爾なり。良に見惑は迷理の煩惱なるを以て、復斷除すと雖も上禪を得ず。是が爲に斷處に修を辨ずることを得ず。修道の煩惱は地に隨つて繫縛す。若し下結を斷ずれば、則ち上禪を得。是故に其斷處に約して修を辨ず。此は是れ一異なり。』『又見道の中の乘上は、通じて欲界の等智を修し、修道の中の乘上は、但八禪の等智を修して欲界を修せず。』『何が故に是の如くなる。』『欲界の心は亦能く苦集の過を厭離し、息滅を欣求して修は見道に順ず。是故に見解通じて彼智を修す。欲界の等智は

彼修惑に於て同治の義無し。是が爲に修せず。』七には轉根修、信解脫の人見到を求め、時解脫の人不時を求むるを、名けて轉根と爲す。學人の轉根は一無礙、一解脫道を修して、卽ち能く障根無知を斷除し、鈍を轉じて利と作す。無學は九無礙道、九解脫道を修習して、方に能く根を轉ず。『何が故に是の如くなる。』『良に學人は結患未だ盡きざるを以て、利を求むる心猛なり。故に一無礙、一解脫道に便ち能く根を轉ず。無學は結盡きて利を求むる心は賖なり。故に九無礙、九解脫道に、方に能く根を轉ず。八には熏禪修、『熏法は如何。』『聖人は先づ第四禪を得已つて、先に第四を熏ず。先に百千の無漏心の中に入り、次に百千の有漏心の中に入り、復百千の無漏心の中に入る。兩邊の無漏、中間の有漏を、名けて熏禪と爲す。以て漸く之を略して乃ち最後の二の無漏心に至る。後の二の無漏を名けて熏禪の方便道成ずと爲し、各別の一心を熏禪成ずと名け。成の中の初の二を亦無礙と爲す。後の一は解脫なり。次に三禪乃至初禪を熏ず。作法は前に同じ。』九には修通修、四禪、根本の定に依つて五通を修習するを、修通修と名く。後の六通章の中に具に辨ずるが如し。身通、他心、宿命の修習するは、各の一無礙、一解脫道に皆定中に在り。天眼、耳を修するは、各の一無礙に定中に在り。通じて體は定の外なり。十には大明雲除發彰修、羅漢は無學果を證得する時、一切の功德悉く明淨なることを得。此十種の中、自分、增觀は唯見道に在り、離欲、同治、及與依本は唯修道に在り、大明發彰は偏に無學に在り、乘上の一種は見修に通じ、轉根、熏禪、及與修通は修と無學とに通ず。『毘曇』是の

【次に等】二に所修の心智の差別を明す。

【次に等】三に前の義に約して修の多少を明す。中に四、初に斷結一百七十八心の中に就て、修の多少を明す。

如し、若し『成實』に依らば、一切の功德は唯現起の者にして、之を名けて修と爲す。餘は修と名けず。故に十を論ぜず。大乘法の中には、亦應に分に有るべし。文の中には說かず。此一門竟る。次に、所修の心智の差別を明す。『毘曇』の如きに依らば、十智を離分するに其二百九心の心差別有り。大例に四有り。一には斷結心、見道、修道、無礙、解脫に通じて一百七十八心有り。見諦の惑を斷ずるに、十六心有り。八忍、八智なり。修道の惑を斷ずるに、其一百六十二心有り。欲界の惑乃至非想を斷ずる九地の中に、各九品の無礙、解脫有り。前の見解に通じて、合して一百七十八心と爲す。二には轉根心、其に二十有り。學人の轉根に其二心有り。謂はく、一無礙、一解脫道なり。無學の轉根に十八心有り。謂はく、九無礙、九解脫道なり。三には熏禪心、其に三種有り。初の一は無漏、次の一は有漏、後の一は無漏なり。前の二は無礙にして、後の一は解脫なり。四には修通心、中に於て八有り。謂はく、五無礙及び三解脫なり。天眼、天耳の通の體を除却す。此二種は是れ無記なるを以ての故に、就て修を論ぜず。此等を合して說くに、二百九心有り。『成實』大乘には、無量心を以て諸の煩惱を斷ず。數を定むべからず。此二門竟る。次に、前の義に約して修の多少を明す。中に於て四有り。一には斷結一百七十八心の中に就て、修の多少を明す。中に於て、外凡內凡見修無學に約就して修の多少を明す。外凡位の中には但一智を修し、或は復二を修す。『是義云何。』『凡夫は八禪の等智を修習して欲界の結を斷じ、無所有に至る。一一の地の中に、各九無礙及び九解脫あり。一切の無礙及び欲界地の八解脫道

は唯等智を修し、餘の一切地の解脱の道は皆二智を修す。謂ゆる、等智及び他心智なり。其初禪の對治より第三禪に至る、此三地の中の第九の解脱は、其自地の他心の智に望めて其得修有り、下地の心に望めて乘上修有り。自餘の解脱は唯下地の他心の智に望めて乘上修有り、自地得修の義有ること無し。』內凡位の中の七方便の人は、唯等智を修す。道理は其れ唯煖等の四心を、名けて內凡と爲す。今此は彼常沒の外凡に對して、七方便の人を同じく內凡と名く。見道位の中十五心より來、前後通じて說かば具に七智を修す。盡、無生を除く、無學に非ざるが故に。他心智を除く未離欲の故に。同時には二を修す。苦、比智の邊に兼ねて等智を修す。集滅比智の修相も亦然なり。道比智の時或は六智を修し、或は復七を修す。六を修すと言ふは、次第の人必ず未來に依つて見諦道に入るは、一時に六を修す。謂はく、四諦智、法智、比智なり。現に道比を修して餘智を得修す。問うて曰はく、『餘智は向の中に在り。云何が道比は餘智を得修する。』『毘曇』の如きに依らば、須陀を得る時、前の別得を捨して更に總得を起し、前の諸智を得して、通じて果體と爲す。『成實』は爾らず。故に彼『成實』九智品に云はく、「無漏一たび得して乃ち涅槃に至り、終に中捨せず。故に得果の時更に總得無し」と。』七を修すと言ふは、超越の人四本禪に依つて見諦に入る者は彼欲界の結先づ斷除するが故に、第十六道比智に至る時、具に七智を修す。前り六種及び他心智を修するなり。次に九地の修惑對治の無礙、解脱一百六十二心の中に就いて、修の多少を明す。欲結の對治の九品の無礙、八解脱より來、但七智を修す。謂はく、

【二には等】次に轉根二十種の心に就て、修の多少を明す。

四諦智、法智、比智、及與等智なり。同治修に依つて四諦智、法智、等智を修し、依本修に就いて比智を修す。第九の解脫に八智を修習す。前の七種及び他心智を修するなり。初禪の對治より無所有に至る無礙道の邊に齊しく七智を修す。盡無生及び他心智を除く。學に在るを以ての故に盡無生を除き、容豫ならざるが故に他心を修せず。彼一切地の解脫道の邊に齊しく八智を修す。盡無生を除く。問うて曰はく、『何が故に欲界治の中には、唯第九品の解脫道の邊に他心を修することを得、餘地には一切の解脫道の邊に齊しく他心を修するや。』釋して言はく、『他心は唯四禪の根本處に依つて起る。欲界の第九の解脫道の時に根本禪を得、亦他心を得。前の八解脫道には未だ本禪を得ず。是が爲に修せず。初二三禪の對治道の中の八解脫を、下地の心に望めて其得修有り。下地の心に望めて乘上修有り。第九の解脫を其自地の他心の智に望めて其得修有りと雖も、下地の心に望めて乘上修有り。四禪の對治より無所有に至る一切の解脫は、其自地に於て得修無しと雖も、下地の心に望めて乘上修有り。是が爲に類せず。』『非想の對治の九無礙道に、各六智を修す。謂はく、四諦智、法智、比智なり。『云何が能く法智を修することを得るや。』『滅道法智は能く彼結を斷ずる同治修なるが故に。』『何の義を以ての故に、等智を修せざる。』『等智は非想の結を斷ずること能はず。同治無きが故に。』前の八解脫は七智を修す。盡無生、及與等智を除く。第九解脫は是れ其大明發彰修なるが故に、一切地の十智の功德を修す。上來第一に斷結の心に就いて修の多少を明す。二には轉根二十種の心に就いて修の多少を明

【三には等】次に熏禪三種の心の中に就て、修の多少を明す。

【四には等】次に修通八種の心の中に就て、修の多少を明す。

す。若し是れ學人の未來禪に依つて轉根する者は、無礙解脫に同じく六智を修す。他心智を除く。他心は根本禪に在るが故に。亦等智を除く。見道に似たるが故に。盡無生を除く。無學に非ざるが故に。學人四根本禪に依つて轉根する者は、彼無礙道に亦六智を修す。前と相似す。解脫には七を修す。他心智を加ふ。轉根は要ず六地禪に依るが故に、無色に依らず。是故に說かず。若し無學の人未來禪に依つて轉根する者は、但七智を修す。他心智を除く。他心は根本禪に在るが故に。亦等智を除く。見道に似たるが故に。盡無生智を除く。未得を以ての故に。無學の四根本禪及び中間禪に依つて轉根する者は、九無礙道に但七智を修す。他心智を除く。容豫ならざるが故に。亦等智を除く。第一有の對治に非ざるが故に。無生智を除く。未得を以ての故に。八解脫道に八智を修習す。前の七種及び他心智を修するなり。乘上修なるが故に。第九の解脫に具に十智を修す。發彰修を以て一切の功德皆明淨なるが故に。三には熏禪三種の心の中に就いて修の多少を明す。學人の熏禪は二無礙道に但七智を修す。他心智を除く。容豫ならざるが故に。盡無生を除く。無學に非ざるが故に。解脫に八を修す。他心智を加ふ。無學の熏禪は無礙に九を修す。他心智を除く。解脫に十を修す。若し鈍根の者は無生智を除く。四には修通八種の心の中に就いて修の多少を明す。五神通を修するに、各一無礙あり。他心無礙は具に七智を修す。他心智を除く。未だ成就せざるが故に。盡無生を除く。彼は見の性に非ず。他心の心を推求すること能はざるが故に。餘の四無礙は但等智を修す。身通他心、及與宿命の此三解脫

は、定と相應す。今は就いて修を說く。他心の解脫は共に八智を修す。盡無生を除く。餘の二解脫は但等智を修す。若し論に依つて具に廣く分別せんと欲すれば、彼『雜心』の一一の偈の中に於て、三門に之を求む。第一に、須く十修の中幾修を具足するやを明すべし。第二に須く十智の中具に幾智を修するやを明すべし。三に二百九心の中具に幾心を修するやを明す。『毘曇』是の如し。成實法の中には、同時に共に相修する義を說かず。須く辨釋すべからず。故に彼『成實』九智品の中に、廣く是義を非す。十智是の如し。

十一智の義に兩門分別あり。相を辨ず一。大小の通局二。

(九)第一に相を辨ず。十一智の義は『大智論』に出づ。『名字は是れ何ん。』『謂ゆる、十智及び如實智なり。』前の十は上の如し。如實智とは、汎く釋するに二有り。一には獨法、二には共法なり。諸智を緣攝して一の如實と爲るを、名けて獨法と爲し、餘智に約對して說いて十一と爲るを、名けて共法と爲す。獨法如實は法を知ること寬く通ず。一切の法を知るを、悉く如實と名く。唯如實の理を知らざるが故に、如實智と名く。』『若し此れ唯如實の理を知らずんば、云何が如實智と名くることを得るや。』『地持』に釋するが如く、增上慢智を離るるを、如實智と名く。』『是義云何。』『增上慢とは、一切の法に於て知らざるを知と謂ふ。故に如實に非ず。諸佛菩薩は、一切の法に於て實に知るを知と言ふ。故に如實と曰ふ。中に於て分別するに、略して三種有り。『地持』に說くが如し。謂はく、清淨智、

【雜心】第六

【九】淨法聚第百三段に十一智の義を分別するに兩門の義あり、第一に辨相。

【大智論】第二十三。

【地持】第八。

【地持】第三。

【一〇】第二に大小に約して十一智の通局を辨ず。
【龍樹の等】大智論第二十三。

一切智、無礙智を離慢智と名く。清淨智とは、是れ佛菩薩の第一義智なり。諸佛菩薩は實を證し、染を離るるが故に清淨と曰ふ。一切智とは、是れ佛菩薩の世諦の智なり。一切世、一切處、一切事、一切種法の差別異に於て知るを一切智と名く。一切時等は『地持』に釋するが如し。無礙智とは、亦是れ世智なり。一切智所知の法の中に於て、之を知ること自在にして方便を假らず、心を發して卽ち知るを無礙智と名く。」共法の中に於て、如實智とは、境を知ること不定なり。名義も亦異なり。中に於て兩門あり。一には大小相對して十一智を說く。小乘の智解を說いて前の十と爲し、大乘の智解を通じて如實と名く。此如實智は猶是れ向前の獨法如實なり。小に對して異と爲す。二には大乘に就いて、義に十一を分つ。此門の中に於て、如實智は狹し。諸佛菩薩の如實の理を知るを、如實知と名け餘の世諦を知るを、判じて前の十に屬す。體相是の如し。此一門竟る。

（一〇）次に、大小に約して其通局を辨ず。分別に二有り。一には隱顯互に論ず。龍樹の說の如く、前の十種は是れ共聲聞緣覺の智、後の一の如實は是れ大乘の智なり。諸佛菩薩は苦等を知ると雖も、通じて亦是れ其如實智の收なり。二には勝を簡びて劣に異す。諸佛菩薩は智解寬廣にして十一智を具す。聲聞緣覺は智解狹きが故に、但十智有り。如實智無し。如實の理を知ること能はざるが故に。十一智の義略して辨ずること是の如し。

十一淨の義。

【二】淨法聚第百四段に十一淨の義を明す。【地持論】第七。

〔二〕十一種淨は『地持論』に出づ。『名字は是れ何ん。』『一には種性淨、性、習兩種の一切の佛法の種子身に在りて麁煩惱を離るるを、種性淨と名く。二には解行淨、謂はく、解行地に淨忍を修習して諸過を斷除し、出道に趣入するを、解行淨と名く。三には淨心淨、謂はく、歡喜地に不壞淨を得、三寶を信じ、大菩提に於て淨心に趣求するを、淨心淨と名く。四には戒淨、謂はく、離垢地に性戒具足し、微過悉く離るるが故に、戒淨と曰ふ。五には意淨、菩薩明地に世諦禪を得る煩惱を厭伏し定心淨なるが故に、名けて意淨と爲す。六には正見淨、四五六地に菩提分、如實知諦を觀じて諸の緣起を覺し、邪惑を滅除するを、正見淨と名く。七には一切方便行滿足淨、謂はく、遠行地に一切の十方便慧を修習して勝行を發起し、增上滿足して前地樂無作障を治捨するを、名けて方便行滿足淨と爲す。八には眞實智神通淨、謂はく、第八地に巧慧を成就し、五神通を具して作用無盡なるが故に、眞實智神通淨と曰ふ。九には正義無盡說無礙淨、謂はく、第九地に智成就を得て義の無盡を知り、四無礙辨の起說自在なるを、義無盡說無礙淨と名く。十には隨一切種所知淨、謂はく、第十地に如來七種の智大を成就し、一切種所知の法の中に於て知見無礙なるを、一切種所知智淨と名く。十一には一切煩惱智障習使淨、謂はく、如來地に障習永く亡じ、果德出離するを、煩惱障智障習使淨と名く。』十一淨の義、略して辨ずること是の如し。

【二】淨法聚第百五段に十二頭陀の義を明すに二門の分別あり、第一には釋名辨相。先づ釋名。

【頭陀】ヅータ(Dhūta)

【頭陀の行は等】下十二頭陀を明す先づ衣中の四について。

十二頭陀の義に兩門分別あり。(名を釋し相を辨ず一。四聚種に對して共同異を辨ず二。)

(二二)第一に名を釋し、并に其相を辨ず。頭陀は胡語にして此方の正翻には、名けて抖擻と爲す。此れ離著の行なり。喩に從つて之を名く。衣の抖擻して能く塵垢を去るが如く、此行を修習して能く貪著を捨するが故に、抖擻と曰ふ。頭陀の行は具に十六有り。經論には隱顯す。故に十二と說く。十六と言ふは、衣中に四有り、食中に六有り、處中に六有り。是れ十六なり。衣中の四とは、一には糞掃衣、二には毳衣、三には納衣、四には三衣なり。糞掃衣とは、謂ゆる、火燒、牛嚼、鼠齧、死人衣等なり。外國の人は此の如き等の衣は之を巷野に棄つ。事糞掃に同ずれば糞掃衣と名く。行者之を取りて染を浣ひ、縫治して用以て身に供す。問うて曰はく、『何が故に唯此衣を受くる。』『人に三品有り。謂はく、下中上なり。下品の人は、治生估販種種の邪命にして而も衣服を得、中品の人は、前の過を遠離して僧中衣、檀越施衣を受け、上行の人は、僧衣、檀越施衣を受けずして糞掃衣を受く。』『何が故に僧中の衣を受けざるや。』『若し此衣を受くれば、僧法須く同ずべし。僧事を斷理し、作使を分處し、事を斷じ人を僨し、心を亂し道を發す。是が爲に僧中の衣を受けず。』『何が故に檀越施衣を受けざるや。』『衣の爲に追求して多く邪命に墮す。又若し彼檀越施衣を受くれば、則ち親著を生じて出離を得難し。又若し彼檀越施衣を受くれば、得處には偏に親しく、不得處に於ては、便ち疏礙を爲して等化を妨ぐ。又若し彼檀越施衣を受くれば、數得れば慢を生じ、得ざれば嫌怨す。言はく、彼無智にして福田を識らず。應に施すべ

【涅槃】第二十七

きを施さずと。或は自ら鄙恥して憂惱を生ず。又若し彼檀越施衣を受くれば、數往いて道を廢し、去らざれば恨を致す。又復檀越施衣を受くるに由つて好人を憎嫉し、良善を讒謗して住せしむるを欲せず、是多過を見る。是故に檀越施衣を受けず。』『何が故に唯糞掃の衣のみを受くるや。』『事を省て道を増し、過を離れて罪無し。故に唯之のみを受く。』毳衣と言ふは、『涅槃』に説くが如し。鳥狩の細毛之を名けて毳と爲す。行者若し糞衣の得べきもの無くんば、此を求めて衣と爲す。衲衣と言ふは、朽故破弊するを縫納して身に供す。好衣を著せず。『何が故に須く然るべき。』『若し好衣を求むれば、惱を生じ罪を致し、功を費し道を廢す。是が爲に著せず。又復好衣は未得道の人の貪著を生ずる處なり。又曠野に在つて多く賊難を致す。或は奪命に至る。是多過有り。故に納衣を受く。』三衣と言ふは、謂はく、五條衣、七條、大衣なり。上行の流は唯此三を受けて餘衣を蓄へず。『何が故に而然る。』『白衣は樂を求めて種種の衣を蓄へ、外道は苦行裸形にして恥無し。佛は中道に住して二邊を捨離するが故に、三衣を蓄ふ。又多求を求むれば功を費し道を廢し、少なれば事を濟はざるが故に、三衣を蓄ふ。然るに此三衣は身に供するに事足る。若し作務を營み大小の行來には五條衣を著し、諸の善事の爲には七條衣を著し、俗人を化攝し其をして敬信せしむるには須く大衣を著すべし。又屏處に在つては五條衣を著し、入衆の時は七條衣を著し、若し王宮聚落の所に入るには須く大衣を著すべし。又復調和溫暖の時は五條衣を著し、寒冷の時は七條衣を加へ、寒苦嚴切なるには加ふるに大衣を以てす。

【食中の等】 次に食中の六に就いて

故往一時正冬夜に入つて、天寒くして竹を裂く。如來、彼初夜分の時に於て五條衣を著す。夜久しくして轉寒し。七條衣を加ふ。夜の後分に於て天寒きこと轉盛なり。加ふるに大衣を以てす。佛便ち念を作したまはく「未來世の中の寒苦に忍びざる諸の善男子、此三衣を以て身に充つることを得るに足る」と。此多義を以ての故に、三衣を蓄ふ。食中の六とは、一には是れ乞食、二には次第乞、三には不作餘食法食、四には一座食、五には一揣食、亦は節量と名く。六には不中後飲漿なり。乞食と言ふは、人に三品有り。謂はく、下中上なり。下品の流は復出家すと雖も、邪命自活す。耕田種植治生方に轉諸の工巧を作す。種種の邪命もて而も自ら存活す。中品の人は前の過を捨離して僧中の食、檀越の請食を受く、上品の人は僧食、檀越請食を受けずして唯乞食を行ず。『何が故に僧中の食を受けざるや。』『過は前の衣に同じ。是故に受けず。檀越請食の過も亦前に同じ。』『何の義を以ての故に、專ら乞食を行ずるや。』『所爲に二有り。一には自の爲に事を省み道を修す。二には他の爲に世人を福利す。次第乞とは、通じて亦是れ其乞食の中の收なり。乞時偏の過を離ることを彰さんが爲に、是を以て別して論ず。凡愚は味を貪り、貧を棄てて富に從ふ。小乘は悲狹にして、富を捨てて貧に從ふ。上行の類は貪を離れ狹を去り、等しく衆生を慈みて貧富を簡ばず、次第に等しく乞ふ。言ふ所の不作餘食法とは、律の中に說くが如し。人有つて復次第乞食すと雖も、所求の處に於て數正食を得、餘食の法を作して數數之を食す。行者念を作さく、「此餘食の法は世尊開すと雖も病者に聽す。我今病無

し。應に之を受くべからず。是故に餘食の法を作して食せず」と。通じて之を攝すれば、此も亦是れ其一座食の收なり。故に經論の中には多く別して說かず。律の中に別するは、彼一座食は中前に於て餘の小食を食せず。餘の小食とは、此門遠離して數數正食す。此不同有り。是故に別して說く。一座食とは、人有つて數數正食せずと雖も、而も中前に於て數〻其餘の餅菓、粥等を食す。行者念を作さく「愚夫は身を貪り、煩惱を增するが爲に數數食を受く。今我道の爲にして身を養ふ爲にせず。煩惱を破せんが爲にして結を增する爲にせず」と。故に一食を受く。又復思念すらく「一食を求むるが爲に、已に多く道を妨ぐ。況んや多食を求むるをや」と。故に唯一食す。又飲食を觀ずるに、多苦の中より生ず。若し多食を受くれば、惱亂彌多し。故に一食を受く。又飲食を觀ずるに、信心の所施なり。一食消し叵し。況んや復多食をや。一揣食とは、經の中には亦節量食と名くるなり。一たび受けて便ち止むを、一揣食と名く。節儉小食なるを、節量食と名く。『何が故に次に辨ずるや。』『人有つて復一食の法を受くと雖も、一食の中に於て、意を恣にして飲噉し、腹滿ち氣脹れ、睡眠し、消息半日なるも滅ぜざれば、道の法を修することを妨ぐ。故に須く節量すべし。又復多食は煩惱を增長して折伏すべきこと難し。故に須く節量すべし。又復多食は睡眠を增長し、消し難くして病を致し、身をして安からざらしむ。故に須く節量すべし。『節は幾許にか至る。』『己が所堪に隨つて、三分にして一を留めて諸の鳥獸に施し、餘は便ち自ら食す。能く少くせば益善し。不中後飲漿とは、人有つて復飲食を

【處中の等】次に處中の六に就いて
【阿蘭陀】アーヌヤ（Âranya）

節量すと雖も、而も猶味を貪り、其中後に於て種種の漿、石蜜漿等を飲み、是漿を求むるが爲に多く邪命を致し、功を費し道を廢す。是故に飲まず、又此心を觀ずるに、放縱なるべきこと難し。馬に勒無ければ、左右に草を噉して疾疾に御者の意に隨ふこと能はず、加ふるに轡勒を以てすれば、方に能く速に進み、人の意に隨つて去るが如し。故に須く裁斷すべし。處中の六とは、第一には須く阿蘭若處に在るべし、二には塚間に在り、三には樹下に在り、四には露地に在り、五には是れ常座、六には是れ隨座なり。阿蘭若とは、此には翻じて名けて空閑處と爲すなり。『何れの處か是なるや。』『『雜心』に說くが如し。一弓は四肘なり。村を去ること五百弓なるを、一拘盧舍と名く。一拘盧半を阿蘭若處と名く。計るに三里許有り。頭陀の行者極めて近きは此に在り。能く遠ければ益善し。』『何が故に此に在るや。』『行者念を作さく、「我本家に在つて父母親屬共に相纏縛す。是が爲に之を捨す。今出家し已つて若し還師徒同學知識共に相結著せば、俗と異ること無し」と。是故に須く捨して蘭若處に在るべし。又聚落に在りては男女參雜して多く欲染を增す。宜く中に住すべからず。是故に須く阿蘭若處に在るべし。又聚落に近ければ、音聲憒閙にして定意を修することを妨ぐ。是故に須く阿蘭若處に在るべし。塚間と言ふは、塚間には多く死尸、爛壞、膖脹、臭穢なる有り。之を觀れば不淨觀門に入り易し。故に塚間に在り。又復塚間には死尸破壞して蟲食し、火燒分離散滅す。之を觀れば無常觀門に入り易し。故に塚間に在り。又復塚間には骸骨分散す。之を觀れば空無我觀に入り易し。故に塚

【相狀は等】次に十二頭陀の相を辨ず。

間に在り。樹下と言ふは、前に塚間に在つて死尸を觀察して得道の事辨ずるが故に。塚間を捨して樹下に來至す。又前の塚間には死尸の相を取る。然れども彼には多く哭泣等の聲有つて、正觀を修することを妨ぐるが故に、樹下に來つて繫念思察す。又樹は蔭覆して事半舍に同じく、身を安んじて道を修す。故に樹下に在り。又佛賢聖の得道證果は、多く皆樹に依る。故に樹下に在り。露地坐とは、樹下の蔭濕久しく居れば患を致すが故に。露地に至る。又復樹下には多く鳥雀有り。音聲散亂して定意を修することを妨ぐ。故に露地に在り。又復行者久しく樹下に在れば著樹心生ず。或は復此は好、彼は惡と分別す。是患を除かんが爲の故に、須く樹を舍して露地に來至すべし。又露地に在れば明了顯現にして所爲無礙なり。故に露地に在り。又復露地は月光明に照して心想明淨なれば空定に入り易し。故に露地に在り。常坐と言ふは、四威儀の中に行立は太だ苦み、臥は則ち太だ樂なり。坐は二邊を離れて能く長久に堪へたり。故に須く常坐すべし。又復行立は心則ち掉動して攝持すべきこと難く、臥は則ち昏沈して多く睡眠に入り、坐は沈掉を離る。故に須く常坐すべし。又求道者は大事未だ辨ぜず、諸の煩惱の賊常に人便を伺ひ、宜く安臥すべからず。故に須く常坐すべし。又復坐の中に多く成辨すること有り。食は消化し易く、氣息調和す。故に須く常坐すべし。隨坐と言ふは、草地有るに隨つて、處を得て便ち坐す。故に隨坐と曰ふ。別に隨つて細分すれば、此十六有り。經論は此に就いて、隱顯離合して十二を宣說す。『相狀は如何。』『四分律』に依らば、衣の中に二を立

【涅槃經】北本第二十七、南本第二十五。
【大智論】第六十八。
【三】第二に四聖法に約對して十二頭陀との同異を辨ず。

て、食の中に四を立て、處の中に六を立つ。合して十二と爲す。衣の中の二とは、一には納衣、二には著三衣なり。餘は皆論ぜず。食の中の四とは、第一には乞食、第二には不作餘食法食、三には一坐食、四には一揣食なり。次第乞は乞食の中に收め、中後不飮漿は一坐の中に攝す。故に別論せず。處の中に六を說くとは、備の上に辨ずるが如し。『涅槃經』に依らば、衣の中に三を立て、食の中に三を立て、處の中に六を立つ。合して十二と爲す。衣の中の三とは、一には著糞衣、二には著毳衣、三には畜三衣なり。餘は皆論ぜず。食の中の三とは、謂ゆる、乞食、一坐、一揣なり。餘は皆說かず。次第は亦是れ乞食の中に收め、不作餘食及び中後不飮漿は一坐の中に攝す。故に別論せず。處の中の六とは、備に上に辨ずるが如し。『大智論』に依らば、亦十二を說く。前と復異なり。彼論の中に依らば、衣に就いて二を立つ。一には著納衣、二には著三衣なり。四分と同じ。食の中に五を立つ。一には乞食、二には次第乞、三には一坐食。四には節量食、五には中後不飮漿なり。不作餘食法は攝して一坐食に入れ、更に別立せず。處の中に五を說く。隨坐を除却す。餘の經論の中には、更に應に異有るべし。自ら未だ見ざる所なり。皆是れ聖說なり。趣行すること皆得。此一門竟る。

〔三〕次に、須く四聖種法に約對して其同異を辨ずべし。四聖種とは、一には糞掃衣、二には是れ乞食、三には樹下坐、第四には有病服陳棄藥なり。廣くは上に辨ずるが如し。聖種頭陀の兩門を相對するに、同異に三有り。一には是れ聖種にして、亦是れ頭陀なり。謂は

【一四】淨法聚第百六段に十二巧方便の義を明す。【地持】第六。

く、糞掃衣、乞食、樹下坐は此れ能く聖を生ずれば、名けて聖種と爲し、此に住して能く衣食等の欲を破するが故に、頭蛇と名く。此糞掃衣は即ち納衣及與び毳衣を攝し、此乞食の中には次第乞を攝し、其樹下坐には蘭若處を攝す。二には是れ聖種にして頭陀に非ず。謂はく、陳棄藥なり。彼陳棄藥は病者の須ふる所なり。病者は彼頭陀苦行爲ること能はず。是故に說いて頭陀の法と爲さず。三には是れ頭陀にして聖種に非ず。謂はく、畜三衣、一坐食、一揣食、不非時飮漿、塚間、露地、常坐、隨坐なり。『何が故に此等を聖種と名けざる。』『夫れ聖種は一切の出家通行の法なり。諸の出家とは、悉く皆受行す。頭陀は唯是れ精上の苦行なり。精上の苦行は上人の所修なり。唯三衣を畜へ一坐食する等は、是れ苦行の法なり。上人の所行は中下堪へず。是故に之を說いて以て頭陀と爲し、聖種と名けず。』頭陀の義之を略して爾云ふ。

十二巧方便の義。

(一四)十二巧方便は『地持』に說くが如し。行修善巧なるが故に、方便と曰ふ。別に隨つて汎論すれば、方便に四有り。一には進趣方便、見道の前の七方便等の如し。二には權巧方便、二智の中の方便智等の如し。實には三乘無く、權巧之を爲す。三には施造方便、方便波羅蜜等を說くが如し。凡そ爲作する所善巧に修習す。故に方便と曰ふ。四には集成方便、諸法は同體にして巧に相集成す。一に一切を備へ、一切に一を成ず。故に方便と曰ふ。故に

【彼論】 地經論第一。

【名字は等】 正しく敎道方便に就いて十二巧方便を釋す。

『地經』の中には、六相門を說いて以て方便と爲す。又彼論に言はく、「此法巧に成ずるを方便と名くるなり」と。今此論ずる所は是れ其第三の施造方便にして、餘の三種に非ず。施造の中に就いて、別に三種有り。一には敎道方便、世の所行に於て巧に能く修習す。二には證道方便、能く情相を捨して實際に證入す。故に彼『地經』の第八地の中に證道を宣說して、以て善集慧方便と爲すなり。三には不住方便、中に於て曲くは三有り。一には空有相對して以て方便を明す。有に在つて染せず、常に能く空に入り、空に入つて證せず、常に能く有に隨ふ。七地に說くが如く、此善巧有るが故に方便と曰ふ。二には染淨相對して、世間を捨てずして常に涅槃す。大涅槃を得て世間を捨てざるが故に方便と曰ふ。三には自他相對して、自利を捨せずして常に利他、利他を捨せずして常に自利なり。行に偏著無きが故に方便と曰ふ。今此に論ずる所は、是れ其初門の敎道方便なり。敎道行の中廣略不定なり。今は一門に據つて且く十二を說く。『名字は是れ何ん。』『彼論に說くが如し。內の佛法を起すに六方便有り。外衆生を成ずるに六方便有り。內を起す六とは、一には悲心一切衆生を顧念す。此は卽ち是れ共念衆生心なり。』『衆生を悲念すると、云何が內に佛法を起すと名くることを得るや。』『衆生を化するに由つて、自ら佛法を成ず。故に衆生を念ずるを、而も名けて內に佛法を起すと爲すことを得。二には諸行を實の如く了知す。此は卽ち是れ其厭有爲心なり。謂はく、生死有爲の諸行は無常苦空無我等の過ありと知つて、厭離を生ず。三には無上菩提の智なり。此は卽ち是れ求一切智心なり。此三は行の本なり。

後の三は前に依つて以て方便を顯す。四には衆生を念ずるに依つて生死を捨離す。』『衆生を念ずるに依つて應に生死に在るべし、何が故に捨離するや。』『此は是れ菩薩の方便なるが故に爾なり。』『云何が方便なる。』『衆生を念ずるに依つて弃拔を爲さんと欲す。自ら我生死の苦を出でざれば、能く度するに由無し。故に願念に依つて疾かに生死を捨す。此れ初心に依つて方便を說く。五には諸行を實の如く了知するに依つて、無染の心を以て、生死に輪轉す。有爲の行に於ては實の如く了知して應に生死を捨すべし。』『何が故に輪轉する。』『亦菩薩の方便を以ての故に爾なり。』『云何が方便なる。』『生死の虛妄無實を知るに由るが故に、能く無染にして常に其中に處す。此れ第二に依つて方便を說くなり。六には佛智を求むるに依つて熾然精進す。佛は勤めて成ずるに由つての故に、精進を起す。此れ第三に依つて方便を說く。外衆生を成ずるに六方便ありとは、一には少善根を以て無量の果を得。謂ゆる、菩薩は下の衆生を教へて、少財物を以て下の福田に施し、此少善を用て廻して菩提一切種德を求め、廻向を以ての故に、彼少善をして無量の果を得しむ。施の如く既に然なり。餘行は皆爾なり。二には少方便もて無量の善を生ず。中に於て二有り。一には衆生に敎へて邪を捨て正に歸せしめ、二には衆生に敎へて小を捨て大に歸せしむ。此二の中、各多門有り。備には論に說くが如し。具に列すべからず。此前の二種は化他の行、中に行を起すこと善巧なり。三には壞法の衆生をば其暴虐を除かしむ。此は化して信を生ぜしむ。四には處中の衆生をば佛法に入らしむ。此法は此れ化して解を生ぜしむ。五には

【一五】淨法聚第百七段に十三住の義を明すに七門の別あり、第一に列名辨相。
【地持論】第七。

已入の衆生をば其をして成就せしむ。此は化して行を起さしむ。六には已熟の衆生をば解脱を得しむ。此は化して果を得しむ。此後の四種は化他の行の中に人を攝すること善巧なり。後の四の中に就いて、別に六種の巧方便の行有り。能く衆生をして法を懷ひ害を除き乃至解脱せしむ。一には隨順方便、善く衆生に隨つて法義を辨釋し、其をして悟入せしむ。二には立要方便、衆生の求むること有れば要ず善を修せしむ。三には報恩方便、菩薩は先に曾て衆生に施恩す。彼來りて報いんことを求む。菩薩受けず、勸めて善を修せしむ。四には異相方便、若し諸の衆生の須らく欲する所無くんば、菩薩攝せんと欲して先づ共に友と爲り、勸めて善を修せしむ。彼人從はざれば、菩薩は瞋責等の相を示現して善法を修せしむ、五には逼迫方便、菩薩王と爲り、或は尊主と爲つて、己が所攝の人民眷屬に於て、逼つて善を修せしむ。六には淸淨方便、八相成道して法を說き人を度す。十二方便略して辨ずること是の如し。

十三住の義に七門分別あり。（名を列し相を辨ず一。漸頓二。修に約して分別す三。行に約して分別す四。八法の攝住五。修成の分齊六。治斷の分齊七。）

（一五）第一に、名を列し并に其相を辨ず。十三住の義は『地持論』に出づ。行成の處、之を名けて住と爲す。又不退を成ずるを、亦名けて住と爲す。住の義は開合廣略不定なり。今は一門に據つて且く十三を論ず。『名字は是れ何ん。』『一には種性住、謂ゆる、習種及與び性種なり。佛種建立堅固にして壞せざるを、種性住と名く。二には解行住、謂はく、解

【一六】第二に頓漸に就いて十三住を分別す。

行地なり。出世道に於て正觀修行して不退に趣入するを、解行住と名く。三には歡喜住、謂はく、淨心地なり。出世眞證して菩提心生じ、堅住不退にして自ら所得を慶ぶを、歡喜住と名く。四には增上戒住、謂はく、離垢地なり。淨戒具足して微過犯ぜざるを、增上戒住と名く。五には增上意住、謂ゆる、明地なり。定心殊勝なるを、增上意住と名く。六には菩提分法相應慧住、謂ゆる、炎地なり。三十七道品の法を觀察するを、菩提分相應慧住と名く。七には諦相應增上慧住、謂はく、難勝地なり。善く四諦の相を觀ずるを、諦相應增上慧住と名く。八には緣起相應增上慧住、謂はく、現前地なり。善能く十二緣の法を觀察するが故に、緣起相應慧住と曰ふ。九には有行有開發無相住、謂はく、遠行地なり。有功用行共に相開發するを、有開發と名け、寂用倶行して有無間隔の相を離るるを、無相住と名く。十には無行無開發無相住、謂はく、不動地なり。報行純熟して無功用行共に相起發するを、無行無開と名け、間隔功用の相を遠離するを、無相住と名く。其第十一には無礙住と名く。謂はく、善慧地なり。能く四十無礙辨才を以て說法して他を利するを、無礙住と名く。其第十二には最上住と名く。謂はく、法雲地なり。學行窮滿の故に最上と曰ふ。其第十三には如來住と名く。果德窮滿し出離清淨なるを、如來住と名く。』此一門竟る。

（一六）次に、頓漸に就いて諸住を分別す。『地持』に說くが如し。前の菩薩住は漸次に清淨、後の如來住は頓に清淨を得。教行頓に成ずるを、名けて頓得と爲し、證行頓に顯するを、名けて清淨と爲す。『何が故に而然るや。』『彼菩薩地は一一の位の中所治の障品品別無數

【一七】第三に修に約して十三住を辨ず。

【一八】第四に行に就いて明す。

なり。多時に漸く斷じて、方に乃ち窮盡す。是を漸淨と爲す。佛を障ふるの障は局つて唯一品なり。金剛心の中の一無礙道に、之を斷ずること畢竟す。種智起る時一切頓に淨くして更に多品無きが故に、漸淨にあらず。是を菩薩如來地の別と爲す。此二門竟る。

(一七)次に、修に約して辨ず。『地持』に說くが如し。種性、解行を無相修方便と名く。漸く學し相を破して出世に趣入す。彼歡喜住より乃ち緣起相應慧住に至るまでは無相修を得て、正しく能く相を破して無爲に證入す。二の無相住は無相修の淨なり。無生忍を得て一切の法本不起なりと知るが故に。無礙より佛に至るまでは無相修の果なり。前の離相に依つて諸德を成ずるが故に。此三門竟る。

(一八)次に、行に就いて論ず。『地持』に說くが如し。種性と解行は小行を修習す。有斷、行不定、所得に退有り。起行は局つて狹きが故に、名けて小と爲す。常に行ずること能はざるを、說いて有斷と爲し、行心不堅なるが故に、不定と名け、緣に逢うて退失するを、有退轉と名く。歡喜より乃ち緣起慧住に至るまで廣行を修習す。不斷決定にして所得不退なり。此諸住の中、各一行に於て一切行を備ふ。故に名けて廣と爲す。恆に作して住せざるを名けて不斷と爲し、行心牢固なるを稱して決定と曰ひ、緣敗すること能はざるを不退轉と名く。有行有開より乃ち最上に至つて無量行を修す。不斷決定にして所得不退なり。此諸住の中、各能く彼一切行の中に於て、備に一切を具するを無量行と名く。餘の不斷等は備に前に釋するが如し。彼如來住には、無量不斷、決定不退の果を成就す。此四門竟る。

【一九】第五に八法もて十三住を攝するを明す。【地持】第七。

【二〇】第六に共修成の分齊を明す。【地持】第七。

【華嚴】舊譯第三十阿僧祇品。

【龍樹の等】大智論第三十八。

(一九)次に、八法を以て十三住を攝す。『地持』に說くが如し。八法と言ふは、一には信、二には聞、三には思、四には淨心、五には初修慧行、六には修慧廣、七には修慧果成、八には聞慧畢竟出離なり。』『云何が住を攝する。』『種性と解行は信心を修習す。解行の中に於て聞慧を成就し、思慧の思惟に初めて歡喜に入るを、名けて淨心と爲し、歡喜地滿を修慧行と名け、離垢已上を修慧廣と名け、不動已上を修慧果成と名け、佛地を名けて畢竟出離と爲す。此五門竟る。

(二〇)第六に、共修成の分齊を明す。『地持』に說くが如し。種性より佛に至るまで、要ず三大阿僧祇劫を經。滅ずれば卽ち成ぜず。初阿僧祇に種性及與び解行住を過ぎて歡喜地を得、第二阿僧祇に歡喜乃至有開發を過ぎて無開住を得、第三阿僧祇に無開及與び無礙住を過ぎて最上住を得。阿僧祇とは是れ外國の語なり。此には無數と名く。『華嚴』の中の如きは、大數に共一百二十有り。此は第一數なり。然るに劫に三有り。一には日月歲數の無量を阿僧祇劫と名け、二には中劫の無量を阿僧祇劫と名く。賢劫等の如し。此劫の大小は龍樹の說くが如し。四十里城に中に芥子を滿て、木概もて平かならしめ、百年に一を去つて其芥子盡くるに、劫猶盡きず。四十里の石天衣の三銖なるを、百年に一たび拂ひて其石皆盡くるに、劫猶盡きず。三には大劫の無量を阿僧祇と名く。『雜心』に說くが如し。彼賢劫等の六十四劫を名けて大劫と爲す。『何が故に定んで六十四と言ふや。』『劫に三種有り。』謂はく、水火風なり。是の如く彼三劫の中、火は多く、水は次に、風を最も少しと爲す。七は

【三二】第七に諸住斷障の分齊を明す

火一は水、七は水一は風なり。是の如く凡そ七七の火劫一七の水劫を經、彼最後の水劫の後に於て、更に七火を經て方に一風有り。是が爲に合して六十四劫有り。亦可なり。彼賢劫の流の如きは、數僧祇に至るを一大劫と名く。若し中劫を論ずれば、始め種性より初地に至る時、已に無量阿僧祇劫を過ぎ、一と言ふことを得ず。其大劫を語すれば、唯一僧祇は多を過ぐるを得ず。餘も亦是の如し。此六門竟る。

【三二】次に、諸住斷障の分齊を明す。『地持』に説くが如し。障別に二有り。一には煩惱障、謂ゆる四住なり。二には智障、謂ゆる無明なり。彼煩惱障に三處過有り。初より乃ち歡喜住に至る時、增上及び中の惡趣煩惱一切出過す。煩惱障の中の中上二品は、能く惡業を發し惡道の身を受く。是故に名けて惡趣煩惱と爲す。種性已上は漸次に斷除し、歡喜の時盡す。歡喜乃至無開發住に、下品の煩惱皆悉く出過す。無開より乃至最上住の時、煩惱の習氣一切出過して如來住に入る。智障にも亦三あり。一には皮障、麁品の無明が、彼菩薩麁品の法身を障ふること、世人の皮中の患の如似し。故に皮障と曰ふ。二には膚障、中品の無明の彼菩薩中品の法身を障ふること、世人の膚中の患の如似し。故に膚障と名く。三には骨障、微細の無明の彼菩薩の微細の法身を障ふること、世人の骨中の病の如似し。故に骨障と曰ふ。初めて歡喜に至つて皮障を斷盡し、歡喜乃至無開發住に膚障を斷盡し、無開乃至如來住の時骨障を斷盡す。問うて曰はく、『何が故に煩惱障の中に微細習氣を十地に出過し、智障の中に微細の者を佛地に始めて過するや。』釋して言はく、『四住は浮麁にして

離し易し。是故に先に過す。無明は盡し難し。是故に後に過す。』又問ふ、『何が故に煩惱障の中に、三品の外別に習を斷ずることを須ひ、智障は爾らざる。』釋して言はく、『煩惱は性是れ起惑なり。是故に細なる者を宣說して習と爲す。無明は性是れ微細の惑なり。細とは是れ地なり。故に習と名けず。若し厥が家の殘餘を說いて習と名くれば、亦傷無きことを得。故に『地持』の中に、「佛は煩惱智障習斷ず」と說く。』十三住の義之を辨ずること略爾なり。

【三】淨法聚第百八段に離十四垢業の義を明す。【長阿含善生經】第十一。

離十四垢業の義。

(三一)離十四垢業は『長阿含善生經』に說くが如し。『名字は是れ何ん。』『四結業を離れ、四處に於て諸の惡行を作さず、六損財法を離る、是を十四と爲す。四業を離るとは、殺盜婬及與び妄語を離る、是れ其四なり。』『身口業道に具に七種有り。何の義を以ての故に、偏に此四を防ぐや。』『此四の中に重罪を含通するを以ての故に、偏に之を說く。又此十四は在家の業行なり。在家の人は能く此四を防ぎ、餘の口業道は防禁すること能はず。故に離を說かず。故に論に說いて言はく、「出家の人尙離すること能はず。何に況んや在家をや」と。又綺語等は法に應ぜざるが故に、皆妄語の攝なり。故に別論せず。四處に於て惡行を作さずとは、愛處、恚處、癡處、怖處なり。此處に依つて惡行を起さざるなり。離六損財とは、一には耽酒せず、二には博戲せず、三には放蕩せず、四には伎樂に迷はず、五には

惡友に相同ぜず、六には懈惰せざるなり。彼に耽酒に六種の失有りと說く。是故に須く離すべし。一には財を失ひ、二には病を生じ、三には意鬪諍し、四には惡名流布し、五には瞋怒暴生し、六には智慧日に損ず。博戲の失も亦六種有り。故に應に捨離すべし。一には財物耗盡し、二には勝つと雖も怨を生じ、三には智者に嘖められ、四には人敬信せず、五には人の爲に疎外せられ、六には喜んで智盜竊を生ず。放蕩の失にも亦六種有り。是故に須く離すべし。一には自ら身を護らず、二には資財を護らず、三には子孫を護らず、四には常に自ら驚懼し、五には諸の苦惡の法常に自ら身を纏し、六には喜んで虛妄を生ず。伎樂に迷ふにも亦六失有り。故に須く捨離すべし。一には歌を求め、二には舞を求め、三には琴瑟を求め、四には波內卑、五には多羅槃、六には首呵那なり。此後の三種は經の中に翻ぜず。是れ何たるやを知らず。惡友相得るにも亦六種有り。是故に須く離すべし。一には方便して欺を生じ、二には屛處を好喜み、三には他家の人を誘ひ、四には他物を圖謀し、五には財利自に向ひ、六には好んで他の過を發す。懈惰の失にも亦六種有り。故に應に捨離すべし。一には富樂なれば肯て作務せず、二には貧窮なれば肯て勤修せず、三には寒時なれば肯て勤修せず、四には熱時なれば肯て勤修せず、五には時早ければ肯て勤修せず、六には時晩ければ肯て勤せず。是を遠離十四垢業と爲す。『地持』所說の義は此に當るなり。

【二三】淨法聚第百九段に離隱六方離四惡友攝四善友の義を明す。第一に離隱六方の義を釋す。

離隱六方離四惡友攝四善友の義。

(二三)此義も亦『長阿含』の中の『善生經』に出づるなり。先に隱覆六方を遠離することを明す。羅悅城の中に長者子有り、名けて善生と曰ふ。父祖相承して恆に清旦に於て、香湯に沐浴して六方に禮事し、彼方の神をして來つて家業を護らしめ、所作諧偶す。佛の出世に値ひ、佛に詣りて請問す、『賢聖の法の中に、是法有りや不や。』佛、時に答へて曰はく、『賢聖の法の中にも亦六方有り。但汝に同じからず。』即ち爲に偈を說きたまふ、『父母を東方と爲し、師長を南方と爲し、妻子を西方と爲し、親族を北方と爲し、僕使を下方と爲し、沙門を上方と爲す。有ゆる長者子諸方を禮敬し、敬順時を失はざれば、死して皆天に生ずることを得。惠施及び燸語は人を利して益する所多し。彼經に說くが如し。東方を敬する中、子父母に於て五事の敬順あり。一には供奉して違失無からしめ、二には凡そ所爲有れば先づ父母に白し、三には父母の爲す所は敬順して違はず、四には父母を止めて敢て違背せざらしめ、五には父母所作の正業を斷ぜず。子父母に於て此の如く敬事せば、則ち彼方をして安穩にして憂無からしむ。父母の子に於けるに五事の敬視あり。一には子を制して惡を爲すことを聽さず、二には指授して其善惡を示し、三には慈愛骨に入り、髓に徹し、四には子の爲に善を求めて婚娶し、五には時に隨つて所須を供給す。南方を敬する中、弟子の師に於て五事の敬順あり。一には所須を給侍し、二には禮敬供養し、三には尊重戴仰し、四には師に教勅有れば隨順して違ふこと無く、五には師に從つて法を聞き、

善く持して忘れず。師長も亦五種の事を以て弟子を敬視す。一には法に順じて調御し、二には其未聞を誨へ、三には其所聞に隨つて善く義を解せしめ、四には其善友を示し、五には盡く所知を以て誨授して悋まず。西方を敬する中、夫の妻を敬するにも亦五事有り。一には相待に禮を以てし、二には威嚴越えず、三には衣食時に隨ひ、四には莊嚴時を以てし、五には家内を委付す。妻は五事を以て夫を恭敬す。一には先に起き、二には後に坐し、三には和言し、四には敬順し、五には意に先んじて所在を承問す。北方を敬する中、人五事を須て親族を尊敬す。一には給施し、二には善言し、三には利益し、四には同利し、五には欺詐せず。親族も亦須く其五事を以て人を親敬すべし。一には爲に放逸を護し、二には爲に失財を護し、三には爲に恐怖を護し、四には屏に相教誡し、五には常に相稱歎す。下方に事ふる中、主は僕使に於て五事將て順ず。一には隨つて能く使ひ、二には飲食時に隨ひ、三には賜勞時に隨ひ、四には病に醫藥を與へ、五には其暇を求むるに從ふ。僕使も亦五事を以て主に事ふ。一には須く早起すべし、二には事を爲すに周く容れ、三には與へざれば取らず、四には作務次を以てし、五には主の名を稱揚す。上方に事ふる中、檀越は須く五種の事を以て沙門、婆羅門等に供奉すべし。一には身に慈を行じ、二には口に慈を行じ、三には意に慈を行じ、四には時を以て施し、五には門を遮止せず。其諸の沙門婆羅門等須く六事を以て檀越を教授すべし。一には防護して惡を爲さしめず、二には善處を指授し、三には教へて善心を懷かしめ、四には未聞の者をば聞かしめ、五には

【次に等】二に四種の惡友を遠離することを明す。

【下次に等】三に四善友を攝するを明す。

巳聞の者をば解せしめ、六には正路を開示す。是の如きの敬事能く諸方をして、安穩にして憂無からしむ。此一門竟る。次に、四種の惡友を遠離することを明す。彼經に說くが如し。四怨有り。親の如く應當に覺知すべし、一には畏伏友、畏れて伏從するも、實に誠心無し。此は其意に據る。二には美言友、言は順じ心は乖く。此は其口に據る。三には敬順友、形詐つて親付し、內に實心無し。此は其身に據る。四には惡友、惡事相伴ふ。畏伏に四有り。一には先に與へ後に奪ふ。畏るる時は則ち與へ、畏れざれば還奪ふ。二には少を與へて多を望み、求取厭くこと無し。三には畏るるが故に强ひて親む。四には離苦を求むるが爲に詐つて親附す。美言に四有り。一には善惡斯れ從ひ、二には難有れば捨離し、三には外善く來ること有れば蜜にして之を止め、四には危事有るを見て便ち相誹謗す。敬順に四有り。一には先に誑し、二には後に誑し、三には現に誑し、四には小過有るを見て便ち杖を之に加ふ。惡友に四有り。一には飲酒の時友と爲り、二には博戲の時友と爲り、三には婬逸の時友と爲り、四には歌舞の時友と爲る。此れ皆須く離るべし。此二門竟る。下次に、其四善友を攝することを明す。彼經に說くが如し。四親應當に之に親むべし。一には止非友、惡事相止む。此は其口に據る。二には慈愍友、苦事相憐む。此は其意に據る。三には利人友、益事は人に與ふ。四には同事友、好事相助く。此二は身に據る。止非に四有り。一には人の惡有るを見て則ち能く遮止し、二には人に正直を示す。謂はく、正理を教ふるなり。三には慈心愍念して善言誨誘し、四には人に正路を示し、敎へて出道を修せしむ。

慈愍に四有り。一には利を見て代つて喜び、二には惡を見て代つて憂ひ、三には人德を稱譽し、四には人の惡を說くを見て便ち能く抑制す。利益に四有り。一には人を護して放逸ならしめず、二には人を護して財を失はざらしめ、三には人を護して恐怖せざらしめ、四には屛に相敎誨す。同事に四有り。一には彼が爲に身命を惜まず、二には彼が爲に財寶を惜まず、三には彼が爲に共恐怖を濟ひ、四には屛に相誡約す。離隱方等、略して辨ずること是の如し。

【二四】淨法聚第百十段に十四化心の義を明すに六門の別あり。第一に釋名辨相。

十四化心の義に六門分別あり。名を釋し相を辨ず一。處に就て分別す二。三性の分別三。得捨の成就四。化事の差別五。大小の不同六。

（二四）第一門の中に、名を釋し相を辨ず。無にして忽ち起る、之を名けて化と爲す。化を起すの意を名けて化心と爲す。化心の不同に十四を宣說す。或は二十を說く。小乘法の中には十四を宣說し、大乘法の中には二十を宣說す。十四と言ふは、初禪に二有り。一には初禪の化、二には初禪欲界の化と爲す。二禪に三有り。一には二禪に二禪の化を爲し、二には二禪に初禪の化を爲し、三には二禪に欲界の化を爲す。三禪に四有り。當地に一有り、下地に三有り。四禪に五有り。當地に一有り、下地に四有り。良に小乘は上の地度に於て化を現ずること能はざるを以ての故に、唯十四なり。二十と言ふは、菩薩は四禪に依つて通を發す。一一に皆能く五地の化を爲す。謂ゆる欲界乃至四禪なり。故に二十有り。良に菩薩神通自在なるを以ての故に、能く是の如し。名數既に然なり。『相狀は如何。』『人有つて禪に依つて通を修得し竟つて、化事を起さんと欲して先づ是念を作さく、「我當に是の如き

【三五】第二に處に就いて論ず。

【論】雜心論七定品。

の事を化作すべし」と。此心に從つて後に定中に入つて自然に化を現ずるを、名けて化心と爲す。『名相是の如し。此一門竟る。

（三五）次に、處に就て論ず。處別に二有り。一には所依の處、唯四禪のみにして、餘地に在らず。『何が故に然る。』『欲界には定無きが故に、化を起さず。設ひ化を起すこと有るとも、但是れ生慧なり。四空地の中には心志微劣なり。又色を緣ぜず。是が爲に起さず。色界地の中、餘の眷屬の定は支因具せざれば、多の力用無し。所以に起さず。是故に但四根本禪に依る。故に論に說いて云はく、「五通は四禪に在り。根本にして、餘の定に非ず」と。』四禪の中に就て、小乘の如きに依らば、初禪に二有り、二禪に三有り、三禪に四有り、四禪に五有り。備には前に列するが如し。大乘法の中には、各五の化を具す。亦上に說くが如し。二には化現の處、小乘の如きに依らば、欲界の初禪は並に皆四有り。謂ゆる彼四禪地の化有り。二禪に三有り。當地に一有り、上地の化心に共二種有り。三禪に二有り。當地に一有り、上地に一有り。四禪には唯一の當地の化なり。上は能く下を化するが故に下轉た多く、下は上を化せざるが故に上漸く少し。若し大乘に依らば、五地の中に各各備に四禪の化有り。問うて曰はく、『欲界二禪の化心と彼初禪の化心と、何者か勝と爲す。』『若し小乘に依らば、互に勝劣有り。欲界地の中の二禪の化は、去ること遠なるが故に勝る。能く二禪に到る。初初禪地の中の初禪の化は、處上なるが故に勝る。若し大乘に依らば、初禪地の中の初禪の化は一向に是れ勝る。處上なるを以ての故に。去るときは則ち彼欲界

【三六】第三に三性に就て化心を分別す。

地の中の二禪の化と近遠相似たり。同じく能く一切地に往至するが故に。初禪二禪相望めて既に然なり。餘地相望むるも、義皆同じく爾なり。』問うて曰はく、『上禪は下の化心を起す。下地に屬すと爲んや、上禪に屬すと爲んや。』釋して言はく、『下に屬す。』『若し爾らば、上地の眼根に依つて下色を見る時、所生の眼識は應に下地に屬すべきや。』釋して言はく、『類せず。』『云何が類せざる。』『解に兩義有り。其一義は、上禪に依つて下の化心を起す。即ち下地起作の心と麤細相似す。故に下地に屬す。上地の眼根下色を見る時、所生の識は下と同じからず。故に下に屬せず。第二義は、六通の中に唯身通のみ有つて能く變じ、能く化す。化に二の能有り。一には能く異時の作用を起す。化主滅すと雖も、化を留めて故の如し。佛滅後の餘留の影像羅刹窟に住し、母天より來れば起坐して說法し、諸の羅漢等身滅度すと雖も、餘留火を化して己身を焚燒するが如し。二には異處の作用上に依つて通を發して下の化心を起す。餘通の中悉く變化無く、彼異地の作用を起すこと能はず。上眼色を見る時、所生の識は下地に屬せず。耳識も亦爾なり。』此二門竟る。

〔三六〕次に、三性に就て化心を分別す。化に二種有り。一には生慧の化、魔王の佛像を作化するが如し。是の如きの一切なり。二には修慧の化、禪に依つて通を發し、通に依つて化を起す。生慧の化は是れ報無記なり。修慧の化は論說不同なり。若し『毘曇』に依らば、通の體は是れ善、化心は無記なり。成實法の中には、非して『毘曇』を破す。『利他の心より起す、云何が無記ならん』と。當に知るべし、化心は一向に是れ善なり。大乘法の中には、

【十七】第四に得捨成就の義を明す。先づ得について。

【次に等】次に捨の義を明す。

義に兩兼有り。若し世俗等智の起化を論ずれば、『毘曇』と同じ。故に、『地持』の中に說いて、無記化化禪と爲すなり。如實智より起らば一向に是れ善なり。此三門竟る。

(一七)次に、得捨成就の義を明す。先に共得を論ず。先に無く今有る、之を名けて得と爲す。得に二種有り。一には離欲得、凡夫二乘は欲界の結を斷じて初禪を得る時、頓に初禪二種の化心を得。一には當地の化、二には下地の化なり。是の如く次第に乃至彼三禪の結を斷ずる時、頓に四禪の五種の化心を得。當地の中の一、下地の中の四なり。菩薩の人は彼欲結を斷じて初禪を得る時、頓に初禪の五種の化心を得。當地の中の一、他地の中の四なり。乃至四禪も類して亦同じく爾なり。二には生得、有漏の法は上に生ずれば下を失す。退生の時還本法を得するを、名けて生得と爲す。凡夫の人無色に從つて、退して四禪に生ずる時、頓に四禪の五種の化心を得。當地の中の一、下地の中の四なり。三禪に生ずる時、頓に三禪の四種の化心を得。乃至彼初禪に生ずる時、頓に初禪の二種の化心を得。聲聞、緣覺は退生の義無し。是が爲に論ぜず。菩薩は上に生じて下法を失せず。故に生得無し。何んが但上に生じて下法を失せざるのみならん。乃至彼大涅槃果を得て世事を捨せず。故に經に說いて言はく「世間を捨せずして大涅槃を得、煩惱を斷ぜずして涅槃に入る」と。惱尙斷ぜず。況んや餘の功德をや。次に捨の義を論ず。先に有りて今失す、之を名けて捨と爲す。捨に二種有り。一には退捨、聲聞の凡夫彼初禪に從つて、退して欲界の煩惱を起すの時、幷に初禪の化心を失す。乃至退して三禪の結を起す時、頓に四禪の五種の化心を失

【次に等】次に成就について。

【二八】次第五に化心所作の事を明す

す。菩薩は退する時、地地に五を失す。二には生捨、聲聞の凡夫上地に生ずる時、下の化心を失す。之を名けて捨と爲す。二禪に生ずる時、頓に初禪の二種の化心を失す。乃至彼四空地に生ずる時、頓に四禪の五種の化心を失す。次に成就を論ず。有にして失せざるを、名けて成就と爲す。『毘曇』の如きに依らば、有漏の法は下に在つて上を成じ、上に下を成ぜず。是義を以ての故に、凡夫二乘は身、欲界及び初禪地に在つて各四禪の化心を成じ、二禪の中に在つては上三禪の三種の化心を成ず。下は皆成ぜず。身三禪に在つては上三禪の二種の化心を成じ、第四禪に在つては唯四禪の一種の化心を成ず。菩薩の人は身欲界乃至非想に在つて皆一切を成ず。失せざるを以ての故に。（此四門竟る。）

〔二八〕次に、化心所作の事を明す。『地持』に說くが如し。要略すれば唯三なり。一には化身、謂ゆる衆生の色像を化現す。二には化境界外事の色香味等を化爲す。三には化聲なり。化身の中、形に約して四を分ち、處に約して八を論じ、事の爲にも亦八あり。形に約する四とは、『地持』に說くが如し。一には似自身、化主、人の爲に人を化して己に似る。天龍等の形類も皆同じく爾なり。二には不似自身、天、人の爲に止亦化して人と爲り、自身に似ず。天等も亦然なり。三には化似他身、他人是れ人なる、人を化して彼に似たり。天等も亦然なり。四には不似、他人是れ人なる、還つて人を化作して彼に似ず。天等も亦然なり。處に約する八とは、『雜心』に說くが如し。一には自身を化作して自地に住し、二には他身を化作して自地に住し、三には自身を化作して他地に往至し、四には他身を化作して他地

【龍樹の等】大智論。

に往至す。『是義云何。』『化主の身初禪の中に在つて、初禪の自身他身を化作して卽ち初禪に住するを、以て初の二と爲し、初禪の自身他身を化作して下の欲界に往くを、以て後の二と爲す。身初禪に在つて化を爲すこと既に然なり。乃至身四禪に在るも亦爾なり。』此れ初の四竟んぬ。五には他地の自身を化作して卽ち他地に住し、六には他地の他身を化作して卽ち他地に住し、七には他地の自身を化作して自地に往至し、八には他地の他身を化作して自地に往至す。『是義云何。』『化主の身欲界の中に在つて、彼初禪に依つて化心を起す。卽ち初禪と名くるを以て自地と爲し、欲界處と名くるを以て他地と爲す。是義を以ての故に、欲界處と名くるを以て他地と爲す。是義を以ての故に、欲界の自身、他身を化作して欲界に住するを、他地に住すと名け、以て前の二と爲す。此二化を持して初禪に往至するを、自地に至ると名け、以て後の二と爲す。欲界、初禪相望めて既に然なり。諸地相望むるも類して皆同じく爾なり。』事を爲す八とは、龍樹の說くが如し。一には能く小と作し、二には能く大と作し、三には能く輕と作し、四には能く自在に大は小等と爲り、五には能く作して有力の主と爲り、六には能く遠く到り、七には能く地を動かし、八には意の所欲に隨つて盡く皆能く得。化身是の如し。次に化境を明す。中に於て二有り。一には自地の中の一切の境界を化作し、二には他地の中の一切の境界を化作す。次に化聲を明す。化聲の中要略すれば唯二なり。一には內、二には外なり。衆生の聲を作す、之を名けて內と爲し、餘の一切草木の聲を作す、之を名けて外と爲す。內の中、人に約して之を分つて四と爲す。一には化

【二九】第六に大小不同の義を明す。

【涅槃】第二十三

作自相似聲、二には不似、三には化作他衆生聲、四には不似なり。隨相に七有り。『地持』に說くが如し。一には妙音具足、二には廣音具足なり。三には自に從つて起し、四には他に從つて起し、五には所從無くして起し、六には正法を說き、七には事に從つて教嘖す。一一廣く辨ずること『地持論』の如し。外聲を作す中、事別無量なり。具に論ずべからず。此五門竟る。

(二九)次に、大小不同の義を明す。不同に六有り。一には緣心の不同、小乘法の中には、攀緣の心化す。凡そ化現する所は作意して起す。大乘法の中には、始修は作意、終成は不作なり。心分別すること無し。慈善根力は諸の衆生をして自然に見しむるが故に。二には多少の不同、聲聞の人は一心一化して無量なること能はず。菩薩は一心に、能く法界の一切の色像及び一切の聲を爲す。三には寬狹の不同、聲聞は但能く一世界を化す。菩薩は爾らず。一切の世界を悉く能く現化す。四には所至の不同、聲聞の現化は一佛國に於てし、他界に至らず。菩薩の現化は無量界に至る。彼維摩、化の菩薩を遣して香積に至らしむ等の如し。第五には有心無心の不同、聲聞、緣覺は人を化爲すと雖も、中に於て心無し。佛及び菩薩は化を爲すに心有り。故に『涅槃』に云はく、「無量の人を化して各心有らしむ」と。良に佛心は一切處に遍ずるを以ての故に、化に之有り。六には虛實の不同、聲聞、緣覺は復衣服等の事を化作すと雖も、實用を得ず。諸佛菩薩は爲す所の化事即ち實用を得。『地持』に說くが如し。化心是の如し。

大乘義章 卷第十五

【一】淨法聚第百十一段に十六特勝の義を明すに七門の別あり。第一に釋名辨相。初に釋名。

【成實】第十八。

【成實】第十八。

大乘義章　卷第十六本

遠法師撰す

淨法聚の因法の中、此卷に四門有り。十六特勝の義。菩薩十八不共法の義。二十種法師德の義。三十七道品の義。

十六特勝に七門分別あり。一には名を釋し相を辨ず。二には四念に約對して分別す。三には所求成を差別す。四には位に就て分別す。五には禪に約して分別す。六には人に就いて分別す。七には義に隨つて分別す。

（一）初門の中に就て、先に共名を釋し、後に共相を辨ず。十六特勝は、『成實』に說くが如し。『毘婆沙』の中にも亦廣く分別す。特勝と言ふは、此觀不淨觀の法に勝るが故に、特勝と名く。『勝相は如何。』『釋に八種有り。一には破患勝、不淨觀門は、但貪欲を破し、此觀は、能く一切の煩惱を破す。』『何が故に然る。』『一切の煩惱は惡覺に因つて生ず。出入の息を念じて惡覺を除滅す。惡覺斷ずるが故に、煩惱起らず。故に一切を破す。二には斷結勝、彼不淨觀は但能く結を伏す。十六特勝は亦は伏し、亦は永く斷ず。三には寬廣勝、彼不淨觀は但色法を觀じて以て不淨と爲す。特勝は通じて色心等の法を觀ず。四には微細勝、彼不淨觀は但骨等を觀じ、特勝は微細に能く無常斷離滅等を觀ず。五には堅固勝、彼不淨觀は他身を緣じて起し、得て失ひ易し。十六特勝は自身を緣じて起し、得て失ひ難し。六には調停勝、『成實』に說くが如し。彼淨觀は未だ欲を離るることを得ず。已に自ら

【相狀は等】 次に辨相。

厭惡す。彼婆求河邊の比丘の如し、不淨を觀ずるに由つて毒を服し、高きより墜ち、刀を求めて自殺す。藥過増すれば反つて更に患を爲すが如し。特勝は爾らず。能く貪欲を破して厭を生ぜず。七には所生勝、『毘婆娑』に說くが如し。彼不淨觀は衆生の想を增す。其男女等の骨を觀察して不淨と爲すを以ての故に。十六特勝は法想を增長す。空三昧の根本なるを以ての故に。八には所異勝、『毘婆娑』に說くが如し。彼不淨觀は外道と共し、十六特勝は外道に共せず。斯八義を具するが故に、特勝と名く。名義是の如し。特勝の不同に十六を離分す。『名字は是れ何ん。』『出入の息を念ずるに、若は長若は短、息身に遍ず。身行を除く。以て初の四と爲す。喜を覺し、樂を覺し、心行を覺し、心行を除くなり。出入の息を念ずるを、復以て四と爲す。前に通じて八と爲す。心を覺し、心をして喜ばしめ、心をして攝せしめ、心をして解脫せしむ。出入の息を念ずるを、復以て四と爲す。前に通じて十三なり。無常斷離滅等を觀察す。出入の息を念ずるを、復以て四と爲す。前に通じて十六なり。』『名字是の如し。』『相狀は如何。』『息短と言ふは、人の山に上るに重を擔つて疲極し、氣息則ち短きが如し。行者も亦爾なり。麁心の中に在つては、氣息則ち短し。』『何者か麁心なる。』『謂ゆる、躁疾散亂の心なり。』息長と言ふは、入定止の氣息は則ち細なり、細なる時は則ち長きが如し。行者も是の如し。心細なれば息細なり。細なれば則ち長なり。息遍身とは、行者、已身の浮虛を信解して諸の毛孔を見るに、風行出入するを、息遍身と名く。除身行とは、行者念を繫けて息境界に住すれば、境界力を得て心則ち安

靜なり。心安靜なるが故に、麁息則ち滅するを、除身行と名く。問うて曰はく、『氣息長短の有無は當に身に由るとや爲ん、當に心に由るとや爲ん。』釋して言はく、『倶に由る。人の初始胎に處するの時、及び四空に在るが如く、則ち氣息無し。明に知んぬ、身に由ることを。第四禪及び滅盡定に在つては、便ち氣息無し。明に知んぬ、心に由ることを。』問うて曰はく、『氣息は念に由つて生ぜず。人復心に餘事を念ずと雖も、息常に出入するが如し。云何が說いて、心に由つて生ずと言ふ。』釋し言はく、『是息、作念に由らずして生ずと雖も、但衆緣和合するを以ての故に起る。心有れば則ち有り、心無ければ則ち無し。心麁なれば息短く、心細なれば息長し。故に心に由ると說く。』又問ふ、『此息、地に由つて有りとや爲ん、心に由つて有りとや爲ん。』釋して言はく、『倶に由る。故に論に釋して言はく「地に由り、心に由る。三禪已還は是れ有息地なり」と。』『云何が倶に由る。』『人有り、身出入息地に在つて三禪已還の心無ければ、則ち氣息無し。故に知んぬ、心に由ることを。復心有りと雖も、而も身、出入息地に在らざれば、爾時も亦無し。故に知んぬ、地に由ることを。要ず身出入息地に在らば、幷に復其出入息の心有り。爾時方に有り。故に知んぬ、倶に由ることを。』問うて曰はく、『出息は何の處より生じ、何の處に至つて滅する。入息は復何の處より生じ、何の處に至つて滅する。』釋して言はく、『出息は臍輪より生じ、外に至つて便ち滅す。入息は身外より生じ、身に入つて便ち滅す。心の麁細に隨つて近遠不定なり。』問うて曰はく、『彼出入息の中に於て、何者か最も先にして、何者か最も

後なる。』『成實』の如きに依らば、衆生生ずる時は出息最も先なり。衆生死する時は入息最も後なり。第四禪を出づるは生の時と同じく、第四禪に入るは死の時と同じ。『毘曇』に說く所は、生及び死の時は『成實』と同じく、四禪に出入するは、彼と正く翻す。』『相狀は如何。』『毘曇』に說くが如し。出に初めて定に入り、入に初めて定を出づ。第四禪に入るは、出息最も後なり。第四禪を出づるは、入息最も先なり。故に彼と翻す。』此に初分竟んぬ。第二の四が中に覺喜とは、前の四行に由つて心に定住することを得。此定法に從つて、心に大喜を生ず。本喜心有りと雖も、是の如くなること能はず。故に覺喜と名く。覺樂とは、前の心喜に由つて身に調適を得。身調適なるが故に、便ち猗息を得。猗息なるが故に樂なり。人の疲苦の息することを得て安樂なるが如し。故に覺樂と名く。故に經に說いて言はく「心喜を以ての故に、身に猗息を得。身猗を以ての故に、則ち樂を受くることを得」と。覺心行とは、論に言はく「喜に從つて貪心を生ずるを、名けて心行と爲す。受に此生貪の過有りと見るを、覺心行と名く」と。除心行とは、行者喜に從つて貪を生ずるを見るを以て、受を除き貪を去れば心則ち安穩なるを、除心行と名く。此四遠くは出入の息を念ずるに從つて、方に便ち發生す。是故に名けて念出入息と爲す。此に兩分竟んぬ。第三の四が中に覺心と言ふは、心行を除いて心寂靜なるを見るを以ての故に、覺心と名く。令心喜とは、是心或時は還復沈沒し、榮發して喜ばしむるを、令心喜と名く。令心攝とは、若し心還つて掉なれば之を攝して住せしむるを、令心攝と名く。令心脫と

は、若し沈掉を離すれば心則ち調停して二邊を捨離するを、令心脱と名く。此れ亦遠く出入の息を念ずるに從つて、方に便ち發生す。是故に亦念出入息と名く。此に三分竟んぬ。

第四の四が中に無常行とは、心寂定なるに由つて法の生滅を見るを、無常行と名く。言ふ所の斷とは、無常行を用て諸の煩惱を斷ずるが故に、斷行と名く。言ふ所の離とは、有爲法に於て悉く厭離を生ずるが故に、離行と名く。言ふ所の滅とは、心厭離して一切の滅を得るを以ての故に、滅行と名く。有人復說かく「五陰の無常を觀ずるを無常行と名け、五陰の空と無我とを觀察するを名けて斷行と爲し、五陰の苦を觀じて厭離を生ずるを名けて離行と爲し、陰の不生を觀ずるは是れ寂滅の法なるが故に滅行と名く」と。有人復說かく「身の無常を觀ずるを無常行と名け、無明を斷除するを名けて斷行と爲し、愛結を遠離するを名けて離行と爲し、涅槃寂靜の法を證得するを名けて涅槃行と爲す」と。有人復說かく「心心法の無常生滅を觀ずるを無常行と名け、愛法を斷除するを名けて斷行と爲し、餘の煩惱を離するを名けて離行と爲し、通じて一切諸の煩惱結を滅するを名けて滅行と爲す」と。復有人說かく「法の無常を觀ずるを無常行と名け、過去の煩惱を斷ずるを名けて斷行と爲し、未來の煩惱を離するを名けて離行と爲し、現在の煩惱を滅するを名けて滅行と爲す」と。此五義の中、初の一義は『成實』に釋するが如く、後の四義は『毘婆裟』の如し。此れ亦遠く出入の息を念ずるに從つて、方に便ち發生す。是故に亦念出入息と名く。此に四分竟んぬ。相別是の如し。此一門竟る。

【二】第二に四念に約して十六を分つに就て。

【成實】第十八。

【三】第三に其所成を明す。

【四】第四に位に就て明す。

(二)次に、四念に約して以て十六を別つ。中に於て初の四は、正く氣息を念ずるをもて、身念觀と名く。次の四は受念、次の四は心念、後の四は法念なり。問うて曰はく、『此十六特勝は乃ち是れ安那般那觀行なり。安那般那は五停心の攝なり。世尊は何が故に說いて四念と爲したまふ。』『毘婆娑』に云はく、「此四念の方便なるを以ての故に、名けて四念と爲す。又復四念の義は始終に通ずるが故に、四念と名く」と。此も亦名けて四種身憶と爲す。』問うて曰はく、『憶とは、過去を緣ず。所念の氣息は現在に在り。云何が憶と名く。』『成實』に釋して言はく、「此は實には是れ其假名を破する智に、憶の名を以て說く。諸の心心法更に名と爲すが故に。」と』此二門竟る。

(三)次に所成を明す。此十六を修すれば、能く五行を修す。『成實』に說くが如し。謂ゆる、聖行、梵行、天行、學行、無學行なり。彼氣息を觀ずるに念念生滅す。是故に無常なり。無常なるが故に空なり。空は卽ち聖行なり。又論に釋するが如し。氣息を風と名く。風は虛空に行ず。虛空は能く壞相を開導す。壞相は卽ち空なり。空は卽ち聖行なり。能く淨天に生ずるが故に天行と名け、寂滅に到るが爲の故に梵行と名け、學果を得るが爲の故に學行と名け、無學を得るが爲に無學行と名く。此三門竟る。

(四)次に、位に就て論ず。總相に之を論ずれば、此十六をば、名けて安那般那觀行と爲す。安那般那は、五停心の攝なり。故に『成實』の中に、此名を辨ずるを、出入息品と爲す。『毘婆娑』の中にも亦此を說くを、出入息觀と爲す。理實には行者一一の法を觀じて、皆

【五】第五に禪に約して論ず。

【六】第六に人に就て論ず。

【七】第七に義に隨つて分別す。

能く無學の聖果に到る。故に氣息を觀ず。始より終に至つて、唯局つて五停心の位に在らず。『是義云何。』『通相に之を論ずれば、凡より乃ち無學の果に至るまで分分に皆得て、具に此觀を爲す。中に於て別して分たば、初の四は始起は五停心に在り、成は四念に在り。次の八は念處の位の中に在り、後の四は煖等已上乃至無學に在り。』位別是の如し。此四門竟る。

(五)次に、禪に約して論ず。『毘婆娑』に說くが如し。息短は初禪、息長は二禪、遍身は三禪、除身は四禪なり。餘も亦是の如し。論文も直爾なり。廣く分別せず。義に准じて具に論ずれば、初の四は上の如し。第二の四の中の覺喜は初禪、二禪に在り、覺樂は三禪、覺心、除心は第四禪に在り、第三の四が中の令心喜は初二禪に在り、令心攝は第三禪に在り、令心定及び令心脫は第四禪に在り。初得を定と名け、成滿を脫と名く。亦可なり。有漏を脫と名く。第四の四種は皆諸禪に遍ず。禪に約すること是の如し。此五門竟る。

(六)次に人に就て論ず。『毘婆娑』に說くが如し。『何人か能く具す。』『謂はく、佛如來なり。餘は皆具せず。有人復說かく、「羅漢、辟支及び佛能く具す。餘は皆具せず。」と』此六門竟る。

(七)次に、義に隨つて分別す。中に於て、且く九義を以て分別す。一には十智に分別す。終を攝して始に從ふは、唯等智の性なり。故に『毘婆娑』に唯一の等智と云ふ。始終別に論ずれば、初の十二門は唯等智の性なり。無常行は六智の性を具す。謂ゆる等智、及與苦智、法比の二智、盡、無生智なり。見道の前に在るを名けて等智と爲し、見道已去を名けて苦智と爲し、欲の無常を觀ずるを名けて比智と爲し、無學果に在るを、盡無生と名く。斷

離及び滅は義則ち不定なり。若し能斷、能離、能滅を言はば、則ち七智の性なり。謂ゆる等智、苦集の二智、法智、比智、盡無生智なり。世俗斷結は是れ其等智、無漏斷結は是れ苦集智なり。所緣の氣息は苦集の性なるが故に。欲界を緣じて斷ずるを名けて法智と爲し、上界を緣じて斷ずるを名けて比智と爲し、無學果に在るを盡無生と名く。若し緣斷、緣離、緣滅を言はば、則ち六智の性なり。謂ゆる等智及與、滅智、法智、比智、盡無生智なり。見道の前に在るを名けて等智と爲し、見道已去を名けて滅智と爲す。餘の四は解すべし。二には根に約して分別す。『毘婆沙』に說くが如し。唯意のみ相應す。三には三世に分別す。『毘婆沙』に說くが如し。體は三世の攝なり。三世を緣ず。四には三性に分別す。『毘婆沙』に說くが如し。體性は唯善なり。所緣の氣息は唯是れ無記なり。五には三界に分別す。『毘婆沙』に說くが如し、是れ其欲界、色界の所攝なり。所緣の氣息も亦是れ欲界、色界の所攝なり。六には學無學、及與非學非無學等の三義に就いて分別す。終を攝して始に從へば體性は唯是れ非學無學なり。所緣も亦然なり。氣息は是れ學無學に非ざるが故に。此義は彼『毘婆沙』に說くが如し。始終別に論ずれば、初の十二は體性及び緣、備に前に判ずるが如し。後の四種は通じて學無、學及與非學非無學の攝なり。等智能斷は非學非無學、無漏能斷を學無學と名く。七には見斷、修斷、無斷の三義に就て分別す。終を攝して始に從へば、唯是れ修斷なり。所緣の氣息も亦是れ修斷なり。此義は彼『毘婆沙』に說くが如し。始終別論すれば、初の十二は備に前に判ずるが如し。後の四は其見斷修斷及與無斷に通ず、

【八】淨法聚第百十二段に菩薩十八不共法の義を明す【奮迅王菩薩問經】下卷。

所緣は上の如し。唯是れ修斷なり。八には名緣、義緣に就いて分別す。『毘婆沙』に說くが如し。唯是れ義緣なり。是れ名緣に非ず。所緣の氣息は名字に非ざるが故に。九には自他に分別す。『毘婆沙』に說くが如し。此觀通じて自他の氣息を緣ず。唯自緣に非ず。十六特勝、之を辨ずること麤爾り。

菩薩十八不共法の義。

（八）菩薩十八不共法の義は『奮迅王菩薩問經』に出づ。菩薩の行德は二乘に超出して彼と同じからず。故に不共と曰ふ。別に隨つて細分すれば、不共無量なり。今は一門に據つて且く十八を論ず。『名字、是れ何ん。』『六度を六と爲す。身口意業の所作の殊勝なるを、復以て三と爲す。前に通じて九と爲す。他に因らざるが故に、自然に能く一切世間の五明處等を知る。前に通じて十と爲す。大悲心を以て、常に衆生の爲に廣く諸病を治し、後涅槃を授け、利養の爲にせざるを、第十一と爲す。世間の釋梵諸王を願ぜずして常に具受するを、第十二と爲す。好國土に於て放逸の處は、能く衆生を敎へて修習し亦念ぜしむるを、第十三と爲す。種種の惡人は、菩薩の所に於て害を加ふること能はず。若し菩薩を見れば心則ち淸淨なるを、第十四と爲す。諸の衆生有つて三寶を信ぜず、若し菩薩を見れば則ち信心を生ずるを、第十五と爲す。天、龍、鬼神、人、非人等若し菩薩を見れば、卽ち師相を生じ禮事供養するを、第十六と爲す。一切處に於て尊と爲り、導と爲り、諸の衆生を化

【九】淨法聚第百十三段に二十種法師德の義を分別す。【地經論】第十一【地持論】第三。

【前の十五等】隨順說を明すに三、一に地論と地持との同異に就いて。

して惡を斷じ、善を修し、天に生じて解脫せしむるを、第十七と爲す。所に隨つて菩提分法を修習し、神通を具足して魔、便を得ざるを、第十八と爲す。』此十八は始起は菩薩、成滿は佛に在り。今は起處に就て、以て其名を彰すを、名けて菩薩不共法と爲すなり。不共法、之を辨ずること略爾なり。

二十種法師德の義。

(九)法師の德は『地經論』に出づ。『地持論』の中にも亦具に之を辨ず。法を以て世に逆ふを、名けて法師と爲す。師德不同にして、且く二十を說く。『名字、是れ何ん。』『地論』『地持』は各差別有り。然るに今は且く『地論』に依つて之を列す。一には時說と名け、二には正意と名け、三には順說と名け、四には相續と名け、五には名けて漸と爲し、六には名けて次と爲し、七には句義漸次、八には名けて樂と爲し、九には名けて喜と爲し、十には名けて勸と爲し、十一には具德、十二には不毀、十三には不亂、十四には如法、十五には隨衆、十六には慈心、十七には安心、十八には哀愍安樂心、十九には不自讚毀他、二十には不著名利なり。』此二十の中、前の十五は隨順說と名く。外順じて義を說く。後の五種を淸淨說と名く。內心に過無し。前の十五の中、三門もて之を辨ず。一には『地論』を以て、彼『地持』に對して其同異を辨ず。二には義に隨つて分判し、三には名に依つて解釋す。『同異は如何。』『此十五の中の四門は是れ同、十一門は異なり。』『異相は如何。』『地持』

【次に等】二に義に隨って分つ。

の四門を『地論』には八と爲す。彼初の時說を『地論』には二に分つ。時と正意となり。彼『地持』の中には、第六の一門を名けて歡喜と爲す。『地論』には二を分つ。漸と及與次となり。彼『地持』の中には、第八の一門は之を名けて喜と爲す。『地論』には二を分つ。樂と之與喜となり。彼『地持』の中には、第九の一門は之を名けて勸と爲す。『地論』には二を分つ。勸と具德となり。『地經論』の中には其三門有るを、『地持』には七と爲す。『地經論』の中の第三の一門を、名けて頓說と爲す。『地持』には二を分ち、一切說不爲法慳と名く。『地經論』の中には、第四の一門を相續說と名く。『地持』には二を分ち、無間說不作師倦と名く。『地經論』の中には、第十三門の一を名けて不亂說と爲す。『地持』には三を分ち、不亂說文字具足不除隱說と名く。『餘の四は相似す。此四の中に就いて、句義漸次は『地持論』の中には、之を名けて欲不毀と爲す。如法及與隨衆は名義皆同じ。本應に悉く同じかるべし。當に是翻は不同の故に爾るべし。同の義且く然なり。次に義に隨つて分つ。此十五は義を以て相從つて、攝して以て七と爲す。初に兩門有り。合して第一と爲す。他の宜き所に隨ふ。中に於て、時說は物の心の宜きに隨ふ。受けんと欲するものには爲に說き、欲無きには則ち止む。正意の一種は他形の宜きに隨ふ。恭肅には爲に說き、慢高には則ち止む。次に兩門有り。合して第二と爲す。自の宜き所に隨ふ。中に於て頓說は已に慳無きを明し、相續の一種は已に惰無きを明す。次に三門有り。合して第三と爲す。法の宜き所に隨ふ。中に於て、漸說は教法に順ずるを明し、次は義法に順ず。句義漸次は雙に教

【次に等】三に名義を釋す。

義に順ず。亦可なり。此句は行法に順ず。次に三門有り。合して第四と爲す。重ねて復其他の宜き所に隨ふを明す。『前と何の別ありて復更に來る。』『向前の初分は他の現在聽法の心の宜き、及與形の宜きに隨ひ、此門は他の根性の宜き所に隨ふ。大根には大を授け、小根には小を授く。是の如きの一切なり。』次に一門有り。以て第五と爲す。重ねて復其自の宜き所に隨ふを明す。『前と何の別かある。』『前の第二分は己が說心の無慳無惰なることを明す。此は說德を明す。智有れば便ち說き、智無ければ則ち止む。』次に三門有り。合して第六と爲す。重ねて復其法の宜き所に隨ふを明す。『前と何の別かある。』『前の第三分は法の次第に隨ひ、此は法の體に順ず。中に於て不毀は、言はく出道に順じ、不亂は理に順じ、亦敎法に順ず。如法は四諦の法相に順ず。末後の一門は、以て第七と爲す。說能く衆に順ず。義別是の如し。次に名義を釋す。時說と言ふは、諸の衆生、心に樂聞有つて憂惱等の障難無きの時を觀じて、之が爲に宣說するが故に時說と名く。正意と言ふは、菩薩正意に諸の衆生、恭敬求法の威儀に住するを觀じて、然る後に爲に說く。『戒經』の中の自立他坐應に說くべからざる等の如きを、名けて正意と爲す。此二は『地持』に合して時說と名く。頓說と言ふは、一切衆の爲に一切の法を說いて心に慳悋無きを、名けて頓說と爲す。爲一切衆は人に於て頓なり、說一切法は法に於て頓なり。心に慳悋無きは內心の頓なり。『地持論』の中には別して無慳を分つて、以て一門と爲す。法慳を爲さず。相續と言へば、說に停息無く諸法の中の嫉妬の意を捨するを、相續說と名く。說に停息無きは說

相續を明し、嫉妬の意を捨するは心相續を明す。『地持論』の中には、無嫉意を分つて別して一門と爲す。師と作つて倦まざればなり。漸とは、教の次第に依つて說くなり。故に論に釋して言はく、「字句義の次第に依つて說くなり」と。次とは、義の次第に依つて說くなり。苦を說き集に至り、滅を說き道に至る。是の如きの一切なり。故に論に釋して言はく、「字句の次第の如く、義も亦是の如し」と。此漸と次とを『地持論』の中には、合して一門と爲し、名けて歡喜と曰ふ。次第宣說は記持すべきこと易し。故に物をして喜ばしむ。句義漸次とは、論家に釋して言はく、「同義の法を說いて、異義を說かず」と。『此相は如何。』『向前の教及與義の中に於て、淺ならば則ち俱に淺、深ならば則ち俱に深なり。離せずして宣說するを、同義を說くと名く。苦諦の中に有作を宣說すれば、集滅道の中にも亦有作を說き、苦諦の中に無作を宣說すれば、集滅道の中にも亦無作を說くが如し。是の如き一切を、同義を說くと名く。亦可なり。此れ行法の中に就いて、其次第を明す。或は一處なり。是の如く一切を、同義を說くと名く。此を『地持』の中には、之を名けて欲と爲す。行法を辨宣して人をして樂んで行ぜしむるが故に、名けて欲と爲す。示とは、論に言はく、「應に示すべき所を示す」と。小根の衆生には應に小法を示すべく、大根の衆生には應に大法を示すべし。是の如く一切を、應に示すべきを示すと名く。此は教法に約す。喜とは、論に言はく、「應に喜ぶべき所を喜ぶ」と。根の不同に隨つて、之が爲に義を辨じて、其心をして應に喜ぶべきを喜ばしむ。此は義法に約す。此示と喜とは、『地持論』の中には、合し

て一門と爲し、直に名けて喜と爲す。彼の中に具に釋す。乃ち四句有り。一には應に示すべきを示す、二には應に授くべきを授く、三には應に照すべきを照す、四には應に喜ぶべきを喜ぶ。示授は教に約す。總じて擧ぐるを示と稱す。示正く與ふるを授と爲す。照喜は義に約す。總じて擧げて知らしむる、之を名けて照と爲す。機に稱ひて別つて教へて、其をして歡喜せしむるが故に、名けて喜と爲す。此四は皆悉く物の根の宜きに稱ふ。故に並に應と云ふ。勸とは、論に言はく、「怯弱の衆生を勸めて勇猛ならしむるが故に、名けて勸と爲す」と。此義は『地持』には、隱して彰さず。具德と言ふは、論に言はく、「現智、比智、阿含、所證に依つて人の爲に說くを、名けて具德と爲す」と。現智と言ふは、現量智なり。比智と言ふは、比量智なり。此れ法相を知る。阿含と言ふは、教量智なり。此れ教法を知る。此三は前の三量章の中に、具に廣く分別するが如し。證は是れ證智なり。此は理法を知る。此を具して方に說くが故に、具德と名く。『地持論』の中には、此を說いて勸と爲す。不毀と言ふは、『地論』に釋して言はく、「善道に順じて說く」と。『地持』に釋して言はく、「順じて善趣に向ふ」と。此を出道と名く。以て善趣と爲す。凡そ言ふ所は、隨順出道を論じて善趣に向ふと名く。不亂と言ふは、論に自ら釋して言はく、「不動、不雜、正入、非稠林の行なり。故に不亂と曰ふ」と。不動と言ふは、淺過を離る。淺近の言は法理を差失するが故に動と爲す。不雜と言ふは、深過を離る。深隱を雜へざるが故に不雜と名く。正入と言ふは、前の不動を顯す。言正にして理に順ずるが故に正入と云ふ。非稠林と

【後の五種等】次に清淨說に就いて

は、前の不雜を顯す。佛法深しと雖も開示して淺ならしむれば、小兒も亦解す。深き隱覆を離るるを非稠林と名く。『地持論』の中には、此を分つて三と爲す。一には不亂と名く。亦は名けて應と爲す。言理法に順じて理と相應す。二には文字具足、亦は善說と名く。言教法に順ず。三には不深隱、亦は不雜と名く。言化儀に順じて深隱を雜へず。如法と言ふは、四眞諦に順ず。凡そ言論する所は四眞諦に應じて、人をして之に依つて苦を除き集を斷じ、滅を證し道を修せしむ。隨衆と言ふは、論に言はく、「四衆八部に隨順して爲に法を說く」と。比丘の中に於ては比丘の法を說き、尼衆の中に於ては爲に尼の法を說く。是の如きの一切なり。此前の十五を、隨順說と名く。後の五種の清淨說の中に就いて、四無量に依つて人の爲に法を說くを、清淨說と名く。初の一は是れ慈、次の二は是れ悲、次の一は是れ喜、後の一は是れ捨なり。怨の衆生に於ては慈心もて說くとは、怨所には瞋多きが故に、須く慈もて說くべし。惡の衆生に於ては安心もて說くとは、惡行の衆生は其危怖有り。善を授けて安からしむるを、安心說と名く。苦樂放逸貧乞の衆生には哀愍心安樂に住して說くとは、違緣逼惱するを苦の衆生と名け、樂を得て自ら縱なるを樂放逸と名け、順緣不足なるを貧衆生と名く。此三人に於て共に二心を起す。苦及び貧に於ては其現苦を憐み、樂放逸に於ては其當苦を愍む。是故に通じて哀愍の心を起して說く。苦の衆生に於ては、其苦對治樂を得しめんと欲す。放逸樂の者には罪を離れ無過樂を得しめんと欲し、貧乞の者に於ては其衆具の樂を得しめんと欲す。是故に通じて安樂心を起して說く。

嫉纒を以て自ら讃じて他を毀らざるは、喜心の說なり。名利に著せざるは、捨心の說なり。若し『地持』に依らば、先に捨後に喜なり。此五は是れ淸淨心の說なり。法師の德、之を辨ずること麤爾り。

大乘義章卷第十六本

大乘義章 卷第十六末

遠法師撰す

三十七道品の義に三門分別あり。一には通釋。二には別解。三には九法に約對して分別す。

(一)通釋の中に就いて、曲くは六門有り。一には名義を釋し、二には行體分別、四には止觀分別、五には八正分別、六には大小不同なり。先に共名を釋す。道品と言ふは、經の中に亦は名けて菩提分と爲し、亦は覺支と名く。道とは、外國には名けて末伽と曰ひ、此には翻じて道と名く。菩提は胡語にして、此には亦道と名く。外國には名多し。故に一の道に於て種種の名を立つ。或は菩提と名け、或は末伽と曰ふ。此方には名少し。同じく名けて道と爲す。外國の人の如きは、一の滅の中に於て種種の名を立つ。或は涅槃と名け、或は毘尼と名け、或は復之を說いて彌留陀と爲す。此には通じて滅と名く。道も亦之の如し。『云何が道と名くる。』『義を通じて道と名く。』解に四義有り。一には人に對して釋す。人を通じて果に至る、之を名けて道と爲す。世の行處を名けて道と爲すが如きなり。二には障に對して釋す。能く壅障を除いて行ずる時無礙なる、之を名けて通と爲す。通の故に道と名く。世間の壅障無き處を說いて道と爲すが如似きなり。第三には行義に約就して辨釋す。戒定慧等は行數各別なり。道如跡乘の四義寬通す。通の故に道と

【一】淨法聚第百十四段に四十七道品の義を明すに三門の別あり、第一には通釋、中に亦六門あり、一に名義を釋す。

【末伽】マールガ(Marga)

【菩提】ボーディ(Bodhi)

【涅槃】ニルヴーナ(Nirvāna)

【毘尼】ヰナヤ(Vinaya)

【彌留陀】ニローダ(Nirodha)

名く。第四には行體に約就して分別す。眞德の中に於て、諸行同體虛融無礙なる、之を名けて通と爲す。通の故に道と名く。『菩提、末伽の兩道に何の別かある。』『通じて釋すれば、是れ一にして而も異名を立つ。其れ猶眼目のごとし。別たば則ち法を顯す。差異無きに非ず。異に三種有り。一には因果の分別、因中の道を名けて末伽と爲し、果中の道を說いて菩提と爲す。二には通局の分別、末伽の道は因及び果に通ず。故に四諦の中の末伽の道は因果に通ずと說く。菩提の道は局つて唯果に在り。三には事理の分別、通理の道を說いて末伽と爲し、事別の道を說いて菩提と爲す。』『其義云何。』『戒定慧等の三十七品各各別異なるを、名けて事道と爲す。道如迹乘の四義齊しく通ずるを、說いて理道と爲す。又復道品を名けて事道と爲し、空無我等の諸法實性を名けて理道と爲す。言ふ所の覺とは、一切の諸の煩惱の過を覺知するが故に、名けて覺と爲す。又能く一切の法義を覺知するを、亦名けて覺と爲す。言ふ所の品とは、經に亦は分と名け、亦は名けて支と爲し、亦は名けて具と爲し、亦は助道法と云ふ。品とは、謂はく、品別なり。道行差異するが故に、名けて品と爲す。分とは分別なり。道行分異するが故に、名けて分と爲す。品と義同じ。亦可なり。分とは、因の別稱なり。藥の多分共に一治を成ずるが如し。此も亦是の如し。言ふ所の支とは、名胡漢を兼ね。胡語に支と名くるは、此には翻じて因と名く。辟支迦を此には因緣と名くるが如し。漢語に枝と名くるは、是れ其枝別なり。別の義は前の如し。言ふ所の具とは、是れ其因の義なり。米麵等を名けて食具と爲すが如し。彼念處等は道を

【第二に等】二に行門に就いて分別す。

【此七が等】行門分別の中、先づ行に就き人に約し位に隨つて分別す。

成ずるの具なるが故に、名けて具と爲す。助法と言ふは、是れ其緣の義なり。果德を資助するが故に、名けて助と爲す。』問うて曰はく、『爲當正しく菩提道と、之與覺とを名けて、品と爲し、分と爲し、支と爲し、具と爲すや。爲當彼菩提道の與に覺の因の義と作るが故に、品分等と名くるや。』『是義不定なり。若し果德に名けて以て菩提と爲し、道と爲し、覺と爲さば、彼念處等の三十七法能く彼因と爲るを、道分等と名く。若し因行に名けて以て菩提と爲し、道と爲し、覺と爲さば、彼念處等の道の中の差別道等を集成するを、道分等と名く。』名義是の如し。

第二に、次に行門に就いて分別す。行門に七有り。一には是れ念處、二には是れ正懃、三には如意足、四には是れ五根、五には是れ五力、六には七覺分、七には八正道なり。故に『毘曇』に云はく、「處、方便、一意、軟鈍及び利根、見道、思惟道、佛を三十七と說く」と。處は是れ四念、方便は正懃、一意は是れ其四如意足なり。心一境を守るが故に一意と名く。軟鈍は五根、利根は五力、見道は八正、修道は七覺なり。此七が中に就いて、三門に分別す。一には行に就き人に約し位に隨つて分別し、二には一人の修入に就いて分別し、三には位に約して分別す。行に就き人に約し位に隨つて別つとは、初の三門に行に就いて分別し、次の二は人に約し、後の二は位に隨ふ。行の中の三とは、道品は正しく智慧を用て體と爲す。念處は是れ慧なり。故に先に之を明す。慧は懃策に由つて、方に能く斷除す。火の風を得て方に能く焚燒するが如し。故に正懃を明す。懃過ぐれば心動じて法

【次に等】次に一人の修入に就いて分別す。

を見ること能はず。水風增すれば火をして疾く滅せしむるが如し。須く定を以て攝すべし。如意は是れ定なり。故に如意を明す。行別是の如し。人に約すと言ふは、人に利鈍有り。前の三道品の鈍人の心に在るを、名けて五根と爲し、利人の心に在るを、說いて五力と爲す。譬へば世間の利刀もて物を割くに疾疾能く過ぐるが如し。利人是の如し。故に名けて力と爲す。人別是の如し。位に隨ふと言ふは、位に見修を別つ。前の三道品の見諦道に在るを、名けて八正と爲し、修道の中に在るを、說いて七覺と爲す。問うて曰はく『聖位の見は前、修は後なり。何が故に名の中、先に七覺を彰し、後に八正を論ずる。』『此れ說の次第にして、行の次第に非ず。』『何が故に說く時行次に依らざる。』『論に成釋有り。蓋し增數の法門に依るが故に爾なり。前の念處等は四四を門と爲す。四を增して五に至る。故に根と力とは五五を門と爲す。五を增して七に至る。故に次に七覺なり。七を增して八に至る。故に後に八正道分を宣說す。』竟る。此一門次に一人の修入に就いて分別す。行者將に正道を修習せんと欲すれば、先の師の所に從つて正法を聽受し、旣に法を聞き已つて念を繫けて心に在く。是故に初に先づ其念處を明す。此法に依つて如實の利を求めんと欲すれば、懃に非ざれば得ず。故に次の第二に其正勤を明す。精進を以ての故に、法を得て心住す。故に次の第三に如意足を修す。心住するを以ての故に、能く出道を生ず。故に次の第四に其五根を明す。是根增長して能く煩惱を遮す。之を說いて力と爲す。故に次の第五に其五力を明す。樹の小なる時但根有るべく、未だ堪ゆる所有らず、其長大に至つて力能

【次に等】次に位に約して論ず。

く水を障ふるが如し。根力是の如し。根力具足して出道に入らんと欲すれば、先づ七覺を以て其心を調練す。若し心掉動なれば、猗定捨の三行を以て之を攝し、若し心沈沒すれば須く擇法、精進及び喜の三法を以て之を策すべし。念は則ち倶に調ふ。故に次の第六に七覺支を明す。心調を以ての故に、能く正道に入る。故に次の第七に其八正を明す。此門の中に於て、七覺は前に在り、八正は後に在り。然るに此門の中には、見修の二道を同じく八正と名く。局つて見に在るにあらず。此二門竟る。次に位に約して論ず。行は實には齊く通ず。義に隨つて且く分つ。開合不定なり。或は分つて二と爲す。世及び出世なり。見道已前を名けて世間と爲し、見道已上を名けて出世と爲す。七が中の初の五は世間に在り、後の二は出世なり。或は離して三と爲す。一には方便道、見道の前に在り。二には見、三には修なり。七が中の初の五は方便に在り、八正は見に在り、七覺は修に在り。或は分つて四と爲す。外凡、內凡、見道、修道は是れ其四なり。念處已前を名けて外凡と爲す。未だ理を覺せざるが故に。煗等の四心を名けて內凡と爲す。諦理を學觀して出世聖人の性を成就するが故に。見修は知るべし。七が中の初の門は外凡に在り。念處の所攝なり。次の四は內凡、八正は見道、七覺は修道なり。或は分つて七と爲す。『毘曇』に說くが如し。念處の位の中を、名けて四念と爲し、煗心の中に在るを、名けて正勤と爲す。初に理相を得て勤心に求むるが故に。頂心の中に在るを如意足と名く。所觀の法に於て心轉た寂なるが故に。忍心の中に在るを、名けて五根と爲す。心住して退せず、決定して能く出世道を生

【第三に等】三に其行體に就いて分別するに三、先づ其行體を定む。

ずるが故に。世第一法を、名けて五力と爲す。深く煩惱を伏し、親しく出世無漏の道を生ずるが故に。八正は見道、七覺は修道なり。小を將て大に類するに、大も亦應に然るべし。但說處無し。行門是の如し。

第三に、其行體に就いて分別す。中に於て三有り。一には其行體を定め、二には開合を辨じ、三には其廢立を明す。行體に十有り。謂ゆる、信、進、念、定及び慧を、即ち以て五と爲し、彼八正の中の正思及び戒を、前に通じて七と爲し、彼七覺の中の猗、喜及び捨を、前に通じて十と爲す。十が中の九種は心法を體と爲し、戒の一門は、『毘曇』の如きに依らば、色法を體と爲す。若し『成實』に依らば、作戒は是れ色、無作は是れ非色非心なり。心法の中、若し『成實』に依らば、信、進、念、思の此四は通數、餘の五は別數なり。別の中、猗、捨、及與定慧は、唯善なるが故に別なり。喜は唯有漏にして無漏に通ぜざるが故に、名けて別と爲す。若し『毘曇』に依らば、信、進、猗、捨、此四は是れ其善大地の中の心數の法なり。念、定、慧、喜、此四は是れ其通大地の中の心數の法なり。喜は是れ受數なり。餘の三は知るべし。正思覺數は五大地の外の別の心數なり。通と善と不善と大小煩惱とは、是れ五地なり。『思は是れ覺數なり。』何が故に思と名くる。『思量して義を覺するが故に、名けて思と爲す。』問うて曰はく、『何が故に諸の心法の中、唯此九を說いて以て道品と爲し、餘の通大地、餘の善大地、及與觀數をば、說いて道と爲さざる。』釋して言はく、『法門は化に隨つて隱顯す。具に責むべからず。今は且く相に隨つて

粗所以を釋す。』『通の中の想數は何の義を以ての故に、說いて道と爲さざる。』釋して言はく、『想とは、取相を義と爲す。彼假想事觀の中に於て、功力增强なり。正道の中に於ては、想の用義微なり。是が爲に說かず。』『何が故にして然る。』『諸の是慧の用微隱の處には、多く想の力を須ふ。慧の用强き處には、假想必ず少し。道の中には、慧强きが故に想を說かず。』『通の中の欲數は、何の義を以ての故に說いて道と爲さざる。』『如來宣說したまはく「三十七品は欲を根本と爲す」と。末を簡んで本に異するが故に、欲を說かず。』『通の中の觸數は、何の義を以ての故に說いて道と爲さざる。』『如來宣說したまはく「三十七品は明觸を因と爲す」と。果を簡んで因に異するが故に、觸を說かず。又觸は專ら能く心境を和會して相觸對せしめ、諸の行心に於て、齊しく能く和合して彼此を簡ぶこと無し。三十七品は品別を義と爲す。諸の行門に於て偏强有る者を、說いて道品と爲す。齊き者は論ぜず。觸は用齊等なれば品別顯ならず。故に道品の中には、其觸を說かず。』『通の中の思數は、何の義を以ての教に說いて道と爲さざる』。『思は是れ行主なり、起作を義と爲す。諸の行門に於て、齊しく能く起作して處として偏强無し。亦道の中に於て品別顯ならず。故に隱して說かず。』『通の中の解脫は、何の義を以ての故に說いて道と爲さざる。』『夫れ解脫とは、境界の中に於て限量を受取して、境に於て數捨して久く住すること能はず。道は境界に於て久く住す。唯善なり。解脫は順ぜず。所以に立てず。又復解脫の相顯なるは果に在り。道品は因に在り。故に解脫を隱す。』『通の中の憶數は、何の義を以て

【涅槃】第三十七

【次に等】次に開合を論ず。

の故に、說いて道と爲さざる。』『緣に於て發悟するは、是れ其憶の義なり。已更の事に於て憶うて多く發悟す。未經の事の中に發悟すること則ち少し。道品は多く未知の法の中に於て觀察求知す。憶は是中に於て力用微少なるが故に、隱して說かず。』『善大地の中の無貪、無瞋、慚、愧、不害、此五は、何が故に說いて道と爲さざる。』『此は世事の離過の行の中に於て、功力增强なり。理觀の中に於ては、力用微少なり。是が爲に說かず。』『善大地の中の不放逸數は、何の義を以ての故に說いて道と爲さざる。』『不放逸根は是れ其一切善法の根本なり。本を簡んで末に異す。是が爲に說かず。又不放逸は道品の中に於て、齊く能く攝護して偏强の處無し。所以に說かず。』問うて曰はく、『前に三十七品は欲を根本と爲すと說く。今復不放逸法を宣說して、以て根本と爲す。何の差別か有る。』『涅槃』に說くが如し。欲は是れ生因、其れ猶生母のごとし。諸善皆欲に由つて生ずるが故に。不放逸は是れ其了因、亦は養因と名く。其れ猶養母のごとし。護攝の心は是れ不放逸なり。諸善を護するが故に。』問うて曰はく、『不放は通じて諸善を護するに道と說かざれば精進は通じて策するに、何が故に道と說く。』釋して言はく、『精進は道の義の中に於て偏强の處有り。品別得べし。故に說いて道と爲す。』『別心數の中の觀數は、何が故に說いて道と爲さざる。』『觀の用は覺に似たり。初に從つて以て擧ぐ。故に後の觀を隱す。又復觀數は推求すること慧に似たり。道の中には慧强きが故に、彼觀を隱す。』行體是の如し。

此一門竟る。次に、開合を論ず。行に就いて之を論ずれば、六を開し四を合す。位に就いて辨ず

【次に等】次に廢立を論ず。
【涅槃】第二十一

れば、四を開し六を合す。『云何が行に就いて、六を開し四を合する。』『彼前の十種の行體の中、思、猗、喜、捨の四種を分たず。之を名けて合と爲す。餘の六種の中の信を分つて二と爲す。信根、信力なり。或は分つて三と爲す。謂はく、八正の中の正語、正業、及與正命なり。念を分つて四と爲す。念根、念力、念覺、正念なり。定、慧、精進、各分つて八と爲す。是故に三十七品有らしむ。慧を八に分つとは、彼四念處は通じて皆是れ慧なり。卽ち以て四と爲す。五根の中に其慧根有り。五力の中に其慧力有り。七覺支の中に擇法覺支、八正道の中に其正見有り。斯は皆是れ慧なり。合して八と爲すなり。精進の八とは、彼四正勤は通じて是れ精進なり。卽ち以て四と爲す。五根の中に精進根有り。五力の中に精進力有り。七覺支の中に精進覺支、八正道の中に正精進有り。前に通じて八と爲す。定の中の八とは、四如意足は通じて皆是れ定なり。卽ち以て四と爲す。五根の中に其定根有り。五力の中に其定力有り。七覺支の中に定覺支有り。八正道の中に其正定有り。卽ち以て四と爲す。前に通じて八と爲す。』行に就いては是の如し。『云何が位に就いて、四を開し六を合する。信は唯見道已前に在り、正思及び戒は唯見道に在り、猗、喜及び捨は唯修道に在り。之を名けて合と爲す。念、進、定、慧は始終に該通す。之を目けて開と爲す。』開合是の如し。此二門竟る。次に廢立を論ず。行實には無量なり。化の一門に隨つて三十七を說く。故に『涅槃』に云はく、「三十七品は是れ涅槃の因なり」と。名けて大涅槃の因と爲すことを得ず。無量無邊阿僧祇の道を、方に名けて大涅槃の因と爲すことを

【涅槃】第二十四

【涅槃】第三十七

得。行實には齊く通ず。義は言を待たず。化に隨つて廢立す。須く所以を釋すべし。今は先づ彼念處、正勤及び四如意に就いて、以て廢立を論ず。行實には無量なり。『何の義を以ての故に、偏に此三を說いて行體と爲す。』『此三は要なるが故に。』『此に何の要か有る。』『三十七品は慧を用て主と爲す。念處は是れ慧なるが故に、念處を明す。慧は須く制發すべし。制せざれば狂亂し、發せざれば沈濁す。精進は能く發するが故に正勤を明し、定は能く制攝するが故に如意を明す。餘は是の如くならず。故に隱して彰さず。』次に根力に就いて廢立を料簡す。行數無量なり。『何が故に偏に信等の五種を說いて、根と爲し、力と爲し、餘は是の如くならざる。』釋して言はく、『根の義、聚說不定なり。或は一種を說く。謂はく、不放逸なり。『涅槃』に說くが如し。不放逸の故に、能く諸行をして牢固不壞增長出生せしむ。不放逸獨り此能有ることを顯すが爲の故に、偏に根と說く。餘は是の如くならず。廢して立てず。又餘行は皆不放逸の出生する所なることを顯すが故に、根と說かず。又『涅槃』に說く、「三十七品は欲を根本と爲す」と。此も亦是れ其一種の根なり。樂欲有るを以て、便ち能く一切の諸行を攝取す。樂欲獨り此能有ることを彰さんが爲の故に、偏に根と說く。餘は是の如くならず。故に廢して立てず。又餘善は皆欲の出生なることを顯すが故に、根と名けず。或は三種を說く。謂ゆる、無貪、無瞋、無癡の三善根なり。此を以て能く貪欲、瞋、癡の三不善根を治す。故に偏に之を說く。餘は是の如くならず。故に廢して存せず。又此三種は能く身口七支の善業を生ず。故に說いて根と爲す。

餘は是の如くならず。故に廢して立てず。又餘善は皆三の所生なることを彰すが故に、根と說かず。或は五種を說く。謂ゆる、信、進、念、定、慧根なり。蓋し乃ち偏に出道に望むるが故に爾なり。此五は能く出道を生ずる力强きが故に、偏に根と說く。』『云何が偏に强き。』『出世の聖道は慧を正體と爲す。慧根は正しく能く彼體を出生す。故に慧根を立つ。慧は定に由つて攝し、精進は策發して方に出道を生ず。是故に須く定進を立てて根と爲すべし。定は念に由つて成じ、進は信に由つて起る。是故に須く信念を立てて根と爲すべし。又復出道は要ず唯止觀なり。定は能く止を生じ、慧は能く觀を起す。故に定慧の二法を立てて根と爲す。定は念の助に由つて方に能く止を生じ、慧は進の助に由つて方に能く觀を起す。故に復須く念進を立てて根と爲すべし。出世の聖道は從來未だ得ず、人多く疑惑す。信に非ざれば求めず。信有るを以ての故に、向の四根を起して聖道に趣入す。故に復須く信心を立てて根と爲すべし。又此信等は能く五種の大煩惱地を治するが故に偏に根と說く。』『何者か五地なる。』『謂ゆる、不信、懈怠、無明、掉及び放逸、是れ五地なり。信は不信を治し、精進は怠を治し、慧は無明を治し、禪定は掉を治し、念は放逸を治す。』問うて曰はく、『定心は能く亂を治し、念は失念を治す。今何を以ての故に、定は掉を治し、念は放逸を治すと說く。』釋して言はく、『對治は義に兼正有り。慈無量は正しく瞋恚を治し、兼ねて貪欲を治し、悲は正しく瞋を治し、兼ねて害覺を止むるが如し。此も亦是の如し。定は正しく亂を除き、兼ねて掉過を捨す。定を得る者は必ず能く掉戲の過を遠離

【涅槃】第二十三

【雜心】第十。

するを以ての故に、念心復正く失念を治すと雖も、兼ねて放逸を除く。正念に住する者は、必定して放逸の過を起さざるが故に。』問うて曰はく、『不放は正く放逸を除くも、何んが根と說かずして、乃ち兼治に就いて念を說くを根と爲す。』釋して言はく、『不放は其力最も大なり。獨り諸善をして牢固增長せしむ。如來之を說いて、以て一根と爲す。故に此には立てず。良に信等には前の多義有るを以ての故に、立てて根と爲す。餘は是の如くならず。廢して存せず。又餘善は皆五が所生なることを彰すが故に、根と說かず。或は復宣說すらく「一切の善法を悉く名けて根と爲す」と。『涅槃』に說くが如し、「謂ゆる、信根、戒施聞根、慧忍精進念定根等なり。果に望めて皆生なるが故に、通じて根と名く」と。此等の開合は一義に隨ふ。今は一門に據つて、且く說いて五と爲す。』力は根の釋に同じ。次に八正に就いて廢立を料簡す。『何が故に偏に正見等の八を說いて、以て正道と爲し、餘は皆立てざる。』『雜心』に釋するが如し。聖八正を說いて、之を以て輪と爲す。輪には必ず轂有り。轂とは是れ戒なり。謂はく、正語、正業、正命なり。故に此三を說いて、以て正道と爲し、戒行の本、衆行の所依なるを以ての故に、說いて轂と爲す。轂に依つて輻有り。輻とは是れ慧なり。慧は是れ正見なるが故に、復正見を宣說して道と爲す。良に智慧外に向つて緣を取る、輻と相似するを以ての故に、說いて輻と爲す。輻は輞を須て攝す。輞とは是れ定なるが故に、須く正定を宣說して道と爲すべし。定は能く慧を攝す。輞と相似するが故に、說いて輞と爲す。思は慧を助くること強く、念は定を助く

【雜心】第十。

ること強し。故に復思念を宣說して道と爲す。既に輪體有れば、復轉ずる者有り。精進能く轉ずるが故に、復精進を宣說して道と爲す。又復此等は入聖の初、八邪に翻對す。故に此八を說いて、以て正道と爲す。餘は此義無し。故に廢して立てず。八邪と言ふは、謂ゆる邪思惟等なり。』問うて曰はく、『何が故に信心を說いて、以て正道と爲さざる。』『信は實に遍く通ず。但此れ信は是れ始相なることを彰さんが爲に、樹てて世間に別つ。八聖道とは、已に聖位を證して信地の收に非ず。故に信を說いて、以て正道と爲さず。』問うて曰はく、『若し信は是れ始相、八が中に彰さざらしめば、何が故に經に初果の人の四不壞信を說く。』釋して言はく、『道品は多行相對す。是れ隱顯門なり。出道を別たんが爲に、見前に信を說く。四不壞信は是れ獨行門なり。餘義を列せず。見道已上は信心實に勝る。故に之を說くことを得。』『何が故に猗喜及び捨を說いて、以て正道と爲さざる。』『雜心』に釋して言はく「見道は速疾なり。彼行は速ならず。見に於て順ぜず。是が爲に立てず」と。』『若し爾らば定心は境に住して速ならず。何が故に之を說いて、以て正道と爲す。』釋して言はく、『見道復速疾に法中に入ると雖も、速は是れ捨に非ず。法を外に捨して法に入ることは、正く定力に出る。是が爲に須く立つべし。猗、喜、捨等は是の如きの能無し。故に之を存せず。』次に七覺に就いて廢立を料簡す。『何が故に偏に念覺等の七を說いて、以て覺支と爲し、餘は立てざる。』釋して言はく、『七覺は修道に在り。修の中の要は唯止と觀となり。是義相資して能く彼岸に達す。定とは是れ止なり。擇法は是れ觀

なり。故に此二を說いて、以て覺支と爲す。猗、捨の二種は止を助くる力強く、精進及び喜は觀を助くる力強し。故に復須く立つべし。念は能く倶に調ふ。故に念覺を立つ。又復此等は能く七使を治す。故に偏に之を說いて、以て覺支と爲す。此れ『增一阿含經』に說くが如し。』『何者か七使なる。』『一には貪欲使、謂はく欲界地の貪愛の煩惱なり。二には有愛使、謂はく、上二界の貪愛の煩惱なり。彼經には名けて欲世間使と爲す。三には瞋使、四には癡使、五には慢使、六には疑使、七には見使なり。三界の五見なり。』『云何が對治する。』『念は貪欲を治す。守心正念にして貪欲を離るるが故に。喜覺は欲世間使を對治す。慶んで聖道に入り、世間を離るるが故に。擇法は瞋を治す。智慧を修するを以て我人を破離し、瞋恚を除くが故に。捨覺は癡を治す。捨は猗除のごときなり。法の平等を證して癡冥を捨するが故に。猗覺は慢を治す。心猗息するを以て慢高を離するが故に。定覺は疑を治す。法に於て正く住すれば猶豫を離するが故に。精進は見を治す。懃は正慧を求めて諸見を斷ずるが故に。此能有るを以て、說いて覺支と爲す。餘は是の如くならず。故に廢して立てず。』『何が故に信を說いて、覺支と爲さざる。』『此れ前の釋に同じ。信は是れ始相、樹てて世間に別つ。故に此を立てず。』『何が故に思を說いて、覺支と爲さざる。』『修道は容豫なり。思性は躁疾なり。修に於て順ぜず。是が爲に立てず。』『若し爾らば精進も性亦躁疾なり。何が故に說いて、以て覺支と爲すことを得る。』釋して言はく、『修道は復容豫なりと雖も、必ず須く常に續すべし。常に行じて息まざるは、是れ精進の能な

【雜心】第八。
【第四門に等】次四に止觀分別。中に兩義、先づ第一義について。
【涅槃】第三十九

り。故に精進を說いて、以て覺支と爲す。又復精進は多くの功力有つて能く諸事を辦ず。麤に入れば能く麤に、細に入れば能く細に、遲に入れば能く遲に、疾に入れば能く疾なり。故に此に之を立つ。』『何が故に正語、正業、及與正命を說いて、以て覺支と爲さざる。』『「雜心」に釋して言はく、「覺とは是れ心なり。戒は心法に非ず。故に覺と立てず」と。行實に齊く通ず。且く隱顯に隨ふ。』廢立是の如し。

第四門の中に、止觀分別す。行德衆しと雖も、要は唯止觀なり。故に『涅槃』に云はく、「須陀を欲求し乃至無上菩提を欲求すれば、當に止觀を修すべし」と。故に知んぬ、止觀は諸行を統攝することを。中に於て分別するに、其兩義有り、其一義とは、四念は觀體、正懃は助成、如意を止と爲す。根力の中、信念と定とは是れ其止行、慧進は是れ觀なり。七覺支の中の猗、定、念、捨は、之を判じて止と爲し。擇法、進、喜を說いて、以て觀と爲す。八正道の中、正語、正業、正命、正念、正定の此五を止と爲し、正見、正思及び正精進の此三は是れ觀なり。問うて曰はく、『信心は通じて諸行を生ず。何が故に彼根力の中に於て、偏に制して止に屬する。』『信は法に安んじて猶預を離するを以ての故に。定を生ずること强きが故に。又信は行の始め定に趣入すること近し。故に彼『解脫道論』の中に、信を攝して定と爲す。』問うて曰はく、『論に說かく、「七覺支の中、念は能く倶に調ふ」と。今何を以ての故に、偏に攝して止に屬する。』『念は境を守るを以て、定を生ずること强きが故に。』問うて曰はく、『論に說かく、「八正道の中、精進は通じて策す」と。

【第二義とは等】 次に第二義について。

今何を以ての故に、偏に判じて觀に屬する。』『進は策發するを以て、觀を生ずること強きが故に。是中は二門に法を攝せんと欲するが爲なり。彼通の義を以て徴責すべからず。』

第二義とは、彼『成實』の止觀品に說くが如し。四念處の中には、前の三を止と爲し、法念を觀と爲し、正勤を觀と爲し、如意を止と爲す。根力の中には、前の四を止と爲し、後の一を觀と爲す。七覺支の中には、猗、定、及び捨を說いて以て止と爲し、擇法、進、喜は之を說いて觀と爲す。念は則ち俱に調ふ。八正道の中には、正語、正業、正命、正念、及與正定の此五を止と爲し、正見、正思、及び正精進の此三を觀と名く。』問うて曰はく、『四念同じく能く境を觀ず。何が故に前の三を偏に說いて止と爲し、後の一を觀と爲す。』釋して言はく、『前の三は身受心の事相の法を觀ず。事中の安心相は八禪に順ず。故に判じて止と爲す。後の法念の中には、通じて理事を知る。理を知るは唯慧なり。故に說いて觀と爲す。』問うて曰はく、『四勤は之を判じて觀と爲す。根力等の中の所有の精進は、何の義を以ての故に、之を攝して止と爲す。』釋して言はく、『所對不同の故に爾なり。彼四正勤は四如意の禪定の行に對するが故に、四勤の策發は之を說いて觀と爲す。彼根力の中には、後の慧を簡ぶが爲の故に、止に攝在す。』問うて曰はく、『何が故に偏に後の慧を簡んで、之を判じて止と爲し、後の定を簡んで、說いて觀と爲さざる。』釋して言はく、『彼五根の中に於ては、慧根を主と爲す。餘の四は伴助なり。精進と定とは伴助の行同じきが故に、止に攝在す。又彼宗の中には、四根は是れ其見諦以前、慧根は出世な

【經】涅槃經第三十七。

【第五門の中等】五に八正分別。中に二、先づ第一義について。

り。精進と定とは世間の行同じきが故に、判じて止と爲す。』問うて曰はく、『若し五根の中に、慧を用て主と爲し、餘の行は伴助ならしめ、卽ち精進をして止に攝屬せしむれば、七覺、八道も亦是の如くなるべし。何が故に精進は之を攝して觀に屬する。』釋して言はく、『互に從へば理も亦應に齊かるべし。但彼七覺、八正の行は同じく出世に在り。相に隨つて以て分たば、精進發懃は相、止に順ぜず。故に觀に攝在す。』問うて曰はく、『根、力、八正等の中の念は、皆止に屬す。何の義を以ての故に、七覺の中には念の俱に調ふることを用ふる。』釋して言はく、『修の始は定未だ深く成ぜず。要ず念心を須て、堅く境界を守つて方に能く定を得。故に根力の中には、念を攝して止に屬す。七覺は行の終なれば定心已に成ず。念を假るの義微なるが故に、俱に調ふることを用ふ。』問うて曰はく、『若し七覺は定成ず、念を假るの義微なるが故に、念心を說いて俱に調と爲すと言はば、七覺は觀成じ、進を假るの義微なり。何が故に精進の通じて策するを用ゐざる。』釋して言はく、『精進は實に能く通じて策す。但經の中に說かく、「三十七品は念を用て主と爲す」と。故に俱に調を用ふ。精進は主に非ず。通を隱して別を彰す。故に攝して觀と爲す。』

第五門の中に、八正分別す。『涅槃』に說くが如し、「道は無量なりと雖も、要は唯八正なり」と。故に知んぬ、八正通じて諸行を攝することを。中に於て、略して二門を以て分別す。其一義とは、彼四念、慧根、慧力、擇法、正見を攝して、以て正見と爲し、四正懃、精進根力、精進覺支及び正精進を攝して、正精進と爲し、四如意、定根、定力、

【第二義とは等】次に第二義に就いて。
【解脱道論】第十一。
【涅槃】南本第十一、第二十九。

定覺、正定、及與猗、捨を攝して、以て正定と爲し、念根、念力、念覺、正念を以て正念と爲す。正思、正語、正業、正命は、卽ち名くること知るべし。『信根、信力は判じて何の義にか屬する。』『義分不定なり。或は正定に屬す。禪に於て信順して能く修入するが故に。或は正見に屬す。法に於て決定して正智を生ずるが故に。『喜覺は如何。』『義亦不定なり。亂を離れ喜を生ずるは、判じて正定に屬す。法を證して喜を生ずるは、判じて正見に屬す。』一義是の如し。第二義とは、彼『解脱道論』の中に說くが如し。四念、及與念根、念力、念覺、正念を、判じて正念と爲し、彼四正懃、四如意の中の、欲及び精進、精進根力、精進覺支及び正精進、此等は通じて說いて正精進と爲し、四如意の中には心定を分取し、定根、定力、定覺、正定、信、猗、喜、捨、此等の一切を通じて正定と爲し、四如意の中には慧定を分取し、慧根、慧力、擇法、正見、此等の一切を通じて正見と爲す。餘の四は上の如し。問うて曰はく、『四念は體性是れ慧なり。何が故に彼論には、之を說いて念と爲す。』釋して言はく、『彼一一の門の中に於て、備に多義を含む。趣擧ぐるに皆得。故に『涅槃』の中には、四念處を說いて、之を以て定と爲す。『雜心』には慧と云ひ、『解脱道論』には、之を說いて念と爲す。皆傷ふこと無きを得。』問うて曰はく、『經論、多く如意を說いて、之を以て定と爲す。彼論は何が故に、說いて精進及び定慧と爲す。』『彼論は精進等に就き、餘の經論の中には其所生に就いて、偏に名けて定と爲す。之を言ふこと左右なり。信及び喜等を偏に判じて定と爲すは、且く一義に從ふ。』問う

【第六には等】六に其大小不同を明す。中に十一、先づ一に依地の不同

て曰はく、『彼道品の行の中に於て、備に七門有り。何が故に偏に八正を用て道を攝し、餘は是の如くならざる。』『餘の門の中には戒を說かざるを以ての故に。』

第六には、其大小不同を明す。不同は衆多なり。今此には略して十一種の門を以て、以て其異を辨ず。一には依地の不同、二には體性の不同、三には常無常の異、四には漏無漏の別、五には緣心の不同、六には淺深の不同、七には麁細の不同、八には修起の不同、九には行利の不同、亦は名けて所爲の不同と爲すことを得。十には治障の不同、其第十一には得果の不同なり。依地と言ふは、地別に十一あり。欲界、八禪、未來、中間なり。『成實』には十と說く。未來を除却す。『毘曇』の如きに依らば、初禪の一地に三十七を具す。餘は悉く具せず。未來禪及び第二禪に依らば、三十六を具す。未來に喜を除く。是故に但餘の三十六有り。『何が故に喜無き。』『未だ欲惡を出でず、未だ根本を得ず、喜生ぜざるが故に。』二禪地の中には正思惟無し。是故に亦三十六支有り。『何が故に思無き。』『正思は是れ覺にして、局つて初禪に在り。故に彼には之無し。』中間禪、三禪、四禪に依らば、三十五を具す。喜正思を除く。餘は具に有り。空處、識處、無所有處には、三十二を具す。喜、正思、正語、正業、及與正命無し。是故に但餘の三十二有り。喜、正思無き義の在ること知るべし。正語、正業、及與正命、此三は是れ戒なり。彼宗の中に於ては、戒は是れ色法なり。四空には色無し。是が爲に之を除く。問うて曰はく、『若し四空に色無くして須く戒を除かしむれば、彼處には色無し。何に依つて身念處觀有ることを得る。』釋して

言はく、『彼地には色有ること無しと雖も、聖人上に生じて下地の無漏の戒を失せず。之に依つて觀を起す。故に身念有り。』『若し爾らば、何んが卽ち彼戒を用て、空處等の正語、正業、正命の法と爲さざる。』釋して言はく、『得ず。能觀の智は是れ無色の心なり。故に無色界に身念有ることを得。所觀の戒は是れ下地の法なり。是故に無色界の中の正語業等と名けず。』問うて曰はく、『八正は見道に在り。毘曇法の中には、無色定に依つて見道に入らず。彼無色處には、云何が正念、正定、正見、正進有ることを得て、而も空、識、無所有處に三十二の道品を具することを得と言ふ。』釋して言はく、『八正を位に約して別して配せば見道に在り。理實には一切の聖人通じて修す。今論ずる所は修の中の八正なるが故に、之有ることを得。』問うて曰はく、『若し修道門の中に八正有ることを得しめ、說いて正念、正定等と爲さば、七覺の中の念、定、精進、擇法覺支と何の差別有つて、分つて三十七と爲すことを得る。』釋して言はく、『同體の義に異を分つ。初を正念、正定、正見及び正精進と爲し、後を覺支と爲す。故に具に有ることを得。』非想、欲界に二十二を具す。謂はく、四念處、四正懃、四如意足、五根、五力、是れ二十二なり。彼非想地に無漏無しと雖も、有漏の念處、正懃、如意、根、力を起すことを得。是故に二十二の道を具することを得。『彼地には色無し。云何が身念處觀有ることを得る。』『義は前の釋に同じ。聖人は彼に生じて下地の無漏淨戒を失せず。之に依つて觀を起す。是故に有ることを得。欲界の所起も亦是れ有漏なり。』問うて曰はく、『毘曇』は欲界には定無し。云何が道

【彼論】五c　成實第十

品の觀を起すことを得る。』釋して言はく、『欲界に禪定無しと雖も、而も思慧の分別觀察を用て身念等を起す。故に之有ることを得。』問うて曰はく、『欲界既に禪定無し。云何が四如意足、定根、定力有ることを得る。』釋して言はく、『此れ亦思慧法に住するを、名けて如意と爲す。別の定體無し。欲界の善心相應の定數を、定根力と名く。別の禪定無し。』『毘曇』是の如し。若し尊者瞿沙の所說に依らば、欲界に定有り。彼は應に具に三十六道品を起すべし。喜を除いて餘有り。未來と同じ。餘は『毘曇』に似たり。若し『成實』に依らば、欲界に共如電三昧有り。彼說かく、「電光色界の四禪並に四空の中の下三無色は、皆悉く見修兩道に入ることを得、齊く應に具に三十七品を起すべし」と。通じて說かば、有漏なるは三十七を具す。唯無漏を論ずれば、喜を除いて餘有り。』『何が故に無漏には偏に喜を除く。』『彼論に釋して言はく、「喜心は假名を取るに由つて生じ、我に著するが故に起る」と。聖人は已に斷ず。是が爲に之を除く。故に彼論に言はく、「覺支に二有り。一には有漏、二には無漏なり」と。有漏には喜有り、無漏には則ち無し』。問うて曰はく、『喜心は初二禪に在り。餘禪には喜無し。云何が喜覺支有ることを得る。』『彼論に宣說すらく、「憂喜は心に隨つて有頂に至る」と。所以に有ることを得。』問うて曰はく、『若し喜、有頂に至ることを得ば、何が故に經の中に、偏に初禪二禪に喜有りと說く。』『彼は隱顯門にして道理を盡すに非ず。安慧三禪に在りと說くが如き、豈彼のみ獨り有らんや。喜も亦是の如し。』問うて曰はく、『若し喜實に上下に通ずれば、經は何の義に就いて、偏に初禪二禪地

の中に於て、喜支を建立して餘禪に立てざる。」『初二禪は喜心多きを以ての故に、創めて欲惡を捨し、初めて勝事を得。多く喜悅を生ず。是が爲に偏に說く。又初二禪は定內に喜有り。定外にも亦有り。故に初二禪に喜支有りと說く。三禪已上は定外に喜有り。定內には則ち無し。故に三禪の上に喜支を立てず。三禪の上は定外に喜有るを以ての故に、彼に喜覺支有りと說くことを得。』問うて曰はく、『正思は是れ其覺數なり。覺は初禪に至る。云何が上地に正思有ることを得る。』『『成實』に宣說すらく、「覺觀の二數は遍く三界に通ず」と。是れ心の麁細の相なるを以ての故に。經の中に偏に初禪に有りと說くは、蓋し亦是れ其隱顯門の說なり。彼初禪に創めて欲惡に背き、多く共力を須ふるを以て、是が爲に偏に說く。上に有らざるに非ず。上に有るを以ての故に、正思有ることを得。又彼宗の中、正思は是れ慧なり。慧の義は遍く通ず。故に上に思有り。』『正語、正業、及與正命、此三は色業なり。無色定に依つて、云何が起すことを得る。』『彼宗に宣說すらく、「戒は非色心なり。故に上に起すことを得」と。』問うて曰はく、『「無色は身無く、口無し。云何が正語、正業有ることを得る。」釋して言はく、「無色は適に身口二種の作業無し。止業は妨ぐこと無し。定道の二無作を得るを以ての故に、畢竟じて身口の惡業を起さず。故に有と說くことを得。」』中間禪は、『成實』に亦說く。故に彼文に言はく、「初禪の梵王能く中間に至る。初禪に攝屬して更に別して說かず」と。『非想は如何。』『彼に說かく、「非想は增觀斷結の無漏無しと雖も、順舊遊觀の無漏無きに非ず」と。故に彼に宣說すらく、「非想地の無漏

【龍樹の等】大智論第二十八。第七

【又龍樹の等】大智論第二十六。

【龍樹の等】大智論第二十六、第四十五、第六十。

【龍樹の等】大智論第二十。

【成實】第三十。

心の後に於て滅盡定に入る」と。中に於て麁に分たば、但七覺有り。修道の攝なるが故に。義に隨つて細に分たば、三十七を具す。理も亦傷ふこと無し。大乘法の中、始は『毘曇』に同じ。究竟終成は始め欲界より乃ち非想に至つて、一切具に三十七品を起す。』問うて曰はく、「欲界は亂地にして定無し。云何が三十七品を起すことを得る。」釋して言はく、『「大品』に「欲界の中にも亦禪定有り」と說く。故に龍樹の云はく「三昧に四有り。一には欲界繫、二には色界繫、三には無色界繫、四には不繫なり」と。明かに知んぬ、欲界にも亦禪定有ることを。又龍樹云はく「佛常に欲界定の中に住するを、無不定と名く」と。定有るを以ての故に、之に依つて修起す。』問うて曰はく、『欲の定は性是れ有漏なり。云何が能く無漏の道品を起す。』釋して言はく、『上界の世俗の淨定は是れ有漏なりと雖も、能く無漏を生ず。此も亦是の如し。何んが怪むべきに足らん。又欲界の定も亦無漏に通ず。故に龍樹云はく「十八不共は悉く是れ無漏なり」と。佛常に欲界の定中に在るを、不共法と名く。明けし無漏に通ずることを。無漏に通ずるが故に、道品を起すことを得。』問うて曰はく、『非想には共無漏無し。云何が能く無漏の道品を起す。』釋して言はく、『大乘には非想地にも亦無漏有りと說く。故に龍樹言はく「云何が菩薩の非想處定なる。實相と俱なる是を菩薩の非想處定と名く」と。實相と俱なり。是れ無漏なること明けし。無漏有るが故に、道品を起すことを得。』問うて曰はく、『正思は體是れ覺數なり。覺は初禪に在り。上に云何が有る。』『釋は『成實』に同じ。又復理に於て審かに觀ずるを思と名く。

【成實】右同前。

【經】大智論第二十所引。

【次に等】二に體性について不同を顯す。

【次に等】三に常無常に就いて不同を論ず。

義偏に局ること無し。故に上に之有り。』又問ふ、『喜支は初二禪に在り。云何が上に有る。』『釋は『成實』に同じ。又經に宣說す「喜無量を修して識處に生ず」と。明けし上にも亦有ることを。又聖を證する處の慶悅を喜と名くるは、遍く一切に通ず。何んが彼世俗淨禪の喜相局つて別なるに約することを得ん。』又問ふ、『正語、正業、正命は、體是れ色業なり。無色定に依つて、云何が起すことを得る。』『大乘に「四空に色有り」と宣說す。故に修起することを得。』依地の不同之を辨ずること略爾り。此一門竟る。次に、體性に就いて、以て不同を顯す。三十七品は心もて體性と爲す。心に三重有り。一には事識、謂はく六識心なり。此分の中に於ては、心外に法有り。法外に心有り。心外境に於て分別觀察するを、道品觀と爲す。二には妄識、謂はく、七識心なり。此分の中に於ては、心外に法無し。一切諸法は皆妄想の自心より現ずる所、夢の所現の如し。己が自心所現の法の中に於て推求觀察するを、道品觀と爲す。三には眞識、謂はく、八識心なり。此分の中に於ては、心外に法無く、法外に心無し。心と法界とは同體にして義分つ。同體を以ての故に、心を將て法を攝すれば、一切皆是れ一心の中の法なり。法に隨つて心を分たば、廣く法界微塵數の心を備ふ。心は彼法に於て從來障無く、而も妄染の爲に說いて隱覆と爲す。妄染を息めしめて內に實性を照すを、道品觀と名く。彼小乘の中には、但初門事識の觀有り。說いて道品と爲す。大乘法の中には、初に事觀を爲し、次に情相を破して妄識觀を爲し、後に妄想を息めて眞識觀を爲す。體性是の如し。此二門竟る。次に第三門に常無常に就いて、以て不同を論ず。

【次に等】四に有漏無漏の義に就いて不同を釋す。

【涅槃】第三十七

【次に等】五に緣心に就いて不同を顯す。

【次に等】六に淺深に就いて不同を明す。

小乘の所修は始終無常なり。生滅の心識を以て體と爲すが故に。大乘は爾らず。始修は無常、終成は是れ常なり。成處の眞心を以て體と爲すが故に。此三門竟る。次に有漏無漏の義に就いて、以て不同を釋す。小乘の道品は漏無漏に通ず。前の二十二は見道の前に在り、名けて有漏と爲す。七覺、八道は見道の上に在り、名けて無漏と爲す。菩薩の所修は初始は有漏、究竟所成は一切無漏なり。故に『涅槃』の中に宣說すらく「三十七菩提分を淨梵行と爲す。迦葉、佛に白さく「有漏の善法も亦復能く無漏法の因と爲る。何が故に淨梵行と名くることを得ざる」と。佛、言はく「有漏は性是れ顚倒なるが故に、梵行に非ず。三十七品は性是れ無漏なるが故に、是れ梵行なり」と。斯を以て準驗するに、明かに知んぬ、終成は一切無漏なることを。此四門竟る。次に、緣心に就いて以て不同を顯す。道に二種有り。一には緣治、二には實證なり。分別の智、境を觀じて結を破するを、名けて緣治と爲し、滅觀眞心王情の慮を息め如に契つて不動なるを、名けて實證と爲す。小乘法の中には、唯緣治のみ有りて全く實證無し。大乘は爾らず。始修は緣治趣道の方便なり。終成は實證を以て正道と爲す。此五門竟る。次に淺深に就いて、以て不同を彰す。聲聞の所行教說不同なり。『毘曇』に論ずる所は、道行極めて淺く、唯四諦十六聖行を觀ず。『成實』に辨ずる所は唯四諦の名用虛假無性の空を觀ず。菩薩の所修は一切の法に於て、有相を取らず、無相を取らず、有無非有無相を取らず。離言說平等の眞義に於て、實の如く證知す。故に『地持』に言はく「云何が大乘は三十七品なる。菩薩は身に於て妄相を起さず。亦復一切の非性を

【龍樹の等】大智論第十九。

【次に等】六に麁細に就いて不同を顯す。

【涅槃】第十三聖行品。

【次に等】八に起修に就いて不同を論ず。初めに小乘法の中について明す。

取らず。離言說第一實義に於て、實の如く了知す」と。身念處の如く、是の如く餘の念及び餘の道品も皆亦是の如し。是を大乘の三十七品と名く。妄相を起さざるは、有を離るることを明すなり。非性を取らざるは、無に著せざるなり。是れ離相離言說の義を明す。是れ眞法性を實の如く知るなり。龍樹の所說も亦此と同じ。此六門覺る。次に麁細に就いて、以て不同を顯す。聲聞の所修は身念處に於て、但能く麁く五根、五塵、無作色等を知つて、微細なること能はず。菩薩は身に於て、「如法界微塵の色」の別を知る。二乘は及ばず。故に『涅槃』に云はく「所說の色陰は中智の所知なり。是色を分別するに、無量無邊なり。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。我彼經に於て、竟に之を說かず」と。『地持』にも亦云はく、「菩薩は身に於て、能く無量處の方便觀を爲す。身念處の如く、餘の念、餘の道も亦復是の如し。聲聞の總じて觀ずる、之を名けて麁と爲し、菩薩の別して知るを、說いて以て細と爲す」と。此七門覺る。次に、起修に就いて以て不同を論ず。小乘法の中、義別に二有り。一には行の不同に隨つて、作意して別に學すれば、三十七品皆悉く別に起す。一向に前後して一時なることを得ず。二には同時の心心法等に就いて、義に隨つて以て分つ。彼四念處は境を取ること別なるが故に、一向に前後して一時なることを得ず。餘は同時なることを得。是義を以ての故に、初禪地の中には三十四品一時に俱に起す。彼四念の中に趣に一たび現起すれば、餘に通じて合して三十四品と爲す。餘の三念處は前後別に起す。未來二禪は三十三品一時に俱に起す。前の初禪の三十四の中に於て、未來に喜を除き、二禪に覺を

【大乘法の等】下大乘法の中に就いて明す。

【次に等】九に大小の所爲の不同を明す。

【次に等】十に大小治障の不同を明す。

【次に等】十一に大小得果の不同を明す。

【涅槃】第三十六

除く。餘は悉く相似す。彼中間禪、三禪、四禪は、三十二品一時に倶に起す。前の初禪の三十四の中に於て、喜及び覺を除く。餘は悉く相似す。空處、識處、無所有處は、二十九品一時に倶に起す。前の初禪の三十四の中に於て、喜を除き覺及び三種の戒を除く。餘は悉く相似す。欲界非想には、十九道品一時に倶に起す。四勤、如意、五根、五力、念處の中に、趣に一種を起す。是れ十九なり。小乘是の如し。大乘法の中にも亦二種有り。一には修始三十七品作意して別に起し、二には修熟三十七品同時に頓に起す。故に『地經』に云はく、「菩薩念念に一切の助菩提法を具足す」と。念念具起は前後に非ざることを明す。此八門竟る。次に大小の所爲の不同を明す。亦は名けて行利の不同と爲すことを得。小乘の所修は偏に自利の爲にして、心廣く兼ぬること無し。之を名けて小と爲す。菩薩の所修は兼ねて自他を利す。兼利を以ての故に、之を目けて大と爲す。故に『地經』に說かく、「衆生を捨せず。道品を修行するを、護小乘と名く」と。此九門竟る。次に大小治障の不同を明す。聲聞の所修は、唯四住を斷じて窮盡すること能はず。菩薩の所行は五住通じて斷じ、兼ねて緣治を息む。深廣なるを以ての故に。此十門竟る。次に大小得果の不同を明す。小乘の所修は唯聲聞、辟支佛の果を得、菩薩の所行は能く佛果を得。又復小乘の所修の道品は方便の果を得、性淨を得ず。大乘の所行は具に性淨方便の果を得。故に『涅槃』に云はく、「三十七品能く煩惱の爲に不生の生因と作り、亦涅槃の爲に而も了因と作る」と。方便の菩提は障を斷じて染を離れ、能く煩惱をして畢竟じて生ぜざらしむ。是れ道能く起す。是故に彼が爲

【二】下第二に別して道品を解する中に先づ四念處について七門を分つ、一に名義を釋す。

【次に等】二に總別を論ず。今且く五陰と三無爲の法に就いて說く中、先づ別相。

【涅槃】第三十一

に而も生因と作る。性淨涅槃は道能く之を顯す。是故に彼が爲に而も了因と作る。大小の不同之を辨ずること略爾り。上來通じて道品の義を解し竟んぬ。

(二)第二門の中に、別して道品を解す。先に念處を解す。良に四念は四顚倒を破し、實相門を開するを以ての故に、先に之を辨ず。又復道品は慧を用て主と爲す。念處は是れ慧なり。是故に先に辨ず。中に於て、略して七門を以て分別す。一には名義を釋し、二には總別を分ち、三には三種の念處の不同を明し、四には有漏無漏に就いて分別し、五には次第を論じ、六には觀相を顯し、七には其文を釋す。『名字は是れ何ん。』『身受心法は是れ其四なり。色形聚積、之を名けて身と爲し、領納を受と稱し、能緣を心と曰ひ、自體を法と名く。境を守るを念と名く。身等の四種は念を生ずるの處なれば、名けて念處と爲す。』此一門竟る。

次に、總別を論ず。理實には通じて一切の諸法に就いて、皆悉く總別念處と爲すことを得。今は且く五陰、及與三無爲の法に就いて、總を說き、別を說く。別は五陰、及び無爲法を分つて四念觀を爲す。之を名けて別と爲す。總は五陰及び無爲法を緣じて法念觀を爲す。之を目けて總と爲す。『別相は如何。』『色陰を身と爲し、受陰を受と爲し、識陰を心と爲し、想行、及與三無爲等を、合して以て法と爲す。』『陰に既に五有り。依觀得るに足れり。何んが勞しく四と爲す。』釋して言はく、『陰法は開合不定なり。之を總ずれば唯一、是れ有爲法なり。或は分つて二と爲す。唯名と色となり。四陰を名と曰ひ、色陰を色と名く。或は分つて三と爲す。謂ゆる三修なり。『涅槃』に說くが如し、「謂はく身戒心なり。色

【總相は等】 次に總相について

陰を說く中には、五根を身と爲し、防禁を修と名け、身口二業を說いて以て戒と爲し、四陰を心と曰ふ」と。又煩惱業苦等の別を說く、亦是れ三なり。或は說いて四と爲す。四念、四食、四識住等なり。『涅槃』に說くが如し、「云何が陰を分つて、以て四食と爲す。色陰の中に段食を宣說し、識を識食と爲す。行陰の中には、思を說き、觸と說く。想受を論ぜず。識を除いて餘陰は識の所依と爲し、四識住と名く」と。或は分つて五と爲す。卽ち五陰是なり。或は分つて六と爲す。五陰、及與不相應行なり。或は十二と說く。謂はく十二入、十二因緣なり。或は十八と說く。謂はく、十八界なり。或は復二十二根を宣說す。是の如く一に非ず。今は一門に據つて且く四種を分ち、之に依つて觀を起す。四倒を破すと爲すが故に、四と說くのみ。常樂我淨は是れ四倒なり。凡夫は多く色の中に於て淨を計し、受の中に樂を計し、心の中に常を計し、想行等の一切の法の中に於て、我有りと建立す。是見を破せんが爲に、色は不淨なりと觀じて淨倒を破除し、受は是れ苦なりと觀じて樂倒を破除し、心は無常なりと觀じて常倒を破除し、法は無我なりと觀じて我倒を破除す。」別相是の如し。『總相は如何。』「汎く釋するに六有り。一には總じて五陰及び無爲法を觀じて、苦、無常、空、無我等と爲し、二には總じて五陰及び無爲法を觀じて、以て四諦十六聖行と爲し、三には總じて五陰及び無爲法は、名用、虛假、無性空寂なりと觀じ、四には總じて五陰及び無爲法は、妄想虛假、無想空寂なりと觀じ、五には總じて五陰及び無爲法は虛妄妄想にして、悉く心より現じ、畢竟無法なりと觀じ、六には總じて五陰及び無爲法は、

眞法集起して本性常寂なりと觀ず。初門の中に就いて、苦無常を觀ずるは局つて五陰に在り。空無我を觀ずるは無爲法に通ず。今は且く五陰に約就して之を辨ず。此觀成じ難し。漸く習つて乃ち成就す。中に於て、觀別に二十門有り。五陰の中に於て、二二合して觀ずるに其十門有り、色受合して觀ずるをば以て初門と爲し、色想合して觀ずるを第二門と爲し、色行合して觀ずるを第三門と爲し、色識合して觀ずるを第四門と爲し、色陰を除去して受想合して觀ずるを第五門と爲し、受行合して觀ずるを第六門と爲し、受識合して觀ずるを第七門と爲し、色を除き、受を除いて想行合して觀ずるを第八門と爲し、想識合して觀ずるを第九門と爲し、色受想を除いて、行識合して觀ずるを第十門と爲す。三三合して觀ずるに、其六門有り。色受及び想合して觀ずるを一と爲し、色想行を合して以て第二と爲し、色行識を合して以て第三と爲し、色陰を除去して、受想行を合して以て第四と爲し、受行識を合して以て第五と爲し、色を除き受を除いて、想行識を合して以て第六と爲す。此を以て前に通じて、合して十六と爲す。四四合して觀ずるに、其三門有り。色受想行合して觀ずるを一と爲し、色想行識合して觀ずるを二と爲し、色陰を除去して、受想行識合して觀ずるを三と爲す。前に通じて十九なり。此十九門を總の方便と名く。五陰合して觀ずるを、復以て一と爲す。前に通じて二十なり。此後の一門を總念處と名く。此一番は正く『毘曇』の總念處觀に當る。第三門とは、總じて五陰及び數滅の法を觀じて、以て四諦十六聖行と爲し、彼生死の有漏の果陰を觀じて、以て苦諦と爲す。中に於て別

【次に等】三に三種の念處の差別を論ず。釋するに兩門あり、先づ其相を辨ず、初めに自性念處。

して觀じて苦無常空と無我と爲すを、即ち四行と爲す。彼生死の因行の五陰を觀じて、以て集諦と爲す。中に於て、別して因集有緣を觀じて、復四行と爲す。前に通じて八と爲す。無漏の五陰を觀じて、以て道諦と爲す。中に於て、別して道如跡乘を觀じて、復四行と爲す。前に通じて十二なり。彼數滅無爲の法を觀じて、以て滅諦と爲す。中に於て、別して滅止妙出を觀じて、復四行と爲す。前に通じて十六なり。此門は彼毘曇法の中の、煖頂已上の一切の觀行に當る。彼を通じて名けて法念觀と爲すが故に。第三門とは、總じて五陰及び無爲法の名用假有を觀ずるを、名けて世諦と爲し、無性空寂をば以て眞諦と爲す。成實法の中には、偏に此義を論ず。第四門とは、總じて五陰及び無爲法は妄相の有、猶し幻化、乾闥婆城、熱時の炎等の如しと觀ずるを、名けて世諦と爲し、無相空寂をば以て眞諦と爲す。此空と言ふは、但無性にあらず。乃至因緣の相も亦有にあらず。陽炎の水遙に望めば有に似、近く觀れば全く無なれども、但無性のみにあらず、乃至亦水相として得べきもの無きが如し。諸法も此に像たり。第五門とは、總じて五陰及び無爲法は心外に法無く、皆妄想に從つて自心の現ずる所、夢の所見の如く皆是れ心作なりと觀ずるを、名けて世諦と爲し、體を窮むれば本無なるを、名けて眞諦と爲す。第六門とは、彼五陰及び無爲法は皆是れ眞實如來藏性にして、緣起集成すと觀ずるを、名けて世諦と爲し、其本性を窮むれば唯是れ眞如、本より已來常寂不動なるを、名けて眞諦と爲す。此後の三門は大乘の中に說く。小乘には論ぜず。此六は皆是れ總相法念の差別のみ。此二門竟る。次に、三種の念

【共念と等】次に共相念處。

【雜心】第五。

處の差別を論ず。三種と言ふは、一には自性念處、二には共相念處、三には緣念處なり。釋するに兩門有り。一には共相を辨じ、二には斷障不斷障の別を明す。辨相の中に就いて、先に自性を論ず。毘曇法の中には「四念處は慧を自性と爲す」と說く。『若し性是れ慧ならば、何が故に經の中には、之を說いて念と爲す。』『念と相隨ふあり。伴に從つて以て呼ぶが故に、說いて念と爲す。』『何が故に伴に從ふや。』『念と倶なる慧心は、法に於て正く取ること謬らざるに由るが故に。說いて念と爲す。又諸の心法更相に名と爲す。勝色想の如し。體は實に是れ慧なれども、而も名けて想と爲す。此も亦是の如し。體は是れ慧なりと雖も、而も名けて念と爲す。若し『成實』に依らば、始は是れ念の性、終は是れ慧の性なり。始は是れ念の性なるが故に、彼『成實論』の無心數品に云はく「一念處に五種の名を得るが如し。謂ゆる念處と念根と念力と念覺と正念なり」と。終は是れ慧なるが故に、『成實』に說いて言はく「念より慧を生じて身等を觀ずるを、名けて念處と爲す」と。大乘法の中には、衆德同體にして以て偏に定め難し。强に從つて慧と說く。理も亦傷くること無し。』共念と言ふは、解に三義有り。一には境に約して共を說く。身を觀じて境と爲す。中に於て、所生の一切の心法及び隨生の戒を、通じて身念と名く。餘も亦是の如し。二には行體に就いて異の義に共を論ず。一の身念の中に、卽ち四念を具す。隨生の戒を說いて身念と爲し、受數を受と爲し、心王を心と爲し、慧等の諸數は之を說いて法と爲す。此四念の行、聚つて一處に在り。故に名けて共と爲す。餘も亦是の如し。故に『雜心』に云はく

【龍樹の等】大智論第十九。
【緣念處とは等】次に緣念處。
【涅槃】第三十四

く「世尊の善法積聚するを共念處と名くと說くが如し」と。三には生に隨つて共と說く。若し慧身を觀ずるに、慧と相隨つて倶に生ずる善法を、同じく身念と名く。餘も亦是の如し。慧は是れ有漏なり。慧と相隨つて倶に生ずる善法を、悉く有漏と名く。無漏も亦爾なり。是の如きの一切は、此れ慧と同じきが故に、名けて共と爲す。故に龍樹云はく「因緣は道を生ず。若は漏無漏同じく念處と名く」と。緣念處とは、解に兩義有り。一には散心普く一切の境界を緣ずるを、緣念處と名く。二には所緣の境、能く念心を生ずるを、緣念處と名く。經の中に知及び智處を同じく波若と名くと說くと、共義相似す。亦五塵、欲を生ずるを欲と名くるが如し。此門の中に於て、身念の所緣は開合不定なり。總ずれば唯一色なり。或は分つて二と爲す。謂はく、漏無漏なり。又記無記報非報等も亦二を分つことを得。或は說いて三と爲す。一には可見有對、謂はく眼所行の色眼の爲に照矚せらるるを、名けて可見と爲す。彼對礙の色根の所對と爲すが故に、有對と名く。二には不可見有對、謂はく耳鼻舌身所行の色は眼根に視えざるを、不可見と名く。有對は前に同じ。三には不可見無對、謂はく意所行の善惡の無作及び五根の色の目の爲に視られざるを、不可見と名く。對礙の色根の所對と爲らざるを、無對色と名く。或は說いて四と爲す。謂はく四大色なり。故に「涅槃」に云はく「色とは四大なり」と。四大能く一切種の色を造す。末を攝し本に從つて、說いて四大と爲す。又佛陀提婆所立の如き、四大の外に別の造色無し。故に四種と說く。或は說いて六と爲す。謂はく、六塵の色なり。善惡の無作及び五根の色

を、通じて法塵と名く。餘の五は知るべし。或は十種と說く。『涅槃』に說くが如し。五根、五塵は是れ其十なり。彼には、無作は身を成ずる相微なるを以て、隱して說かず。或は十一と說く。『毘曇』に說くが如し。五根、五塵及び法塵の中の善惡の無作なり。若し『成實』に依らば、十四を宣說す。五根、五塵、及與四大なり。彼に說かく、「四大は是れ四塵の果、復是れ五根及び聲塵の因なり」と。根塵に收めざるが故に、別して大を說く。彼宗には、無作は是れ非色心なり。故に陰して彰さず。毘曇法の中には、四大は是れ觸なり。故に別に說かず。細分すれば無量なり。此等を說いて身念の所緣と爲す。受念の所緣は開合不定なり。總ずれば唯一受なり。或は分つて二と爲す。謂はく、身と心となり。五識相應の色根より生ずるを、名けて身受と爲し、意識相應の意根より生ずるを、名けて心受と爲す。或は說いて三と爲す。謂はく、苦樂捨なり。納違、惱を生ずるを名けて苦受と爲し、納順、適を生ずるを名けて樂受と爲し、中容の境界、苦樂の邊を捨するを名けて捨受と爲す。或は說いて五と爲す。謂ゆる苦樂憂喜及び捨なり。若し欲界に在つては、五識地の中の逼惱を苦と名け、適悅を樂と稱し、意識地の中の慮惱を憂と名け、悅暢を喜と曰ひ、六識地の中の中容受心は、之を說いて捨と爲す。若し初禪に在つては、眼耳及び身の三識身の中の適悅を樂と名け、意悅を喜と名け、捨は四識に通ず。若し二禪に在つては、喜捨は意に在り。更に餘義無し。若し三禪に在つては、樂捨は意に在り。更に餘義無し。四禪の上に在つては、唯意捨有り。更に餘義無し。或は說いて六と爲す。謂はく六識の中の相應の受な

【龍樹の等】大智論第三十六。

り。或は十八を分つ。前の六が中に方て、各苦樂不苦不樂有り。或は復說いて三十六受と爲す。前の十八の中に各染淨有り。或は百八と爲す。龍樹の說くが如し。前の三十六を三世に別して說く。細分すれば無量なり。此等を說いて受念の所緣と爲す。心念の所緣は開合不定なり。總じては唯一心なり。或は分つて二と爲す。謂はく漏無漏なり。又記無記報非報等も亦二を分つことを得。或は說いて三と爲す。善惡無記なり。又學無學非學無學にも亦三を分つことを得。或は說いて四と爲す。有漏に三を分つ。善惡無記なり。無漏を一と爲す。亦五と說くことを得。有漏に三を分ち、無漏を二と爲す。學と無學となり。或は說いて六と爲す。謂はく六識心なり。或は分つて九と爲す。欲界に三有り。善惡無記なり。色界に二有り。善と無記となり。無色も亦然なり。前に通じて七と爲す。無漏に二を分つ。學と無學となり。前に通じて九と爲す。或は十二と說く。欲界に四有り。謂はく善、不善、隱沒無記、不隱沒無記なり。色界に三有り。前の不善を除く。無色も亦然なり。前に通じて十と說く。無漏に二を分つ。學と無學となり。前に通じて十二なり。或は二十と說く。欲界に八有り。生得善は一、方便善は二、不善を三と爲し、隱沒無記を以て第四と爲す。身邊兩見を名けて隱沒と爲す。不隱無記に別して四種有り。報生、威儀、工巧、變化なり。前に通じて八と爲す、色界に六有り。前の不善及び工巧心を除く。餘は悉く之有り。無色に四有り。色界の中の威儀變化を除いて、餘の四種有り。但上二界の一切の煩惱を、皆隱沒と名く。欲界に同ぜず。此前の十八は是れ有漏心なり。無漏に二を分つ。

【次に等】二に斷障不斷障の別を論ず。

【次に等】四に有漏無漏に就いて分別す。

學と無學となり。前に通じて二十なり。細分すれば無量なり。此等を說いて心念の所緣と爲す。法念の所緣は要は唯三有り。一には有爲法、二には無爲法、三には理法なり。有爲に二有り。一には是れ心法、謂はく想行等なり。二には非色心法、謂ゆる十四不相應等なり。無爲に三有り。虛空、數滅及び非數滅なり。理とは、謂ゆる空無相等なり。細分すれば無量なり。此等を說いて法念の所緣と爲す。相別是の如し。次に斷障の差別を論ず。毘曇法の中には、共念能く斷じ、餘の二は斷ぜず。良に共念は多法にして治法を相扶くるを以て、所以に能く斷ず。自性念處は單獨にして力無し。故に斷ずること能はず。問うて曰はく、『彼宗には慧の獨行無し。何んが慧の獨り斷ぜずと宣說することを須ふる。』釋して言はく、『智慧は實に獨行せず。但彼心數無き者を破せんが爲の故に、慧性獨り斷ずること能はずと說く。緣心普く散じて專一ならず、境を見ること明かならず。所以に斷ぜず。又復緣念は境を論じて行に非ず。所以に斷ぜず。』問うて曰はく、『見前の七方便心は齊く結を斷ぜず。共相念處は云何が能く斷ずる。』釋して言はく、『見前の共念は斷ぜず。見道已上の共相法念は能斷の義有り。此に就いて言ふのみ。』成實法の中には、同時に共念有る義を說かず。唯慧のみ獨り斷ず。前後相資して亦共に斷ずることを得。大乘法の中には、文に定判無し。義を以て之を推すに、三種皆斷ず。良に菩薩の心實相に安んずるを以て、覺照する所に隨つて皆障を除くが故に。三種の念處之を辨ずること麁爾り。此三門竟る。次に、有漏無漏に就いて分別す。念處に二有り。一には獨法、一切の觀行通攝して一の四念の觀

【次に等】五に四念處の次第の義を論ず。

門と爲すが故に、獨法と名く。二には共法、餘行に約對して、共して三十七の道品門と爲すを、名けて共法と爲す。若し獨法に就かば、四念處の中の共行寛廣にして漏無漏に通ず。若し共門に就かば、小乘法の中の四念は有漏なり。共無漏なる者は判じて餘門に屬す。大乘法の中には、漏無漏に通ず。始學は有漏、成は則ち無漏なり。大乘には見前に無漏有るが故に。故に『地持』に言はく「云何が大乘の三十七品なる。菩薩は身に於て妄想を起さず。亦復一切の非性非非性を取らず。餘念も亦爾なり。是れ大乘の三十七品なり」と。故に知んぬ、無漏なることを。念處位の中には、此兩義有り。獨法共法は餘門も悉く爾なり。應當に類して知るべし。此四門竟る。次に四念の次第の義を論ず。「何の義を以ての故に初に身念を說き、乃ち法念に至る。」解に二義有り。一には麁細の次第、色は麁にして觀じ易し。是故に先に說く。受は前の色よりも細に、後の二よりも麁なり。人の患ふる所の如し。手足等の痛は心に受けて先づ覺す。是故に次に辨ず。心體は復想行より細なりと雖も、但想及び行は無爲法と合して法念と爲す。法念は最も細なり。心は彼よりも麁なり。故に次に心を明し、後に共法を說く。二には觀求の次第、凡夫は本來男は女色の爲、女は男色の爲に煩惱を生ず。故に先に身を觀ず。又色は是れ其入法の初門なり。故に先に身を觀ず。身の不淨を見て便ち是念を作す「云何が樂生、此色に樂著する」と。樂受に由つて貪す。故に次に受を觀ず。復更に誰か是樂を受くと推求する。謂ゆる心識なり。故に次に心を觀ず。復更に誰か是心をして求めしむ。謂ゆる我なり。故に後に法を觀ず。次第是の如し。

【次に等】六に觀相を辨ず。

【大智論】第二十一。

此五門竟る。次に、觀相を辨ず。其修行者既に出家し已つて先づ淨戒を持し、寂靜定に於て內外の色に於て不淨を觀察す。自身を厭はんが爲に、自身の色を觀じて五不淨と爲す。一には種子の不淨、是身は過去の業と煩惱とを種子と爲す。現在の父母の精血を種と爲せば、種不淨と名く。二には住處の不淨、母の腹中に在つて、生藏の下、熟藏の上に己體を安置す。三には自體の不淨、三十六物己體を集成す。四には自相の不淨、九孔より常に流る。兩眼、兩耳、兩鼻及び口、大小便道、是れ九孔なり。眼より眵淚を出し、耳より結聹を出し、鼻中より洟を出し、口より涎吐を出し、大小便道より屎尿を流出す。五には畢竟不淨、此身死し已つて虫食して糞と成り、火燒すれば灰と爲り、之を埋むれば土と成り。究竟じて推求するに、都て淨相無し。是故に名けて畢竟不淨と爲す。若し心散亂すれば身の無常を念じ、三惡道の苦佛法滅せんと欲するを、此厭心を以て還つて不淨觀の中に安住せしむ。他身を厭はんが爲に須く外色を觀ずべく、以て九想と爲す。謂ゆる死相、膖脹、青淤、膿爛、破壞、血塗、虫食、骨瑣分離、是れ九想なり。『大智論』の中には、一の死想を少き一の燒相を加へ、合して以て九と爲す。此義は前の九想章の中に、具に廣く分別するが如し。身念是の如し。身不淨なりと雖も、若し少しく樂事有れば亦樂ふべし、故に次に受を觀じて、唯是れ苦なりと見る。『是義云何。』『受に三種有り。謂ゆる苦、樂、不苦不樂なり。苦受の中には即ち三苦を具す。謂ゆる苦苦、壞苦、行苦なり。樂捨の二受に各二苦を具す。謂ゆる行苦、壞苦なり。『涅槃』に說くが如し。此義廣く釋すれば四諦章の如

【次に等】七に經に依て四念處を辨釋す。先づ身念處

し。』受は是の如しと雖も、若し少しく常事有れば亦樂ふべしと爲す。故に次に心を觀ず。其心相を見るに、生滅流注して旋火輪の如く、分分各異なり。心相是の如し。無常に三有り。一には分段の無常、六道の心は別なり。二には念無常、刹那の間に於て四相遷流す。三には自性不成實無常、有爲は虛集にして一の常性無し。此義は前の優陀那章に、具に廣く分別するが如し。心念是の如し。心は無常なりと雖も、若し神我自在作用の事有れば猶樂ふべし。故に次に法を觀じて唯無我なりと見る。無我に二有り。一には衆生無我、二には法無我なり。是義は前の無我章の中に、具に廣く分別するが如し。此六門竟る。次に、經に依つて辨釋す。身念處の中には、初に內身を觀じ、次に外身を觀じ、後に二を合して觀ず。『何者か是れ內にして、而も復外と云ふ。』『若し十二入の中に就いて分別すれば、一切衆生の六根を內と爲し、六塵を外と爲す。今四念の中には自身を內と名け、他身を外と爲す。』『何が故に初は別にして後は總なる。』『釋に二義有り。一には患を破する不同なり。人、內に著するの情多く、外に著するの情少き有り。人の身の爲に父母妻子財物を棄捨するが如し。內に著すること多きが故に、須く敎へて內を觀ぜしむべし。或は復人の外に著するの情多く、內に著するの情少き有り。人の財の爲に身を亡し命を沒するが如し。外に著すること多きが故に、須く敎へて外を觀ぜしむべし。人倶に著すること有るが故に、須く合觀すべし、二には觀に隨ふ次第なり。行者は本來自身の中に於て、淨相有りと取す。故に先に內を觀ず。內に求めて得ざれば、外に之有りと謂ふ。故に復外を觀ず。向前

【經】大品經釋四念處品、大智論第四十八。

【龍樹の等】大智論第四十八。

【龍樹の等】大智論第四十八。

に內を觀ずるに其外に及ばず、外を觀ずるの時復內に及ばず。是故に第三に內外合して觀ず。內を觀ずる中に就いて、經文に說いて言はく「內身を觀ずるに循身に觀ず。精懃して一心に世の貪憂を除く」と。內身を觀ずとは、別の所觀を立つ。循身に觀ずとは、其觀相を顯す。循は猶順のごとし。其身相に順じて審かに悉く觀察するを、循身觀と名く。精懃一心とは、其觀儀を明す。行者今身相を破壞せんと欲するに、懃に非ずんば辨ぜず。故に須く精懃すべし。故に龍樹の云はく「常人を離別するは易く、知識を離別するは難し、知識を離別するは易く、親戚を離別するは難し。親戚を離別するは易く、己身を離別するは難し」と。行者今己身を離せんと欲せば、必ず須く精懃すべし。懃は專意に由るが故に、一心と曰ふ。『世の貪憂を除く』とは、觀じて離すべきを彰す。何が故に偏に世の貪を除くと說く。』「龍樹釋して言はく「行者此中に多く貪憂を生ず。故に偏に除くと說く」と。」『云何が多く生ずる。』『始五欲を棄てて本の所愛を念ずるが故に、多く貪を生ず。未だ道法を得ざるが故に、多く憂を生ず。是故に偏に世の貪憂を除くと言ふ。又復貪とは、凡夫の起す貪は捨し難し。受生の力强く、三毒の初なり。故に煩惱の中に、偏に貪を除くことを說く。憂根は一向に貪欲の者起す。定を障ふること最も重し。禪の中に先に離す。故に五受の中に、偏に憂を除くことを說く。若し貪を除くことを說かば餘結隨つて亡じ、若し憂を除くことを說かば餘受隨つて遣る。譬へば竹を破するに初節を難しと爲し、若し初節を破すれば餘節皆隨ふが如し。貪憂も亦爾なり。下に外を觀じ及び內外を觀ずること

【受念の等】次に受念處。
【心念の等】次に心念處。
【法念の等】次に法念處。
【次に等】第二に四正勤について明すに五あり。一に釋明。
【龍樹等】大智論第十九、第四十九。
【次に等】二に四正勤の體性を定む。

を明す。類して亦同じく然なり。受念の中に就いて、亦初には内を觀じ、次に外、後に合なり。十二入の中には、受は唯是れ外法なり。入の收なるが故に。今四念の中には、自受を内と爲し、他受を外と爲す。又復意識相應を内と爲し、五識相應は之を名けて外と爲す。亦得定の受は之を說いて内と爲し、散の受を外と爲す。此內外に於て、初は別、後は總なり。心念の中に就いて、亦初には内を觀じ、次に外、後に總なり。十二入の中には、心は唯是れ内なり。意根の攝なるが故に。今四念の中には、自心を内と爲し、他心を外と爲す。又復意識は之を名けて内と爲し、五識を外と名く。亦得定の心を說いて以て内と爲し、散の心を外と爲す。法念の中に就いて、亦初には内を觀じ、次に外、後に總なり。内とは、謂はく心法なり。外とは、謂ゆる非色非心不相應行、及び三無爲なり。中に於て、觀相悉く初門に同じ。

次に、四正勤を辨ず。五門の分別あり。一には其名を釋し、二には體性を定め、三には行を分別し、四には先後を論じ、五には廣く相を辨ず。『名字は如何。』『正勤と言ふは、策修して惰せざる、之を名けて勤と爲し、勤心にして邪ならざるを說いて以て正と爲す。』『問うて曰はく、「何が故に念處及び根力等は皆正と言はずして、此のみ獨り之を論ずる。」』『龍樹釋して言はく、「精進發動して喜、邪の中に入る。彼過を防がんが爲の故に、偏に正を論ず。此正勤は發動すること多きを以ての故に、諸の外道の如く、多く皆策勤して邪倒に隨ふ。翻じて彼過を遮るるを、說いて正と爲すなり。」』此一門竟る。次に體性を定む。此四正勤は皆精進

【論】大智論第十九。
【大智論】右同前

の心數を用て體と爲す。體是れ一なりと雖も、能に隨つて四を分つ。故に論に說いて言はく、「一念の燈の如く、備に四能を具す。亦は能く炷を燋し、亦は能く油を盡し、亦は能く器を熱し、亦は能く闇を破す。正懃も亦爾り。備に四能を具するが故に、四を分つことを得」と。問うて曰はく、『彼燈は一念に四能あり。正懃は爾らず。前後に四を分つ。云何が喩に似たる。』釋して言はく、『喩を立つるの法は一種ならず。或は少分を取り、或は多分を取り、或は復全く取る。今立つる所の喩は少分にして全に非ず。齊く責むべからず。又精進の中にも亦一念に四能を具する義有り。一念の道現起の時の如き、已生の惑をして因と爲ることと成ぜざらしむるを、已生を斷ずと名く。當來の惑果遮して起らざらしむるを、未生を斷ずと名く。卽ち此道行從來未だ起らず、今始めて修起するを、未生を修すと名く。前の善を添助して其をして增廣ならしむるを、已生を修すと名く。行は斯義に就いて燈の如しと說くなり。』問うて曰はく、『懃數は局つて唯善に在りや、亦餘の義に通ずるや。』論者同じからず。毘曇法の中には、懃は唯善に在り。善大地の中の精進數なるが故に。成實法の中には、懃は三性に通ず。今は善の懃を論ず。餘の二に簡別して、說いて正と爲すなり。』問うて曰はく、『念處は論に三有りと說く自性共緣なり。正懃は如何。』「『大智論』の中に宣說すらく、「正懃に其二種有り。自性及び共なり」と。自性と言ふは、論に自ら釋して言はく「道を求むるが爲の故に四種の精進の心數を起すを、名けて自性と爲す」と。共とは、論に言はく、「精進を首と爲し、因緣道を生ず。若は漏無漏、若は色非色、是の如く

『次に等』三に行を分別す。

一切を悉く正懃と爲す。是を名けて共と爲す」と。亦應に緣有るべし。文略して說かず。所策の行卽ち緣と爲るなり。此二門竟る。次に行を分別す。精進の數通じて諸行を策す。行に隨つて異論すれば、門別して計り難し。今は一門に據つて、且く分つて四と爲す。四が中の前の二は懃の惡を斷ずるを明し、後の二は善を修す。惡止善行す。義の次第なり。惡に已未有り、善に曾當有り。故に四種を分つ。問うて曰はく、『已惡は起り已つて謝往し、現今に體無し。當に何の斷ずる所なるべき。』『解するに三義有り。一には已生の惡は謝して過去すと雖も、未起る時に當つて共因と爲つて後を生ずるの義有り。現に對治を修して、其因と爲つて後を生ずるの義を絕つを、已生を斷ずと名く。二には已生の惡は謝して過去すと雖も、現在の心邊に得有つて之を得す。其現得を斷じて、其過惡をして來つて已に屬せざらしむるを、已生を斷ずと名く。三には已起の惡は滅して過去すと雖も、種類續いて生ず。現に對治を修して其種類を絕つを、已生を斷ずと名く。』問うて曰はく、『若し已生の種類を斷ずるを、便ち名けて已生を斷ずと爲すことを得ば、類未來に在るを、何が故に未生を斷ずと名けざる。』釋して言はく、『細に求むれば斷の種類は、實に是れ未生なるべし。但此は是れ共已生の種類にして、一向に全く未だ起らざる者に別にせんが爲に、已生を斷ずと說く。』問うて曰はく、『已善は起ること之れ已に竟んぬ。云何が修すべき。』『釋に三義有り。一には已生の善は未起る時に當つて、共因と爲つて後を生ずるの義有り。現に善法を修して、過去の善をして因と爲し義成ぜしむるを、已生を修すと名く。二には現

【次に等】四に先後を論ず。

起の得過去の善を得て失壊せざらしむるを、已生を修すと名く。見道の中、十五心の邊に皆得生ずること有つて、前の善を得するが如し。是の如きの一切なり。三には已生の善は起り已竟ると雖も、而も其種類次第に後に續く。彼種類未起の者に於て、策修して起らしめ前の善を添助するを、『已生を修すと名く。』問うて曰はく、『彼類其れ實には未だ起らず。何が故に之を已生を修すと說く。』『此れ前の釋に同じ。一向に全く未だ起らざる者に別せんが爲の故に前の善を助くるを、已生を修すと名く。』此三門竟る。次に先後を論ず。前の離惡の中には、或は先に已生の惡を斷ずと說くこと有り、或は先に未生の惡を斷ずと說くこと有り。『是義云何。』釋に五種有り。一には起惑の次第に約して分別すれば、先に已生を斷ず。已生は麁なるが故に。後に未生を斷ず。未生は細なるが故に。初地の障は麁にして先に起る、是故に先に斷じ、二地の障は細にして後に起る、是故に後に除くが如し。是の如きの一切なり。二には四住と無明とを相對して分別す。無明先に成ずれば名けて已生と爲し、四住の煩惱は緣に從つて後に起れば、名けて未生と爲す。若し是義に從はば、先に未生を斷じ後に已生を除く。未生の四住は浮麁にして遣り易し。是故に先に斷ず。已生の無明は微細にして離し難し。是故に後に除く。三には煩惱の成起に約して分別す。一切の煩惱に皆成起有り。過去の煩惱は曾て起つて謝往す。本識に熏じて、無明地の中に集積して種を成ずるを、名けて成就と爲し。卽ち前の煩惱の種類續いて生ずるを、名けて現起と爲し、現起を前に望めて、名けて未生と爲す。若し是義に從はば、亦先に未生を斷じ、後に

已生を除くと宣說することを得。』『是義云何。』『道起るの時、先に方便を修して現起を遮伏し、未生の者をして現行することを得ざらしむるを、未生を斷ずと名け、後に本來所成の種子を斷ずるを、已生を斷ずと名く。』四には煩惱及び得に約して分別す。此門の中に於て、亦先に未生を斷じ、後に已生を斷ずと宣說することを得。『是義云何。』『聖道初めて起つて先に心邊の煩惱の得を斷じ、後をして續せざらしむるを、未生を斷ずと名く。得斷ずるを以ての故に、過の煩惱をして來つて已に屬せざらしむるを、已生を斷ずと名く。』五には煩惱の因果に約して分別す。過去の煩惱後を生ずるを因と名け、未來の煩惱前を起すを果と稱す。因を已生と名け、果を未生と名く。此門の中に就いて、已生未生は斷ずること一時に在り。『是義云何。』『惑因は過去、惑果は未來なり。道、中に起つて因果を隔絕す。因の義成ぜざるを已生を斷ずと名け、果の義成ぜざるを、未生を斷ずと名く。一の道に兩の能あり。故に一時と曰ふ。』前の二是の如し。後の二種の中には、先に未生を起し、後に已生を增す。更に異說無し。『何が故に是の如くなる。』『善法は先に無く今有り、方便もて習生することを明さんが爲なり。先に無きを以ての故に、先に未生を修す。未生起り已つて更に後の善を修し、前の善を添助するを、已生を修すと名く。』若し善の中の久修の者に就いて說かば、亦先に已生を修するの義有り。『是義云何。』『行に二分有り。一には故きを温ね、二には新しきを知る。此二種の中要ず先に故きを温ね、然る後に新しきを知る。其故きを温ぬる者を已生を修すと名け、其新しきを知る者を未生を修すと名く。又善に二有

【次に等】廣く五に四正勤の相を辨ず。先に離惡行に就いて。

り。一には自分、二には勝進なり。自分は已生、先に修して熟せしめ、勝進は未生、後に修して趣入す。故に知んぬ、善の中にも亦先に已生を修するの義有ることを。此四門覺る。次に廣く相を辨ず。離惡行の中、差別するに三有り。一には悔過の行、唯已生を悔ゆ。二には防過の行、唯未生を防ぐ。三には斷過の行、通じて已未を斷ず。『是義云何。』『已作の惡に於て意を起して追變するを、悔過の行と名く。中に於て分別するに、共三種有り。『地持』に說くが如し。過去の所犯を如法に悔除する、是を過去の不放逸行と名く。現在の所犯を卽ち如法に悔する、是を現在の不放逸行と名く。未來の所犯を當に如法に悔すべき、是を未來の不放逸行と名く。此れ三世に於て已起の惡の中に、心に追悔を生ず。未生を悔するに非ず。已生を悔すと雖も、能く彼過をして後に更に續せざらしむ。義に隨つて細分すれば、亦未生を遮す。悔過是の如し。未起の惡に於て意を謹み、防護して現起せざらしむるを、防過の行と名く。中に於て、分別するに共二種有り。『地持』に說くが如し。一には現に對治を修して、過をして生ぜざらしむるを、名けて已作の不放逸行と爲す。二には當に對治を修して、過をして起らざらしむべきを、名けて當作の不放逸行と爲す。防過是の如し。惑の因果を斷じて攝續せざらしむるを、斷過の行と名く。又諸の惑を斷じて已に屬せざらしむるを、亦斷過と名く。中に於て分別するに、乃ち三階有り。一種の行有り。唯現惑を斷じて過未に通ぜず。『是義云何。』『謂はく、同體の自性無明を斷ず。緣觀の智は、法は唯眞にして妄想無しと觀ずるが故に、能く同體の自性無明をして更に後を牽かざらし

【修善門の等】次に七修善を明す。

む。之を名けて斷と爲す。更に餘義無し。設ひ餘義有るとも、同體の治に非ず。今は廢して論ぜず。一種の行有り。唯過未を斷じて現在に通ぜず。『是義云何。』『謂はく、異相麁起の煩惱を斷ずるなり。惑過去に起る、之を說いて因と爲し、當生を果と爲す。道、中に起つて因果を隔絕す。其往因を絕つを過去を斷ずと名け、後の果を息除するを未來を斷ずと名く。道邊に惑無し。故に現を斷ぜず。一種の行有り。通じて三世の一切の諸過を斷ず。』『是義云何。』『過に惑果有り、現に惑得有り。連持して人に屬す。現に對治を修して彼惑得を斷じ、後を牽かざらしむるを、現在を斷ずと名く。惑の因果をして來つて己に屬せざらしむるを、過未を斷ずと名く。』離惡是の如し。修善門の中、兩門の分別あり。一には心に約して分別し、二には修に約して分別す。心に三種有り。一には隨喜心、唯已生を慶ぶ。二には願求心、唯未生を求む。三には迴向心、通じて已未の一切の善法を廻して向ふ所有り。問うて曰はく、『若し喜唯已生を慶ばば、何が故に經の中に、當得を念じて歡喜を生ずること有るや。』『彼は是れ喜なるべし、隨喜と名けず。隨喜の心は要ず已生を慶す。』心に約すること是の如し。修に約すと言ふは、修に二種有り。一には故きを溫ぬ。唯已生を溫ぬるなり。二には新しきを知る、唯未生を增すなり。復二種有り。一には得修、已生を修習す。二には勝進、未生を修習す。復二種有り。一には得修、已生を得す。已生の善種類過去し、或は未來に在り。得有つて之を得するを、已生を得すと名く。已生を得する故に、彼見諦の十五心の中に於て唯復前を得す。前、後を得するに非ず。二には習修、唯未

【次に等】四如意を辨ずるに二あり、一に總じて名を釋す。

【體相は等】二に體相を明す。

【地經】第六。

【地經】第六。

【大智論】第十七

生を習す。未生の善に於て修習して生ぜしむるが故に。四勤是の如し。

次に、如意を辨ず。兩門の分別あり。一には總じて名を釋し、二には體相を辨ず。『名字は如何。』『經の中には、或は說いて如意足と爲し、或は復之を說いて如意分と爲す。如意足とは、欲等の四種の定を求め心に稱ふが故に如意と曰ひ、定に趣くこと自在なる其れ猶脚足のごときを、如意足と名く。如意分と言ふは、分は是れ因の義、欲等は定因なり。定を因の稱に從へて、如意分と名く。』『名字是の如し。『體相は云何。』『此四如意は定行を主と爲す。定は因に隨つて別なり。故に四種を分つ。始め欲定より乃ち慧定に至る。欲定と言ふは、上靜を悕求する、之を名けて欲と爲す。欲に因つて定を得るが故に、欲定と名く。亦可なり。定心は欲に從つて得、果は因の稱に從ふが故に欲定と曰ふ。精進定とは、懃めて下過を厭ひ懃めて上靜を求むるを、名けて精進と曰ふ。進に從つて定を得れば、精進定と名く。亦可なり。定心精進に從つて得するを、精進定と名く。念定と言ふは、『地經』の中には名けて心定と爲す。定の境界に於て心を守つて安住する、之を名けて念と爲す。念は能く定を得るが故に、念定と曰ふ。亦可なり。定心念に因つて得るを、名けて念定と爲す。意を守つて緣に住するが故に、復念と名く。慧定と言ふは、『地經』の中には、思惟定と名く。下過を觀察して上の勝欲を知る、之を名けて慧と爲す。慧に因つて定を得るを、名けて慧定と爲す。亦可なり。定心慧に因つて得るが故に、慧定と名く。而も此慧心思惟分別して上靜を求む。是故に亦思惟定と名くるなり。『大智論』の中に說

【大智論】第十九

【龍樹の等】第十九。

【論】大智論右同

【次に等】第四に五根を明すに五の別あり、一に釋名。

【次に等】二に五根の相を辨ず。

く『初禪を求むるに須く五法を修すべし。欲と念と精進と巧慧と一心となり』と。今如意の中には、略して一心無し。隱顯の故に爾なり。』問うて曰はく、『念處は共に三種有り。自性と共と緣となり。如意は云何。』『大智論』の中に、『二種有り』と說く。自性及び共なり。自性と言ふは、解に二種有り。一には所生の定行に就いて性を辨ず。定數を主と爲す。定は因に從つて別なるが故に、欲等と說く。二には定因に就いて以て共性を辨ず。龍樹の說くが如し。欲心を主と爲す。之に從つて定を得、乃ち思惟に至る、之を以て主と爲す。之に從つて定を得るを、名けて自性と爲す。共とは、論に言はく『四如意定は緣に因つて道を生ず。若は漏無漏共生の善陰を、悉く如意と名く。是を名けて共と爲す』と。前に准ずるに、亦應に緣如意有るべし。文に略して說かず。』

次に、五根を解す。四門の分別あり。一には其名を釋し、二には其相を辨じ、三には次第を論じ、四には位に約して分別す。『名字は如何。』『謂ゆる信根乃至慧根なり。境に於て決定する、之を名けて信と爲し、心を法に練る、之を名けて精と爲し、精心に務めて達するを、說いて以て進と爲し、境を守るを念と名け、緣に住するを定と曰ひ、觀達を慧と稱す。此五種の宿習今成ず。能生を根と曰ふ。』名字是の如し。此一門竟る。次に其相を辨ず。信根の中には、開合不定なり。總じては唯一種なり。或は分つて二と爲す。因を信じ、果を信ず。『地經』に說くが如し。菩薩の行を信ずるは、是れ因を信ずるなり。諸佛の法を信ずるは、是れ果を信ずるなり。大乘既に然なり。小乘も亦爾なり。或は分つて三と爲す。謂

【龍樹の等】大智論第二十一。
【龍樹の等】大智論第四十四。

はく、三寶を信ず。或は分つて四と爲す。『成實』に說くが如し。四不壞信なり。佛法及與び僧戒を信ずる、是れ其四なり。或は分つて五と爲す。謂はく、三寶を信じ、因を信じ、果を信ず。或は分つて六と爲す。佛法僧を信じ、因を信じ、果を信じ、第一義を信ず。或は分つて八と爲す。『地持』に說くが如し。佛法僧諸佛菩薩神通の力を信ずるを、卽ち以て四と爲し、種種の因を信じ、種種の果を信ずるを、前に通じて五と爲し、眞實義を信ずるを、前に通じて六と爲し、其得義を信じ、得方便を信ずるを、前に通じて八と爲す。無上菩提は是れ得義なり。菩薩の學道は是れ得方便なり。廣くは則ち無量なり。精進根の中の義も亦不定なり。之を總ずれば唯一なり。或は分つて二と爲す。謂はく、身と心との二種の精進なり。或は說いて三と爲す。『地持』に說くが如し。一には弘誓精進、二には攝善法、三には利衆生なり。彼に廣く說くが如し。或は四種を說く。前の四懃の如し。或は五六七八九十を說く。並に『地持』の如し。念根の中の義も亦不定なり。之を總ずれば唯一なり。或は分つて二と爲す。一には聞持、謂はく敎法を持す。二には義持、能く義法を持す。或は分つて三と爲す。謂はく三寶の眞實の功德を念ず。或は分つて四と爲す。佛法僧を念じ第一義を念ず。或は分つて六と爲す。謂はく、六念心なり。佛法僧戒施及び天を念ず、是れ其六なり。或は分つて八と爲す。龍樹の說くが如し。前の六の上に於て、更に二種を加ふ。出入の息を念じ及與び死を念ず、是れ其八なり。或は分つて十と爲す。龍樹の說くが如し。前の八種の上に、更に念身及與び念滅を加ふ。是れ其十なり。出世寂滅の樂を念求

【涅槃】第三十一。
【次に等】三に次第を論ず。

するを、名けて念滅と爲す。或は十一を分つ。『地經』に說くが如し。佛法僧を念じ、菩薩を念じ、菩薩の行を念じ、波羅蜜を念じ、十地を念じ、不壞力を念じ、無畏を念じ、不共法を念じ、乃至一切智を念ずるを離れず。是れ其十一なり。前の四種は其所學を念じ、次に三種有るは己が所行を念じ、後の四種は己が所成を念ず。廣くは則ち無量なり。定根の中の義も亦不定なり。之を總ずれば唯一なり。或は分つて二と爲す。世及び出世なり。世俗淨定を名けて世間と爲す。無漏は出世なり。亦三を分つことを得。一には有覺有觀、謂はく初禪等なり。二には無覺有觀、謂はく中間禪なり。三には無覺無觀、謂はく二禪上の一切の三昧なり。或は四種を分つ。謂ゆる退と住と勝進と決定と是れ其四なり。此義は前の八禪章の中に、具に廣く分別するが如し。或は五六七八九十を說く。『地持論』の禪品の中に說くが如し。廣くは則ち無量なり。慧根の中の義も亦不定なり。之を總ずれば唯一なり。或は分つて二と爲す。一には世諦緣、二には第一義緣なり。又漏無漏、世出世等も皆二を分つことを得。亦三を分つことを得。謂はく聞思修なり。又『涅槃』の中に宣說すらく、「般若、毘婆舍那、及與び闍那も亦是れ三種なり。般若は是れ慧、毘婆は是れ觀、闍那は是れ智なり。般若は別相にして世諦を知り、毘婆は總相にして第一義を知り、闍那は破相にして有無を破離し、一實の體を知る。三に多門有り。且く斯を擧ぐるのみ」と。或は四種を說く。聞思修證なり。或は五六七八九十を說く。『地持論』の如し。細分すれば無量なり。體相是の如し。此二門竟る。次に、次第を論ず。五實に同時なり。今は修相に隨つて且く次

【次に等】三に位に約して分つ。【雜心】第八。

第を論ず。信は行の首爲るが故に先に信を明し、信に因つて造修するが故に次に精進あり。精進を以ての故に、法に於て忘れず。故に次に念を明す。念有るを以ての故に、法に住して動ぜず、故に次に定を明す。心靜なるを以ての故に、慧は照明を得。故に後に慧を明す。次第是の如し。此五を經中には慧を正主と爲す。餘の四は伴從なり。問うて曰はく、『道品は慧を用て主と爲す。念處は是れ慧なり。之を列すること前に在り。五根の中には、慧を用て主と爲す。何んが先に列せずして、之を後に彰す。』釋して言はく、『法を辨するに二の次第有り。一には說の次第、先に主、後は伴なり。二には修の次第、先に劣、後に勝なり。道品行の中には、先に念處を列す。是れ說の次第なり。今五根の中には、後に慧根を說く。是れ修の次第なり。又慧に多能有り。一には能く始を開く。故に道品の中には、先に念處を明す。二には能く終に趣く。故に五根の中には、之を後に列す。更に異義有り。後に當に辨釋すべし。「此三門竟る。」次に位に約して分つ。理實には此五遍く始終に通ず。相に隨つて且く分たば、『雜心』に說くが如し。初業地に在るを名けて信根と爲す。見道已前を初業地と名く。出世道に於て能く信順するが故に、見地に在るを精進根と名く。見道の中に於て起行速なるが故に。薄地に在るを名けて念根と爲す。斯陀含の人は心を守つて緣に住し、煩惱を薄するが故に。離欲地に在るを名けて定根と爲す。阿那含の人は八禪を得るが故に。無學地に在るを名けて慧根と爲す。阿羅漢の人は究竟を得るが故に。小を將て大に類するに其義亦同じ。五根是の如し。五力は根の如し。

【次に等】七覺分を明すに四門の別あり。一に釋名。

【次に等】二に體具を定む。

【次に等】三に止觀を分つ。

次に、七覺を解す。四門の分別あり。一には其名を釋し、二には體具を定め、三には止觀を分ち、四には次第を明す。『名字は如何。』『經の中には之を說いて七覺分と爲し、亦は覺支と名く。無漏の聖慧は之を名けて覺と爲す。念等の七種は覺の中の差別なれば、分と名け、支と名く。亦無覺の聖智を覺と名くべし。念等の七種能く彼因と爲れば、分と名け、支と名く。』問うて曰はく、『三十七道品の法は通じて是れ覺分、齊く是れ覺支なり。何が故に此七を偏に覺支と名くる。』『七覺修道は無學に隣る。此れ果に近きを以て、因と爲る相顯なり。故に偏に覺に對して支と說き分と說く。』名義是の如し。此一門竟る。次に體具を定む。三義に分別す。一には果に對して分別す。果を名けて覺と爲す。此七種は但是れ覺支にして、覺と名けず。果の與に因と作るが故に覺支と名く。是れ果體に非ざるが故に、覺と名けず。二には七行に就いて相對分別す。擇法の一種は是れ覺にして支に非ず。體は是れ智慧なり。故に覺と名くることを得。慧の因に非ざるが故に、覺支と名けず。餘の六は是れ支にして覺と名けず。覺の與に因と作るが故に、支と名くることを得。是れ慧の體に非ず。故に覺と名けず。三には修位に約して分別を爲す。此七種は總じては修位を成じ、別しては總の因と爲る。俱に支と稱することを得。此門の中に就いて、擇法の一種は是れ覺、亦は覺支なり。體は是れ智慧なるが故に、覺と名くることを得。總の修位を成ずるが故に、覺支と名く。餘は智慧に非ず。故に覺と名けず。總の修位を成ずるが故に、支と稱することを得。論の中に辨ずる所は此一門に當る。此二門竟る。次に止觀を分つ。定覺は是れ止なり。

【次に等】四に次第を論す。
【成實】第二四諦品。

猗捨は助成す。擇法は是れ觀なり。精進及び喜の二法は助成す。念は則ち俱に調ふ。問うて曰はく、『八正道の中に於ては精進通策す。何が故に此中には、念則ち俱に調ふるや。』釋して言はく、『互に從ふ。理も亦應に齊かるべし。但諸の行門、義意各異なり。八正は見道なり。見道は速疾なり。精進の心は速に於て力强し。故に通策を用ふ。七覺は修道なり。修道は容裕なり。止觀は須く等しかるべし。念は能く俱に調ふ。是故に之を用て通じて止觀を調ふ。』此三門次に次第を論ず。『成實』に說くが如し。學人念を失すれば則ち煩惱を起し、念を善處に繫けて方に能く過を離る。故に先に念を明す。念を先來の所修に繫けて正見明かなるを、則ち擇法と名く。故に次に之を明す。懃擇捨せざるを、則ち精進と名く。是を以て次に辨ず。精進を以ての故に、煩惱減少して心則ち歡喜す。故に次に喜を明す。心喜を以ての故に、身に猗樂を得。故に次に猗を明す。身猗樂なるが故に、心に寂定を得。故に次に定を明す。此定は即ち是れ金剛三昧なり。此定を得るを以て、沒せず、發せず、其心平等なり。故に次に捨を明す。又此定を以て無學果を得、憂を斷じ喜を離る、之を名けて捨と爲す。故に後に之を論ず。問うて曰はく、『向に說く慧は能く始を開く。故に道品の中に、先に念處を說く。復能く終に趣く。根力等の中の慧を最後と爲す。今の七覺の中の擇法は是れ慧なり。何が故に然らずして、之を第二に置く。』釋して言はく、『智慧は備に多義有り。能く始を開く有り。義は前に解するが如し。復能く終に趣く。亦上に釋するが如し。智を行の主と爲す。主は道引を須ふ。故に先に念を明す。主は隨從

【次に等】八正道を明すに四門の分別あり、一に總じて名を釋す。

【次に等】二に體具を定む。

【次に等】三に三學を分つ。

を須ふ。故に後に精進、喜等を宣說す。又復智慧は因に由るが故に生ず。故に先に念を明す。復能く他を生ず。故に後に精進喜等を宣說す。』七覺是の如し。

次に、八正を解す。四門の分別あり。一には總じて名を釋し、二には體具を定め、三には三學を分ち、四には三慧を分別す。『名字は如何。』『八正と言ふは、始め正見より乃ち正定に至る。此八種は通の故に道と名け、邪を離るるを正と曰ふ。』問うて曰はく、「向前の七覺等の行は、皆正と名けず。此のみ獨り之を云ふや。』『龍樹釋して言はく、「道を行じて法に入り、邪中に入ることを懼る。故に須く正を論ずべし。又此八道は入聖の始、飜邪の初なれば、正を辨ずれば義顯なり。故に偏に正と云ふ」と。』名義是の如し。此一門竟る。次に體具を定む。三義もて分別す。第一には總じて見位に約して分別す。此八種は總の見位を成じ、別しては總の因と爲る。通じて分と名くることを得。此門の中に於て、正見の一種は亦是れ道、亦道分なり。正見は道の體なるが故に道と名くることを得、總の見位を成ずるが故に道分と名く。餘の七種は直に道分と名けて道と名けず。正道の體に非ざるが故に道と名けず、總の見位を成ずるが故に道分と名く。二には八行に就いて相對して分別す。正見の一種は直に道と名くべし、道分と名けず。正見は道の體なり。故に名けて道と爲す。體を簡んで具に異す。故に分と名けず。餘の七種は直に道分と名けて道と名けず。義は前に解するが如し。三には果に望めて分別す。菩提を道と名く。此八種は道の與に因と作る。通じて道分と名く。此二門竟る。次に、三學を分つ。此門の中に於て、先に三學を分ち、後に次

【龍樹の等】大智論第四。

【龍樹の等】大智論第十九。

第を論ず。八が中の正語、正業、正命は是れ其戒學、正念、正定は是れ其定學、正見、正思は是れ其慧學なり。問うて曰はく、『戒の中の三種は何の別かある。』『別に三種有り。一には瞋癡を離れて起す所の口業を名けて正語と爲し、瞋癡を遠離して起す所の身業を名けて正業と爲し、貪を離れて起す所の身口の二業を名けて正命と爲す。二には三毒を離れて起す所の口業を、名けて正語と爲し、三毒を遠離して起す所の身業を名けて正業と爲し、四邪命を離るるを名けて正命と爲す。』『是義云何。』『龍樹の說くが如し。一には下口食を離る。謂はく、種殖、合和諸藥、治生販賣して、以て活命を求めず。二には仰口食を離る。謂はく、日月星宿吉凶等の事を占相して活命を求めず。三には方口食を離る。謂はく、豪勢貴勝に媚諂して使命を通致し、言を巧にして多く求めて自ら活命せず。四には四維口食を離る。謂はく、種種の呪術、卜算、吉凶、畫師、泥作、諸の伎藝等を習學して、自ら養活せず。此四種を離るるを、名けて正命と爲す。三には龍樹の說くが如し。無漏の慧を以て口の四過を離るるを、名けて正語と爲し、身の三邪を離るるを、名けて正業と爲し、五邪命を離るるを、名けて正命と爲す。五邪と言ふは、一には利養の爲に詐つて奇特異人の相を現ず。此一は身の邪なり。二には自ら功德を說いて以て他の利を求む。三には吉凶を占相して人の爲に宣說す。四には其威嚴を高聲して人をして敬畏せしめ、以て其利を取る。五には自ら己が得る所の利養を說いて、以て人の心を動す。此は卽ち是れ其利に因つて利を求むるなり。此後の四種は是れ其口邪なり。定學の中に就いて、

【成實】第二。

【次に等】四に三慧に就いて分別す

【成實】第二。

正定を主と爲す。正念之を助く。慧學の中に就いて、正見を主と爲す。正思之を助く。精進通策す。』問うて曰はく、『地持』には、六度を開分して以て三學と爲す。精進は戒に屬す。今此には何が故に三學を通策する。』釋して言はく、『互に從ふは理互に應に齊しかるべし。但『地持』の中には、三義を以て六度を統攝せんが爲に、精進を戒に入る。若し四義を以て六度を統攝すれば、精進亦別なり。故に彼『相續解脫經』の中には、前の三度を說いて以て戒學と爲し、禪を定學と爲し、波若は慧學、精進は通策す。』三學是の如し。『次第は云何。』『成實』に說くが如し。出家して道を求むれば、先に須く戒を受くべし。是故に先に正語、正業、及與正命を明す。戒に由つて心住す。故に次に其正念、正定を明す。定に由つて慧を發す。慧に麁細有り。麁なる有は聞慧なり。說いて正思と爲す。細なる者は修慧なり。說いて正見と爲す。又復麁なる者は世間に在り。未だ理を見ること能はず。說いて正思と爲す。細なる者は出世なり。能く理を見る。說いて正見と爲す。精進は遍く通ず。此れ行の次第なり。八正の說の次第に依らず。』此三門竟る。』次に三慧に就いて、八正を分別す。『成實』に說くが如し。正見は聞慧、正思は思慧なり。餘の六は是れ修慧なり。中に先に須く戒を持して過を離るべし。持戒を以ての故に、三道分を得。正語、正業、及與正命なり。次に善法を修す。修善は須く勤むべし。先に精進を明す。進に由つて心を攝すれば、次に正念を明す。法を念ずるを以ての故に、便ち正定を得。良に八正は義に多途有るを以て、種種に異辨す。皆傷ふこと無きを得。一定すべきに非ず。上

【三】三十七品釋第三に九法に約對して分別す。【涅槃】第三十七【釋するに等】今本門を釋するに三あり、一に同時の心法に就いて分別す。

來第二に別して道品を解す。

(三)第三に、九法に約對して分別す。『涅槃』に說くが如し。若は三十七道品の法に於て、根を知り、因を知り、攝を知り、增を知り、主を知り、導を知り、勝を知り、實を知り、及び畢竟を知るを、淨梵行と名く。此九は乃ち是れ攝道の法なり。『其義云何。』『釋するに四門有り。一には同時の心法に就いて分別し、二には出世純熟の行の中に就いて、義に隨つて分別し、三には大乘に就いて、始より終に至る次第に分別し、四には小より大に至る次第に分別す。同時の心法に就いて別つと言ふは、九が中の前の八は是れ道品行、後の一は是れ其道品行の果なり。前の八は猶是れ十通地中の八種の心數なり。十通大地の名は上に列するが如し。想及び憶を除きたる餘の八是なり。八が中の根本は是れ其欲數なり。欲は能く行を起すが故に、說いて根と爲す。因は是れ觸數なり。觸は能く和合して道行を發生するが故に、名けて因と爲す。攝は是れ受數なり。受は能く法を納むるが故に、名けて攝と爲す。增は是れ思數なり。思は能く起作して道をして增長せしむるが故に、說いて增と爲す。主は是れ念數なり。一切の諸行皆念に隨つて轉ず。是故に念を說いて、之を以て主と爲す。導は是れ定數なり。定は能く出世の聖慧を導引するが故に、說いて導と爲す。勝は是れ慧數なり。諸行の中の上なるが故に、名けて勝と爲す。實は是れ其解脫の數なり。能く諸行をして虛妄を解脫せしむるが故に、名けて實と爲す。』問うて曰はく、『心法は乃ち衆多有り。何の義を以ての故に、偏に此八を論じて餘の者は擧げざる。』釋して言はく、

【次に等】二に出世成就の行の中に就いて義に隨つて分別す。

【經】涅槃經第二十四。

【經】涅槃經第三十七。

【經】右同前。

【經】右同前。

『今は九門と爲して義を辨ず。若し多數を擧ぐれば、行則ち無量なり。後の三門の中にも亦復九義を以て分別すべし。是が爲に彰さず。且く此八を論ず。斯八種に從つて涅槃を獲得するを、名けて畢竟と爲す。』此一門竟る。次に出世成就の行の中に就いて、義に隨つて分別す。前の八は行修、後の一は行果なり。前の八が中に就いて、道の起るは欲に依る。樂欲は是れ其樂行の根本なり。故に名けて根と爲す。問うて曰はく、『經に「一切の善法皆不放念の以に根本と爲す」と說く。今は乃ち欲なりと說く。其義云何。』『經に自ら釋して言はく「欲は是れ生因、不放は了因なり」と。今は生因を說く。故に欲を論ずるのみ。』問うて曰はく、『經に「三十七品は佛を根本と爲す」と說く。今は乃ち欲なりと說く。義は復云何。』『經に言はく「衆生初めて道法を知るは佛を根本と爲す。若し自ら證得すれば、欲を根本と爲す」と。今は出世自所證の行を論ず。是故に欲を宣說して根と爲すのみ。』欲に依つて修を起す。修は必ず緣に託す。前緣に觸對して行心を生ずるが故に、名けて因と爲す。此分の中に於て、汎く諸行を說く。前に因つて後を起すを、悉く名けて觸と爲す。唯觸數のみに非ず。行別不同にして、略して九對有り。經に具に辨ずるが如し。一には信に因つて友に近く、之を名けて觸と爲す。二には友に近くに因つて正法を聞くことを得、之を名けて觸と爲す。三には法を聞くに因つて身口意淨なり、之を名けて觸と爲す。四には業淨なるに因つて正命を獲得す、是を名けて觸と爲す。五には正命に因つて淨根戒を得、之を名けて觸と爲す。六には淨根戒に因つて寂靜處を樂む、之を名けて觸と爲す。七に

【次に等】三に大乘に就いて始より終に至る次第を分別す。

は靜を樂むに因つて能善く思惟す。八には思惟に因つて如法住を得。九には如法住に因つて三十七品を得、能く無量の諸惡煩惱を壞す、是を名けて觸と爲す。觸に由つて受を生ず。受に因つて法を攝す。故に名けて攝と爲す。又受の因緣は、諸の煩惱を生ず。三十七品能く之を破壞す。故に名けて攝と爲す。煩惱の受攝に由つて道を起す。故に善思惟に因つて勤めて道を修習し、諸の煩惱を破す。故に善思を名けて、之を以て增と爲す。三十七品の諸の煩惱を破するに、要ず專念に賴る。是故に念を名けて、之を以て主と爲す。譬へば四兵の主將の意に隨ふが如し。道品も是の如し。皆念の主に隨つて定に入るを以ての故に、能善く一切の法相を分別す。是故に定を名けて、之を以て導と爲す。三十七品法相を分別すれば、智を最勝と爲す。是故に慧を名けて、之を以て勝と爲す。又慧力の故に煩惱消滅す。世間の中の四兵の怨を壞するに、或は二り或は一り、勇健の者にして能くす。道品も是の如し。智慧力の故に能く煩惱を破す。故に名けて勝と爲す。三十七品を修習するに由つて、四禪神通安樂を獲得すと雖も、實と名くることを得ず。若し煩惱を壞して解脫を證する時、乃ち名けて實と爲す。三十七品心を發して道を修し、世の樂及び出世の樂、四沙門果、及以解脫を得と雖も、畢竟と名けず。若し能く三十七品所作の事を斷除するを、大涅槃と名く。是の如きの涅槃を方に畢竟と名く。此二門竟る。次に、大乘に就いて始より終に至る次第を分別す。法に於て初めて善の愛念の心を起す、即ち是れ欲なり。欲を名けて根と爲す。善の愛念に因つて善友に親近す、之を名けて觸と爲す。觸を名けて因と爲す。善友

【次に等】三に小より大に趣くに就いて分別す。

に近くに因つて正法を聽受するを、名けて攝取と爲す。善友に近くに因つて能善く思惟す。故に名けて增と爲す。是四法に因つて能く道を生長す。謂はく、念定智なり。是を則ち名けて主導勝と爲すなり。是三法に因つて二解脫を得。愛を斷除するが故に心解脫を得、無明を斷ずるが故に慧解脫を得。是を名けて實と爲す。是の如きの八法究竟じて果を得るを、名けて涅槃と爲す。是故に涅槃を名けて究竟と爲す。此三門竟る。次に小より大に趣くに就いて分別す。發心出家は之を名けて欲と爲す。欲を名けて根と爲す。白四羯磨は之を名けて觸と爲す。觸を名けて因と爲す。二種の戒を受くる、之を名けて受と爲す。受を名けて攝と爲す。二戒と言ふは、一には是れ波羅提木叉戒なり。性罪を遮防す。二には淨根戒なり。遮過を遠離す。四禪を修習する、之を名けて增と爲す。須陀洹果、斯陀含果を得る、之を名けて念と爲す。念を名けて主と爲す。此位の中、心を守り過を離るるを以ての故に、名けて念と爲す。那含果を得る、之を名けて導と爲す。親しく能く導いて無學果を起すが故に。羅漢果を得る、之を名けて勝と爲す。前の果に勝るが故に。辟支の果を得る、之を名けて實と爲す。眞に是れ麒麟、獨一の行なるが故に。大菩提を得るを名けて畢竟と爲す。道中の極なるが故に。道品是の如し。

大乘義章　卷　第十六末

【一】淨法聚第百十五段に賢聖の義を明すに二門あり第一に釋名。

【涅槃】北本第十一。

大乘義章　巻第十七本

遠法師撰す

淨法聚の因の中、

賢聖の義に二門分別あり。一には名を釋す。二には相を辨ず。

（一）第一に、名を釋す。賢聖と言ふは、和善を賢と曰ひ、會正を聖と名く。正は謂はく理なり。理は偏邪無きが故に、說いて正と爲す。理を證し凡を捨するを、說いて聖と爲すなり。此賢と聖とは、同異に三有り。一には同體名異なり。其れ猶眼目のごとし。同體を以ての故に、始終を問ふこと莫し。皆名けて賢と爲す。並に聖と稱することを得。問うて曰はく、『若し始終皆聖と言はば、小乘の中の見道已前七方便人の如きは未だ聖徳有らず。經論には凡と名く。何の義を以ての故に、名けて聖と爲すことを得る。』釋して言はく、『此等は復未だ眞聖の徳有らずと雖も、聖道を修學して聖に似るを聖と名く。故に論に說いて言はく、「因緣の聖人を名けて凡夫と爲し、內外の凡夫を說いて聖人と爲す」と。』二には賢聖の體別なり。別に五種有り。一には離過成善に就いて分別す。惡を離するを賢と名く。五戒を受けて五惡を防禁するを、便ち賢者と名くるが如し。善を具するを聖と稱す。故に『涅槃』に云はく、「七聖財を具するを、名けて聖人と爲す。謂はく、信と慚と

【涅槃】北本第十一。

【二】第二に賢聖の相を辨ず。今は因門に就いて先づ聲聞を明すに五の別あり、一に釋名

愧と戒と施と聞と慧となり」と。又云はく、「聖戒定慧を具足するが故に聖人と名く」と。第二には三業に約就して分別す。身口の調善、之を名けて賢と爲し、内心の眞正を說いて以て聖と爲す。三には自利利他に就いて分別す。衆生を愛憐して化行純善なる、之を名けて賢と爲し、自行の眞正なるを說いて以て聖と爲す。故に『涅槃』の中に、自利を宣說して以て聖行と爲す。四には境に約して分別す。事中の調善之を名けて賢と爲し、理を證し凡を捨するを說いて以て聖と爲す。故に『涅槃』に云はく、「聖法を得るが故に名けて聖人と爲す」と。『何者か聖法なる。』『常に諸の法性空寂なりと觀ずるが故に。』五には位に約して分別す。見道已前心を調へ惡を離する、之を名けて賢と爲し、見諦已上正に會するを聖と名く。故に『仁王』の中に、地前の菩薩を名けて三賢と爲し、地上の菩薩を說いて十聖と爲す。此は是れ第二の賢聖の分別なり。三には通局の分別なり。賢は通じ聖は局る。賢は通ずるを以ての故に、始より終に至るを皆名けて賢と爲す。故に經に說いて言はく、「賢者舍利弗、賢者須菩提等」と。聖は局るを以ての故に、見道已前を名けて凡夫と爲し、見諦已上は方に聖と名くることを得。名義是の如し。

(二)次に、其相を辨ず。賢聖衆多なり。要攝すれば唯四なり。謂ゆる、聲聞、緣覺、菩薩、及與諸佛なり。佛は後に別して論ず。今は因門に就いて、且く前の三を辨ず。先に聲聞を解するに、曲くは五門有り。一には其名を釋し、二には其相を定め、三には大に對して分別し、四には緣覺中乘に對して分別し、五には當相に分別す。初に其名を釋す。聲聞の名義

【地論】第四。

【次に等】二に聲聞の相を定む。

【地論】第四。

【次に等】三に大に對して分別す。

汎く解するに三有り。一には得道の因緣に就いて以て釋す。如來所說の言敎を聲と名く。聲を飡して悟解するが故に、聲聞と曰ふ。故に『地論』に言はく、「他に從つて聲を聞いて通達するが故に、聲聞と名くるなり」と。二には所觀の法門に就いて以て釋す。『地論』に說くが如し。我衆生等は但名有るのみ。故に之を說いて聲と爲す。聲に於て悟解するが故に、聲聞と曰ふ。三には化他の起說に就いて以て釋す。『法華』に說くが如し、佛道の聲を以て一切をして聞かしむるが故に、聲聞と曰ふ。三が中の前の二は是れ小聲聞、後の一は菩薩なり。義に隨つて以て名く。名義是の如し。此一門竟る。

次に其相を定む。『地論』に說くが如し。聲聞の人に五種の相有り。一には因集、過去に修する所の狹劣の善根、之を以て因と爲す。今依つて行を起すが故に、因集と曰ふ。故に『地論』に言はく、「小善根を修して但依つて自益するを、因集と名くるなり」と。小善根を修するは、是れ其劣なり。但依つて自益するは、是れ其狹なり。二には畏苦、深く三界を厭ひ、疾く滅することを樂求す。三には捨衆生、大悲心無し。四には依心、師の敎授に依つて自ら悟すること能はず。五には是れ觀なり。但能く衆生無我を觀察して聲聞乘を成ず。五が中の前の三は大に對して小を明し、後の二は中に對して以て其小を彰す。問うて曰はく、『成實』に宣說す、「聲聞は二無我を見る」と。彼は何を以ての故に、但衆生無我を觀察すと言ふや。』『此義隱顯あり。前の無我章の中に、具に釋するが如し。』此二門竟る。

次に、大に對して分別す。『法華論』に宣說するが如し。聲聞に其四種有り。一には種

【次に等】四に緣覺に對して分別す

性の聲聞、是人本來常に小法を習つて小性成就し、最後身に於て佛の出世に値ひて小法を樂欲す。佛依つて爲に說くに、小果を證得す。本に從つて稱を立て、種性の聲聞と名く。二には退菩提心の聲聞、是人過去に曾て大法を習ひ、生死に流轉して本念を妄失し、最後身に於て佛の出世に値ひて小法を樂欲す。佛、現欲に依つて爲に小法を說くに、小果を證得す。本大乘を學し今は退して小に住すれば、退菩提心の聲聞と名く。三には增上慢の聲聞、小法の中に於て未だ得ざるを得と謂ひ、未だ證せざるを證すと謂ふ。此れ實に凡夫なり。四には應化の聲聞、謂はく、諸菩薩化に隨つて小を示す。四が中の前の二は是れ實の聲聞にして、後の二は實に非ず。前の二が中の種性の聲聞は、佛の一化に於て決定して小に住し、大に入ること能はず。是故に此人は後に望めて、亦決定の聲聞と名く。未來無餘涅槃の後心想生ずる時、方に能く大に向ふ。退心の聲聞は初め小に住すと雖も、本習を以ての故に、終に能く大に入る。故に『法華』に云はく、「先に修習して小乘を學する者を除く。我今亦是法の中に入らしむ」と。大に對すること是の如し。（此三門竟る。）

次に緣覺中乘に對して分別す。經に「聲聞、緣覺の別に略して二種有り」と說く。一には所觀の法門に約して以て別つ。四諦を觀察して得道する者を、悉く聲聞と名け、十二緣を觀じて得道する者を、皆緣覺と稱す。若し是義に從はば、聲聞人の中乃至七生の須陀洹の人の、最後身に於て無佛の世に出で、現の事緣を藉つて得道する者も亦聲聞と名く。此聲聞の中、細分すれば二有り。一には聲聞の聲聞、是人本來聲聞道を求め、四諦を樂觀し

【次に等】五に當相に分別す。中に二、先づ通相以て論ず。開合不定なれば、先づ總じて一となすを明す。

て聲聞性を成じ、最後身に於て、佛爲に四眞諦の法を說くに値ひて道を悟することを得。本聲聞性にして今復聲聞にて得道す。故に之を說いて、以て聲聞の聲聞と爲す。二には緣覺の聲聞、是人本來聲聞の道を求め、四諦を觀察して道初果を悟る。鈍根を以ての故に、現在世に涅槃を得ず。天上人の中に七返生を受け、最後身に於て佛世に値はず、現の事緣に藉つて道を悟ることを得。事緣に藉つて覺することを得るを以ての故に、說いて緣覺と爲す。本聲聞性にして、四諦を觀察して得道するが故に、說いて聲聞と爲す。是故に名けて緣覺の聲聞と爲す。此は是れ第一にして、所觀の法門に約對して以て別つ。二には得道の因緣に約して以て別つ。佛に從つて聲を聞いて得道する者を、悉く聲聞と名け、現の事緣に藉つて得道する者を、皆緣覺と稱す。若し是義に從はば、聲聞の人の中、佛に從つて十二緣の法を說くを聞いて得道する者も、亦聲聞と名く。此聲聞の中に、細分すれば二有り。一には聲聞の聲聞、義は前に解するが如し。二には緣覺の聲聞、是人本來緣覺の道を求め、常に樂つて十二緣の法を觀察して緣覺性を成じ、最後身に於て佛爲に十二緣の法を說くに値うて、道を悟ることを得。本緣覺性なるも、今復聲聞にして得道するが故に、之を說いて以て緣覺の聲聞と爲す。迦葉等の如きは則ち其人なり。中に對すること是の如し。此四門竟る。

次に第五門に、當相に分別す。中に於て二有り。一には通相以て論じ、二には通別解釋す。通相論の中開合不定なり。增數に之を辨ず。或は總じて一と爲す。謂はく、三乘の中

【或は等】第二に分つて二となすに就いて。

【或は等】次に三に分つ。

の一の聲聞乘なり。

或は分つて二と爲す。謂はく、賢と聖となり。見諦道の前心を調へ過を離るる、之を名けて賢と爲し、見道已上理を證し德を成ずるを、說いて以て聖と爲す。

或は分つて三と爲す。三に三門有り。一には三慧に約して以て三種を說く。謂はく、聞思修なり。五停心觀の親しく敎に依つて起するを、說いて聞慧と爲し、總別念處の敎を去ること已に遠く、意を繫けて身受心法を思察するを、判じて思慧と爲し、此欲界想心の觀行は未だ定に依つて起らざるを以ての故に、修と名けず、煖頂已上禪定の修慧に依つて起る、之を判じて修と爲す。二には外凡內凡及び聖に約して以て三種を別つ。五停心觀、總別念處を判じて外凡と爲し、煖等の四心を說いて內凡と爲し、見道已上を說いて以て聖と爲す。義は後に釋するが如し。三には方便學無學道に約して開合して三と爲す。見道已前に七方便を修するを方便道と名く。五停心觀、總別念處、煖等の四心は、是れ七方便なり。苦忍已上、理に於て專求するを、說いて學道と爲し、阿羅漢の人、理に於て息求するを、無學道と名く。問うて曰はく、『煖等も亦理を求む。何の義を以ての故に學道と名けざる。』釋して言はく、『通じて說かば彼も亦學なり。中に於て別して分たば、彼は學專らならず、又學成せざるが故に學と名けず。』問うて曰はく、『修學は其義相似すれども、煖等の四心は學意專らならず、學行成ぜざれば學と名けずといはば、修心專らならず修行成ぜざるを、何の義を以ての故に、三慧門の中に判じて修慧と爲すや。』釋して言はく、『修學は

並に通局有り。學中の通とは、三學門に依る。一切の戒定慧を修學する等は、亦學と名くることを得。是れ則ち煖等も亦學と名くることを得。學中の局とは、苦忍已上の學心專精に學行成就するを、方に名けて學と爲す。煖頂忍等は學未だ專成ならざるが故に、學と名けず。修中の通とは、三慧門に依る。聞に依り、思に依つて起す所の諸行を、齊く名けて修と爲す。是れ則ち煖等倶に修と名くることを得。修中の局とは、須陀果の後諦に於て重ねて觀ずるを、方に修と名くることを得。餘は義に隨つて更に異名を與へ、修と名くることを得ず。齊しく釋すること是の如し。隱顯に之を論ずれば、修は寛く、學は狹し。齊しく類することを得ず。『修は云何が寛なる。』『世俗の八禪は皆修慧の攝なり。煖等は並に禪定に依つて修起す。故に修と名くることを得。』『學は云何が狹なる。』『學は唯理に望むるに、煖等は理に於て始めて學す。觀察未だ專らならず未だ成ぜざるが故に、學と名けず。』問うて曰はく、『何が故に修は世俗に通じ、學は唯理に望むる。』釋して言はく、『修とは、具に兩義有り。一には修習の義、未得の法に於て修習して起さしむ。二には修治の義、已得の法に於て修治して得しむ。凡夫は本來已に禪定を得、後に染汙を起して或は不淨ならしめ、修して淨ならしめん。故に世俗の八禪定等に望めて、名けて修と爲すことを得。學とは、唯是れ故習の義なり。未得の法に於て、故に習して起さしむ。出世の聖道は、未來得に由つて習學して方に證す。故に聖道に望めて、之を說いて學と爲す。已得の法に於ては、學の義微隱なり。故に世俗曾得の法に於て、其學を說かず。』隱顯且く爾な

【或は等】次に四に分つ、中に二、一に道に約して四と說く。

【彼論】成實論第一。

り。

或は分つて四と爲す。四に兩門有り。一には道に約して四と說く。謂はく、方便道、見道、修道及び無學道、是れ其四なり。苦忍已前に七方便を修するを、方便道と名く。『見道、修道は其義云何。』『入聖の初め四眞諦に於て推求明白なるを、名けて見道と爲し、四聖諦に於て重慮增進するを、說いて修道と爲す。』『位分は何の處なる。』『若し『成實』に依らば、無相の位に入るを名けて見道と爲す。故に彼論に言はく、「信法の二人見諦道に入るを、無相行と名け、世第一の後、須陀果の前、空觀無間なるを、無相行と名く」と。若し『毘曇』に依らば、苦忍已去十五心の頃を名けて見道と爲す。十五と言ふは、斷見諦惑に十六心有り。謂はく、八忍、八智なり。八忍は無礙、八智は解脫なり。彼欲界の見諦の煩惱を斷ずるに、四法忍有り。以て無礙と爲す。謂はく、苦法忍乃至道法忍なり。四法智有つて、以て解脫と爲す。謂はく、苦法智乃至道法智なり。上の見惑を斷ずるに、四比忍有り、以て無礙と爲す。謂はく、苦比忍乃至道比なり。四比智有つて、以て解脫と爲す。謂はく、苦比智乃至道比なり。此十六が中の前の十五心は、是れ須陀向なり。判じて見道と爲す。末後の一心は、是れ須陀果にして見道に收めず。是が爲に說かず。』見道是の如し。問うて曰はく、『煗等も亦四諦を觀ず。何の義を以ての故に見道と名けざる。』『彼學觀すと雖も、而も未だ見ること能はず。是が爲に取らず。』斯陀行の後乃至那含金剛已還を、定んで修道と判ず。重ねて諦理を緣じて修惑を斷ずるが故に、須陀洹果なり。毘曇法の中に

【彼論】成實論第一。
【大智論】第四十九、第七十五、第八十七。
【地經論】第五。

は、判じて修道と爲す。成實法の中には、文に定判無し。唯之を義推して亦判じて修と爲す。『此れ云何が知る。』『彼論に說いて言はく、「信法の二人見諦道に入るを、無相行と名く」と。見に入るを須陀洹と名くと言はず。明かに知んぬ、須陀は是れ修にして見に非ず。又『毘曇』の中に、判じて修道と爲す。『成實』に非せず。明かに知んぬ、共に用ふることを。』論判すること是の如し。理を以て細推すれば、彼須陀果は亦見にして見に非ず、亦修にして修に非ず。『云何が是れ見にして復非見と言ふや。』『見に二種有り。一には推求の義、二には明白の義なり。彼須陀果は見惑を證斷して迷諦の闇盡き、諦を照すこと明白なり。故に見と名くることを得。是れ見なるを以ての故に、『大智論』の中には名けて見地と爲す。又須陀果は大乘の中に於ては、義初地に當る。『地經論』の中には、初地を宣說して名けて見道と爲す。明かに知んぬ、須陀は說いて見と爲すことを得ることを。然るに須陀洹は是れ其證果なり。息觀の處、暫く推求を止むれば、見に於て順ぜず。是義を以ての故に、復非見と言ふ。非見なるを以ての故に、論の中には之を判じて以て修道と爲す。又須陀洹は大乘の中に於ては、義初地滿足の心に當る。『地持』に宣說すらく、「初地の滿心を修慧行と爲す」と。明かに知んぬ、須陀は是れ修にして見に非ず。』『云何が是れ修にして復修に非ずと言ふ。』『修に二種有り。一には諸諦に於て、傍く觀ずること增明かなり。之を名けて修と爲す。二には諸諦に於て重ねて觀ずること增明かなり。進んで修惑を斷ずるが故に、名けて修と爲す。彼須陀果は諦惑を出離し、容裕の邊に傍く修する

こと寛く多し。現在は唯道の下の一行を縁じ、未來は傍く四諦十六聖行の中に於て、悉く增明なることを得。觀ぜんと欲する所に隨つて悉く明見なるが故に。今は是義に從ふが故に、修と名くることを得。是れ修なるを以ての故に、論に修道と名く。未だ四諦に於て重慮觀察し、進んで修惑を斷ぜざるが故に、非修と名く。非修なるを以ての故に、論には見地と名けて薄地と名けず。「正義是の如し。有人宣說すらく「須陀洹果は見惑を證斷すれば、定んで見道に屬し修と名くることを得ず」と。是義然らず。若し須陀果の見惑を證斷するを偏に見と名くれば、彼羅漢果は修惑を證斷すれば應に修道と名くべし。彼は修と名けず。須陀は彼に似たり。何んが勞しく疑を致さん。阿羅漢果を無學地と名く。問うて曰はく、『向に說かく「須陀洹果の見惑を證斷するも、亦見非見の兩義不定なり」と。阿羅漢果の修惑を證斷するも、亦復是の如く不定なりや以不や』釋して言はく、「羅漢は經に無學と名けて、名けて修と爲さず。義を以て細推すれば、亦修非修あらん。』「是義云何。』『修に二種有り。一には諸諦に於て重觀增明なる、之を名けて修と爲す。二には諸智に於て傍修增明なる、之を說いて修と爲す。彼阿羅漢は諦觀滿足して更に增進せず。故に非修と名く。非修なるを以ての故に、經に無學と名く。而も阿羅漢は無學の心邊に、傍く諸智を修して皆增明かならしむるが故に、修と名くることを得。是れ修なるを以ての故に。『雜心』に宣說すらく、「無學の心現に能く一切の諸德をして增明かならしむるを、名けて大明發彰修と爲すなり」と。『問うて曰はく、『前には說く、須陀洹果は亦修非修なり。

【二には等】二に果に約して四を説く。之を辨ずるに三門の別あり、初門は釋名。

【須陀洹】スローターパンナ(Surotapanna)

【斯陀含】サクリダーガーミン(Sakrdagamin)

羅漢に類することを得るも、亦是れ無學非無學なりや不や。』『釋に同異有り。共同と言ふは、須陀洹果は亦修非修なり。義は上に辨ずるが如し。彼阿羅漢も亦是れ無學、亦非無學なり。理に於て息求するを、名けて無學と爲す。三昧神通等の事を論ずるに於ては、猶須らく故に習ふべし。故に名けて學と爲す。共異と言ふは、須陀果の後別に斯陀、阿那含等有り。以て正修と爲す。須陀を彼に簡んで、名けて非修と爲す。小乘の中に於て、羅漢果の後更に無學無し。彼に簡んで阿羅漢を説いて、非無學と爲すことを得ず。』此は是れ初門にして、道に約して四を分つなり。二には、果に約して四を説く。果は謂はく、須陀、斯陀、那含及び阿羅漢なり。此四を辨ずる中、曲しくは三門有り。一には其名を釋し、二には別して其相を定め、三には制立を明す。『名義は如何。』『須陀洹とは、是れ外國の語なり。義釋に三有り。一には名に當て正しく翻ずれば、修無漏と名く。『涅槃』に説くが如し。須をば無漏と名け、陀洹は修習なり。無漏を修するを以て須陀洹と名く。二には義に隨つて傍に翻じて、名けて逆流と爲す。生死の流に逆つて、三途の生死永く受けざるが故に。三には義に隨つて傍に翻じて、亦觝債と名く。將に三途の因を拒んで果を受けず。故に觝債と曰ふ。斯陀含とは、亦外國の語なり。義釋に二有り。一には名に當て正しく翻ずれば、名けて輕薄と爲す。前に形つて稱を立つ。欲界の九品の修惑の中に、六品を斷ずること在り。故に輕薄と云ふ。二には義に隨つて傍に翻ずれば、名けて頻來と曰ふ。後に簡ぶを目と爲す。欲結未だ盡きず、欲界の中に於て頻數身を受く。那含の一たび去つて還

【阿那含】アナーガーミン(Anāgāmin)
【阿羅漢】アルハット(Arhat)

らざるに如かず。故に頻來と曰ふ。舊翻の經の中には、悉く此名を彰す。阿那含とは、亦外國の語なり。此には不還と云ふ。前に形つて稱を受く。欲界の結盡きて、復來生せず。故に不還と曰ふ。阿羅漢とは、亦外國の語なり。外國の語の中、三名相通ず。一に阿羅漢、此には應供と云ひ、二に阿盧漢は、此には殺殺と云ひ、三に阿羅漢、此方には正しく翻じて、名けて不生と曰ふ。義に隨つて三翻の傍に、說いて無著と爲す。無著は因亡ず。三界の法に於て復愛染せず。不生は果喪す。三界地に於て復身を受けず。此四は隱顯するも、理實には含通す。含通するを以ての故に、倶に須陀と名く。乃至倶に名けて阿羅漢と爲す。『涅槃』に說くが如し。此四種皆無漏を修し、同じく生死に逆ひ、並に能く觝債するを以て、是故に一切倶に須陀と名く。皆煩惱を薄す。是故に一切通じて斯陀と號す。斷離する所に於て、皆悉く無還なり。是故に一切通じて那含と名く。皆無著不生の義有り。是故に一切倶に羅漢と名く。賢聖を分たんが爲に隱顯して名を彰す。是故に初果を偏に須陀と名け、乃至第四を偏に羅漢と字く。』『等しく賢聖を分つ。何が故に初果を偏に須陀と名け、乃至第四を偏に羅漢と字くる。』『亦所以有り。』『其義云何。』『凡を超えて聖に入り先に無漏を修す。是故に初果を偏に須陀と名く。無漏轉た增して能く煩惱を薄くす。是故に第二を偏に斯陀と號す。煩惱轉た薄くして欲に於て生ぜず。是故に第三を偏に那含と名く。不生窮極して永く諸有を出づ。是故に第四を偏に羅漢と名く。又無漏を修するは道因を習することを明し、煩惱を薄するは果を證誠することを明す。因先にして果後なるは

【次に等】果に約して四を說く中、二に其相を定む。先づ須陀洹に就いて。

【斯陀含とは等】次に斯陀含に就いて。

義の次第なり。是故に初果は無漏を修することを明し、其第二果は煩惱を薄することを明す。前の煩惱を薄するは、其因亡ずることを明す。不還は果喪す。因は先果は後なるも、亦是れ次第なり。故に第三果は其不還を明す。前の不還果は苦分に盡くることを明す。不生は全く盡く。分より全に至るも亦是れ次第なり。故に第四果は其不生を明す。」問うて曰はく、『此名は局つて小の中に在りや、亦大乘に通ずるや。』釋して言はく、『若し隱顯論門に入れば偏に小乘に在り、若し通門に入れば大の中にも亦有り。『涅槃』に說くが如し。幷に亦能く無漏、住薄、不還、不生の義を修習するが故に。』名義是の如し。次に第二門に別して其相を定む。須陀に三有り。一には守果、『毘曇』の如きに依らば、唯第十六道法智の心のみを須陀洹と名く。若し『成實』に依らば、無相行の後の順舊の智を須陀洹と名く。餘は悉く非なり。此れ證果蘇息の處なるを以ての故に。二には攝因、前の七方便及び見道の心は須陀に趣向す。終を以て始を攝し、因を以て果に從へて、皆須陀に屬す。三には進向、須陀果の後に進んで欲結を斷ずるに六無礙、五解脫有るより來、未だ後の果に至らず。始を以て終を攝して皆須陀に屬す。今此四が中には、通じて三種を攝し、合して須陀と爲す。其れ行果の別を分たざるを以ての故に。斯陀含とは、汎く解するに亦三あり。一には守果、欲界の修治に九無礙、九解脫道有り。第六の一品は解脫道の心にして、是れ斯陀含なり。餘は悉く非なり。此れ證果蘇息の處なるを以ての故に。二には攝因、須陀果の後進んで欲界の六品の修惑を斷ずるに、六無礙及び五解脫有つて斯陀に趣向す。

【涅槃經】第三十五。

【阿那含とは等】次に阿那含に就いて。

【阿羅漢とは等】次に阿羅漢に就いて。

終を以て始を攝し、因を以て果に從へて、皆斯陀に屬す。三には進向、斯陀果の後進んで欲結を斷ずるに三無礙、二解脫道有つて、未だ那含に至らず。始を以て終を攝し、通じて斯陀と名く。『涅槃經』に依らば、此三種の人を通じて斯陀と名く。方を觀じて已に行くなり。今此四が中には、唯守果、及與進向を分つて、以て斯陀と爲す。亦行果の別を分たざるを以ての故に。攝因の一種は初果に收屬す。是が爲に取らず。阿那含とは、亦三種有り。一には守果、欲界の修治九解脫の中の第九の一品は、是れ阿那含なり。此れ證果蘇息の處なるを以ての故に。二には攝因、斯陀果の後進んで欲結を斷ずるに、後の三微品に三無礙、二解脫道有つて那含に趣向す。終を以て始を攝し、因を以て果に從へて、皆那含に屬す。三には進向、那含果の後進んで初禪乃至非想の一切の修惑を斷ず。非想地の第九の解脫を除いて其餘の一切の無礙解脫なり。本を以て末を攝して、通じて那含と名く。今此四が中には、偏に守果、及與進向を分つて阿那含と爲す。亦行果の別を分たざるを以ての故に、攝因の一種は推して前の果に屬す。是が爲に取らず。阿羅漢とは、其二種有り。一には守果、非想一地の九解脫の中、末後の一品は是れ阿羅漢なり。餘は悉く非なり。此れ無學證果の心なるを以ての故に。二には攝因、那含果の後、進んで初禪より非想に至る結を斷ずる一切の無礙と、後の一品の解脫道の心を除いて、其餘の解脫は羅漢に趣向す。終を以て始を攝し、因を以て果に從つて、皆羅漢に屬す。羅漢果の後、上として趣くべきところ無きが故に趣向無し。今此四が中には、偏に守果を分つて以て羅漢と爲す。攝因の

一種は那含に收屬す。是に爲つて取らず。問うて曰はく、『何が故に初果の中には因を攝して果に從ひ、餘は是の如くならざる。』釋して言はく、『彼初果の前に於て、更に餘果の以て推屬すべきもの無きが故に、初を攝して後に從ふ。後の三果は前に果の推すべきもの有るが故に、後に從はず。』問うて曰はく、『何が故に一切の進向、皆前の果に屬して後に屬せざる。』釋して言はく、『後の進向の道を起す時、前果の得猶成じて未だ捨せず。故に前に從へて名く。後果の得未だ成せず、未だ現ぜず。故に後に從はず。又復後に從はば便ち四果差別の義を壞す。故に後に從はず。』『云何が壞するや。』『若し前の向を攝して以て後の果に從はば、斯陀の住薄は不薄の義を雜へ、那含の不還は有還の義を雜へ、羅漢の不生は有生の義を雜へん。故に名けて壞すと爲す。若し進向を攝して以て前果に從はば、須陀の修無漏の義を壞せず、斯陀の住薄の義を壞せず、那含の不還の義を壞せず、羅漢の不生の義を壞せざらん。故に須らく前に屬すべし。』又復四果は純淨の功德出障の處に說く。前向未だ純ならず、故に後に從はず。又若し向を攝して以て後果に屬すれば、聖人に便ち增上慢の過有り、』『云何が增慢なる。』『未薄の處に已に薄の想を生じ、未不還の處に不還の想を生じ、未不生の處に不生の想を生ず。故に增慢と名く。斯多妨を以て、是故に一切進向の道を四果に別分す。故に前果に屬して後に從はず。』問うて曰はく、『後に從つて若し多過有れば、何が故に初果は、向を攝して後に從へる。』『此は上に釋するが如し。初果已前は果として屬すべきもの無し。故に牽いて後に從ふ。』問うて曰はく、『若し

【次に等】第三に四果を制立す。且く五義を以てする中、一に出觀に約す。

初果の前に果として屬すべきもの無ければ向を攝して後に從ひ、餘は前に果有れば其後の向を推して前に屬すと言はば、彼八禪の中の初禪已前に更に禪無く、彼未來禪は初禪に屬すべく、二禪已上乃至非想の前に禪有るが故に、彼一切の禪の方便道の中の無礙解脫は、應に下地に屬して上禪の收に非ざるべし。』釋して言はく、『應に齊かるべし。義を立つるに左右あり。全同すべからず。』『云何が左右ある。』『彼八禪定は果分の業に約し、一切の方便と根本禪と同じく一果を牽く。故に悉く後に從ふ。四果の義を辨ずるに、果を分つて因に異にす。故に前の方便は推して前果に屬す。』分相是の如し。次に第三門に、四果を制立す。『聖果は細分すれば、應に無量に有るべし。今何を以ての故に、定んで此四を立つる』。『毘婆沙』に依らば、多義に制立す。具に論ずべからず。今此には略して五義を以て制するなり。一には出觀に約して以て四果を制す。凡そ是れ果を制するには、必ず出觀に約す。』『何が故に然る。』『出觀の處に得證の想を生ず。故に就いて果を制す。』『云何が知ることを得る。』『緣覺の人の道を修し結を斷ずるは聲聞と同じ。數出でざるを以て、多果を制せず。明かに知んぬ、聲聞の多果を制立するは正しく數出づるに由ると。』『何が故に緣覺は數出觀せずして多果を制せざる。』『聲聞は偏に爾なるも、緣覺は利根なり。利根なるを以ての故に、煩惱輕薄なり。人大力にして擔輕ければ息まざるが如し。緣覺是の如し。聲聞は鈍根なり。鈍根なるを以ての故に、煩惱深重なり。人小力にして擔重ければ動息するが如し。聲聞是の如し、動息するを以ての故に、多果を制立す。三

界の見惑を斷除し、窮處に其れ必ず出觀す。此出處に就いて初果を制立するなり。『問うて曰はく、『何が故に此處に必ず出觀を須ふる。』『釋に兩義有り。一には創めて見惑を斷じ、多く功力を用ひて疲弊するが故に出づ。二には見惑を斷じて凡を超えて聖と成り、永く三塗を絶つて慶嘉するが故に出づ。欲界六品の修惑を除斷するも亦必ず出觀す。故に此處に就いて第二果を制す。『何が故に此に至つて復出觀を須ふる。』『解に亦兩義あり。一には此惑麁強にして息め難きに由つて、之を斷ずるに功を用ひ疲弊するが故に出づ。二には麁過を離れて慶嘉するが故に出づ。欲界の修惑を斷除し、窮盡するも亦必ず出觀す。故に此處に就いて第三果を制す。『何が故に此處に復出觀を須ふる。』『亦兩義有り。一には欲界の貪欲、瞋恚、慳悋、嫉妬、無慚愧等の諸の麁煩惱を斷じて、力を用ふること增多く、疲弊するが故に出づ。二には麁過を離れて慶嘉するが故に出づ。上二界の一切の結を斷じ盡して、亦必ず出觀す。其四智究竟の想を生ずるが故に、復此に約して第四果を制す。『何が故に此處に復出觀を須ふる。』『亦兩義有り。一には上界の一切に煩惱を斷じて、力を用ふること增多く、疲弊するが故に出づ。二には永く生死を絶し無學を究竟して慶嘉するが故に出づ。此四處に必定して出觀するを以ての故に、就いて果を制す。餘の出は不定なり。故に果を制せず。『問うて曰はく、『何が故に見諦の惑を斷ずるは要ず盡して方に出で、修を斷ずるは數出づる。』『釋に兩義有り。一には見諦の惑は迷心滅し易し。其れ猶石を折るがごとし。中息することを假らずして能く斷じ盡す。人坂を下

るは易きが故に息まざるが如し。作意は除き難し、藕絲を絶つが如し。一顆相續して斷じ盡すこと能はず、故に、動出づることを須ふ。人山に上るは難きが故に頻息するが如し。二には因縁の惑は輕く三途增上の苦報を感じ、畏苦の情猛し。是が爲に息まず。嶮道を行くに走つて少息まざるが如し。作意は能く人天の生死を招く。人天優遊して厭畏の心薄し、是の故に、數息む。寛處には徐しく走り、多く息むが如し。』問うて曰はく、『等しく是れ修惑の中なり。何が故に欲界の作惑を斷除するは中息して果を制し、上界は爾らざる。』『釋に三義有り。一には欲界の惑は凡夫多く起す。習使の力強くして頓斷すべきこと難し。故に中息を須ふ。上界の煩惱は、凡夫未だ之を起すこと希少にして使力輕薄なり。中息を須ゐずして、能く頓盡す。二には欲界の惑多くして斷盡すべきこと難し。故に中息を須ふ。上界は惑少く、息せずして能く盡す。』『彼云何が少き。』『瞋恚、慳嫉、無慚愧等は彼處に無きが故に。三には欲界の煩惱は二の因縁より起る。一には因力、使性を斷ぜず、及び煩惱を助く。二には緣力、謂ゆる、色聲香味觸等なり。是二力の起惑は斷じ難きを以ての故に、中息を須ふ。上界の煩惱は因より起ると雖も、緣力微少にして、頓斷すべきこと易ければ、息せずして能く盡す。息せずして盡すが故に、多果を制せず。』問うて曰はく、『等しく是れ欲界の中なり。何が故に六品の惑を斷除し盡して、方に息して果を制し、後の三を斷じ盡して一果を制するや。』釋して言はく、『前の六過は是れ麁重なり。聖人は此に於て厭畏増盛し。故に盡して方に息す。後の三は輕微にして厭畏の情少し。故に

【二には等】二に見惑に約す。

【三には等】次に三道に約す。

【四には等】次に四生に約す。

後に約して辨じて一果を辨するなり。又進んで開して辨し、倶に並して苦に息す。前に前の六を開して共に一果を辨す。今は後を通じて辨し、故に後の三を開して一果を立つるのみ。』『若し爾らば上界の煩惱は前た後に、前六を導し盡く、更に多果を辨すべし。』『此れ前に辨するが如し、更に勝義有り。受者に之を論ず。』此の一の義意を、二には義意に約して別に見を建立す。見惑を斷除し那を示して離惑を顯立す。又見惑を開して永く三塗を離し、世道の表に出づる故に別に果を立つ。欲界の此の九品の修惑の中、前の六品は其性麁重にして能く業作を發し、前業を斷除して業作の表に出づる故に、此處に就いて第二果を辨す。欲界地の中に、生不斷有り。後の三品を斷じて不還の表に出づる故に、此處に就いて第三果を辨す。上界の煩惱は、惟だ是れ汙穢の法なり。之を斷除する故に、第三無著の表に出離す。故に此處に就いて第四果を辨す。是の如き義の故に、三には四に約して四果を建立す。『毘婆沙』に依るに釋し、四道に約して建立す。欲界の中に於て、其小分を斷じて第二果を立て、修惑を全斷して第三果を立て、有頂の惑を斷盡して第四果を立つ。問うて曰はく、『修惑を頓に斷除し、何を以て二の果を立て、有と無明とを除きて、共に一の果を立つる。』『欲界の中の九品は斷ずる時、開いて二を立つ。有頂の煩惱は等を斷ずる時に、合して一と為す。』此三の義意。四には四生に約して四果を建立す。然に此く於し、二生、又異生を捨するに對して前果を建立す。此二は斯く三生道に在り。故に四の分段を棄するに第二果を立て、全く生を捨するに第三果

【五には等】 次に五趣に對す。

【或は等】 次に分つて五となすを明す。

【或は等】 次に分つて六とす。

【涅槃經】 北本第三十五。

を立て、永く化生を出づるに第四果を立つ。此四の義竟る。五には五趣に對して四果を制立す。亦論に說くが如し。下の三趣を出づるに初果を制立し、人の少分に對して第二果を立て、全く人道を捨するに第三果を立て、天道を出離するに第四果を制す。亦可なり。人及び天の少分を捨するに第三果を立て、全く天道を出づるに第四果を立つ。制立是の如し。上來增數の四門を分別す。

或は分つて五と爲す。一には外凡、五停心觀、總別念處なり。事中の安心未だ諦理を觀ぜざる、之を名けて外と爲し、生死凡鄙の法を具足するが故に、名けて凡と爲す。二には內凡、煗等の四心なり。諦理を學觀して聖人の性を得るが故に、名けて內と爲し、凡法未だ捨せざるが故に、稱して凡と爲す。三には見道、四には修道、五には無學道なり。

或は分つて六と爲す。『涅槃經』迦葉品に說くが如し。彼に說かく、「恒河に七衆生有り。涅槃河の中に七種の人有り。始め常沒より乃ち俱行に至る」と。初の一の常沒は賢聖に攸めず、後の六は是れ其賢聖の所攝なり。即ち此義に就いて、以て六種を分つ。五停心觀乃至煗、頂は通攝して、以て出已還沒と爲し、忍、世第一は出已住と名け、苦忍乃至須陀洹果は名けて觀方と爲し、斯陀行の後那含行を盡すは、觀已行と名け。阿那含果より羅漢向を盡すを、行已住と名け、阿羅漢果を名けて俱行と爲す。』『何が故に初分を、出已沒と名くる。』『此位の中に於て解脫を樂求するが故に、名けて出と爲す。分未だ決定せざるに惡知識に過ひ、退して諸過を起し惡道に沈沒するを、出已沒と名く。』『退して何の過を起

す。』『念處已前は惡有りて斯に起す。煗頂の中の退は、經論に不同なり。『毘曇』の如きに依らば、一闡提を除いて餘惡を悉く起す。『涅槃經』に依らば、其四重五逆謗法及び一闡提を除いて、但十惡及び餘の遮罪を起す。』『何が故に忍及び世第一の法を、出已住と爲すや。』『出は前に釋するが如し、堅く正觀を守つて、退して惡を起さず、惡趣に墮せざるが故に、名けて住と爲す。故に『涅槃』に云はく、「忍法に住する時、當に知るべし。無量の三惡道の報皆非數滅す。更に受けざるが故に」と。又經に說いて言はく、「世上正見の者終に惡道に墮せず。彼を忍等と名け、上正見と爲す」と。若し『成實』に依らば、煗心已去を皆正見と名く。斯れ惡に墮せず、齊しく住と名くることを得。』『何が故に苦忍より須陀洹果に至るを、名けて觀方と爲す。』『四諦を觀ずるが故なり。』問うて曰はく、『煗等齊しく四諦を觀ず。何の義を以ての故に觀方と名けず、偏に苦忍より須陀洹果に至るを、名けて觀方と爲す。』釋して言はく、『煗等は觀にして未だ見ならざるが故に、名を與へず。苦忍已去は四諦を觀じて四事を獲得するが故に、偏に之に名く。』『云何が四と爲す。』『一には堅固道に住す。所有の五根能く動ずる者無し。二には能く遍く觀察す。悉く能く內外の煩惱を呵責す。見疑無明は親しく諦理に迷へば內煩惱と名け、貪瞋慢等は諸見に依つて生じ、親しく理に迷はざれば、外煩惱と名く。三には能く如實に見る。謂ゆる、忍智なり。八忍は推求し、八智は決了す。四には能く大怨を壞す。謂はく、四倒を破するなり。』『何の義を以ての故に、斯陀行の後を觀已行と名くる』。『前の諦觀に依つて、心を修道に

【或は等】次に七に分つ。

繫けて欲界の貪欲瞋恚愚癡憍慢を斷ぜんと爲るが故に、名けて行と爲す。』『何の義を以ての故に、那含果の後は之を名けて住と爲す。』經に釋するに六有り。一には色界、及び無色界に在つて身を受くるが故に、之を名けて住と爲し、二には欲界の人天地獄畜生餓鬼を受けざるが故に、名けて住と爲し、三には無量の結を斷じて餘少しく在るが故に、之を名けて住と爲し、四には二愛慳貪瞋恚を遠離するが故に、名けて住と爲す。二愛と言ふは一には是れ色愛、妻色を愛染す。二には欲愛、餘の五欲に著す。五には共凡夫の事を造作せざるが故に、名けて住と爲す。此れ婬欲を名けて共凡事と爲す。六には自ら畏るる所無く、他をして畏れしめざるが故に、名けて住と爲す。自ら惡行無ければ苦果を畏れず。故に自ら畏るること無し。諸の衆生に於て惱害せざるが故に、他をして畏れしめず。』『何が故に、羅漢を名けて俱行と爲す。』『水は世間に喩へ、陸は出世に喩ふ、是れ阿羅漢なり。能く煩惱を觀じて涅槃に至る。是故に名けて水陸俱行と爲す。』

或は分つて七と爲す。見諦道の前、行に隨つて三を分つ。謂はく、聞、思、修なり。義は上に判ずるが如し。苦忍已上果に隨つて四を分つ。謂はく、須陀洹乃至羅漢なり。亦上に辨ずるが如し。又『大品』に依らば、三乘共地に亦七を分つことを得。一には乾慧地、謂はく、五停心、總別念處、不定の聞思なり。未だ定水を得て自ら沾潤せざるが故に、名けて乾と爲す。二には性地、煖等の四心、諦理を學觀して聖人の性を得るが故に、性地と名く。三には八人地、見諦位の中具に八忍を修するを、八人地と名く。四には見地、須陀

【或は等】次に分つて八とす。即ち四向四果なり、今之を釋するに六門の別あり、第一に其相を辨定す。

洹果なり。諦を見ること周く盡すを、名けて見地と爲す。五には薄地、斯陀行の後漸く欲結を斷ずるを、名けて薄地と爲す。六には離欲地、那含果の後、欲過を超出するを、離欲地と名く。七には阿羅漢地なり。此れ等しく前の三乘地の中に、具に廣く辨釋するが如し。

或は分つて八と爲す。謂はく、四向果なり。因を修して果に趣く之を名けて向と爲し、德を成じて因を遂ぐるを說いて、以て果と爲す。果向細分すれば、乃ち無量有り。今は一門に據つて、且く分つて八と爲す。『八名は是れ何ん。』『謂はく、須陀向より羅漢向に至り、須陀洹果より羅漢果に至る。中に於て、略して六門を以て分別す。一には共相を辨定し、二には有漏無漏に就いて分別し、三には有爲無爲に就いて分別し、第四には禪地に約就して分別し、五には超越不超越の別を明し、第六には共退不退の義を明す。』『共相は如何。』『毘曇』の如きに依らば、五停心より道比忍に至るを須陀向と名け、道比智心を須陀果と名く。若し『成實』に依らば、初より無相位を盡す來を須陀向と名け、無相位の後の順舊觀心を須陀果と名く。彼は四諦に於て、總觀して別たず。是が爲に道比忍等は之を以て向と爲し、道比智の心は之を以て果と爲すと說かず。須陀果の後進んで欲界六品の修惑を斷ずるに、六無礙、五解脫道有るを斯陀向と名け、末後の一品の解脫道の心を斯陀果と名く。斯陀果の後進んで欲界の七八九品修道の煩惱を斷ずるに、三無礙、二解脫道有るを那含向と名け、末後の一品の解脫道の心を那含果と名く。那含果の後進んで初禪より

【四次に等】第二に有漏無漏に就いて分別す。

非想に至る結を斷ずるに、非想地の末後の解脱を除く、其餘の一切の無礙解脱を羅漢向と名け、非想の結を斷ずる最後の解脱を羅漢果と名く。相別是の如し。此一門竟る。次に、有漏無漏に就いて分別す。須陀洹向とは、論者不同なり。若し『毘曇』に依らば、世第一の前は一向に有漏、苦忍等の心は一向に無漏なり。若し『成實』に依らば、聞思位の中の想心の觀行の事を縁じて我を破すは、無漏に相似するも、性は是れ有漏なり。煗等の四心諦空を觀見して漸く諸結を斷ず。能く是の如しと雖も、猶有心の爲に之れ間隔する所なれば、之を判じて以て雜相無漏と爲す。無相位の中は一向に無漏なり。須陀洹果は定んで是れ無漏なり。斯陀含向、斯陀含果、阿那含向、阿那含果、阿羅漢向は、『成實』の如きに依らば、一向に無漏なり。唯無漏道のみ能く結を斷ずるが故に。若し『毘曇』に依らば、性は是れ無漏なり。義に隨つて兼ねて論ずれば、漏無漏に通ず。『是義云何。』『斯陀向等に隨有れば聖智結を斷ず、之を名けて正と爲す。等智の結を斷ずるを、說いて以て隨と爲す。正は是れ無漏、隨は是れ有漏なり。』問うて曰はく、『一切悉く二種を具するや、具せざる者有りや。』釋して言はく、『齊しく具す。』問うて曰はく、『人有つて純ら聖道を用て煩惱を斷ずれば、云何が隨有らん。人有つて純ら等智を用て結を斷ずれば、云何が正有らん。』『同治修に依つて互に相成ずるが故に。』『云何が相成ずる。』『無漏道を用て下の煩惱を斷ずれば、卽ち上地の有漏の功德を成ず。若し等智を用て下の煩惱を斷ずれば、亦上地の無漏の功德を成ず。所以に齊しく具す。阿羅漢果は一向に無漏なり。』問うて曰はく、

【次に等】第三に有爲無爲に就いて分別す。

『斯陀、那含果の中、「毘曇」の如きに依らば、並に等智を說いて以て隨果と爲し、此隨果を說いて以て有漏と爲す。阿羅漢果は何を以ての故に然らずして、偏に無漏と名くる。』釋して言はく、『等智を以て隨果と爲さば、非想の結に於ては全く治能無きが故に隨果無し。隨果無きが故に、純ら無漏と名く。』有漏無漏の分別是の如し。此二門竟る。次に、有爲無爲に就いて分別す。戒定慧等は是れ共有爲、數滅の功德は是れ共無爲なり。此二若し滅道に就いて分別すれば、有爲の功德を悉く名けて向と爲し、無爲の功德を盡く判じて果と爲す。若し四向四果に就いて分別すれば、向の中に具に有爲無爲有り。果の中も亦然なり。問うて曰はく、『向の中には既に二種を具す。有爲無爲なり。何者か正向にして、何者か正に非ざる。』『解に兩義有り。一には同類分別す。有爲無爲の二種の向を別して有爲無爲の二果に望むるに、各正の義有り。』『共相云何。』『有爲の向を有爲の果に望むれば同類相生す。故に正と名くることを得。又果に到る時、彼因中の有爲の功德を得て共に一果を成ず。故に亦正と名く。向中の無爲を無爲果に望むれば、同類相成す。之を名けて正と爲す。又果に至る時、彼因中の無爲の功德を得て共に一果を成ず。故に亦正と名く。二には强弱分別す。因中の有爲は果に趣く力强ければ判じて正向と爲し、無爲は無力なれば判じて隨向と爲す。』『是義云何。』『因中の有爲は修習の力能く果中の有爲の功德を生ず。故に名けて正と爲す。復能く結を斷じて果中の無爲の功德に趣向す。故に彼德に望めて亦正と名くることを得。無爲の功德の向に在るを向と名く。前の二の能無し。故に正と名け

【次に等】第四に禪地に就いて其相を辨ず。

ず。』問うて曰はく、『果中の有爲無爲の二種の德の中、何者か正果なる。』『解に亦兩義あり。一には同類相望めて俱に是れ正果なり。果中の有爲は正しく向中の有爲の行より生ず。名けて正果と爲す。果中の無爲は正しく因中の無爲の德を攝して成ず。故に亦正と名く。第二には求心に約對して分別す。無爲は正果有爲は隨果なり。』『何が故に然るや。』『聖人源涅槃の爲に道を修す。無爲は正しく是れ賢聖の所求なり。故に是れ正果なり。有爲は所厭なり。故に正果に非ず。良に有爲は是れ厭離する所にして、正果に非ざるを以ての故に、煩惱盡き已つて并に道も亦捨す。無爲は所欣なり。是れ正果なるが故に、畢竟じて證を求む。』有爲無爲の分別是の如し。此三門竟る。次に、禪地に就いて、以て其相を辨ず。『成實』の如きに依らば、末を攝して本に從はば、禪地に九有り。謂ゆる、八禪及び欲界の中の如電三昧なり。末を分つて本に異すれば、禪地に十有り。初禪の中に於て別して中間を分ち、餘に通じて十と說く。若し『毘曇』に依らば、末を攝して本に從はば、禪地に八有り。謂ゆる、八禪なり。彼宗は欲界に定有りと說かざるが故に、但八有り。末を分つて本に異すれば、禪地に十有り。初禪の中に於て、別して未來、及與中間を分ち、餘に通じて十と說く。禪地是の如し。『成實』の如きに依らば、四向四果は並に初禪より無所有に至るに依る。此七處は無漏の所依なるを以て、是故に名けて七依定と爲すなり。并に欲界如電三昧に依る。非想地を除く。問うて曰はく、『『毘曇』に宣說すらく、「空識無所有處は見解を發さず」と。『成實』は何が故に、「初果、及與初向同じく無色に依る」と宣說

するや。』『宗別同じからず。立義各異なり。『毘曇』の如きに依らば、無色は下の有漏種を緣じて苦集の觀を爲さず。亦下の有漏の對治を緣じて、滅道の觀を爲さず。是故に無色は見解を發さず。『成實』には、緣ずることを得るが故に、無色に依つて亦見解を發す。』又問ふ、『非想には何が故に依らざる。』『無漏無きが故に。』問うて曰はく、『『成實』に宣說すらく、「非想の無漏の心の後滅盡定に入る」と。云何が說いて、非想地の中に無漏無しと言ふや。』釋して言はく、『非想には但順舊遊觀の無漏有り。其增觀斷結の無漏無し。是が爲に依らず。』『何者か順舊遊觀の無漏なる。』『先に下定を用て無漏慧を發して、非想地の苦無常等を觀じ、然して後に彼非想地の心を用て、前の所觀の苦無常等を緣ずるを、名けて順舊遊觀の無漏と爲す。此心微なるを以て、推求の力薄し。是故に增觀の無漏を發さず。若し『毘曇』に依らば、須陀、斯陀の二果及び向は、未來禪に在つて餘地に通ぜず。良に以れば、此等の欲結未だ盡きざれば、未だ餘禪を得ず。所以に依らず。阿那含向は或は六地の攝なり。根本の四禪と未來と中間となり。其次第の人は必ず未來に依る。彼次第の人は欲結未だ盡きざれば、未だ餘禪を得ず。是が爲に依らず。超越の人は或は未來乃至四禪に依る。未來禪に依つて見諦道に入るは、即ち未來の攝なり。乃至四禪に依つて見に入るは、則ち四禪の攝なり。彼宗には、四空は見道に入らず。是が爲に依らず。阿那含果は、亦六地の攝なり。前と相似せり。其次第の人は、亦未來の攝なり。』『何が故に然るや。』『彼次第の人は、未來禪所發の無漏を以て無礙道と爲し、欲界の結を斷じ

盡し已つて、還彼禪所發の無漏を用て解脫道と爲す。故に未來の攝なり。餘禪所發の無漏を用て欲界の結を斷ぜず。是故に此果は餘禪に在らず。超越の人は或は未來の攝なり。乃至四禪の義は前に解するが如し。阿羅漢向は或は九地の攝なり。根本の四禪と未來と中間と及び三無色なり。或は十地の攝なり。非想地を加ふ。無漏正向は則ち九地の攝なり。若し有漏の隨向に通じて之を說かば、則ち十地の攝なり。『云何が無漏は九地の攝なるや。』『一無漏に二有り。一には行修の緣中に現起し、二には得修成就するのみ。若し行修を論ずれば、九地の中に於ては有無不定なり。或は一二三四五六乃至九種を具す。』『是義云何。』『一人有つて純ら未來禪の中の所發の無漏を用て、初禪の結乃至非想を斷ずるは、則ち一地の攝なり。或は初禪を用ひ、或は中間を用ふ。義も亦同じく爾なり。或は復人有つて未來禪及び初禪地所發の無漏を用て、上界の結を斷じて羅漢に趣向するは、則ち二地の攝なり。或は未來、初禪、中間所發の無漏を用て、上界の結を斷ずるは、則ち三地の攝なり。或は前の三を用ひ、加ふるに二禪所發の無漏を用て上界の結を斷ずるは、則ち四地の攝なり。或は前の四を用ひ、加ふるに三禪を用ふるは、則ち五地の攝なり。加ふるに四禪を用ふるは、則ち六地の攝なり。加ふるに空所を用ふるは、則ち七地の攝なり。加ふるに識處を用ふるは、則ち八禪の攝なり。無所有を加ふるは、則ち九地の攝なり。此諸地の中の所有の無漏は、下を用て上を斷ず。上、下を斷ずるに非ず。』『行修是の如し。若し得修を論ずれば、一切悉く九地の無漏を具す。』『云何が悉く具する。』『解に四義有り。一には無漏

相望めて、下に依つて上を成ず。阿那含の人下の無漏を用て下の結を斷ずる時、卽ち上地の無漏の功德を得。初禪、未來、中間所發の無漏を用て初禪の結を斷ずるは、則ち二禪の無漏の功德を得るが如し。是の如きの一切なり。二には無漏相望めて、上に依つて下を得。人有つて凡時に、或は初禪乃至非想を得、後聖を得已つて、隨つて何の地にも所發の無漏を用て上結を斷ずる時、則ち下地の無漏の功德を得。三には有漏を無漏に望むるに就いて下に依つて上を成ず。二禪の方便等智を用て初禪の結を斷ずるは、則ち二禪の無漏の功德を得るが如し。是の如きの一切なり。四には有漏を無漏に望むるに就いて、上に依つて下を得。二禪の方便等智を用て初禪の結を斷ずるは、卽ち初禪の無漏の功德を得るが如し。同治修の故に。『云何が同治なる。』『初禪の無漏は、亦能く初禪の煩惱乃至非想の一切の煩惱を對治す。二禪地家の方便等智は、亦能く初禪の煩惱を對治す。名けて同治と爲す。乃至非想の方便等智は、亦能く無所有の結を對治す。名けて同治と爲す。』同治なるを以ての故に、彼二禪の方便等智を用て彼初禪の煩惱を斷ずるの時、卽ち初禪の無漏の功德を得。復之を得と雖も、少分にして多ならず。但初禪の結を對治する邊の一分の無漏を得。餘は悉く得ず。故に小分と曰ふ。『之を得ること云何。』『彼無礙道正しく斷ずるの時、應に此結を斷ずべし。無漏の得心の邊に發生す。乃至彼非想地家の方便等智を用て、無所有の煩惱を斷ずるの時、亦初禪の無漏の功德を得。復之を得と雖も、亦少にして多ならず。但應に無所有の結を斷ずべき一分の無漏を得。餘は悉く得ず。故に多ならずと曰ふ。

【次に等】第五に超越不超越の義を辨ず。

彼諸地の方便等智を以て、初禪地の無漏の功德に望めて又を得ること既に然り。餘地の中の無漏の功德に望めて、應に同治すべき者なり。之を得ること齊しく然なり。不同治の者は一切得ず。阿羅漢向を地に攝すること是の如し。阿羅漢果も亦九地の攝なり。根本の四禪と未來と中間と及び三無色なり。九地の無漏皆能く非想地の結を對治して、羅漢を得るが故に。中に於て、若し行修に據つて分別すれば、或は未來の攝、乃至或は是れ無所有の攝なり。未來禪を用て、結を斷じて果を證するは、即ち未來の攝なり。餘地も亦爾なり。若し得修に依らば、皆九地の攝なり。羅漢を得る時、總じて九地の一切の無漏を得。彼果と爲すが故に。禪地是の如し。（此四門竟る。）次に、超越不超越の義を辨ず。宗別同じからず。所說各異なり。成實法の中には、一切の賢聖悉く超越無し。彼宗は凡夫に斷結無きが故に。毘曇法の中には、四向は超無し。四果の中、須陀、羅漢も亦超越無し。唯斯陀果及び那含果に超不超有り。彼宗は凡夫に斷結有るが故に、超の義有りと說く。『相狀は如何。』『人有つて凡の時全く未だ結を斷ぜず。見諦道に入つて第十六道比智に至る時、但名けて須陀洹果と爲すことを得。或は復人有つて、先に凡の時に於て欲界の結を斷じ、一二品より五品に至り盡して、後見道に入つて第十六道比智に至る時、亦是れ次第の須陀果の攝にして、斯陀含向と名くることを得ず。向の中に於て、超證無きを以ての故に。或は復人有つて、先に欲結の六品に至るを斷じ盡して、復見道に入つて第十六道比智に至る時、須陀と作らず、亦彼斯陀含向と作らず、超えて第二の斯陀含果を證す。斯陀含の人の所斷の煩

惱悉く已に無きが故に。或は復人有つて、先に欲結の八品に至るを斷じ盡して、後見道に入つて、第十六道比智に至る時、亦超越斯陀含果の攝にして、阿那含向と名くることを得ず。向の中に於て超越の證無きを以ての故に。或は復人有つて、先に欲結の九品に至るを斷じ盡して、後見道に入つて、第十六道比智に至る時、須陀と作らず、超えて第三の阿那含果を證す。阿那含の人の所斷の煩惱悉く已に無きが故に。或は復人有つて、先に初禪より無所有に至る一切の煩惱を斷じ盡して、後見道に入つて、第十六道比智に至る時、亦是れ超越の那含果の攝にして、阿羅漢向と名くることを得ず。向の中に於て、超證無きを以ての故に。問うて曰はく、『何が故に、果の中に超有つて、向の中に超無きや。』釋して言はく、『超證は必ず道比に在り。後第十六道比智の心は、是れ共止息證果の處なり。先の欲結の六品、及與九品を斷じ盡す處も、亦是れ止息證果の處なり。是義相順ずるが故に、超證することを得。餘品の盡くる處は、此止息證の處に於て順ぜず。故に超證無し。是が爲に一切の向の中に超無し。』問うて曰はく、『道比と彼六品九品の盡くる處とは、果の義相順じて超證を得といはば、前の十五心と向とは相順ずるに、何が故に超えて彼向を證することを得ざる。』釋して言はく、『前の十五心の時に於ては、非想一地の見惑未だ盡きず。次第の所斷猶未だ窮盡せず。安んぞ能く超證せん。是故に超證は偏に道比に在つて餘心に在らず。良に前の十五心の中に於て、超證無きを以ての故に、一切の向の中に悉く超越無し。』問うて曰はく、『凡の時先に六品九品の惑を斷じ盡す。爾時何んが即ち斯陀

【次に等】第六に有退無退の義を明す。

【成實】第十九。

及び阿那含と名けずして、要ず來つて道比智に至る時を須て、方に其名を得るや。』釋して言はく、『斯陀及び阿那含は必ず見惑無し。凡の時に六品及び九品の惑を斷じ盡すと雖も、見惑猶存す。是故に斯陀含及び阿那含と名くることを得ず。道比智の時見惑始めて盡くるが故に、此處に於て方に其名を得。』問うて曰はく、『何が故に初果に超無きや。』『初果の前に於て所得無きが故に。又凡は非想地の見惑を斷じて、周く盡すこと能はず。所以に超無し。』『阿羅漢果は何が故に超無きや。』『凡夫は非想地の修惑を斷じて、周く盡すこと能はず。是が爲に超無し。此五門竟る。』次に、有退無退の義を明す。須陀向の中に有退あり、無退あり。『是義如何。』『五停心觀、總別念處は一向に退すべし。煖頂の二心は亦退不退なり。』『是義云何。』『毘曇』の如きに依らば、煖心已上は斷善して闡提と作る義有ること無し。名けて不退と爲す。餘過を起して三惡道に墮すべし。之を目けて退と爲す。若し『涅槃』に依らば、永く更に四重五逆を起し、及び善根を斷じて一闡提と作らざるを、名けて不退と爲す。惡知識に遇つて、十惡を起して三惡道に沒すべし。之を名けて退と爲す。若し『成實』に依らば、亦更に四重五逆を起し、及び善根を斷ぜず。又亦兼重の十惡を起して三惡道に墮せざるを、名けて不退と爲す。故に『成實』の中には、煖頂等を說いて上正見と爲し、百千世に往來して惡道に墮せず、煩惱を起し輕業を造作して人天に輪轉すべき、之を名けて退と爲す。忍世第一及び見道の心は一向に不退なり。須陀洹果も亦退する理無し。斯陀向果、那含向果及び羅漢向は、『成實』の如きに依らば、此位の中に

於ては、有ゆる聖徳は一切退せず。設し退すること有る者は、但禪定を退す。若し『毘曇』に依らば、此位の中に於ては、有ゆる聖徳は亦退不退なり。『是義云何。』『分別するに四有り。一には根に約して分別す。鈍根は退有り、利根は退せず。不動法の人は定んで退せざるが故に。二には修に約して分別す。散慢は退有り、專修は退せず。三には行に約して分別す。等智を用て結を斷ずる者は退有らしむべしと雖も、純ら無漏を用て結を斷ずる者は、牢固にして退せず。四には趣に約して分別す。人中には退有り。人中には多く退する因緣有るが故に。天に在るは退せず。故に論に說いて言はく「諸天は退せず」と。阿羅漢果は『成實』の如きに依らば、一向に退せず。設し退すること有る者は、但禪定を退す。若し『毘曇』に依らば、亦退不退なり。『是義云何。』『分別するに六有り。第一には煩惱に約就して分別す。煩惱に二有り。一には受生の煩惱、受生の時に於て妄貪等を起す、二には障道の煩惱、緣に對して貪瞋癡等を現起し、聖道を妨礙す。彼阿羅漢は障道の煩惱を暫く起さしむべし、之を名けて退と爲す。受生の煩惱畢竟じて起らざるを、名けて不退と爲す。二には煩惱の因緣に約して分別す。因緣に二有り。一には內、二には外なり。使性及び邪思惟を斷ぜずして煩惱を起す、之を名けて內と爲す。五塵の結を生ずる、之を目けて外と爲す。彼阿羅漢已に內因を斷ず。內因有つて煩惱を起すこと無きを、名けて不退と爲す。外緣有つて煩惱を起すべし、之を名けて退と爲す。謂はく、增上可貪の境界を觀じて暫く欲染を生ず。尋いで還斷除するが故に生を經ず。三には根に約して分別

【涅槃】南本第三十一。

す。鈍根は退有り、利根は退せず。『是義云何。』「彼阿羅漢に六種の性有り。退、思、護、住、昇進、不動なり。義は後に釋するが如し。彼退法の人は一向に退すべし。不動法の人は一向に退せず。思護住進は義則ち不定なり。若し退法の人、增進を爲す者は、退すべからしむべし。若し不退の人の增進を爲す者は、唯住し唯增して退の義有ること無し。四には修に約して分別す。專修は退せず、散慢は退有り。故に『涅槃』の中には、退を說くに五有り。一には多事を樂み、二には樂んで世事を說き、三には樂んで睡眠し、四には樂んで在家に近き、五には樂んで多く遊行す。是五事を以て比丘をして退せしむ。五には行に約して分別す。純ら無漏を用て結を斷じて成ずる者は、一向に退無し。雜へて等智を用て結を斷じて成ずる者は、退すべからしむべし。『是義云何。』『是人共世俗等智を用て攀上厭下して、欲界の結の無所有に至るを斷ず。非想の一地は等智もて治せず、無漏を用て斷ず。本不牢なるに由る。是が爲に退有り。是故に舊人沙井を喩と爲す。其れ猶沙井に上ること難く塼壘すと雖も、陷壞を免れざるがごとし。此も亦是の如し。第六には界趣に約就して分別す。界とは、謂はく、三界なり。欲界は退有り、上界は即ち無し。故に『雜心』に云はく、「若し退する者を說かば必ず退す。乃至必ず昇進する者は、必定して昇進す」と。當に知るべし、此れ欲界の羅漢を說いて上二界に非ざることを。欲界に共退轉の因緣有り。上界には無きが故に。趣とは、謂はく、五趣なり人中の羅漢は則ち退轉有り。天中には退無し。人中には多く退する因緣有るが故に。故に論に說いて言はく、「諸天は退せ

【或は等】次に十三を分つに就いて

【或は等】次に十四を分つに就いて

ず」と。「四向四果之を辨ずること麁爾なり。

或は十三を分つ。『毘曇』に說くが如し。見諦道の前の七方便の人を、則ち以て七と爲す。見諦道の中を分つて二種と爲す、謂ゆる、信行、及與法行なり。鈍根の人見諦道に入るを、名けて信行と爲す。聖人の語を信じて行を起すが故に。利根の人の見諦道に入るを名けて法行と爲す。自心法を見て行を起すが故に。前に通じて九と爲す。修道位の中に共二種有り。謂はく、信解脫、及與見到なり。鈍根の人修道に在るを、信解脫と名く。聖人の語を信じて解脫を得るが故に。利根の人修道に在るを、名けて見到と爲す。自心法を見て解脫を得るが故に。前に通じて十一なり。無學位の中にも亦二種有り。謂はく、時解脫、不時解脫なり。鈍根の人の無學果に至るを、時解脫と名く。鈍根の者は時を待つて、處に託して解脫を得るを以ての故に。利根の果に至るを不時解脫と名く。利根の者は處を待つことを得ずして解脫を得るを以ての故に。前に通じて十三なり。見道の上に六人を離分するを以ての故に。『雜心』に云はく、「事は則ち六有りと說く」と。

或は十四を分つ。『毘曇』に說くが如し。見諦道の前に七方便を說き、見諦道の中に信行、法行あり、修道位の中に信解脫、及與見到有り。前に通じて十一なり。阿那含の中に滅定を得る者を、名けて身證と爲す。前に通じて十二なり。無學位の中に慧解脫及び俱解脫を說く。前に通じて十四なり。滅定を得ざるを慧解脫と名け、滅定を得る者を俱解脫と名く。

【亦開分して等】次に十五となすに就いて。
【亦開分して等】次に廿三となすに就いて。
【或は復等】次に廿七となすに就いて。
【成實論】第三。

亦開分して以て十五と爲すことを得。見諦道の前の七方便の人を、則ち以て七と爲す。見諦已去の四向四果を、復分つて八と爲す。前に通じて十五なり。
亦開分して二十三と爲すことを得。前の七方便を則ち以て七と爲す。後の四向四果の中に就いて利鈍を分別すれば、則ち十六有り。前に通じて、合して二十三と爲すなり。
或は復開分して二十七と爲す。此に兩門有り。一には則ち彼『成實論』に說くが如し。見諦道の前を、分つて二人と爲す。一には信行、二には法行なり。鈍根の人を名けて信行と爲す。他の語を信順して行を起すが故に。利を法行と名く。自心法を見て行を起すが故に。『大集經』の中には、見の前に二を分つ。亦此と同じ。前の二種の人見諦道に入るを、無相行と名く。空觀相續して相間たること無きが故に。前に通じて三と爲す。須陀洹果を以て第四と爲し、斯陀含行を以て第五と爲し、斯陀含果を以て第六と爲し、阿那含行を以て第七と爲す。那含果の中に十一を離分す。前に通じて十八なり。其れ通じて阿羅漢向を攝して、合して那含と爲すに由るが故に、十一有り。『名字は是れ何ん。』『一には現般と名く。是人現世に凡身の中に於て那含を修得すれば、則ち此身に於て羅漢を修得す。故に現般と名く。二には轉世と名く。聖人身の上に生を經て已後那含を修得すれば、則ち現世に於て羅漢を修得す。是れ亦通じて現般の所收と爲す。三には中般、是人現世に那含を修得して羅漢を得ず。欲界の身を捨して上界に向つて去る。兩界の中間に身を受けて般を得。四には生般、初禪の上に於て、何の所生に隨つてか、最初に身を受けて未だ壽命を盡さず、

道を修して般を得。五には行般、前の生般と同じく一身に在り。精勤して道を行じ、壽盡して般を得るを、名けて行般と爲す。六には無行般、亦生般と同じく一身に在り。懃めて道を行ぜず、壽盡して般を得るを、無行般と名く。七には樂定、上界の中に於て初身に般せず、展轉して上に生じ、廣果天に至つて涅槃を得ず。無色界に生ず。八には樂慧、亦上界に於て展轉して上に生じ、廣果に至つて生じて涅槃を得ず。五淨居に生ず。九には信解脫、前の人の中に於て鈍根の者有るを、名けて信解と爲す。十には見到と名く。前の人の中に於て利根の者有るを、說いて見到と爲す。十一には身證、前の人の中に於て滅定を得る者なり。廣くは後に釋するが如し。阿羅漢の中差別するに九有り。前に通じて合して二十七人と爲す。一には是れ退相、此人最も鈍なり。鈍根なるを以ての故に、定を得て必ず退す。二には是れ守相、根少しく前に勝る。深く自ら防守して能く退せざるべし。三には死相、根轉た前に勝る。深く諸行を厭ひて定を得ること能はず。得已つて失はんことを恐れ、自害せんと欲せんことを求むるを、名けて死相と爲す。四には住相、所得の三昧不退不身なり。五には可進相、所得の三昧轉た勝れて增益す。六には不壞相、所得の三昧種種の因緣を破壞すること能はず。七には不退相、此人最勝にして所得の功德盡く退無きなり。八には慧解脫、前の人の中に於て滅定を得ざるを、慧解脫と名く。九には俱解脫、滅盡定を得。此等一一の廣くは後に釋するが如し。『成實』是の如し。更に一種の二十七人有り。『中阿含』福田品に說くが如し。彼經には偏に見諦已上に就いて二十七を說く。見の

前に通ぜず。』『相狀は云何。』『彼に居士有り。給孤獨と名く。如來に請問す、「世間の中に於て幾くの福田の人か有る。」佛答ふ、「二有り。一には是れ學人、二には無學人なり。見諦已上阿那含に至るを、名けて學人と爲し、阿羅漢果を無學人と名く」と。學に十八有り、無學に九有り。是故に通じて、合して二十七有り。學人の十八は經に列して次ならず。』『名字は是れ何ん。』『一には是れ信行、二には是れ法行、三には信解脫、四には是れ見到、五には是れ身證、六には是れ家家、七には一種子、八には向須陀、九には得須陀、十には向斯陀、其第十一には得斯陀含、其第十二には向阿那含、其第十三には得阿那含、十四には中般、十五には生般、十六には行般、十七には無行般、十八には上流なり。色究竟に至つて正しく此名有り。更に異釋無し。『毘曇』に准依すれば、信行、法行は見道十五心の中に在り。鈍を信行と名け、利を法行と名く。信脫、見到は、『毘曇』に准依すれば、修道に在り。須陀果の後鈍を信脫と名け、利を見到と名く。此四は一切の學人を統攝す。含通するを以ての故に。餘の十四人を中に於て別して分たば、前の信行、法行の人の中に於て三人を開出す。一には則ち須陀洹向を開出す。次第の人見諦道の十五心の中に入るを、須陀向と名く。二には則ち斯陀含向を開出す。超越の斯陀、見諦道の十五心の中に入るを、斯陀向と名く。三には則ち阿那含向を開出す。超越の那含、見諦道の十五心の中に入るを、那含向と名く。前の信脫、見到の人の中に於て、別に隨つて十三種の人を開出す。一には則ち須陀洹果を開出す。第二には斯陀含向を開出す。謂はく、次第の人斯陀含に向つて未だ果に

至らず。前の現在の中に於て修行する者是なり。第三には家家の人を開出す。謂はく次第の人、斯陀含に向つて未だ果に至らず。前分に煩惱を斷じて生を逕る者是なり。第四には斯陀含果を開出す。中に於て細分すれば、異に其二種有り。一には超證の斯陀含果、二には次第證の斯陀含果なり。通合して一の斯陀果と爲すなり。第五には阿那含向を開出す。謂はく次第の人、阿那含に向つて未だ果に至らず。前の現世の中に於て修行する者是なり。第六には一種子の人を開出す。謂はく、次第の人、阿那含に向つて分に煩惱を斷じて生を逕る者是なり。第七には阿那含果を開出す。中に於て細分すれば、亦二種有り。一には超證の阿那含果、二には次第證の阿那含果なり。今は合して一の阿那含果と爲す。第八には中般の人を開出し、第九には生般の人を開出し、第十には行般の人を開出し、十一には無行般の人を開出し、十二には上流般の人を開出す。此上流の中に、勝有り、劣有り。勝るる者は色界に般涅槃を得、劣れる者は無色界の中に生じて、方に始めて般を得。彼は勝るる者を擧ぐ。是故に說いて言はく「色究竟に至つて彼福田に向ふ。色界に在る者は有色有形にして、供養を受くることを得て世の福田と爲る」と。是が爲に偏に擧ぐ。十三には身證の人を開出す。那含果の後滅定を得る者なり。此十三は皆是れ信脫、見到の中に列す。學人是の如し。無學の九とは、經に列すること次ならず。一には名思法、二には昇進法、三には不動法、四には退法、五には不退法、六には護法なり。經に自ら釋して言はく「護は則ち退せず、不護は則ち退す」と。七には住法、八には慧解脫、九には俱解脫なり。經

【次に等】當想分別の中、第二門に別に隨つて解釋す。五停心觀等は前釋に讓り、今先づ別して須陀洹向を釋するに六門の別あり。一に境に約して分別す。

文是の如し。更に異釋無し。九が中の前の七は根に就いて以て別ち、後の二は法に約す。前の七種は猶『毘曇』の中の六種羅漢の如し。六羅漢とは、退、思、護、住、昇進、不動なり。彼『阿含經』に、不動の人を分つて以て二種と爲す。故に七有るなり。九が中の退法は是れ『毘曇』の中の初の退法の人なり。九が中の思法は是れ彼の第二の思法の人なり。九が中の護法は是れ彼の第三の護法の人なり。九が中の住法は是れ彼の第四の住法の人なり。九が中の昇進は是れ彼の第五の必昇進の人なり。九が中の不動、及與不退は是れ『毘曇』の中の不動法の人なり。彼『毘曇』の中の不動に二有り。一には本來の不動なり。二には果の中に至つて進んで不動と爲る。九が中の不動は『毘曇』の中の本來の不動に當る。九が中の不退は『毘曇』の中の至果の不動に當る。後の二は慧脫及び俱解脫なり、法に約して以て別たば、前の七人の中に滅定を得ざるを慧解脫と名け、滅定を得る者を俱解脫と名く。此等は後に至つて、更に當に廣く釋すべし。此二十七を、見道の前の七方便の人に通じて三十四有り。廣くは則ち無量なり。『阿含』是の如し。上來の第一に通相分別す。

次に第二門に、別に隨つて解釋す。五停心觀は前の五度章の中に、具に釋するが如く、總別念處は前の道品章の中に、具に釋するが如く、煖等の四門は前の煖等の四種の善の中に、具に廣く分別するが如し。今は先づ別して須陀洹向を釋す。中に於て、曲しくは六門の分別有り。一には境に約して分別し、第二には品數の多少を分別し、三には無礙解脫に依つて分別し、四には修に約して分別し、五には是非を定め、六には轉根を分別す。境に

【曇無德】小乘廿部の一法藏部のこと。
【薩婆多】說一切有部のこと。
【次に等】第二に品數の多少の義を明す。

約すと言ふは、曇無德に依らば一時に諦を見、薩婆多に依らば前後に諦を見る。一時と言ふは、案ずるに彼宗に依らば、先に見前の煖頂忍の中に於て別して諦空を緣じて極めて純熟ならしめ、次に世間第一の法の中に於て、總じて四諦の名用虛假を緣じて、之を以て詮と爲し、後に無想に入つて總じて四諦を見、一切法空にして念念に增明にして、都て間絕無し。成實法の中は此義を存依す。前後と言ふは、薩婆多に依らば、別して四諦を緣じて有を見て道を得。行者先に總別念の中に於て、總じて四諦を緣じて空無我と爲し、而も四諦に於て未だ明了なることを得ず。煖等の四心の中に至つて、別して四諦を緣じて方便と爲す。苦忍已上は別に隨つて照見す。苦を見ること集に異に、滅を見ること道に異なるを、前後に見ると名く。諸部の『毘曇』は此義を存依す。問うて曰はく、『二の中何者をか是と爲し、並に佛說と爲す。』『偏に依るべからず。但人別に隨つて二說の異り有り。其鈍根の者は未だ相を破すること能はずして諸法の空を見、多く先後に依つて漸次に諦を見る。其利根の者は能く有の相を破して諸法の空を證し、並に一時に依る。』又復二宗患を立つること各異なり。曇無德に依らば取を患の本と爲し、別して諦を見ると雖も、取執未だ已らず。要ず總じて空を見て取患方に盡く。是が爲に諦を觀ずること、先に別、後に總なり。薩婆多に依らば癡を患の本と爲し、總じて諦を觀ずと雖も、闇相未だ遣らず。別觀分明なれば闇相乃ち盡く。故に彼宗に依らば、先に總、後に別なり。此一門竟る。

次に、品數の多少の義を明す。『毘曇』の如きに依らば、見道位の中は唯十五心なり。須

【次に等】第三に無礙解脫について分別す。

【次に等】第四に修に約して分別す中に二、一に境界に約して修の多少を明す。

陀果に通じて十六心有り。八忍八智は是れ十六なり。欲界の苦を觀ずるに、初は忍、後は智なり。共二心有り。上界の苦を觀ずるに、初は忍、後は智なり。亦二心有り。餘諦も例して爾なり。若し『成實』に依らば、見道位の中に無量心有り。故に彼文に言はく、「無量心を以て諸の煩惱を斷ずる、八に非ず、九に非ず」と。八に非ずと言ふは、見道の中に無量心有つて、相續して惑を斷ずと說いて、『阿毘曇』に定んで八忍と說くを破す。九に非ずと言ふは、修道の中に無量心有りと說いて、『阿毘曇』の一一の地に於て定んで九無礙なるを破す。『何が故に『毘曇』には定んで八忍と說くや。』『彼宗は有を觀ず。有は相局別なり。見て明かにし易きが故に。』『何が故に『成實』には無量心と說くや。』『彼宗は空を觀ず。空は分限無し。見て了し難きが故に。』此二門竟る。

次に無礙解脫に就いて分別す。『毘曇』の如きに依らば、見道位の中具に無礙、解脫の二道を以て見惑を斷ず。八忍は無礙、七智は解脫なり。應に八智有るべし。後の一は判じて須陀洹果と爲すが故に、但七と說く。若し『成實』に依らば、無相位の中には單に無礙有つて解脫無し。『何が故に然るや。』『彼宗の所說は、無礙、解脫同じく是れ空觀なり。中に於て、增進を說いて無礙と爲し、順舊の智を判じて解脫と爲す。順舊の解脫を判じて須陀に屬するが故に、無相の中には純ら無礙有り。』此三門竟る。

次に第四門に、修に約して分別す。中に於て二有り。一には境界に約して修の多少を明し、二には行心に約して修の多少を明す。境に約すと言ふは、『毘曇』に說くが如し。彼見

【次に等】二に行心に約して修の多少を明す。

道十五心の中に於て現に一諦を観ずれば、未來に還つて一諦に於て增明なり。現に一行を観ずれば、未來に傍に一諦の下の四行に於て增明なり。観察する所に隨つて皆明了なるが故に。一諦の下の四行の義親しきを以ての故に、悉く增明なり。問うて曰はく、『前の四現忍の中に於ては、現に一諦を観ずれば、未來に傍に四諦に於て增明なり。現に一行を観ずれば、未來に傍に十六に於て增明なり。第十六道比智に至る時、義も亦是の如し。今此見道十五心の中には、何が故に爾らずして、未來に唯一諦に於て增明に、唯同諦の四行に於て增明なるや。』釋して言はく、『四現及び後の道比は是れ開豫の道なり。心志寬容なるが故に、修寬多なり。此十五心は是れ速疾の道なり。心志陜狹なるが故に、修狹少なり。』境に約すること是の如し。次に行心に約して修の多少を明す。修に二種有り。一には行修、緣の中に現起す。二には得修、修習する所に於て得して己に屬せしむ。若し行修に據らば、苦法忍の時は唯苦法忍の心を修習することを得、乃至最後の道比忍の時は唯道比忍の心を修習することを得。若し得修に據らば、同時に相得す。或は後は前を得す。前は後を得するに非ず。後は前を得するが故に。初の苦法忍は十五の得を得す。乃至最後の道比智の心は唯一の得を得す。『相狀は如何。』『苦法忍の心現起するの時、一の非色非心の得法有つて、忍と倶に起つて現在の苦法忍の心を得ん。幷に種類の未來に在る者を得して、來つて己に屬せしめ、成就して失せず。』問うて曰はく、『彼忍は得に由つて之を得して、己に在つて失せず。彼得は何に由つてか、已に在つて失せざる。』釋して言はく、『彼得は復小得に由

【次に等】第五に是非を定む。

つて得するが故に失せず。小得は何にか由る。』『還大得に由つて得するが故に失せず。其れ猶ほ二生五に相生ずるがごときなり。二得有りと雖も、今は總じて合するが故に說いて一得と爲す。餘も亦是の如し。』問うて曰はく、『向に說く、後を以て前を得す、前は後を得するに非ずと。今云何が通じて種類の未來に在る者を得すと言ふや。』釋して言はく、『前に後を得せずと說くは、苦忍の時の得は後時の苦法智等を得せざるなり。現起の法が家の未來の種類を得せずと謂ふには非ず。未來の類を今の未起に望むれば、猶已起と名くるがごとし。已起の類なるが故に、苦法智の時は二得俱に生ず。一は苦智を得し、一は向前の苦法忍の心を得す。是の如く漸く增す。乃至最後の道比忍の時は、十五の得有つて之と俱に生ず。一は道比を得し、餘の十四の得は前の十四を得す。』問うて曰はく、『後得は唯向前の所得の法體を得するや、亦前の得をも得するや。』『義釋不定なり。一義に之を釋すれば、唯前の法を得す。前の得は法に隨つて、亦成じて失せず。一義に之を釋すれば、通じて前の得を得す。』『若し爾らば、展轉して無窮の過有らん。』『論に自ら釋して言はく、「無窮なれば何の失かあらん」と。』修の義是の如し。此四門竟る。

次に、是非を定む。問うて曰はく、『見の中何を用てか道と爲す。』『義別に四階あり。其一の義は、慧を道の體と爲す。餘の者は悉く非なり。慧を離れては忍智の法能くせざるが故に。第二の義は、慧及び一切の心心數法幷に及び道戒を通じて正道と爲す。八正は此を用て體と爲すが故に。諸得の四相は道の中、義に隨つて正道と名けず。第三の義は、心

【次に等】・第五に轉根に就いて分別す。

法と戒と并に及び四相同時に俱に起つて是れ共に有因なり。相扶くる義親しければ、通じて說いて道と爲す。諸得は彼に望むれば、起ること或は異時にして共に有因に非ず。相扶くる義疎ければ、說いて道と爲さず。第四の義は、心法と戒と諸得の四相と皆彼此相成ずるの義有れば、通じて說いて道と爲す。』問うて曰はく、『若し前の三義に依らば、諸得は道に非ず、亦應に果に非ざるべし。又復果は是れ得證の義なり。諸得は果に順ず。故に名けて果と爲す。見道は向に在り。何が故に論の中に得を說いて果と爲すや。』釋して言はく、『論の中に得を說いて果と爲すは、後の一義に同じ。得は向に順ぜざるが故に、道と名けず。前の世間第一の法を得する得も、亦此釋に同じく第一と名けず。『問うて曰はく、『若し末後の一義に依つて得も道と名くれば、論の中に「彼世間第一の法を得する得を第一と名けず」と宣說す、今云何が道を得するの得も亦名けて道と爲すと言ふや。』釋して言はく、『論に「第一を得する得は第一に非ず」と說くは、前の三種道に非ざるの義に同ず。又世第一は位分短促にして、止一念に在り。彼を得するの得は前後多念にして、彼に於て順ぜず。是が爲に彼得を第一と名けず。見道寬長にして得復多念なり。彼に於て相順ずるが故に、得を道と名く。是非甚の如し、此五門覚る。

次に、轉根に就いて分別を爲す。問うて曰はく、『見の中、心道陵速たり。轉根を得るや不や。』有るが言はく、得ず。一一の行に於て多縁無きが故にと。』問うて曰はく、『若し定んで得ずと言はば、『毘曇』の如きに依らば、信法の二人は同じく見道に在り。論の中に

宣說す、「信行は是れ其法行の因なり」と。云何が轉ぜざらん。』又復釋して言はく、『劣を勝に望むるに、理に因の義有り。其れ實には轉ぜず。』若し『成實』に依らば、同一の空觀は實に轉根し難し。若し『毘曇』に依らば、差別の觀諦は轉の義有るべし。』『是義云何。』『凡そ轉根の者は境に於て多觀すれば、亦能く轉根す。境に於て力勵して心觀を明淨にすれば、亦能く轉根す。其四諦の法は初は則ち知り易く、後は轉了し難し。行者前の四現忍の中に於て觀諦を學する時、五種の別有り。一種の人有り、四眞諦に於て未だ觀察することと能はず。苦力もて勵すに非ず。是人見に入つて、但信行と爲るのみ。其第二の人は四現忍の中、前の三諦に於て未だ觀察を熟せず。是人見に入つて、道を用て難と爲し、力勵して觀察す。是人見に入つて、前の三諦に於て見ること極めて明かならざるを、名けて信行と爲す。後の道諦に於て照見明了にして、轉じて法行と爲る。其第三の人は四現忍の中、前の二諦に於て未だ觀察すること能はず。滅に於て、道に於て之を用て難と爲し、力勵して觀察す。是人見に入つて、苦に於て、集に於て見ること極めて明かならざるを、名けて信行と爲す。滅に於て、道に於て照見明了にして、轉じて法行と爲る。其第四の人は四現忍の中、初の苦諦に於て未だ觀察すること能はず。後の三諦に於て之を用て難と爲し、力勵して觀察す。是人見に入つて、初の苦諦に於て見ること極めて明かならざるを、判じて信行と爲す。後の三諦に於て照見明了にして、轉じて法行と爲る。其第五の人は四現忍の中、四眞諦に於て並に皆力勵す。是人見に入つて、四眞諦に於て並に極めて明了にして見諦道に入るを、唯

【次に等】須陀洹果を釋す。中に斯陀含向を合論するに、六門の別あり。先づ第一に其體を定む。

法行と名く。五種の人の中初と後の二人は轉根と名けず、中の三を轉と名く。須陀洹向之を釋すること麁爾なり。

次に、別して須陀洹果を解釋す。斯陀含向は通じて亦是れ其須陀洹の攝にして、一處に合して論ず。中に於て、曲くは六門の分別有り。一には其體を定め、二には得捨を明し、三には須陀斷結の多少を明し、四には須陀受身の多少を明し、五には家家を明し、六には利鈍を分つ。體を定むと言ふは、須陀洹果は聖德を體と爲す。聖德不同にして、汎く論ずるに三有り。一には是れ果體なり。『毘曇』の如きに依らば、行修分別すれば唯第十六道比智の心是れ其果體なり。得修分別すれば、通じて見諦十六聖心を攝して悉く果體と爲す。若し『成實』に依らば、無相の後、順忍の空觀を說いて果體と爲す。二には覺等見なり。須陀果の後遊觀の無漏は、重ねて諦理を緣じて增進せず。三には勝果道なり。須陀果の後更に勝解を起し、進んで欲結を斷ず。或は一二品乃至六品なり。『此行何れの諦を緣じてか進んで煩惱を斷ずる。』『四諦の中に於て、趣かに一諦を緣ず。』問うて曰はく、『何が故に前に見惑を斷ずるには四諦俱に緣じ、此修惑を斷ずるには唯一諦のみを緣ずるや。』釋して言はく、『前には迷諦の煩惱を斷ず。凡そ四諦に於て通じて皆迷惑す。故に須く通觀すべし。此緣事の貪瞋癡等を斷ずるは、通迷を捨するに非ず。故に四諦に於て、趣かに一種を緣じて能く果後を斷ず。』問うて曰はく、『此行既に諦理を緣ず。云何が能く緣事の煩惱を斷ずるや。』『若し『毘曇』に依らば、細を觀じて麁を捨す。是故に能く斷ず。若し『成

【次に等】第二に前後に約して得捨を論ず。先に捨の義に就いて明す。

實』に依らば、一切の煩惱皆取性より起る。空を觀じて性を破す。是が爲に能く斷ず。』問うて曰はく、『此行所觀の諦理は、前よりも深くして能く修惑を斷ずとや爲ん、前と同じくして能く修惑を斷ずとや爲ん。若し便ち更に深ならば、深は何の相か有る。若し當に深ならざるべければ、安んぞ能く異斷せん。』一に釋す、『此行の理を觀ずること更に深し。故に能く異斷す。但此深の相は階別分ち難し。唯聖のみ自覺したまふ。言を以ては別ち叵し。其れ猶地地の九品の煩惱皆別すべきこと難きがごとし。亦地地の生得の善根の九品分ち難く、別つべからずと雖も、階降無きに非ざるが如し。此も亦是の如し。』又釋す。『此行の理を觀ずること前に同じくして、亦能く異斷す。』二『何が故に是の如くなる。』『理は前に同じと雖も、數數心地を觀じ、數數心を觀ずること明かなり。故に能く異斷す。一藥を小しく服して病を減じ、多くして能く病を盡す。多に非ずして病を盡さば便ち異藥有るが如似く、亦一食を少しく噉ひて飢を減じ、多く食して飢を盡す。多に非ずして飢を盡さば、食をして不一ならしむるが如し。此も亦是の如し。須陀の聖德復無量なりと雖も、要は唯此三なり。體を辨ずること是の如し。此一門竟る。

次に、前後に約して得を論じ捨を論ず。先に捨の義を論ず。問うて曰はく、『須陀得果の時、前の向を捨すとや爲ん、當に捨せざるべしとや爲ん。』『若し『毘曇』に依らば、果を證するの時定んで前の向を捨す。捨に二種有り。一には行修に約す。不行を捨と名く。道比智の時は前の十五心現行せざるが故に。二には得修に約す。得斷を捨と名く。因得斷じ

【次に等】二に得の義を論ず。

已つて果得生ずるが故に。若し『成實』に依らば、前向に亦捨す。實を以て細分すれば、因心謝し已つて果心現前す。之を名けて捨と爲す。相續して之を論ず。因滿ずるを果と爲す。前得を捨するに非ず。名けて不捨と爲す。』問うて曰はく、『須陀増進の道を修して斯陀に向ふ時、前果を捨するや不や。』釋して言はく、『捨せず。』『何が故に是の如くなる。』『證果の心深し。所以に捨せず。又復須陀は勝行を起すと雖も、唯前果に依つて自ら息止す。是が爲に捨せず。』次に得の義を論ず。問うて曰はく、『須陀初果を證する時、前向に得して合して後果と爲すとや爲ん、當に得せざるべしとや爲ん。』『此は前に釋するが如し。『毘曇』の如きに依らば、修に二種有り。一には是れ行修、二には是れ得修なり。若し行修に據らば、果の中に唯道比智の心のみ有つて前の十五無し。若し得修に據らば、前向に得して合して後果と爲す。』『是義云何。』『初果を證する時、前向の中の十五の別得を捨し、一の總得生じて道比智を得し、幷に向の中の十五の無漏を得して、合して須陀と爲す。』問うて曰はく、『當に直に向中所得の功徳を得して、合して後果と爲すべしとや爲ん、亦向中能得の得を得して後果と爲すとやせん。』『義解不定なり。』一義に之を釋す。唯所得の無漏功徳のみを得して、合して後果と爲す。能得を得せず。』『何が故に是の如くなる。』『所得の法體は、體に彼此通じて成ずるの義有り。故に後に之を得す。能得の得は正しき法體に非ず。彼此局別す。彼此通じて成ずるの義有ること無し。是が爲に得せず。又復所得は心法を主と爲す。心法寛通して一たび之を起せば、必ず種類有つて成じて未來に在り。未來

【次に等】第三に須陀斷結の多少を論ず。【經】涅槃經第三十六。

は其起るべき義有るが故に、後得に之を得して合して以て果と爲す。得は心法に非ず。寛通して未來に在るの義有ること無きが故に、後得して合して其果を成ぜず。此別有るを以て、「是論の中に說かく、「前得を捨して更に果得を起し、前法を得して合して果と爲すなり」と。又更に解釋す、正しく前法を得し兼ねて前得を得して、合して後果と爲す。理も亦傷ふこと無し。故に論の中に問うて曰はく、「若し得有らば得に無窮の果有らん」と。論に自ら釋して言はく、「無窮ならば何の苦かある」と。』問うて曰はく、『若し果得起る時、通じて前得を得せしむれば、何を名けて斷と爲し、何を名けて捨と爲すや。』『復之を得すと雖も、彼種類に非ず。故に捨と名くることを得。『毘曇』是の如し。若し『成實』に依らば、唯行修を立てて得修の義無し。是故に說かず。前向に得して、合して後果と爲す。』問うて曰はく、『須陀勝行を起して斯陀に向ふ時、前の果を得て後の向を成ずること有りや不や。』釋して言はく、『得せず。後の向を起す時、前の果を捨せず。故に異得無し。』得捨是の如し。

此二門竟る。

次に、須陀斷結の多少を論ず。經に說かく、「須陀は唯三結を斷ず。謂ゆる身見戒取及び疑なり」と。問うて曰はく、『經に說かく、「須陀洹の人の所斷の煩惱は、猶縱廣四十里の池の如し。其餘に在る者は一渧の如し」と。云何が復唯三結を斷ずと言ふや。』釋して言はく、『須陀の所斷は實に多し。四義を以ての故に、偏に此三を說く。一には此三は是れ諸惑の本なるを以て、此を擧げて餘を攝す。故に偏に三を說く。』『云何が惑の本なる。』『迷諦

【涅槃經】第三十六。

の十使は須陀悉く斷ず。十使の中に就いて、五見及び疑は唯見諦を障へ、須陀に斷じ盡せば偏に斷の名を與ふ。貪瞋癡慢は通じて見修を障ふ。見諦を障ふる者は須陀に斷じ盡し、修道を障ふる者は須陀に未だ除かず。斷未盡なるに由つて、斷の名を與へず。彼所斷の六使の中に就いて、三は本、三は隨なり。身見は是れ本、邊見は隨なり。戒取は是れ本、見取は隨なり、疑心は是れ本、邪見は隨なり。經の中には、本に就いて說き、三使を除いて未だ亦之に隨はざるが故に、但三を說く。二には此三重を以ての故に偏に說く。『涅槃』に釋するが如し。譬へば世間の王來り王去るといふが如し。多臣流ると雖も、王重きを以ての故に世人偏に說く。此三も是の如く重きが故に偏に說く。『此れ云何が重き。』『彼經に釋して言はく、「一切の衆生常に起す所なるが故に。又覺し難きが故に。病常に發るを重病と爲し、又識知し難きを名けて重病と爲すが如し。此三も亦爾なり。衆生恆に起して、覺せずして過を爲す。故に重と曰ふなり」と。三には此三能く一切の戒定慧等の三學の大怨と爲るを以て、所以に偏に說く。『云何が怨と爲る。』『相に隨つて麁對すれば、戒取は戒を障ふ。名けて戒怨と爲す。疑蓋は定を障ふ。名けて定怨と爲す。身見に慧を障ふ。名けて慧怨と爲す。『毘婆沙』に依らば、則ち是の如くならず。彼に說かく、「身見は能く戒怨と爲る。神は是れ常なり、苦樂は變せずと計して、業果を畏れず。情を縱にして罪を作る。淨戒を修することを妨ぐるが故に、戒怨と爲す。戒取は定怨なり。戒取を道と爲し、勝靜を修することを妨ぐるが故に、定怨と爲す。疑を慧怨と爲す。境に於て猶預め決了する

こと能はず。正智を妨ぐるが故に、慧怨と為す」と。四には化に随つて三を説く。『涅槃』に釋するが如し。或は衆生有つて、須陀無量の結を斷ずと説くを聞いて、心を退して求めざるが故に、但三を説くのみと。所斷是の如し。此三門竟る。

大乘義章　卷第十七　本

【一】須陀洹果を別解する中第四に須陀受生の多少を明す。中に四門の別あり、一に須陀受身の多少を明す

大乘義章　卷第十七末

遠法師撰す

(一)次に、須陀受生の多少を明す。中に於て、曲しくは四門の分別有り。一には須陀受身の多少を明し、二には潤惑品數の多少を明し、三には煩惱潤生の多少を明し、四には斷惑損生の多少を明す。初に受身生の多少と言ふは、須陀に四有り。其第一の人は現に修して進んで阿羅漢果を得れば、則ち現身に於て般涅槃に入る。其第二の人は現に修して進んで阿那含果を得れば、上界に身を受く。或は一生を受け、或は二三四、乃至極多は或は十五を受け、或は十六を受く。十五と言ふは、樂定の人有つて、四禪に遍く生ずるに十一身有り。初禪に二處、上の三禪地に各三處有り。合して十一と爲す。四空處を加ふ。故に十五有り。十六と言ふは、樂慧の人有つて、四禪に遍く生ずるに十一身有り。五淨居を加ふ。故に十六有り。此等の差別廣くは後に釋するが如し。其第三の人は現身に修して斯陀含果を得れば、欲界に身を受く。人天の中に於て、多きは二生を受け、少きは一生を受く。其第四の人は現在世に於て唯初果を證すれば、欲界に身を受く。或は一生を受け、或は二三四、乃至極多は七生往來し十四生を受く。此之十四は人天の中に於て、往來して之を受く。類併することを得ず。『何が故に是の如くなる。』『其れ苦を覺して心を厭離するを以ての故

【次に等】二に欲界受生の須陀に就いて其潤生の煩惱の品數を明す。先づ麁分の三に就いて。

に。此須陀洹は曾て、苦を觀して苦を覺する心盛なるを以て、人中に生を受くれば、則ち人の苦を覺して天中に生ぜんことを求め、天中に生を受くれば、復天の過を覺して人中に生ぜんことを求む。是が爲に併ぜず。問うて曰はく、『彼十四生の中に於て、何れの處にか先に生ずる。』『是義不定なり。人中に道を得て人身を捨し已つて、先づ天中に生ず。天中に道を得て天身を捨し已つて、先づ人中に生ず。故に『雜心』に云はく、「人中に超昇し、人間に七を滿ず。天も亦是の如し」と。』問うて曰はく、『何が故に極めて唯七返にして、增せず、減ぜざる。』『業力の持なるが故に、七返を減ぜず。道力の制なるが故に、七返を過ぎず。又復業力の勢極まること此の如し。七藥樹、七步毒蛇、七日の藥、七世の事等の如し。』問うて曰はく、『此人七返を過ぎ已つて、唯涅槃を得るや、上に生ずる者有りや。』『經論同じからず。『毘曇』及び『成實論』の如きに依らば、一切の聖人の欲界地の中に曾て生を經る者は、厭苦の情深くして悉く上生せず、欲界の身の中に、定んで涅槃を得。『阿育王傳經』の所說に依らば、上生の者有り。彼經に宣說す、「一たび生を經る病須陀洹有り。優波麴多化して五淨に生ぜしむ」と。上生するを得ること明けし。化の因緣は備に經に說くが如し。須陀は差別するに四階有り。此四人の中、初の一を名けて現般の須陀と爲し、中の二を名けて現進の須陀と爲し、後の一を名けて受生の須陀と爲す。

次に第二門に、欲界受生の須陀に約就して、其潤生の煩惱の品數を明す。潤生の煩惱は麁分して三と爲し、細分して九と爲し、中分して五と爲す。麁分の三とは、謂はく、上中下

【細分の等】次に細分の九を明す。

【次に等】三に其煩惱潤生の多少を明す。中に三あり先づ諸惑の有潤不潤を明す。

なり。此義不定なり。過に就いて之を論ずれば、麁惑は過重し。之を說いて上と爲す。細惑は過微なり。說いて以て下と爲す。麁に非ず、細に非ざるを說いて、名けて中と爲す。若し功力に據らば、麁惑は浮淺にして道を障ふる力微なり。說いて以て下と爲す。細惑は根深くして道を障ふる力強し。之を說いて上と爲す。中惑は前に異なり。說いて名けて中と爲す。故に經に宣說すらく、「無明住地は其力最上なり」と。今此には且く初の義に依つて之を分つ。麁惑を上と爲し、細を名けて下と爲し、兩楹を中と說く。細分の九とは、麁中の三品なり。謂ゆる、上上、上中、上下なり。中惑にも亦三あり。謂ゆる、中上、中中、中下なり。細惑にも亦三あり。謂ゆる、下上、下中、下下なり。中分して五を分つとは、謂はく下、中、上、上中、上上なり。中に於て、初の二を名けて上上と爲し、次に二を上中、次の二を上と名け、次の二を中と名け、後の一を下と名く。此五と彼五階の重練、五階の分齊とは、其義相似す。問うて曰はく、『九を分たば便ち足る。何んが勞しく五を說くや。』『今此に約して潤の多少を明さんが爲の故に、須く之を辨ずべし。』次に第三門に、其煩惱潤生の多少を明す。中に於て、曲しくは三門の分別有り。一には諸惑の有潤不潤を明し、二には用惑潤生の不同を明し、三には諸惑潤生の多少を明す。初に諸惑潤の不潤と言ふは、有人宣說すらく、「九品の惑の中に乘斷有る者は、潤生すること能はず、乘斷にあらざる者は、之を用て潤生とす。」此義然らず。乘斷し已竟らば潤生せざるべく、未斷の時何んが潤せずと爲ん。當に知るべし、一切齊しく能く潤生することを。但し潤に

【次に等】用惑潤生の不同を明す。

【次に等】三に諸惑の潤生の多少を明す。

二有り。一には現起、親しく潤して受生す。二には成就、冥に助資けて潤す。其乘斷者の未斷の時は、冥助資潤の義有ることを得。亦現起親潤の義有り。『云何が有ることを得る。』『義は後に釋するが如し。』此一門竟る。次に用惑潤生の不同を明す。『彼九品の修惑の中に於て、何者か現起し親潤して受生し、何者か成就し資潤して受生するや。』『次に隨つて之を論ずれば、所有の惑の中、最上麁品縁の中に現起し親潤して受生し、餘は悉く成就し資潤して受生す。實に據つて之を論ずれば、惑起に序無し。業を發して潤生す。例一准に非ず。惑の上中下は一定すべからず。『是義云何。』『受生の時に於て、人有つて鈍根なり、或は都て勝にして增上の結を縁起し、則ち此結を用て親潤して受生し、中下は資助す。人有つて中根なり、或は中縁に對して中品の結を起し、即ち此結を用て親潤して受生し、上下の煩惱は成じて隨助す。人有つて利根なり、或は弱縁に逢つて下品の結を起し、則ち此結を用て親潤して受生し、上中は隨助す。上結の生ずる者は身を受くること必ず多く、中結は次に少く、下結は最も少し。是が爲に須陀、九品の煩惱は、全く未だ斷ぜずと雖も、受生の多少不定なることを妨げず。是義を以ての故に、九品の惑の中應に乘斷すべき者も、亦現起して潤業受生資助し已竟ることを得。此二門竟る。次に、諸惑潤生の多少を明す。經論の中には、文に定判無し。然るに今は且く義に准じて之を論ずべし。九品の惑の中最初の二品は五品して分別するに、同じく是れ上上なり。品の類同じきが故に、齊しく三生を潤す。中に於て、初品は獨り三生を潤し、餘結は資助して十四生を潤す。中に於て、後品は獨り

三生を潤し、餘結は資助して十一生を潤す。『此れ云何が知る。』『彼第三品、第四品の結は各〻二生を潤す。此初の二品は彼結よりも麁なり。故に三生を潤す。彼と相隣つて三を過ぐることを得ず。又餘品の結は二品、二品の潤生は齊等なり。後を以て前に類するに、最初の二品は同じく三生を潤す。問うて曰はく、『此二は同じく三生を潤す。何の差別か有る。』『初品は麁強にして受生速疾なり。後品は惑微にして受生遲遲たり。人の物を見て貪強なるは疾く取り、貪微なるは後に取るが如し。又初品は麁にして受報麁劣なり。後品は惑微にして受報精勝なり。又復初品は麁強にして力有り。定んで三生を潤す。後品は劣薄にして或は二生を潤し、或は三生を潤す。而も決定して同じく三を潤すと言ふには非ず。極に就いて語を爲すのみ。其次の兩品は五品もて分別するに、同じく是れ上中なり、品の類同じきが故に、齊しく二生を潤す。中に於て、初品は獨り二生を潤し、餘品は資助して共に八生を潤す、後品の結は獨り二生を潤し、餘品は資助して共に六生を潤す。『此れ云何が知る。』『前の初の二品は各〻三生を潤す。此二は彼よりも細なり。故に二にして多からず。又第五品及び第六品は各〻一生を潤す。此二は彼よりも麁なり。故に二にして少からず。又復彼十四生の中に於て、前の六生は是れ第一品、第二品の惑の所潤なるが故に、第一第二品の結を斷じ、六生を損却して餘の八生在り。論に言はく、「若し三四品の惑を斷ずれば、餘の二生、三生は是を家家と名く」と。三生と言ふは、人三、天三卽ち是れ六生なり。二生と言ふは、人二、天二卽ち是れ四生なり。餘の八生の中に、第三品、潤生の

結を斷じて餘の六生を受くるを、名けて家家と爲す。明かに知んぬ、第三獨り二生を潤することを。第四品潤生の結を斷じて餘の四生を受くるを、名けて家家と爲す。明かに知んぬ、第四獨り二生を潤することを。『何の差別か有る。』『別は前に釋するが如し。彼第五品、第六品の結は五品もて分別するに、同じく是れ上なり。品の類同じきが故に、齊しく一生を潤す。中に於て、前の品は獨り一生を潤し、餘品は資助して共に四生を潤す。後品の結は獨り一生を潤し、餘品は資助して共に三生を潤す。道理應に然るべし。但此一品は乘斷の義有り。若し乘斷せらるれば、用て潤生せず。若し未だ乘斷せざれば、將て潤生すべし。問うて曰はく、『云何が知ることを得る。』『此二は各一生を潤す。』前の二品は各二生を潤ずるを以て、此品は彼よりも細なり。一を潤じて多からず。第七、第八は共に一生を潤す。此品は彼よりも麁なり。一を潤じて滅ぜず。又論に宣說すらく、「第四品潤生の惑を斷じて餘の四生を受くるを、名けて家家と爲す。及び第五、第六品を斷じ竟つて斯陀含を成ず。唯二生在り」と。明かに知んぬ、此二各一生を潤することを。』問うて曰はく、『此二一各一生を潤す。何の差異か有る』『異は上に釋するが如し　彼第七品、第八品の惑は五品もて分別するに、同じく是れ中なり。品の類同じきが故に、共に一生を潤し、餘品は資助して共に二生を潤す。『此れ云何が知る。』『次前の二品は各一生を潤す。此品は彼よりも細なり。故に合して一を潤す。又復斯陀の餘の二生の中、若し第七第八品の結を斷ずれば、唯一生を減ず。一生は猶在り。明かに知んぬ、此二共に一生を潤すること

を。』問うて曰はく、『此二共に一生を潤す。何の差別か有る。』釋して言はく、『前は麁にして潤生の力強し。後品は微細にして潤生の力薄し。佐助するのみ。』問うて曰はく、『此二共に一生を潤す。第七品を斷ずれば、彼第八品云何が潤ぜん。』釋して言はく、『第八獨り半生を潤するの理有ること無し。若し第七を斷ずれば、彼第八品は第九品と共に一生を潤す。故に『毘婆沙』に說かく、「第七品を斷じて一生を受く。八を斷ずるも亦一生を受く」と。彼第九品は五品もて分別するに、是れ其下品のみ獨り一生を潤す。』問うて曰はく、『何が故に七品、八品は共に一生を潤し、此品は轉た細にして獨り一生を潤する。』『此れ垂終に繫縛牢固なるを以て、此を度して已後、更に生處無し。力競つて堅く縛するが故に、獨り一を潤す。』問うて曰はく、『『毘曇』に說かく、「須陀洹は未來禪に依つて聖道に入る」と。所依の未來應に煩惱を治すべし。云何が九品に具結有つて、用て潤生することを得る。』釋して言はく、『未だ必ずしも是れ未來禪皆能く結を治せず。若し先に未來禪を修得し已つて、六行觀を作さば、則ち能く結を治す。若し作さざる者は、諸結全く在り。是故に須陀未來に依つて聖道に入ると雖も、具結有つて潤生することを得るを妨げず。』問うて曰はく、『『成實』に宣說すらく、「須陀は必ず初禪より無所有に至る七依處定に依つて聖道に入る」と。彼定を得る時欲結を伏斷す。須陀を得已つて、何を用てか潤生して欲界に身を受くる。』『有人釋して言はく、「彼過去の曾起の煩惱を用て、潤生して身を受く」と。此義然らず。過去に有りと雖も、現在に行ぜず、境に於て愛せず。云何が身

【次に第】四に共斷惑損生の多少を明す。中に二、先づ斷惑の不同を明す。

を受けん。有人復言はく、「彼宗に聖人は聖道を退せず。禪定を退することを得。定を退するを以ての故に、欲界の煩惱を起して潤生することを得」と。若し爾らば、須陀の定を退せざる者は應當に上に生ずべし。須陀の上生は、經論に許さず。明かに知んぬ、下に生ずるは定を退するに由らざることを。今は正しく解釋す。欲界の惑の中、麁細無量なり。能く之を伏す。定は凡より佛に至つて階別無數なり。須陀の所依は事は定麁淺なり。但麁品を伏して細惑猶行ず。細惑の中義に九品を分つ。之を用て潤生す。』此は是れ第三潤生の多少なり。次に第四門に、共斷惑損生の多少を明す。中に於て、曲しくは兩門の分別有り。一には斷の不同を明し、二には斷に約して損を明す。斷に二種有り。一には階別異斷、二には乘斷なり。惑の麁細に隨つて漸く息し漸く斷ずるを、別異斷と名け、前品を斷ずるに因つて後品の乘を除くを、名けて乘斷と爲す。九品の惑の中、第六の一品は決定して乘斷なり。『何が故に是の如くなる。』『此品の惑盡くれば便ち第二の斯陀含果を證す。果を悕ふの情猛きが故に。第五を斷ずれば、必ず第六に乘ず。此品の乘斷は諸論大に同じ。第九の一品は論者不同なり。『毘婆沙』の中に、一論師の說かく、「亦是れ乘斷なり」と。故に彼文に言はく、「若し第八を斷ずれば、則ち第九品は遮礙すること能はず」と。』『何が故に此品に復乘斷を須ふるや。』『義は前の釋に同じ。此品の惑刖のくれば那含果を證す。果を悕ふの心猛し。是が爲に乘斷す。若し『毘曇』に依らば、定んで乘斷に非ず。此れ乘終に極めて障礙を作すを以ての所以に乘ぜず。還人を守るに未だ邊處に至らざれば遮抑則ち緩に、

【次に等】次に斷に約して損を明す

若し邊處に至れば遮礙則ち急なるが如し。是故に義もて言ふ。若し此を廢し已つて、我何の處に於て生を受けんと。故に乘斷し難し。『自餘の七品は階別漸く斷じて、悉く乘の義無し。有人說いて言はく、「第二第八も亦是れ乘斷す。何が故に是の如くなる。果心の後蘇息力有り。故に第一を斷ずれば、必ず第二に乘じ、第七品を斷ずれば、必ず第八に乘ず」と。此義然らず。若し第二品に乘斷有らば、經論に應に說くべきに、全く說く處無し。明かに知んぬ、乘ぜざることを。又第八品は論に乘ぜずと說く。後に准じて前を類す。明かに知んぬ、第二は是れ乘斷に非ざることを。『毘婆沙』に說かく、「若し第七を斷ずれば、彼第八品と第九品とは共に一生を潤す」と。明かに知んぬ、第八品は乘斷に非ざることを。問うて曰はく、『前に說く、乘斷有る者は爲當一觀相續して斷じ盡すを、名けて乘斷と爲すや、爲當一世に決定して斷じ盡すを、名けて乘斷と爲すや。』釋して言はく、『一世に決定して斷じ盡すを、名けて乘斷と爲す。是れ一觀相續して斷じ盡すを、名けて乘斷と爲すには非ず。但現世に於て無間に斷じ盡すを、亦乘斷と名く。簡んで別に斷じ盡すも、亦乘斷と名く。一世に盡さず。之を用て身を受け、生を經て乃ち斷ずれば、乘斷と名けず。』斷の義是の如し。次に斷に約して損を明す。第一品を斷じて十四生の中に其三生を損し、第二品を斷じて復三生を損し、但八生有り。第三品を斷じて其二生を損し、餘の六生有り。人三、天三なり。第四品を斷じて復二生を損し、餘の四生有り。人二、天二なり。故に論に說いて言はく、「若し三四品を斷ずれば、餘の二生三生は是を說いて家家と名く」と。

【二】第五に家家を明す。中に四門の別あり、一に總じて解釋す。

【次に第】二に家家を宣說するの意を明す。

【論】雜心論第五

第五品を斷じて第六を乘斷し、復二生を損す。餘に二在り。七を斷じ、八を斷じて復一生を損し、餘に一在り。第九品を斷じて復一生を去り、一切皆盡く。須陀受身の多少是の如し。此三門竟る。

(三)次に、家家を明す。中に於て、曲しくは四門の分別有り。一には總じて家家の義を解釋し、二には說の意を明し、三には家家を建立する所以を明し、四には餘果に對して有無を料簡す。初に總じて家家の義を解釋すとは、論に自ら釋して言はく、「家より家に至るが故に家家と曰ふ」と。此れ須陀は舊の生處を厭ひて異家に身を受くることを明す。故に家家と名く。『云何が異家なる。』『此人或時は人中に生じ已つて、人を捨して天に生じ、復天身を捨して還つて人中に生ず。本の生處を厭ひて異家に生を受く。天中も亦爾なり。本の生處を離れて異處に生を受く。故に異處と曰ふ。』問うて曰はく、『若し此異處に身を受くるを家家と名くれば、何が故に論に、「人中に在り、或は一處に在り、或は二或は三、天中に在り、或は一天に在り、或は二或は三」と言ふや。』釋して言はく、『人中或は一家とは、或は一張家或は一王家を、名けて一家と爲す。是の如きの一切なり。中に於て家門各別なることを妨げず。天も亦是の如し。六天の中に於て、或は一天處なり。中に於て住處各異なることを妨げず。故に名けて家より家に至るを、家家と爲すと爲すことを得るなり。』初門是の如し。次に家家を宣說するの意を明す。其勝を彰さんが爲の故に。論に說いて言はく、「須陀の勝たる者を、名けて家家と爲す」と。『云何が勝を彰す。』『須陀洹の

【次に等】三に家家を建立する義を明す。

中、結に厚薄有り。其結の厚とは、舊處を厭はずして重生せしむべきを、家家と名けず。故に初品及び第二品、第三品の結を用て、受くる所の身は家家の攝に非ず。薄は爾らず。肯て重生せず。薄を簡んで厚に異す。故に家家と說く。說の意是の如し。次に家家を建立するの義を明す。論の中の如きに依らば、三義もて建立す。一には煩惱を斷じ、二には無漏根を成じ、三には生を受く。煩惱を斷ずと言ふは、具薄の須陀洹の人を簡異す。無漏根を成ずとは、退する者を簡異し、亦凡夫を簡ぶ。生を受くと言ふは、現般の須陀等を簡異す。故に論に說いて言はく、「若し三四品を斷ずれば、彼對治を成就す。餘の二生、三生は、是を說いて家家と名く」と。三四品を斷ずるは、是れ初の義なり。九品の惑は或は三品を斷じ、或は四品を斷ず。問うて曰はく、『何が故に要ず此惑を斷じて、方に家家と名くる。』『九品の惑の中初の三は麁重にして、舊の生處に於て憎厭の情微なるは重生せしむべし。家家の義に非ず。是が爲に要ず斷じて、方に家家と成る。』問うて曰はく、『若し前の三惑は麁にして、舊の生家に於て重生有りと言はば、人天の中に於て應に併せて受生すべし。何が故に人より必ず天に生じ、天より必ず人なるや。』釋して言はく、『本現生の時に當つて實に共苦を覺し、人を厭ひて天を求め、天を厭ひて人を求む。是が爲に併せず。麁結心を覆うて久遠より還愛す。故に重生することを得。』問うて曰はく、『彼九品の惑の中に於て、三を斷ずるは四を用て、四を斷ずるは五を用て、並に家家と稱す。何が故に五を斷ずるは六を用て、六を斷ずるは七八品等を用て、家家と爲すと說かざるや。』釋し

【次に等】次に餘果に對して有無を料簡す。

【三】第六に須陀に就いて其利鈍を分つ。

【涅槃】第三十六

て言はく、『五を斷ずれば必ず第六に乘ず。用て受生せざるが故に、家家に非ず。七八品等は人に於て天に於て、二たび身を受くること無し。故に家家に非ず。』彼治を成就するは第二の義なり。謂はく、三品の結を成ず。四品の結が家は無漏を對治す。凡夫も亦能く三品四品の結を斷除すれども、而も家家に非ず。故に須らく說くべし。此餘の二生、三生は是れ其第三受生の義なり。餘の二生とは、人二、天二なり。合して四生と爲す。餘の三生とは、人三、天三なり。合して六生と爲す。九品の惑の中に前の三品を斷じ、第四品を用て其第六生を受け、第四品を斷じ、第五品を用て其四生を受く。現般の須陀は前の兩業を具して、以て生を受けず。家家を成ぜざるが故に、須らく說くべし。此れ第三門に其家家を建立するの義を明し竟んぬ。次に餘果に對して有無を料簡す。問うて曰はく、『何が故に初果の中には偏に家家と說き、餘の果には說かざる。』釋して言はく、『初果は人天の中に於て往來多生なり。其れ家より家に至るの義有り。所以に偏に說く。餘は此義無し。是が爲に論ぜず。』問うて曰はく、『那含は上界の中に於て亦多身を受く。何が故に說かざる。』『彼一一の處は無量生の義なり。故に家家に非ず。』此四門竟る。

(三)次に、須陀に就いて其利鈍を分つ。開合不定なり。或は分つて二と爲す。唯利と鈍となり。『涅槃』に說くが如し。彼文に現般の須陀及び受生の者に約就して、以て利鈍を分つ。現般を利と爲し、受生人の中二生より多に至るを、通じて以て鈍と爲す。一生は論ぜず。『何が故に論ぜざる。』『一生の人の中には利鈍を含通して、以て偏に定め難し。是が爲に

【四】別解の中第三に斯陀含の義を明すに四門の別あり、一に共體を定む。

說かず。』『云何が含通する。』『人有つて現在に應に涅槃を得べし。餘は障難を緣じ、或は資緣に乏しく、或は病無力にして修道を妨礙す。是に由つて得ず。生を經て乃ち得。此は則ち是れ利なり。人有つて現在に勤修して得ず。生を經て乃ち得。此は則ち是れ鈍なり。斯不定有るが故に彼に說かず。』或は分つて三と爲す。謂はく、利鈍中なり。上に列する所の四種の人の中の如き、總相に麁分すれば、現般を利と爲し、中間の兩人の現進を中と爲し、經生の須陀を說いて以て鈍と爲す。次を以て細論すれば、現進の人の中にも亦鈍者有り。現身の中に於て那含を得と雖も、上界に多く生じて方に涅槃を得。經生の人の中にも亦利者有り。現在に於て餘果を得ずと雖も、欲界に受生して、次の身に於て疾く涅槃を得。或は分つて六と爲す。退、思、護、住、勝進、不動なり。義は後に釋するが如し。別に隨つて細分すれば、亦無量なるべし。須陀是の如し。

(四)次に、別して斯陀含の義を解釋す。阿那含向を通じて斯陀と名け、一處に合して論ず。中に於て、曲くは、四門の分別有り。一には共體を定め、二には共相を辨じ、三には利鈍を分ち、第四には共斷結の多少を明す。體を定むと言ふは、斯陀の果は聖德を體と爲す。聖德の不同に、亦三種有り。一には是れ果體、『毘曇』の如きに依らば、行修分別すれば、唯欲界九品の治の中、第六一品の解脫道の心を取つて、果體と爲し、得修分別すれば、通じて須陀果の德の無漏を攝し、幷に斯陀向の中の無漏を攝して、合して果體と爲す。『是義云何。』『果心現ずる時前の諸得を捨して、別に一種の非色非心の果得現に生ずること有つ

【五】二に斯陀含の相を辨ず。

【六】三に利鈍を分別す。

て、第六品の解脱道の心を得し、幷に向前の一切の無漏を得して、合して一種の斯陀含果を成ず。若し『成實』に依らば、唯行修を立てて得修を說かず。是故に但第六一品の解脱道の心を說いて、以て果體と爲す。餘は皆謝往して現に法體無し。說いて果と爲さず。』細分是の如し。相續して之を論ずれば、因滿じて果を成ず。二には學等見、義は前に解するが如し。三には勝果道、更に勝解を修して、進んで七八九品の煩惱を斷ずるに、三無礙、二解脱道有り。名けて勝果と爲す。此一門竟る。

(五二)次に共相を辨ず。是斯陀含は分別するに三有り。一には現般、現身に阿羅漢果を修得して般涅槃に入る。二には現進、現進に阿那含果を修得して上界に身を受く。三には經生、現に異得無くして欲界に身を受く。此三は離分して亦五と說くことを得。現般に二有り。一には直現般、凡身の上に於て修して斯陀を得、卽ち現身に於て般涅槃を得。二には轉世、或は須陀果の上に於て生を經、或は斯陀行の中に於て生を經て、復斯陀を得て卽ち現身に於て般涅槃に入る。現進を一と爲し、前に通じて三と爲す。經生の中に其二種有り。一には守果、一往來と名く。二には進向、一種子と名く。此一種子も亦三の因緣もて、之を建立す。謂はく、煩惱を斷じ、對治の無漏の根を成就し、及び上に受生す。三が中に一を少かば一種子に非ず。論釋是の如し。此を以て前に通じて、合して說いて五と爲す。相を辨ずること是の如し。此二門竟る。

(六)次に、利鈍を分別す。開合不定なり。要攝すれば唯二なり。謂はく、利と鈍となり。現

【七】四に斯陀斷結の多少を明す。
【經】涅槃經第十一。

【八】下別して阿那含の義を明すに四門の別あり、第一に其體を定む。

般を利と爲し、餘の者を鈍と爲す。亦可なり。經生は之を以て鈍と爲し、餘の者を利と名く。或は分つて三と爲す。謂はく、利鈍中なり。現般を利と爲し、現進を中と爲し、經生を鈍と爲す。麁判是の如し。實を以て具に論ずれば、現般の人の中にも亦利鈍有り。直爾の現般は之を說いて利と爲し、轉世の現般を說いて以て鈍と爲す。現進の人の中にも亦利鈍有り。進んで那含に到る中般は是れ利なり、上生は是れ鈍なり。經生の人の中にも亦利鈍有り。一種を利と爲し、二生は是れ鈍なり。或は分つて六と爲す。退、思、護、住、勝進、不動なり。義は後に判ずるが如し。此三門竟る。

(七)次に斯陀斷結の多少を明す。經に說かく、「斯陀は斯れ三結を除き、貪恚癡を薄くす」と。三結を斷ずとは、義上に辨ずるが如し。謂ゆる、身見、戒取及び疑なり。前に斷じて此に無きが故に通じて說く、又復此三も亦斯陀親しく斷ずるの義有り。後に釋するが如し。言ふ所の薄とは、貪瞋癡に於て正しく是れ斷ずる所なり。『薄幾許にか至る。』『欲界九品の修惑の中、守果の斯陀は六を除いて三在り。之を名けて薄と爲す。進向の斯陀は七を斷じ、八を除き、或は九品を斷じて未だ解脫を證せず。前に從つて論を爲して、斯に薄を稱するなり。』斷結是の如し。中に於て義の須陀に同じきこと有る者は、上に類して知るべし、勞しく更に解せず。斯陀是の如し。

(八)次に、別して阿那含の義を解釋す。阿羅漢向を通じて那含と名け、一處に合論す。中に於て亦四門の分別有り。一には其體を定め、二には其相を辨じ、三には利鈍を分ち、四に

【九】第二に阿那含の相を辨ず。

【涅槃】北本第三十六。

は斷結の多少なり。體を定むと言ふは、阿那含果は聖德を體と爲す。聖德に三有り。一には是れ果體、『毘曇』の如きに依らば、行修分別すれば、唯欲界九品の治の中の末後の解脫一念の無漏を取る、是れ其果體なり。得修分別すれば、通じて向前の一切の無漏を攝して、合して果體と爲す。『是義云何。』『那含と稱する時前の得悉く捨し、一の總得生じて彼欲界の九品の治の中の末後の解脫を得し、并に前來一切の無漏を得して、合して一果と爲す。若し『成實』に依らば、唯行修を立てて得修の義無し。是故に唯欲界の治の中の末後の解脫を說いて、以て果體と爲す。』二には學等見、義は前の釋に同じ。三には勝果道、更に勝行を修し、進んで初禪より非想の結に至るを斷ず。唯非想の末後の解脫を除く。名けて勝果と爲す。此三を通じて說いて那含果と爲す。體を定むること是の如し。此一門竟る。

(九)次に其相を辨ず。那含の人の中には、開合不定なり。增數に之を說く。要攝すれば唯三なり。一には現般、現身に阿羅漢果を修得して般涅槃に入る。二には中般、『成實』の如きに依らば、欲より上に生ずる兩界の中間に、身を受けて般を得るが故に中般と名く。彼論には中陰の義を立てざるが故に。餘の經論に依らば、欲より上に生ずる中陰の身の中に般涅槃を得るを、名けて中般と爲す。三には受身般、上界に身を受け、然して後に般を得。或は分つて四と爲す。一には現般、二には中般、三には色界般なり。色界の身の中に涅槃を修得す。四には無色般なり。無色界の中に涅槃を修得す。或は分つて六と爲す。『涅槃』に說くが如し。一には現般、二には中般、三には生般、四には行般、五には無行般、六に

【涅槃】第三十六

【涅槃】第三十六

【涅槃】第三十六

【涅槃】同前。

は上流般なり。初の現般とは、三の因縁有り。所以に現般す。一には利根を以て煩惱の過を見、速疾に斷除す。所以に現般す。二には聖道を得已つて曾て欲界に生じて、厭苦の情深くして上界の生を畏れ、懃修し對治す。是故に現般す。第三には人有つて未來禪を得、之に依つて結を斷ず。餘禪は得ると雖も、而も現前せず。上二界に於て作業有ること無く、亦生業無し。是が爲に現般す。其中般とは、二の因縁有り。一には利根を以て中陰の身の中に聖道現前し、煩惱の過を見て能く疾く斷除す。所以に中般す。故に『涅槃』に云はく、「利根を以ての故に、中に於て涅槃す」と。二には業に約して分別す。業に二種有り。一には作業、二には受生業なり。煩惱より起るを、名けて作業と爲す。若し煩惱行、愛の爲に潤せられて能く後果を生ずるを、受生業と名く。此人、世俗の八禪を修得して其作業有り。禪に於て愛せざれば、受生業無し。是が爲に中般す。故に『涅槃』に云はく、「欲色の衆生に二種の業有り。一には作業、二には受生業なり。中涅槃の者は唯作業のみ有り。是故に中に於て般涅槃す」と。問うて曰はく、『此人既に是れ利根なり。何んが現般せずして、中に至つて方に般する。』『涅槃』に釋するが如し。此人利なりと雖も、四大羸劣にして道を修するに堪へず。或は力有りと雖も、資縁足らず。是が爲に現世に涅槃を得ず。』問うて曰はく、『中般は唯極めて利根なりや、亦等降有りや。』『涅槃』に釋するが如し。上中下有り。若し上根軟煩惱有る者は、未だ欲界を離れずして般涅槃を得。若し中根中煩惱有る者は始めて欲界を離れ、未だ色界に至らずして般涅槃を得。若し下根上煩惱有る者は、

【涅槃】第三十六

【涅槃】第三十六

色界の邊に至つて方に涅槃を得。』問うて曰はく、『何が故に欲界の身を捨するには中涅槃有り、上界には之無きや。』『涅槃』の如きに依らば、四義もて辨釋す。一には性に約して解釋す。欲界の衆生は其性勇健にして、能く果に向ふことを得。是が爲に欲界には中涅槃有り、上界は爾らず。故に中般無し。二には煩惱の因緣に約して以て釋す。欲界の煩惱に二の因緣有り。一には內、二には外なり。結使及び邪思惟を斷ぜずして煩惱を起す、之を名けて內と爲し、六塵の結を生ずる、之を目けて外と爲す。此二厭ふべし。故に欲界に從つて中涅槃有り。上界は唯內因の結を生ずる有つて、外の厭ふべき無し。故に中般無し。三には二愛に約して辨釋を爲す。愛に二種有り。一には欲愛、外の五欲資生の具に著す。二には色愛、妻色に著す。欲界地の中には此厭ふべき有るが故に中般有り、上界には此無きが故に中般無し。四には諸の麁煩惱に約して辨釋す。欲界には其慳貪瞋妬無慚愧等の諸の麁煩惱の、以て厭患すべき有るが故に中般有り、上界には此れ無きが故に中般無し。』問うて曰はく、『經に說かく、「中般の那含に四種の心有り」と。何者か是なる。』『涅槃』に說くが如し。一には非學非無學心、謂はく、受生の心なり。二には學心、上の對治を起す。三には無學心、羅漢果を證す。四には非學非無學心、謂はく、命終の心なり。』問うて曰はく、『此人何の心に命終する。』『論に自ら說いて言はく、「羅漢の報心及び威儀心、隨順滅心は涅槃に趣向す」と。此四心の中二は是れ涅槃、二は涅槃に非ず。二涅槃とは、後の二心なり。第三の無學は是れ有餘涅槃を證するの心、第四の非學非無學は是れ無餘涅

槃に入る心なり。』中般是の如し。次に、生般、行般、無行般を解す。此三種の人に共作業及び受生業有つて上界に身を受け、色界地の中隨つて何の天に在るも、最初の生處は、義に隨つて三を分つ。初禪に局らず。『此三何んが異る。』『經論不同なり。乃ち三の別有り。若し『毘曇』に依らば、生般は最勝、行般は次と爲し、無行は最劣なり。』『是義云何。』『論に自ら釋して言はく、「方便を精勤し速進の道を修す。是れ其生般なり。勤方便有つて速進の道無き、是れ其行般なり。勤方便無く速進の道無き、是れ無行般なり」と。聖道を勤修するを、勤方便と名く。利根なるを以ての故に、修する所速に成じ疾く餘結を斷ずるを、速進の道と名く。』『此人を何が故に名けて生般と爲す。』『論に自ら釋して言はく、「此人初生に有行道を起して、勤方便を以て疾く餘結を斷ず。初生に般を得るが故に生般と云ふ」と。無漏の十六聖行を修習するを、有行道と名く。初生に般有餘涅槃を得、壽を盡して方に般無餘涅槃す。有が言はく、「初生に即ち般無餘す」。是義爾らず。論に言はく、「捨壽の行有ること無きが故に、其第二の人の勤修習道を、勤方便と名く。鈍根なるを以ての故に、所修成じ難く斷結疾からざるを、無速道と名く」と。『此人を何が故に名けて行般と爲す。』『論に自ら釋して言はく、「有行道を起して結を斷じ般を得るを、亦行般と爲す。又復有爲緣定に依つて結を斷じ般を得るを、亦行般と名く。此人亦十六聖行を修すれば、有行道と名く。又復此人利根なるを以ての故に、前の三諦有爲の法を觀ず。亦能く結を斷ずれば有爲緣と名く。速斷無く結を斷ずること疾からざるを以て、壽を盡して

【涅槃】第三十六
【涅槃經】第三十六。

方に般す。其第三の人は聖道を精懃修習すること能はざるを、不懃求と名け、亦復疾く餘結を斷ずること能はざるを、無速道と名く。』『此人を何が故に無行般と名くる。』『論に自ら釋して言はく、「無行道を起して結を斷じ般を得るを、無行般と名く。又復無爲緣定に依つて結を斷じ般を得るを、亦無行と名く。此人鈍根にして多く有漏の等智を用て結を斷ず。無漏の十六聖行を修せざるを、無行道と名く。設ひ無漏を修して非想の結を斷ずるも、鈍根なるを以ての故に、滅諦無爲の勝法を觀察して方に能く結を斷ずるを、無爲緣と名く。速道の疾く結を斷ずること無きを以ての故に、壽を盡して方に般す。若し『成實』に依らば、生般を勝と爲し、無行を次と爲し、行般を劣と爲す。其第二の人は自ら定んで當に涅槃を得べしと知れば、懃めて道を行ぜず、壽を盡して般を得るを、無行般と名く。其第三の人は鈍根なるを以ての故に、精懃して道を行じ、壽を盡して般を得るを、名けて行般と爲す。若し『涅槃』に依らば、生般は最劣、行般は最勝、無行は中と爲す。』『是義云何。』『其生般とは、『涅槃經』の中には受身般と名く。此人精懃して壽を盡して般を得るを受身般と名け、是を最劣と爲さば、此れ『成實』の行般の人と同じ。』問うて曰はく、『若し此れ壽を盡して般を得れば、何の義を以ての故に受身般と名くる。』『佛自ら釋して言はく、「是人身を受けて、然る後に乃ち三界の煩惱を斷ずれば、受身般と名く」と。初の身を受けて卽ち般を得るが故に、受身般と名くるに非ず。』人有つて懃修三昧力の故に、壽命を盡さずして結を斷じ般を得るを、若し是れ最勝と爲さば、此れ『成實』の生般の人と同

じ。人有つて自ら定んで涅槃る得るを知つて、懈怠して修せず、亦有爲三昧力を以ての故に、壽を盡して般を得るを、無行般と名く。是故に中と爲す。此れ『成實』の無行の人と同じ。次に、上流を解す。此人轉た鈍にして、上界の中に於て初身に般せず。二身已後方に般を得る者を、名けて上流と爲す。流に二種有り。一には煩惱流、二には道流なり。下の煩惱を斷じて上結漸く起るを、煩惱流と名け。道行漸く增するを、名けて道流と爲す。此二流に隨つて次第に上昇するが故に、上流と曰ふ。中に於て分別するに、略して四種有り。一には不定般、未だ廣果に至らず。中に於て、或は二三身等を受けて涅槃を得。二には一切處、次第に身を受け、上廣果に至つて方に涅槃を得。三には樂慧、五淨居に生ず。四には樂定、無色界に生ず。此後の二人は行因各別なり。一には論義を樂ひ、二には寂靜を樂ふ。論義を樂ふ者は五淨居に生じ、寂靜を樂ふ者は無色界に生ず。又復五階に熏禪を修する者は五淨居に生じ、五階を以て熏禪を修せざる者は無色界に生ず。『何者か是れ其五階の熏禪なる。』謂はく、下、中、上、上中、上上なり。』『云何が熏禪なる。』『無漏禪を用て有漏に熏じ、有漏定をして精勝淸淨ならしむ。』『熏法は如何。』『行者四禪定を修得し已つて、初に第四に熏じ、初に衆多の無漏心の中に入り、次に衆多の有漏心の中に入り、後に衆多の無漏心の中に入る。是の如く往返して漸次に之を略し、乃至最後は二無漏心、二有漏心なり。後の二無漏を名けて熏禪と爲す。方便道成じて次に復一無漏心、一有漏心に入る。後の一無漏を熏禪成と名く。此成の中に於て、五返往來す。初返

【涅槃】第三十六

を下と名け、第二を中と名け、第三を上と名け、第四は上中、第五は上上なり。四禪に熏じ已つて次に三禪に熏じ、次に二禪に熏じ、後に初禪に熏ず。熏法悉く同じ。熏禪を修し已つて、若し不退の者は五淨を經生す。名けて生般と爲し、上流と名けず。若し有退の者は天の中に下生す。身の多少に隨つて後に還つて結を斷じ、四禪を修得して還つて重ねて之を熏ず。熏法は前の似し。彼成の中に於て、一返熏ずる者は小廣天に生ず。亦は無煩と名け、亦は無凡と名く。二返熏ずる者は無熱天に生ず。三返熏ずる者は善可見天に生ず。亦は善現と名く。四返熏ずる者は善見天に生ず。五返熏ずる者は無少天に生ず。外國には名けて阿迦尼吒と爲す。是れ色究竟なり。『問うて曰はく、『此五道は業に隨つて別なり。惑を潤するも亦異なりや。』釋して言はく、『業は別なれども惑を潤するに殊ならず。此等は同じく一の繫縛地なるが故に、欲界の中の六天の受生の如く、惑は同じく業は別なり。』問うて曰はく、『此五淨居の處に於て、生般上流の人有ることを得るや不や。』『一義に之を釋す。但生般のみ有つて其上流無しと。』『何が故に是の如くなる。』『五階の熏の中に、勝を逐つて生を受く。先に下に生じ、後に上に生ずるにあらざるが故に。』又解す。亦得ること本下天に在り。下品の熏禪は下天の中に生ず。彼天に生じ已つて、更に勝熏を修して上天の中に生ず。故に上流を得。若し能く是の如くならば、五階の熏禪は則ち能く無色界の定を呵嘖す。無色に生ぜず。若し無色界に入らんと欲する者は、則ち五階の熏禪を修すること能はず。六種是の如し。或は分つて七と爲す。『涅槃』に說くが如し。六種は

【涅槃】　第三十六

上の如し。無色般を加ふ。『此無色般は前の六の中の樂定と何の異りあつて、別して論ずることを須ふる。』『前の樂定の者は色界より去り、此無色般は欲界より去る。前と同じからず。故に別して之を説く。』亦八を説くことを得。七種は前の如し。上行般を加ふ。此上行般は、是れ無色の中の上流般なり。彼に生じて一生に卽ち般を得る者を、無色般と名く。二三四身に、方に般を得る者を、上行般と名く。此に三階有り。『涅槃』に説くが如し。一には精進及び自在定行らば二身を受く。二には精進行つて自在定無く、自在定有つて精進無ければ三身を受く。三には精進及び自在定無く、兩事倶に無ければ則ち四身を受く。聖は四空に於て重生の義無し。是故に極多は唯四身を受く。或は十一を分つ。『成實』に説くが如し。一には是れ現般、二には是れ轉世、三には是れ中般、四には生、五には行、六には無行般、七には樂定、八には樂慧、九には信解脱、十には見到、十一には身證なり。現般、轉世は、前には合して一と爲す。中に於て別して分たば、凡身の上に依つて那含を修得して、卽ち現身に於て涅槃を修得するを、説いて現般と爲す。聖人の身の上に欲界に生を經て後那含を得、卽ち現身に於て涅槃を得る者を、説いて轉世と爲す。前の聖身を轉じて那含を得るが故に。斯不同有るが故に、兩別を分つ。此轉世の人に四處の來有り。一には須陀果の上に生を經て來る。二には斯陀行の中に生を經て來る。三には斯陀果の上に生を經て來る。四には那含行の中に生を經て來る。初の二は是の如し。中般、生得般、行無行般は、悉く前に釋するが如し。樂定、樂慧の此二は、是れ前の上流の人の

【一〇】三に利鈍を分別す。

中別に隨つて開分す。上流の名を沒して此二を彰すなり。義は上に釋するが如し。問うて曰はく、『前に上流の人を說く中、其四種有り。謂はく、不定般及び一切處、樂定、樂慧なり。『成實』は何が故に偏に後の二を彰す。』『此れ語を盡さず。勝に就いて論ずるが故に。後の二人は因別に果殊なるを以て、所以に偏に擧ぐ。此二を分つと雖も、上流に收攝するが故に、猶盡さず。』『若し盡さずんば、彼不定般及び一切處は、十一人の中何の所にか收むる。』『統攝すれば信脫、見到の所收なり。此二根を以て通じて一切を攝するが故に。此前の八種は身に隨ひ行に隨ひ、義に隨つて以て分つ。現中及び生は身に隨つて異を分ち、行無行般は行に隨つて異を分ち、樂定、樂慧は行に隨ひ身に隨つて、以て其異を分ち、轉世の一種は義に隨つて異を分つ。前の八人の中に鈍根の者有り。信解脫と名く。他語を信じて解脫を得るを以ての故に。利根の者有り。名けて見到と爲す。自心に法を見て解脫に到るが故に。滅定を得る者を說いて身證と爲す。滅定を得る者は心滅自在にして、定と身と合す。故に身證と曰ふ。』十一是の如し。若し根地種性處所離欲等の別に隨へば、則ち無量有り。『雜心』に說くが如し。相を辨ずること是の如し。此二門竟る。

【一〇】次に、利鈍を分別して、開合して辨定す。要分すれば唯二なり。謂はく、利と鈍となり。鈍を信脫と名け、利を見到と名く。此二遍く通ず。相に隨つて麁分すれば、前の六種の中の現般、中般は是れ其利根、餘は是れ鈍根なり。或は分つて三と爲す。謂はく、利鈍中なり。此れ亦名けて上中下根と爲す。別に隨つて麁分すれば、前の六種の中の現般は是れ利、

中般を中と爲し、餘は悉く鈍と名く。實を以て具に論ずれば、現般の人の中に利鈍中有り。直爾の現般は之を說いて利と爲す。轉世の現般に鈍有り中有り。多身の轉世は之を說いて鈍と爲し、少を名けて中と爲す。中般の人の中に利鈍中有り。『涅槃經』及び『成實』に說くが如し。未だ欲界を離れずして般を得る者は、之を名けて利と爲し、始めて欲界を離れ、未だ色界に至らずして般を得る者は、之を說いて中と爲し、色界の邊に至つて方に般を得る者を、說いて以て鈍と爲す。生般、行般及び無行般に、利鈍中有り。俱に說くこと不定なり。『毘曇』の如きに依らば、生般を利と爲し、行般を中と爲し、無行を鈍と爲す。故に彼に說いて言はく、「利根及び軟煩惱に依つて生般を建立し、中根及び中煩惱に依つて行般を建立し、軟根及び上煩惱に依つて無行般を立つ」と。若し『成實』に依らば、生般最も利なり。前と相似す。無行を中と爲し、行般を鈍と爲す。若し『涅槃』に依らば、行般最も利なり。無行を中と爲し、生般を鈍と爲す。悉く上に辨ずるが如し。上流般の中、當に知るべし、亦利鈍中の別有ることを。『成實』に說くが如し。一身を利と爲し、二三身は中、一切處は鈍なり。又更に分別すれば、不定を利と爲し、一切處は中、樂定、樂慧は齊しく名けて鈍と爲す。若し復細論すれば、一一皆利鈍中の別有り。或は復開分して六種性と爲す。退、思、護、住、勝進、不動なり。所得の善根退すべきを退と名く。是れ已退に非ず。加ふるに思願を以てすれば、方に能く退せず、思法の人と名く。煩惱を畏れて退し、常に自ら防護して不退を得るを護法の人と名け、所得の善根不退不進な

【二二】四に那含の斷結の多少を明す　涅槃經第十一【本】。

【二三】次に別して阿羅漢の義を解釋するに三門の別あり。第一に其體を定む。

るを住法の人と名け所得の善根必ず能く上進するを必勝進と名け、所得の善根牢固にして不退なるを、名けて不動と爲す。中に於て、或は根本不動有り、或は增進して始め不動を得る有り。『毘曇』の如きに依らば、現般の人より乃ち上流に至つて、齊しく此六を具す。利鈍是の如し。此三門竟る。

(二二)次に、那含の斷結の多少を明す。經の中に說くが如し。五の下結及び無慚愧慳嫉等の過を斷じて、阿那含を成ず。『何者か五結なる。』『謂ゆる、身見、戒取及び疑、貪欲、瞋恚なり。前の三種は先に斷じて此に無し。故に通じて之を說く。又復前の三にも亦那含親しく斷ずるの義有り。故に通じて之を說く。義は後に釋するが如し。後の二は一向に那含親しく斷ず。此五結の中の前の三種は、『成實』の如きに依らば、二下を具足す。名けて下結と爲す。一には衆生下、唯凡夫のみ起す。二には下果を障ふるも亦下結と名く。唯初果を障ふ。若し『毘曇』に依らば、唯衆生下を名けて下結と爲す。義は前の解に同じ。下果を障ふるを名けて下結と爲すには非ず。此三種は通じて須陀、斯陀、那含の三種の果を障ふるが故に。後の二は是れ其欲界の煩惱なり。界下を以ての故に、名けて下結と爲す。守果の那含は唯此五を斷じ、進向の那含は通じて上結を斷ず。唯非想地の末後の解脫にして、而も未だ剋證せず。那含是の如し。

(二三)次に、別して阿羅漢の義を解釋す。中に於て、曲しくは三門の分別有り。一には其體を定め、二には其相を辨じ、三には斷結の多少の義を明す。體を定むと言ふは、阿羅漢果は

聖德を體と爲す。羅漢果の中の聖德に二有り。一には是れ果體なり。『毘曇』の如きに依らば、行修分別すれば、唯非想地の九品の治の中の末後の解脫は、是れ其果體なり。此體の中に就いて、分つて盡智及び無生智と爲す。鈍根の所得を直に盡智と名け、利根の所得を盡智及び無生智と名く。『何が故に是の如くなる。』『彼鈍根の者は此智を得る時、能く諸の惑を盡す。故に盡智と名く。保し已つて當結生ぜざること能はず。是義を以ての故に、無生智に非ず。利根の所得は現に諸の惑を盡す。復盡智と名く。復能く保し已つて當結生ぜざるを、無生智と名く。』問うて曰はく、『盡智及び無生智は一念に在りと爲んや、當に相續すべしと爲んや。』『彼宗に立つる所は各別の一念なり。相續の義無し。故に論に說いて言はく、「尚一念無し。況んや多くの相續をや」と。』問うて曰はく、『若し此れ一念に名くといはば、云何が四智の差別を分つことを得ん。』釋して言はく、『一念は義別して四と說く。前後の四に非ず。』『是義云何。』『一念に進因を盡すを我生盡と名け、道行成滿するを梵行立と名け、證滅窮極するを所作辦と名け、永く當苦を捨するを不受後と名く。無生智の中の義別も亦爾なり。』『行修是の如し。得修分別すれば、通じて向前の一切の無漏を攝して、合して一種の阿羅漢果を成ず。』『是義云何。』『羅漢を證する時、因中の一切の諸の無漏の得一時に頓に捨し、別に一種の果得新に生ずること有つて、彼非想末後の解脫を得、幷に向前の一切の無漏を得て、合して一種の阿羅漢果を成ず。若し『成實』に依らば、唯行修を說いて得修を立てず。是故に唯非想の解脫を說いて羅漢と爲す。此果の中

【一三】第二に共相を辨ず。

に於て利鈍を問ふこと莫く、悉く盡智及び無生智を具す。彼宗所立の無學の業患生死の因を盡すを、名けて盡智と爲し、能く後果をして永く更に受けざらしむるを、無生智と名く。非想の解脫は此兩能を具す。是故に一切齊しく二智を具す。二智は同體なり。義に隨つて以て分つ。多念相續して一念に止らず。果體是の如し。二には無學等見、盡無生の後の遊觀の無漏なり。定體是の如し。此一門竟る。

（一三）次に、共相を辨ず。開合不定なり。之を總ずれば唯一なり、或は分つて二と爲す。一には慧解脫、二には俱解脫なり。滅定を得ざるを慧解脫と名け、滅定を得る者を俱解脫と名く。又二種を分つ。一には時解脫、二には不時解脫なり。其鈍智根の者は、時を假り處に託して方に解脫を得。時解脫と名く。其利根の者は、時處を假らずして解脫を得。不時解脫と名く。或は六種を分つ。『毘曇』に說くが如し。一には退、二には思、三には護、四には住、五には必昇進、六には不動と名く。退法と言ふは、本學地に在つて常方便無く、頓方便無く所得退すべきを、退法の人と名く。思法と言ふは、亦常頓二種の方便無く、能く思願するに堪へて行をして退せざらしむるを、思法の人と名く。護法と言ふは、常方便有つて頓方便無く、常に自ら防護して行をして退せざらしむるを、護法の人と名く。住法と言ふは、頓方便有つて常方便無く、所得の善根、不進不退なるが故に、名けて住と爲す。必昇進とは、常方便及び頓方便有り、而も是れ鈍根にして、二方便を以て不動を得るに堪ふるを、必昇進と名く。不動法とは、當方便有り、頓方便有り、而も是れ利根にして所得

堅固なるが故に、不動と名く。中に於て二有り。一には本來不動なり。二には果の中に至つて、進んで不動と爲る。此六種の中に、若し退は必定して退轉し、乃至必進は必定して上進すと說かば、欲界の羅漢は上二界に非ず。彼上二界には唯住法及び不動法のみ有り。若し退は退すべきを退と名け、必定して退せず、乃至進は進むべきを進と名くと說かば、設ひ退せしむるとも、此人進んで思護住等と作り、後に退失を遠け本種性に住して退失せしめず。上に說くが如きは、三界の羅漢悉く六種を具す。六が中の前の五は是れ時解脫、後の一は不時なり。或は分つて九と爲す。『成實』に說くが如し。一には是れ退相、二には是れ守相、三には死相、四には可進相、五には住相、六には不壞相、七には不退相、八には慧解脫、九には俱解脫なり。論に自ら釋して言はく、「信等の根を以ての故に差別有り」と。最鈍根の者を名けて退相と爲す。此は『毘曇』の退法の人に當るなり。但し『毘曇』の中には、聖道を退失す。成實法の中には、三昧を退失す。故に無漏の智慧は現前すること能はず。問うて曰はく、『若し聖慧を退して現ぜざれば、云何が阿羅漢果を成ずることを得ん。』釋して言はく、『退すと雖も時に復還つて得す。得し已つて慧を發すが故に、羅漢を成ず。』守相と言ふは、根少しく前に勝る。『云何が前に勝る。』『前の退法の人は自ら防護すと雖も、而も必ず退失す。此守相の人は護せざれば則ち退し、護すれば退せず。不退三昧は此れ『毘曇』の護法の人に當るなり。』死相と言ふは、根轉た前に勝る。深く諸有を厭ひて定を得ること能はず。定を得ざるが故に、無漏の智慧現前すること難し。設ひ得る

【一四】第三に羅漢の斷結の多少を明す。

【經】涅槃經。

とも失はんことを恐るるが故に、自害せんと求欲す。故に死相と名く。瞿坻等の如し。此は『毘曇』の思法の人に當るなり。此三は退分の三昧に住す。住相と言ふは、所得の三昧不進不退なり。此は『毘曇』の住法の人に當るなり。此人は住分の三昧に住す。可進相とは、所得の三昧轉た深くして增益するを、可進相と名く。此は『毘曇』の必昇進に當るなり。此人は增分の三昧に住す。不壞相とは、所得の三昧種種の因緣もて敗壞すること能はざるを、不壞相と名く。此人は慧利にして善く三昧の入住起の相を取る。故に壞すべからず。不退相とは、此人最勝にして所得の功德盡く退失無きを、不退相と名く。此後の二人は達分定に住し、『毘曇』の中の不動の人に當るなり。前の人の中に於て滅定を得ざるを、慧解脫と名け、滅定を得る者を、俱解脫と名く。九種是の如し。細分すれば無量なり。相を辨ずること是の如し。此二門竟る。

(一四)次に、羅漢の斷結の多少を明す。經の中に宣說すらく、『五上結を斷じて阿羅漢を成ず』と。『何者か五結なる。』『謂ゆる、色染及び無色染、無明、憍慢、及與掉戲なり。色界の貪愛を名けて色染と爲し、無色の貪愛を無色染と名く。此二は彼十使門の中に於て、同じく一の貪使なり。無明は癡使、憍慢は慢使にして、此れ前の使性なり。掉戲と言ふは、是れ其掉纏なり。此五は是れ其上界の煩惱なり。故に上結と名く。又復那含の上人の所起なり。亦上結と名く。『問うて曰はく、『此と四流、四扼煩惱とは何の別かある。』釋して言はく、『此五は通じて亦是れ其流扼の所攝なり。然るに流と扼とは凡聖通じて起す。此五は唯是れ

聖人の所起なり。是れ那含所起の結なるを以ての故に、此五の盡處を羅漢果と說く。故に羅漢は五上結を斷ずと說く。』問うて曰はく、『何が故に十使の中に、偏に羅漢は貪癡慢を斷ずと說いて、餘の者を說かざる。』『五見及び疑見は道中の斷なり。故に此を論ぜず。瞋は欲界に在り。那含の時盡す。故に此に說かず。』問うて曰はく、『何が故に十纒の中に、偏に掉を斷ずと說いて餘の者を說かざる。』『毘曇』の如きに依らば、十纒の中八は欲界に在り。那含の時盡す。故に此に說かず。睡掉の二纒は上二界に通ず。睡は即ち餘結なり。一切の煩惱境界に睡著する、之を名けて睡と爲す。餘結に隨つて說くが故に、別して論ぜず。又復睡眠は心受に順ずるが故に、之を說かず。若し『成實』に依らば、睡は欲界に在り。故に睡を說かず。掉は前に同じからず。所以に偏に擧ぐ。』問うて曰はく、『羅漢の掉纒を斷ずるを、說いて上結と爲す。阿那含の人は無慚愧、慳嫉、忿覆、悔、眠等の纒を斷ず。何の義を以ての故に、下結と名けざる。』釋して言はく、『齊しく類すれば應に下結と名くべし。但阿那含は過を斷ずること衆多なり。本を簡んで末に異するが故に、使の中に就いて五の下結を說く。纒垢は別して論ず。阿羅漢の人は過を斷ずること狹少なり、故に使纒を通じて五上結を說く。』問うて曰はく、『前に阿那含の人は五下結を斷ずと說く。五下結の中の身見、戒取、及與疑結は須陀に斷盡す。前を攝し後に從つて、通じて那含所斷の五結と爲す。今羅漢を說いて何んが前を攝し後に從つて、合して十結を斷ずることを得ずと爲し、但五を斷ずと云ふや。』釋して云はく、『彼五下結の中に於て、初の三種は相を

【一五】下別して緣覺を論ずるに三門の別あり、第一には名義を釋す。

【辟支佛】プラトエーカブッダ（Pratyekabuddha）

分つて之を論ずれば、須陀の所斷なり。實を以て細論すれば、亦那含に親しく斷ずるの義有り。故に之を攝して、合して那含所斷の五結と爲すことを得。羅漢親しく斷ずるの義有ること無し。是故に之を攝することを得ずして、後に從つて羅漢は十結を斷除すと宣說す。』『是義云何。』『五下結の中の初の三結は三處に親しく斷ず。一に次第の人は親しく三結を斷じて須陀洹を成ず。第二に超越斯陀含の人は親しく三結を斷じて斯陀含を成ず。是人凡の世に欲結を斷除し、六品盡くるに至る。後見道に入つて三結を斷除し、第十六道比智に至る時即ち斯陀を成ず。故に經に宣說すらく「斯陀含の人は三結を斷除し、貪恚癡を薄くす」と。第三に超越阿那含の人は親しく三結を斷じて阿那含を成ず。是人凡の時に欲結を斷除し、九品盡くるに至る。後見道に入つて三結を斷除し、第十六道比智に至る時即ち那含を成ず。此義有るを以て、是故に經の中に說かく「阿那含は五下結を斷じ、五下結を斷除し盡して即ち羅漢と成ること有ること無し」と。是故に阿羅漢の人は十結を斷ずと說かざるなり。羅漢是の如し。聲聞の賢聖は之を略して爾云ふ。

(一五)次に、緣覺を論ず。中に於て、曲しくは三門の分別有り。一には名義を釋し、二には小に對して分別し、三には大に對して分別す。初に名義を釋す。緣覺と言ふは、外國の正音には辟支佛と名く。此には辟支を翻じて名けて因緣と曰ひ、佛を名けて覺と爲す。緣覺の名義は、解に兩種有り、一には所觀の法門に約して以て釋す。緣とは、是れ其十二緣の法なり。始め無明より乃ち老死に至る、斯を觀じて悟解す。緣に從つて覺を得るが故に、緣

【一六】第二に小に對して分別す。中に二、一に小に對して相を辨ず。

覺と號す。二には得道の因縁に就いて以て釋す。『辟支佛得道因縁經』の中に廣く說くが如し。拂迦沙の如きは、風樹を動かすを思うて道を悟ることを得。是の如き等は皆現事の縁を藉つて覺悟することを得。故に縁覺と曰ふ。名義是の如し。此一門竟る。

（一六）次に、小に對して分別す。中に於て二有り。一には小に對して相を辨じ、二には同異を明す。相を辨ずと言ふは、經に聲聞、縁覺の別を說くに、其に兩門有り。一には所觀の法門に約して以て別つ。四諦を觀察して道を得る者を、悉く聲聞と名け、十二縁を觀じて道を得る者を、齊しく縁覺と稱す。若し是義に從はば、今現在に於て佛爲に十二縁の法を說くに値つて、道を得る者をも亦縁覺に收む。故に經に說いて言はく『聲聞に敎へんが爲に四眞諦を說き、縁覺に敎へんが爲に十二縁を說く」と。此縁覺の中、細分すれば二有り。一には縁覺の縁覺、是人本來縁覺道を求め、常に樂つて十二縁の法を觀察して縁覺の性を成ず。最後身に於て佛世に値はず、現事の縁に藉つて道を悟ることを得。本縁覺の性にして、今は事縁に藉つて覺を得るが故に、之を說いて以て縁覺の縁覺と爲す。二には聲聞の縁覺、是人本來縁覺道を求め、亦樂つて十二縁の法を觀察して縁覺の性を成ず。最後身に於て佛爲に十二縁の法を說くに値つて、悟解することを得。佛の聲を聞くに從つて覺を得るが故に、之を說いて以て聲聞の縁覺と爲す。摩訶迦葉は卽ち其人なり。經の中に云ふ所の「諸の縁覺の爲に十二縁を說く」とは、正しく斯に當るのみ。此れ亦名けて縁覺の聲聞と爲す。故に上の聲聞の人の中に之を辨ず。此前の一門は法に約して以て別つ。二には得

【次に等】二に同異を辨ず。中に二、先づ同の義。

道の因縁に約して以て別つ。他に從つて聲を聞いて道を得る者を、悉く聲聞と字く。是故に摩訶迦葉の流は、復十二縁の法を觀察して道を悟ることを得と雖も、後佛に聞いて悟解することを得るを以ての故に、經の中に說いて聲聞乘と爲すなり。現事の縁に藉つて道を得る者を、齊しく縁覺と號す。若し是義に從はば、乃至七生の須陀洹の人は、最後身に於て佛世に値はず。現事の縁に藉つて道を得る者も、亦縁覺の攝なり。此縁覺の中、細分すれば亦二あり。一には縁覺の縁覺、義は上に解するが如し。二には聲聞の縁覺、是人本來聲聞道を求め、四諦を觀察して道初果を悟る。根鈍なるを以ての故に、現在世に於て涅槃を得ず。天上の人の中七返生を受け、最後身に於て佛世に値はず、現事の縁に藉つて縁覺を得るが故に、說いて縁覺と爲す。是故に名けて聲聞の縁覺と爲す。此を亦は名けて縁覺の聲聞と爲す。故に上の聲聞の人の中に之を辨ず。是中には應に四句分別を作すべし。一には是れ聲聞にして縁覺に非ず。謂ゆる、聲聞の聲聞人是なり。義は上に解するが如し。二には是れ縁覺にして聲聞に非ず。謂ゆる、縁覺の縁覺人是なり。亦上に釋するが如し。三には是れ聲聞にして亦是れ縁覺なり。謂ゆる、七生の須陀洹の人、最後身に於て佛世に値はず、獨り悟れる者是なり。四には縁覺にして亦是れ聲聞なり。謂はく、最後身に佛爲に十二縁の法を說くに値つて、悟解する者是なり。相を辨ずること是の如し。次に、同異を論ず。前の四人の中先に初の二に就いて、以て同異を辨ず。先に同の義を論ず。同に五種有り。一には見理同、同じく生空を見るが故に。『地持』に云はく「聲聞、縁覺は陰と離

【次に等】次に異の義を論ず。

陰とには我不可得にして、陰と離陰とには我人の性無しと見る」と。二には斷障同、同じく四住を斷じて分段を受けず。『勝鬘』に說くが如し。三には修行同、同じく三十七道品の法を修するが故に。『地持』に云はく、「道は聲聞に同じ」と。四には得果同、同じく盡智、無生智の果を得るが故に。『地持』に云はく、「最後身に於て師無く自ら悟つて羅漢果を得るを、說いて緣覺と爲す」と。五には證滅同、同じく有餘無餘の涅槃を證す。此五を細論すれば、少異ならざるに非ず。大況麁論すれば、一切の聲聞緣覺の人等皆悉く同じきなり。問うて曰はく、『緣覺は理を見ること聲聞と同じ。云何が利根なる。』釋して言はく、『理を見ること聲聞に同じと雖も、明淨速疾なり。故に利と稱することを得。又煩惱を斷ずること聲聞に同じと雖も、精進速疾なり。又退轉せざるが故に、亦利と名く。』二には所依異、聲聞は師に依り、緣覺は依らず。三には藉緣異、聲聞は教法を緣と爲るに藉つて悟道を得、緣覺は事相の現緣に藉つて悟解を得。四には所觀異、聲聞は四眞諦の法を觀察し、緣覺は十二因緣の法を觀察す。問うて曰はく、『勝鬘』に宣說すらく、「聲聞緣覺の人は初め聖諦を觀ず」と。彼文に復言はく「聲聞緣覺は當に世尊彼が爲に四依を宣說するを得べし」と。四依と言ふは、謂はく、四聖諦なり。是れ則ち緣覺も亦四諦を觀ず。云何が說いて緣覺偏に十二緣を觀ずと言ふや。』釋して言はく、『緣覺は因緣を觀ずと雖も、亦因緣を別つて四諦觀を作す。是故に經の中に、之れ諦を觀ずと說く。』「是義云何。」『彼煩頂の前には、別して

三世十二因縁の事を觀じて別念觀を作し、十二縁の苦無常等を觀じて總念觀を作す。煩頂已上には、十二縁に就いて共四十四智の觀を爲す。名けて觀諦と爲す。『何者か是れ共四十四智なる。』『十二因縁の因果相續に十一對有り。先づ後對に就いて四諦の觀を爲す。謂はく、老死の苦、老死の集、老死の滅、老死の道なり。初は則ち苦觀、第二は集觀、第三は滅觀、第四は道觀なり。是の如く逆推して、乃至初對に各四觀を爲す。是故に通じて、合して四十四有り。是故に縁覺を諦を觀ずと名くることを得。』問うて曰はく、『經に説かく、「十二因縁は下智觀の故に、聲聞の菩提は中智觀の故に、縁覺の菩提乃至上上は阿耨菩提なり」と。是れ則ち聲聞も亦因縁を觀ず。今云何が聲聞は偏に四眞諦を觀ずと言ふや。』釋して言はく、『聲聞は四諦を觀ずと雖も、四が中の苦集は正しく是れ生死の十二縁の法なり。是故に亦十二縁を觀ずと名く。通相是の如し。中に於て分別すれば、聲聞は正しく四諦の法門を觀じ、縁覺は正しく十二縁の門を觀ず。』此れ第四の異なり。五には向果異、聲聞の人の中には四向四果、縁覺の人の中には一向一果なり。『何が故に是の如くなる。』『聲聞は鈍根にして、一觀相續して究竟すること能はず。數出でて劬息するが故に、多果を判ず。果多きを以ての故に、趣向も亦別なり。縁覺は利根にして、一たび聖觀に入らば相續無間に、乃ち究竟に至る。中息の處無きが故に、多果無し。多果無きが故に、多向を立てず。但相續一觀の中に於て、不滿の處を判じて一向と爲し、滿足の處を說いて一果と爲す。故に『地經』の中に十聖性を說く。聲聞には八を分ち、縁覺には一を立つ。』六に

は通用異、『地持』に說くが如し。聲聞の人は二千國土を通の境界と爲し、緣覺の人は三千國土を通の境界と爲す。又復彼『大智論』に說くが如し。小聲聞の中不作意の者は一千國土を通の境界と爲し、共作意の者は二千國土を通の境界と爲す。大聲聞の中不作意の者は二千國土を通の境界と爲し、共作意の者は三千國土を通の境界と爲す。緣覺の人の中にも大有り、小有り。小緣覺の人の不作意の者は二千國土を通の境界と爲し、共作意の者は三千國土を通の境界と爲す。大緣覺は作意及び不作意を問ふこと莫く、皆三千大千國土を以て通の境界と爲す。此等を名けて通用異と爲すなり。又復彼『成實論』に說くが如し。聲聞須陀の初心を知らんと欲すれば、第十六心に至つて方に始めて知ることを得。緣覺人の初心を知らんと欲すれば、第六心に至つて即便ち之を知る。此も亦是れ共通用の別なり。問うて曰はく、『何が故に初心を知らんと欲すれば、第六心に至つて方に始めて知るや。』『緣覺は作意して、須陀の苦法忍の心を知らんと欲して、心を凝して觀察す。彼忍已に謝して苦法智に入り、尋いで後に之を觀ず。彼智已に謝して上界の苦を緣じ、苦比忍及び苦比智に入るは、緣覺即ち欲界の有漏の法の中に於て之を伺ふ。彼は上の苦を捨して欲界の集を緣ず。忍の時には未だ知らず。集法智に至つて、方に始めて之を知る。是故に第六心を知ると說くなり。』初の二人の同異是の如し。次に、第三を將て前の二に約對して、以て同異を辨ず。彼須陀の中に七返受生し、最後身に於て佛世に値はざる獨覺の者を、前の聲聞の聲聞の人に望むれば、九は同にして二は異なり。九同と言ふは、一には見理同、二には

斷障同、三には修行同、四には得果同、五には證滅同、六には根性同、七には觀法同、八には向果同、九には通用同なり。悉く上に辨ずるが如し。二異と言ふは、一には依止異、最後身に於て師に依らざるが故に。二には藉緣異、言教を藉らずして果を得るが故に。前の緣覺の緣覺の人に望むれば、七は同にして、四は異なり。七同と言ふは、一には見理同、二には斷障同、三には修行同、四には得果同、五には證滅同なり。前に準じて知るべし。六には依止同、最後身に於て師教に依らざるが故に。七には藉緣同、同じく事緣を藉つて道を得るが故に。四異と言ふは、一には根異、此人は鈍根なり。二には觀法異、此は四諦を覺す。三には向果異、此人は四向四果を具足す。四には通用異、此人は通じて劣なり。

次に第四を將て初の二人に望めて、以て同異を辨ず。最後身に於て佛爲に十二緣の法を說くに値うて覺を得る者を、前の聲聞の聲聞の人に望むれば、七は同じく四は異なり。七同と言ふは、一には見理同、二には斷障同、三には修行同、四には得果同、五には證滅同なり。悉く上に辨ずるが如し。六には依止同、師に依つて得度す。七には藉緣同、同じく言教に藉る。四異と言ふは、一には根性異、此人は利根なり。二には覺法異、此は因緣を覺す。三には向果異、此は四果四向の別無し。四には通用異、此人は通じて勝る。前の緣覺の緣覺の人に望むれば、九は同じく、二は異なり。九同と言ふは、一には見理同、二には斷障同、三には修行同、四には得果同、五には證滅同、六には根性同、七には觀法同、八には向果同、一向一果なり。九には通用同なり。悉く上に辨ずるが如し。二異と言ふ

【一七】第三に大に對して分別す。中に二、一に大に對して相を辨ず。

【次に等】二に大に對して共同異を辨ず。先づ同について。

【言ふ所の等】次に異。

は、一には依止異、此人は師に依る。二には藉緣異、此は言教に藉る。小に對すること是の如し。此二門竟る。

次に、大に對して分別す。中に於て二有り。一には大に對して相を辨じ、二には同異を明す。相を辨ずと言ふは、緣覺に二有り。一には種性の緣覺、是人本來緣覺道を習つて緣覺性を成じ、最後身に於て因緣の法を觀じて緣覺の果を證す。二には退轉の緣覺、是人過去に曾て大乘を習ひ、後退して中に住す。亦三を分つことを得。前の二は上の如し。更に一種を加ふ。應化の緣覺なり。謂はく、佛菩薩應現して之を爲すが故に。『天女』に云はく、「因緣の法を以て衆生を化するが故に、我辟支と爲る」と。『法華』にも亦云はく、「衆の小を樂つて大を畏るるを知る。是故に菩薩、聲聞緣覺と作る」と。是の如き等なり。相別是の如し。次に大乘に對して共同異を辨ず。共同と言ふは、彼辟支佛一たび聖道に入らば、永く更に退せず。菩薩と同じ。聲聞の聖を得て退するが如くならず。「何が故に緣覺は一向に不退なる。」「利根なるを以ての故に純ら無漏を用て漏結を斷ずるが故に。」「良に不退なることと菩薩に同じきを以ての故に、『涅槃經』の中に辟支佛を說いて、諸の菩薩と合して熟蘇と爲す。言ふ所の異とは、畧して十種有り。一には因異、彼辟支佛は過去の所修狹劣なり。小善根を以て本と爲す。廣く生を化せざるが故に、名けて狹と爲し、佛智を求めざるを、說いて以て劣と爲す。菩薩の因行の廣大なることを知らず。二には根異、緣覺は鈍根、菩薩は利根なり。緣覺の所解は狹淺にして速ならず。故に名けて鈍と爲す。菩薩の所解

【一八】下別して菩薩を解するに三門の別あり、第一に名義を釋す。
【菩薩】ボーディサットヷ(Bodhisattva)

は深廣にして峻疾なり。故に名けて利と爲す。三には心異、緣覺は苦を畏れて疾く求めて滅を取り、菩薩は畏れずして常に樂んで世に處す。四には所解異、緣覺は但十二緣の法を觀じて生空を悟解し、菩薩は普く一切の諸法を觀じて具に二空を解す。五には起行異、緣覺は但自利の道みを修し、菩薩は俱に利す。又復菩薩は六度を修行し、緣覺は修せず。六には斷障異、緣覺は但能く煩惱障を斷じ、菩薩の人は二障雙べ除く。二障の義は廣くは上に辨ずるの如し。七には得果異、緣覺は正しく緣覺を得、菩薩は能善く大般涅槃有り。小大の涅槃の義は後に釋するが如し。八には起化異、『涅槃』に說くが如し。緣覺は人を化するに但神通のみを現じて、終日默然として宣說する所無し。菩薩は爾らず。能く現じ能く說く。『何が故に緣覺は說法すること能はざる。』『緣覺の出世には九部經無く、宣說すべき無し。又復緣覺は悲方便無し。故に說くこと能はず。悲無きを以ての故に、心を起して說かず。四無量、方便智無きが故に、說くに堪へず。』九には通用異、後の六通の義の中に、廣く說くが如し。十には體義異、緣覺は所有の身智の功德悉く無常、苦、無我、不淨にして、菩薩の眞德は常、樂、我、淨なり。又復緣覺所得の涅槃は唯樂淨のみ有つて我常無し。菩薩の涅槃は常、樂、我、淨なり。此十種は亦聲聞に異なり。然るに今は且く緣覺に就いて之を說く。緣覺是の如し。

(一八)次に、菩薩を解す。中に於て、曲しくは三門の分別有り。一には名義を釋し、二には小に對して分別し、三には當相に分別す。初に名義を釋す。菩薩の名は是れ外國の語なり。

【涅槃】北本第三十六。
【地論】第一。

外國には正しく菩提薩埵と名く。此方に傳はる者は菩の下に提を去り、薩の下に埵を略す。故に菩薩と言ふ。菩提は此に翻ずれば、之を名けて道と爲し、薩埵は此に翻ずれば、名けて衆生と爲す。良に此人内心に道を求むるを以て、備に道行有り。道を以て人を成ずるを、道衆生と名く。問うて曰はく、『聲聞、縁覺の人等は、斯れ皆道を求め並に道行有り。同じく道を以て成ずるに、何の義を以ての故に菩薩と名けずして、偏に獨り此人をのみ菩薩と名くるや。』釋して言はく、『賢聖の名に通局有り。通じては則ち義齊し。故に『涅槃』に云はく、「乃至須陀洹を亦菩薩と名け、亦佛と稱することを得。盡智、無生智の道を求索するが故に菩薩と名け、正しく共道、不共道を覺するが故に、之を說いて佛と爲す」と。但經には賢聖を分別せんと欲するが爲に、是故に偏に大乘の衆生を名けて菩薩と爲すなり。』等しく賢聖を分つ、何が故に偏に此を名けて菩薩と爲すや。』『辨ずるに三義有り。一には願心に就いて、果に望めて解釋す。唯此衆生のみ大菩提を求め、餘は悉く求めず。是故に獨り此を道衆生と名く。故に『地論』に言はく、「一たび上決定して大菩提を願ずるを、偏に菩薩と言ふ」と。此れ願心に據つて、果に望めて釋するなり。二には解心に據つて、理に望めて解釋す。凡夫は有に住し、二乘は無に著す。有無は中に乖いて中道に會せず。唯菩薩のみ有つて、妙に有無を捨して中道に契會す。是故に獨り此を道衆生と名く。三には行に就いて解釋す。佛法の中に入るに三種の門有り。一には教、二には義、三には是れ行なり。教は淺、義は深、行を最勝と爲す。聲聞は鈍根なれば、教に從つて名と爲す。聲

【一九】第二に小乘に對して分別す。先づ漸入について

とは是れ教なり。聲を演して悟解するを、聲聞と名くるなり。緣覺は次に勝る。義に從つて稱を立て、說いて緣覺と爲す。緣とは是れ義なり。緣に於て覺を得るが故に、緣覺と名く。菩薩は最上なれば、行に就いて名を彰す。能く自利利他俱利の道を成就するを以ての故に、「菩薩」と稱す。故に「地持」に云はく、「聲聞、緣覺は但能く自ら度す。菩薩は爾らず、自ら度し他を度す。是を道勝と名く。道勝を以ての故に、道衆生と名く」と。」名義是の如し。

此一門竟る。

次に、小に對して分別す。菩薩に二有り。一には是れ漸入、二には是れ頓悟なり。漸入と言ふは、先に小、後に大なり。問うて曰はく、『此人何の時にか大に入るや。』釋して言はく、『小の中に二種の人有り。一には愚法の人、二には不愚法の人なり。小を執し大に迷ふを愚法の人と名け、小を知つて大を解するを不愚法の人と名く。本來小を習つて小性成就し、最後身に於て佛に値うて小を欲し、佛依つて爲に說くに小果を證得す。得し已つて樂著して大に入ること能はず。未來無餘涅槃の後心想生ずる時、方に能く大に向ふ。劫數長久にして勝計すべからず。不愚法とは、過去世に於て曾て大心を發し、生死に流轉して本念を忘失し、暫く小法を欲し、佛依つて爲に說くに小果を證得す。小果を得し已つて自ら有餘を知り、心を發して大に向ひ、現在世に於て卽ち能く之に入る。』問うて曰はく、『此等は既に大乘に入る。大乘の中に於ては位分何の處ぞ。』『經に定判無し。唯義もて之を推せば、應に善趣に在るべし。大乘の中に於て、初發心の後未だ種性に至らざるを、悉く

く善趣と名く。『二乘は大に入つて此位の中に在り。云何が善趣の前に非ずと知ることを得る。』『涅槃經』の中には、善趣の前を說いて名けて常沒と爲す。常に三塗に沒し、常に三有に沒すればなり。此は常沒に非ざるが故に、前に非ざることを知る。』『云何が善趣の後種性の位の攝に非ずと知ることを得るや。』『地持』に宣說すらく「種性の菩薩は六入殊勝無始法爾なり」と。此人は未だ本の法性を現じて、以て六入を成ずること能はざるが故に、是れ種性已上に非ざることを知る。又「種性は眞實白淨の法を成就す」と說く。此人は未だ成ぜず。又「種性は六度の性成ず」と說く。此人は未だ得ず。又「種性は一切の佛法の種子身に在り」と說く。此人は未だ具せず。又「種性は二障淸淨なり」と說く。此人は但能く煩惱障淨し。種性の菩薩は物の依と爲るに堪へたり。此人は未だ能くせず。又「種性は所聞の法に隨つて自ら開解し、他に由つて悟せず」と說く。此人は他に由る。是故に種性上に非ず、唯善趣に在りと知ることを得。』問うて曰はく、『此等は既に善趣に在り。二種の死の中には、何の生死をか受くる。』釋して言はく、『須陀より阿那含に至るは分段の死を受け、羅漢辟支は變易の死を受く。『勝鬘』に說くが如し。』問うて曰はく、『『勝鬘』に說く「種性上の大力の菩薩は變易の死を受く」と。羅漢、辟支は變易の死を受くること大力と同じ。何が故に種性已上と判ぜざる。』釋して言はく、『此人の受くる所の變易は大力に同じと雖も、多義不同なり。故に種性に非ず。』問うて曰はく、『二乘心を發して大を求むるを、即ち菩薩と名く。此の如きの菩薩は善趣の中に在つて、變易の身を

【涅槃】北本第二十。

受く。『勝鬘經』の中には、何が故に偏に種性已上の大力の菩薩は變易の死を受くと說いて、善趣は變易を受くと說かざるや。』釋して言はく、『大を說くに二種の門有り。一には分相門、大を分つて小に異す。唯種性上の大力の菩薩のみ變易の身を受く。斯より已前は悉く分段と名く。聲聞緣覺は大心を發すと雖も、未だ大行有らず。仍て本名を說いて、菩薩は變易を受くと名けざるなり。二には攝相門、小を攝して大を成ず。彼聲聞緣覺の人の中に於て大心を發す者を、悉く菩薩と名く。若し是義に從はば、善趣位の中にも亦變易を受く。唯種性已上に方に受くるに非ず。『勝鬘』に說く所の大力已上の變易の死を受くるは、分相の言なるのみ。彼聲聞、緣覺の人に對するが故に。』問うて曰はく、『二乘心を發して大に向ふ、旣に善趣に在り。善趣の中に於て初と爲んや、中と爲んや。畢竟に在りと爲んや。』釋して言はく、『此人極凡に同じからず。初發心の者も亦善趣の中上と名くることを得ず。』『云何が知ることを得る。』『「涅槃」に說くが如し、「須陀洹の人は八萬劫に到る。斯陀含の人は六萬劫に到る。阿那含の人は四萬劫に到る。阿羅漢の人は二萬劫に到る。辟支佛の人は十千劫に到る」と。經に言はく、「到とは阿耨三菩提心に到るなり」と。應當に彼種性地の心を名けて、以て所到の菩提心と爲すべきなり。種性地を去ること爾許の劫數なり。明かに知んぬ、是れ善趣の中上に非ざることを。』問うて曰はく、『一切の須陀洹の人より辟支佛に至るは種性地に向ふに、悉く八萬劫より十千劫に至るや。到らざる者有りや。』釋して言はく、『現在不愚法の者は則ち大心を發し、大乘を修學して爾許の劫數に

【頓悟と等】次に頓悟を明す。

種性に至るべし。若し愚法の人の小滅を取る者は、不可稱計微塵劫數に涅槃の中に在り。是を廢し已つて後、心想還つて生ず。心想生じ已つて心を發して大に向ふ。大に向ふの後、阿羅漢の人は更に二萬劫に大乘を修學して方に種性に至り、辟支佛の人は更に十千劫に大乘を修學して方に種性に至る。是義を以ての故に、一切の人悉く八萬劫に非ず。』問うて曰はく、『須陀は天上人中に、七返受生して羅漢果に至る。七返の受生は一劫に過ぎず。何に緣つて大に向ふに爾許の差降かある。』『或は容聖の者に且く階降を作す。又更に解釋す。若し須陀等進んで殘結を斷じて羅漢果に至り、然して後に大に向ふは、受くる所多からず。更に結を斷ぜずして、則ち大に向ふ者に此差降有り。所有の殘結能く法界の一切の行德を障して、一切の諸行悉く成じ難きが故に。』漸入是の如し。頓悟と言ふは、小より入らず、一往大を學す。問うて曰はく、『此人小より入らず。何等の行をか修して能く罪障を治し、大乘に入ることを得る。』『『涅槃』に說くが如し。謂ゆる、身戒心慧を修習す。此を修するを以ての故に、能く罪障を轉じて大乘に趣入す。身戒心慧は釋に八番有り。廣くは上に辨ずるが如し。』問うて曰はく、『此人何等の心をか發すを、大乘に入ると名くるや。』『三種の心を發す。一には厭有爲心、生死無常の大苦を說くを聞いて深心に厭離す。二には求無爲心、涅槃の常樂我淨を說くを聞いて深心に願求す。三には念衆生心、諸の衆生の有苦無樂を緣じて決意して濟拔す。』問うて曰はく、『此人何等の行をか修するを、大乘を學すと名くる。』『三種の行を修す。一には離有爲行、實觀を修習して生死を破離す。二には趣

無爲行、六度を修行して大涅槃に趣く。三には度衆生行、四攝を修行して等しく一切を益す。』問うて曰はく、『漸頓二種の人倶に善趣に在り。何者をか勝と爲す。』釋して言はく、『不定なり。小より入る者は有を厭ふの行勝る。本の習なるを以ての故に。餘の二は如かず。本小を學して廣大の心成就し難きを以ての故に。其頓悟の者は求佛、化生の二種の行勝る。専意に佛を求め、衆生を度するが故に。有を厭ふは如かず。常に有に在つて衆生を教化せんと願ひ、専ら厭はざるが故に。是故に此人は善趣の中に在つて分段の生を受け、未だ變易を受けず。』問うて曰はく、『此等は善趣の中に在つて互に勝劣有り。何の處にか等しかるべき。』謂はく、『種性上なり。諸行齊しく成じて方に能く佛の決定の種を爲すが故に。』小に對すること是の如し。（此二門竟る。）

〔二〇〕次に、大乘に就いて當相に分別す。中に於て初に先づ通相分別し、後に別して之を論ず。通の中、開合增數して之を辨ず。或は總じて一と爲す。謂はく、三乘の中の一の菩薩衆なり。或は分つて二と爲す。二に兩門有り。一には定不定の二門に分別す。『地持』に說くが如し。善趣の菩薩数退し数進むを名けて不定と爲し、種性已上堅固にして勝進するを名けて決定と爲す。二には世出世を相對分別す。解行已前を名けて世間と爲し、初地已上を名けて出世と爲す。又復地前を名けて信地と爲し、初地已上を名けて證地と爲す。又『仁王』の中には、地前を賢と名け、地上を聖と名く。或は分つて三と爲す。謂ゆる、外凡、內凡及び聖なり。善趣位の中を名けて外凡と爲し、種性已上を名けて內凡と爲し、地上を

【二〇】第三に、當相に分別す。中に二、先づ一に通相分別。初めに總じて一となす。【或は等】次に二を分つ。【或は等】次に分つて三とす。中に入門の別あり、一に名義を釋す。

【次に等】二に解心に約して三位を分つ。

【次に等】三に解法に約して三位を分つ。

聖と名く。中に於て、曲しくは八門を以て分別す。一には名義を釋し、第二には解心に約就して分別し、第三には解法に約就して分別し、第四には解緣に約就して分別し、五には行に約して分別し、六には惑に約して分別し、七には業に約して分別し、八には報に約して分別す。先に名義を釋す。外凡と言ふは、善趣の人、外に向つて理を求め、未だ相を息めて內に眞性を緣ずること能はざるが故に、名けて外と爲し、六道分段の凡身を未だ捨せざるが故に、名けて凡と爲す。小乘の中の如き、念處已前は事に依つて觀に趣く、相外道に同じきを、名けて外凡と爲す。此も亦是の如し。外に向つて理を求む、相聲聞に同じく、未だ相を息めて內に眞實を求むること能はず。故に外と名くるなり。內凡と言ふは、種性已上漸く緣を息むるが故に、內に眞性を求む。故に名けて內と爲す。六道の分段は分に斷離すと雖も、未だ盡處有らず。凡夫の身未だ盡きざるが故に、亦凡と名く。故に『涅槃』の中には、說いて凡と爲すなり。言ふ所の聖とは、初地已上妄を息め、眞に契ひ、正に會するを聖と名く。名義是の如し。此三門竟る。次に解心に約して以て三位を別つ。心に三種有り。一には事識心、謂ゆる、六識なり。二には妄識心、謂はく、第七識なり。三には眞識心、謂はく、第八識なり。外凡位の中には、但事識に依つて觀解を修習す。未だ餘の義有らず。內凡位の中には事識漸く滅し、妄識の中の慧を以て漸く現前す。初地已上には妄識の中の慧を以て漸く息滅し、眞識の中の慧を以て漸く現前す。此二門竟る。次に、解法に約して以て三位を別つ。外凡位の中には事識未だ亡ぜず、心外に法を見る。心外の法の中に推求觀察し

【次に等】四に解緣に約して三位を分つ。

【次に等】五に行に約して論ず。

て、苦、無常、空、無我等を見て未だ餘の義を解せず。內凡位の中には外を息め內に歸し、一切の法は唯心より起つて心外に法無しと見る。心外に別法無しと見るを以ての故に、事識漸く滅す。一切の法は唯心より起ると見るが故に、七識の解以て漸く現前す。此解現ずる時、一切の法は但妄想より自心の現ずる所と見る。夢の覩る所皆心より起つて、畢竟じて無法なるが如し。初地已上には妄を息め眞を顯し、一切の法は唯是れ眞實如來藏性の緣起集成にして、眞の外に法無しと見る。所見有りと雖も、而も分別無し。分別無きが故に妄行漸く息し、眞德漸く現ず。解法是の如し。此三門竟る。次に解緣に約して三位を分別す。所解の法は證有り、敎有り。外凡位の中には佛の敎法に於て、他の開道を假つて能く方に悟解す。自ら知ること能はず。是故に判じて四依の弟子と爲る。深證の法に於ては、但能く信順す。內凡位の中には佛の敎法に於て、能く自ら開解し、他の敎を假らず。故に『華嚴』の中に說く「十住等は所聞の法に隨つて卽ち自ら開解し、他に由つて悟らず」と。他人に由らずして能く自ら解するが故に、初依と爲すに堪へたり。深證の法に於ては猶他の敎を須ふ。故に『地持』の中に、初業の菩薩に敎授することを宣說す。『地經論』の中に說かく、「一切信行の菩薩の爲に不思議の法を說く」と。初地已上は、諸の敎法に於て能く自ら宣說す。深證の法に於ては、自ら能く證知して他の敎を假らず。故に『地持』に云はく、「有佛無佛は能く次第に煩惱障及び智障を斷ずるに堪へたり」と。此四門竟る。次に行に約して論ず。行とは、謂はく、六度なり。外凡位の中には、有相の六波羅蜜を修行す。少しく空

【六二】六に惑に約して論ず。

を観ずと雖も、微なるが故に説かず。内凡位の中には、世諦の六波羅蜜を修行す。空を観ずることを成じて、以て直行を起す。乃至空を観じ、要観を修習して、而して直行を起す。故に『地持』に云はく、「直行を名けて無相の方便と爲す」と。初地已上には、眞實の六波羅蜜を修習す。亦眞實六波羅蜜と名く。法の本源を證して、堅執無く、諸著無きを檀波羅蜜と名け、自性清淨にして、一切の罪惡無きを尸波羅蜜と名け、體に違逆無きを羼提波羅蜜と名け、其に實法を顯して、修行する所無きを毘梨耶波羅蜜と名け、寂靜不動なるを禪波羅蜜と名け、妙く動搖無きを般若波羅蜜と名く。故に『地持』の中に宣説すらく、「初地を無相行と爲す。二地已上は無相の有功用、八地已上は無相の無功用なり」と。行相是の如し。五門竟る。次に、地に約して論ず。地とは、謂はく、五地なり。中に於て論ずるに、略しくは四乘有り。其一乘とは、外凡位の中に始めて四諦を觀じて四住惑を斷ず。種性已上に四住地惑の語を斷ず。是れ本地なり。初地已上には、實證に滿く明らかにして無明地を斷ず。第二乘とは、解行に事證の無漏を生起し、種性已上に世諦の無漏を起して無明地を斷ず。初地已上に眞の無漏を起して無明地を斷ず。故に『地經』に四住ニ、伏と斷んや、永と斷んや」と。釋して云はく、「種性の前は伏、見に永なり」と。『地持』に云はく、「初の中に宣説すらく、「種性已上の大力の菩薩は要らず、世間の身を受く」と。更には心を無漏と爲して四と爲す。無漏の四住は種性の前に起る。時を明かに辨ずれば、無明を離るることを」の三乘とは、五住の前に在り、中、終有り。其始めとは、五地に約く斷し、種性已時

【次に等】七に諸業に約して三位を分つ。

盡す。此麁品は種性に盡すを以ての故に、『地持』に宣說すらく、「種性の菩薩は二障淸淨なり」と。又『地持』に說かく、「種性の菩薩は麁煩惱を離る」と。義は此門に當る。其中品とは、種性已上に分に隨つて漸く斷じ、初地の時盡す。此中品とは、初地に盡すを以ての故に、『地持』に宣說すらく、「初地の菩薩は出障解脫し、無罪淸淨なり」と。其細品とは、地上に漸く斷じ、佛に至つて乃ち盡す。此細品は地前に未だ斷ぜざるを以ての故に、『涅槃』に說かく、「初依の菩薩は煩惱性を具す」と。第四の義とは、善趣位の中に事の無漏を修して四住地を斷ず。種性已上には事治漸く息し、七識を修起し無漏を緣照し、無明地を斷ず。初地已上に緣照漸く息して眞德現前す。惑に約すること是の如し。此六門竟る。次に、諸業に約して以て三位を別つ。業に二種有り。漏と無漏となり。分假の因を名けて有漏と爲し、變易の因を名けて無漏と爲す。有漏の業の中に、善有り、惡有り。人天の因は之を名けて善と爲し、三塗の因を說いて以て惡と爲す。惡に五階有り。一には是れ闡提、大邪見を起して善根の業を斷ず。二には謗正法、三には五逆罪、四には犯重禁、五には十惡なり。若し一切の威儀の罪に通ずれば、惡に六階有り。業相是の如し。今は四業に約して以て三位を別つ。中に於て進退に、略して三義有り。一には偏に惡業に對して以て三位を別つ。善趣の中に淨信を修習して闡提の業を離る。種性已上に解行成立して、永く謗法、四重、五逆の三種の惡業を離る。初地已上は行德純善にして十惡業を離る。乃ち一切威儀の惡を離る。第二には通じて善惡に對して分別す。善惡の二業に繫、不繫有り。善趣には

【次に等】九に報に約して論ず。

身戒心慧を修習して、重を轉じて輕ならしめ、三塗定繋の業を斷離す。種性已上には悲願力成じ、往來自在にして人天定繋の業を斷離す。初地已上は德行純淨にして、永く人天不定繋の業を離る。亦可なり。八地已上は之を離る。第三には通じて漏無漏業に對して分別を爲す。善趣には身戒心慧を修習して三塗の業を斷ず。種性已上には無漏道を修して、漸く人天分段の業を斷ず。初地已上には眞德漸く現じて變易の業を斷ず。業に約すること是の如し。此七門竟る。次に、報に約して論ず。報とは、謂はく、分段變易の果なり。分段の果の中に、善有り、惡有り。中に於て、曲しくは兩義の分別有り。一には偏に分段の生死に約して分別す。分段に二有り。一には惡道の分段、謂はく、三惡趣なり。二には善道の分段、謂ゆる、人天なり。惡道の分段に正有り、習有り。惡業を因と爲し、四住を縁と爲して三惡趣に生ずる、之を名けて正と爲し、惡業を因と爲し、悲願を縁と爲して三惡趣に生ずるを、說いて以て習と爲す。惡道の中の正は善趣已前常沒の受くる所なり。善趣に漸く斷じ、種性の時盡す。惡道の中の習は種性已上に漸次に斷除し、初地の時盡す、初地に此を盡して惡道の畏を離る。善道の分段にも亦正習有り。善業を因と爲し、四住を縁と爲して人天の身を受くる、之を名けて正と爲し、善業を因と爲し、悲願を縁と爲して人天の身を受くるを、說いて以て習と爲す。善道の中の正は外凡の受くる所なり。種性に漸く斷じ、初地の時盡す。初地に此を盡すを出三界と名く。又經に宣說すらく、「初地の菩薩は二十五三昧を得て、二十五有を破す」と。亦此門に當る。善道の中の習は地上に漸く斷じ、八地

【或は等】次に四を分つ。

【或は等】次に分つて五とす。

上に盡す。七地已還に斷未だ盡きざるが故に、『大智論』の中に、名けて肉身と爲し、八地已上に之を斷じ盡すが故に、彼を法身と名く。二には通じて分段變易に約して分別す。相に隨つて隨分せば、善趣位の中には分段の身を受く。小より入る者は、善趣位の中に亦變易を受く。小なるが故に說かず。種性已上に分段漸く捨し、變易の報を受く。初地已上に變易漸く捨し、法身の報を受く。三位是の如し。或は分つて四と爲す。『地持』に宣說すらく「種性、發心及び行方便」と、是れ其三種なり。加ふるに善趣を以てすれば、即ち四と爲るなり。又『大品』に依らば、五菩提を說くに菩提の中四は菩薩に在り。亦四を分つことを得。五菩提とは、一には發心の菩提、善趣に在り。論に自ら釋して言はく「無量生死海の中に在つて菩提心を發す。是故に名けて發心の菩提と爲す」と。二には伏心の菩提、種性解行位の中に在つて伏忍を修習す。故に伏心と名く。三には明の菩提、謂はく、初地上乃至六地波若の慧明かなるを、明の菩提と名く。四には出到の菩提、謂はく、七地上に染相を出離して無生忍に到る。故に出到と名く。五には無上の菩提、謂はく、如來地なり。餘を加ふること能はず。故に無上と曰ふ。廣くは上に說くが如し。或は分つて五と爲す。善趣を一と爲す。淨信を解習するが故に。『瓔珞』の中には、名けて十信と爲す。習種を二と爲す。淨解を修習するが故に。『華嚴』に云はく、「所聞の法に隨つて即ち自ら開解し、他に由つて悟らず」と。性種を三と爲す。正行を修起するが故に。『華嚴』の中には、名けて十行と爲す。解行を四と爲す。亦は道種と名く。如觀を修習す。十地を五と爲す。亦は

【或は等】次に分つて六とす。
【或は等】次に分つて七とす。
【或は等】次に分つて八とす。

聖種と名く。實證を成就す。或は分つて六と爲す。前の四は上の如し。初地已上に見修を離分す。故に六種有り。或は分つて七と爲す。『地持』に說くが如し。善趣を一と爲す。種性已上の六住を六と爲す。合して七と爲すなり。六住と言ふは、一には種性住、謂ゆる、習種なり。二には解行住、三には淨心住、謂ゆる初地なり。四には行跡住、二地已上なり。五には決定住、八地已上なり。六には畢竟住、謂はく、第十地なり。義は上に釋するが如し。或は分つて八と爲す。八に兩門有り。一には前を開し後を合して以て八種と說く。一には初發心行、創めて生死に背き、初めて道心を發す。二には有相行、前の發心に依つて有相の六波羅蜜を修起す。此行を修する時、人の修善を見ては則便ち歡喜し、人の造罪を見ては即便ち嫌惡す。三には無相行、空理を學觀し、生死の中に於て厭ふべきを見ず、涅槃の中に於て求むべきを見ず。此行を修する時、人の造罪を見て心悒戚せず、人の修善を見て亦欣務せず。四には方便行、空理を觀ずと雖も、而も常に有に隨つて情に諸行を集む。此四行は善趣位の中に在り。習種を五と爲し、性種を六と爲し、解行を七と爲し、初地已上の聖種を八と爲す。後を開し前を合して以て八種と說く。善趣を一と爲す。種已上の七地を七と爲す。前に通じて八なり。七地と言ふは、『地持』に說くが如し。一には種性地、二には解行地、三には淨心地、四には行跡地なり、五には決定地、謂はく、第八地なり。六には決定行、謂はく、第九地なり。前の決定に依つて上上趣求するを決定行と名く。七には畢竟地、謂はく、第十地なり。此義は前の七地章の中に、具に廣く分別す

【或は等】次に開いて九とす。
【或は等】次に十を分つ。
【涅槃】南本第六
【涅槃】第六。

るが如し。或は開いて九と爲す。次前の八の中、種性を離分して之を以て二と爲す。即ち是れ九なり。或は說いて十と爲す。『涅槃』に說くが如し。一には初發心は善趣の中の始なり。二には熙連河沙の佛の所に菩提心を發し、能く惡世に於て正法を謗らず。熙連河とは、彼洹河の四眷屬の中に於ける一種の河なり。此河の中の一沙一佛、爾許の佛の所に於て菩提心を發し、方に能く惡世に正法を謗らず。三には一洹河沙の佛の所に發心して、惡世の中に於て正法を愛樂し、謗らざること前に同じ。其洹河とは是れ此江河なるが故に、舊翻の經には多く江河と名く。此河の中の一沙一佛、爾許の佛の所に於て發心し、方に能く惡世に大乘を愛樂し、此を聞いて謗らず。第四の人とは、二洹河沙の佛の所に發心し、能く惡世に於て大乘を愛樂し、讀誦受持して未だ解說すること能はず。第五の人とは、三洹河の佛の所に於て發心し、惡世の中に於て大乘を愛樂し、讀誦受持して少しく他の爲に說き、未だ深義を解せず。第六の人とは、四洹の佛の所に菩提心を發し、惡世の中に於て大乘を愛樂し、受持讀誦して他の爲に演說し、十六分の中に一分の義を解す。『何等の義をか解する。』『涅槃』に說くが如し。謂はく、佛性如來の常住を解す。』『云何が十六なる。』『大涅槃』の中に義の淺深に隨つて、如來を分判して十六分と爲す。此第六の人は始に一分を得。此前の六人は同じく善趣に在り。齊しく是れ四依の弟子の所攝なり。第七の人とは、名けて凡夫と爲し、煩惱性を具す。五洹の佛の所に菩提心を發し、惡世の中に於て能く大乘を說き、十六分の中に八分の義を解す。此は種性解行位の中に在り。第八の人とは、

【或は等】次に十一乃至十五を分つについて。

【或は復等】次に四十一を分つ。

【華嚴】第八。

須陀洹及び斯陀含と名く。六洹の佛の所に菩提心を發し、惡世の中に於て能く大乘を說き、十六分の中に十二分の義を得。位は初地乃至七地に在り。第九の人とは、阿那含と名く。七洹の佛の所に菩提心を發し、惡世の中に於て能く大乘を說き、十六分の中に十四分の義を得。此は第八第九地の中に在り。第十の人とは、阿羅漢と名く。八洹の佛の所に諸の善根を種ゑ、惡世の中に於て大乘經典を受持讀誦し、書寫解說し、十六分の義を悉く皆具に解す。位は十地に在り。此等の得義深淺の相は四依章に、具に廣く分別するが如し。或は十一を分つ。地前を一と爲し、通じて信地と名け、地上を十と爲す。或は十二を分つ。一には是れ外凡、二には是れ內凡なり。備には上に判ずるが如し。地上に十を分つ。合して十二と爲す。或は十三を分つ。善趣を一と爲し、種性を二と爲し、解行を三と爲す。十地を十と爲す。合して十三と爲す。或は十四を分つ。善趣を一と爲し、習種を二と爲し、性種を三と爲し、道種を四と爲す。十地を十と爲す。合して十四と爲す。或は十五を分つ。前の十四の中に第十地を分ち、之を以て二と爲す。謂ゆる、法雲、及與等覺なり。十地は終を窮めて現に佛と齊し。故に等覺と名く。未だ是れ證同じからず。或は復開分して四十一と爲す。善趣を一と爲し、十住、十行及び十廻向幷に共十地を四十一と爲す。十住と言ふは、『華嚴』に說くが如し。一には發心住、大菩提に於て意を起して趣求す。二には治地住、善く自利利他の道を修す。三には修行住、護煩惱、護小乘行を修す。四には生貴住、聖法の中より生じて種性尊貴なり。五には方便住、善巧に衆生を度する行を具足す。六に

【華嚴】第十一。

【華嚴】第十五。

は正心住、決定智を得て佛法の中に於て異說を聞くと雖も、正見不動なり。七には不退住、異說を聞くと雖も、正願不動なり。八には童眞住、行業清淨にして世の童子の眞淨無染なるが如し。九には法王子住、佛法王の所行の住處に於て正智を出生し、能く無上菩提を究竟するに堪へたり。十には灌頂住、行修上に順じて佛智現前す。此十は習種なり。『瓔珞』に說くが如し。十行と言ふは、『華嚴』に說くが如し。一には歡喜行、喜心に施を行じ、亦他をして喜ばしむ。二には饒益行、淨戒を修治して自他を饒益す。三には無恚恨行、忍を修して瞋を離る。四には無盡行、懃修精進し善を攝して盡くること無し。五には離癡亂行、常に定慧を修して妄分別を離る。六には善現行、法の實相を觀じて般若現前す。七には無著行、無著心を以て所行を修起す。八には尊重行、種種殊勝の善根を成就す。九には善法行、種種の化他の善法を成就す。十には眞實行、第一の眞實の語を成就して、說の如く能く行じ、行の如く能く說く。此十は性種なり。『瓔珞』に說くが如し。十廻向とは、『華嚴』に說くが如し。一には救護一切衆生離衆生相廻向、菩薩六波羅蜜を修行し衆生を攝取して、一切の煩惱業苦を離れ菩提に安住せしむるを、救衆生と名く。等心に救濟して怨親善惡等の別を開かざるを、離衆生相と名く。此善根を廻向して趣向する所有るを、救衆生離衆生相廻向と名く。二には不壞廻向、佛菩薩及び一切の法に於て不壞の信を得るを、名けて不壞と爲す。此善根を廻向して趣向する所有るを、不壞廻向と名く。三には等一切佛廻向、經に言はく、「菩薩過去未來現在の、一切の諸佛の作す所の廻向を學

するを、等一切廻向と名く」と。四には至一切處廻向、菩薩所修の一切の善根用以て廻向す。廻向力を以て、此善根をして一切處に至らしむ。譬へば實際の至らざる所無きが如きを、至一切處と名く。『何等の處にか至る。』『謂ゆる、佛法僧の處に至つて無盡に供養し、一切行の處に至つて具足して修習し、一切の果の處に至つて具足して成滿し、一切の佛刹の處に至つて具足して莊嚴し、一切衆生の處に至つて具足して攝化し、一切法の處に至つて具足して解知す。是の如き等なり。五には無盡功德藏廻向、已が所修の無盡の功德を廻して趣向する所有るを、無盡功德藏廻向と名く。又復諸佛菩薩の無盡の功德を願求して、能く無盡の功德善根を成ずるを、亦無盡功德藏廻向と名く。六には隨順一切堅固善根廻向、已が所修の施等の善根を廻して趣向する處有り、佛の爲に守護せられて能く一切の堅固の善根、堅固の願等を成ずるを、隨順一切堅固善根廻向と名く。七には等心隨順一切衆生廻向、菩薩一切の善根を增長して、廻して以て等しく一切の衆生を益するを、等心隨順衆生廻向と名く。八には如相廻向、菩薩所成の種種の善根同じく一如を證して、此善根を廻して趣向する所有るを、如相廻向と名く。又復菩薩廻向の心は種種の眞如門に依つて起る。是故に亦如相廻向と名く。九には無縛無著解脫廻向、一切の法に於て心に執著無きを無縛無著と名け、法に於て自在なるを稱して解脫と曰ふ。菩薩一切の善根を輕んぜず、無縛無著解脫の心を以て、彼善法を廻して普賢の行を求め、能く普賢の一切種德を具するを、無縛無著解脫廻向と名く。十には法界無量廻向、菩薩彼無盡の善根を習ひ、之を廻して法界

【或は等】次に開分して四十二とす

【次に等】當相分別の中、別釋。

差別無量の功德を願求するを、名けて法界無量廻向と爲す。此十は道種なり。『瓔珞』に說くが如し。十地と言ふは、一には歡喜地、無上の自利利他を成就す。初め聖處を證して多く歡喜を生ずるが故に、歡喜地と名く。二には離垢地、能く誤心犯戒を起し、煩惱の垢等を離れて清淨戒を具するを、離垢地と名く。三には明地と名く。聞思修に隨つて照法顯現するが故に、明地と名く。四には明炎地、虛妄煩惱の薪を智火能く燒くが故に、炎地と名く。五には難勝地と名く。出世の智方便善巧を得て能く度し難きを度するを、難地と名く。六には現前地、波若內に在つて大智現前するを、現前地と名く。七には遠行地、善く無相行を修して功用究竟し、能く世間の二乘出世間の道を過ぐるを、遠行地と名く。八には不動地、報行純熟して無相無間なるが故に、不動地と曰ふ。九には善慧地、無礙力說して利他の行を成ずるが故に、善慧地と名く。十には法雲地、大法身を得て自在を具足するが故に、法雲地と名く。或は復開分して四十二と爲す。第十地の中別して等覺を分つ。前に通じて合して四十二と爲るなり。別に隨つて細分すれば、亦無量なるべし。通釋是の如し。

次に第三門に、別に隨つて解釋す。先に善趣を解す。『瓔珞經』に依らば、善趣位の中に十種の心を修す。名けて十信と爲す。一には修信心、二には精進心、三には修念心、四には修定心、五には修慧心、六には修成心、七には修捨心、八には修護心、九には廻向心、十には修願心なり。信心と言ふは、入解處に於て淨信前に在り。一心に決定して樂欲成就

するを、修信心と名く。精進と言ふは、菩薩藏を聞いて精勤に無間の善業を修習するを、名けて精進と爲す。念心と言ふは、常に六念を修し、佛法僧戒施及び天を念ず。廣く釋すること上の如し。修定と言ふは、事に於て義に於て心を繫けて安住し、一切の虛僞輕躁憶想の分別を遠離す。修慧と言ふは、謂はく、聞思修なり。菩薩藏を聞いて思量觀察し、一切の法は我無く人無く自性空寂なりと知る。修戒と言ふは、菩薩の淸淨の律儀を受持して身口意淨く、諸過を犯ぜず、犯有れば悔除す。修捨と言ふは、身財を惜まずして得る所は能く捨す。修護と言ふは、己心を防護して煩惱を起さず。又更に分別するに、五種の護有り。『地持』に說くが如し。一には默護、俱生智を得て能く疾く法を受け、衆生を化度す。二には念護、法を念持す。三には智護、堅固智を得て法義を觀察し、默念智を以て退分を離れ勝進分を修す。四には息心護、諸根門を守る。五には他護、他心に隨順して是の如きの行を修す。之を名けて護と爲す。廻向と言ふは、所修の善根を菩提に廻向して諸有を願ぜず、衆生に廻施して專ら己が爲にせず、實際を廻求して名相に著せず。修願と言ふは、時に隨つて種種の淨願を修習す。『華嚴經』淨行品に說くが如し。是の如き等なり。此十種は信位に在つて信行を助成す。故に『瓔珞經』には、名けて十信と爲す。自餘の十住、十行、十廻向、及與十地は、悉く上に釋するが如し。三乘の賢聖之を辨ずること略して爾なり。

大乘義章卷第十七末

【一】巳上百十五段は淨法聚の因法を明し巳り、下其果法を說くに十八段あり、今第一段に涅槃の義を明すに五門の分別あり第一に釋名。
【涅槃】マハーパリニルヷーナ(Mahaparinirvana)
【涅槃】南本第三
【涅槃】南本第五
【涅槃】南本第二十一。
【涅槃】右同前。
【涅槃】北本第二十三。

大乘義章 卷第十八

遠法師撰す

淨法聚の果法の中十八門有り。此卷に二門有り。大般涅槃の義。無上菩提の義。

涅槃の義に五門分別あり。名を釋す一。滅の分齊二。體を定む三。開合して相を辨ず四。雜義の分別五。

(一)第一に名を釋す。涅槃とは是れ其天竺の人の語なり。彼の具なる言に依らば、名けて摩訶般涅槃那と爲す。摩訶を大と名く。大の義に六有り。一には常の義、故に『涅槃』に言はく、「言ふ所の大とは、之を名けて常と爲す。譬へば人有つて壽命無量なるを、大丈夫と名くるが如し」と。二には廣の義、故に『涅槃』に云はく、「言ふ所の大とは、其性廣博なり。猶虛空の至らざる所無きが如し。涅槃も是の如し。故に名けて廣と爲す」と。三には多の義、能く別すれば一に非ず。故に『涅槃』に云はく、「譬へば大藏には諸の珍異多きが如し。涅槃も是の如し、多く種種の妙法の珍寶有り。故に名けて大と爲す」と。四には深の義、淵奧測り難し。故に『涅槃』に云はく、「大とは名けて不可思議と爲す。一切世間の聲聞、緣覺は涅槃の義を測量すること能はず。故に名けて大と爲す」と。五には高の義、位分高く出でて餘人至らず。故に『涅槃』に云はく、「譬へば大山は一切の世人上るを得ること能はざるが如し。故に名けて大と爲す。涅槃も是の如く、凡夫二乘及び

【涅槃】北本第四

【涅槃】第八。

諸の菩薩も窮め到ること能はず。故に名けて大と爲す」と。六には勝の義、世間の中の勝上の人を名けて大人と爲すが如し。涅槃も是の如く、諸法の中に勝る。故に名けて大と爲す。大の義是の如し。『何者か是れ大なる。』『大に三種有り。一には體大、性淨涅槃は體眞性を窮め、義法界に充つ。二には相大、方便涅槃は過盡きざること無く、德備らざること無し。三には用大、應化涅槃は妙用曠博にして化現無盡なり。故に『涅槃』に云はく、「大般涅槃は能く大義を建つ」と。義は猶用のごとし。言ふ所の般とは、此に翻じて入と名く。入の義に三有り。一には實に就いて入を論ず。妄を息めて眞に歸し、因に從つて果に趣く。二には眞應相對す。化を息めて眞に歸するが故に、名けて入と爲す。三には唯應現に就く。有爲の過を捨して無爲に趣入するが故に、名けて入と爲す。涅槃と言ふは、人釋種種なり。有人釋して言はく「涅槃の名は胡に非ず、漢に非ず。直に是れ佛語なり」と。若し佛語を論ずれば、一切皆是なり。豈獨り涅槃のみならんや。故に『涅槃』に云はく、「種種の異論文章呪術は皆是れ佛說なり」と。是れ佛說なりと雖も、方言を離れず。若し方言を離るれば、佛則ち說無し。涅槃の體は名字に非ざるが故に、音聲に非ざるが故に。有人復言はく「涅槃は胡語にして萬德を總ずるに名く。此方には更に一名の能く翻ずる無し。故に胡本を存して、說いて涅槃と爲す」と。涅槃の體は實に萬德を備ふ。涅槃の一名に萬德を盡すに非ず。若し涅槃の名をして萬德を盡さしむれば、是れ則ち萬德を宣說するの時、應に德に隨つて更に名字を立て、常の義を說かんと欲すれば更に常の名を

【涅槃】第一。

立て、以て彼義に名くべからず。是の如きの一切なり。明に知んぬ、涅槃の名は德を盡さざることを。又設ひ涅槃の名萬德を總ずとも、此方には還つて萬德の總名を以て彼涅槃を翻ぜん。何爲れぞ得ずして翻じ回しと言はん。又『涅槃』に云はく『共類音に隨つて普く衆生に告ぐ』と。今日如來將に涅槃せんと欲して、類に隨つて異告す。云何が翻じ回き。若し正しく相翻ずれは、之を名けて滅と爲す。義に隨つて傍翻すれば、名別種種なり。或は不生と言ひ、或は不出と曰ひ、或は無作と謂ひ、或は無起と謂ひ、或は無爲と名け、或は無相と字け、或は不燃と言ひ、或は不識と曰ひ、或は寂滅と稱し、或は安穩と云ひ、或は解脱と名け、或は彼岸と字く。是の如く種種なり。悉く經に說くが如し。『云何が是れ滅にして、總に非ずと知ることを得る。』『今此に且く四義を以て之を驗す。一には昔に准じて以て求む。如來昔、餘の契經の中に於て、毎常に煩惱の滅、無身の亡智の喪を宣說して、以て涅槃と爲す。今日の涅槃の名、昔に異らず。何んが忽に是れ總ならん。二には終に據つて以て驗す。如來滅に垂んとして大音に普く告げたまはく『今日如來將に涅槃せんと欲す』と。時に諸の衆生、佛涅槃すと聞き、咸皆悲惱して佛に詣り、住りたまはんことを請ふ。若し涅槃の名をして萬德を含ましむれば、是れ則ち宜く萬德を唱へて人に示すべし。衆生應に喜ぶべし。何が故に悲惱して佛に詣り住りたまはんことを請ふや。佛涅槃すと聞き、悲惱して住りたまはんことを請ふ。明かに知んぬ、涅槃は是れ滅にして總に非ざることを。三には方言に准定す。外國の人、人の死滅を見て、咸く皆稱して言はく、

【經】涅槃經第三十一。
【彌留陀】ニローダ(Nirodha)
【毘尼】ヸナヤ(Vinaya)

「某甲涅槃す」と。世人の死滅は何の德か總ずべきことあつて、亦涅槃と稱せん。世人の死滅を涅槃と名く。故に明かに知んぬ、涅槃は是れ滅にして總に非ざることを。四には文を取つて證と爲す。『涅槃』の中の如し。「佛純陀を嘆ずらく、善い哉、善い哉、能く如來衆生に示同して、方便して涅槃するを知る」と。世間の衆生何んが曾て彼萬德涅槃有つて、如來示同して此れ如來は世の盡滅に同じと說き、涅槃に同じと名けん。明かに知んぬ、涅槃は是れ滅にして總に非ざることを。又『法華』に說かく、「日月燈佛、法華を說き竟つて、夜の後方に於て涅槃に入りたまふ」と、下の文の重頌に、「佛此夜滅度したまふこと薪盡きて火滅するが如し」と。長行の中に云はく、「涅槃と言ふは、偈に滅度と言ふ」と。明かに知んぬ、涅槃は是れ滅にして總に非ざることを。』問うて曰はく、『若し涅槃をして是れ滅ならしむれば、何が故に經に、「諸結の火滅するを、名けて滅度と爲す」と言ひ、覺觀を離るるが故に、稱して涅槃と曰ふや。』釋して言はく、『外國の滅には多くの名有り。略して三別有り。一には涅槃、翻じて名けて滅と爲す。二には彌留陀、此には亦滅と名く。三には毘尼、此には亦滅と名く。其れ猶外國の菩提末伽を、此には通じて道と名くるが如し。外國には滅を說くに多くの名有るが故に、諸結の火滅するを彌留陀と名け、諸の覺觀を離るるを名けて涅槃と曰ふ。『涅槃經』の中には、彌留陀の滅を翻じて漢言と爲し、涅槃の滅は仍胡語を存す。是れ別なるが似若し。若し具に之を翻ずれば、此方には名少し。彼彌留陀は此に翻じて滅と名け、彼中の涅槃は此には亦滅と名く。是故に外

【二】第二に障滅の分齊を明す。中に四、一に事滅。【二には等】次に能滅。

【經】涅槃經第三十一。

【經】同第十三。

國の涅槃は、此には翻じて滅と名くと言ふことを得。煩惱を滅するが故に、生死を滅するが故に、之を名けて滅と爲す。衆相を離るるが故に、大寂靜の故に、亦名けて滅と爲す。那とは、息と名く。究竟解脫して永く蘇息するが故に。』『何等の事をか息むる。』『煩惱を息むるが故に、生死を息むるが故に。又一切所行の事を息むるが故に。『涅槃』に云はく、「禪定、智慧、解脫を得と雖も、畢竟と名けず。若し能く三十七品所行の事を斷除すれば、方に名けて畢竟涅槃と爲すことを得。是の如きの三十七品所行の事を息むるを以ての故に、亦名けて息と爲す」と。【一】名義是の如し。

【二】次に第二門に、障滅の分齊。分齊に四有り。一には是れ事滅、生死の因を斷じ生死の果を滅するを、名けて涅槃と爲す。二には能滅、諸佛の涅槃は圓に萬德を備ふ。衆德を具すと雖も妙寂にして相を離る、之を稱して滅と爲す。又復性を離るるを、亦說いて滅と爲す。離相と言ふは、下の文に說くが如し。譬へば一切衆生の心識の體是れ有なりと雖も、而も一相も無きが如く、亦醍醐の體是れ有なりと雖も、而も靑黃赤白等の相無きが如し。涅槃も亦爾なり。體實有と雖も而も一相無きが故に、稱して滅と爲す。『何等の相か無き。」「謂はく、他相無く及び自相無し。他相無しとは、經の中に說くが如し、「十相を離るるを名けて涅槃と爲す」と。謂はく、色聲香味觸の相、生住滅の相、男相、女相を離るるなり。經の中に復說かく、「十三相を離るるを名けて涅槃と爲す」と。前の十相を離れ、及び苦、樂、不苦樂の相を離る。又經に復言はく、「大涅槃の中には、日月、星辰、諸宿、

【三には等】次に應滅について。【四には等】次に理滅について。

寒熱風雨、生老病死、二十五有及び諸の憂苦有ること無し」と。此等は皆是れ他相無きなり。自相無しとは、大涅槃の中に色身有りと雖も而も色相無く、覺知有りと雖も而も知相無く、一切有りと雖も一切の相無し。』備に經に說くが如し。離性と言ふは、諸德同體にして緣起相成じ、一法として別に自相を守るもの有ること無し。諸德に就いて常の義を宣說するが如き、諸德を離れて外に別の常性無し。我樂淨等も類して亦同じく爾なり。又常等に就いて法身を宣說すれば、常等を離れて外に別の身性無し。餘も亦是の如し。故に經に說いて言はく、又性別異なるが故に、涅槃を成ず。別異に非ざるに由つて無別性と名く」と。故に涅槃を成ず。問うて曰はく、『涅槃の體は既に是れ有なり。有を說いて當と稱す。何んが勞く之を說く。』『滅門に義を解するが故に障滅に就くなり。』此は是れ第二德寂の滅なり。三には應滅。應滅に二有り。一には現に有因を斷じ生死の果を盡す、之を名けて滅と爲す。二には化を息めて眞に歸す。息を用て滅と稱す。四には理滅、經の中に說くが如し。一には苦滅諦、一切衆生は即ち涅槃の相なり。是の如き等なり。理滅に二有り。一には相虛、妄情所起の一切の諸法は相は有、體は無なり。之を名けて滅と爲す。此れ即ち經の中の空如來藏なり。二には眞空、眞如來藏は相を離れ性を離る、之を名けて滅と爲す。離相と言ふは、馬鳴の說くが如し。謂はく、有相に非ず無相に非ず、非有相に非ず非無相に非ず、有無俱相に非ず、一相に非ず異相に非ず、非一相に非ず非異相に非ず、一異俱相に非ず、自相に非ず他相に非ず、非自相に非ず非他相に非ず、

【三】第三に涅槃の體性を定む。先づ體は色法といふについて。
【涅槃】南本第三十五。
【涅槃】第五。

自他倶相に非ず。是の如く一切の忘心分別悉く相應せず。唯證の境界のみなり。離性と言ふは、如來藏の中に過一切恆沙の佛法を具す。是の諸の佛法は同一體性にして、緣起相成じて不離不斷、不脫不異なり。同體なるを以ての故に、一法として別に自性を守るもの有ること無し。一の性無しと雖も、而も性ならざること無し。一性として有ること無きは法界の如なり。而して性ならざること無きは、法界の別なり。今說くこと是の如し。之を以て滅と爲す。四の滅是の如し。此四相望むるに、亦本末有り。理滅を本と爲す。理中の相空の滅を見るに由つて、前の事滅を成ず。理を悟り情を捨して生死を離るるが故に。理中の眞空の滅を證するに由つて、前の德滅を成ず。彼眞法の如く性相を離るるが故に。德に依つて用を起すが故に應滅有り。此四種の中に相を分つて之を言はば、前の三種を說いて以て涅槃と爲す。相を攝して之を論ずれば、四の滅倶に足る、是れ涅槃を門と爲す。諸の義を統攝して涅槃を成ずるが故に。分齊是の如し。

(三)次に第三門に、其體性を定む。涅槃の體の中德別無量なり。要は唯三有り。一には是れ色法、二には是れ心法、三には非色非心法なり。色法と言ふは、『涅槃』に說くが如し、「無常の色を滅して常色を獲得し、苦の色を離れて樂の色を獲得し、乃至不寂靜の色を滅して眞實寂靜の色を獲得す」と。故に知んぬ、涅槃は色を用て體と爲すことを。又『涅槃』に云はく「不空と言ふは、謂はく、有善色常樂我淨なり」と。又『涅槃』の中に、大涅槃を說いて以て解脫と爲す。「迦葉、佛に白さく、是の如きの解脫は色と爲んや、非色と

爲んや」と。佛、言はく「二乘の解脫は色に非ず、諸佛如來の解脫は是れ色なり」と。斯を以て驗求すれば、明に知る、涅槃の體性は是れ色なることを。又『六卷泥洹』の中に、純陀の佛を嘆ずるが如き、「妙色湛然として常に安穩なり。時節劫數の遷るに隨はず。大聖曠劫に慈悲を行じて金剛不壞の身を獲得したまふ」と。故に知んぬ、是れ色なることを。又『勝鬘』の中に「佛の色身は世に與に等き無し」と嘆じ、又「如來の妙色は無盡なり」と嘆ず。明かに知んぬ、是れ色なることを。『色相は云何。』『佛に三身有り。一には是れ應身、二には是れ報身、三には是れ法身なり。此三身の中に皆悉く色有り。應身の色とは、現化物に隨ひ、或時は天に似、或は復人に似たり。是の如きの一切、共所現に隨つて世の色像に同ず。是故に亦共世間身と名く。報身の色とは、彼應身の一一の相の處に於て、各無量塵數の相好有り。『華嚴經』相海品に說くが如し。衆相を具すと雖も、而も見るべからず。梵天王の頂上に寶珠有るも、而も見叵きが如し。見るべからずと雖も、而も實に之有り。名字不同にして作業各異なり。『華嚴』に說くが如し。法身の色とは、如來藏の中の色性の法門は佛體を顯成す。體は是れ色なりと雖も、而も色相無し。比丘の無作の戒法の如く、亦陰陽五行等の法の如く、色相無しと雖も、而も是れ色性なり。諸佛は證得して法界を成就す。諸根の相好は卽ち法身なるが故に、又此法の中に法界無盡の色を出生するが故に、像色の法と名く。』『有人說いて言はく、「涅槃は色無く、唯一の靈智なり。設し色なりと言はば是れ應にして眞に非ず」と。何が故に色に非ざる。』『色性は

【經】南本涅槃經第三十五。
【經】六卷泥洹經

質礙なり。是が爲に之無し。若し色は質礙にして全く佛に無くんば、心は是れ攀緣慮智の法なり。佛にも亦應に無かるべし。佛に緣の心無くして、無緣覺知の心有り。色も亦應に爾るべし。佛に礙色無くして、無礙自在の色有り。何んが得ずと爲んや。人復難を爲さく、「礙の故に色と名く。佛身は無礙なり。云何が色と名けん」と。此れ應に返質すべし。緣の義を心と爲す。佛智は無緣なり。何んが心と名くることを得ん。人復釋して言はく、「無緣にして照すが故に、心と名くることを得」と。此れ應に之に類すべし。無礙は是れ身、無礙は是れ形なり。何んが色に非ずと爲んや。又無礙なりと雖も、而も光明有り。諸根の相好何んが色に非ざることを得ん。又若し無礙ならば、即ち全く色無し。若し色有りて即ち礙ならしむと言はば、此れ應に並に難ずべし。『如來無緣は即ち應に是れ癡なるべし。即ち應に無知なるべし。佛若し知有れば、即ち是れ攀緣なり。是の如くなるべきや不や。』『此れ既に不可なり。彼も亦同じく然なり。何んが勞しく疑を致さん。又若し說いて色は皆是れ應に都て眞實無かるべしと言はば、此れ應に並に難ずべし。眞の處に情を亡じて覺有り、知有り。應に悉く是れ應なるべし。應化の知は眞知より生ず。眞の中に知を立つ。應化の色は眞色より起る。眞の中に色を存す。竟に何の妨か有らん。又經に宣說すらく、「無常の色を滅して常色を獲得す」と。云何が是れ應ならん。經に復宣說すらく、「眞實の善色は常樂我淨なり」と。云何が是れ應ならん。又經に佛を嘆ずらく、「妙色湛然として常に安穩なり。時節劫數の遷るに隨はず。大聖は曠劫に慈悲を行ずるが故に、金

【次に等】二に涅槃の體は心法といふを明す。

剛不壞の身を得」と。云何が應と名けん。又『地經』の中に、佛の相好を說いて實法身と爲す。云何が是れ應ならん。又若し相好悉く是れ應ならば、經の中に相好の業を宣說するは、應に是れ應修にして是れ實修に非ざるべし。修得是れ實ならば、果寧ぞ眞ならざらんや。人復釋して言はく「無常の色を滅して常色を獲る等は、此れ實には是れ心なり。心法顯現するを、義說して色と爲す。此れ應に反つて難ずべし。若し心顯現するを義說して色と爲し、實には色無しといはば、色法の顯れざるを義說して心と爲すも、實には應に無心なるべし。又若し心現ずるの義を色と說かば、他も亦應に色光照明するを義說して心と爲すと言ふべし。佛實に心無くんば、色光照明するを心と名くることを得ず。心法顯現するを、何んが色と名くることを得ん。斯を以て驗求するに、佛眞に色有り。無しと言ふことを得ず。色の義是の如し。次に、心の義を論ず。經の中に宣說すらく「無常の識を滅して常の識を獲得す。受想行等も亦復是の如し」と。明かに知んぬ、涅槃は心を以て體と爲すことを。又說かく「波若は大涅槃を成ず」と。明かに知んぬ、涅槃は心を用て體と爲すことを。『心相は云何。』『前の八識章の中に、具に辨ずるが如し。今略して之を論ずれば、心に三種有り。一には是れ事識、謂はく、六識心なり。外に向つて緣を取る。二には是れ妄識、謂はく、七識心なり。內眞性に迷うて妄に自心所起の境界を取る。人の昏夢、實事に迷覆して、妄に自心所起の境界を取るが如し。三には是れ眞識、謂はく、八識心なり。如來藏の中の過恒沙の法、緣起集成して心の事を覺知す。此れ眞心覺知の性なる

【次に等】三に涅槃の體は非色非心となすの義を明す
【涅槃】南本第三十五。

を以ての故に。無明と合して便ち妄知を起す。無明を息去すれば、便ち正知と爲す。人の報心と昏睡と合して便ち夢知を起し、昏睡を息去すれば便ち寤知と爲すが如し。始覺の眞心は之を説いて、以て一切種徳と爲す。今此には其涅槃門に就いて説くが故に、此心を説いて以て涅槃と爲す。妄事の兩心は情有つて體無し。未だ窮めざれば有に似たり。之を研すれば即ち盡く。涅槃を成ぜず。故に『楞伽』に云はく、「妄想爾炎の慧を彼滅すれば我涅槃なり」と。又彼經に言はく「七種の識を滅して唯藏識有り」と。唯藏識のみの故に、眞識の心涅槃を成ずることを得。六に非ず七に非ず。異論有り。前の八識章の中に、廣く破するが如し。』問うて曰はく、『眞心は是れ非滅なるを知る。云何が説いて涅槃と爲すことを得る。』釋して言はく、『此心の體は是れ知性にして、而も無分別なり。無分別なるが故に、照して常に寂なり。是れ知性なるが故に、寂にして恒に照す。恒に照すを以ての故に能く癡闇を滅し、常に寂なるを以ての故に能く妄想を滅す。癡妄既に除けば、復緣に隨つて生死を集起せず。起らざるを以ての故に、無爲の體寂なり。故に涅槃と名く。』心法是くの如し。次に、非色非心の義を明す。經の中に説くが如し。菩提は身に得、心に得べからず。涅槃も亦爾なり。故に色心に非ず。『相狀は如何。』『分別するに二有り。一には數滅無爲、一切の色心等の相を斷離するを、非色心と名く。『涅槃』に説くが如し。無常の色を滅するを名けて非色と爲し、無常の受想行識を滅するを名けて非心と曰ふ。是の如きの一切なり。又『涅槃』梵行品に説くが如し。無色大般涅槃に入るを、名けて非色と爲す。

又諸大、陰、界、入等無きも、亦是れ非色なり。意滅、識亡、心亦は寂等を、名けて非心と爲す。又妄想、爾炎の慧を滅する等も、亦是れ非心なり。一には眞法體如、色即ち無色、心即ち無心なるを、非色心と名く。經の中に說くが如し。大般涅槃は實に色有るに非ず。世に隨つて有と說く。又經の中に說かく「菩提涅槃は一切皆空なり」と。又『地經』に「自體は本空、智は自ら空なり。」等と說く。皆是れ眞空にして、色心の義に非ず。』『彼云何が空なる。』『義は上に離相、離性を辨するが如し。離相と言ふは、佛は色有りと雖も、而も色相無し。無作戒は復是れ色なりと雖も、而も形相無きが如し。佛は心有りと雖も、而も心相無し。鏡の物を照すに分別の相無きが如し。離性と言ふは、大涅槃の中には諸德同體にして緣起集成し、一德として別に自性を守るもの有ること無し。故に名けて空と爲す。是れ空なるを以ての故に。色に色性無きを名けて非色と爲し、心に心性無きを稱して非心と曰ふ。』問うて曰はく、『若し此れ皆自性無くんば、即ち是れ自性不成無成なり。生死の法と何の差別か有る。』釋して言はく、『緣起無性空の義は生死涅槃と其理齊等なり。是故に經の中に「生死空乃至涅槃生死無我乃至涅槃」と說く。』言ふ所の異とは、生死の法は一向に無常なり。其性相、倶に無常なるを以ての故に、生滅流轉を相の無常と名け、虛集無性を性の無常と名く。涅槃の體も亦常無常にして一向に非ず。故に『涅槃經』の初德の中に說かく「涅槃は常に非ず、亦無常に非ず」と。『是義云何。』『大涅槃の中には、萬德同體なり。相を分つて之を論ずれば、各自相を守つて無爲不動なり。故に無常

に非ず。相を攝して之を言はば、互に相成ずるを以て、相成じて壞せず。亦無常に非ず。無常に非ざるが故に、經に說いて常と爲す。別を將つて總を分たば、總相立せず。立せざるを以ての故に、空性の常無し。性常無きが故に、名けて無常と爲す。涅槃の體性は其理定んで爾なり。有人宣說すらく「一に苦滅諦は涅槃を顯成す。苦滅すれば唯空なり。此空理を顯して以て涅槃を成ず。是故に涅槃は一向に唯空にして、無色無心なり」と。此れ外道の空なり。應に受持すべからず。若し苦滅すれば唯是れ空なりと說かば、佛自ら對破したまふ。『涅槃經』の四諦章に說くが如し。「苦滅を修する者は一切の諸の外道等に逆ひ、若し空法を說いて苦滅諦と爲さば、諸の外道等悉く皆空を修す。應に眞諦有るべし。又若し無我空寂を宣說して如來藏と爲さば、當に知るべし、此人久く生死に在つて、長く諸苦を受けて解脫を得ず」と。若し有が說いて言はく「如來藏有り。不可見なりと雖も、煩惱を破し已つて定んで必ず之を得、若し是心を發さば、一念の因緣に諸法の中に於て悉く自在を得」と。斯を以て驗求するに、明かに知んぬ、苦滅は唯是れ空にあらざることを。『勝鬘』に說くが如し、「一に苦滅諦は是れ如來藏なり」と。如來藏の中過一切恒沙の佛法を具するを、不空藏と名く。何んが唯空なることを得ん。若し涅槃は一向に空なりと言はば、經に、「涅槃は常樂我淨眞實善有なり」と說く。那ぞ空なりと言ふことを得ん。又經に說いて言はく、「空とは、謂ゆる、一切の生死なり。不空と言ふは、謂はく、大涅槃なり」と。又經に說いて言はく、「空を殺して實を得、無常を殺し已つて常涅槃を得」

と。云何が是れ空ならん。又『涅槃經』第七德の中、七の法相異空と涅槃とは義門各別なり。何んが唯空なることを得ん。又若し空ならば、無想天の喩は無想實有なり。竟に何の況する所ぞ。又經に宣說すらく「大般涅槃は能く大義を建て、種種に示現す」と。若し唯空ならば、何に依つてか義を起さん。又經に宣說すらく「汝應に滅は是れ法性なりと言ふべからず。若し法性ならば實に滅無きなり」と。何んが唯空なることを得ん。有人復言はく「如來藏性は色心を體と爲す。都て空の義無し。復空と言ふは、無相を空と名く。藏性既に爾なり。涅槃を顯成す。涅槃は唯一向に不空有り。說いて空と言ふは、空に萬相無し。涅槃を空せず」と。此も亦是れ其外道の有なり。應に之を受くべからず。若し藏性實に空ならずと說かば、是義然らず。『楞伽』に說くが如し。「法無我に依つて如來藏を說く」と。云何が不空ならん。又復彼『起信論』に說くが如し。有人、如來藏の中に一切の法を具すと說くを聞いて、便ち色心各別に體有りと說く。此執を對治して說く「一切の法は眞如に依つて說く」と。如とは是れ其空の別稱なり。之に依つて一切の佛法を宣說す。云何が不空ならん。又經に說くが如し「如來藏の中に過恒沙の一切の佛法を具して、不離不斷不脫不異なり」と。既に不離と言ふ。別性無きこと明けし。法に別性無くんば、何んが不空と爲んや。又同體の法は必ず互に相成ず。相成の法には則ち總別有り。別を攝して總を成ずれば、諸法は有なるべし。別を將て總を分たば、總相立せず。何んが不空と爲んや。若し別して總を分たば、總の義不空にして五陰生を分つ。生は應に不空なるべし。藏

性是の如し。若し涅槃は實有にして空ならずと言はば、是義然らず。經の中に說くが如し。涅槃は有に非ず、世に隨つて有と說くのみ」と。涅槃は有に非ずとせば、云何が不空ならん。又『地經』に說かく「自體本空なるを名けて性淨と爲す」と。同相の涅槃、云何が不空ならん。又經の中に說かく「菩提涅槃は一切皆空なり」と。云何が實有ならん。又若し涅槃は實有にして空ならずんば、取著の涅槃は正見にして邪に非ず。佛は何が故に破して空無我と說く。又若し涅槃は實に常にして空に非ずんば、常見の者は應に是れ患ならざるべし。若し涅槃は空として妄情無く、心取の相の故に名けて空と爲し。而して涅槃の體は定んで空ならずと言はば、此れ應に經に「涅槃は有に非ず無に非ず」と說くに反すべし。是れ則ち有とは、能く他を有するが故に之を名けて有と爲す。體は應に有に非ざるべし。人即ち救うて言はく「我無と言ふは、已に他相無し。何んが他有ることを得ん」と。此れ應に更に徵すべし。經の中に宣說すらく「如來藏に依るが故に生死有り。大涅槃に依つて能く大義を建て、種種の化を起す」と。即ち是れ他を有す。若し無と言はば、已に他無きが故に他を有することを得ず。是れ則ち有ならば、已に他を有するが故に他無きことを得ず。此は是れ一の難なり。又若し無とは、一向に他無く、而も體は無に非ず。是れ則ち有とは、一向に他を有し、而も體は有に非ず。有は他を有すと雖も、體の有を妨げず。是れ則ち無とは、復他無しと雖も、何んが體の無を妨げん。偏有偏無は佛法の大患なり。理は須く廣く破すべし。體性是の如し。

【四】第四に開合して相を辨ず。先づ共相一なりとするを明す。

【或は等】次に二となすについて。中に三、一に有餘無餘相對して二と說く。先づ釋名。

(四)次に第四門に、開合して相を辨ず。其涅槃とは、乃ち是れ諸佛圓寂の妙果なり。體眞性を窮め、義法界に充つ。體眞性を窮むるが故に妙に名相を絕し、義法界に充つるが故に、德塵算を備ふ。塵算の德以て定論し難し。是を以て經の中に或は云はく「一二乃至衆多なり」と。其一と言ふは、統べて之を攝すれば、一大涅槃の體に衆義を含み、備に萬物を苞む。或は二と爲す。二に三門有り。一には有餘無餘を相對して二と說き、二には性淨方便を相對して二と說き、三には眞應不同を相對して二と說く。初對の中に就いて、先に其名を釋し、後に其相を辨ず。『名字は如何。』『有餘無餘の義は釋するに二有り。一には約對分別す。煩惱の盡くる處を名けて涅槃と爲す。身智に約對して以て二名を立つ。無學の聖人煩惱盡き竟つて後に望むるに、猶餘の身智の在る有り。後に約して前を別つ。前を名けて以て有餘涅槃と爲す。身智盡き竟つて後に望むるに、更に餘の身智在ること無し。後に望めて前を名く。前を說いて以て無餘涅槃と爲す。毘曇法の中に說く所の有餘無餘の涅槃は、正しく此義に當る。是れ第一の約對分別なり。二には涅槃に就いて相望分別す。此門の中に於て、涅槃に二有り。具には生死の因果に約して以て說く。生死の因盡く、是れ一の涅槃なり。生死の果亡ず、是れ一の涅槃なり。彼生死の因盡くるの處に據つて、後に望むるに更に生死の果亡ずる一の涅槃の在る有り。後に約して前を別ち、名けて有餘と爲す。生死の果盡滅し已竟つて後に望むるに、更に餘の涅槃在ること無し。說いて無餘と爲す。生死の因果に約對して既に然なり。分段、變易に約對するも亦爾なり。』名字是の如

【次に等】次に共相を辨ず。中に三、一に大小相對分別

【次に等】二に小に就いて分別す。

し。次に、共相を辨ず。曲しくは三門有り。一には大小に就いて相對分別し、二には小に就いて分別し、三には大に就いて分別す。大小に就いて相對して分つと言ふは、小乘の涅槃を名けて有餘と曰ひ、大乘の涅槃を説いて無餘と爲す。此一義は『勝鬘』に説くが如し。故に彼文に言はく「生死に二種あり。有爲無爲なり」と。涅槃にも亦二種あり。有餘及び無餘なり。分段生死を名けて有爲と曰ひ、變易生死を名けて無爲と曰ふ。此二は前の二生死の中に、具に廣く分別するが如し。有爲の生死盡無の處に得る所の涅槃を、名けて有餘と曰ふ。後に望むるに更に餘の生死有るが故に。又亦更に餘の涅槃有るが故に。無爲の生死盡無の處に得る所の涅槃を、名けて無餘と曰ふ。後に望むるに更に餘の生死無きが故に。又亦其餘の涅槃無きが故に。次に第二門に小に就いて分別す。宗別同じからず。所説各別なり。有人説いて言はく「毘曇法の中には、煩惱盡滅するを有餘涅槃と名く。現の報身の上に緣縛を遠離する、之を説いて以て無餘涅槃と爲す」といふ。是義然らず。己が家の煩惱は通じて內外一切の境界を縛す。無學の聖人初めて果を得る時、是縛已に斷ず。爾時を無餘涅槃と名けず。現在の身智謝滅の後、方に始めて無餘涅槃を宣説す。何に由ってか身、緣縛を離るるを、名けて無餘と曰ふと言はんや。『若し此れ非ならば、何者か是なる。』『毘曇法の中には、涅槃の體一なり。約對不同にして二の名字を得。體一と言ふは、此宗の中に於て、煩惱業思は道力を以ての故に應に起るべし。起らざるは數滅無爲なり。是れ涅槃の體なり。此體は是れ一なり。身智に約對して二の名字を得。身智未だ盡

きざれば、前の涅槃を說いて以て有餘と爲す。後に望むるに更に餘の身智有るが故に。身智盡き竟つて、前の涅槃に向つて轉た無餘と名く。後に望むるに更に餘の身智無きが故に。』問うて曰はく『身智盡無の處を何の義を以ての故に涅槃と名けざる。』『彼宗に身智起り已つて謝往するは、是れ無常の滅なるが故に涅槃に非ず。因を斷ずるに由るが故に、後の果起らざるは是れ非數滅なるが故に涅槃に非ず。若し『成實』に依らば、涅槃の體二なり。生死の因盡くるは是れ一の涅槃、生死の果盡くるは是れ一の涅槃なり。故に二種有り。』問うて曰はく『何が故に毘曇法の中には、生死の果盡くるを涅槃と名けず、『成實』には是を名くる。』釋して言はく、『毘曇』は性相の中に求む。道の爲に親く斷ずるを、名けて數滅と爲す。親く斷ぜざる者は則ち非數滅なり。身口の二業及び生死の果は、道親く斷ずるに非ず。故に非數滅なり。故に涅槃と名けず。成實法の中には、解義務めて寬くす。煩惱を斷ずるに由つて業果起らず。其根本に從つて亦是れ數滅なり。故に涅槃と說く。』『此れ云何が知る。』『成實』に說くが如し。見斷の法とは、示相我慢及び彼所起の諸餘の法なり。修斷の法とは、不示相慢及び彼所起の諸餘の法なり。見斷の煩惱を示相慢と名く。示は猶見のごときなり。我人衆生の定相を執見するを、名けて示相と爲す。我に執し物を陵する、之を稱して慢と爲す。此に依つて起す所の業及び苦果を、名けて所起の諸餘の法と爲すなり。見惑を斷ずるに由つて此をして起らざらしむるを、通じて見斷と名く。修斷の煩惱を不示相慢と名く。修道の所斷は是れ鈍煩惱にして、我人衆生の定相に執せざるを、

【次に等】三に大について論ず。

不示相と名く。闇昧の心中に我を恃み物を陵ぐ、之を目けて慢と爲す。此に依つて起す所の業及び苦果を、名けて所起の諸餘の法と爲すなり。修惑を斷ずるに由つて此をして起らざらしむるを、通じて修斷と名く。業及び苦果は見修斷なるが故に、名けて數滅と爲す。是れ數滅なるが故に、生死の果盡くるを涅槃と名くることを得。』二種是の如し。此二の涅槃は之を得ること不定なり。或は同時に在り、或は前後に在り。若し現因を斷じて其當果をして畢竟不生ならしむれば、名けて無餘と曰ふ。此無餘滅と有餘滅とは、得ること一時に在り。一時の中に兩義を具するを以ての故に、能く之を盡す。智にも亦二種有り。生死の因を盡すを名けて盡智と爲し。生死の果を斷じて後に起らざらしむるを無生智と名く。若し無學の人邊際智を以て報を促して滅を取れば、名けて無餘と曰ふ。此無餘滅と有餘滅とは、得ること前後に在り。報盡くるを方に無餘滅と說くが故に。然るに無餘滅は得ること不定にして或は前、或は後なりと雖も、名を彰すことは唯後なり。『何が故に然るや。』『現報未だ滅せざれば、其未報の不生を障して顯さず。故に名を與へざるなり。』問うて曰はく、『若し現報未だ盡きず無餘滅と宣說することを得ざらしむれば、亦應に無生智とも說くことを得ざるべし。智の中既に無生智を說くことを得。滅の中何んが偏に獨り得ずと爲す。』釋して言はく、『滅の中の身智盡きて後、無餘の義顯なり。故に前に之を隱す。智は則ち爾らず。身智滅して後智を說くことを得ず。故に前に之を說く。』小乘是の如し。次に大に就いて論ず。分別するに四有り。一には生死の因果に約して分別す。分段變易の

【次に等】二に性淨方便について二の涅槃を論ず、中に三、先づ釋名。

二種の因盡くるを、名けて有餘と曰ひ、二種の果亡ずるを、稱して無餘と曰ふ。故に『地持』に云はく、「一切の起因斷じ、諸餘畢竟じて滅するを般涅槃と名く」と。起因斷とは、是れ其有餘なり。諸餘滅とは、諸餘の果亡ず。是れ其無餘なり。二には分段變易に約して分別す。分段の因果盡無の處に滅の究竟せざるを、說いて有餘と爲し、變易の因果盡無の處の滅の、中に窮極するを、說いて無餘と爲す。三には分段の因果及與變易の因盡くるの處を、目けて有餘と曰ひ、變易の果盡くるを、名けて無餘と曰ふ。第四には偏に變易に約して宣說す。變易の因盡くるを名けて有餘と曰ひ、變易の果亡ずるを說いて無餘と爲す。分段の因果盡無の處、之を判じて小と爲す。大の中には論ぜず。有餘無餘の二種の涅槃の相別麁爾なり。次に、性淨方便に就いて二を論ず。中に於て、略して三門を以て分別す。一には其名を釋し、二には其相を辨じ、三には其因を定む。『名字は如何。』『方便涅槃は名別に四有り。一には方便淨、二には方便寂、三には方便壞、四には不同相なり。』此四名を釋するに各兩義有り。一には因に對して果を論じ、二には體に對して用を彰はす。『何が故に然るや。』『方便涅槃に其二種有り。一には因に從つて修得するを方便淨と名け、二には體に從つて用を起すを方便淨と名く。是釋名を爲すに各兩義有り。方便淨とは、其初の義に從はば敎行の功德は本無今有なり。因の方便に從つて障を斷じ淨を得るを、方便淨と名く。若し後の義に從はば、作用善巧を稱して方便と曰ふ。作用の中の淨を方便淨と名く。方便寂とは、若し初の義に就かば、因の方便に從つて障を斷じ寂を得る

を、方便寂と名く。若し後の義に就かば、作用善巧なるが故に方便と曰ふ。作用の中の寂を方便寂と名く。方便壞とは、若し初の義に就かば、因の方便に從つて障を壞し滅を得るを、方便壞と名く。若し後の義に從はば、作用善巧なるを名けて方便と曰ふ。用相の不同を方便壞と名く。不同相とは、其初の義に從はば、方便涅槃染を斷じ淨を得、染淨別體なるを不同相と名く。若し後の義に從はば、作用の差別を不同相と名く。』方便是の如し。

性淨涅槃の名義に三有り。一には性淨と名け、二には性寂と名け、三には同相と名く。此三名を釋するに、義に各二有り。一には因に對して果を顯し、二には用に對して體を彰す。『何が故に是の如くなる。』『性淨涅槃に其二種有り。一には本隱れたる法性今の德を顯成するを、名けて性淨と爲し、二には涅槃の體淨なるを、說いて性淨と爲す。此門の中に於て修生修顯の功德を問ふこと莫く、用に對して體を論ずるを、齊しく性淨と稱す。良に性淨は斯兩義有るを以て、是故に之に依る。』名を釋するに各二有り。性淨と言ふは、初の義に從はば、無始の法性は之を名けて性と爲す。是性本妄想の爲に隱覆せられ、相不淨なるを以ての故に。『勝鬘』に云はく、「自性淨心は不染にして染す」と。後に妄染を息めて彼性始めて淨し。始淨の法性を說いて涅槃と爲す。是故に名けて性淨涅槃と爲す。若し後の義に據らば、涅槃の法體は之を名けて性と爲す。涅槃の體淨なるを、名けて性淨と爲す。性寂と言ふは、其初の義に從はば、無始の法性、緣に從つて飄動すること海の波浪の如くなるを、性不寂と名く。後に妄染を除いて法性始めて寂な

【次に等】次に性淨涅槃の相を辨ず

り。始寂の法性を說いて涅槃と爲す。是故に名けて性寂涅槃と爲す。若し後の義に就かば、涅槃は體寂にして是れ用寂に非ず。故に性寂と云ふ。同相と言ふは、其初の義に從はば、無始の法性の體染淨に通ずるを、稱して同相と曰ひ、諸佛の證會するを、說いて涅槃と爲す。是故に名けて同相涅槃と爲す。又此法性體如一味なるを亦同相と名け、諸佛之を證するを、說いて涅槃と爲す。是故に亦同相涅槃と名く。又本法性の體は一味なりと雖も、緣に隨つて流變して種種の形を受く。一味の藥の其流處に隨つて種種の味有るが如くなるを、說いて不同と爲す。相を息め本に稱ひて差別有ること無きを、名けて同相と曰ふ。此同相を說いて涅槃と爲す。是故に復同相涅槃と名く。若し後の義に據らば、涅槃の體同じきが故に同相と曰ふ。『體云何が同じき。』『地論』に說くが如し、「一切の法如なり。自體空なるを說いて、名けて同と曰ふ」と。』『是義云何。』『恆沙の佛法は皆是れ一心の中の法にあらざること莫し。恆沙の法如は寧ぞ心如に異らん。故に一切の法如を體空と爲すと宣說することを得るなり。』名義是の如し。次に、其相を辨ず。義に隨つて進退分別するに五有り。一には方便修生の德の中に就いて、義に隨つて二を分つ。『二の相は云何』『修生の德の中に二種の作有り。一には緣修對治、眞心を薰發して諸の巧德生ず。其れ猶臘印の泥に印して文生ずるが如し。二には體作、眞の行、緣に隨つて諸德を集成す。金の緣に隨つて莊嚴の具と作るが如し。緣作の義邊を方便淨と名け、體作の義邊を說いて性淨と爲す。』二には修生修顯を相對して二と說く。次前の二種の修生の德を悉く方便と

一〇『涅槃經』第二十

名け、無始の法性今德を顯成するを、說いて性淨と爲す。『地持』に說くが如し。六入殊勝無始法爾なるを、性種性と名く。此性淨を以て若し先より來善を修して得る所を、習種性と名く。此方便を以て此二を分別するに、修生の功德を直菩提と名け。修顯の功德を直涅槃と名く。『涅槃』に說くが如し。故に彼經の中に、『菩提は必ず生因に從つて生ずる所、涅槃は必ず了因に由つて顯はるる所なり』と。生の義有ること無し。相を攝して通じて論ずれば、俱に是れ菩提なり。圓通するを以ての故に。彼『金剛般若』の中に說くが如し。良に二種俱に菩提なるを以ての故に、須く性淨方便の名を以て別つべし。修生の菩提を說いて方便と爲し、修顯の菩提を名けて性淨と爲す。又此二種は俱に涅槃と名く。寂滅なるを以ての故に。良に二種俱に涅槃なるを以ての故に、亦須く性淨方便の名もて別つべし。修生の涅槃を說いて方便と爲し、修顯の涅槃を名けて性淨と爲す。三には修證に約して以て二別を分つ。次前の二種は修に約して以て論ず。方便修生し方便修顯するを、悉く方便と名く。實を證し緣を亡ずるを、說いて性淨と爲す。『是義云何。』『諸佛如來實を證して返つて望めば、從來隱るること無く、亦今顯るること無し。淨は緣を籍るに非ざるが故に性淨と名く。此一對は『地經』に說くが如し。故に彼經の中に、淨[illegible]の[illegible][illegible]諸趣を遠離するを方便淨と名く。自體本空にして自性常寂なり。先に染有つて後時に離るる者に非ざるを、說いて性淨と爲す。又此と彼『涅槃經』の中の緣離辨の放つ所の光明と、其義相似せり。彼に云はく、『是光は即ち是れ涅槃なり』と。涅槃は常

【涅槃經】第二十四。

住にして因緣を論ぜず。云何が如來其因緣を問ふとは、即ち是れ性淨なり。亦因緣有り。無明を滅するに因つて、熾然たる三菩提燈を獲得す。故に是光有り。即ち是れ方便なり。又復彼『涅槃經』に說くが如し。「慈を捨て、慈を得て因緣に從はず」と。其義相似す。世諦の慈を捨て、第一義の慈を得るは、即ち是れ方便なり。第一義の慈の因緣に從はざるは、即ち是れ性淨なり。』問うて曰はく、『方便は緣に從つて修得す。果と名くることを知るべし。性淨涅槃は實を證して緣を亡ず。緣に從つて現ぜず。是れ果なりや以不や。』釋して言はく、『不定なり。亦は果にして果に非ず。』『是義云何。』『體は果に非ずと雖も、佛に至つて乃ち覺す。佛の爲に窮證せらるるが故に、果と曰ふことを得。是れ果なるを以ての故に、『地經』に宣說すらく、「佛の行定を滅するは、即ち是れ性淨涅槃なり」と。佛の所行と爲つて寧ぞ果に非ざることを得んや。又是諸佛微智の體相は、何んが果に非ざることを得ん。得る時緣を離れて、因として酬ふべき無し。果に非ずと言ふことを得。果に非ざるを以ての故に、經の中に佛を嘆じて「無因無果報の法を獲得す」と。又經に亦言はく、「涅槃の體は因に非ず、果に非ず」と。涅槃既に然なり。諸德齊しく爾なり。』四には體用に二を分つ。向前に說く所の一切の涅槃の體を性淨と名け、用を方便と稱す。用相善巧なり。故に方便と名く。德體常寂なり。故に性淨と云ふ。五には理事に二を分つ。向前に說く所の一切の涅槃の行德善巧なるを、悉く方便と名け、理體常寂なるを、說いて性淨と爲す。此れ即ち經の中の一の苦滅諦なり。問うて曰はく、『此

【次に等】三に其因を定む。先づ約對するに、一に緣修の六度及び佛性について、其因を辨ず。先づ緣上分別。

理と前に辨ずる所の第三對の中の性淨と何の別かある。』釋して言はく、『體は一なり。義に隨つて以て分つ。』『向前に辨ずる所の性淨涅槃は、法を攝して人に從はば、佛の所窮とや爲ん、行の所證とや爲ん。證し已んぬれば、方便は隱無く顯無く、因無く果無し。今理と言ふは、常法もて以て論ず。凡佛一如にして染淨易らず、隱に非ず顯に非ず。因に非ず果に非ず。斯異り有るなり。『涅槃』に說く所の五種性の中の非因果性の義は此門に當る。良に實に就いて以て其實を論ずれば、實の外に緣無きを以て、緣は卽ち有にあらず。知んぬ、復何に約してか染と說を淨と說き、因と說き果と說かん。故に染淨に非ず、因に非ず果に非ず。』體相是の如し。次に、其因を定む。先づ約對して以て其因を辨ず。向前の初對は偏に方便修生の功德を說いて、義に二種を分つ。生起の義邊を方便淨と名け、體起の義邊を說いて性淨と爲す。今は卽ち彼緣修の六度及與佛性に就いて、以て其因を辨ず。因を辨ずるに三有り。一には緣正分別、二には生了分別、三には生作分別なり。『緣正は如何。』『彼佛性體作の義邊に望むれば、佛性は正因なり。佛性中に可生の義有るを以て、義に依つて能く彼德を生ずべきこと有り。故に正因と爲す。諸度等の行は之を說いて緣と爲す。涅槃の中の佛性は正因にして、發心を緣と爲して菩提の果を得ると其義相似せり。此作生の德は相を分つて之を論ずれは、卽ち是れ菩提なり。故に彼と同じ。彼緣力動作の義邊に望むれば、諸度は正因にして佛性を緣と爲す。涅槃の中の六度は生因にして、佛性を了因として菩提の果を得ると其義相似せり。生は卽ち是れ正、了は卽ち是

【次に等】次に生了分別。
【涅槃】第三十五
【涅槃】第二十八
【次に等】次に生作分別。
【次に等】二に修生修顯の二種の涅槃について其因を定む。先づ緣正分別。

れ緣なり。』次に生了を論ず。彼佛性體作の義邊に望むれば、佛性は生因なり、諸度を了と爲す。良に佛性は是れ生因なるを以ての故に、『涅槃』に宣說すらく、「佛性は無なりと雖も、兎角に同じからず」と。兎角は無量の方便を以てすと雖も、生ずることを得べからず。佛性は生ずべし。可生を以ての故に、說いて生因と爲す。諸度は了因なり。『涅槃』の中、「復了因有つて六波羅蜜阿耨菩提なり」といふと其義相似せり。若し緣力動作の義邊に望むれば、諸度は生因、佛性は了因なり。涅槃の中に「復生因有り、六波羅蜜、阿耨菩提に復了因有つて、佛性菩提なり」といふと其義相似せり。佛性を境と爲す。佛性を見るに由つて佛德を成就す。故に說いて了と爲す。次に生作を論ず。生因、作因は通じて釋すれば一切なり。相に隨つて且く分たば差異無きに非ず。『異相は如何。』『一義の分別は緣力の起す者を、名けて作因と爲す。作因の名字は『涅槃』に說くが如し。佛性の生德を說いて生因と爲す。佛性の中に可生の義有るを以て、緣に從つて生ずるが故に。二には緣力の生德を名けて生因と爲し、佛性の成德を名けて作因と爲すと宣說することを得。金の器と作るが如し。』初對是の如し。次に第二に修生修顯の二種の涅槃に對して、以て其因を定む。中に於て二有り。一には緣正分別、二には生了分別なり。『緣正は如何。』『隱顯、麁に判ずれば、性淨の果に望めて佛性は正因、諸度を緣と爲す、方便の果に望めて諸度は正因、佛性を緣と爲す。實を以て細に論ずれば、二涅槃に望めて同じく佛性を說いて以て正因と爲す。但佛性の中に二種の義有り。一には法佛性、本有の法體なり。礦中の金の

【次に等】次に生了分別。
【涅槃】第三十五
【涅槃】第三十五
【涅槃】第二十九

如し。二には報佛性、本法體の上に其隨緣可生の義有つて法體無し。礦中の金は莊嚴の具を造作する義有れども、未だ嚴具已に金の中に在ること有らざるが如し。彼法佛性を性淨の果に望めて、說いて正因と爲し、彼報佛性を方便の果に望めて、說いて正因と爲す。諸度は不定なり。』『云何が不定なる。』『六度に三有り。一には緣修の六度、謂はく、六識七識心の中に於て諸の所行を修す。二には眞實有作の六度、前の緣修に藉つて眞心を熏發して、其心中の諸の功德をして起らしむ。三には眞實無作の六度、眞心は本是れ諸の功德の性なり。緣に從つて顯了す。說いて眞實無作の六度と爲す。方便の果に望むれば眞實有作の六波羅蜜は亦是れ正因なり。餘の二を緣と爲す。性淨の果に望むれば、眞實無作の六波羅蜜は是れ其正因なり。餘の二を緣と爲す。』次に生了を論ず。佛性は彼方便の果に望むれば是れ其生因、性淨の果に望むれば是れ其了因なり。佛性の體の上に可生の義有つて方便の果を生ず。故に生因と名く。故に『涅槃』に云はく、佛性は無なりと雖も、兎角に同じからず」と。何を以ての故に。』『兎角は生し叵く、佛性は生ずべし。故に生因と名く。佛性本來其可顯可了の義有つて、終に顯了することを得て性淨の果を成ず。故に彼果に望めて了因と名くることを得。故に『涅槃』に云はく、佛性は有なりと雖も、虛空に同じからず」と。『何を以ての故に。』『虛空は無量方便を以てすと雖も、見ることを得べからず。佛性は見るべし。可見可了の義有るを以ての故に、名けて了因と爲す。』又『涅槃』に云はく、「涅槃の因とは、謂ゆる、佛性なり」と。佛性の性涅槃を生ぜ

【次に等】三に修に約して證について二に望めて其因を定む。

【次に等】四に體用相對の涅槃に望めて因を定む。

【涅槃】第四。

ず。故に了因と名く。六度は不定なり。『云何が不定なる。』『六度に三種有り。前に已に辨ずるが如し。方便の果に望むれば、眞實有作の六波羅蜜は亦是れ生因なり。乳より酪を生じ、酪より生蘇を出し。乃至醍醐展轉して相生ずるが如し。悉く生因と名く。餘の二を了と名く。正しく生ずるに非ざるが故に。性淨の果に望むれば、一切を了と名く。無作の六度終に圓に顯れて性淨の果を成ずべし。可顯可了の故に了因と名く。餘の二は是れ共異相顯了なり。故に了因と名く。』『何が故に生作の二因を說かざる。』『方便の果に望むれば、生有り、作有り。已に上に辨ずるが如し。性淨の果に望むれば、生無く、作無し。故に更に論ぜず。』次に、第三に修に約し證に就いて二種の涅槃に望めて、以て其因を定む。方便の果に望むれば、緣を說き正を說き、生を說き了を說く。備には上に辨ずるが如し。彼淸淨の果は實を證し緣を亡ずるが故に、之に約して緣を說き正を說き、生を說き了を說くべからず。但平等非因果の性なりと知る。佛本緣に在つて未だ證せざるの時を、義說して因と爲す。後證の時を說いて、之を以て果と爲す。後證の時に及んで本緣無しと逹す。無緣を以ての故に、本亦因に非ず、今亦果に非ず。次に第四に體用相對の一種の涅槃に望めて、以て其因を定む。此門の中に於て、涅槃の體淨を名けて性淨と爲し、涅槃の用淨を方便淨と名く。性淨の體に對して、用を說くこと上の如し。方便淨とは、當に知るべし、卽ち是れ應化の涅槃なり。應に二種有り。一には法應、二には報應なり。『涅槃』に說くが如し。大般涅槃は能く大義を建てて種種の化を現ず。是れ其法應なり。

【緣正は等】始め緣正分別。

【生了は等】次に生了分別。

【次に等】五に理事相對の二種涅槃に望めて因を定む。

【次に等】二種涅槃を說く中、第三に眞應二種の涅槃を論ず。

【涅槃】經第四。

大悲の願力種種の化を現ずるを、名けて報應と爲す。今は此二に對して以て其因を定む。分別するに二有り。一には緣正分別、二には生了分別なり。『緣正は如何』『法が家の應は如來藏の中の緣起の法門なり。之を以て正と爲す。『華嚴』の中の、善財童子の求むる所の種種の法門の如し。是を本とし、大悲の願力は之を以て緣と爲す。彼法用を起すべき義有りと雖も、若し非願無くんば畢竟じて生ぜず。譬へば火珠能く火を出すと雖も、要ず須く日を見るべきが如し。亦水珠能く水を出すと雖も、要ず須く月を見るべきが如し。是を以て經に言はく「異法有るが故に異法出生す」と。報が家の應は大悲の願力を以て正因と爲す。三昧の法門は之を以て緣と爲す。若し彼法無くんば、悲願の力獨り生ずること能はず。譬へば人面能く像を生ずと雖も、要ず須く鏡に依るべきが如し。亦音聲能く響を發すと雖も、要ず須く谷に依るべきが如し』。『緣正是の如し』『生了は如何』『親しく起るを生と名け、疏に發るを了と稱す。前の緣正に准じて、義の在ること知るべし』。次に第五に理事相對の二種の涅槃に望めて、以て共因を定む。此門の中に於て、事を方便と爲す。猶前に辨ずるが如し。性淨は是れ理なり。因に非ず果に非ず。因と說くべからず。性淨方便の二種の涅槃、之を辨ずること麁爾なり。次に眞應二種の涅槃を論ず。從緣修生、從緣修顯の二種の涅槃は、體皆是れ眞なり。應化の涅槃は、義に通局有り。通じて之を論ずれば、倶に涅槃より起る所の作用なり。若は凡、若は聖、若は善、若しは惡、若は垢、若は淨、是の如きの一切を、皆悉く名けて、應化の涅槃と爲す。『涅槃』に說く

【次に等】次に三種と說くに兩門あり一に體相用。

【行德の等】二に行德の不同に三種を說くに六門の別あり、第一に三數を制立す。

が如し、大般涅槃は能く大義を建てて種種に示現す」と。是の如き等なり。相を分つて之を論ずれば、化に一切を具す。中に於て分別すれば、是涅槃有り、非涅槃有り。應じて煩惱を斷じ、應じて生死を滅し、無爲に趣入するを應涅槃と名く。自餘の一切は相に隨つて名を別にす。應じて凡者と爲るを名けて應凡と爲し、應じて聖者と爲るを名けて應聖と爲し、應じて聲聞と爲るを應聲聞と名け、應じて緣覺を現ずるを應緣覺と名く。是の如きの一切なり。二相是の如し。

次に、增して三を說く。三に兩門有り。一には體相用に三種を離分し、二には行德の不同に三種を宣說す。體相用とは、性淨涅槃、之を以て體と爲す。法性を本と爲す。一切の種德は法性に依るが故に。方便涅槃を說いて以て相と爲す。垢染を對治して淨相顯るるが故に。故に『地論』の中に、方便涅槃は之を說いて以て淨相解脫と爲す。應化の涅槃は之を名けて用と爲す。故に『涅槃』に云はく「大般涅槃は能く大義を建つ」と。義は猶用のごときなり。廣く辨ずること上の如し。行德の不同に三を宣說すとは、經の中に說くが如し。法身、解脫、摩訶般若は是れ共三なり。中に於て分別するに、略して六門有り。一には三數を制立し、二には名を釋して相を辨じ、三には此三體の同異を明し、四には此三に成涅槃不成涅槃有ることを明し、五には此三を將つて涅槃に約對して總別を辨定し、六には性淨方便涅槃に具不具有ることを明す。制立と言ふは、涅槃の體の中行德無數なり。『何の義を以ての故に、偏に此三を說く。』『釋するに兩義有り。一には障の不同に對す

【次に第】第二に釋名辨相、先づ法身について。

るが故に三種を立て、二には因に別有るに對するが故に三種を立つ。障に對すと言ふは、生死法の中に其三種有り。一には煩惱、是れ生死の緣なり。二には業行、是れ生死の因なり。三には苦報、是れ生死の果なり。此三種の中煩惱を本と爲す。煩惱に依るが故に業作を起し、業に依つて苦を受く。此三に翻對するが故に三事を說く。煩惱に翻對して波若を宣說す。波若の慧明能く煩惱闇惑の法を除くが故に。業因に翻對して解脫を宣說す。業は能く繫縛し、解脫は果無くして能く斷絕するが故に。苦報に翻對して法身を宣說す。法身は淸淨にして苦報を離るるが故に。障に對することと是の如し。因の別に對すとは、因に三種有り。一には福、二には智、三には苦報なり。『地持』に說くが如し。六度の中、前の三は是れ福、波若は是れ智なり。精進と禪とは、亦は福亦は智なり。義は上に解するが如し。『八種の淨報は之を名けて報と爲す。』『何等か八報なる。』『一には壽具足、長壽にして久く住す。二には色具足、顏容端正なり。三には種性具足、上族に生ず。四には自在具足、謂はく、大財、大眷屬等を得。五には信言具足、言を發せば人用ふ。六には大力具足、德力珍勝にして大名稱、大智慧等有つて人の爲に敬せらる。七には人具足、丈夫の法を成ず。八には力具足、身力強健にして堪能する所有り。報相是の如し。因中の智果に至つて滿足するを、名けて般若と爲し、因中の福果に至つて滿足するを、說いて解脫と爲し、因中の報果に至つて滿足するを、名けて法身と爲す。上の開立是の如し。此一門竟る。次に第二門に、名を釋し相を辨ず。法身と言ふは、

【解脫と等】次に解脫を明す。

解に兩義有り。一には本法性を顯して其身を成ずるを以て、名けて法身と爲す。二には一切の諸の功德法を以て身を成ずるが故に、名けて法身と爲す。『相狀は如何。』『開合不定なり。』之を總ずれば唯一なり。謂はく、一法身なり。或は分つて二と爲す。謂はく、眞と應となり。或は說いて三と爲す。法と報と應なり。『地論』に說くが如し。又『七卷金光明』の中の如きも、亦三種を分つ。化身、應身及與眞身なり。法報の兩佛を名けて眞身と爲し、衆生を化せんが爲に佛形を示現するを名けて應身と爲し、種種の六道の形を示現するを說いて化身と爲す。若し『涅槃』に準ずれば、法報の二佛は是れ其眞身、王宮の現生、道樹の現成は是れ其應身、應に依つて化を起し大衆の供を受くるは是れ其化身なり。或は復四を分つ。『楞伽』に說くが如し。一には應化佛、猶前の應身のごとし。二には功德佛、三には智慧佛、此二種は猶前の報身のごとし。四には如如佛、猶前の法身のごとし。或は分つて五と爲す。謂はく、戒、定、慧、解脫、解脫智見なり。或は離して十と爲す。『地經』に說くが如し。謂ゆる、願身乃至智身なり。又『華嚴』の中に十佛を宣說す。亦是れ十なり。『何等をか十と爲す。』『謂はく、無著佛乃至第十如意佛等なり。』廣くは則ち無量なり。法等は後の三佛章の中に、具に廣く分別するが如し。法身是の如し。解脫と言ふは、自體に累無きを名けて解脫と爲す。又羈縛を免るるを、亦解脫と曰ふ。『相狀は云何。』『開合は不定なり。之を總ずれば唯一なり。謂はく、三事の中の一解脫門なり。或は分つて二と爲す。二に兩門有り。一には有爲無爲を相對して二を分つ。一切の斷德を名けて無爲

【般若と等】次に般若について。

と曰ひ、一切の行德を同じく有爲と名く。二には心慧に二を分つ。此門の中に於て兩義に分別す。一には淺深を分別す。四住を斷除して世諦の心淨なるを心解脫と名く。世諦の中に於て、一切の德脫は心を用て體と爲す。故に偏に心を說く。無明を斷絕して眞諦の慧明かなるを慧解脫と名く。眞諦の中に於て、一切の德脫は慧を用て主と爲す。故に偏に慧を說く。經の中に說くが如し。癡を斷じて慧明かに、愛を斷じて心脫す。義此門に當る。二には體用を分別す。五住性結の煩惱を斷離して眞心の體淨なるを心解脫と名く。『涅槃』に說くが如し。故に彼文に言はく「一切の貪恚癡等を永斷するを心解脫と名く」と。又彼文に言はく「是心の本性は貪欲瞋癡等の與に覆はると雖も、而も彼貪等と和合せず。諸佛菩薩、貪等を永斷すれば心解脫と名く」と。故に知んぬ、體に就くことを。事無知を斷じて慧の用自在なるを慧解脫と名く。『涅槃』に說くが如し。彼文の中に於て、慧解脫に就いて五通を開出す。明かに知んぬ、用に就くことを。亦三を分つことを得。有爲脫の中に、有心、有慧は無爲脫に通ず。是れ其三なり。或は分つて五と爲す。『涅槃』に說くが如し。謂はく、色解脫、及與受想行識解脫なり。是れ其五なり。生死繫縛の五陰を遠離して佛の自在無礙の五陰を得るを、名けて解脫と爲す。亦六と說くことを得。此五の上に於て無爲法を加ふ。亦八と說くことを得。謂はく、八解脫なり。義は上に辨ずるが如し。或は說いて百と爲す。『涅槃』の中の百句解脫の如し。廣くは則ち無量なり。『華嚴』に說くが如し。般若と言ふは、此には翻じて慧と名く。智能く鑒照す。故に名けて慧と爲す。『相狀は如何』

【彼經】涅槃經第二十七。

『開合は不定なり。之を總ずれば唯一なり。一如實慧なり。或は分つて二と爲す。謂ふべし、實智及び方便智なりと。義は上に釋するが如し。又一切智及び一切種にも、亦二を分つことを得。一切の如を知るを一切智と名け、一切の事を知るを一切種と名く。亦三と說くことを得。『地持』に說くが如し。謂はく、淸淨智、一切智、無礙智は是れ其三なり。義は上に解するが如し。或は分つて四と爲す。謂はく、我生盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けず。義は後に解するが如し。又四無礙にも亦四を分つことを得。義は上に釋するが如し。亦五と說くことを得。謂はく、五智印なり。一切法は無常、苦、空、無我、寂滅なるを知る。』又『成實』に說く所の五智の如し。亦是れ五なり。『名字是れ何ん。』『一には法住智、世諦の法は因緣し壞せずと知る。二には泥洹智、第一義法の性常寂なるを知る。三には願智、願に隨つて自在にして、知らんと欲すれば即ち知る。四には無諍智、善く人の心に隨つて他と競はず。五には邊際智、己が最後に受くる所の報身に於て修促心に隨ふ。義は上に辨ずるが如し。』亦六と說くことを得。謂はく、諸法の無常苦空無我不淨涅槃寂滅を知る。亦七と說くことを得。謂はく、謂ゆる知法、知義、知足、知時知自、『涅槃經』の中には亦は知我と名く。又能知衆、及び知尊卑にして、前に通じて七なり。此七種は始起、因に在つて、成滿は佛に在り。又『涅槃』の中には、「佛如來は八智を具足す」と說く。謂はく、生死の無常と苦無我の不淨を知り、涅槃法の常樂我淨を知る、是れ其八なり。故に彼經に言はく、「諸佛如來は一切の法の無常と苦無我不淨とを知り、一

【次に等】第三に法身等三種の同異を辨ず。

【涅槃】第五。

【次に等】第四に三事に成不成涅槃のあることを明す中に、先づ大小相對して明す。

切の常樂我淨に非ざるを知る。是義を以ての故に、性を見ること了了たり」と。亦九と說くことを得。前の八種及び第一義を知る。亦十と說くことを得。謂ゆる、十力なり。廣くは則ち無量なり。般若是の如し。此二門竟る。次に、同異を辨ず。通じて之を論ずれば、此三は同體なり。其れ猶虛空の無礙不動なるが如し。同體なるを以ての故に、諸德聚積す。悉く法身と名く。又德の自體を亦法身と名く。諸德累無きを咸く解脫と稱し、諸德明淨なるを齊く般若と名く。同一の眞心覺知の性なるが故に。又慧を主と爲す。餘德は慧の作なり。作を攝して主に從へるを、通じて般若と名く。故に『地經』の中に、甚微智に就いて同相及び不同相の二種の解脫を開出す。同體なるを以ての故に、涅槃を成ずることを得。故に『涅槃』に云はく「又別異に非ざるが故に祕藏を成ず」と。『勝鬘』にも亦云はく「一味等味は義に隨つて別して分たば、此三は異體なり」と。異中の慧數を名けて般若と爲す。法身、解脫は進退不定なり。若し諸佛の相好の色を說いて以て法身と爲さば、自餘の諸德を悉く解脫と名く。若し當に解脫の數を宣說して解脫と爲すべくんば、自餘の諸德は同じく法身と名く。此別を以ての故に、『涅槃』に宣說すらく「法の名義俱に異る有り。其れ猶十號及び三寶等のごとし」と。同異是の如し。此三門竟る。次に、三事に成涅槃、不成涅槃有ることを明す。中に於て初に先づ大小相對して成不成を明し、後に偏に大に就いて成不成を明す。大小相對とは、大乘の三事は涅槃を成ずることを得、小乘は成せず。『何が故に是の如くなる。』『釋するに五義有り。一には有無の分別、小乘の三事は體是れ有法、小乘

【涅槃】南本第二

【伊字】梵語𑖂字なり。

の涅槃は體是れ無法なり。有無別體なるが故に相成ぜず。大乘の三事は體是れ有法、大乘の涅槃も亦是れ有法なり。有の義相扶くるが故に相成ずることを得。二には常無常相對の分別、小乘の三事は體是れ無常、小乘の涅槃は體是れ其常なり。常無常異なるが故に相成ぜず。大乘の三事は體性是れ常、大乘の涅槃は體も亦是れ常なり。常の義相順ずるが故に相成ずることを得。此前の兩門は義有つて文無し。第三には同體異體の分別、小乘の三事は體性各別なり。所以に成ぜず。『體云何が別なる。』『小乘法の中には、慧數を宣說して以て般若と爲し、解脫の數を名けて解脫と爲し、自餘の諸德を名けて法身と爲す。此等の心法は體性各別なり。體別なるを以ての故に性を守つて寂ならず、性寂ならざるが故に涅槃を成ぜず。大乘の三事は同體義分す。其れ猶虛空の無礙不動なるがごとし。同體なるを以ての故に、緣起相成じて一法として別に自性を守るもの有ること無し。別性無きが故に德體寂滅す。體寂なるを以ての故に、涅槃を成ずることを得。故に『涅槃』に云はく、「又別異に非ざるが故に涅槃を成ず」と。』四には並不並相對の分別、小乘の三事は心心數法同時に別體なり。別體並するが故に涅槃を成ぜず。大乘の三事は同時に同體同一眞心なり。義に隨つて以て分つ。同體なるを以ての故に、名けて並と爲さず。並せざるを以ての故に、涅槃を成ずることを得。故に『涅槃』に云はく、「世の伊字の如し。三點若し並すれば則ち成ずることを得ず。並せざれば乃ち成ず」と。涅槃是の如し。五には縱不縱相對の分別、小乘の三事は性同時なりと雖も、用は先後に在り。之を名けて縱と爲す。別體にし

【次に等】二に大乘について成不成を明す。

て縱なれば涅槃を成ぜず。大乘の三事は同體同時にして用に先後無し。所以に縱に非ず。縱に非ざるを以ての故に、涅槃を成ずることを得。故に『涅槃』に云はく「世の伊字の如し。三點若し縱なれば則ち成ずることを得ず。縱に非ずんば乃ち成ず」と。涅槃是の如し。此後の三義は『涅槃』に具に辨ず。大小相對して之を辨ずること略して爾なり。次に大乘に就いて成不成を明す。別して四義有り。一には眞妄の分別、直に大の中に就くに緣修の三事は體妄にして、眞にあらず、涅槃を成ぜず。眞德の三事は乃ち涅槃を成ず。此門の中に於ては、但是眞をして性淨方便應化を問うこと莫く、悉く涅槃を成ぜしむ。二には眞應の分別、直に向前の眞德の中に就いて、眞有り、應有り、應化の三事は相小乘に同じく、無常遷變すれば、涅槃を成ぜず。成ぜざるを以ての故に、終に須く息滅すべし。眞德の三事は方に涅槃を成ず。眞成ずるを以ての故に、終に須く中に入るべし。故に經に說いて言はく「我今是の如きの三法に安住するを、涅槃に入ると名く」と。三には性淨方便を相對して分別す。『涅槃』に說くが如し。方便の三事は悉く是れ菩提、性淨の三事は悉く涅槃と名く。方便の三事は是れ菩提なるが故に、涅槃を成ぜず。故に『涅槃』に云はく「如來の身は亦涅槃に非ず。解脫の法も亦涅槃に非ず。摩訶般若は亦涅槃なり。性淨の三事は是れ涅槃なるが故に、涅槃を成ずることを得」と。四には性淨の三事の中に就いて、別は則ち成ぜず。總收は則ち成ず。世の伊字の如し。三點別分すれば則ち伊を成ぜず、三點合聚すれば乃ち伊を成ずることを得。此も亦是の如し。別分事隔す。所以

【次に等】第五に三事を攝して涅槃に約對して定んで總別を分つ。

【涅槃】第五。

に成ぜず。總攝は圓具す。所以に成ずることを得。成不成の義之を辨じて云ふこと爾なり。此四門竟る。次に、將に三事を攝して涅槃に約對して、定んで總別を分つべし。有人定んで說く、「涅槃は定んで總、三事は定んで別なり」と。此れ則ち然らず。總を論ずれば斯れ別なり。皆總なるを以ての故に、涅槃を門と爲れば、三事を統攝して皆涅槃を成じ、法身を門と爲れば、涅槃解脫般若を統收して皆法身を成ず。良に涅槃は法身を成ずるを以ての故に、『華嚴經』の中に宣說すらく「十身の涅槃中に入るを、名けて法身と爲す」と。又復經の中に宣說すらく「十佛の涅槃中に入るを、涅槃佛と名く。解脫般若は佛の法身を成ず」と。義の在ること知るべし。解脫を門と爲れば、涅槃法身及與般若は皆解脫を成ず。涅槃の中の百句の解脫に諸德皆收まるが如し。般若を門と爲れば、諸德を統攝して皆般若を成ず。故に『地經』の中に佛の微智を說き、中に於て二種の涅槃及び一切の德を開出す。總相是の如し。別に隨つて之を分たば、是れ別ならざること莫し。是れ別なるを以ての故に、『涅槃』に宣說すらく「名義倶に異なり。其れ猶十號及び三寶等のごとし」と。名異と言ふは、涅槃、法身、解脫、般若の四種各別なり。義異と言ふは、涅槃は寂滅の義、法身は是れ體の義、又亦は聚積の義、解脫は無累の義、般若は鑒照の義なり。故に義異と云ふ。又復相を分たば、斷德は是れ涅槃、色報は是れ法身、智慧は是れ般若、餘德は是れ解脫なり。是故に皆別なり。問うて曰はく、『前には總にして、今は何が故に別なる。』『義を辨ずるに二有り。一には分相門、諸德皆別なり。二には攝相門、諸德相成じて一切

【次に等】第六に性淨方便涅槃に具不具あることを明す。

皆總なり。攝相に二有り。一には攝同の義、一切德の上に寂滅の義有り。收めて涅槃と爲す。其體の義有り、積聚の義有り。攝して法身と爲す。絕縛の義有り、無累の義有り、說いて解脫と爲す。照鑑の義有り、覺知の義有り。故に般若と爲す。二には攝別の義、具に三事を攝して以て涅槃を成ず。『是義云何。』『若し法身無くんば、苦報盡きず。何んが涅槃を成ぜん。若し解脫無くんば、業結除かず。何んが涅槃を成ぜん。若し般若無くんば、闇惑滅せず、涅槃を成ぜず。故に一切を具して方に涅槃を成ず。』具に一切を攝して以て法身を成ず。『是義云何。』『若し涅槃無くんば、生死滅せず。何んが法身と名けん。若し解脫無くんば、結縛盡きず、法身を成ぜず。若し般若無くんば、闇惑除かず、法身を成ぜず。要ず一切を具して方に法身を成ず。故に諸の義を攝して以て法身を成ず。』具に諸の義を攝して共に解脫を成ず。『是義云何。』『若し涅槃無くんば、生死滅せず、解脫を成ぜず。若し法身無くんば、苦報盡きず、解脫を成ぜず。若し般若無くんば、闇惑除かず、解脫を成ぜず。故に一切を具して方に解脫を成ず。』又諸の義を攝して、共に般若を成ず。『是義云何。』『若し涅槃無くんば、諸過滅せず。何んが般若を成ぜん。若し法身無くんば、垢障を體と爲す。何んが般若を成ぜん。若し解脫無くんば、纏縛離せず、般若を成ぜず。故に一切を具して方に般若を成ず。』涅槃の三事の總別既に爾なり。自餘の行德の總別も例して爾なり。此五門竟る。次に、性淨方便涅槃に具不具有ることを明す。分別するに三有り。一には性淨涅槃に三事を具することを明し。方便には論ぜず。『何が故に然るや。』『性淨

涅槃は本眞心を顯し、之を以て體と爲す。眞心の體は是れ諸の功德の性なり。故に三事を具す。方便涅槃は體是れ斷結數滅無爲なり。數滅の法なるが故に三事無し。』二には方便涅槃に三事を具することを明し、性淨には辨ぜず。『地經』に說くが如し。『何が故に是の如くなる。』『方便涅槃は治斷して得、生死の煩惱業苦を對治して三事相分る。故に三事を說く。性淨涅槃は體如一味にして三相顯れず。故に三を說かず。三には實に就いて通じて論ず。性淨方便は齊く三事を具す。『是義云何。』『法身に二有り。一には法性身、本隱れ今顯る。『勝鬘』に說くが如し。如來の藏顯るるを法身と爲す。『維摩經』に說かく、「身の實相を觀ず。佛を觀ずるも亦然り」と。是の如き等なり。二には實報身、方便して修生す。其法性身は性淨の所收、實報身は方便の所攝なり。』般若にも亦二あり。一には性照般若、亦は諦智と名く。『是義云何。』『眞識の心は本性淸淨なり。而も妄染の爲に覆蔽せられて不淨に相似す。後に妄染を息めて彼心始めて顯る。始顯の眞心は其本性の如く內法界に明なり。之を說いて以て性照般若と爲す。本性に稱ふに由るが故に諦智と名く。』二には觀照般若、亦は敎智と名く。『是義云何。』『緣觀の對治は眞心を熏發して、眞心の中の智德をして隨つて生ぜしむ。所生の智德は明に諸法を照す。之を說いて以て觀照般若と爲す。即ち此觀照は敎に藉つて修起す。故に敎智と名く。又此智は麤にして言を以て論ずべからず。又能く說を起すを、亦敎智と名く。性照般若は性淨の所收、觀照般若は方便の所攝なり。』解脫にも亦二あり。一には自性解脫、亦は名けて性淨解脫と爲

【次に等】次に四種と說くに兩門あり。一に體について四を分つ。

【經】涅槃經第十三。

【涅槃經】右同前

【義に隨って等】次に義に隨って四を分つに五門あり一に建立を明す。

すことを得。眞脱の心は本性淨なりと雖も、而も妄の爲に隱るるを、說いて繫縛と爲す。後妄を除いて彼の性、果を出づるを性解脫と名く。又脫を得已つて返つて惑染に望むれば、從來有にあらず、今始めて淨なるに非ず。故に亦は名けて自性解脫と爲す。二には方便解脫、亦は名けて淨相解脫と爲すことを得。教行の功德は本無く今有り。方便して修生す。修生の德は染縛を絕離す。之を說いて以て方便解脫と爲す。自性解脫は性淨の所收、方便解脫は方便の所攝なり。故に二涅槃齊く三事を具す。

次に、增して四と說く。四に兩門有り。一には體に就いて四を分ち、二には義に就いて四を辨ず。體に就いて分つとは、方便涅槃に共二種有り。一には是れ斷德、一切の煩惱業苦を除いて無爲寂滅なり。二には是れ行德、法身解脫般若一切種の德を具足す。性淨涅槃にも亦二種有り。一には是れ斷德、法の本寂を證し相として起すべきもの無し。故に經に說いて言はく、「諸佛如來煩惱を生ぜざるを、大涅槃と名く」と。又經に說いて言はく、「十三相に於て相貌を取らざる、是を名けて寂滅眞諦事と爲す」と。此の如きの眞諦を、名けて斷德と爲す。十三相とは、『涅槃經』の聖行の中に說くが如し。謂ゆる、色聲香味觸の相、生住滅の相、男相女相、苦樂、及與不苦樂の相なり。二には是れ行德、眞識の心は緣に從つて始めて顯る。始顯の眞心は之を說いて、以て一切種德と爲す。名けて行德と爲す。體別是の如し。義に隨つての四とは、謂はく、常樂我淨の德なり。此四義を辨ずるに、略して五門有り。一には建立を明し、二には名を釋して相を辨じ、三には同異を明し、四

には通局を論じ、五には大小に具不具有ることを明す。『建立と言ふは、『大涅槃』の中には義別塵算なり。今は何を以ての故に、偏に此四を說くや。』『蓋し乃ち且く一門に據つて言ふのみ。中に於て、略して五義を以て建立す。一には四患を對除し、二には四倒に翻じ、三には四障を治し、四には四過を斷じ、五には四因に酬ゆ。四患を除くとは、生死の法の中に無常苦無我不淨の四種の大患有り。彼を斷除するが故に、涅槃の常樂我淨を宣說す。四倒に翻ずとは、聲聞の生死は是れ無常苦無我不淨なりと觀ずるに由つて、佛も亦爾りと謂ひ、遂に四倒を起す。彼に翻對するが故に、涅槃の常樂我淨を宣說す。四障を治すとは、『寶性論』に說くが如し。障に四種有り。一には緣相、謂はく、無明地なり。佛の眞淨を障す。彼を對除するが故に、佛の眞淨を說く。二には因相、謂はく、無漏業なり。眞我を障す。彼を對除するが故に、佛の眞我を說く。三には生相、謂はく、意生身なり。是意生は苦陰の身なるを以ての故に、佛の眞樂を障す。彼障を除くが故に、佛の眞樂を說く。四には壞相、謂はく、變易死なり。佛の眞常を障す。彼を對除するが故に、佛の眞常を說く。此等は皆變易の因果に就いて共障を說く。理實には通じて障す。相に隨つて且く分つ。四過を斷ずとは、『寶性』に說くが如し。一には闡提の謗法、佛の眞淨を障す。彼を對治するが故に、佛の眞淨を說く。二には外道の著我、佛の眞我を障す。彼を對除するが故に、佛の眞我を說く。三には聲聞の畏苦、佛の眞樂を障す。彼を對除するが故に、佛の眞樂を說く。四には辟支の捨身、諸の衆生を捨して疾く滅を取ることを求め、佛の眞常を障す。

【次に第】第二に釋名辨相、一に常について。

【涅槃】第十。

彼を對除するが故に、佛の眞常を說く。四因に翻ずとは、「寶性論」に說くが如し。因に四種有り。信心、般若、三昧、大悲なり、信心を修するを以て向前の闡提の謗法を對除して佛の眞淨を得、般若を修するを以て向前の外道の著我を破除して佛の眞我を得、三昧甚深の空定を修するを以て聲聞の畏苦の心を破除して佛の眞樂を得、大悲を修するを以て常に衆生に隨ひ向前の辟支の捨心を對治して佛の眞淨を得。因別無量なり。且く斯に據つて分つのみ。「建立是の如し。」此一門竟る。次に第二門に、名を釋し相を辨ず。言ふ所の常とは、體恆に變らざる、之を目けて常と爲す。又復緣に隨つて化用絕せざるも、亦名けて常と爲す。「涅槃」に說くが如し。假使へば烏鵲と同じく共に一樹に栖まば、猶親しき兄弟の如くならん。爾も乃ち永涅槃す。如來一切を視ること猶羅睺羅の如く、常に衆生の尊と爲る。云何が永涅槃せん。是の如き等の義は是れ其用常なり。「相狀は云何。」「常の義に二有り。一には無爲、二には不變なり。「涅槃」に說くが如し。無爲は不生、不變は無滅なり。又復無爲は分段を離るることを明し、不變と言ふは變易を離るることを明す。義に隨つて別して分たば、開合は不定なり。之を總ずれば一の常なり。或は分つて二と爲す。二に三門有り。一には法報を二に分つ。常の體に二有り。一には法、二には報なり。「涅槃」に說くが如し。法常を常と名け、報常を住と稱す。無始の法性今の德を顯成するを、名けて法常と爲し、方便修生の有作の行德眞に依つて壞せざるを、名けて報常と爲す。經の中に說くが如し。諸佛の修する所は、謂ゆる法なり。法常なるを以ての故に、諸佛も亦常なり。即ち其義な

【涅槃】第三。

り。二には始終を二に分つ。謂はく、常と恆となり。不生を常と名け、不滅を恆と目く。又經の中に說かく、「佛は是れ常住無爲不變なり」と。不生を以ての故に名けて無爲と曰ひ、不滅に由るが故に說いて不變と爲す。三には約對に二を分つ。一には分段の生老死等を離るる、之を名けて常と爲し、二には變易の生住滅等を離るる、之を曰つて常と爲す。或は分つて三と爲す。三に三門有り。一には德に就いて三を辨ず。謂ゆる、涅槃の常眞、常命、常財なり。『勝鬘』に說くが如し。無常の身を捨して不思議常住の身を得るを、名けて常身と爲し、無常の命を捨して不思議智慧の命を得るを、名けて常命と爲し、無常の財を捨して不思議功德の財を得るを、名けて常財と爲す。經の中に、此を說いて三堅法と爲す。堅は猶常のごときなり。二には想に隨つて三を分つ。『涅槃』に說くが如し。一には別異の想無し。三歸は同體なるが故に、不離不脫なり。故に名けて常と爲す。變異は無常なり。汝が父母各各別異にして、即ち是れ無常なるが如し。二には無常の想無し。細の生滅を離る。三には變異の想無し。麁の分段を離る。第三には三種の無常に約對して、以て三種を分つ。三の無常とは、一には分段無常なり。六道の報は異なり。彼に翻對するが故に、佛は眞常にして生老死無しと說く。二には念無常、念念に生滅す。彼に翻對するが故に、佛は眞常にして生住滅無しと說く。三には自性不成實無常、有爲は虛集にして性實なること有ること無し。彼に翻對するが故に、佛は眞常にして虛妄有ること無しと說く。亦四を分つことを得。謂はく、生老病死等の過無し。又生住異滅等の過無きも、亦四を分つこと

を得。亦五と說くことを得。謂はく、常は是れ陰なり。廣くは則ち無量なり。』問うて曰はく、『向に涅槃斷德は方便修にして本無今有なりと說く。云何が常と名けん。又經の中に說かく「因に從つて得る法は悉く是れ無常なり」と。涅槃の果は因に從つて得。云何が是れ常ならん。又經の中に說かく「因を以て莊嚴するは悉く是れ無常なり」と。涅槃是の如し。縱ひ無量の道品の諸行に於て莊嚴を得るとも、云何が常と稱せん。又經の中に說かく「可見の法は悉く是れ無常なり」と。涅槃是の如し。緣に從つて見を修す。云何が常と名けん。又經の中に說かく「名の可說有るは悉く是れ無常なり」と。涅槃には名有り。云何が常と名けん。』『今之を對釋す。先に性淨に就いて前の難を釋去し、後に方便に就く。』『性淨は如何。』『涅槃斷德にして本無今有なるを無常と名くとは、佛自ら釋して言はく「大般涅槃は本より之有り。今に適たるに非ざるなり。而して諸の衆生は煩惱を斷じ已つて、然して後に證得す」と。得離は始めて今なり。體は本より有り。故に名けて常と爲す。因に從つて得るを無常と名くと言ふは、佛自ら釋して言はく「涅槃は唯了因に從つて顯す所なり。生因の生に非ず、作因の作に非ず」と。故に常と名くることを得。又復五因に從つて成ずる所にあらざるが故に。名けて常と爲す。五因と言ふは、『涅槃』に說くが如し。一には是れ生因、業の煩惱苦樂等を生ずるが如し。二には是れ和合因、善法の善心と和合するが如し。是の如きの一切なり。『毘曇』には、此を說いて共有因及び相應因と爲す。相扶けて體立するを共有因と名け、相扶けて用有るを相應因と名く。三に

【次に等】二に樂の義を解す。

は住因、大地に因つて諸物の住を得るが如し。是の如きの一切なり。四には增長因、飲食に因つて衆生增長し、父母に因つて子增長することを得、善知識に因つて行增長することを得るが如し。是の如きの一切なり。五には遠因、藥を見るに因つて鬼毒害せず、國王に依憑すれば盜賊侵さざるが如し。是の如きの一切なり。涅槃は是の如きの五因を假らざるが故に、常と名くることを得。莊嚴を假るを爲常と名くと言ふは、佛自ら釋して言はく「涅槃の體は因に非ず果に非ず、去來今に非ず、常住無爲なり」と。諸の衆生莊嚴を假つて、往いて涅槃を見るは大涅槃に非ず。莊嚴を假つて方に始めて成立するが故に、常と名くることを得。修見すべきを無常と名くと言ふは、謂ゆる、衆生は無明、心を覆うて涅槃を見ず。後に闇障を除いて始めて涅槃を見る。見て始めて有るに非ず。人眼を治して始めて日月を見るが如し、始めて有るに非ざるが故に。故に常と名くることを得。名字有るを無常と名くと言ふは、佛自ら釋して言はく「涅槃には名無し。强ひて爲に名を立つ」と。故に常と稱することを得。『涅槃には名無し。何が故に强ひて立つる。』「知を求むるが爲の故に。』性淨是の如し。若し方便を論ずれば、生死無常の法を斷離するが故に、常法性を以て體と爲すが故に、所以に是れ常なり。常の義是の如し。次に、樂の義を解す。涅槃の體寂滅にして永く安んずる、之を稱して樂と爲す。又用自在にして所爲心に稱ふも、亦名けて樂と爲す。樂は義に隨つて別たば、一門に四を說く。『涅槃』に說くが如し。一には斷受樂、二には寂靜樂、亦は寂滅と名く。三には覺知樂、四には不壞樂

【次に等】三に我の義を解す。

亦は常樂と名く。斷受と言ふは、五受斷じ已るを稱して斷受と曰ふ。良に諸苦皆受の中に集るを以て、是故に受を斷じて得るを名けて樂と爲す。『地持』の中の如きは、滅盡定を說いて斷受樂と爲す。今は涅槃を說いて以て斷受と爲す。滅盡は暫滅にして此は永斷なるが故に。問うて曰はく、『經に說かく、「無常の色を滅して常の色を獲得す。受想行識も亦復是の如し。苦の色を滅離して樂の色を獲得す。受想行識も亦復是の如し」と。是れ即ち涅槃に具に受樂有り。云何が斷と名くる。』釋して言はく、『經に斷受樂と說くは、凡夫分別の受、取相の受、顚倒の受を斷離す。證法平等の正受無きに非ず。故に受陰有り、亦受樂有り。餘陰も亦爾なり。寂靜樂とは、煩惱を滅するが故に、業を造らざるが故に、生死を息むるが故に、名けて寂靜と爲す。又一切の所行の事を息むるが故に、亦寂靜と名く。不寂なれば則ち苦なり。靜なるを名けて樂と爲す。諸の過を滅するに由るが故に、復名けて寂滅樂と爲すなり。覺知樂とは、諸法を照達するを名けて覺知と爲す。愚闇は即ち苦なり。覺知を樂と爲す。不壞樂とは、德體牢固にして緣の爲に惱されざるを、稱して不壞と曰ふ。破壞は則ち苦なり。是故に不壞を名けて樂と爲すことを得。不壞なるを以ての故に、亦常樂と名く。此四樂の中相を分つて之を論ずれば、寂滅の一種は是れ涅槃の樂斷受の一種は是れ滅定の樂、覺知の一種は是れ共智慧菩提の樂、不壞は是れ常なり。今は攝相に據つて通說して、以て涅槃の樂と爲すなり。次に我の義を解す。我に二種有り。一には體に就く。自實を我と名く。『涅槃經』の哀嘆の中に說くが如し。是れ眞、是れ實、是

【涅槃經】第二十三。

【次に等】四に淨の義を解る。

れ主、是れ依なり。常に不變なる者をば、是を名けて我と爲す。二には用に就く。自在を我と名く。『涅槃經』の初功德に說くが如し。自在に八有り。一には多少自在、聚集の一身を以て多身と爲す。身數の多少、身の大小は猶微塵の如く、十方無量の世界に充滿す。如來の身は實に微塵に非ず。自在なるを以ての故に、微塵の身を現ず。二には充滿自在、亦は名けて大小自在と爲すことを得。亦一塵の身は三千大千世界に滿つ。佛身は無邊なり。實に大千世界に滿たざるも、自在なるを以ての故に、大千界に滿つ。三には輕擧自在、三千大千に滿ずるの身を以て輕擧して空に飛び、無量界を過ぎて而も障礙無し。如來の身は實に輕重無し。自在なるを以ての故に、能く輕重を爲す。四には自自在、亦は名けて所作自在と爲すことを得。中に於て三有り。一には如來の心安住して動ぜず。無量の身を化して各心有らしむ。二には一事を造して衆生をして各各に異辨せしむ。三には一界に住して能く他土の一切をして悉く見せしむ。此三種を具するを名けて自在と爲す。五には根自在、如來は一根に色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を別ち、觸を覺し、法を知る。六には知法自在、一切の法を得て得想無し。七には說自在、如來一偈の義を演說して無量劫を逕るとも、義猶盡きず。謂はく、戒定等は所說有りと雖も、說想を生ぜず。八には遍滿自在、如來の身は一切處に遍じて猶虛空の如く、見ることを得べからず。斯八種を具する之を名けて我と爲す。次に、淨の義を解す。體に垢染無き之を稱して淨と爲す。又復化に隨ひ緣に處して汚れざるを、亦名けて淨と爲す。淨の義不同にして、一門に四を說く。四に

【次に等】義に隨って四を辨ずる中、第三に共同異を明す。

兩門有り。一には則ち彼『涅槃經』に說くが如し。『四の名は是れ何ん。』『一には是れ果淨、永く二十五有の果を斷ず。二には是れ業淨、亦は因淨と名く。謂はく、凡夫の一切の諸業を離る。此二は斷德なり。三には身淨、生滅を遠離して常住不變なり。四には心淨、諸漏を絕離す。此二は行德なり。一義是の如し。次の門の四とは、『地持』に說くが如し。一には身淨、煩惱習の身捨離して餘無く、最上身を得て生滅自在なるを、名けて身淨と爲す。煩惱習の身捨離して餘無く、最上身を得るは身體淨なり。生滅自在なるは身用淨なり。二には境界淨、種種の現化及び言說する所の一切の境界自在無礙なるを、境界淨と名く。種種の現化は是れ身境界、及び言說する所は是れ口境界なり。又復種種の現化の境とは是れ事境界、及び言說する所の一切境とは是れ法境界なり。中に於て自在なるを境界淨と名く。三には心淨、煩惱悉く離れ善根成就す。煩惱悉く離れて四住永く亡ず。善根の成就は功德備はるなり。功德は心に依り、主に就いて以て彰す。故に心淨と名く。四には智淨、一切の無明穢汚を捨離して、一切の所知無礙自在なり。一切の無明穢汚を捨離し、無明地を離るるは眞諦の智淨なり。一切の所知無礙自在にして、事無知を除くは眞諦の智淨なり。此四種を具する、之を名けて淨と爲す。此二門竟る。次に、同異を明す。實に據れば此四は遍く諸德に通ず。之を名けて同と爲す。諸德の中に於て、不改なるを常と名く。寂に安んずるを樂と稱し、自實を我と名く。又用の自在なるも亦名けて我と爲す。垢を離るるを淨と云ふ。同の義是の如し。言ふ所の異とは、隱顯して之を論ずれば四德各別な

り。之を稱して異と爲す。『涅槃經』の哀嘆章に說くが如し。我は是れ佛の義、常は法身の義、樂は涅槃の義、淨は是れ法の義なり。四が中の初に我は人に就いて分別し、餘の三は法に就く。『何が故に然る。』『佛とは是れ人なり。自在作用は人に在つて相顯なり。故に偏に佛に就いて我の義を宣說す。又佛は障を出でて自在の相顯なり。故に就いて我を說く。又復我とは人の別稱なり。故に佛に就いて說く。法身佛の體は、體に變動無し。常の義を明すこと顯なり。故に法身に就いて常の義を宣說す。又復無始の法性を顯して以て身を成ず。故に常の義を明すこと顯なり。故に說いて常と爲す。涅槃は寂に安んじて永く衆苦を滅す。樂の義を明すこと顯なり。故に就いて樂を說く。淨は是れ法寶なり。法を妙宗と爲す。能く垢染を治す。淨の義を彰すこと顯なり。故に偏に法に就いて淨の義を宣說す。常樂我淨の四義既に然なり。』所對の無常苦無我等の四義も亦爾なり。通じては則ち一切有爲の法は悉く無常苦無我不淨なり。相に隨つて別分すれば四種各異なり。『涅槃經』の哀嘆章に說くが如し。無我と言ふは、生死の凡夫なり。生死の凡夫は六道に馳驅し、往來して身を受けて自在を得ず。無我の相顯なり。故に偏に之に就いて無我を宣說す。無常と言ふは、聲聞、緣覺なり。聲聞、緣覺は久しからずして盡滅す。無常の相顯なり。故に偏に之に就いて無常を宣說す。又復二乘所得の法は不窮不竟にして、終に須く還轉すべし。故に無常と名く。苦は是れ外道なり。外道の邪見多く苦行を修し、未來に苦報を受く。因果倶に苦なり。苦相顯なるが故に、故に偏に之に就いて苦の義を宣說す。不淨と言ふは、謂

【次に等】下第五に通局を論ず。

【涅槃經】第三十四。

ゆる、一切の有爲の法なり。有爲の法は染汚心より起つて能く染惑を生ず。不淨の義顯なり。故に偏に之に就いて不淨を宣說す。若し五陰に約して隱顯之を論ずれば、生死法の中には身は不淨と觀じ、受は是れ苦なりと觀じ、心は無常と觀じ、法は無我と觀ず。此四に翻對して佛果の陰の中にも、亦應に分別すべし。佛身を淨と名け、佛受は是れ樂、佛心は是れ常、佛法を我と稱す。此も亦是れ其一種の別なり。同異是の如し。此三門竟る。次に、通局を論ず。中に於て、因果に約就して以て辨ず。菩薩の十地は之を名けて因と爲し、佛を名けて果と爲す。向の同の義に依らば、常樂我淨は遍く諸德に通す。遍く通ずるを以ての故に、因果齊しく具す。前の異の義に依らば、常樂我淨は法に隨つて各別なり。各別なるを以ての故に、因果等しからず。通有り、局有り。『是義云何。』『淨とは、是れ其法寶の義なり。法の義齊く通じて上下同じく依る。是が爲に淨の義は統べて始終に遍ず。故に涅槃經』に、地上の二種の五種、兩種の六種、一種の七種は佛性の中に悉く皆淨有りと宣說す。常とは、是れ其法身の義なり。法を顯して身を成ずるを、名けて法身と爲す。實に據つて通じて論ずれば、初地以上は皆悉く法を顯して身を成ぜずといふこと莫し。故に皆常と名く。相に隨つて別して分たば、十地以上は佛性を眼見して、法を顯して身を成ず。成の義を明すこと顯なり。故に十地の上に常の義を宣說す。九地の菩薩は未だ眼見せずと雖も、聞見の中に極めて實を照すこと明了なり。無始の法性現在して心を觀ずるは、之を說いて身と爲す。亦は名けて常と爲す。八地已還は聞見不了にして法未だ心に現ぜざれば

【涅槃經】第三十四。

未だ說いて身と爲さず。故に常と名けず。故に『涅槃經』に、九地上の二種の六種、一種の七種は佛性の中に皆悉く常有りと說いて、餘は皆論ぜず。我は是れ佛の義なり。局つて唯佛に在り。佛は障を出でて自在を得るを以ての故に。樂とは、是れ其涅槃の義なり。相を通じて之を論ずれば、菩薩地の中には分に煩惱を斷じ、分に涅槃を得。斯れ皆樂有り。相を分つて之を言はば、菩薩地の中には煩惱を斷ずと雖も、涅槃と名けず。諸佛如來煩惱を生ぜざるを、方に涅槃と名く。『涅槃』に說くが如し。良に涅槃は偏に佛に在るを以ての故に。樂は唯佛のみに在り。故に『涅槃經』に、如來の七種の性の中に我有り樂有るも、因の中には悉く無しと宣說す。問うて曰はく、『若し淨をして始終に通ぜしむれば、常の義は九地已上に在り。我樂の二種は唯佛のみに在りといはば、何が故に經に「十住の菩薩は佛性を見ずして煩惱を斷ずるが故に、所得の涅槃は但樂淨有つて我常無し」と言ふや。』釋して言はく、『樂とは、是れ涅槃の義なり。彼文は通相して、菩薩地に煩惱を斷じ、涅槃を得る義有ることを說く。故に樂有りと說く。常とは、是れ法身の義なり。彼文に宣說すらく「十住の菩薩は佛性を見ずして而も煩惱を斷ず」と。故に法身無し。法身無きが故に、常有りと說かず。』問うて曰はく、『何が故に前には十住に性を見れば常有りと說き、此文には復見ざれば常無しと言ふや。』釋して言はく、『十住前に形るれば性を見るが故に、常有りと說く。後に望むれば見ざるが故に、常無しと說く。此の如く隱顯あり、具に責むべからず。』問うて曰はく、『彼五六七種の佛性の中に於て、常樂我淨の隱顯は爾るべし。餘

【經】十五。涅槃經第三十五。

【次に等】第五に大小について其具不具を明す。

の義は云何。」釋して言はく、『彼七種の性の中に於て、常樂我淨は已に上に辨ずるが如し。「眞實及び善にも亦通局有り。相を分つて之を論ずれば、眞實の二種は是れ實諦の義なり。實諦は理通ず。故に彼五六七種の性の中に一切皆有り。善とは、是れ其聖道の義なり。五地已還は慧觀未だ明かならず、相を破すること極まらず、慢を治すること未だ盡きず、善不善と名く。六地已去に彼若し增上して空を觀ずること畢竟し、慢を治すること窮盡す。故に唯善と名く。是の如きの隱顯の義有るを以ての故に、如來の佛性に七種を宣說す。常と樂と我と淨と眞と實と及び善となり。後身に六を說く。常と淨と眞と實と善と及び少見となり。九地に六を說く。常と淨と眞と實と善と及び可見となり。八地より六に至つて五種を宣說す。眞と實と淨と善と及與可見となり。五地より初に至つて五種を宣說す。眞と實と可見と淨と善と不善となり。此門の中に於て可見と言ふは、眞を簡んで妄に異にす。妄情所計の我樂生等は倒情より出づ。之を窮むれば則ち盡く。所以に見難し。佛性は眞に有り。之を研すれば則ち明かなり。所以に見るべし。又彼空を覆ふの有を簡ばんと欲するが故に、可見と名く。故に經に說いて言はく「佛性は有なりと雖も、虛空に同じからず」と。虛空は無量の方便を以てすと雖も、見ることを得べからず。佛性は見るべし。是中正しく爲に常樂等の通局の義を明す。餘乘之を論ず。通局是の如し。此四門竟る。次に、大小に就いて具不具を明す。大乘の涅槃には備に四義を具す。已に上に辨ずるが如し、小乘の涅槃には四義不定なり。小に據つて小を說かば、小乘の涅槃には常樂淨有るも、唯我有ること

【涅槃第】二十三

【涅槃經】右同前

【涅槃經】第二十五。

と無し。『何が故に是の如くなる。』『涅槃は無爲の四相遷さず。故に說いて常と爲す。又復所斷永滅して起らず。故に亦常と名く。寂滅永安なるが故に次に樂と名け、垢染を絕離するが故に淨と稱することを得。小乘の涅槃は空を以て體と爲し。未だ有性を證せざるが故に我と名けず。彼涅槃の中には、身智倶に亡じて用自在ならず。故に我と名けず。』問うて曰はく、『涅槃』の初德の中に說かく「聲聞の人は、佛の涅槃は但常淨のみ有つて我樂無しと說き、煩惱習と名く。彼聲聞の人自ら涅槃に常樂を具すと見る」と。何が故に佛の涅槃を說く。』釋して曰はく、『聲聞は自ら涅槃に寂滅の樂有りと見る。佛に類するに亦然り。斯に據つて以て論ずれば、如來の涅槃に樂無しと言はず。但彼自ら涅槃の中に身智永亡して覺智の樂無しと見て、佛も亦無しと謂へり。故に樂無しと說く。』小に據つて小を說くこと、其義是の如し。大に據つて小を說かば、義は則ち不定なり。或時は全に奪ふ。四義悉く無し。故に『涅槃經』の初德の中に言はく、「聲聞の所得は無常無樂無我無淨なり。是故に大涅槃と名くることを得ず。諸佛の涅槃は常樂我淨なるが故に、大と名くることを得」と。此門の中に於て、聲聞の所得は少なるが故に無と稱す。河水の少きは之を無水と名くるが如し。又眞に非ざるが故に、亦無と名くることを得。虛物を名けて非物と爲すことを得るが如し。如來は或は復別に隨つて之を奪ひ、二乘所得の涅槃は但樂淨有つて我常無しと宣說す。『涅槃經』の第七德に說くが如し。聲聞緣覺は無漏の八聖道を得るを以ての故に、故に樂淨有り。又惑因を滅するが故に淨有りと說き、分段の苦を離るるが故

【次に等】次に五とするについて。

に樂有りと言ふ。彼小涅槃は體眞實ならず、用自在ならず。故に我と名けず。所滅の身智は當に復更に生ずべし。故に常と名けず。問うて曰はく、『身智は之を滅し已竟らば、何に緣つてか復生ずる。』釋して言はく、『彼生は卽ち變易の果なり。本修する所の無明の業因に由つて、無明を緣と爲して以て更に生ずべし。無明の緣とは、涅槃に入る時妄識の心在り。妄の七識心は是れ無明地なり。此妄心は斷絕せざるを以ての故に、之に依つて報起る。睡心に依つて夢中の身生ずるが如し。』問うて曰はく、『聲聞所得の涅槃は身智を滅去して復更に生ずれば、所滅の煩惱も後亦應に起るべし。』釋して言はく、『類せず。煩惱は源理を見るに由るが故に滅す。二乘の無餘涅槃の後、心想生ずる時も亦必ず理を見る。是故に本昔所斷の煩惱は、更に生ずることを得ず。未だ斷ぜざる所の者は、後に現起することを得。身智は源理を見て斷滅するに非ず。但是れ息滅にして治滅に非ざるが故に、後に更に起ることを得。』又復二乘所得の涅槃は、體究竟にあらず。須く遷轉して大乘に趣向す。故に常と名けず。『若し後に遷轉するを常と名けずといはば、亦應に樂と名け淨と名くることを得ざるべし。何が故に之に樂淨有りと說くや。』『理も亦應に齊しかるべし。齊の義は上の如し。但し樂と淨とは恆定の義に非ず。故に得處に於て、分に隨つて之を說く。常は是れ定の義なり。始終遷らざるを、方に便ち常と名く。彼終に大に向つて永定するに非ず。故に常と名けず。』大小相對して具不具を明す。之を辨ずること畧して爾なり。

次に、增して五と說く。常、樂、我、常、及與有なり。生死の無常、苦、空、無我、不

【次に等】次に六とするについて。
【或は等】次に八をするについて。
【涅槃經】第二十五。
【涅槃經】第二十五。

淨に翻對するが故に、此五を說く。空に翻じて有と說く。餘の義知るべし。『空と無我と何の差別有つて、別して翻ずることを須ふる。』『維摩』に准依するに、衆生空には名けて無我と爲し、法體空とは直に名けて空と爲す。故に彼經に言はく、「衆生は是れ道場にして無我を知るが故に。一切の法は是れ道場にして諸法の空を知るが故に」と。今は此二に對してす。故に涅槃に就いて、我と說き有と說く。生死の中の衆生無我に對して、佛の眞人を說いて之を以て我と爲す。我とは、是れ其人の別稱なり。故に就いて之を說く。生死の中の法體空に對するが故に、涅槃法を說いて此を以て有と爲す。又生死の法體虛にして不實なる、之を名けて空と爲す。用自在ならざるを、名けて無我と爲す。此二に翻對するが故に、『涅槃』の中に、我と說き、有と說く。體實にして不空なる、之を名けて有と爲す。用能く自在なるが故に、說いて我と爲す。』次に增して六種と說く。前の五の上に於て、更に一の善を加ふ。或は分つて八と爲す。『涅槃』に說くが如し。一には名けて盡と爲す。盡とは猶滅のごときなり。諸過を盡滅するが故に、名けて盡と爲す。二には善性と名く。惡を離るるを善と稱す。又能く順益するを、亦名けて善と爲す。三には名けて實と爲す。虛僞の境を離る。四には名けて眞と爲す。妄情を捨去し又四倒を離るる、之を名けて實と爲す。心想見の三倒妄を出づるを、說いて以て眞と爲す。五には常、六には樂、七には我、八には淨なり。義は上に解するが如し。問うて曰はく、『如來の涅槃是の如し。二乘の涅槃は竟に復云何。』『『涅槃經』の中に、「六相を具す」と說く。一には解脫、諸苦を離るるが故に。

【涅槃經】第二十五。
【亦九と等】次に九とするを明す。
【亦十と等】次に十とするを明す。
【亦開分して等】次に十三とするに就いて。

二には善性と名く。能く順從するが故に。三には不實と名け、四には不眞と名く。佛自ら釋して言はく、「未だ菩提を得ざるが故に不實と名け、不實を以ての故に名けて不眞と爲す」と。五には名けて樂と爲し、六には名けて淨と爲す。佛自ら釋して言はく、「無漏の八聖道を修するを以ての故に、樂と名け、淨と名く」と。亦八と說くことを得。六種は上の如し。更に無常及與無我を加ふ。前に通じて八なり。佛自ら釋して言はく、「當に菩提を得べきが故に無常と名く」と。無我の義備には上に解するが如し。』問うて曰はく、『賢聖の涅槃是の如し。凡夫の涅槃は其義云何。』『涅槃經』の中に、「八相を具す」と說く。』『何者か是れ其凡夫の涅槃なる。』『經に言はく、「衆生世俗の道に依つて煩惱を斷ずるは、是れ其涅槃なり」と。八相と言ふは、一には解脫と名く。煩惱を離るるが故に。二には善性と名く。諸惡に違背して能く順從するが故に。三には不實と名け、四には不眞と名く。佛自ら釋して言はく、「無常なるを以ての故に不眞、不實なり」と。五には無常と名け、六には無樂と名け、七には無我と名け、八には無淨と名く。佛自ら釋して言はく、「所斷の煩惱還起るを以ての故に、無常無樂無我無淨なり」と。』亦九と說くことを得。前の八種の上に更に一の有を加ふ。亦十を說くことを得。謂はく、十相を離る。十相と言ふは、謂はゆる、色聲香味觸の相、生住滅の相、男相女相なり。前に通じて十と說く。十が中の前の五は是れ五塵の相、次の三は法塵なり。此の八は法の相なり。後の二は人の相なり。涅槃は此を絕す。故に說いて十と爲す。亦開分して以て十三と爲すことを得。前の十相を離れ、

【涅槃經】第十三

【五】涅槃の義を明す中第五門に雜義分別に七門の別あり、第一に其有無の義と明す。

苦と樂と不苦不樂とを離るることを加ふ。故に十三有り。『涅槃經』の聖行の中に說くが如し。別に隨つて細分すれば、亦無量なるべし。故に經に說いて言はく、「一名の法に於て無量の名を說き、一義の中に於て無量の義を說く」と。相を辨ずること是の如し。

(五)第五門の中、雜義の分別。中に於て七有り。一には有無の分別。二には通局の分別。三には大小の分別。四には位に約して分別。五には時に就いての分別。六には生死涅槃の體の一異。七には諸佛涅槃の體の一異。

第一に、其有無の義を明す。中に於て性淨、方便應化涅槃に約就して有無の相を辨ず。性淨涅槃に有を明し無を明す中、言ふ所の有とは、眞識の心體は是れ一切功德の性なり。『起信論』の中には、說いて一切性功德の法と爲す。『勝鬘』には、說いて過恒沙の法と爲す。彼心妄に隱るるを名けて佛性と爲し、亦は法性と名く。妄息し體顯る、之を說いて以て一切種德と爲す。之を名けて有と爲す。言ふ所の無とは、相を離れ、性を離る。離相と言ふは、實を證して返つて望めば由來妄無し。妄染の除滅すべき無きを以ての故に、亦對治の淨相の生ずべき無し。染淨雙んで泯ずるが故に無對と名く。染相既に無く、淨相も亦無し。染淨雙んで泯ずるを、名けて離相と爲す。離性と言ふは、已に上に釋するが如し。大涅槃の中には法界同體にして、乃ち一法として別に自性を守るもの無し。次に方便に就いて有を明し、無を明す。言ふ所の有とは、福智二種の莊嚴を具足する、之を名けて有と爲す。又法身解脫般若を具するも、亦名けて有と爲す。煩惱苦を滅して斷德無爲なる、之を稱して無と爲す。次に應化に就いて有を明し、無を明す。應化の涅槃に通有り、局有り。

【次に等】第二に通局を明す。

通じて之を論ずれば、大涅槃に依つて起する所の義用は違順染淨等の用を問ふこと莫し。一切悉く應化涅槃と名く。此涅槃の中有に通じ、無に通ず。現に煩惱を斷じ現に身智を滅する、之を名けて無と爲す。餘は悉く是れ有なり。若し相を分つて說かば、大涅槃に依つて起する所の義の中に、一切の用を具す。中に於て分取して、現に煩惱を斷じ現に身智を亡ずるを、應の涅槃と爲す。餘は義に隨つて更に異名を作す。若し是義に隨はば、應化涅槃は唯無にして有に非ず。有無是の如し。此一門竟る。

次に通局を明す。中に於て、凡夫、二乘、菩薩及び佛の五人に約就して之を辨ず。此人の中に於て、通局に四有り。一には極めて通じて之を論ず。此五種の人齊しく涅槃有り。『涅槃』に說くが如し。諸の凡夫の人世俗道に依つて六行に結を斷ずるを、凡て涅槃と名く。又經に說くが如し。少飯食を得るを涅槃と名くる等なり。此二は是れ其凡夫の涅槃なり。八聖道を修し、四住を斷滅して得る所の涅槃を、名けて聲聞、緣覺の涅槃と爲す。無明地等を修治し斷除する、之を說いて以て菩薩の涅槃と爲す。法の本寂を證して由來生ぜず今亦滅せざる、是れ佛の涅槃なり。二には聖を簡んで凡に異にす。聖には有り、凡には無し。『地經』に說くが如し。三乘の中には、定んで涅槃有り。名けて正定と爲す。外凡は定んで無し。名けて邪定と爲す。三乘の內凡は前に形るれば有と名け、後に望むれば無と稱す。名けて不定と爲す。三には大を簡んで小に異にす。大には有り、小には無し。大乘法の中實には涅槃有り、小乘法の中には權に有つて實には無し。故に『勝鬘』に云は

く、「阿羅漢、辟支佛等涅槃を得とは、是れ佛の方便なり」と。明に知んぬ、實に無きことを。又彼經に說かく、「阿羅漢等は涅槃を去ること遠し」と。明に知んぬ、實に無きことを。又『涅槃』に說かく、「世に若し佛無くんば、二乘の二涅槃を得ること無きに非ず。一切世間は唯一佛乘にして、更に二乘別に涅槃を得ること無し」と。故に知んぬ、實に無きことを。經に說かく、「菩薩は大涅槃に住す。諸佛も亦爾り」と。明に知んぬ、大は有ることを。四には果を簡んで因に異にす。唯佛一人のみ獨り涅槃を得、餘は悉く無し。『涅槃』に說くが如し。故に彼第七の功德の中に言はく、「菩薩の人は煩惱を斷ずと雖も、涅槃と名けず。諸佛如來は煩惱を生ぜず、乃ち涅槃と名く。是故に涅槃は獨り唯佛のみに在り」と。問うて曰はく、『何が故に煩惱を斷ずる者を涅槃と名けずして、煩惱を生ぜざるを方に涅槃と名くる。』『佛自ら釋して言はく、「涅は是れ不の義、槃は是れ生の義なり。諸佛如來煩惱を生ぜずんば、涅槃不生の義に當ると稱す。故に佛には之有り。菩薩復煩惱を斷除すと雖も、涅槃不生の義に當らず。是が爲に無と言ふ」と。』問うて曰はく、『何が故に菩薩の斷結を不生と名けずして、諸佛の斷結を偏に不生と名くる。』『解するに三義有り。一には惑に約して論ず。菩薩の人は分に結を斷ずと雖も、之を斷ずること盡さず。心中の殘結客使更に起る。故に不生に非ず。佛は斷ずること已に盡して更に起すべきもの無し。故に不生と言ふ。二には心に就いて解す。菩薩の人は煩惱を斷ずと雖も、七識の心在つて心性生滅す。故に不生に非ず。佛は煩惱を斷じ妄心も亦盡きて、眞心常に寂なり。故に不

生と名く。三には理に約して釋す。菩薩は煩惱の斷ずべき有るを見て、本起さざるに非ず。故に不生に非ず。諸佛は實を窮めて妄本空なりと達し、惑として起すべき無く、亦斷ずべき無し。故に不生と曰ふ。故に經に說いて言はく、「法本然らず。今も亦滅せず。是れ寂滅の義なり」と。此三義を具するが故に、佛のみ獨り有り、餘の者には之無し。』問うて曰はく、『不生は偏に如來に在り。是れ則ち涅槃にして、唯應に佛にのみ在るべし。何が故に前に菩薩も亦有りと說くや。』釋して言はく、『義を解するに通有り、局有り。通じて之を論ずれば、涅槃を滅と名く。菩薩の斷結は即ち是れ滅の義なり。故に通じて有と說く。局るときは則ち無とは、涅槃を寂滅の義に名く。不生不斷は方に是れ寂滅なり。故に佛のみ獨り有り。起有り、斷有れば紛動して寂ならず。故に局つて無と說く。』問うて曰はく、『通じては則ち涅槃を滅と名く。菩薩二乘の人に通ずることを得。亦煩惱を滅するも之を通じて應に齊かるべし。何が故に前には大を簡んで小に異にして二乘に通ぜざる。』釋して言はく、『滅の中義に通有り、局有り。通じては則ち一切所滅有る者を、悉く涅槃と名く。故に前には通じて二乘に之有りと說く。局つては則ち惑を斷じ、緣治を辨息し實を得て不動なるを、方に涅槃と名く。故に大に有りと說く。二乘の人は少しく結を斷ずと雖も、未だ緣治を滅せず。法の實を得ざるが故に、之無しと說く。』問うて曰はく、『通に就いて滅すべき有る者を、悉く涅槃と名くれば、二乘凡夫の人に通ずることを得。亦煩惱を滅するも之を通じて應に好かるべし。何が故に前には聖を簡んで凡に異にして凡夫に通ぜざる。』

【次に等】第三に大小を辨ず。

釋して言はく、『此義も亦通局有り。通じては則ち一切の所滅有る者、悉く涅槃と名く。故に前に通じて凡夫も亦有と說く。局つては則ち永滅を方に涅槃と名く。故に聖には有りと說き、凡夫は暫滅にして永滅度に非ざるが故に之無しと說く。』通局是の如し。此二門竟る。

次に大小を辨ず。還凡夫、二乘、菩薩、及び佛に約して之を辨ず。此人の中に於て、分別するに三有り。一には聖を簡んで凡に異にす。凡夫の涅槃は之を名けて小と爲し、賢聖の涅槃は悉く名けて大と爲す。聖は是れ大人なり。大人の所得なるが故に、名けて大と爲す。又復彼一大涅槃に就いて、分つて三乘と爲す。本を以て末を收むるが故に悉く大と名く。故に經に說いて言はく、「摩訶衍とは一切の聲聞、緣覺を出生す」と。又經に說いて言はく、「汝等が所行は是れ菩薩道なり」と。是の如き等なり。二には大を簡んで小に異にす。凡夫二乘の所得を小と名く、諸佛菩薩の涅槃は是れ大なり。是を以て經の中に宣說すらく、「菩薩は大涅槃に住す」と。二乘所得の乘は悲願を捨して、廣く一切衆生を益すること能はず。故に小と名く。又未だ之を證せざれば、未だ緣起三昧法門は大義を建立することを得ず。故に名けて小と爲す。諸佛菩薩は涅槃を得て悲願を捨せず、廣く一切を益すべし。故に名けて大と爲す。故に『地論』に言はく、「大悲を捨せずして大願力を以て大涅槃示現す」と。又佛菩薩は法の實性を證し、此緣起法門の力を以て能く大義を建て、爲さざる所無し。故に大と名くることを得。三には果を簡んで因に異にす。唯佛の涅槃は之を名けて大と爲し、餘は悉く小と名く。『涅槃經』の第七德の中に、具に廣く解

【次に等】第四に位について論ず。

釋するが如し。彼に言はく、「菩薩は佛性を見ずして煩惱を斷ずるが故に、所得の涅槃は但樂淨のみ有つて我常無し。故に大と名けず。諸佛は性を見て煩惱を斷ず。所得の涅槃は常樂我淨なり。故に名けて大と爲す。菩薩は分に隨つて亦少し。性を見れども佛の所見に於て猶未だ明了ならず。故に不見と言ふ。煩惱を斷ずること有るが故に、名けて淨と爲し、分に涅槃を得るが故に、說いて樂と爲す。常とは、是れ其法身の義なり。性を見ざるに由つて成身を顯さず。故に常と名けず。我とは是れ佛の義なり。彼は未だ是れ佛ならず。八自在無きが故に、我と名けず。是を以ての故に小なり。佛は此に同じからず。所以に是れ大なり。大小是の如し。」此三門竟る。

次に、位に就いて論ず。小乘法の中には、位別に三在り。一には是れ凡位、見道の前に在つて、其等智斷結の涅槃有り。二には是れ聖位、見道已上なり。其無漏斷結の涅槃有つて未だ滿足せず。三には無學位、其無漏斷結の涅槃有つて究竟じて成滿す。大乘法の中には、位別に五有り。一には是れ外凡常沒の位、等智斷結の涅槃有ることを得。『涅槃』に說くが如し、凡夫の涅槃の八事とは是なり。二には是れ外凡善趣の位、事識緣觀の無漏斷結の涅槃有ることを得。此位の中に事識の無漏の業因を修習して、煩惱を斷ずるを以ての故に、種性已上に之を用て變易の果を受く。三には種性已上內凡の位、妄識緣治の無漏斷結の涅槃有ることを得。法の心起を觀じて外緣を捨するが故に。四には初地上眞聖の位、漸く緣治を息めて眞諦漸く現じ、眞諦法性の涅槃有ることを得て、而も未だ滿足せず。

【次に等】第五に時に約して說く。

【經】涅槃經第二十一。

五には是れ佛位、妄は本無く淨は治顯に非ずと達して、法性の涅槃圓滿具足す。始に約し終を分つて彼第五を說く。得時に及ぶに至つては、前に四階無し。此れ第五に非ず。此四門竟る。

次に、時に約して說く。偏に大乘を論ずれば、時別衆多なり。麁約するに三と爲す。一には是れ凡の時、種性已前なり。亦地前なるべし。二には是れ聖の時、種性已上なり。亦地上なるべし。三には是れ佛の時、後際に在り。若し佛の時を論ずれば、三涅槃を具す。性淨、方便及與應化なり。備には上に解するが如し。聖の時に在るは具に三種の涅槃の分有つて、而も未だ滿足せず。若し凡の時に在らば、方便、應化の二種の涅槃は有に非ず無に非ず。本より已來可生の義有り。名けて非無と爲す。未だ修得せざるを以ての故に非有と曰ふ。子樹の中の有に非ず無に非ざるが如し。此も亦是の如し。善趣位の中には、亦斷結の涅槃有らざるに非ず。今此には麁判じて少きが故に說かず。性淨涅槃は有無不定なり。解するに三義有り。第一には緣に約し實に就いて分別す。緣に約して實を論ずれば、此時の中に於て實に妄の爲に隱るるを、未だ涅槃と名けず。但名けて涅槃の性及與佛性と爲すべし。故に經に說いて言はく、「涅槃の因とは、謂ゆる、佛性なり」と。又經に宣說すらく、「涅槃を名けて了因の果と爲す」と。故に此には之無し。實に就いて實を論ずれば、實の外の緣無し。誰か來つて我を覆はん。緣として對すべきもの無し。誰に約してか因と名けん。緣として對すべきもの無し。誰を待つてか果と稱せん。是れ則ち涅槃は因に非ず果に非ず。從來常に爾なるなり。故に經に說いて言はく、「大涅槃は本より自ら之有

【次に等】第六に生死涅槃の一異を論ず。
【經】涅槃經第二十七。
【經】涅槃經第三十九。

り。今に適たるに非ざるなり」と。二には凡佛二人に約して分別す。凡聖の實に就かば、實に惑の爲に隱れて未だ顯了なることを得ざるを、涅槃と名けず。但因と名け倶に性と名くることを得べし。若し佛眼を以て衆生の體を觀れば、本來無染なり。卽ち是れ涅槃なり。故に經に說いて言はく、「佛は衆生畢竟寂滅なりと知つて涅槃の相を取る。復更に滅せず。更に何んが所得を涅槃と名けざらん」と。三には一人の始終に就いて分別す。始め凡の時に在つて未だ法性を見ず、性妄の爲に隱るるは、未だ涅槃と名けず。後成佛の時に返つて生死を望めば、由來有にあらず。誰に由つてか眞を覆はん。眞は本常に淨なり。緣を待つて飾らず。是故に本來常に是れ涅槃なり。人の解に迷ふが如し。始めて正方を見、及び見る時に至つて由來常に正し。時に約すること是の如し。(此五門竟る。)

次に、生死涅槃の一異を論ず。「一異は如何。」「分別するに三有り。一には緣に就いて緣を說く。生死の體を斷じて涅槃の性を得。生死涅槃は體性全く別なり。經の中に說くが如し。「本有つて今無く、本無く今有り。三世に法有らば是處有ること無し」と。正しく此門に當る。又經の中に說かく、「涅槃互に無し」と。亦此門に當る。二には緣に約して實を論ず。生死の體を轉ずれば、卽ち是れ涅槃なり。全く別體に非ず。良に迷の時涅槃の性に迷つて生死と爲すを以ての故に、是故に解の時生死の體を解すれば、卽ち是れ涅槃なり。人の迷の時正方を邪と爲し、解の時に至るに及んで邪方卽ち正なるが如し。亦夜闇に繩を見て蛇と爲し、後明の時に及んで蛇卽ち此れ繩なるが如し。故に經に說いて言はく、「凡

【次に等】第七に諸佛涅槃の一異を明す。

夫未だ佛菩提を成ぜざれば、煩惱と爲す。聖若し成佛する時は、煩惱即ち菩提なり」と。菩提既に然なり。涅槃も亦爾なり。三には實に就いて實を論ず。生死の體は即ち是れ涅槃なり。還轉ずることを得ず。蛇是れ繩なるが如し。豈明に至るを待たんや。生死涅槃の一異是の如し。偏に取ることを得ず。此六門竟る。

次に、諸佛の涅槃の一異を明す。涅槃若し一ならば、一人得る時、餘も亦應に得べし。又若し定んで一ならば、一人得已つて餘は應に分無かるべし。涅槃若し別ならば、別は則ち不同なり。便ち彼此多少の增減有つて邊畔數ふべし。即ち是れ無常ならん。『其義云何。』『涅槃』の中の如し。佛性の義を解するに、一ならず異ならず。涅槃も亦爾なり。一にあらず、異にあらず。此修して此得、彼修して彼得。故に定んで一に非ず。所得は別無し。故に定んで異に非ず。譬へば一經の如し。學者は便ち解し、不學は解せず。故に經は一にあらず。其解する所に及んでは、法體殊らず。不異と言ふことを得。此も亦是の如し。又復緣に約して以て其實を論ず。緣別なれば彼實異に從ふ。故に定んで一に非ず。實に就いて實を論ずれば、實の外に人無し。知んぬ、復誰に從つてか彼と說き、此と說かん。是が爲に不異なり。涅槃の義は深くして、測を以て窮め難し。且く詮況を尋ねて粗述して爾云ふ。

無上菩提の義に七門分別あり。名を釋す一。體を定む二。相を辨ず三。得不得四。位に約しての通局五。時に約しての分別六。菩薩涅槃の一異七。

【六】淨法聚果法の第二段に無上菩提の義を明すに七門の別あり、第一に釋名。
【菩提】(Bodhi) ボーディ

(六)第一に、名を釋す。菩提は胡語にして、此には翻じて道と名く。果德圓通する、之を名けて道と爲す。道の義に五有り。一には障に對して分別す。障累斯に盡き德體無礙なる、之を名けて通と爲す。通の故に道と名く。二には體に就いて分別す。實を證して返つて望むれば、從來無染なり。自體清淨にして無礙自在なる、之を名けて通と爲す。通の故に道と名く。故に經に說いて言はく、「諸佛の聖道自性常寂にして、先に染有つて後時に離するに非ざるなり」と。三には德に就いて分別す。菩提道の中には、諸德同體にして緣起相成ず。一に一切を成じ、一切に一を成じて虛融無礙なり。之を名けて通と爲す。通の故に道と名く。四には義に就いて分別す。戒定慧等の行數各異なり。道如迹乘の四義は運通す。通の故に道と名く。五には人に約して分別す。能く行人を通じて涅槃の處に至る、之に因つて通と爲す。通の故に道と名く。故に『地論』に言はく、「道とは是れ因なり。此道を修行して能く聖處に到るを、名けて聖道と爲す」と。問うて曰はく、『經に第一義諦を說いて、亦名けて道と爲し、亦は菩提と名け、亦は涅槃と名く。道と菩提とは義應に各別なるべし。今何を以ての故に菩提を宣說し、翻じて道と名くるや。』釋して言はく、『外國には道を說くに名多し。亦は菩提と名け、亦は末伽と曰ふ。四諦の中の所有の道諦を末伽と名くるが如きなり。此方には名少し。是故に之を翻じて、悉く名けて道と爲す。彼外國の涅槃と毘尼とは此を悉く滅と名くると、其義相似せり。經の中に第一義諦を宣說して名けて道と爲すは、是れ末伽の道なり。菩提と名くるは是れ菩提の道なり。

良に二種倶に道と名くるを以ての故に、菩提を翻じて道と爲すことを得るなり。』問うて曰はく、『菩提と彼末伽とは何の差別か有る。』『通じて釋すれば是れ一なり。共に猶し眼目のごとし。名別なるのみ。中に於て別して分たば、差異無きに非ず。異は向前の道品の中に說くが如し。今更に之を論ずれば、異に四種有り。一には因果の分別、一切の因道を名けて末伽と爲し、一切の果道を說いて菩提と爲す。故に『地持論』に云はく、「方便を得とは、一切菩薩所修の學道なり。得義と言ふは、無上菩提なり」と。二には通局の分別、末伽の道は因及び果に通ず。是故に道諦は有ゆる道を皆收む。菩提の道は偏に果の中に在り。良に菩提は偏に果の中に在るを以ての故に、成佛の道を證すれば菩提を得と名く。三には通別の分別、戒定慧の三は事別の道なり。名けて菩提と曰ふ。即ち此事上の道如跡乘の諸義運通するを、說いて末伽と爲す。末伽は通なるが故に。道諦を見る者は通じて一切の迷道の煩惱を斷ず。菩提は別なるが故に。復之を觀ずと雖も、通じて迷道の結を斷ずること能はず。此を亦名けて事理の分別と爲す。四には行法の分別、一切の道法を悉く末伽と名く。四諦に法を論ず。行を彰すに非ざるが故に。一切の道行を名けて菩提と爲す。人に就いて德を論ず。法を辨ずるに非ざるが故に。菩提是の如し。無上と言ふは、勝を嘆ずるの辭なり。菩提に三有り。一には聲聞の所得、二には緣覺の所得、三には佛の所得なり。如來の所得は前の二に超過し、前の二は如かざるが故に無上と曰ふ。『問うて曰はく、『菩提を名けて無上と爲すは、體即ち是れ上なり。無明住地を名けて無明と曰ふは、而も體明に

【七】第二に無上菩提の體を定む。中に三、一に色心等に約して分別す

非ず。其義何ん。」釋して言はく、「無と說くに其二種有り。一には他に對して無と說き、二には體に就いて無と說く。無上菩提は他に對して無と說く。我の外に更に我より上なる者無きを、名けて無上と爲す。是れ體に就くに非ざるが故に是れ上なり。無明と言ふは、體に就いて無と說く。體慧明に非ざるを、名けて無明と曰ふ。故に體は是れ闇なり。類せざること斯に在り。」問うて曰はく、「經に說かく、『諸佛菩薩所行の道は上にあらず、下にあらず。故に中道と名く』と。今何を以ての故に、菩提は體是れ上なりと宣說するや。」釋して言はく、「所對不同なるが故に爾なり。『涅槃』に『上にあらず下にあらず、中道と名く』と宣說するは、彼の中に宣說すらく、『倒惑の心は下、三塗の以て趣向すべき有れば、名けて下道と爲し、上、菩提の以て趣向すべき有れば、名けて上道と爲す。佛所行の道は退下して三塗に趣向すべからず。又退下して凡の所得と爲さざるが故に下と名けず、上に向ふ所無きが故に上と名けず上にあらず。下にあらざるが故に、說いて中と爲す。今上と言ふは、下の二乘所得の菩提に對して佛德殊勝なり。故に上と名くるなり」と。』「名義是の如し。」此一門竟る。

（七）次に、其體を定む。德體無邊なり。今此には略して三門を以て之を辨ず。一には色心非色心等の三門に約して分別し、二には主伴を分別し、三には性淨方便に就いて分別す。初に色心非色心と言ふは、上の涅槃章の中に廣く辨ずるが如し。今は略して之を顯す。菩提の體の中に亦は色の義有り、亦は心の義有り、亦は非色非心の義有り。言ふ所の色とは、

佛に三身を具す。法、報と應となり。是三身の中に皆色の義有り。法身の色とは、如來藏の中に過恒沙の眼耳等の法を具す。故に彼『如來藏經』に說いて言はく、「衆生の身中に如來眼、如來耳等有り。模中の像の如し」と。此等を說いて色性の法門と爲す。故に『涅槃』に云はく、「佛性も亦色なり」と。色とは眼見なり。彼色顯了なるを說いて、諸佛の法身の色と爲す。『地持』に說くが如し、「性種性とは、六入殊勝なること無始法爾なり」と。即ち其義なり。此法身の色は、但是れ色法にして色相無し。猶し比丘の無作の戒法は色にして無相なるが如し。報身の色とは、如來曠く相好の業を修して相好の果を得。彼應身の一一の相處に於て、各〻無量無邊の相海有り。『華嚴』に說くが如し。是相有りと雖も、而も見るべからず。梵天王の頂上に寶珠有るも、而も見叵きが如し。應身の色とは、物に隨つて現ずる所の種種の色像なり。色法是の如し。言ふ所の心とは、分別するに亦三あり。一には法、二には報、三には是れ應なり。言ふ所の法とは、眞識の心は體是れ知性なり。昏睡の人の覺知の性の如し。知性を以ての故に、經に說かく、「心と爲し、識と爲し、智と爲す」と。彼心顯了なるを說いて、諸佛の一切種德と爲す。然るに此は但是れ心性の法門にして、而も心相無し。鷄、鷇に在れば分別相無きが如し。報心と言ふは、如來曠く淨業の因緣を修して眞心を勳發す。眞心の中の智慧三昧陀羅尼等をして、無量の德を生ぜしむ。心此德を具すと雖も、而も分別無し。應心と言ふは、化世間に隨ふ種種の異れる智なり。心法是の如し。言ふ所の非色非心の法とは、分別するに二有り。一には數滅無爲、二には法

性空理なり。此二の中に於て皆色心無し。義に随つて細分すれば亦三種有り。法と報と應となり。言ふ所の法とは、菩提の眞體は色もて取るべからず、心もて取るべからざるを、非色心と名く。故に『維摩』に云はく、「菩提は身もて得し心に得すべからず」と。『是義云何』『菩提の眞體は色心の相を離る。是故に身もて得し心もて得すべからず。又菩提は體空寂無爲にして色心の性を離る。是故に身もて得し、心もて得すべからず。離相と言ふは『涅槃』に說くが如し。衆生の心は復是れ有なりと雖も、而も大小、青黄赤白、長短等の相無きが如し。道と菩提涅槃とも亦爾なり。體は是れ有なりと雖も、而も一として相無し。無相なるを以ての故に、相を取るべからず。是故に身もて得し、心もて得すべからず。又經に說いて言はく、「寂滅は是れ菩提なり。諸相を滅するが故に。不觀は是れ菩提なり。諸緣を離するが故に。不行は是れ菩提なり。憶念無きが故に。斷は是れ菩提なり。諸見を捨するが故に。離は是れ菩提なり。妄想を離するが故に。障は是れ菩提なり。諸の願を障ふるが故に。不入は是れ菩提なり。貪著無きが故に」と。是義を以ての故に心もて得すべからず。經に復說いて言はく、「不會は是れ菩提なり。諸入不會なるが故に。不合は是れ菩提なり。煩惱習を離するが故に。無處は是れ菩提なり。形色無きが故に。假名は是れ菩提なり。名字空なるが故に。如化は是れ菩提なり。取捨無きが故に」と。是義を以ての故に身もて得すべからず。』離性と言ふは、菩提の體の中の諸德は同體にして、緣起もて相成ず。別を攝して總を成ずれば諸德皆有り。別を將て總を分たば一切悉く無なり。無

【次に等】二に主伴を分別す。

なるが故に離性なり。法體是の如し。言ふ所の報とは、一切の煩惱業苦を斷離して證寂無爲なるを非色心と名く。言ふ所の應とは、化の分齊に隨つて所斷有るを示し、現に無爲を證するを非色心と名く。初門是の如し。次に、第二門に主伴を分別す。正體を主と爲し、隨助を伴と爲す。主伴は不定なり。義別に六有り。第一には心法に約就して分別す。眞識の心は正しく是れ道の體なり。說いて以て主と爲す。慧等の諸數は隨心の德なり。悉く名けて伴と爲す。二には修に約して分別す。念を正主と爲し、餘を悉く伴と爲す。故に『涅槃』に云はく、「三十七品は念を以て主と爲す」と。律經にも亦云はく、「能く念を以て主と爲せば、諸流解脫することを得」と。故に知んぬ、念心を諸行の主と爲すことを。自餘の諸行は念に隨つて廻轉す。譬へば四兵の主將が意に隨ふが如し。故に說いて伴と爲す。三には造る所の行業に就いて分別す。思を正主と爲し、餘を皆伴と爲す。思心は正しく是れ造作の性なり。故に說いて主と爲す。餘行は皆是れ思の造作する所なり。思に隨つて起すが故に、名けて伴と爲す。四には起因趣果に就いて分別す。菩提の心を以て正主と爲す。此菩提の心種を以ての故に、自餘の一切は菩提の法を助け、心に隨つて果に趣くを、齊しく名けて伴と爲す。五には行德の强弱に就いて分別す。慧行最も强く、道の正體と爲す。之を名けて主と爲す。障を除いて法に入る。大力有るが故に餘行慧を助く。悉く名けて伴と爲す。故に『地論』に言はく、「智の眷屬とは、謂ゆる檀等なり」と。六には諸行の相成に就いて分別す。一切の諸行を迭互に主と爲し、迭互に伴と爲す。檀門に義を辨ずれば、

【次に等】三に性淨方便二門の分別

施を正主と爲し、餘行を伴と爲す。戒門に義を辨ずれば、戒を正主と爲し、餘行を伴と爲す。是の如きの一切なり。主伴の不同に斯六種有り。今此に謂ゆる菩提は行德なれば、多く慧行を說いて以て正主と爲し、餘を伴と爲すなり。此二門竟る。次に第三門に、性淨方便の二門を分別す。彼『金剛般若』に說くが如し。彼に說かく「生因所得の菩提を方便淨と名け、了因の所顯を說いて性淨と爲す」と。此二の名義は悉く向前の涅槃の中に釋するが如し。今は略して之を辨ず。方便菩提は集は緣に從つて發し、成は體に由つて起る。德を攝して緣に從へば、皆緣より生ず。莊嚴の具は工匠の所爲なるが如し。德を攝して體に從はば、皆是れ佛性眞心の所作なり。莊嚴の具は眞金の所作なるが如し。緣能く作すと雖も作は必ず體に依り、體能爲を離るるも爲すこと必ず緣に藉る。此二を通じて論ずれば、斯れ皆名けて生因の所生と爲す。中に於て別して分たば、外緣起の邊を作因の作と名く。世の工匠の莊嚴の具を作るが如し。作因の名字は『涅槃』に說くが如し。佛性起の邊を生因の生と名く。佛性の中に可生の義有るを以て生因と爲すが故に。『涅槃』に云はく、「佛性は無なりと雖も兎角に同じからず」と。兎角は無量の方便を以てすと雖も、生ずることを得べからず。佛性は生ずべし。可生なるを以ての故に、名けて生因と爲す。亦宣說することを得。外緣起の邊を生因の生と爲す。故に『涅槃』に云はく、「復生因有り。六波羅蜜、阿耨菩提なり」と。佛性起の邊を作因の作と名く。故に『地經』に云はく「譬へば眞金もて莊嚴の具を作るが如し。佛性眞心は諸の功德を作す」と。性淨の菩提は性、古

より出で、緣に從つて始めて現ず。中に於て、分別するに其二種有り。一には緣に約して實を論ずれば、緣に從つて始めて顯る。二には實に據つて緣を亡ずれば、隱無く顯無し。緣に從つて顯るる中、義別に二有り。一には是れ緣顯、二には是れ體顯なり。德を攝して體に就かば、皆是れ體顯なり。緣に顯有りと雖も、必ず性體に依る。若し性體の中に可顯の義無くんば、諸行を修すと雖も竟に所顯無し。性可顯なりと雖も、顯は必ず緣に藉る。若し衆緣無くんば、畢竟じて顯れず。闇室の中及び井の七寶、若し燈の照す無くんば自ら顯るるに由無きが如し。此二に通じて論ずれば、皆悉く名けて了因の所了と爲す。外緣は是れ其異相の顯了するを、名けて了因と爲す。燈の物を照すが如し。佛性は是れ其自體の可了なるを、名けて了因と爲す。瓶中の燈に可見の義有つて、瓶を破すれば則ち見るが如し。故に『涅槃』に云はく「佛性は有なりと雖も虛空に同じからず」と。虛空は無量の方便を以てすと雖も、見ることを得べからず。佛性は見るべし。可見なるを以ての故に、名けて了因と爲す。斯れ乃ち佛性に本より以來可了の義有るを、名けて了因と爲す。是れ已了に非ず。中に於て別して分たば、外緣了する邊を了因の顯と名け、佛性顯する邊を性因の現と名く。緣に約すること是の如し。實に據つて緣を亡ずれば隱顯無き中、義別するに亦二あり。一には人を廢して法を論ずれば、法性本寂にして從來緣無く、實の外に緣無し。知んぬ、復何に約してか隱と說き顯と說き、因と說き果と說かん。此は則ち是れ其法性の菩提にして、理門に收むべし。行德に關らず。二には法を攝して人に從はば、則ち前

【八】第三門に無上菩提の相を辨ず中一に性淨について論ず。先づ空相。

の法性は佛に至つて乃ち證す。證し已つて返つて望むれば從來緣無し。本緣無きが故に、本は則ち染に非ず、今新に淨なるに非ず。前の法性に同じくして隱に非ず顯に非ず、因に非ず果に非ず。故に經に說いて言はく「順は是れ菩提なり。法に順ずるが故に。住は是れ菩提なり。法性に住するが故に。至は是れ菩提なり。實際に至るが故に」と。義は此に在り。此一門に法を攝して人に從はば、名けて行德と爲す。行德と名くと雖も、法性に異らず。『地經』に說くが如し。聖道を知ると雖も自性常に寂にして、先に染有つて後時に離るるに非ず。故に須らく定滅は是れ佛の所行と言ふこと、正しく此門に當るべし。性淨方便の妙玄斯に在り。宜しく諦に之を思ふべし。體性是の如し。此二門竟る。

(八)次に第三門に、廣く其相を辨ず。中に於て先に性淨に就いて之を論じ、後に方便に就く。性淨の菩提は相別に二有り。一には是れ空相、二には是れ有相なり。空相と言ふは、彼『金剛般若經』に說くが如し。乃至少法の得べきもの有ること無き、是を菩提と名く。是法平等にして高下有ること無き、是を菩提と名く。衆生無く、人無く、壽無きを以て、平等阿耨菩提を得と名く。是の如き等の比は是れ其空の義なり。法として得べきもの無く、等しくして高下無きは是れ其法空なり。法空に二有り。一には妄情所取の諸佛の果德は理に於て本無なり。故に名けて空と爲す。二には菩提の眞性は妙寂にして相を離る。故に名けて空と爲す。彼佛果は性相倶に空なるを以て、是故に少法として得べきもの有ること無し。又此空の中には三乘の果德の差別有ること無し。故に平等にして高下有ること無しと

【不空と等】次に有の義。

【次に等】二に方便を論ず。中に三一に行斷の分別。

曰ふ。此空は卽ち是れ菩提の體中の如實空の義なり。故に菩提と名く。生無く、人無く及び壽無き等を菩提と名くるは、是れ衆生空なり。分別するに二有り。一には妄情所取の我衆生等能く菩提を得るは理に於て本無なり。故に名けて空と爲す。二には菩提の眞性は緣起集成し、我衆生等眞に於て常に寂なり。故に名けて空と爲す。若し我人衆生等の相を存すれば、彼此別異にして平等と名けず。我を存するは道に乖き、菩提を得るに非ず。我人衆生等無きを以ての故に、凡佛彼此の別異有ること無く、平等を得と名く。人の道に異ること無く道の人に異ること無く、人道隔無きを菩提を得と名く。空の義是の如し。不空と言ふは、『涅槃』に說くが如し。第一義諦を亦は菩提と名け、亦は名けて道と爲し、亦は涅槃と名く。是の如き等の法の、亦は有亦は空なり。其れ無の如くならば、云何が能く一切の煩惱を斷ぜん。其れ有なるを以ての故に、菩薩は皆悉く了了に知見す。故に知んぬ、是れ有なることを。『彼云何が有なる。』『如來藏の中に過恆沙の一切の佛法を具す。彼法顯了するを說いて、菩提の一切種德と爲す。故に名けて有と爲す。有無是の如し。若し廣く辨ぜんと欲すれば、『維摩』に說くが如し。寂滅は菩提なり。諸相を滅するが故に。不觀は菩提なり。諸緣を離るるが故に。不行は菩提なり。憶念無きが故に。是の如き等なり。要して之を論ずれば、妙寂にして相を離れ圓に衆義を備ふ。是れ菩提の相なり。性淨是の如し。次に、方便を論ず。中に於て、略して三門を以て分別す。一には行斷の分別、二には眞應の分別、三には隨義の分別。行斷と言ふは、煩惱業苦盡無の處、之を名けて斷と

【次に等】二に眞應分別。

【次に等】三に隨義分別。

爲す。此は卽ち是れ無なり。法身般若解脫等の法を、說いて以て行と爲す。此は卽ち是れ有なり。相を分つて之を論ずれば、斷は是れ滅諦にして是れ菩提に非ず。行德は是れ道にして方に是れ菩提なり。相を攝して之を言はば、行斷の二門は俱に是れ菩提なり。故に『地持』に言はく「二斷二智は是を菩提と名く」と。二斷は是れ斷、二智は是れ行なり。義は後に解するが如し。此二は皆行修方便斷障に從つて方便淨と名くることを得。行斷是の如し。次に眞應の二門に就いて分別す。自ら相應を得る之を名けて眞と爲し、現化して物に隨ふを說いて以て應と爲す。眞則ち方便修習して得れば方便淨と名く。應も亦同じく然なり。又應用の斷を方便淨と名く。然るに應の菩提は義に通別有り。通は則ち眞實の菩提に依つて起す所の化用を、悉く皆名けて應化の菩提と爲す。菩提の用なるが故に。別は則ち八相現じて佛道を成ず。是れ應の菩提なり。自餘の獼猴鹿馬等の化は相に隨つて名を別にし、菩提と名けず。『何者か八相なる。』『經の中に說くが如し。一には兜率に昇り、二には退來して胎に入り、三には胎中に住し、四には出生し、五には出家し、六には佛道を成じ、七には法輪を轉じ、八には般涅槃す。此等の一一は廣く辨ずること經の如し。八が中の第六に現に佛道を成ずるは、正しく是れ應化菩提の體なり。前の五は方便、後の二は作用なり。眞應是の如し。次に第三門は義に隨つて分別す。義別に六門あり。『地持』に說くが如し。一には自性の義、二には無上の義、三には名稱の功德、四には隨念の功德、五には堪能の義。六には最勝の義なり。六が中の前の二は是れ共自德にして、後の四は化

德なり。自德の中に就いて、初の一は自性にして正しく是れ德體なり。後の一は無上にして德の殊勝を顯す。化德の中に就いて、初の三は德の體、後の一は最勝にして、德の殊勝を彰す。今は此門に依つて次第に辨釋す。初に自性とは、菩提行德の體性を辨明す。故に自性と曰ふ。中に於て分別するに、略して三門有り。一には解脱畢竟、二には般若圓備、三には法身窮滿なり。『涅槃經』の中に、此三義を說いて大涅槃を成ず。『地持』には、此を說いて菩提の性と爲す。彼論に宣說すらく「二斷二智は是れ解脱なり」と。二斷は卽ち是れ無爲解脱なり。故に論に之を結して大解脱と名く。『何者か二斷なる。』『一には煩惱障斷、五住性結の煩惱を斷離す。二には智障斷、事無知を斷ず。二智は卽ち是れ有爲解脱なり。』『何者か二智なる。』『一には煩惱障斷、一切煩惱不相續智なり。二には智障斷、一切所知無障礙智なり。彼論に宣說すらく「清淨の智及び一切智、無礙智等は卽ち是れ般若なり」と。諸佛如來の證智の慧能く煩惱を滅して清淨明達するは、是れ清淨の智なり。世諦の一切種の法を了知するは、是れ一切智なり。一切智所知の法の中に於て之を知ること自在にして方便を假らず、心を發すれば卽ち知るを無礙智と名く。此三は後の三智章の中に、具に廣く分別するが如し。彼に說かく「如來に百四十の不共の佛法及び佛の願智、無諍の智、四無礙辨有り。是を菩提と名く。卽ち是れ如來法身の滿なり」と。百四十不共法と言ふは、謂ゆる、如來の三十二相八十種好を百一十二と爲し、四一切種淨を前に通じて合して百一十六と爲し、十力及與四無所畏は前を通じて合して一百三十と爲し、三念處

及び三不護を加へ、前に通じて合して百三十六と爲す。大悲は七、不忘法は八、斷除諸習は九、一切種妙智は十なり。此を合して通じて百四十と爲すなり。此れ佛のみ獨り有つて二乘に通ぜざれば、不共法と名く。後に廣く釋するが如し。如來の願智及び無諍智は、前の五智章の中に具に解するが如し。四無礙辯も亦上に釋するが如し。自性是の如し。無上と言ふは、佛德殊勝にして二乘に超過す。故に無上と曰ふ。分別するに七有り。一には身無上、相好殊妙なり。此れ即ち前の百四十の中の三十二相八十種好に就いて、無上と說くなり。二には道無上、自ら度し他を度して過度する所多く、世間を哀愍して天人を利安す。此れ即ち前の大悲等の行に就いて無上を說くなり。三には正無上、四正成就す。謂ゆる、正戒、正見、威儀及與正命なり。正戒と言ふは性罪を遠離し、正見と言ふは邪謗を遠離し、正威儀とは飮酒等の一切の逆過を離れ、正命と言ふは餘の一切の邪命自活を離る。此れ即ち前の三種不護及び斷習等に就いて無上を說くなり。四には智無上、謂はく、四無礙なり。此れ即ち前の四無礙辯に就いて無上を說くなり。五には神力無上、六通を成就す。此れ即ち前の淸淨智、一切智、無礙智及び十力等に說いて無上を說くなり。此等の諸智は是れ通の體なるが故に。六には斷無上、煩惱障斷及び智障斷なり。此れ前の斷に就いて無上を說くなり。七には住無上、住に三種有り。謂ゆる、聖住、天住、梵住なり。空無相願、滅盡正受は是れ其聖住、四無量心は是を梵住と名け、四禪、四無色定は是を天住と名く。上に廣く解するが如し。此れ亦前の一切種智に就いて無上を說くなり。無上是の如し。

【四九】第四に其有德無德の義を辨ず

上來は自德なり。下は化德を明す。中に於て初の三は化德の體にして、後の一は勝を顯す。前の三の中の初の一は其名稱の功德美響外に彰して人をして歸敬せしむることを明し、第二は其隨念の功德念に隨つて化を起すことを明し、第三は能く獨り廣く益するに堪へたり。名稱の德とは、謂ゆる、如來、來の十號を德と曰ふ。始め如來より、乃至第十を婆伽婆と名け、亦は世尊と曰ふ。後に廣く釋するが如し。隨念の德とは、諸〻の衆生の心念の不同に隨つて、一切時及び一切處に於て示現す。堪能の義とは、一三千界に獨一の如來能く廣く益することを爲す。第二には佛出づるに更に所爲無し。最勝の義とは、勝に二種有り。一には德勝、一切の如來の化相は差別し、實德は平等なり。故に彼文に言はく、「一切の如來は唯四事に增減の相有るを除く。餘の功德に非ず」と。四事と言ふは、一には是れ壽命、命に修促有り。二には名稱、名に遠近有り。三には種姓、氏族高下す。四には色身、形に大小有り。唯此のみ增減す。自餘の十力、四無畏等は皆悉く等し。等しきが故に勝るなり。二には身勝、諸根の相好皆悉く增上なり。女身を以て佛道を成ずることを得ず。『何が故に是の如くなる。』『如來は先に初阿僧祇に於て、已に女身を捨す。況んや佛樹下をや。先に捨して今無し。是故に女身を以て佛を成ぜず。又復女人の性は煩惱多くして惡習を成就す。煩惱惡智を以て佛を成ぜず。是が爲に之無し。』一一廣く釋すること『地持論』の如し。今は略して言ふのみ。此三門竟る。

(九)次に第四門に、其有德無德の義を辨ず。方便の菩提は修起緣に在つて、一向に有得なり。

生死を斷除して菩提を得るが故に。性淨の菩提は亦得不得なり。相に約して實を論ずれば、無明を滅するに因つて熾燃たる三菩提の燈を獲得す。之を名けて得と爲す。實を詺して返つて望むれば從來緣無し。智復何に從つてか菩提を修證せん。故に卽ち無得なり。無得の義は分別するに五有り。一には菩提の體の外に、別に我人の能く菩提を得る無し。是を無得と爲す。故に『維摩』に言はく「實に得る者無くんば亦退する者無し」と。良に人有れば則ち菩提に非ざるを以て、人無くんば方に是なり。故に得る者無し。二には菩提の體の外に、別に法有つて能く菩提を得る無し。是故に無得なり。故に『維摩』に言はく、「菩提は身もて得し、心もて得すべからず」と。良に身有れば則ち菩提に非ざるを以て、身無くんば方に是なり。故に身もて得し叵し。良に心有れば則ち菩提に非ざるを以て、心無くんば方に是なり。故に心もて得し叵し。三には菩提の體如妙寂にして相を離れ、取捨すべきこと無し。是故に無得なり。故に彼『金剛般若經』に言はく、「乃至小法の得べき無し。是を菩提と名く」と。故に不可得なり。四には菩提の體常にして、性古より出でて緣に從つて生ぜず。是を無得と爲す。故に『涅槃』に云はく「智慧の性常にして因緣に從はず」と。世尊は何が故に其因緣を問ふべき。緣無きを以ての故に其能得無し。常は修起に非ざるが故に所得無し。五には菩提は住處として求むべきこと有ること無し。是故に無得なり。故に『天女』に云はく「菩提は處無きが故に得の在ること無し」と。問うて曰はく、『菩提は後際に在り。云何が處無からん。』釋して言はく、『凡に據つて以て菩提を望

【一〇】第五に通局を分別す。初に性淨の菩提について。

【方便の等】次に方便の菩提について。

【經】涅槃經第二十七。

めば生死は此に在り。菩提は彼に在り。若し菩提の實性に據つて以て論ずれば、凡此に在ること無し。誰に約してか彼を說かん。故に住處無し。』問うて曰はく、『「地經」には、「一切處に阿耨多羅三藐三菩提を得」と。云何が處無からん。』『義は前の解に同じ。相に約して實を論ずれば、一切處に菩提を得と言ふ。實に就いて以て望むれば、處として在るべき無し。故に無處と言ふ。無處なるを以ての故に不可得なり。』得無得の義之を辨ずること略して爾なり。此四門竟る。

〔一〇〕次に第五門に、通局を分別す。位に約して之を論ずれば、性淨の菩提に通有り、局有り。分別するに三有り。一には實に就いて通じて論ず。體は染淨に通ず。因中にも亦有り。故に經に說いて言はく「一切の衆生は卽ち菩提の相なり」と。二には人に約して實を論ず。菩提眞性の窮證は佛に在り。佛に就いて返つて望むれば、由來常に是なり。本妄染の能く覆障すること無きが故に。故に經に說いて言はく「凡夫未だ成佛せざれば菩提を煩惱と爲す。聖若し成佛する時、煩惱は是れ菩提なり」と。經の中に「佛は衆生卽ち涅槃相なりと知つて復更に滅せず」と說くと其義相似せり。三には相に約して實を辨ず。因に在るの時は但佛性と名け、未だ菩提と名けず。果に至つて顯了するを、方に菩提と名く。菩提は是れ其了因の果なるが故に。方便の菩提は凡の時全く無し。設し有りと言はば、但佛性眞心の體の上に於て可生の義有り。未だ法體有るにあらず。故に經に說いて言はく「本有つて今無く、本無くして今有り。三世に法有らば是の處有ること無し」と。本有りと言ふは、

【涅槃】涅槃經第二十八。

本凡に在る時但生死有爲の法のみ有り。今無しと言ふは、當今現在に生死有る時は其出世菩提の行徳無し。本無しと言ふは、本凡に在る時は但生死のみ有り。未だ出世菩提の行徳有るにあらず。今有りと言ふは、今現に菩提の徳無き時は但生死のみ有り。三世に法有らば是處無しとは、生死の法三世に恆に有らば、是處無きが故に凡に有つて聖に無し。菩提の行徳三世に恆に有らば、是處無きが故に聖に有つて凡に無し。經を釋すること是の如し。有人說いて言はく、『方便の菩提は凡の時にも亦有り』と。是義然らず。若し凡の時已に菩提有らしむれば、本有つて今無く、本無くして今有り。此の如きの偈の意は何の顯す所ぞ。三世に法有らば是處有ること無し。何んが先に有ることを得ん。又經の中に說かく「方便の菩提は是れ生因の果なり」と、本無くして今有り。何んが生と言ふことを得ん。先に有つて今顯るるは是れ了因の果ならば、何んが生と言ふことを得ん。又『涅槃』の中に、廣く乳酪及與樹子相生の因果を擧げて譬況と爲す。若し凡の時已に菩提有らしむれば、乳に應に酪有るべく、樹子の中に應に先に樹有るべし。乳中の酪、子中の樹は佛已に廣く破す。所況同じく爾なり。何んが勞しく强ひて立せん。又『涅槃』に說く「若し身中に全く佛性無しと言はば波羅夷を犯じ、若し身中に先に菩提有りと說かば波羅夷を犯ず」と。此罪畏るべし。何んが用て有りと言はん。又『涅槃』に言はく「若し先に常樂我淨有りと說かば、集せず生ぜず。煩惱覆障して見るを得ること能はず。煩惱を破し已つて、然して後に之を見る」と。是れ則ち名けて佛法僧を謗ずと爲す。謗の罪は輕きに非ず。强ひて立てて何の益

かある。又『涅槃』の中に四種性を辨ず。或は佛性有つて闡提の人には有り、善根の人には無し。或は佛性有つて善根の人には有り、闡提の人には無し。或は佛性有つて二人に倶に有り。或は佛性有つて二人に倶に無し。是の如き等の四句の義は、汝等云何が一向に解を作す。經文是の如し。『若し性淨方便の菩提は二倶に本有りと言はば、云何が闡提の人には無しと言ふことを得ん。云何が二人と倶に無しと言ふことを得ん。』復釋して言はく、『顯れざるが故に全く體無きに非ざること無し。若し無しと言はば、不顯を無と名く。二人に有らば應當に是れ顯なるべし。二人の有は顯を有と名くるに非ず。知んぬ、無とは隱を無と名くるに非ざることを。又復方便菩提の果は即ち是れ報佛なり。酬因を報と名く。本來恆に有らば、有の前に因無し。誰に酬いてか報と名けん。斯を以て驗求するに本大過有り。宜しく更に立すべき無し。問うて曰はく、『經に說かく、「衆生の身中に如來の眼耳等の根及び諸佛の法を具足す」と。今云何が方便の菩提は凡の時全く無しと言ふや。』釋して言はく、『經に說かく、「一切の法を具す」と。是れ法佛の性なり。方便を論ぜず。凡聖の相對通局是の如し。若し唯聖に就かば、通局に五有り。一には極通して之を論ず。三乘の賢聖は悉く菩提を得。故に『地持』に云はく、「聲聞は聲聞の菩提を得、緣覺は緣覺の菩提を得、菩薩は無上菩提を得」と。是の如き等なり。二には大を簡んで小に異にす。菩提は大に在つて小乘に通ぜず。故に『大品』の中に、五菩提を說くこと偏に大乘に在り。五菩提の義は上に廣く釋するが如し。今は略して之を列す。一には發心菩提、無量生死海

の中に在つて菩提心を發す。位は善趣に在り。二には伏心菩提、種性伏忍位の中に在り。三には明心菩提、初地上に在り。般若轉た增するが故に、說いて明と爲す。四には出到菩提、七地上に在り。有無を出離して無生忍に到る。五には無上菩提、佛地に在り。此五種は純ら大乘に在るを以て小に通ぜざることを明す。三には住を簡んで退に異にす。菩提は局つて種性已上に在り。故に『華嚴』の中に習種を說く中に云はく「初めて心を發して便ち正覺を成ず」と。又『涅槃』の中に說かく「須陀洹は八萬劫に到り、乃至辟支は十千劫に阿耨多羅三藐三菩提に到る」と。此れ乃ち種性已上に到るを、菩提に到ると名く。種性の上に事識の中の緣觀漸く息し、八識眞心の薄障の中に現ずるを以て、之に依つて德を成ず。故に種性上を菩提を得と名く。前は未だ此に同じからず。所以に說かず。四には聖を簡んで凡に異にす。菩提は局つて初地已上に在り。地前に通ぜず。故に『法華』の中に宣說すらく「菩薩は壽量を說くを聞いて、或は八生乃至一生有つて大菩提を得」と。論に言はく「八生乃至一生に菩提を得とは、初地に智を證す」と。明かに知んぬ、菩提は局つて地上に在ることを。初地上に七識心の中の緣觀漸く息し、眞智漸く現ずるを以て、菩提を得と名く。地前は未だ同じからず。所以に說かず。五には果を簡んで因に異にす。菩提は佛に在り。餘人に通ぜず。故に『地持』に云はく「得方便とは、一切の菩薩所修の學道なり。得義と言ふは、無上菩提なり」と。明かに知んぬ、菩提は偏に佛果に在ることを。通局是の如し。此五門竟る。

【二】第六に時に約して分別す。

（二二）次に第六門に、時に約して分別す。時とは、謂はく、三世なり。此三時に約して以て菩提を辨ず。菩提は不定なり。是三世非三世の義有り。三世と言ふは、共に二種有り。一には體變の三世なり。謂はく、佛の應身は化に隨つて遷變す。二には惑障に約對して前後有ることを得。非三世とは、解するに亦二有り。一には體生滅に非ざるが故に三世に非ず。翻じて初の門に向ふ。二には實を證して緣を離れ妙に形待を亡ずるが故に三世に非ず。翻じて後の門に向ふ。故に經に說いて言はく、「如來の佛性は則ち過去、未來、現在に非ず」と。又經に亦言はく、「我如來を觀ずるに前際より來らず、後際に去らず、今則ち住せず」と。是の如き等なり。良に菩提に斯不定有るを以ての故に、經に說いて言はく、「世俗の文字に三世有りと說く。菩提に去來今有りと謂ふには非ず」と。『是義云何。』『汎く解するに四有り。一には眞應相對に就いて分別す。應化は時有るが故に三世の攝なり。眞德は常住にして猶し虛空の如く、去來今無し。二には眞の中の性淨方便相對に就いて分別す。方便の菩提は緣修に從つて生ず。生に前後有るが故に三世の攝なり。性淨の菩提は修觀に從ふと雖も、性古より出でて緣に從つて生ぜざれば、去來今に非ず。第三には直に性淨の中に就いて、修に約し證に就いて分別を爲す。性淨の菩提は緣修に藉つて顯る。修は前後を別つて淨一時に非ざるが故に三世に有り。證を得て返つて望むれば從來隱るること無く、今彰顯するに非ず、因に非ず果に非ず。是義を以ての故に、去來今に非ず。此一義は『涅槃』の中の世諦の慈を捨して第一義の慈を得、第一義の慈の因緣に從はざると共言相似せ

【二】第七に涅槃に約對して其一異を辨ず。初め行斷の二に約して分つ

り。第四には直に性淨の體に就いて、緣に約し、實に就いて分別を爲す。緣に據つて實を望めば、緣の外に實有り。緣外の實は緣を息めて方に會す。之を會するに前後あり。故に三世に有り。實に就いて實を論ずれば、實の外に緣無し。緣は本有にあらず。誰か來つて我を覆はん。故に本隱無く、今現に隱無し。豈今顯有らんや。實性常寂にして緣に隨つて變ぜず。是義を以ての故に、去來今無し。此多くの義を具す。是故に菩提も亦是れ三世なり。時に約すること是の如し。此六門竟る。

（二）次に第七門に、涅槃に約對して其一異を辨ず。一異は不定なり。「何が故に是の如くなる。」法門に二有り。一には分相門、二には攝相門なり。相を分つて之を言はば、菩提涅槃は兩門各異なり。相を攝して論を爲さば、菩提涅槃は兩體是れ一なり。中に於て、略して二門を以て分別す。一には行斷の二德に約して分別し、二には性淨方便に約して分別す。行斷門の中相を分つて之を言はば、一切の行德を悉く菩提と名く。行は是れ道なるが故に。一切の斷德を齊しく涅槃と稱す。斷は是れ滅なるが故に。若し攝相に據らば、一切の行德は皆是れ菩提にして、並に是れ涅槃なり。行斷の二德は皆是れ菩提なり。「地持」に說くが如し。故に彼文に言はく、「二斷二智は是を菩提と名く」と。問うて曰はく、「菩提は此には翻じて道と名く。行德は是れ道なり。菩提と名くべし。斷德は道に非ず。何の義を以ての故に、亦菩提と名くるや。」釋するに三義有り。一には斷は是れ道の果なり。果は因に從つて稱くが故に菩提と曰ふ。命は食の果なれば命を說いて食と爲すが如し。

【次に等】性淨方便について分別す

二には斷の義は是れ菩提が家の離過の德なるを以て、德を攝して體に從ふ。故に菩提と曰ふ。諸の心法は是れ慧の眷屬なれば、通じて名けて慧と爲すが如し。是の如きの一切なり。三には斷德は體に離擁障無きを以て、卽ち是れ道の義なり。是れ道なるを以ての故に、說いて菩提と爲す。行斷の二德を倶に涅槃と爲すは、『涅槃』に說くが如し。彼文に『諸の煩惱を滅するを名けて涅槃と爲す」と宣說するは、是れ其斷なり。「三事は大涅槃を成ず」と宣說するは、是れ其行なり。』問うて曰はく、『涅槃は此には翻じて滅と名く。斷德は是れ滅なり。涅槃と名くべし。行德は滅に非ず。何の義を以ての故に、涅槃と名くることを得るや。』『解するに亦三有り。一には行德は是れ其因を滅するを以て、因を果に從つて稱くるが故に涅槃と曰ふ。食は命の因なれば食を說いて命と爲すが如し。亦『地持』に說く所の因樂の如し。因は樂に非ずと雖も、是れ樂の因なるが故に亦名けて樂と爲す。此も亦同じく爾なり。二には諸行は是れ涅槃が家の對治の行德なるを以て、涅槃の眷屬は德を攝して體に從ふ。故に涅槃と名く。三には諸行は皆離過寂滅の義有るを以ての故に涅槃と曰ふ。行斷是の如し。次に、性淨方便に就いて分別す。相を分つて之を言はば、性淨の果を悉く涅槃と爲す。性淨の體は寂にして無爲の相なるが故に。方便の果を悉く菩提と爲す。行修方便は能く行人を通じて菩提に至るが故に。此一義は『涅槃』に說くが如し。故に彼に宣說すらく、『菩提の德は生因の所生、涅槃の德は了因の所顯なり」と。良に方便獨り菩提と爲るを以て、濫する所無しと言ふ。須らく更に方便を以て別を樹つべか

らず。性淨の德獨り涅槃と爲せば、亦濫すること無しと言ふ。是故に須らく性淨に別を樹つべからず。故に『涅槃』の中に、一切の菩提は是れ方便なりと雖も方便と名けず。一切の涅槃は是れ性淨なりと雖も性淨と名けず。相を攝して之を言はば、性淨方便は俱に菩提と名け、並に涅槃と稱す。俱に菩提と名くるは彼『金剛般若』の中に說くが如し。故に彼文の中に、本性今顯るるに寂を論じて名けて性淨の菩提と爲し、修生の功德に現を論じて名けて方便の菩提と爲す。良に二種皆菩提なるを以ての故に、須らく性淨方便を以て之を別つべし。問うて曰はく、『方便は修生の功德にして、人を通じて果に至らしむ。其道の義有るを菩提と名くべし。性淨の德には是の如きの義無し。何の所以か有つて亦菩提と名くる。』『解するに三義有り。一には是れ道が家の所了の果なり。果を因に從つて稱くるが故に、名けて道と爲す。是れ道なるを以ての故に、名けて菩提と曰ふ。二には道が家の體なり。體を攝して德に從ふが故に菩提と曰ふ。三には性淨の德體通じて無壅なり。即ち是れ道の義なり。故に菩提と曰ふ。性淨方便は俱に是れ涅槃なり。『地論』に說くが如し。『涅槃經』の中にも亦此相有り。彼經の中には、性淨の果は之を名けて常と爲し、方便の報果は之を說いて性と爲す。佛自ら說いて言はく、「若し能く此常住二字を修して滅相と爲さば、我共人に於て般涅槃爲ん」と。滅相と爲すとは、外國の語に依らば涅槃相と爲す。常住の二字を修するを滅相と爲すは、即ち是れ猶涅槃相と爲すがごときなり。故に知んぬ。二種並に是れ涅槃なることを。良に二種俱に涅槃なるを以ての

故に、須らく性淨方便を以て之を別つべし。』問うて曰はく、『性淨は法性體寂なれば涅槃と名くべし。方便の功德は道諦の所收なり。修起にして寂ならず。何の義を以ての故に、涅槃と名くることを得る。』『解するに三義有り。一には是れ性淨涅槃の因なり。因を果に從つて稱くるが故に涅槃と名く。二には涅槃が家の德なり。德を攝して體に從ふが故に涅槃と名く。三には修起の功德にも亦離相寂滅の義有るが故に涅槃と名く。共通ずるを以ての故に、性淨の菩提は體即ち是れ其性淨の涅槃なり。故に第一義諦を亦は菩提と名け、亦は涅槃と名く。方便の菩提は體即ち是れ其方便の涅槃なり。故に報常を修して滅相と爲すことを得。』菩提涅槃の一異是の如し。菩提の德は體深く義廣くして、以て測窮し難し。且く詮況に隨つて之を辨ずること略して爾なり。

大乘義章 卷第十八

【一】淨法聚乘法の中第三段に淨土の義を明すに六門の分別あり、第一に釋名。

大乘義章　卷第十九

遠法師撰す

淨法聚果法の中、此卷に九門有り。淨土の義。三佛の義。三智の義。三不護の義。三念處の義。四一切種淨の義。二智の義。四智の義。四無畏の義。

淨土の義に六門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。因を明す三。身に約して土を明す四。凡聖の有無五。質の同異六。

(一)第一に、名を釋す。淨土と言ふは、經の中に或時は佛刹と名け、或は佛界と稱し、或は佛國と云ひ、或は佛土と云ひ、或は復說いて淨刹、淨界、淨國、淨土と爲す。刹とは、是れ天竺の人の語なり。此方には翻無し。蓋し乃ち處處の別名なり。佛に約して處を辨ず。故に佛刹と云ふ。佛世界とは、世は、謂はく、世間、國土境界なり。衆生を盛る處を器世間と名く。界は是れ界別なり。佛所居の處は餘人に異なり。故に界別と名く。又佛は化に隨つて住處各異なり。亦界別と名く。佛に約して界を辨じて佛世界と名く。佛國と言ふは、人を攝するの所之を目けて國と爲す。佛に約して國を辨ずるが故に佛國と名く。佛土と言ふは、身を安んずるの處之を號して土と爲す。佛に約して土を辨じて、名けて佛土と爲す。若し其國を論ずれば、王領する者は有り、王ならざる者は無し。土は即ち爾らず。性身有れば皆有り。刹と界とは其義即ち通ず。此れ雜穢無きが故に、悉く淨刹と名く。性海蓮花須彌の諸の是の如き等は寬狹の別稱なり。問うて曰はく、『國土衆生は共に倶な

【二】第二に淨土の相を辨ず。中に三、一に事の淨土を明すに三あり、先づ總じて相を辨ず。

【次に等】次に別して顯す。

り。何が故に偏に佛國土と名くるや。』『今は佛土を明して餘を說かず。故に又佛は是れ主なり。故に佛土と名く。』名義是の如し。此一門竟る。

〔二〕次に、其相を辨ず。佛土を明さんが爲に、兼て餘義を辨ず。分別するに三有り。一には事の淨土、二には相の淨土、三には眞の淨土なり。事淨の中に三門を分別す。一には總じて相を辨じ、二には別して之を顯し、三には諦に約して以て定む。『總相は云何。』『事淨と言ふは、是れ凡夫人所居の土なり。凡夫は其有漏の淨業を以て淨境界を得。衆寶莊嚴、飾事相嚴麗を、名けて事淨と爲す。然るに此事淨は修因の時情に局別有れば、受報の時土に分限有つて疆畔各異なり。又此修の時取相の執定れば、受報の時國土莊嚴の諸相各定る。』總相是の如し。次に別して之を顯さば、事情に二有り。一には是れ凡夫求有の淨業所得の土なり。上諸天の所居等の如し。是れ求有の善業に從つて得るに由るが故に、受用の時還つて三有の煩惱結業を生じて出道を生ぜず。生ずること有る者は、別して善友敎化の力に由つての所以に能く起す。是れ所受の境界の力に非ず。二には是れ凡夫求出の善根所得の淨土なり。安樂國衆香界等の如し。出世の善業に從つて得るに由るが故に、受用の時能く出道を生ず。衆の香飯の其れ食すること有る者は、惑を滅して道を生ずるが如し。是の如き等なり。問うて曰はく、『此土の諸天の境界を名けて、當に純ら是れ求有の業生となるべしと爲んや、當に出世の善有つて得べしと爲んや。』『理も亦兼ねて有り。故に『涅槃』の中に佛、我の義を說きたまふに、無量の鳥狩說くを聞き、發心して天中に生ず。明

【次に等】次に四諦に約して辨ず。

【論】大智論第三十八。

【次に等】二に相淨を辨ずるに三あり、先づ總じて相を辨ず。

【龍樹の等】大智見論第九十三。

かに知んぬ、亦出善往生有ることを。少きが故に論ぜず。』別相是の如し。次に四諦に約して其相を辨定す。前の兩門の中、初門の因は唯是れ集諦なり。分段の因なるが故に。初門の果は體唯苦諦なり。分段の果なるが故に。後門の因は其兩能有り。一には正しく佛果を感じ、二には傍に淨土を招く。正しく佛を感ずる邊は一向に集に非ず。能く佛德を生ずれば、生死の諸果の果を集めざるが故に。傍に土を招く邊は亦集にして集に非ず。向前の初門の因に形るれば、集に非ずと言ふことを得。求出の善根は是れ其相似の道諦の攝なるが故に。當分に實に論ずれば、體性は是れ集なり。能く有爲生滅の果を招くが故に。後門の果は前に形るれば苦に非ず。是れ其相似の出世の果なるが故に。故に論に宣說すらく「無量壽國は三界に屬せず」と。彼に貪欲無きが故に欲界に非ず、地に在るを以ての故に色界と名けず、形色有るが故に無色界に非ず。是れ相似の道が家の果なるを以て、之を攝して道に屬す。故に苦と名けず。佛の淨土に似たれば菩提の道に攝す。當分に實に論ずれば、體は是れ苦諦なり。生滅の果なるが故に。有漏の報身の所依の處なるが故に。事淨是の如し。次に、相淨を辨ず。中に於て、亦三門を以て分別す。一には總じて相を辨じ、二には別して之を顯し、三には諦に約して辨定す。『總相は云何。』『相淨と言ふは、聲聞、緣覺、及び諸の菩薩所居の土なり。龍樹の說くが如し。妙淨土有つて三界を出過す。是れ阿羅漢當に彼中に生ずべし」と。是の如き等は是れ此諸の賢聖の緣觀對治の無漏を修習して得る所の境界なり。妙相莊嚴離垢清淨なり。土清淨なりと雖も、妄想の心より起

【次に等】次に別して之を顯す。中一に行に約して分別す。

【經】舊華嚴第三十六。

【龍樹の等】大智論第九十三。

【心に等】二に心に約して分別す。

る。夢の觀る所の如く、虚僞にして眞ならず。相中に垢を離るるが故に相淨と名く。然るに此相淨は修因の時情に局別無ければ、受報の時土に方限無し。又此修の時の心に定執無ければ、所得の境界は心に隨つて廻轉す。猶し幻化の如く、定方有ること無し。」總相是の如し。次に別して之を顯す。別に兩門有り。一には行に約して分別し、二には心に約して分別す。行に約すと言ふは、行別に二有り。一には是れ聲聞、緣覺の人の自利の善根所得の土なり。虚寂無形にして無色界の安止する所の處の如し。問うて曰はく、『無色に云何が處有る。』釋して曰はく、『四空には但麁色無し。細色無きに非ざるが故に、處有ることを得。故に經に宣說すらく、「菩薩は鼻根に無色の宮殿の香を聞く」と。龍樹の說くが如し。妙淨土有つて三界を出過す。羅漢中に生ず」と。『法花經』を聞くは即ち共事なり。自行の善根に從つて生ずるに由るが故に、受用の時但自行を生じて善根を遠離し、自然に慈悲の願、利他の行を起すこと能はず。設ひ起す者有るとも、佛菩薩教化の力に由る。是れ所受の境界の力に非ず。』二には諸の菩薩の化他の善根所得の土なり。衆生を捨せずして物に隨つて之を受く。維摩の室の如し。化他の善根に從つて生ずるに由るが故に、受用の時自然に能く利他の善行を起す。行に約すること是の如し。心に約すと言ふは、心別に二有り、一には事識の中、無漏を緣觀して能く淨土を得、二には妄識の中、無漏を緣觀して能く淨土を得。事識の無漏に其れ二種有り。一には增相觀所得の淨土なり。相續住持して實を證して方に攝す。二には息相觀所得の淨土なり。暫く現ずること幻の如し。妄識の無漏にも

【次に等】次に四諦に約して定む。

【次に等】三に眞淨を辨ずるに四あり、先づ總じて相を辨ず。

【次に等】次に別して顯すに三門に別あり、一に妄に對して分別す。

亦二種有り。一には增相觀所得の淨土なり。相續住持して實を證して方に捨す。二には息相觀所得の淨土なり。暫く現じて卽ち滅す。別相是の如し。次に第三門に諦に約して以て定む。相淨の因は前に形るれば集に非ず。道諦の攝なるが故に。當分は是れ集なり。變易の因なるが故に。相淨の果は前に形るれば苦に非ず。道果の攝なるが故に、佛の淨土の如く、菩提の道に攝す。當分に實に論ずれば、體性は是れ苦なり。變易の果なるが故に。相淨是の如し。次に、眞淨を明す。四門に之を辨ず。一には總じて相を辨じ、二には別して之を顯し、三には諦に約して決定し、四には義に隨つて廣く辨ず。『總相は云何。』『眞淨と言ふは、初地以上乃至諸佛所在の土なり。諸佛菩薩の實に善根を證して得る所の土は、實性緣起し妙淨にして染を離れ、常に不變なるが故に。故に眞淨と曰ふ。然るに此眞淨は因に緣念無く、土に緣念無ければ土に相狀無し。梵天王の頂上の寶珠は體是れ有りと雖も、而も向より靑黃赤白等の相無きが如し。亦比丘の無作の戒法は體是れ色なりと雖も、而も一相として無きが如く、有にして而も相無く、土の妙なり。又此眞土は因に定執無ければ土に定所無く、因に分別無ければ土に彼此自他の異無し。』總相是の如し。次に別して之を顯す。中に於て、曲しくは三門の分別有り。一には妄に對して分別す。眞行に二有り。一には離妄の眞、諸の菩薩所成の眞行を保して、妄の爲に離るる所の所得の眞土なり。還つて妄と合すること空に霧在るが如し。此門の中に於て土は位に隨つて別す、階降等しからず。諸地の位に隨つて分分に漸く增す。妄土漸く滅して眞土漸く現ず。霧の漸

【二には等】二に行に約して分別す。
【地經】論第九。
【三には等】三に法に約して分別す。
【次に等】次に諦に約して論ず。
【次に等】最後に義に隨つて廣く辨ず先づ一とするについて。
【或は等】次に二とするについて。

く消えて虛空轉た現ずるが如し。二には純淨の眞、謂はく、佛如來所在の土なり。純眞無雜にして淨きこと虛空の如し。土清淨なりと雖も、應に染と合すべし。二には行に約して分別す。行は要ず唯二なり。一には智、二には悲なり。智は空に依つて成ず。智を以て行を攝すれば、行は皆相を離る。所得の土は還つて彼因に同じく、妙寂にして相を離るること猶し虛空の如し。悲は有に隨つて生ず。悲を以て行を攝すれば、行は皆物の爲にす。所得の土は還つて彼因に同じく、物に隨つて現ずる所、猶し淨珠の色として現ぜざること無きが如し。故に『地經』に云はく「諸佛國土は空の如しと知ると雖も、而も無量莊嚴の土の行を觀ず」と。三には法に約して分別す。彼眞實如來藏の中に於て、法門に二有り。一には寂滅門、之に依つて土を得るは還つて彼法の寂滅離相に同じ。二には是れ緣起作用の法門、之に依つて土を起す。所として現ぜざること無し。如意珠の心の所求に隨つて、所として現ぜざること無きが如し。別相是の如し。次に諦に約して論ず。此門の中に於て、淨土の因は或は道、或は滅なり。行因の能起は是れ道諦の收、法門の力起は是れ滅諦の攝なり。果も亦之の如し。或は菩提に收む。道果の攝なるが故に。或は涅槃に收む。滅果の攝なるが故に。佛の法身に似たり。諦に約すること是の如し。次に第四門に、義に隨つて廣く辨ず。中に於て、開合廣略は不定なり。或は總じて一と爲す。唯一佛土なり。或は分つて二と爲す。唯眞と應となり。自の所說は之を名けて眞と爲し、化に隨つて異を現ずるを說いて以て應と爲す。其眞土とは、卽ち是れ平等法門の土なり。妙寂離相にして圓に

【或は等】分つて三となすについて

衆義を備へ、形に定所爲く無として在らざること無し。其れ猶し陰陽五行の法のごとし。此喩は法に似たり。持して宜く審に記すべし。土既に是の如し。諸相の莊嚴、寧ぞ別取すべけんや。別狀無しと雖も、無と言ふことを得ず。土は妙寂なりと雖も、而も是れ緣起の作用の性、萬物依つて生ず。化應の託する所其れ猶、陰陽五行等の法能く世間の一切の色像を造するが如し。眞土是の如し。其應土とは、情に隨つて現示するに局別有り。染淨徧分し形殊る。善惡諸相の莊嚴は事別各異なり。應土是の如し。或は分つて三と爲す。一には法性土、二には實報土、三には圓應土なり。法性土とは、土の本性なり。諸義同體にして虛融無礙なること猶し帝網の如し。亦虛空の無礙不動にして所有無く、等しく同體なるが如し。義もて地位を分たば、所證の眞實の義相は即ち其義なり。一切世界の本性恆に爾なり。而も諸の衆生は妄想心を覆ひ、自ら累隔を成じて無礙法の中に定礙爲らる。有處には定んで有り、無處には定んで無く、染處は定んで染、淨處は定んで淨、地處は定んで地、水處は定んで水なり。是の如きの一切なり。後に妄想を息めて彼土の實性我用を顯成するを、法性土と名く。實報土とは、菩薩前の法性土を顯す時、曠く法界無盡の行業を修し、此淨業の勳發の力を以て、彼無邊の淨法界處に於て無量殊異の莊嚴の事起るを、實報土と名く。此實報土は義別に三種あり、後の報身に同じ。一には法に依つて說く。還つて法性に同じく諸相もて莊嚴し、融同無礙なること、海の十相の如く、一一に充遍す。圓應土とは、前の二眞土は猶し淨珠の如く、能く衆生に隨つて種種に異現し、用に缺少無

【或は等】分つて七となすについて
【地經】論第三。

【經】地經論第三

【經】地經論第三

きを圓應土と名く。或は分つて七と爲す。『地經』に說くが如し。一には同體淨、二には自在淨、三には莊嚴淨、四には受用淨、五には住處衆生淨、六には因淨、七には果淨なり。七が中前の四は土の體用を明し、第五の一種は人に寄せて勝を顯し、後の兩門は因を擧げて果を顯す。前の四が中に就いて、初の兩門は其土の體を明し、第三の一門は其土の相を辨じ、後の一は土の用なり。初の二體の中前の一は其土の體の無別を明し、後の一は其土の體の淸淨を彰す。同體淨とは、事相隔礙を名けて不淨と爲し、同體虛融なるを名けて淨と爲すなり。『云何が同體なる。』『分別するに三有り。一には本末を分別す。法性の土は是れ其根本にして、報應を末と爲す。一切の報應は法性を體と爲す。故に同體と名く。二には眞應を分別す。一切の應土は眞を用て體と爲す。故に同體と名く。三には應の中に就いて諸土を相望むるに、同體にして無別なり。故に同體と名く。此娑婆土田世界の異種の衆生の如きは、此土の上に於て種種に異見す。螺髻王の寶莊嚴を見るが如し。是の如き等なり。所見の異土は同じく娑婆の土地を用て體と爲す。是の如きの一切なり。故に同體と名く。故に經に說いて言はく「一切の佛土は即ち一佛土なり。一は即ち一切なり」と。三義は前の如し。自在淨とは、泛く淨の義を論ずるに二種有り。一には是れ相淨、諸寶莊飾嚴淸淨嚴麗なる安樂界衆香國等の如し。二には自在淨、猶淨珠の如し。美惡斯に現じて所現無礙なり。故に自在と曰ふ。土の體淨なるに由るが故に、能く是の如く無礙自在なり。用を擧げて體を顯すを自在淨と名く。今此に論ずる所の義は後の門に當る。故に經に

【經】 地經論第三

說いて言はく、「一切の國土は平等清淨なり」と。淨は相の土なり。彼穢此淨を平等と名けず。自在淨とは、染淨圓通して法界齊等なり。故に平等と曰ふ。此二は土の體なり。莊嚴淨とは、是れ其土の相なり。泛く論ずれば三有り。一には人莊嚴、勝善の衆生其中に居住する土を淨と名くるなり。下に云ふ住處衆生淨とは、卽ち其義なり。二には法莊嚴、諸佛の法を具する其土を淨と名く。故に『地論』に言はく、「人及び諸法莊嚴す」と。三には事莊嚴、五欲殊妙なり。此三種の中、『地經』には偏に一の事莊嚴を說いて莊嚴淨と爲す。土の中に三有り。一には神通莊嚴、一切の境界は變現無礙なり。二には光明莊嚴、常に光明有つて闇冥を滅除す。三には相莊嚴、衆寶莊飾す。故に經に說いて云はく、「神通莊嚴は光明具足す」と。受用淨とは、是れ其土の用なり。淨土の境界は受用の時能く煩惱を滅し、道を出生す。此前の四種は土の體相を明す。第五に住處衆生淨とは、人に寄せて勝を顯す。無量の功德智慧の衆生は悉く其中に滿ず。故に土勝れたり。又善人其中に居住するを以ての故に、土清淨なり。後の兩門の中の初の因淨とは、因を擧げて果を顯す。因に二種有り。一には淨土の行業、謂ゆる、布施、持戒なり。行業は『維摩』に說くが如し。二には淨土の德業、謂ゆる、淨土の三昧法門なり。此門を得るが故に、一切の境界は心に隨つて廻轉す。金剛藏所入の佛國體性三昧の如し。是の如き等なり。住中の中偏に後の門に據るが故に。彼に又言はく、「佛の上妙平等境界に入るを名けて因淨と爲す」と。諸佛淨土の法門を、名けて上妙平等境界と爲す。菩薩の證入に能く異現有るを、

【三】第三に淨土の因を辨定するに先づ法報の二土に約して辨ず。

說いて因淨と爲す。果淨と言ふは、因に對して果を明す。汎く論ずれば二有り。一には相淨果、菩薩は曠く淨土の行業を修して妙淨土を得、諸相の莊嚴純淨にして穢土無し。二には自在淨果、果は前の淨土三昧の德業に依つて種種に異現す。『地經』に說く所の義は後の門に當る。故に彼經の中には、諸の衆生の心の所樂に隨つて與爲に示現するを、名けて果淨と爲す。別に隨つて廣く論ずれば、亦無量なるべし。相を辨ずること是の如し。

(三)次に第三門に、其因を辨定す。且く三土に約して以て其因を定む。先に法報の二土に約して因を辨じ「應」は後に別して說く。『法報二土の因相は云何。』『相を分つて之を論ずれば、無始の法性は是れ法土の因、諸度等の行は是れ報土の因なり。相を攝して之を言はば、二度並に無始の法性の諸度を用て因と爲す。中に於て義分すれば、緣有り、正有り。緣正相對するに、曲しくは兩門有り。一には別相說、法性の土は無始の法性を以て正因と爲し、諸度等の行を以て緣因と爲す。實報の土は諸土等の行を以て正因と爲し、親生を以ての故に法性を緣と爲す。二には通相說、二土並に無始の法性を用て、以て正因と爲す。俱に法性を以て正因と爲すと雖も、而も別すれば各因あり。法土の因とは本有の法體と後に顯るる時と、體に增減無く、隱顯を異と爲す。報土の因とは、本無の法體但向前の法土の因の上に於て、本より已來共緣起可生の義有つて、緣に遇つて便ち生ず。礦中の金は莊嚴の具を造作すべき有有るも、緣に遇つて便ち作すが如し。先に法有つて以て其中に在るに非ず。二土齊しく諸度の業行を用て、以て緣因と爲す。俱に諸度を以て緣因と爲すと雖も、

【次に等】次應土について論ず。

中に於て細分すれば其義も亦異なり。『異相は如何。』『諸度等の行に能生の義有り。之を說いて以て報土の緣と爲す。地水等の能く諸物を生ずるが如し。諸度等の行に能了の義有り。之を說いて以て法性土の緣と爲す。前の二是の如し。』次に應土を論ず。應土の因は有無不定なり。用を攝して體に從はば、更に別因無し。譬へば世人の形に因つて影有り、影に別物無きが如し。業見の土は異なり。我の爲すに非ざるが故に。用を分つて體を異すれば、亦因有りと說くは、是れ果なるを以ての故に。因に二種有り。一には同類因、還つて應化を以て應因と爲す。諸佛如來は土を得ること已に久しく、現に諸行を修して佛國を莊嚴す。彌陀佛國は現に四十八の弘誓の願及び諸の所行を修して、西方安樂世界を莊嚴するが如し。是の如き等なり。二には異類因、實に眞法を行じて應土の因と爲す。然るに應の中に就いて、義別に二有り。一には是れ法應、淨土三昧の法門力の故に種種の刹を現ず。二には是れ報應、本大悲願力の因緣を以て種種の土を現ず。義別是の如し。此二を別して分たば、法應の土は如來藏中の淨土の法門なり。之を以て因と爲す。報應の土は大悲願力之を以て因と爲す。悲願を主と爲し、諸行を統攝するを皆因と爲すなり。相を分つこと是の如し。相を攝して之を言はば、二應並に淨土の法門悲願を用て因と爲す。義に於て別して分たば、緣有り、正有り。緣正は不定なり。若し法應を論ずれば、淨土の法門を以て正因と爲し、大悲願等を以て緣因と爲す。若し悲願無くんば、彼法獨り應土を生ずること能はず。譬へば火珠能く火を出すと雖も、要ず日を見るに因るが如し。亦水珠能く水を出す

【經】南本涅槃第三十。

【四】第四に身に約して土を明す。中に三、一に本末によつて身土の相を明す。

【彼】華嚴經第三十六。

【經】華嚴經第二十六。

【次に等】二に廣狹を明す。

と雖も、要ず月を見ることを須ふるが如し。故に經に說いて言はく、「異法有るが故に異法出生し、異法無きが故に異法滅壞す」と。報應の土は大悲願等を以て正因と爲し、淨土の法門を以て正しく緣因と爲す。若し彼法無くんば、悲願有りと雖も應土生ぜず。譬へば音聲能く響を發すと雖も必ず澗谷に依り、面能く像を生ずとも必ず水鏡に依るが如し。問うて曰はく、『應土は實に從へば悲願法門力より起る。何んが眞と名けずして、乃ち說いて應と爲すや。』釋して言はく、『大悲願力の行等は正しく眞土を得、增上緣の力は兼て應土を生ず。正起に非ざるに由るが故に眞と名けず。緣力兼て生じ、人をして見聞せしむるが故に、說いて應と爲す。』因を辨ずること是の如し。

(四)次に第四門に、身に約して土を明す。中に於て、曲しくは三門の分別有り。一には身土の相を明すに本末に依り、二には身土の相を明すに廣狹に依り、三には身土の相を明すに總別に依る。本末と言ふは、相に隨つて之を言はば身報は土に依る。實を窮めて之を論ずれば國土は身に依る。故に『花嚴』に云はく、「寶花雲香の諸の莊嚴の具は皆如來法身の中より出づ」と。又彼にも亦言はく、「三世の劫數及び諸の佛刹は、一の佛身に於て一切悉く現ず」と。此は卽ち是れ其土の身に依るなり。佛土既に然なり。凡土も亦爾り。相に隨つて之を論ずれば身報は土に依り、實を窮むれば亦是國土は身に依る。故に經に云はく、「三界の虛妄は唯一心の作なりと宣說す」と。本末是の如し。次に廣狹を明す。其義不定なり。分別するに四有り。一には土寬身狹、常の所見の如し。良に以れば身は是れ自

【次に等】三に總別によつて身土の相を明す。

己の別報なり。所以に局狹なり。土は是れ共に果にして彼此同じく依る。所以に寛廣なり。二には身寛土狹、經の中に說くが如し。或は佛土有り、佛菩薩の毛孔の中に在つて住す。或は菩薩の衣文の中に在つて住し、或は菩薩の天冠の中に在つて住す。是の如き等なり。三には身土俱寛、實に據つて以て論ずれば、身は虚空の如く、土も亦之の如し。四には身土俱狹、衆生を化するに隨つて或は小身を現じ、或は方便土に居す。廣狹是の如し。

次に身土の相を明すに總別に依る。總相に之を論ずれば、三身一身三土は一佛身を以て一佛土に依る。義に隨つて別して分たば、彼三身は別して三土に依るを用て、法性の身は法性土に依り、實報の身は實報土に依り、應化の身は還應土に依る。問うて曰はく、『法身と法性土とは何の差別有つてか與に相依ると說く。』釋して言はく、『身土は性に別無しと雖も、相に隨つて異を分つが故に相依ることを得。身の實性を法性身と名け、土の實性を法性土と名く。此も亦同體にして義別に相依るなり。海の十相同體にして相依るが如し。』問うて曰はく、『應身は還應土に依る。能依の應身は初時には凡を現じ、後には則ち聖を現ず。所依の土は何んが是の如く初は穢、後は淨ならずして、始終恒に定るや。』釋して言はく、『化の爲に差別等しからず。或は土は身に隨ふ。彌陀佛の未だ成佛せざる前の國土は鄙穢にして、成佛の後の國界は嚴淨なるが如し。彼佛現に居して境を定めざるが故に。是の如きの一切なり。或は身は土に隨ふ。此釋迦久しく成佛すと雖も、而も過去無量世の中に於て、身は穢國に居して示して凡俗と爲り、正覺を取らざるが如し。是の如きの一切

【五】第五に共凡淨有無の義を明す

【經】華嚴經第二

なり。或は身は土に異なり。今の釋迦の身、穢國に居して成佛を現ずるも、土は現じて報と爲り、報は定んで改め難く、故に始終恒に穢なるが如し。佛の色身の如し。現じて報と爲すが故に、始終恒に定む。智行功德方便は報に非ず。所以に後に轉ず。故に初は凡を現じ、後に轉じて聖と爲る。』身土相對の分別應爾なり。

(五)次に第五門に、共凡聖有無の義を明す。昔より來、諸家の所說各異なり。生公の說くが如し。佛は色身無く亦淨土無し。但物を化せんが爲に應現して衆生の土の中に住す。是の如く說く者は衆生には土有り、諸佛には則ち無し。什公の所立は異なり。諸佛には土有るも衆生には全く無し。但佛化に隨つて土を現ずること不同なり。故に『維摩』に云はく、「衆生を化せんが爲の故に、此土を現じて不淨と爲すのみ」と。又人復說かく、「佛と衆生とは各別に土有り。各別に自業の果に住するが故に」と。此等の所說は義に兼通有り。偏に定むべからず。『是義云何。』『分別するに三有り。一には實を攝して相に從はば、衆生には土有るも諸佛には土無し。化に隨つて現じて衆生處に居するが故に。故に經に說いて言はく、「普賢菩薩は如如に依つて佛國に依らず」と。普賢既に爾なり。諸佛も亦然り。生公所立の義は此門に當る。二には相を攝して實に從はば、諸佛には土有るも衆生には土無し。一佛の土に於て、其業行に隨つて種種に異見す。佛の一身を衆生異見するが如し。故に經に說いて言はく、「佛土淸淨なること摩尼珠の如く、諸の衆生に隨つて種種に異現す」と。『維摩』にも亦云はく、「我此國土は常に淨なり。若し此は斯下劣の人を度せんと欲するが

【一八】第六に其所見の質の同異を明す。一に處について分別す。

爲の故に、是業惡不淨の土を示すのみ」と。什公の云ふ所の義は此に當る。經說既に然なり。生公の所立は佛には色身無く全く淨土無し。是義然らず。佛に色身無きは、前の涅槃章の中に廣く破するが如し。身既に無に非ず。土寧ぞ有らざらんや。又經の中に說かく、「菩薩は一切種の行を修習して淨土の因と爲す」と。經に因有りと說く、云何が果無からん。人亦救うて言はく、「全く果無きに非ず。但應にして眞に非ず。若し土果をして唯應にして眞に非ざらしむれば、『維摩』に說くが如き一切種の行を淨土の因と爲すも、應に是れ應修なるべし。修因既に實なり、果寧ぞ眞ならざらんや。若し自ら解せずんば、唯應に訪ね謂ふべし。何ぞ宜く輙ち謗すべき。佛果の德を謗する其罪至つて重し。後更に言ふ勿くんば、此は是れ第二の相を攝して實に從ふなり。三には相を分つて實に異すれば、衆生と佛とは各別に土有り。『是義云何。』『業を以て果を攝し、果は業に隨つて別なり。故に凡と佛とは各異に土有り。恒河水の如し。餓鬼は火を見、如來は水を見る。餓鬼は火業もて自ら火を見、佛は水業を以て自ら水を見る。各自の見は自業の果にして、執は他事を見るに非ず。佛土も亦爾なり。螺髻は心淨なれば土清淨なりと見、舍利は心垢なれば土不淨なりと見る。是の如き一切なり。』凡聖の有無之を辨ずること略して爾なり。

(六)次に第六門に、其所見の質の同異を明す。中に於て二有り。一には處に就いて分別し、二には事に就いて分別す。處に就くと言ふは、分別するに四有り。一には同處異見、一世界の業に隨つて不同なるが如く、種種に異見す。恒河中の如し。世人は水を見、餓鬼は火

【次に等】二に事について論ず。

【七】淨法聚果法中第四段に三佛の義を明すに七門の別あり、第一に釋名、中先づ法身佛。【地持論】第三。

を見、或は虛坑を見る。是の如きの一切なり。二には異處同見、娑婆界の如く、百億天下の處所は別なりと雖も所見は相似す。三には同處同見、同業の衆生は一處の中に於て共に一事を見る。恒河無量の衆生は同じく水を知見するが如し。是の如きの一切なり。四には異處異見、娑婆界及び安樂土の如く所見各別なり。是の如きの一切なり。處に就くこと是の如し。次に事に就いて論ず。一處の中に於て、義に隨つて四を分つ。一には是れ共一質異見なり。此娑婆一土地の事の如く、衆生は中に於て種種に異見す。或は見て水と爲し、或は復火を見、或は諸寶を見、或は虛空を見る。是の如きの一切なり。二には是れ共異質同見なり。一處の中に於て人の所見に隨つて種種に土異る。一段の衆生は之を唯一の土田世界と見る。是の如きの一切なり。三には一質一見なり。同類の衆生は共に一事を見、質體に別無し。四には異質異見なり。此娑婆の異種の衆生の如く各見を別にす。經の中に說くが如し「衆生劫盡きて大火に燒るる時も、我此土は安穩にして天人常に充滿すと見る」と。是の如きの一切なり。良に諸法は心に隨つて現ずる所にして、定性無きを以ての故に見に種種有り。淨土の義は以て具に擇すと雖も、且く共要略に隨つて辨ずること是の如し。

（七第一段）三佛の義に七門分別あり。名義を釋す一。相を辨ず二。時に約して分別す三。因を明す四。常無常を分別す五。說不說を分別す六。次第を分別す七。

第一に、名を釋す。三佛の義は『地持論』に出づ。『金剛般若』にも亦具に分別す。『名字は是れ何ん。』『一には法身佛、二には報身佛、三には應身佛なり。法身佛とは、體に就

【論】起信論。

いて名を彰す。法とは、謂ゆる、無始の法性なり。此法は是れ其衆生の體なり。實には妄想覆纒して已に於て用ふること無し。後に妄想を息めて彼法顯了するを、便ち佛體と爲す。顯法もて身を成ずるを、名けて法身と爲す。『勝鬘』に說くが如し、「隱れたる如來藏顯れて法身を成ず」と。法身の體に覺照の義有るを、法身佛と名く。問うて曰はく、『人、法身の體は是れ第一義空なりと說く。空は心智に非ず。云何が覺照あらん。』釋して言はく、『法身相を離るるを空と爲す。而も體は實に有なり。謂ゆる、過恒沙の法有り。此法は皆眞心に依つて之を說く。眞心の體は是れ神知の性なり。能く覺照有るが故に、覺と名くることを得。』『是義云何。』『是れ體の中に、本より已來、過無量恒沙の佛法を具するを以てなり。妄心の中に一切の諸の虛妄の法を具足するが如し。心は彼法に於て同體は照明し、由來障無し。故に論に說いて言はく、「本より已來、大智慧光明の義有るが故に。自性清淨にして識知の義なるが故に、遍く一切法界を照すの義なるが故に、名けて本覺と爲す」と。性は照明なりと雖も、而も無明闇障の爲に覆れて不覺に相似す。後に闇障を除き、彼心顯了して始めて眞心を顯す。其本性の內に法界を照す如くなるが故に、佛と名くることを得。』問うて曰はく、『眞心には覺照の義有り。佛と名くること爾るべし。所覺の法、性は覺照の義に非ず。云何が法身佛と名くることを得るや。』釋して言はく、『相を分つて之を言はば、能覺の眞心を說いて法佛と爲す。所覺の法性は是れ其眞諦法寶門の收なり。名けて佛と爲さず。相を攝して之を言はば、通じて亦佛と名く。』『是義云何。』『解するに四義有り。一

【報身佛とは等】二に報身佛の釋名

には所覺の法性は是れ佛體なるが故に、通じて名けて佛と爲す。如來藏は是れ衆生の體なれば、說いて衆生と爲すが如し。故に經に說いて言はく、「卽ち此法身五道に輪轉するを、名けて衆生と曰ふ」と。二には所覺の法性は佛智に非ずと雖も、而も是れ佛身なるが故に佛と名くることを得。佛の色身は覺照無しと雖も、而も佛と名くることを得るが如し。是の如きの一切なり。三には所覺の法性は佛智に非ずと雖も、而も是れ佛性なるが故に佛と名くることを得。五陰は衆生を成ずる法なれば、名けて衆生と曰ふが如し。四には所覺の法性は是れ佛の境界なり。佛覺照と爲つて能く佛智を生ず。其所生に從ふが故に、佛と名くることを得。故に『地論』に言はく、「智行處とは自ら證知するが故に。自證智とは彼に依つて生ずるが故に」と。『大智論』に智と智處とを說いて同じく般若と名くると共義相似す。此四義を具するが故に、通じて佛と名く。法佛是の如し。報身佛とは、酬因を報と爲す。有作の行德は本無く今有り。方便の修生なり。修生の德因に酬ゆるを報と名け、報德の體は之を名けて身と爲す。又德聚積するも亦名けて身と爲す。報身の覺照は之を名けて佛と爲す。問うて曰はく、『報佛も亦能く覺照す。前の法佛の覺照と何の異りかある。』釋して言はく、『體は一なれども義に隨つて以て分つ。眞心の體、本隱れ今顯るるを、說いて法佛と爲す。此眞心の體、緣の爲に熏發せられて諸の功德生ずるを、方に報佛と名く。法佛は金の如く、報佛は金の莊嚴の具と作るが如し。』問うて曰はく、『法佛は自ら能く覺照す。何んが報佛を用ふるや。』釋して言はく、『報無くんば法則ち顯れず。但法を顯さしむれ

【應身佛とは等】三に應身佛の釋名

【不定なり等】三佛所覺の義について明す。

ば、必ず報有つて生ず。故に報佛を立つ。又復法佛は心性の照明にして、事用に非ざるが爲の故に報佛を須ふ。金は淨なりと雖も、中に衣食あらざるが如し。故に須らく之を用て莊嚴の具と作すべし。彼も亦是の如し。又復法報は境を照す。其別異の義有るが故に、須らく別して分つべし。義は後に釋するが如し。』報佛是の如し。應身佛とは、感化を應と爲す。感化の中喩に從つて之に名く。『是義云何。』『世間に人の呼喚有れば、則ち響應有るが如似し。此も亦是の如し。衆生の機感は義呼喚して如來の自余の化事を示し、響應を問ふが如し。故に名けて應と爲す。應德の體は之を名けて身と爲す。之此應德聚積するを身と名け、應身の覺照する、之を目けて佛と爲す。』問うて曰はく、『應覺と眞とは何の別かある。』『自ら知る、是れ眞は化現に隨つて知るを、說いて以て應と爲す。』問うて曰はく、『三佛倶に能く覺照す。所覺の法は同と爲んや、異と爲んや。』釋して言はく、『不定なり。分別するに三有り。一には相に隨つて分別す。法佛の唯無始の法性を知るを、理法を知ると名け、報佛の能く行修の對治を知るを、行法を知ると名け、應佛三乘の化教を了知するを、教法を知ると名く。又復法佛は唯理法を知り、報佛は自行の法を了知す。自行門の中、通じて一切の自行を知るを主と爲す。是故に自行の法を知ると名く。應佛は化他の行法を了知す。化他門の中、亦一切の化他を知るを主と爲す。是故に化他の行法を知ると名く。二には寬狹を分別す。法佛は唯無始の法性を知る。此分齊に於て、理外に更に異法の知るべき無し。是故に法佛は唯理法を知る。報佛所知の境界は漸く廣し。通じて一切の理行の

【涅槃】南本第四

二法を知る。理の所證を知り、行の能證を知る。應佛所知の境界は最も廣し。通じて一切の理行の二法を知る。理行の法を知り、通じて一切を知る。衆生を化するが故に、理を知り行を知るを以て所詮と爲す。教を知るは能詮なり。又復法佛は唯理法を知り、報佛は理及び自行の法を知る。理を知るは所證、自行は能證なり。應佛は理を知り、亦自行及び化他の法を知る。通じて一切を緣じて衆生を化するが故に。理法を了知するは化他の所入、其自行を知るは起化の所爲作、其利他を知るは化他の用なり。三には實に就いて通じて論ず。法佛は通じて理教行の法を知る。如來藏無始の法性を知るは、是れ其理法なり。眞心を覺し已つて顯了して德を成ずるを、行法を知ると名く。己が所證の妙音法門を知つて能く無盡言說の本と爲り、能く法螺無盡の言音を生ずるを、教法を知ると名く。故に『楞伽』の中に宣說すらく「法佛も亦能く法を說く」と。『涅槃』に說くが如し。大般涅槃は能く大義を建てて種種の化を起し、金剛三昧は種種の說を起す。卽ち其事なり。報佛は亦理教の行法を知る。理を知るは所證、行を知るは能證、教を知るは所依なり。應佛は通じて義を知る。上に解するが如し。」問うて曰はく、『三佛は通じて理法を知る。所知の理は同と爲んや異と爲んや。』『通じて釋すれば義齊し。相に隨つて分たば別なり。』法佛は理に隱無く顯無きを知る。實を談して返つて望めば從來無緣なり。誰か能く我を覆はん。故に本隱るるに非ず。本既に隱るるに非ざれば、豈今顯るること有らんや。故に『維摩』に云はく、「我如來を觀ずるに前際より來らず、後際に去らず、今則ち住せず」と。報佛は理の緣に從

つて始めて顯るるを知る。事の分齊に於ては情外に理有り。情外の理は本情の爲に覆はるるが故に隱有りと說き、情を去れば理現ずるが故に顯有りと說く。應佛は理の緣起作用を知る。如來藏緣起して生死涅槃一切種の法を集成することを知るが故に、衆生に教へて一切の緣の中に、息めて以て眞を求む。所覺是の如し。然るに此三佛は相に隨つて別して分たば、名義各別なり。通じて之を論ずれば、俱に法身と名け、齊しく報と名くることを得。並に應と云ふことを得。『是義云何。』『三佛は法に依つて以て成ぜずといふこと莫し。是故に通じて名けて法身と爲すことを得。』又三は皆功德の法を以て成ず。故に法身と名く。良に三佛皆法身なるを以ての故に、彼涅槃の三事の中に於ては、三佛皆悉く法身の所攝なり。』因に望めて以て論ずれば、三俱に報と名く。『是義云何。』『報とは、是れ其果の別稱なり。』三佛は因に望むれば、並に果と稱することを得。是果は因に酬ゆるが故に、通じて報と名く。』化に約して以て論ずれば、三俱に應と名く。應は物の情に隨つて此三を顯示す。諸の衆生をして同じく見聞せしむるが故に。但經論の中には、三佛を別たんが爲に隱顯して名を異にす。故に初を法と名け、第二を報と名け、第三を應と名く。『等しく三佛を別つ。何が故に初を偏に名けて法と爲し、乃至第三を偏に名けて應と爲すや。』『此等は各義便に隨つて以て彰す。法佛は是れ體にして、本を顯せば法成ず。說法の義顯なるが故に、偏に法と名く。報佛は是れ相にして、本無く今有り。方便の修生酬因の義顯なるが故に、偏に報と名く。應佛は是れ用にして、化用物に隨ふ。應成の義顯なるが故に、偏に應と名

【八】第二に三佛の體相を辨ず、先づ一佛につく。
【或は等】次に分つて二とす。一に生身法身。
【二には等】二に眞應の不同に約して二とす。

く。」名義是の如し。

(八)第二門の中に、其體相を辨ず。佛德は無量なり。以て定論し難し。今此れ義に隨つて增數もて之を辨ず。總ずれば唯一佛なり。謂はく、三寶の中の一の佛寶なり。或は分つて二と爲す。二に兩門有り。一には生身法身、之を分つて二と爲す。王宮所生の相好の形を名けて生身と爲し、戒定慧等の五品の功德を說いて法身と爲す。二には眞應の不同を開分して二と爲す。自德を眞と名け、隨化所現を說いて以て應と爲す。眞は則ち是れ其法門の身、應は則ち是れ其共世間の身なり。是二は前の涅槃章の中に、具に廣く分別するが如し。今は略して之を辨ず。法門身とは、世の陰陽五行等の法の如く、亦一切衆生の體識の如し。心は是れ有なりと雖も、而も一の相無し。一の相無しと雖も、而も實に之有り。其世身とは、隨化の所現にして世の色像に同じ。或時は天に似、或は復人に似たり。是の如きの一切なり。衆相を現ずと雖も、而も一實無し。一實無しと雖も、爲さざる所無し。『涅槃』に說くが如し「如來は天に非ず不天に非ず、人に非ず不人に非ず」と。是の如き等の比は是れ其義なり。又復平等法門の身は形に所在無し。所として在らずといふこと無し。所在無きが故に菩提は處無し。處無きを以ての故に德法界に滿つ。故に『華嚴』に云はく「一塵處には而も佛身無しといふこと無し。德滿ずるを以ての故に、諸根の相好は皆法界に遍ず。海の實相の如く、亦虛空の如し。無礙不動にして一一充遍す」と。是義の中に於て眼を用て門と爲れば眼は法界に遍ず。諸根の相好及び佛刹土、一切の衆生は、皆悉く一眼中に

【或は等】分つて三となすに兩門あり、一に眞を開し、應を合して明す、一中に四義分別、一に相別を分つ。

現ぜざること莫し。是の如きの一切なり。共世身とは、形に所在有り。所在を以ての故に、化に彼此を別つ。諸根の相好は各分限有り。或は分つて三と爲す。三に兩門有り。一には眞を開して應を合し以て三種と說き、二には應を開して眞に合し以て三種と說く。眞を開して應を合し、以て三と說くとは、上に列する所の眞の中に二を分つが如し。法と報となり。應を以て一と爲す。故に三種と說く。此門の中に於て四義の分別あり。一には共相別を分ち、二には色心非色心等の三義に約して分別し、第三には五陰に約就して分別し、第四には六根に約就して分別す。相を分つと言ふは、此三佛の義は大小に通ず。大小既に殊なり。所說も亦異なり。小乘法の中には、如來の事識を宣說して體と爲す。事識の中に於て、戒定慧等の五品の功德を說いて法身と爲し、王宮所生の相好の形を名けて報身と爲し、如來の獼猴鹿馬等に化するを說いて應身と爲す。若し大乘破相門の中に就かば、如來の七識を宣說して體と爲す。中に於て破相の空理を宣說して、以て法佛と爲す。法は實に佛に非ず。是れ佛の體性なり。是れ佛の境界なり。能く佛智を生ずれば相從つて佛と名く。七識の智を緣じ空を照すの解を說いて報佛と爲す。空智を主と爲す。諸德悉く是なり。丈六等の化を名けて應佛と爲す。此一門は人に隨つて且く說く。論に文無し。經に說かずと雖も小乘に准依して、化に隨つて推立す。理亦傷くること無し。若し大乘顯實門の中に據らば、如來の眞識を宣說して體と爲す。佛に據つて以て論ずれば、眞識の外に更に餘識の佛と爲すべき無し。故に『唯識論』に言はく、「諸佛如來所行の處には唯藏識有つて更に

【次に等】二に色心非色心等の三義について分別す。先づ法身について

餘識無し」と。餘識無きが故に、三佛皆眞識を用て體と爲す。眞識の心本隱れ今顯るるを、說いて法身と爲す。卽ち此眞心、緣の爲に熏發せられて諸の功德生ずるを、說いて報佛と爲す。『地經』に莊嚴の具の譬を宣說し、正しく此義を顯す。如來藏の中の眞實緣起法門の力もて種種の化を起すを、說いて應佛と爲す。『涅槃』に說くが如く、大般涅槃能く大義を建て種種に現化すとは、卽ち其義なり。相を分つこと是の如し。此一門竟る。次に、色心非色心等の三義に就いて分別す。法佛の體の中に、備に三義を具す。法身の色根相好光明は是れ其色法なり。『此義云何。』『涅槃』に說くが如し、「佛性は是れ色にして眼を以て見るべし。彼色顯了なるを法身の色と爲す」と。又『涅槃』に念法の義を說く。色に非ず色を斷ず。而も亦是れ色なり。陰に非ず陰を斷ず。而も亦是れ陰なり。入に非ず入を斷ず。而も亦是れ入なり。界に非ず界を斷ず。而も亦是れ界なり。諸佛菩薩所遊行の處は常恒不變なり。此等顯了なるを法身の色と爲す。又『涅槃』に說く、「光明とは卽ち是れ涅槃常住の法なり。因緣に從はず。云何が其因緣の相を問はん」と。是の如きの一切なり。亦因緣有り。無明を滅するに因つて熾然たる三菩提燈を獲得す。是因緣を以て是因緣有り、是光明有り。此の如きの光明は當に知るべし、亦是れ法身の色なり。諸根の相好も類して亦同じく爾なり。眞識の心緣に從つて顯了するを、說いて智慧三昧の行等と爲す。是れ其心法なり。眞如の空一切の心等の相を絕離すれば、是れ其非色非心の法なり。非色を以ての故に、『維摩』に說いて言はく、「色を觀ぜず、色の如を觀ぜず、色の性を觀ぜず」と。色有を

【報佛の等】次に報佛につく。

取らざるを不觀色と名け、色無を取らざるを不觀如と名け、色法非有無の義を取らざるを不觀性と名く。又『涅槃』に云はく「無色大般涅槃に入るとは、當に知るべし、亦是れ非色の義なり」と。非心を以ての故に『維摩』に說いて言はく「受想行識を觀ぜず、受想行識の如を觀ぜず、受想行識の性を觀ぜず」と。義は前の解に同じ。又『地經』に說かく、「自體は本空、智は自空なるが故に、當に知るべし、亦是れ非心の義なり」と。有人宣說すらく「法體の體は唯一の空理にして、都て色心に非ず」と。『涅槃』に說くが如し、「空を教へて實を得。云何が唯空ならん」と。又經に說くが如し、「如來の藏は是れ眞識の心なり」と。復言はく「佛性は體性是れ色なり。彼法顯了なるを說いて法身と爲す。云何が說いて都て色心無しと言はん」と。有人復言はく「法佛の體は唯色と心となり。一向に空に非ず。設し空と言はば但他相無く、而も體實に有り」と。『地經』に說くが如し「自體本空なり。云何が空に非ざらん」と。又論に釋して言はく「自體空とは、智自ら空なるが故に。云何が說いて唯他相無しと言はん」と。又『楞伽』に云はく「如來藏の中の過恒沙の法は一切は皆法無我に依つて說く。彼法顯了なるを說いて法身と爲す。云何が空ならざらん」と。又復彼『起信論』に說くが如し。有人問うて言はく「如來藏の中に一切の法を具す。便ち謂はく、色心各自體有り」と。此執を對破して一切の法は眞如に依つて說くと說く。眞如は猶ほ是れ空の別稱なり。彼法顯了なるを說いて法身と爲す。云何が空ならざらん。法佛是の如し。報佛の體は三義を具す。相好の身は是れ其色法なり。『彼相は如何。』『分別するに三有

り。一には法に依つて說く。如來の報身諸根相好光明音聲は、彼平等法門の身と同じく妙寂なり。相虛融無礙なりと雖も、還、陰陽五行の法に似たり。『涅槃』に說くが如し、「月愛光明は是れ光無限にして、冷に非ず熱に非ず、青に非ず黃に非ず、赤に非ず白に非ず。此色邊際有ること無し」と。其光既に然なり。諸根相好及び佛の音聲も一切同じく爾なり。微妙にして唯佛のみ獨り見る。故に『涅槃經』に金剛心を明す。妙絕の衆相圓に諸義を備ふ。唯如來のみ有つて乃ち是義を知る。餘人は及ばず。二には應に約して辨ず。『華嚴』に說くが如し。佛の應身に於て、一一の相の處に各無量百千の相海有り。名字不同にして、作用各異なり。是相有りと雖も、而も見るべからず。梵天王の頂上に寶珠有つて、而も見叵きが如し。此相好は地上の菩薩漸く能く之を見る。三には報に隨つて說く。應化所現の諸根の相好光明音聲は、體即ち是れ報なり。過去の淨業より生ずるを以ての故に、此は即ち是れ佛の福德莊嚴なり。故に『涅槃』に云はく、「福莊嚴とは、有爲有漏有礙非常なり、是れ凡人の法なり」と。即ち其義なり。此報の麁相は地前も亦見る。問うて曰はく、『何が故に此三異有る。』『因別なるに由るが故に。』『因別とは如何。』『修に三種有り。一には隨事修、第三の報を得。良に修の時有の見るべきに隨ふを以て、是故に報を得ること有の見るべきに隨ふ。又本修の時有に隨つて物を益す。二には捨相修、有を破して空に入り、第二の報を得。良に修の時所有の諸行は空に依つて以て成じ、相として見るべきもの無きを以て、報を得ること還爾なり。相として見るべきもの無し。又復修の時空に依つて德を

【應佛の等】次に應佛について。

【次に等】三に五陰もて分別す、先づ法佛。

成ず。廣多無盡なり。報を得ること還爾なり。廣多無盡なり。三には依實修、妄を息めて眞に契し、第一の報を得。良に修の時無念無緣なるを以て、報を得ること還爾なり。相無くして緣を離る。又復修の時行法界に合して虛融無礙なり。報を得ること還爾なり。身法界に滿じて虛融無礙なり。又復修の時常にして動ぜず。報を得ること還爾なり。常にして動ぜず。報身は因に隨つて此三の別有り。報土も亦然なり。宜く復深記すべし。色法是の如し。智慧三昧解脫の行等は是れ其心法、數滅涅槃は是れ其非色非心の法なり。問うて曰はく、『數滅は是れ涅槃門なり。云何が佛と名くる。』釋して言はく、『相を分たば涅槃は佛に非ず。相を攝して之を言はば、涅槃は是れ佛なり。故に『華嚴』の中に說く「涅槃は佛永く滅度するが故に」と。』應佛の體の中にも亦三義を具す。所觀の色形は是れ其色法、應化修成の智慧行等は是れ其心法、五陰所成の假名の行人を非色心と名く。又『毘曇』の如し。化に隨つて命根も亦非色心なり。此二門竟る。次に第三門に、五陰もて分別す。色受想行識は是れ其五なり。法佛の體の中に、備に五陰を具す。『涅槃』に說くが如し。色は是れ佛性なり。乃至受想行識は是れ性なり。彼性顯了なるを說いて法身の五陰の法と爲すなり。又『涅槃』に說かく「色は是れ無常なり。是色を滅するに因つて涅槃常住の色を獲得す。受想行識も亦復是の如し。乃至色とは是れ寂靜ならず。是色を滅するに因つて涅槃寂靜の色を獲得す。受想行識も亦復是の如し」と。此等も亦是れ法身の五陰なり。色有りと說くと雖も但色法を離る。猶し比丘の無作戒法の事として取るべからざるがごとし。餘も亦

【次に等】四に六根について三佛を分別す。先づ法佛

是の如し。問うて曰はく、『經に「無色大般涅槃に入る」と說く。云何が法身に色有りと宣說するや。』釋して言はく、『經に無色大般涅槃に入ると說くは、凡下虛僞の色無きなり。眞色無きには非ず。故に『涅槃』に云はく「眞解脫とは亦空不空なり」と。其空と言ふは、謂はく、生死の二十五有無し。不空と言ふは、謂はく、善色の常樂我淨有り。又彼經に說かく「二乘の解脫を名けて非色と爲し、諸佛の解脫は之を名けて色と爲す」と。故に知んぬ、諸佛の法身は色有ることを。』問うて曰はく、『經に「大般涅槃は但寂樂有つて受樂無し」と說く。云何が法身に受有りと宣說するや。』『是は前に釋す。其凡下分別の受無きなり。平等納法の受無きに非ず。故に之有りと說く。』『是義云何。』『受に二種有り。一には法の相應を納受し法を納めて心に在り。二には境界違順等の事を受く。之を名けて受と爲す。謂はく、苦樂等なり。樂受の心は境を受けて順じ、苦受の心は境を受けて違し、捨受の心は境界を受けて不違不順なり。諸佛如來は但初門有つて第二無し。第二無きが故に受樂無しと名く。初門有るが故に受陰有りと名く。』問うて曰はく、『諸佛は分別の想滅す。云何が想有る。』釋して言はく、『諸佛妄想の心滅して明淨了法の想無きに非ず。明かに一切諸法の相に達するが故に。』行と識とは前に類して解すべし。法佛是の如し。報應二佛の五陰を具足する義の在ること知るべし。此三門竟る。次に、六根に就いて三佛を分別す。眼耳鼻舌身意は是れ六なり。法佛の體の中に備に六根を具す。『地持』に說くが如し。性種性とは、六入殊勝展轉相續して無始法爾なるを性種性と名く。彼六、果に至つて即ち法

【應を開し等】二に應を開し眞を合して三と說く。先づ名字を明す。

【相狀は等】次に相を辨ずるに四、一に相別を分つ。

身の眼耳等の根と名く。又經に說くが如し」、衆生の身中には如來の眼、如來の耳等を具す」と。模中の像の如し。彼性顯了なるを說いて如來の眼耳等の根と爲す。之有りと說くと雖も、相もて取るべからず。當に知るべし、悉く是れ法門の義異なることを。』彼に何の用か有る。』『是れ眼法門を緣起するを以ての故に、出生する者は盡く報應の眼根なり。陰陽五行の法に依つて一切の世事を出生し造作するが如し。眼既に然るが如く、餘の根も亦爾なり。報佛の六根は麁法身に同じ。有にして無相、無相にして有なり。應佛の六根の義在ること知るべし。上來の一門に眞を開し應を合して、以て三種を說く。應を開し眞を合して三と說くとは、彼『七卷金光明』に說くが如し。彼中有の一の三身の品に專ら此義を論ず。『名字は是れ何ん。』『一には眞身佛、二には應身佛、三には化身佛なり。前の法と報とを合して眞身と爲し、名けて合身と爲す。前の應身の中に二種を開分す。應と化とを名けて開應と爲す。』『相狀は云何。』『中に於て分別するに、曲しくは四門有り。一には其相別を分ち、二には所以を立つるを明し、三には諸佛に約して以て三身を辨じ、第四には涅槃に約就して之を辨ず。相を分つと言ふは、此三佛の義は釋するに二有り。一には『涅槃』に准依す。法報の兩佛を名けて眞身と爲し、王宮所生の道樹に現前するを說いて應身と爲し、此應身に依つて無量無邊の化佛を出生するを名けて化身と爲す。故に『涅槃』の中に、如來衆生の望をして滿足せしめんと欲し、其身上の一一の毛孔に於て無量の佛を化し、大衆の供を受くるは即ち是れ化身なり、釋迦自ら純陀の供を受くるは、即ち是れ應

【次に等】二に所以を立つるを明す中に四、一に起因の不同に三身を立つ。

身なり。偈の中に説く所の如來常住は、即ち是れ眞身なり」と。二には『金光明』に依る。法報の兩佛は是れ其眞身なり。衆生を化するに隨つて佛果を示現し、相好を具足して威光殊勝なるを悉く應身と名く。此れ即ち向前の應化の兩佛なり。此門の中に入れて同じく應身と名く。佛は衆生に隨つて種種の形を現ず。或は人或は天、或は龍或は鬼なり。是の如きの一切なり。世の色像に同じて佛形と爲らざるを、名けて化身と爲す。此三身の中眞身を本と爲す。眞に依つて應を起し、應に依つて化を起す。煩惱に依つて業行を起し、業に依つて報を受くるが如し。相を分つこと是の如し。此一門竟る。次に第二門に、所以を立つるを明す。今此には且く『金光明經』に辨ずる所に依つて之を論ず。四種の義を以ての故に三身を立つ。一には起因同じからず、二には治障異有り、三には所淨を差別す、四には隨化に殊有り。起因の不同に三身を立つとは、彼經に説くが如し。如來昔修行地の中に在つて、衆生の爲に種種の行を修せんと願ず。彼行滿足して究竟自在の地に至ることを得。能く衆生の多種に隨つて、辨了して種種の形を現ず。故に化身を立つ。彼經に復説かく「佛昔因に在つて、衆生の爲に眞諦を演説して、生死涅槃一味に通達せしめんと願じて佛身を趣求す」と。又衆生の爲に如來無邊の佛法を怖畏する佛の一種の相好の形を求めて、之を利益す。彼行滿足して能く衆生の爲に佛身を示現し、眞諦を演説して而も之を度脱す。故に應身を立つ。又佛因中に自ら諸行を修して諸の煩惱を斷じ、一切の善を具し、妄想を息除して實際を趣求す。彼行滿足して如實の果を得。故に眞身を立つ。其眞

【治障の異とは等】二に治障の異に三身を立つ。

【所淨の別とは等】三に所淨の別に三身を立つ。

身とは、謂はく、如如の法及び如如の智なり。其如如の法とは即ち是れ法身、如如の智とは即ち是れ報身なり。此は是れ第一の起因の不同なり。故に三身を立つ。治障の異とは、彼經に說くが如し。一切の凡夫は三相に縛せられて三身を得ず。彼相に翻對するが故に三身を立つ。三相と言ふは、一には分別相、謂ゆる、煩惱妄分別の心なり。佛の眞身を障ふ。彼を斷除するが故に佛の眞身を得。二には依他起相、謂ゆる、諸業は煩惱に依つて起る。此罪業を以て佛如來の相好の果を障ふ。彼を斷除するが故に佛の應身を得。三には成就相、謂はく、前の業に依つて苦報を成就す。此苦報定礙の形を以て佛如來の無障礙の化を障ふ。彼を斷除するが故に佛の化身を得。又經に復言はく、「一切の凡夫は三種の心有つて三身を得ず」と。彼に翻對するが故に三身を建立す。三心と言ふは、一には起事心、謂ゆる、四住所起の煩惱なり。此惑麤强にして能く業事を起すを起事心と名く。佛の化身を障ふ。菩薩は伏結の道を修習して此心を伏除す。故に化身を得。二には依本心、謂はく、四住地の無明に依つて起るを依本心と名く。佛の應身を障ふ。菩薩は斷結の道を修習して此心を斷除す。故に應身を得。三にて根本心、謂はく、無明地は彼四住の煩惱の與に本と爲るが故に本心と名く。佛の眞身を障ふ。菩薩は勝拔の道を修習して此本心を滅す。故に眞身を得。此は是れ第二の治障の不同なり。故に三身を立つ。所淨の別とは、彼經に說くが如し。如〱の法性は極淸淨なるが故に法身を攝受す。此を眞心と名け、法身と爲すなり。如如の智慧は極淸淨なるが故に。應身を攝受す。眞に依つて用を起すが故に、智淨なれば應身

【隨化不同に等】四に隨化不同に三身を立つ。

【次に等】開應合眞を明す中、三に諸佛に約して三身を辨ず。

【次に等】四に涅槃に約して三身を辨ず。

【或は增して等】次に四種を明すに三門あり、第一に眞を開し應を合す

を攝受すと說く。三昧門は極清淨なるを以ての故に化身を攝受す。定に依つて用を起すが故に、三昧淨なれば化身を攝受す。此は是れ第三の所淨の不同なり。故に三身を立つ。隨化不同に三身を立つとは、彼經に說くが如し。佛は衆生多種の意に隨ふが故に化身を示現す。此れ凡夫の爲にす。佛は弟子一種の意に隨ふが故に應身を示現す。此れ聲聞の爲にす。聲聞の弟子同じく佛を見んと求むるを、名けて一意と爲す。佛此意に隨つて唯佛身を現ず。之を說いて應と爲す。諸の菩薩破相の心に隨ふが故に眞身を顯示す。佛の眞身は一切の相を遍するを以て、執相の境に非ず。應身の其れ唯一相なるに同じからず。化身の種種相を現ずるに同じからず。菩薩は一異等の相を取らざるが故に、爲に之を顯す。此は是れ第四隨化の不同なり。故に三身を立つ。上來の四門を合して、第二に其三身を建立する所以を明すと爲す。此二門竟る。次に諸佛に約して以て三身を辨ず。彼經に說くが如し。其化身とは佛と同事なり。諸の如來變化の事と同じ。其應身とは佛と同意なり。諸佛如來佛法を顯揚する化益の意に同じ。其眞身とは佛と同體なり。一切の諸佛は如如の法、如如の智を以て體と爲すが故に。此三門竟る。次に、涅槃に約して以て三身を辨ず。彼經に說くが如し。涅槃に二有り。一には是れ有餘、化に隨つて滅を現ず。二には是れ無餘、實に體寂を證す。前の二身に依つて有餘を宣說し、後の眞身に依つては無餘を宣說す。又經に宣說すらく、「前の二身に依つて、常に世間に隨つて無餘に住せず。後の眞身に依つて、常に寂にして相を離れて有餘に住せず」と。三身是の如し。或は增して四と說く。四に三門有り。一には

【應を開し等】二に開應合眞の四を明す。

眞を開し應を合して以て四種と說き、二には應を開して眞を合し、三には眞應俱に開す。眞を開し應を合して以て四を說くとは、『楞伽』に說くが如し。一には應化佛、二には功德佛、三には智慧佛、四には如如佛なり。故に彼經に言はく「云何が應化佛、云何が功德佛、云何が智慧佛、云何が如如佛なる」と。四が中の初の一は是れ佛の應身、後の三は眞身なり。應を以て一と爲し、眞を分つて三と爲す。是故に名けて眞を開して應を合すと爲す。眞の三の中に就いて、功德智慧は是れ佛の報身なり。報德多しと雖も要は唯福智なり。福を功德と名け、智を智慧と名く。如如の一種は是れ佛の法身なり。『勝鬘經』の中にも亦此相有り。彼に云はく「如來の妙色身等は是れ佛の應身なり」と。復言はく「如來の色無盡とは是れ功德身なり。智慧も亦然り、是れ智慧身なり。一切の法常は是れ法性身なり」と。此は是れ第一の眞を開し應を合して以て四種と說くなり。應を開し眞を合して四と說くとは、彼『七卷金光明』に說くが如し。一には化身にして應に非ず。如來物の爲に等しく一切龍鬼等を示現して佛と爲らず。化にして應に非ずと名く。又經に說いて言はく「佛涅槃の後願力を以ての故に、身を遺して物を益す。此も亦是れ其化身にして應に非ず」と。二には應身にして化に非ず。經に自ら釋して言はく「謂はく、地前の身、地前の菩薩所見の佛身なり。乃ち三昧法門の中に從つて現ず。是れ人天六道の所攝に非ず。是義を以ての故に、應にして化に非ずと名く」と。三には亦は應亦は化なり。謂はく、諸の聲聞所見の佛身なり。彼は如來相好の形の道に隨つて成佛するを見るが故に、名けて應と爲す。人

【眞應倶に等】第三に眞應倶に開して四を說く。

【或は等】分つて五となすについて

【或は等】分つて六となすについて

中に在つて受生の相は人類に同じと見るが故に、名けて化と爲す。四には應に非ず化に非ず。謂はく、佛の眞身なり。此四身の中前の三は是れ應、後の一は是れ眞なり。應を三と爲すに由るが故に應を開すと名け、眞を一と爲すに由るが故に眞を合すと名く。復四種有り。應を開し眞を合して亦四と說くことを得。一には眞身佛、謂はく、法と報となり。二には應身佛、王宮所生の道樹に現成す。三には化身佛、應身に依つて無量無邊の化佛を示現す。四には化身非佛、謂はく、一切の龍鬼等の形を示す。末を攝して本に從はば是れ佛の所爲、通じて亦是れ佛なり。是れ亦第二の應を開し眞を合して以て四種と說くなり。眞應倶に開して四と說くとは、眞の中に二を分つ。法と報となり。義は上に解するが如し。應の中に二を分つ。應と化となり。亦上に釋するが如し。又應の中に就いて更に二を分つことを得。一には是れ法應、謂はく、三昧法門力に從つて現ず。『涅槃』に說くが如し。大般涅槃は能く大義を建て、金剛三昧は種種に悉く是の如きの一切を爲す。是れ其法應なり。二には是れ報應、本大悲大願力を以ての故に、能く衆生に隨つて種種異を現ず。此如來報身に從つて起るを、名けて報應と爲す。一の眞の中の義に法報を分ち、一の應の中の義に兩應を別つ。故に合して四有り。或は分つて五と爲す。謂はく、如來の五陰の身なり。又戒、定、慧、解脫、知見五品の功德も亦五と說くことを得。義は後に釋するが如し。或は分つて六と爲す。前の法佛の中義を別つて二と爲す。一には體顯佛、二には緣顯佛なり。德を攝して本に從はば名けて體顯と爲し、德を攝して緣に從はば名けて緣顯と爲す。體顯

【亦七と等】分つて七となすについて。
【亦八と等】分つて八となすについて。

と言ふは、如來藏性本より已來何の縁に從つてか顯了の義有らん。縁に遇つて便ち顯る。縁顯と言ふは、曠く諸行を修し、垢染を斷除して法界を淨む。體顯了すと雖も必ず縁に藉り、縁能く顯ると雖も必ず體を顯す。此二は體一にして義に隨つて二に分つ。前の報佛の中、義別して亦二あり。一には體作佛、二には縁作佛なり。德を攝して本に從はば、說いて體作と爲す。莊嚴の具は是れ金の所作なるが如し。德を攝して縁に從はば、是れ其縁作なり。莊嚴の具は工匠の所作なるが如し。體能く作すと雖も作は必ず縁に藉り、縁能く作すと雖も作は必ず體に依る。此二は體一にして義に隨つて二を分つ。前の應佛の中義別して亦二あり。一には法應佛、二には報應佛なり。義は上に辨ずるが如し。用を攝して本に從はば、應は法より起る。三昧法門の所起なるが故に。用を攝して末に從はば、是れ報より起る。大悲願力の所起なるが故に。法能く起ると雖も必ず悲願に藉り、悲願等の行復能く起ると雖も必ず法に依る。此二は體一にして義に隨つて二に分つ。故に合して六と說く。亦七と說くことを得。向前の六種は實に縁の別に從ふ。縁を廢して實を論ずれば、隱無く顯無し。復以て一と爲す。前に通じて七と說く。亦八を分つことを得。前の第七の隱顯無き中に就いて、義別して二有り。一には實に就いて通じて論ず。本より已來實の外に縁無し。縁既に有らず。知んぬ、復何に約してか隱と說き顯と說かん。隱無きを以ての故に本則ち因に非ず、顯無きを以ての故に今則ち果に非ず。此れ則ち本來自性常に淨にして無爲法身なり。二には縁を息めて實を證す。隱無く顯無く、佛に至つて返つて望めば本より縁

【或は十を等】分つて十となすを明す。

【華嚴】第四十三

無し。緣無きを以ての故に、本則ち隱に非ず、今始めて顯に非ず。本の時隱に非ざれば因と名くべからず、今始めて顯るるに非ざれば果と名くべからず。故に『涅槃』の中に如來を讚嘆して「無因無果報の法を獲得す」と。此一門は因に從つて修得し、乃至得る時因として從ふべきもの無し。故に『涅槃』に云はく「世諦の慈に因つて第一義の慈を得。第一義の慈は因緣に從はず。餘德悉く爾なり」と。隱顯無き中義に此二を別つが故に、合して八と成る。或は十を分つことを得。『花嚴』に說くが如し。彼に兩文有り。大同小異なり。一處に說いて言はく「一には正覺佛、二には願佛、三には業報佛、四には住持佛、五には化佛、六には法界佛、七には心佛、八には三昧佛、九には性佛、十には如意佛なり」と。此れ直に名を列して更に解釋無し。一處に復言はく「一には無著佛、世間に安住して正覺を成ずるが故に。此は猶是れ前の正覺佛なり。二には願佛、出生を願ずるが故に。此は卽ち是れ前の第二の願佛なり。三には業報佛、信成就の故に諸行皆成ず。且く一信に就く。此は卽ち是れ前の業報佛なり。四には住持佛、世間に隨順して斷絕せざるが故に。此は卽ち是れ前の住持佛なり。五には涅槃佛、永く滅度するが故に。此一は前の化佛と小異なり。統て之を會し、大悲を捨せず。大願力の化を方に名けて大涅槃の義と爲すことを得。故に前の化佛は是れ涅槃を顯す。六には法界佛、一切處に於て至らざること無きが故に。此れ前と同じ。七には心佛、善く安住するが故に。此も亦前に同じ。八には三昧佛、無量恆沙の功德を成就して所著無きが故に。此も亦前に同じ。九には性佛、善く決定するが故

【九】第三に時に約して分別す。中釋について先づ異說を擧ぐ。

【次に等】二に過非を辨ず。

に。此も亦前に同じ。十には如意佛、普く覆ふを以ての故に。亦前に同じ」と。別に隨つて廣く分たば亦無量なるべし。今は一門に據つて且く三種を說く。相を辨ずること是の如し。

(九)次に第三門に、時に約して分別す。時別に三有り。一には是れ凡の時、善趣已前なり。二には是れ聖の時、種性已上なり。亦此地前を通じて凡の時と名け、初地已上を名けて聖の時と爲す。三には是れ果の時、後際に在り。此三時に約して以て三佛を辨ず。初の釋の中に就いて先に異說を叙し、次に過非を辨じ、後に正義を顯す。『異說は如何。』『有人宣說すらく、「三佛の體は悉く是れ本有なり」と。』『何が故に是の如くなる。』『三佛は皆悉く實に就いて辨ず。實佛に據つて論ずれば、本來因無し。因本有にあらず。如何が待對して三佛をして偏に果時に在らしめん。設し果に在りと言はば、乃ち是れ世俗凡情の所見にして、正道の理に非ず。又經に說くが如し、「如來藏の中に一切の法を具す」と。明かに知んぬ、三佛は悉く是れ本有なることを。此は是れ一の論なり。有人復言はく「報應の兩佛は生因の所生にして偏に果時に在り。法佛の體は生因の生ずるに非ず。一向に本有なり」と。此は是れ兩論なり。有人復言はく「三佛は是れ果にして偏に果時に在り。因中に設し有らば但性と名くべく、佛と名くることを得ず」と。此は是れ三の論なり。』異說是の如し。

次に過非を辨ず。初に三佛皆悉く本有なりと言ふ、此義然らず。若し實に就かば本來因無しと言ひ、三佛をして悉く本有ならしめんと欲すれば、本來因無きに何に酬いて報と

名けん。若し實に就かば本來因無く、亦衆生無し。何に隨つて應と名けん。此言文壞す。何んが多難を待たん。若し經に說いて、「如來の藏に一切の法を具し、三をして本有ならしむ」と言はば、此言も亦非なり。『勝鬘』に說くが如し。過恆沙の法隱る時を藏と名け、顯るるを法身と爲す。是れ則ち彼法身法の中に就いて一切を具すと說く。何んが報應を開せん。若し三佛をして皆悉く本有ならしむれば、是れ則ち三佛皆了因にして顯れ、生因の生ずるに非ず。彼『金剛般若』の中に說くが如し。經を受持する功德は實に於て了因と名け、亦餘の生因と爲す。彼論に自ら解す、「實に於ては了因は法佛に望め、餘の生因と爲さば報應に望む。報應に望めて既に生因と言ふ。云何が本有ならん」と。又『涅槃』に云はく、「若し菩提は是れ本有なりと說かば、波羅夷を犯し佛法僧を謗ず。菩提は猶是れ報應の兩佛なり。云何が本有ならん」と。又『涅槃』の中には、廣く乳酪樹子等の譬に就いて其本有を破す。若し便ち報應の二佛本有ならば、彼何んが破せん。又『涅槃』に云はく、「本有つて今無く、本無くして今有り。三世有法ならば是處有ること無けん」と。若し報應二佛をして本有ならしむれば、云何が本有つて今無く、本無くして今有り、三世有法にして是處有ること無けんと言ふことを得ん。便ち是處有り。云何が是處有ること無けんと言はん。此偈の義は彼經に具に解す。異釋することを得ず。又『涅槃』の中に四種性を說く。或は佛性有り。闡提人には有り、善根人には無し。謂はく、闡提人には不善の性有り。或は佛性有り。善根人には有り、闡提人には無し。謂はく、善根人には善根の性

【涅槃】南本第三十二。

有り。或は佛性有り。二人倶に有り。倶に理性有り。或は佛性有り。二人倶に無し。其果性無し。若し報應二佛をして本有ならしむれば、云何が二人倶に無しと說くことを得ん。二人倶に無きことは經に說く。非し難し。三佛本有なれば何んが須く更に立つべき。報應本有なれば佛法の大過なり。宜しく速に捨離すべし。宜しく强ひて立つべき無し。此は是れ一の非なり。第二家の說かく、「法佛の一種は一向に本有なり」と。是れ亦然らず。『勝鬘』に說くが如し。過恆沙の法隱るる時を藏と名け、顯るるを法身と爲す。是れ則ち法身の彰るるを顯に在りと名く。那ぞ本有なることを得ん。又法佛の因は即ち是れ佛性なり。『涅槃經』に言はく「衆生佛性を名けて法佛と爲さず」と。云何が法佛本有なりと言はん。此は是れ兩非なり。第三家の說かく「三佛は果に在り。因中には定んで無し」と。是も亦然らず。若し法佛一向に本無しと言はば、『維摩』に說くが如し。「一切の衆生は即ち菩提の相即ち涅槃の相なり」と。『涅槃』にも亦云はく「大般涅槃は本より之有り。今に適たるに非ざるなり」と。菩提涅槃は法佛の別稱なり。菩提涅槃既に本有なることを得。法佛云何が一向に本無ならん。又經に說くが如し「衆生の身の中に如來の智、如來の眼等を具す」と。何の乏少する所あつてか法佛と名けざらん。若し報應一向に本無なりと言はば、是れ亦然らず。『涅槃』に說くが如し。若し人有つて、「是菓子の中に樹有りや無きや」と問はんに、應に正しく答へて言ふべし、「亦は有り亦は無し」と。子より樹を生ずるが故に有と名くることを得。即ち未だ樹有らざるが故に無と言ふことを得。乳酪等の譬も類して亦同じく然な

【次に等】三に正義を顯す。

り。說く所是の如し。若し人有つて「衆生の身中に佛有りや無きや」と問はんに、應に正しく答へて言ふべし「亦は有り亦は無し」と。此より彼を生ずるが故に有と言ふことを得。即ち未だ佛有らざるが故に無と名くることを得。有無合して說くを、名けて中道と爲す。云何が輿に一向に定んで無しと言はん。此は是れ三の非なり。非を辨ずること是の如し。

次に正義を顯す。三佛の義、果に在つては圓備し、聖の時は分に有り、凡の時は不定なり。若し法佛を論ずれば亦有無なり。『是義云何。』『分別するに三有り。第一には緣に約し實に就いて分別す。緣に約して實を論ずれば、實緣の爲に隱れて後顯るる時、淨德を本と爲す。但佛性と名けて佛と名くることを得ず。故に經に說いて言はく「衆生佛性を名けて佛と爲さず」と。實に就いて實を論ずれば、實の外に緣無し。緣とは眞を覆ふこと無し。更に何の所にか待つて輿に佛と名けざる。故に經に說いて言はく「一切衆生は即ち菩提の相、即ち涅槃の相なり」と。佛も亦之の如し。二には一人の始終に約して分別す。始に據つて之を論ずれば、實に情の爲に隱れ、隱に在つて未だ了ならず。佛と名くることを得ず。佛に至つて返つて從來情無きに望むれば、由來是れ佛なり。故に經に說いて言はく「凡夫成佛の前には菩提を煩惱性と爲し、聖若し成佛の時には煩惱是れ菩提なり」と。又經に亦言はく「佛は衆生即ち菩提の相にして復更に滅せざるを知る」と。更に滅せざるが故に、本是れ涅槃なり。佛も亦之の如し。三には凡佛二人に約して分別す。凡佛は相異なり、眞體殊らず。皆如來藏性を以て佛の體と爲さずといふこと莫し。凡に據つて體を論ずれば、

【二】第四に三佛の因を辨定す、先づ法報について、論ぜんに、中に二、一に生了分別。

體惑の爲に隱れて後顯るる時、淨德を本と爲す。故に但性と名け、佛と名くることを得ず。佛に就いて以て凡夫の體に望むれば、由來常に淨く、本來是れ佛なり。故に『涅槃』に云はく「苦有り、諦有り、實有り、乃至道有り、諦有り、實有り」と。是實諦とは、卽ち是れ如來虛空佛性なり。法に約して眞を論ずれば、眞を實諦と名く。凡に據つて之を論ずれば、實情の爲に隱るるを說いて佛性と爲す。佛に就いて實を辨ずれば、本常に淨なるが故に苦等は實に卽ち是れ如來なり。實に據つて實を論ずれば、實體相を離るるを卽ち虛空と名く。其義既に然なり。定有定無の理然も須く捨すべし。報應の兩佛は有無不定なり。眞義體の上は本より已來緣に從つて出生すべきの義有り。之を名けて有と爲す。乳酪有れば說いて蘇有りと言ひ、胡麻有れば說いて油有りと言ふが如し。卽ち未だ體有らず。之を說いて無と爲す。義既に是の如し。若し定有と言はば是れ則ち執著、若し定無と言はば卽ち是れ妄語なり。有無合して說くを中道と名くることを得。時に約すること是の如し。

（一〇三）次に第四門に、其因を辨定す。先に法報に就いて其因を辨じ、後に應に就いて說く。法報の因の中兩ながら同じく分別す。一には生了分別、二には緣正分別なり。『生了は如何。』『無を辨じて有ならしむる之を名けて生と爲し、已に有つて現ぜしむる之を說いて了と爲す。相を麤分すれば報佛は一向に生因の所生なり。本無なるを以ての故に。法佛は一向に了因の所顯なり。本有なるを以ての故に。中に於て細に論ずれば、報佛に二種の因を具足することを得。一には生因の生、二には了因の顯なり。親しく之を起す者を名けて生因と爲し、

【緣生は等】　次に緣正分別。

【涅槃】　第三十二

疎に之を助くる者を說いて了因と爲す。故に『涅槃』の中に、方便の果を說いて菩提と爲す。彼菩提の果に生有り、了有り。故に彼文に言はく、「復生因有り、六波羅蜜阿耨菩提なり。復了因有り、佛性菩提なり」と。彼文に復言はく、「復了因有り。謂はく、八聖道阿耨菩提なり」と。斯を以て准驗す。故に知んぬ、報佛に生有り、了有ることを。法佛は唯了因に從つて得る所「生因より生ずるには非ず。本有なるを以ての故に。此等の因相は彼緣正門の中に至つて具に辨ず。『緣正は如何。』『親しく起すを正と名け、疎に助くるを緣と爲す。法佛は既に了因に從つて得る所なり。因に二有り。一には正因了、二には緣因了なり。正了に二有り。一には凡の時に就く。佛性を宣說して以て正了と爲す。此佛性の體本より已來緣に從つて顯了すべきの義有るを、名けて了因と爲す。故に『涅槃』に云はく、「佛性は有なりと雖も虛空に同じからず」と。虛空は無量の方便を以てすと雖も、見ることを得べからず。佛性は見るべし。見るべきを以ての故に、緣に遇はば便ち見る。可見は猶是れ可了の義なり。二には聖の時に就く。眞實無作の六波羅蜜を以て正了と爲す。彼前の佛性漸く顯れて行を成ずるを、說いて六度と爲し、此六度に亦可了圓顯の義有るを、說いて了因と爲す。緣了に二有り。一には緣修の六度、能く眞體を顯すを說いて緣了と爲す。火の金を練るが如し。二には眞實有作の六波羅蜜、能く眞體を顯すを說いて緣了と爲す。莊嚴具の金の淸淨を顯すが如し。此二緣は都て聖の時に在り、凡の時には未だ有らず。報佛既に生因に從つて生ずる所なり。生因に二有り。一には正因の生、二には緣因の生なり。

【次に等】二に應佛の因相を辨ず。

正因に二有り。一には凡の時に就く。佛性を宣說するを以て正因と爲す。此佛性とは、是れ報佛の性にして法佛の性に非ず。「何者か是れ其報佛の性なるや。」『八識心の體は是れ法佛の性なり。彼心體の上に本より已來緣に從つて報佛を生ずべき義有るを、報佛の性と名く。更に別體無し。故に『涅槃』に云はく、「佛性は無なりと雖も兎角に同じからず」と。兎角は無量の方便を以てすと雖も、生ずることを得べからず。佛性は生ずべし。生ずべきを以ての故に、緣に遇はば便ち生ず。若し是の如きの可生の義無くんば、無量百千の方便を以てすと雖も報佛は生じ叵し。可生の義を以て名けて生因と爲す。二には聖の時に就く。眞實有作の六波羅蜜を以て正因と爲す。彼前の佛性は可生の義の故に、緣に遇うて熏發して便ち無量の諸の功德生ずること有り。所生の功德を說いて有作の六波羅蜜と爲す。此六も亦能く報佛を出生す。故に生因と名く。譬へば乳酪乃至熟蘇は前後異なりと雖も、醍醐に望めて悉く生因と名くるが如し。此も亦是の如し。緣因に二有り。一には六識七識の心等に於て六度を緣修し、能く眞心を熏じて報佛を出生するを、名けて緣因と爲す。二には法佛の性及與無作の六波羅蜜、是れ亦能く報佛の功德を成ずるが故に緣因と名く。譬へば色を見て眼識を發生し、色は眼識に於て名けて緣因と爲すが如し。此も亦是の如し。報佛に望めて緣生既に然なり。此緣を報に望めて亦了と名くることを得。義の在ること知るべし。法報兩佛の因相是の如し。次に應佛を辨ず。應因は不定なり。用を攝して體に從はば、更に別因無し。眞體を修得すれば自然に用を起す。何んが別因を須ふる。義に隨つ

【經】涅槃經第三十五。

【二】第五に三佛の常無常を釋するに、四あり、一に理に對して論ず。

て別して分たば、亦因を說くことを得。因に二種有り。一には同類因、應修の諸行を應因と爲す。釋迦、佛を成じてより來、大だ久しく、三大阿僧祇劫に諸の所行を修して、應佛の果を成ずることを示すが如きを、名けて應因と爲す。二には異類因、實修の諸行を應因と爲す。但應の中に就いて其二種有り。一には法應、法佛より起る。二には報應、報佛より生ず。已に上に辨ずるが如し。此二應は緣正各別なり。若し法應を論ずれば、如來藏の中の緣起法門を以て正因と爲し、大悲願力は之を以て緣と爲す。譬へば鏡水の能く像を生ずと雖も要ず面に藉り、澗谷響を發すれども要ず聲に藉り、火珠火を出すも要ず日に藉り、水珠水を生ずれども要ず月に藉るが如し。所況是の如し。三昧法門能く應を現ずと雖も、要ず悲願を須ふ。故に經に說いて言はく「異法有るが故に異法出生し、異法無きが故に異法滅壞す」と。著し報を論ずれば、大悲願力を以て正因と爲し、三昧法門を以て緣因と爲す。大悲願力能く應を生ずと雖も、要ず須く法に依るべし。譬へば形質能く影像を生ずれども必ず鏡水に依り、聲能く響を發すれども要ず澗谷に依り、日能く火を生ずれども要ず火珠に依るが如し。是の如きの一切なり。應因是の如し。應は皆新に起り、是れ本有に非ず。故に了を說かず。新起の法の中義に隨つて且く分たば、正は則ち是れ生、緣は卽ち是れ了なり。亦傷無きことを得。因相是の如し。

〔二〕次に第五門に、其三佛の常無常の義を明す。中に於て、進退して四門分別す。一には理に對して以て論ず。三佛は果に在り。悉く是れ無常なり。理法の因に非ず果に非ず、一

【二には等】二に本を簡んで末に異にす。

【三には等】三に眞を簡んで應に異にす。

【四には等】四に生死の妄法に對して辨ず。

【三】第六に三佛の說不說の義を明すに三あり、一に相に隨て論ず。

向に是れ常なるが如くならず。『云何が三佛悉く是れ無常なるや。』『三佛は悉く是れ道諦の所收なり。『勝鬘經』に說かく、「苦集及び道の三諦は無常なり」と。故に知んぬ、三佛悉く無常と名くることを。』『其義云何。』『無常に二有り。一には有始、二には有終なり。若し應佛を論ずれば有始有終なり。故に無常と曰ふ。法報の兩佛は有終に非ずと雖も而も是れ有始なり。故に無常と名く。果の時を說くが故に。二には本を簡んで末に異す。法佛は是れ常、應報は無常なり。『何が故に是の如くなる。』『法佛は復緣に從つて始めて顯ると雖も、性古より出で體緣生するに非ず。故に名けて常と爲す。報應の兩佛は本無く今有り方便修生す。故に無常と名く。』三には眞を簡んで應に異す。法報は是れ常なり。遷らざるを以ての故に。應佛は無常なり。現に世間に同じうして起滅有るが故に。四には生死の妄法に對して辨ず。三倶に是れ常なり。生死の妄法は悟れば要ず則ち捨す。一向に無常なり。三佛は眞法實を證して以て成ず。一向に是れ常なり。問うて曰はく、『法報は是れ常なり。爾るべし。應佛の生滅は云何が常と名けん。』釋して言はく、『凡に據つて以て其應を取らば、有始生の應、有終滅の應を無常と言ふことを得。佛に就いて應を辨ずれば、化德常に然なり。時として爲さざること無し。故に常と名くることを得。現生の用は時として生ぜざること無く、現老の用として老せざること無し。是の如きの一切なり。是故に三佛悉く常と名くることを得。常無常の義の進退是の如し。偏に定むることを得ず。

(一二)次に第六門に、其三佛の說不說の義を明す。分別するに三有り。一には相に隨つて以て

【二には等】次に化を推して本に歸す。

【三には等】次に通相じて辨ず。

論ず。應佛は說有り、法報は說無し。應佛は化に隨つて言教を吐宣す。故に說有ることを得。眞德は言を離る。是故に法報の二佛は不說なり。二には化を推して本に歸す。法報は說有り、應は說に非ず。諸佛如來の一切の言說は皆三昧法門力に從つて起る。是れ法佛の說なり。皆法螺圓音に從つて起る。是報は是れ報佛の說なり。常寂の聲恆に有つて圓通無礙なるは是れ法螺の音なり。應佛は乃ち是れ衆生の所見にして、佛如來起說の本に非ず。故に說と名けず。故に彼『金剛般若論』に言はく「應化は眞佛に非ず。亦非說法の者なり」と。三には通相して辨ず。三俱に說法す。此義は彼『楞伽經』に說くが如し。問うて曰はく、『應佛は何等の法を說くや。』謂はく、『三乘化教の法を說く。教道の中に於て通じて一切を說く。教を以て主と爲れば教法を說くと名く。』『報佛如來は何等の法を說くや。』『謂はく、行法を說く。』『彼云何が說く。』『謂はく、諸の菩薩、行修成就して佛の境界に入り、諸佛報身の相共心に現ずる、之を名けて說と爲す。又法螺圓音の中に於て人に隨つて一切種の法を異聞するも、亦名けて說と爲す。』『法身如來は何等の法を說くや。』『謂はく、證法を說く。』『彼云何が說く。』『謂はく、諸の菩薩佛法に證入し、諸佛法身の相共心に現ずるが故に、名けて說と爲す。又一切の三昧法力を以て人をして一切種の法を異聞せしむるも、亦名けて說と爲す。谷の響を發して窮盡有ること無きが如し。』問うて曰はく、『三佛俱に能く說法す。何の義を以ての故に、悉く應と名けざる。』釋して言はく、『彼諸佛如來の寂滅平等無言說の義に望めて、說有つて物に隨ふを俱に應と名くることを得。但

【一三】第七に三佛の次第を明す。一に觀入の次第。

【一二には等】次に本末の次第。

【一四】淨法果法第五段に三智の義を明すに兩門の別あり、第一に辨相

説の中に於て相に隨つて分別すれば、應佛如來は眞を隱して物に隨ふが故に、名けて應と爲す。法報は説くと雖も眞德を顯現して他をして趣入せしめ、眞德を隱して曲げて物に隨ふに非ざるが故に、應と名けず。「説不説の義は其相是の如し。

(一三)次に第七門に、其次第を明す。次第に二有り。一には觀入の次第、『地論』に説くが如し。應佛は顯現す。化に隨つて覩易し。先に應身を明す。應を尋ぬれば本有り。次に報身を明す。報を尋ぬれば、本有り。後に法身を明す。二には本末の次第、法身は是れ本なり。先に法身を明す。法に依つて德を成ず。次に報身を明す。德に依つて用を起す。後に應身を明す。三佛淵深にして情を以て測り難し。且く詮況に依つて粗述すること此の若し。

三智の義に兩門分別あり。相を辨ず一。相を攝す二。

(一四)第一に、相を辨ず。三智の義は『地持論』に出づ。「故に彼文に言はく「三種の智有り。名けて菩提と爲す」と。『名字は是れ何ん。』「一には淸淨智、二には一切智、三には無礙智なり。」淸淨智とは、是れ佛如來の第一義智なり。第一義を觀じて五住性結の煩惱を斷離し、障を離れて無染なるを淸淨智と名く。其一切智及び無礙智は是れ佛如來世諦の智なり。世諦の中に於て、四種の一切の法相を了知するを一切智と名く。『何等をか四と爲す。』『謂はく、一切時、一切界、一切事及び一切種は是れ其四なり。一切時とは、過去未來三世の時なり。此三世に於て、窮め透つて餘無きを一切智と名く。一切界とは、謂ゆる、

【二五】第二に餘智に約對して共に相收攝す。中に四、一に三種般若に約對す。

世界及び衆生界なり。此二界に於て、窮め知つて餘無きを一切智と名く。一切事とは、謂ゆる、有爲及び無爲の事なり。色法、心法、非色心法は是れ其有爲なり。義は上に解するが如し。虛空、數滅及び非數滅は是れ其無爲なり。亦上に釋するが如し。此二事に於て、之を知つて窮盡するを一切智と名く。一切種とは、謂ゆる、因果なり。有爲法の中に因有り、果有り。善惡は是れ因、苦樂は是れ果なり。無爲法の中に因有り、果有り。聖道は是れ因、涅槃は是れ果なり。此因果種別の法の中に於て、了知窮極するを一切智と名く。餘の經論の中には、第一義智を一切智と名け、世諦の智を一切種と名く。今此には第一義智を宣說して淸淨智と爲し、世諦の智を一切智と名く。名の左右皆傷無きことを得。無礙智とは、前の四種の一切法の中に於て、心を發して即ち知り、方便を假らず。餘人に同じからず。思量して乃ち知るを無礙智と名く。『相を辨ずること是の如し。』此一門竟る。

〔二五〕次に第二門に、餘智に約對して共に相收攝す。中に於て四有り。第一には三種般若に約對して共に相收攝し、第二には大品の三智に約對して共に相收攝し、第三には涅槃の三智に約對して共に相收攝し、第四には四無礙慧に約して共に相收攝す。初の門に三種般若に約對して共に相收攝すとは、三種般若は龍樹の說くが如し。一には觀照般若、證空の實慧なり。通じては則ち二諦を了達するの智、斯れ皆是なり。二には文字般若、謂はく、『般若經』なり。此れ般若に非ず。能く般若を詮し、能く般若を生ず。故に般若と名く。三には實相般若、謂はく、眞諦空なり。通じては則ち二諦の法相皆是なり。情を簡んで法を取る

【次に等】二に大品の三種に約對す。

【次に等】三に涅槃の三種の智に約す。

が故に實相と云ふ。此れ般若に非ず。是般若の境能く般若を生ず。故に般若と名く。前の三種の智此三種の般若の中に入れば、是れ其第一觀照所攝にして、餘の二種に非ず。彼は智に非ざるが故に。次に大品の三種の智に對して共に相收攝す。三智と言ふは、一には一切智、謂はく、諸の聲聞緣覺の人、一切の陰界入等を了知するを一切智と名く。二には道種智、謂はく、諸の菩薩、種別化衆生の道を了知するを道種智と名く。三には薩般若智、此には翻じて名けて一切種智と爲すなり。諸佛如來一切の二諦諸法を覺知するを薩婆若と名く。向前の三智此二の中に入れば、薩婆若の攝にして餘の二種に非ず。彼二は因に在つて果に在らざるが故に。次に涅槃の三種の智に約して共に相收攝す。三智と言ふは、一には波若と名く。此には翻じて慧と名く。二には毘婆舍那、此には翻じて觀と名く。三には闍那、此には翻じて智と名く。彼經には具に兩門を以て分別す。一には人に約して分別す。其般若とは、一切衆生なり、一切の衆生に同じく慧數有るが故に波若と名く。毘婆舍那は聲聞、緣覺なり。彼は四諦十二緣等を觀ずるが故に、二乘に就いて毘婆舍と說く。其闍那とは、諸佛菩薩なり。彼能く一切法界に了達するが故に闍那と名く。若し此門に據つて向前の三智、此三の中に入れば、闍那の所攝にして餘の二種に非ず。波若、毘婆は佛に在らざるが故に。二には法に約して分別す。其波若とは是れ別相觀もて世諦を了知し、毘婆舍那は是れ總相もて第一義を觀知し、其闍那とは是れ破相觀もて一實を觀察して二諦有無の相を破離す。故に若し此門に據つて向前の三智と此三種とを共に相收攝すれば、此

【次に等】四に四無礙辨に約す。

毘婆舍及與闍那は是れ前の三が中の清淨智の攝なり。同じく能く理を觀じて染障を離るるが故に。前の一切智及び無礙智は是れ此三が中の婆若の所攝なり。能く別相の法を了知するを以ての故に。次に四辨に約して共に相收攝す。法、義、辭、樂は是れ四辨なり。義は上に釋するが如し。此四辨の佛に在るの者と前の三智とは共に相收攝す。因に在るは則ち非なり。彼果の中に就いて、即ち以て四無礙慧を求むと名く。是れ前の三が中の無礙智の攝なり。義に隨つて細く獲れば、四無礙智に其多種有り。『地經』に說くが如し。若し世諦に就いて四無礙を明さば、此四無礙は是れ一切智無礙智の攝なり。其れ同じく世諦の法を知るを以ての故に。若し眞諦法性の理に就いて法無礙と名くれば、則ち法無礙は是れ前の三が中の清淨智の攝なり。餘の三種は是れ一切智無礙智の收なり。若し第一義諦を了知するを說いて義無礙と爲さば、則ち義無礙は是れ清淨智、餘の三種は是れ一切智無礙智の攝なり。三智是の如し。

【一六】第六段に三不護の義を明す。淨法聚果法

三不護の義。

〔一六〕三不護の義は、經の中に說くが如し。如來の三業は純淨にして過を離る。防護することを須ひざれば三不護と名く。諸の阿羅漢は三業淨なりと雖も、常に防護を須て方に能く過を離る。如來は彼に異なり。是故に三不護を宣說するなり。問うて曰はく、『如來は何の因緣の故に、身口意業に防護することを須ひざる。』『久しく淨戒を修して性成就す

るが故に。常に深定に住して未だ曾て出でざるが故に。三業恒に智慧に隨つて行ずるが故に。大涅槃に住して永く寂滅なるが故に。是故に三業防護することを須ひず。三不護の義、之を辨ずること略して爾なり。

〔一七〕淨法聚果法第七段に三念處の義を明す。

三念處の義。

〔一七〕三念處の義は、經の中に說くが如し。一切衆生は是れ佛如來生念の境界なり。故に念處と云ふ。念處不同にして、境に隨つて三を分つ。一には是れ正衆、二には是れ邪衆、三には非正非邪なり。如來は自ら己が法最勝なりと知る。然るに所受の者に於て喜心を生ぜず是れ初念處なり。不受の者に於て瞋心を生ぜざるは、第二念處なり。彼非受及び非不受の中容の人の所に於て、癡捨を生ぜず常に淨心を得るは、第三念處なり。邪正等に於て既に三を分つことを得。怨親中の三種の人の所に於て、亦三を分つことを得。怨に於て瞋らざるは、是れ初念處たり。親に於て愛せざるは、第二念處なり。中容の人の所に於て捨心を生ぜざるは、第三念處なり。問うて曰はく、『如來は何の因緣の故に三念處を得るや。』『久しく衆生に於て平等大捨心を修習するが故に、深く衆生を觀じて我人無きが故に、諸の法性空寂なりと了知するが故に三業に於て平等心を得。三念處の、義之を略して云ふこと爾り。

【一八】淨法業果法の中第八段に四一切種淨の義を明す第八。【地持】

四一切種淨の義。

(一七)四一切種淨は、『地持』に說くが如し。佛德、垢を離るる、之を名けて淨と爲す。淨義に隨つて別ち、一門に四を說く。『四の名は是れ何ん。』『一には身淨、二には境界淨、三には心淨、四には智淨なり。』此四本を據むれば、唯身と心となり。初の二は是れ身、後の二は是れ心なり。但身の中に就かば境體不同にして、開分して二と爲す。心の中其福智の不同に隨つて、復分つて二と爲す。故に合して四と爲す。身淨と言ふは、煩惱習の身永く滅して餘無く、最上身を得、生滅自在なり。故に身淨と名く。煩惱習の身永く滅して餘無く最上身を得るは眞身淨なり。生滅自在は應身淨なり。又上身を得るは是れ身體淨なり。生滅自在は是れ身用淨なり。境界淨とは、種種の現化及び言說する所無礙自在なるを境界淨と名く。種種の現化は是れ身境界、及び言說する所は是れ口境界なり。又復種種現化の境界は是れ事境界、及び言說する所は是れ理境界なり。此境界に於て作用自在にして、緣の中に障無きを境界淨と名く。心淨と言ふは、佛の福德莊嚴淨を明すなり。一切の福德は心を以て主と爲す。主に就いて以て彰すが故に心淨と云ふ。故に彼文に言はく「煩惱悉く離れ善根成就するを、名けて心淨と爲す」と。煩惱悉く離斷するは德淨なり。善根成就するは行德淨なり。智淨と言ふは、佛の智慧莊嚴淨を明すなり。故に彼文に言はく「一切の無明穢汚を捨離して一切の所知無礙自在なるを、名けて智淨と爲す」と。一切の無明穢汚を捨離して無明地を除くは眞諦智淨、一切の所知無礙自在にして事無知を斷

【一九】淨法聚果法の中第九段に二智の義を明す。先づ實智。

ずるは世諦智淨なり。四淨是の如し。

二智の義。

（一九）其二智とは、一には是れ實智、二には方便智なり。實智と言ふは、汎く解するに二有り。一には諸法に於て實の如く了知するを、名けて實智と爲す。是れ不知を妄に知と稱するに非ざるが故に。故に『地持』に云はく「增上慢智を離るるを名けて如實智と爲す」と。此如實智は彼慢心の妄智と相對して方便に對せず。此門の中に於て、佛の一切の智を悉く實智と名け、方便を簡ばず。二には實法を知るを名けて實智と爲す。中に於て分別するに、曲しくは五義有り。一には妄に對して實を明す。如來藏眞實の法を知るを名けて實智と爲し、妄想の情所起の法を知るを名けて妄智と爲す。苦諦を知るを名けて苦智と爲すが如し。是の如きの一切なり。此門の中に於て、實智は彼妄智と相對して方便に對せず。二には假に對して實を明す。第一義眞諦の法を知るを名けて實智と爲し、世諦假名の法を知るを名けて假智と爲す。此門の中に於て、實智は彼假智と相對して、方便に對せず。三には相に對して實を明す。一實諦實性の法を知るを名けて實智と爲し、二諦有無の法相を知るを名けて相智と爲し。世諦假名の法を知るを名けて假智と爲す。此門の中に於ては、實智は彼相智と相對す。亦說いて第一義世智と相對すと言ふことを得。方便に對せず。四には教に對して實を明す。實の法性を證するを名けて實智と爲し、言を尋ねて始めて學するを名けて

【方便智とは等】次に方便智について。

【地經】論第三。

教智と爲す。此門の中に於ては、實知は彼教智と相對して方便に對せず。若し教智を名けて以て方便と爲すとも、亦傷無きことを得。五には權に對して實を明す。一乘眞實の法を知るを名けて實智と爲し、三乘權化の法を了知するを方便智と名く。此門の中に於ては、實智は彼方便智と對す。今實智を論ずるは後に據つて言ふのみ。方便智とは、汎く解するに四有り。一には進趣方便、見道の前の七方便等の如し。向果に進趣して果の與に用と爲る。故に方便と曰ふ。此一方便は果と相對して實智に對せず。若し果德を名けて之を以て實と爲すとも、義亦傷くること無し。二には施造方便、十波羅蜜の中の方便波羅蜜の如し。所修の行に於て善く巧に之を爲す。故に方便と曰ふ。此方便の中曲しくは三種有り。一には教行方便、事中の善巧なり。『地持』に說くが如し。十二巧便は良に其事なり。二には證行方便、空を觀じて著せず。『地經』に說くが如し。十方便慧は良に其義なり。三には不住方便、世出世に於て善巧に雙遊す。『地論』に說くが如し。世出世に於て方便して染せず。善巧に住するが故に是れ其義なり。此三は皆是れ施造方便なり。此一の方便は無方便の愚拙と相對して實智に對せず。三には集成方便、諸法同體にして巧に相集成す。故に方便と曰ふ。『云何が巧に成ずる。』『一の眞心の中に曠く法界恒沙の佛法を備ふ。是れ諸佛の法は同體なるを以ての故に。慧を用て門と爲れば餘の法助成し、定を用て門と爲れば餘の義助成す。是の如きの一切なり。同體の法なるを以て巧に相集成す。故に方便と曰ふ。故に『地論』に言はく、「此法は善く巧に成ず。是故に方便と名く」と。』又『地經』の中に說かく、

【三】淨法果法の中第十段に因智法の義を明すに三門の別あり、第一に境に約して辨定す

「一切行の總相別相、同相異相、成相壞相を方便と爲す」と。此も亦是れ其集成方便なり。此一の方便は彼一切の陰界入等の事法と相對して實智に對せず。故に『地論』の中に六相門を辨じて、說いて除事と言ふ。事とは、謂ゆる陰界入等なり。四には權巧方便、實に此事無く權巧に之を施す。故に方便と曰ふ。中に於て分別するに、曲しくは三種有り。一には是れ身巧、謂はく、佛の師猴鹿馬等の化なり。二には是れ口巧、實に三乘無く化に隨つて之を說く。三には是れ意巧、謂はく、方便の慧は前の身口二種の巧化を起す。『法花經』の如し。「尋ねて過去佛所行の方便の力を念じ、我今所得の道も亦應に三乘を說くべし」と。是の如き等なり。今は意巧を說いて方便智と爲す。此方便智は向前の實智と相對することを得。二智是の如し。

四智の義に三門分別あり。境に約して辨定す一。體相を分別す二。盡智無生智に約對して分別す三。
(三)第一門の中に、四諦の境界に約對して辨定す。四智と言ふは、我生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けず。是れ其四なり。此四は猶是れ四諦の智なり。四諦の智の中に其二種有り。一には淺濁觀境の智、所觀の諦境自他を備ばず。二には無學聖人內證の智、自證已に寂し苦集已に盡き、自覺已に寂し滅道已に滿す。今此に論ずる所の義は後の門に當る。『四智の中に於て何者か是れ其苦を知るの智、乃至何者か道を知るの智なる。」『經』『論』不同なり。乃ち三の別有り。第一には彼『毘婆沙論』に依る。我生已に盡くと

は、是れ斷集の智なり。集因能く未來の苦果を起す、之を名けて生と爲す。無學斷じ竟るを我生已に盡くと名く。梵行已に立つとは、是れ修道の智なり。梵を名けて淨と爲し、無漏の聖道能く垢染を除き、障を出でて淸淨なるが故に梵行と名け、無學の聖人道行成滿するを名けて已に立つと爲す。所作已に辨ずとは、是れ證滅の智なり。障を斷じて滅を證するは是れ其所作なり。無學の聖人證滅の功成ずるを、所作已に辨ずと名く。後有を受けずとは、是れ斷苦の智なり。後世の苦報を名けて後有と爲す。無學の聖人此後報に於て復更に受けざるを、後有を受けずと名く。『問うて曰はく、『經に四諦の法門を説くに、先に苦集を明し、後に滅道を彰す。今四智を明すに何んが彼に依らずして、乃ち先に其斷集修道を明し、然して後に方に證滅除苦を明す。』釋して言はく、『法門を説くに種種有り。一定すべからず。經に四諦を説くに、欣厭門に依らば先には染、後には淨なり。又欣厭の中、逆觀門に依らば先には果、後には因なり。順觀門に依らば先には因、後には果なり。是義を以ての故に、先に集道を明し、後に滅苦を論ず。前の因の中に就かば、要ず先に障を除き然して後に善成ず。是義を以ての故に、先に斷集を明し後に修道を彰す。後の果の中に就かば、先に現過を滅し、然して後に未來の苦果を受けず。是義を以ての故に、先に證滅を明し後に斷苦を明す。』此は是れ一の異なり。第二には彼『勝鬘經』の文に依る。我生已に盡くとは、是れ斷苦の智なり。故に彼文に云はく、「二種の死の中、分段の死なるが故に我生盡くと説く」と。苦報集起する、之を名けて生と爲し、無學斷じ竟る

【涅槃經】南本第三十二

を我生盡くと名く。梵行已に立つとは、是れ證滅の智なり。故に彼文に言はく「有餘の果證を得て梵行已に立つ」と。梵を涅槃と名け、無學の聖人梵を證して行成ずるを、梵行立つと名く。所作已に辦ずとは、是れ修道の智なり。道を修して障を斷ずるは是れ共所作なり。無學の聖人修道の事建つを、所作辦ずと名く。後有を受けずとは、是れ斷集の智なり。故に彼文に言はく「所斷の煩惱更に後を受けざるを後有を受けずと名く」と。集因は能く後世の果有り。名けて後有と爲す。無學斷じ竟つて更に後を生ぜざるを、後を受けずと名く。問うて曰はく、『經に四諦の法門を說くに、先には染、後には淨なり。染淨の中には先には果、後には因なり。彼四智を說くに何んが彼に依らずして、乃ち先に共除苦證滅を明し、後に方に修道斷集を宣說する。』『此れ亦聖說不同なるが故に爾なり。四諦の法門は已に上に辨ずるが如し。『勝鬘』に說く所の四智の義は、逆觀門に依つて先には果、後には因なり。是義を以ての故に、先に在つて共除苦證滅を明し、後に方に共修道斷集を明す。前の果の中に就かば、要ず先に障を除き然して後に滅を得。是義を以ての故に、先に除苦を明し後に證滅を明す。後の因の中に就かば、要ず先に修治し然して後に障を剪る。是義を以ての故に、先に修道を明し後に斷集を彰す。』此は是れ兩の異なり。第三には彼『涅槃經』の文に依る。一一の智の中に、各兩義有り。我生盡の中に共斷集を明し、亦滅苦を彰す。彼文に說いて言はく「永く三世の生因緣を斷ずるが故に、是故に唱へて我生已に盡くと言ふ。是れ斷集なり。更に復五陰の身を受けざるが故に、是故に唱へて我生已に盡く

【三】第二に體相を辨ず。先づ小乘について明す。

と言ふ。是れ滅苦なり。若し彼『毘婆沙』の說に同じからんと欲すれば、果を擧げて因を顯す。若し彼『勝鬘』の所說に同じからんと欲すれば、因を擧げて果を顯す。梵行立の中には、滅道雙べ明す。彼文に說いて言はく「所修の梵行已に畢竟す」と。是故に、唱へて梵行已に立つと言ふ。道圓を明すなり。學道を捨するも亦已立と名く。滅極を彰すなり。若し彼『毘婆沙』の說に同じからんと欲すれは、果を擧げて因を顯す。若し彼『勝鬘』の所說に同じからんと欲すれば、因を擧げて果を顯す。所作辨の中には滅道並べ說く。彼文に說いて言はく「本所求の如き今日已に得」と。是故に唱へて所作已に辨ずと言ふ。是れ滅極なり。修道の得果も亦已辨と名く。是れ道圓なり。若し彼『毘婆沙』の說に同じからんと欲すれば、因を擧げて果を顯す。若し彼『勝鬘』の所說に同じからんと欲すれば、果を擧げて因を顯す。不受後の中には其斷集を明し、亦滅苦を彰す。彼文に說いて言はく、「盡智、無生を獲得するが故に、是故に唱へて後有を受けずと言ふ」と。盡智を獲得するは是れ斷集なり。無生智を得るは是れ滅苦なり。若し彼『勝鬘』の所說に同じからんと欲すれば、因を擧げて果を顯す。若し彼『毘婆沙』の說に同じからんと欲すれば、果を擧げて因を顯す。此は是れ三の異なり。諦に約する不同に此三の別有り。

(三ノ二)次に第三門に、其體相を辨ず。先に小に就いて說き、後に大に就いて論ず。小乘法の中、羅漢、辟支佛所得の四智は體有り、相有り。無學の聖慧は是れ其體なり。盡無生智は是れ無學の慧なり。正しく此慧を說いて四智の體と爲す。後に出觀し已つて世俗心の中に、

【大乘法の等】次に大乘法について明す。

自ら向前の所得の聖慧を緣じて其四智究竟の相を生ず。是れ四智の相なり。彼四智の體は四義を具足して四緣無く、彼四智の相は四緣を具足して四義無し。『云何が彼體は四義を具足して四緣無き。』『無學の聖慧は一念現前して能く無始の生死の因果を斷ず。之を說いて以て我生已に盡きて後有を受けずと爲す。此智現ずる時、卽ち是れ道圓に證滅已に極る。之を說いて以て梵行已に立ち所作已に辨ずと爲す。是故に此體は四義を具足す。此義を具すと雖も、心に我生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと分別すること無し。是故に此體は四緣を具せず。此聖慧を以て正しく諦理を觀じて異緣無きが故に。』『云何が彼相四緣を具足するもて而も四義無き。』『無學の聖人彼理觀を出でて世俗心の中に、自ら向前の所得の聖慧を緣じて其四智究竟の想を生ず「我向に此聖慧を得るの時、我生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ後有を受けず」と。故に四緣有り。此緣を作すと雖も、世俗の心は其我生をして已に盡きしむること能はず。乃至後を受けざらしむること能はず。是義を以ての故に四義を具せず。』小乘是の如し。大乘法の中如來の四智にも亦體相有り。如實の慧を證するは是れ其體なり。世諦の心の中に已所得を緣じて究竟の相を生ずるは是れ其相なり。此體と相とは麁小乘に同じ。但小乘の中には體相前後す。入觀を體と名け、出觀は是れ相なり。大乘法の中には體相同時なり。佛は二諦に於て雙觀現前して出入無し。故に同時の中に就いて眞諦の智を說いて以て體と爲し、世觀を相と名く。彼體の中にも亦四義を具して四緣無く、彼相の中に於ても亦四緣を具して四義無し。『云何が體の中

【三】第三に盡智無生智に約對して明す。先づ盡智無生智を辨ず。

に四義を具足して四緣無き。『彼如實の慧の一念に現ずる時、能く無窮の生死の因果を絕す。之を說いて以て我生已に盡き、後有を受けずと爲す。此慧を得る時道行已に圓に、證滅已に極る。之を說いて以て梵行已に立ち、所作已に辨ずと爲す。是義を以ての故に四義を具することを得。此義を具すと雖も證如の心正しく理を混じて、心に我生已に盡き梵行立つ等と分別すること無し。是義を以ての故に四緣無し。』『云何が彼相四緣を具足して四義無き。』『諸佛如來は世諦の中に於て、自ら已寂所得の聖慧を緣じて其四智究竟の想を生ず。我生已に盡き後を受けざるに至るが故に四緣有り。然るに此世心は其我生をして已に盡き、後を受けざるに至らしむること能はず。故に四義無し。』體相是の如し。此二門竟る。

（三）次に第三門に、盡智及び無生智に約對して分別を爲す。中に於て先に盡無生智を辨じ、後に四智に約して分別を爲す。盡無生智は經論に不同なり。『毘曇』の如きに依らば、現じて一切の生死の因果を斷ずるを悉く盡智と名く。此盡智は利鈍倶に一切の無學を得。現在せざること無し。所斷有るが故に。無生智とは前に斷ずる所の生死の因果に於て、決定して自ら能く永く更に起さざるを無生智と名く。此無生智は唯利人のみ得、鈍人は得ず。彼に說かく「鈍人は退轉の義有り。其所斷に隨つて便ち更に起すべし。是義を以ての故に無生智無し。利人は退せず。其所斷に隨つて、永く更に起さず。是義を以ての故に無生智有り」と。其義是の如し。『體相は云何。』『鈍根の人に無學の心起つて、多念相續するを悉く盡智と名く。利根の人、無學の心起つて初念を盡と名け、第二念の後を即ち無生と

【次に等】二に四智に約して分別す

名く。然るに盡智は正しく諦理を縁じて能く盡くす所有り。故に盡智と名く。其盡を縁ずるに非ず。無生も亦爾なり。正しく諦理を縁じて能く所斷をして、後に更に起らざらしむるが故に無生と名く。無生を縁ずるに非ず。』問うて曰はく、『此二は何の諦をか縁ずる。』『『毘婆沙』の中には說くに種種有り。一家說いて云はく、「唯苦諦のみを縁ず」と。』『何が故に然る。』『初めて聖に入る時先に苦諦を縁ず。故に後に出づる時還苦を縁ず。人の服する藥、初めて入る者は最後に之を出づるが如し。一家の宣說すらく、「苦諦を攝す」と。』『何が故に是の如くなる。』『初めて聖に入る時先に果を縁じ、後に聖を出づる時須く其因を縁ずべし。故に集諦を縁ず。一家の宣說すらく「苦集不定なり」と。一家の宣說すらく、「四諦不定なり」と。『毘曇』是の如し。若し『成實』に依らば、一切の無學は都て退する理無し。利鈍に約就して之を別つべし。但生死の因を斷除すると知るを、名けて盡智と爲す。生死の果を斷じて永く更に受けざるを無生智と名く。大乘も亦爾なり。佛は退することと無きが故に。』盡無生智の相別麁爾なり。次に四智に約して之を分別す。若し『成實』に依らば「四が中に我生已に盡くるを以て盡智と爲し、後有を受けざるを無生智と爲す」と宣說す。大乘も亦爾り。亦大の中には我生盡くるを說いて無生智と爲すべし。『勝鬘』には說いて斷苦と爲すが故に、後を受けざるを說いて以て盡智と爲す。『勝鬘』には說いて斷集の智と爲すが故に。若し『毘曇』に依らば、盡智の中に別して四智を具す。無生も亦爾なり。『若し齊しく是れ四ならば、云何が盡無生の別を分つことを得ん。』『龍樹の說くが如

し。自證の我生已盡、梵行已立、所作已辦、不受後有を宣示す。是れ其盡智なり。利根の人は前の所得に於て決定の意を起す。我生已に盡きて永く更に生ぜず、梵行已に立ちて須く更に修すべからず、所作已に辦じて永く更に作さず、後有を受けずして永く更に生起を受けず。是の如き等の決定の意を無生智と名く。』四智是の如し。

【二三】淨法聚果法の中第十一段に四無畏を明すに七門の別あり、先づ釋名。

【二四】第二に其體性を定め、其境具を辨ず。先づ其體性を定む。

四無畏の義に七門分別あり。名を釋す一。其體性を定め其境具を辨ず二。知斷を分別す三。自利利他を分別す四。對に寄せて德を顯す五。十力に約對して共同異を辨ず六。大小所說の不同七。

（二三）第一に、名を釋す。智心怯えざるを名けて無畏と爲す。無畏は不同にして、義に隨つて四を分つ。『名字は是れ何ん。』『一には一切智無畏、二には漏盡無畏、第三には能說障道無畏、第四には能說盡苦道無畏なり。』普く諸法を照すを一切智と名け、己が有智を緣じて他に於て怯えざるを一切智無畏と名く。結惑斯に已むを稱して漏盡と曰ひ、己が有盡を照して他に於て怯えざるを漏盡無畏と名く。過礙を陳ぶるに堪ふるを能說障道と名け、己が有能を緣じて他に於て怯えざるを名けて解脫盡苦道無畏と爲す。此後の二種は自ら己が能を緣じて、他に於て畏るること無し。弟子の智と斷とを緣ずるに非ず。『名義是の如し。』此一門竟る。

（二四）次に第二門に、其體性を定め并に其境具を辨ず。體性に二有り。一には是れ智體、二には是れ心體なり。內に自己を照して四の功德を具し、實有にして虛に非ざる是れ其智なり。

【體既に等】次に體に約して境具を論ず。

外に難辭に於て情安んじて怯えざる是れ其心なり。論の中に說くが如し「智光普く照すを名けて無畏と爲す」と。卽ち是れ其智なり。勇猛にして怯えざるを名けて無畏と爲す。卽ち是れ其心なり。問うて曰はく「無畏は智を用て體と爲す。智は是れ慧數なり、心を用て體と爲す。心は是れ何の數ぞ。」「毘曇に准ずるに、心數の法の中には更に別して一の無畏數を立てず。義を以て之を推すに、凡そ是れ有畏は苦受の所收なり。一切の無畏は應に樂受の攝なるべし。若し多くの心數を建立する家に依らば、畏及び無畏は悉く是れ別數なり。」體性是の如し。體既に二有り。此體に約對して以て境具を論ず。境具は不定なり。『相狀は如何。』「若し智慧を說いて之を以て體と爲さば、此體に約對して義を辨ずるに四有り。一には是れ體、二には是れ用、三には是れ境、四には是れ緣なり。體とは是れ其內照の智なり。內に自己の有智有斷を照し、幷に二能を具す。用とは是れ其不怯心なり。前の智體に由つて已に德有りと知り、便ち外難に於て勇猛不怯の用を起す。境とは自家の四種の德是なり。己が智と斷と幷に及び二能とは智の爲に照さる。故に名けて境と爲す。緣とは外道の四の難辭是なり。彼難に寄對して佛德を顯す。彼四は是れ其德を顯すの緣なり。故に名けて緣と爲す。若し勇猛不怯の心を說いて之を以て體と爲さば、此體に約對して義を辨ずるに亦四あり。一には是れ體、二には是れ用、三には是れ境、四には是れ具なり。體とは是れ其不怯の心なり。此心は正しく是れ無畏の義なり。故に名けて體と爲す。用とは是れ其內照の智なり。照に由つて自ら德有つて虛しからずと知り、他に於て怯えず。故

【三五】第三に智斷分別。

【三六】第四に自利利他の二行分別【地持】第八。

【地持】第八。

に名けて用と爲す。境とは外道の四の難辭なり。無畏の心正しく彼難を縁じて怯懼せず。故に彼難を名けて之を以て境と爲す。具とは自己の四種の德なり。己が四德を持して他に於て怯えず。故に己が德を名けて之を以て具と爲す。此二門竟る。

(三五)次に第三門に智斷を分別す。通相して麁に分たば、第三は是れ斷にして餘の三は是れ智なり。別に隨つて細に分たば、前の二は自德にして後の二は利他なり。前の自德の中初は智、後は斷なり。利他の中は名に即して以て求む。能說障道は障を說いて人に示し、人をして斷除せしめ、他をして斷を得せしむ。能說盡道は道を說いて人に示し、他をして修學せしめ、其をして智を得せしむ。『大智論』に依らば、則ち是の如くならず。『彼說如何。』『能說障道は他をして障を識らしめ、除くに得道を以てす。得道は是れ智なり。能說盡道は他をして盡苦の道を識知せしめ、修するに盡苦を以てす。盡苦は是れ斷なり。』智斷是の如し。此三門竟る。

(三六)次に第四門に、自利利他の二行を分別す。相に隨つて別して分たば、初の二は自利にして後の二は利他なり。故に『地持』に云はく「彼初の二種は是れ自安道、後の二種は是れ安他道なり」と。通じて之を論ずれば、俱に是れ自利なり。自心安穩にして所畏無きが故に通じては是れ利他なり。『地持』に說くが如し。利他の中に就いて、初の一切智は偏に菩薩を化す。諸の菩薩は一切智を求むるを以ての故に、偏に之を化す。故に『地持』に云はく「一切智無畏は大乘の諸の菩薩を化せんが爲の故に」と。漏盡無畏は偏に二乘を化

【地持】第八。

【三七】第五に對に寄せて德を顯す。

す。二乘の人は多く寂滅を求むるを以ての故に、偏に之を化す。故に『地持』に云はく、「漏盡無畏は聲聞緣覺の人を化せんが爲の故に」と。餘の二無畏は通じて大小を化す。大小乘の人は通じて離障を求む。故に障道を說いて其をして斷除せしむ。通じて出道を求む。故に盡道を說いて其をして修學せしむ。故に『地持』に云はく、「佛は聲聞菩薩の爲に出苦の道を行じ、修多羅を說く。結集經とは集めて二藏と爲す。以て一切の聲聞の所行を說くを聲聞藏と爲し、一切の菩薩の所行を宣說するを菩薩藏と爲す」と。自利利他の分別是の如し。此四門竟る。

次に第五門に、對に寄せて德を顯す。通じて之を論ずれば、佛の一切の德は皆一切に勝る。相に隨つて別して分たば、彼四無畏は多く外道に對し、十力は魔に對し、十八不共は二乘に對す。此義は彼『地論』の中に說くが如し。『何が故に無畏は偏に外道に對する。』『外道の邪智は佛の無德を難ず。彼四無畏は己が有德を彰して彼邪難に翻ず。故に四無畏は偏に外道に對す。』『何が故に十力は偏に諸魔に對する。』『魔は垢弊を生じ、人の善根を壞す。十力は堅固にして魔の爲に壞せられず。故に偏に之に對す。故に『地持』に云はく、「一切の魔に於て捨離して勝ることを得。之を名けて力と爲す」と。』『何が故に十八不共の法は偏に二乘に對する。』『二乘の小德は上如來に濫るが故に、不共を說いて二乘に簡別す。故に偏に之に對す。』問うて曰はく、『前に外道の邪智、佛の無德を難ずれば、佛四無畏を而も之に翻對すと說く。外道は何に因つてか佛の無德を難じ、如來云何が爲に通を釋す。』

釋して言はく、『外道迹を執して難と爲し、如來實を顯して爲に通を釋す。』『外道何に因つてか佛如來に一切智無しと難ずる。』『如來有時言はく、「迹の中には一切種智を具足せざるに似たり」と。故に彼之を難ず。』『是義云何。』『如來或時諸の弟子有つて遠方より來る。佛便ち之に問はく、「彼方には何を以て住止安樂なりや。道路清泰にして四大安穩なるや」と。佛經の中に說きたまはく、「若し人其城邑聚落に至つて其名字を問はんに、我、是人は一切智に非ずと說く」と。佛、前の問を爲したまふは、無智なるに似たり。外道此所以を執して難を爲す。佛之に對報すらく、「我世間安慰の義に隨つて共に相慰問す。弟子遠くより來る默住すべからず。所以に之を問ふ。是れ知らざるに非ず。世間にも亦知つて故に問ふ有り。而も無智に非ず。佛も亦是の如し」と。此難に報ゆる時、他に於て慚れず。是故に一切智無畏を宣說す。』『外道は何に因つてか佛如來諸漏を盡きずと難ずる。』『如來有時言はく、「迹の中には漏盡きざるに似たり」と。所以に之を難ず。』『是義云何。』『如來或時羅云に愛語す。貪使有るに似たり。調達を呵罵す。瞋使有るに似たり。或時自ら人を華人象と歎ず。慢使有るに似たり。復弟子を敎へて「善く我法を持することは油鉢を持するが如くせよ」と。見使有るに似たり。外道此を執す。故に如來は諸漏盡きずと難ず。佛之を對釋すらく、「我に煩惱無し。化に隨ふが故に爾り。或は衆生有り。軟言にして法を受く。是義を以ての故に、羅云に愛語す。是れ貪有るに非ず。或は衆生有り。麁言もて律に從ふ。是義を以ての故に、調達を呵罵す。瞋有りと謂ふには非ず。衆生をして佛を念ずる

の心を起さしめんと欲す。是故に自ら人を花人象と歎ず。是れ慢有るに非ず。又佛如來は德多くして歎少し。所以に慢に非ず。世の流布に隨つて「我法を持つこと油鉢を持するが如くせよ」と說く。見有りと謂ふには非ず。世間にも亦煩惱無き人の言、煩惱に似たる有り。佛も亦是の如し」と。此難を釋する時、他に於て怯れず。是故に漏盡無畏を宣說す。』『外道何に因つてか、佛如來は障を說くこと能はずと難ずる。』『現に如來の諸聖の弟子を見る、猶し煩惱有るがごとし。明けし、佛如來は善く障を說いて、其をして斷除せしめず。又佛如來は貪等は能く聖道を遮すと說くと雖も、須陀洹等は常に貪欲を行じて聖道を得。明かに知んぬ、如來は障道の法を說けども、道を障ふること能はず。道を障せざるが故に佛說は能はざることを外道此を執す。所以に難を爲す。佛之を對釋すらく、「我能く障を說いて人をして斷除せしむ。但諸の弟子は力未だ斷ずるに堪へず。我能はざるには非ず。又我が說く障は實に能く道を障ふ」と。故に論に說いて言はく、「若し欲、心に在りて道法を與へずんば、要ず先に欲を除き然して後に道を得」と。但諸の煩惱の所障は各異なり。彼須陀等の所行の煩惱は、修道を障して見解を遮せず。見を遮せざるが故に、得道を妨げず。修道を障するが故に、「我障法は實に能く道を障す」と說く。實に道を障するが故に、我是れ能くす」と說く。此難を釋する時、他に於て怯れず。故に能說障道無畏を立つ。』『外道何に因つてか、佛は盡苦道を說くこと能はずと難ずる。』『現に如來の諸聖弟子を見るに須陀洹等は聖果を得と雖も、猶し人天生死の苦有るがごとし。明かに知んぬ、如來は盡苦

【三六】第六に十力に約對して辨ず。

【無畏聖力に等】共同異を明すに、先づ同。

【論文】雜心論第六。

道を說くとも苦を盡すこと能はず。苦を盡さざるが故に、佛說は能はざることを。外道此を執す。所以に難を爲す。佛之を對釋すらく、「我聖道は實に能く苦を盡すと說く。但諸の弟子之を修すること少きが故に諸苦盡きず。道の能はざるには非ず。譬へば蘇藥の性能く熱を破するも、之を服すること少きが故に熱病除かず。蘇の能はざるには非ざるが如し」と。所說是の如し。「道は實に能く諸苦を盡すを以ての故に、我是を能くすと說く」と。此難を釋する時、他に於て怯れず。故に能說盡苦道無畏を立つ。』對に寄すること是の如し。此五門竟る。

（三六）次に第六門に、十力に約對して共同異を辨ず。十力と言ふは、一には處非處力、二には自業智力、三には定力、四には根力、五には欲力、六には性力、七には至處力、八には宿命力、九には天眼力、十には漏盡力なり。義は後に釋するが如し。無畏聖力に同有り、異有り。『同相は如何。』『毘曇』に說くが如し。初は則ち初力の如く、第二は第十の如く、餘の二は二と七の如し。是を無畏安と名く。論文は然りと雖も、更に須く分別すべし。初無畏の中に、境有り、體有り。佛の一切智は是れ其境なり。內に自己に一切智有りと照すは、是れ其體なり。此境と體とは皆是初力の體に收めずといふこと莫し。處非處力は智を攝すること廣きが故に。第二の無畏に境有り、體有り。佛漏盡の德は是れ其境なり。盡を照すの智は是れ其體なり。境は則ち第十力の境の所收なり。同じく漏盡を以て境と爲すが故に。體は則ち第十力の體の所攝なり。同じく皆盡を照すの智を以て體と爲すが故に。此境と體とは復相似すと雖も、寬狹等しからず。無畏の體性は唯自ら盡を知る。其義は則ち狹

【言ふ所の等】次に異。

なり。彼第十力は汎爾に境を觀ず。其義は則ち寬なり。『彼云何が寬なる。』『地持』に說くが如し「第十力とは、自ら漏盡を知り他の漏盡を知る。漏盡の方便の已起未起を知り、亦漏盡の增上慢心の有起不起を知る」と。故に名けて寬と爲す。「第三の無畏に境有り、體有り。能說障道は是れ其境なり。已に能有りと照すは是れ其體なり。體は則ち是れ其初力の所攝なり。處非處は智を攝すること廣きを以ての故に。境界は是れ其第二力の攝なり。彼第二力は業煩惱を知り、第二の能說障道無畏は、業煩惱は是れ障道の法なりと知る。其義大に同じきが故に彼力の攝なり。『毘曇』は境に就く。是故に第三の無畏は第二力の如しと宣說す。第四の無畏に境有り、體有り。能說盡道は是れ其境なり。已に能有りと照すは是れ其體なり。體は亦是れ其初力の所收なり。初力の中に智を攝すること廣きを以ての故に。境界は是れ其第七力の攝なり。彼第七力は其處道を知る。第四の能說盡道無畏も亦道を知る。其義大に同じきが故に彼力の攝なり。『毘曇』は境に就くが故に、第四は第七力の如しと說く。『毘曇』是の如し。若し『成實』に依らば、初無畏とは即ち前の九力なり。前の九は皆是れ一切智なるが故に。第二の無畏は即ち第十力なり。義は上に釋するが如し。後の二無畏は論に全く說かず。若し之を辨ぜんと欲すれば、『毘曇』と同じ。同相是の如し。言ふ所の異とは、彼『毘曇』及び『成實』に說くが如し。智體は是れ力なり。智光普く照すを名けて無畏と爲す。具緣已に定まる。智と斷と并に及び二能なり。故に普照と云ふ。又論に說いて言はく「安住は是れ力、勇猛不怯は是れ其無畏なり」と。十力寔に牢固にして、壞

【二九】第七に其大小所說の不同を明す。一に心體の不同。

【二に等】二に心緣の不同。

【三に等】三に智行の不同。

すること能はざるが故に安住と名く。安住を以ての故に、之を名けて力と爲し、外の障難に於て勇猛にして怯えざるを、說いて無畏と爲す。向前に宣說す「智光普く照すを名けて無畏と爲す」と。即ち是は智慧を無畏の體と爲す。今言はく「不怯を名けて無畏と爲す」と。即ち是は安穩不怯の心を無畏の體と爲すなり。論に復說いて言はく「因を名けて力と爲し、果を無畏と名く。力の中より無畏を生ずるを以ての故に」と。十力に約對する同異是の如し。（此六門竟る。）

（二九）次に第七門に、其大小所說の不同を明す。不同に五有り。一には心體の不同、小乘には如來の無畏は事識を體と爲すと宣說し、大乘には如來の無畏は眞心を體と爲すと宣說す。佛に至つて更に餘の心識無きが故に。二には心緣の不同、小乘には事識の心を無畏と爲すと宣說す。故に攀緣分別し、彼外難を緣じて無畏を生ず。大乘には眞識の心を無畏と爲すと宣說す。故に心は虛空の如く分別する所無し。無分別の德は以て顯彰し難し。故に外道の四種の難辭に對して、以て之を顯す。丈尺に寄せて虛空の高下を顯すが如きなり。三には智行の不同、小乘には如來の無畏は十智を體と爲すと宣說す。十智は上の如し。初中所照の一切智は十智の性を具し、能照の慧は唯等智の性なり。通じて緣ずるを以ての故に。第二の中に就いて、所照の盡は是れ無爲法なり。十智に收めず。能照の慧は唯第十力なり。應に六智の性なるべし。謂ゆる、滅智、法智、比智、盡無生智、及與等智なり。今は難に答へんが爲に、多くは等智の性なり。第三の中に就いて、能說障道は唯第二力なり。應に八

【四には等】四に照境の不同。

【五には等】五に得處の不同。

智の性なるべし。滅道智を除く。今は起說に據つて多くは等智の性なり。能照の慧は唯等智の性なり。第四の中に就いて、能說盡道は唯第七力なり。應に十智の性なるべし。今は起說に據つて多くは等智の性なり。能照の慧も亦等智の性なり。小乘是の如し。大乘には佛の無畏の德は是れ如實智なりと說く。龍樹の說くが如し「彼清淨智、一切智、無礙智は是れ如實智なり」と。義は上に辨ずるが如し。初の無畏の中一切智とは、清淨智、一切智、無礙智の三智を以て體と爲す。能照の慧は是れ一切智、無礙智の攝なり。第二の中に就いて、所照の漏盡は三智に收めず。能照の慧は是れ一切智、無礙智の攝なり。後の二の中に就いて、能說障道能說盡苦は是れ一切智、無礙智の攝なり。能照も亦爾なり。此は是れ第三の智行の不同なり。四には照境の不同、小乘法の中に說くが如きは、佛の無畏は但前境を照して自體を照さず。分別の心は自己の體を反照すること能はざるが故に。大乘は爾らず、能く前境を照し亦自體を照す。『涅槃』に說くが如し「菩薩の眼根すら尙能く自ら見る。何に況んや佛智にして自ら照さざらんや」と。五には得處の不同、小乘法の中には、佛の無畏は唯道樹に在り成佛の時得と說く。大乘は爾らず。圓滿は佛に在つて、種性已上は分に隨つて脫得す。故に『華嚴』の中に宣說すらく「十住の初發心の時便ち正覺を成ず。慧身を具足して諸の如來に等し」と。無畏既に爾なり。餘の德も悉く爾なり。四無畏の義、厥の趣爾なり。

大乘義章卷第十九

大乘義章 卷第二十本

遠法師撰す

【一】淨法聚果法の中第十二段に五分法身の義を明すに四門の別あり、第一に釋名。

淨法聚果法の中、此卷に七門有り。五分法身の義。五眼の義。六通の義。十力の義。十號の義。十八不共法の義。百四十不共法の義。

五分法身の義に四門分別あり。一には名を釋す。二には相を辨ず。三には三學の分別。四には三聚の分別。

(一)第一に、名を釋す。五分法身は諸經に多く說く。『名字は是れ何ん。』『謂はく、戒、定、慧、解脫、解脫知見は是れ其五なり。此五種の義は因果に通ず。經の中には、多く無學に就いて之を說く。無學の中には統べて大小に通ず。今は佛德を論ず。言ふ所の戒とは、行方便に據つて防禁するを戒と名く。諸過を防禁して永く起らざらしむ。實に就いて以て論ずれば、法身の體淨にして過として起るべき無し。故に名けて戒と爲す。言ふ所の定とは、行方便に據つて亂を息め緣に住する、之を目けて定と爲す。實に就いて辨ずれば、眞心は體寂にして自性不動なり。故に名けて定と爲す。言ふ所の慧とは、行方便に據つて觀達するを慧と名く。實に就いて以て論ずれば、眞心は體明にして自性に闇無し。之を目けて慧と爲す。解脫と言ふは、行方便に據つて縛を免るるを脫と名く。實に就いて辨ずれば、自體に累無きが故に解脫と曰ふ。解脫知見とは、行方便に據つて已が出累を知るを解脫知見と名く。實に就いて以て論ずれば、自實を證窮して本、染無しと知るを解脫知見と名く。』

【龍樹の等】大智論第二十六、第八十六。

【又龍樹の等】大智論第二十六。

【二】第二に五分法身の體相を辨ず　一に戒。

問うて曰はく、「知見は慧の別稱なり。一を擧ぐれば便ち足る。何んが勞しく並べて說くや。」〔一〕龍樹釋して言はく、「知と見とは亦別義有り。或は是見有れども、而も是れ知に非ず。彼小乘の八忍の心の如し。推求するを見と名くるも、而も未だ決了せざるが故に知と名けず。或は是知有れども而も見と名けず。彼小乘の盡無生智の如し。境に於て決了するが故に知と名くることを得。無學は息求の故に見と名けず」と。今の說は彼に異す。知にして而も是れ見なり。是故に解脫知見と宣說す。己が所得に於て、觀求を見と名け覺了を知と曰ふ。又龍樹云はく、「其義を牢めんが爲に知見を並べ說く」と。』此五種の分別を分と名く。又分は是れ因なり。此五種は身を成ずるの因なり。故に名けて分と爲す。法は自體に名く。此五種は無學の自體なり。故に名けて法と爲す。又法は是れ共軌則の義なり。此五種は身を成ずるの軌なり。故に名けて法と爲す身とは是れ體なり。此五は佛の體なり。故に名けて身と爲す。又德聚積するを亦名けて身と爲す。名義是の如し。此初門竟る。

〔二〕次に其相を辨ず。戒に三種有り。一には別解脫戒、『遺教』に說くが如し、「戒は是れ正しく解脫に順ずるの本なり。故に解脫と名く」と。又復分に隨つて業羇を免絕するも、亦解脫と名く。散心の受得は定道二種の心と俱ならず。故に名けて別と爲す。二には禪戒、亦は定共と名く。禪定の心の邊に別に無作の離惡の法生ずること有り。故に禪戒と名く。此れ定と俱なり。定有れば則ち有り、定失すれば則ち捨す。故に定共と名く。三には道戒、亦は道共と名く。聖道の心の邊に別に無作の離過の法生ずること有り。故に道戒と曰ふ。此

【次に等】二に定身。

【次に等】三に慧身を辨ず。

【次に等】四に解脱身。

れ道と倶なり。故に道共と名く。此義は前の三律儀の中に、具に廣く分別するが如し。此三の中に於て果を分つて因に異すれば、偏に佛果倶生の道戒を取つて以て戒身と爲す。因を攝して果を成ずれば、一切皆是なり。次に定身を辨ず。定に二種有り。一には事定、謂はく、世の八禪なり。事中に心を安んじて事亂を息除す。故に事定と名く。二には理定、三三昧等なり。理中に心を安んじて性亂を息除す。故に理定と名く。取性理に違ふを名けて性亂と爲す。又實際に住して一切の妄想分別を除滅するも、亦理定と名く。取相の心を妄分別と名く。此二定の中果を簡んで因に異すれば、唯佛果相應の理定を取つて佛の定身と爲す。因を攝して果を成ずれば、一切皆是なり。次に慧身を辨ず。慧に二種有り。一には世智、世法を了知す。二には第一義智、第一義を知る。此二種は並に因果に通ず。果を簡んで因に異すれば、果の中の智は是れ佛の慧身なり。因を攝して果を成ずれば、一切皆是なり。次に解脱を論ず。解脱に二有り。一には有爲解脱、無漏の聖道は羇縛を免絶す。二には無爲解脱、滅諦涅槃は業縛を滅離す。此二解脱は並に因果に通ず。果を簡んで因に異すれば、果中の解脱は是れ佛如來の解脱の身なり。因中は則ち非なり。因を攝して果を成ずれば、一切皆是なり。又有爲無爲の中に就いて相を分つて之を言はば、有爲解脱は是れ解脱身、無爲は則ち非なり。『何が故に然る。』『解脱身とは、是れ慧の中の差別なり。故に有爲は是なり。無爲は慧に非ず。所以に取らず。又復身とは、是れ聚積の義なり。有爲の功德は積聚の義有り。故に名けて身と爲す。無爲の法は積聚の義無し。故に身を成ぜ

【次に等】五に解脫知見身を辨ず。

【三】第三に三學に約して分別をなす。

す。相を攝して之を言はば、一切皆是なり。問うて曰はく、『無爲に積聚の義無くんば、云何が身を成ぜん。』釋して言はく、『身とは是れ其體の義なり。無爲解脫は亦是れ如來の功德の法體なり。故に佛と名くることを得。故に『華嚴』の中に佛の十身を說く。始め願身より乃ち智身に至る。十が中の第九は是れ其法身なり。論に自ら之を釋す、「法身と言ふは、謂はく、無漏界なり。無漏界とは、謂ゆる、涅槃なり」と。故に無爲法も亦身を成ずることを得。『華嚴』の中の涅槃佛と同じ。』有爲の中に就いて復二種有り。一には心解脫、四住を斷除す。功德心淨なり。二には慧解脫、無明を除滅す。一切智淨なり。此二は通じて解脫身と名くるなり。次に知見を辨ず。知見に二有り。一には自知解脫、己が所得に於て覺了分明なり。二には知他解脫、三乘の人の一切の所得を知る。此二は通じて知見身と名くるなり。相を辨ずること是の如し。此二門竟る。

(三)次に、三學に約して分別を爲す。戒定智慧は是れ三學なり。前の五身の中、初の一は是れ戒、次の一は是れ定、後の三は是れ慧なり。問うて曰はく、『何が故に慧行の中のみ獨り分つて三と爲し、戒定は各一なる。』『人亦釋して言はく、『慧は多能有り。故に獨り三を分つ。戒定は爾らず。故に各一と爲す。一相且く然なり。未だ專ら定むべからず。』『云何が不定なる。』『經の中に或時は戒を分つて多と爲し、定慧は各一なり。六度門の如き、前の四は戒學、第五は是れ定、第六は是れ慧なり。戒は行の始なるを以て、多法佐助して方に乃ち能く成ず。故に分つて多と爲す。餘は是の如くならず。故に獨り一と爲す。或時

【四】第四に三聚に約して分別す。

は定を分ち、戒慧は各一なり。彼四種の無罪樂門の如き、戒行を一と爲す。出家樂と名く。定を分つて二と爲す。謂はく、遠離樂及び寂滅樂なり。初禪に欲惡不善を遠離するを遠離樂と名け、二禪已上に覺觀止息するを寂滅樂と名く。慧行を一と爲す。菩提樂と名く。禪定は苦樂の相を息むること增强なり。故に分つて多と爲す。戒慧は爾らず。故に獨り一と爲す。或時は慧を分ち、戒定各一なり。七淨門の如き、慧の中に五を分つ。謂ゆる、見淨、度疑淨、道非道淨、行淨、行斷智淨なり。戒行を一と爲し、名けて戒淨と爲す。定行を一と爲し、名けて心淨と爲す。障を除き過を離るる慧に多能有るが故に、分つて五と爲す。戒定は爾らず。故に獨り一と爲す。或は戒定慧の三行倶に分つ。八正門の如き、戒を分つて三と爲す。正語正業、及與正命なり。定を分つて二と爲す。正念、正定なり。慧を分つて二と爲す。正見、正思惟なり。良に諸行各異相有るを以て、所以に並に分つ。今五身を說かば偏に慧行を分ち、戒定各一なり。義は向前の七淨の門に當る。良に法門の離合一に非ざるを以ての故に、專ら定まらず。「此三門竟る。」

(四)次に、三聚に約して五身を分別す。色法、心法、非色心法は是れ其三なり。『毘曇』の如きに依らば、五分法身は要ず唯色心なり。初の戒は是れ色、餘の四は是れ心なり。『何が故に心の中に偏に分つて多と爲す。』人多く釋して言はく、『心に多用有り。故に分つて多と爲す。色法は爾らず。所以に一と爲す。蓋し亦是れ其一相に之を言はば、未だ專ら定むべからず。』『此義云何。』『經の中に、或時は色を廣くし心を略す。十二入の如し。或時は心

を廣くして其色を略す。五陰門の如し。或時は色心の二事倶に廣す。十八界の如し。或時は色心の二事倶に略す。名色門の如し。今五身を說かば、義は五陰に當る。此多門は離合一に非ざるを以ての故に、專ら定めず。若し『成實』に依らば、初の戒身の中作戒は是れ色、無作は是れ其非色非心、後の四は是れ心なり。是の如く說かば、初の一の戒身は非情を體と爲し、後の四は是れ情なり。『問うて曰はく、『何が故に非情法の中に獨り立てて一と爲し、情法に四と爲す。』『人多く釋して言はく、『良に心法は人を成ずる中に强きを以ての故に、分つて四と爲す。』と『此れ專ら定むるに非ず。經の中に、或時は戒を分つて多と爲す。六度門の如し。或は心を分つて多と爲す。七淨門の如し。或は戒と心と並に分つて多と爲す。八正門の如し。寧ぞ一定すべけんや。大乘の如きに依らば、戒は三業に通ず。十善道を說いて以て戒と爲すが故に。中に於て作戒は是れ色、是れ心なり。身口の作業は之を名けて色と爲し、意地の作業を說いて以て心と爲す。無作は是れ其色心の法にして、色心の事に非ず、色心は止業にして、色心より生ずれば色と名け心と名く。是れ形礙に非ず。復慮知に非ず。是義を以ての故に色心の事に非ず。此義は前の三聚戒の中に、具に廣く分別するが如し。戒身是の如し。餘の四は心法にして、若し無爲解脫を說いて身と爲さば、解脫身も亦色心に非ず。五身是の如し。

五眼の義に八門分別あり。一には名を釋す。二には相を辨ず。三には修成の次第。四には境に約して分別す。五には人に就いて分別す。六には所見の分齊。七に

【五】淨法聚果法の中第十三段に五眼の義を明すに八門の別あり。一に釋名。

は因を明す。八には上十眼に約對して共に相收攝す。

（五ノ一）第一に、名を釋す。五眼の義は諸經に多く說く。照矚を眼と名く。眼別不同にして、一門に五を說く。『五の名は是れ何ん。』『一には是れ肉眼、二には是れ天眼、三には是れ慧眼、四には是れ法眼、五には是れ佛眼なり。五の中肉眼及與慧眼は體に就いて名を彰す。肉を用て眼と爲すを名けて肉眼と爲し、慧を以て眼と爲すを名けて慧眼と爲す。故に體に就いて云ふ。法眼の一種は境に從つて稱を立つ。能見の法なるを以て名けて法眼と爲す。故に境に從ふと云ふ。天眼、佛眼は得名不定なり。』『云何が不定なる。』『天眼の得名に凡そ三種有り。一には人に從つて稱を立つ。人は義に從つて目く。諸佛菩薩を名けて淨天と爲す。人中に生在して報得する眼根は三千大千世界を徹見す。彼淨天に從つて以て共名を立つ。故に天眼と名く。二には趣に就いて名を彰す。始め四王より上非想に至つて、通じて是れ天趣なり。彼天中に生じて報得する眼根は能く遠く照矚す。故に天眼と名く。三には因に從つて目を受く。『地持』に說くが如し。一切の禪定は三住の中に於て、名けて天住と爲す。此天住に依つて淨眼を修得す。因に從つて以て彰すが故に天眼と名く。良に天眼に斯三の別有るを以て、是故に名を得ること各別不同なり。宜しく審に記知すべし。佛眼の得名に凡そ二種有り。一には人に從つて稱を立つ。人は義に從つて目く。諸佛如來は能く覺達すること有るが故に、名けて佛と爲す。佛人の眼なるが故に佛眼と名く。二には當體に稱を立つ。佛を名けて覺と爲し、悟實の智も之を號けて覺と爲す。此覺智を說いて以て

【龍樹等】第三十九。大智論

【地持】第八。

眼と爲す。故に名けて佛眼と爲す。良に佛眼に共二種有るを以て、是故に名を得ること各異不同なり。』『何等をか二と爲す。』『一には總相の佛眼、因中の四眼、佛果に流至するを總じて佛眼と名く。故に龍樹云はく「譬へば四河流れて大海に至れば、通じて大海と名くるが如し。是の如く四眼佛果に流至するを通じて佛眼と名く」と。此の如きの佛眼は人に就いて名を彰す。二には別相の佛眼、眞實如來藏性を照見するを名けて佛眼と爲す。此の如きの佛眼は當體に稱を立つ。』佛眼の中に斯兩種有り。亦須く深記すべし。五眼の得名に斯左右有り。次に須く之を釋すべし。肉眼と言ふは、形膚を肉と曰ふ。淨肉の眼は能く照矚すること有り。故に肉眼と名く。天眼と言ふは、解釋不定なり。趣に就いて以て論ずれば、受くる所自然なり。之を目けて天と爲す。『地持』に釋するが如し、「天趣の眼なるが故に天眼と名く」と。若し人に就いて解すれば、諸佛菩薩は淨なるが故に天と稱す。淨天の眼なるが故に天眼と曰ふ。若し禪に依つて釋すれば、一切の禪定は離欲清淨なり。故に名けて天と爲す。天に依つて眼を得るが故に天眼と曰ふ。慧眼と言ふは、觀達を慧と名く。慧は能く照矚するが故に慧眼と名く。法眼と言ふは、軌則を法と名く。又『成實』に云はく、「法は自體に名く。善惡等の事は各自體有り。故に名けて法と爲す。照法の眼なるが〔五〕故に法眼と名く」と。佛眼と言ふは、總に就いて以て釋す。佛を覺者と名く。覺人の眼なるが故に佛眼と名く。別に就いて解すれば、佛は是れ覺智なり。是れ此覺智は能く照矚すること有るが故に佛眼と名く。名義是の如し。

【六】第二に五眼の體相を明す。

（六）次に第二門に、其體相を辨ず。此五眼の中肉眼の一種は色法を體と爲す。天眼の一種は亦色亦心なり。後の三は心法智慧を體と爲す。肉眼の中に其二種有り。一には是れ報、二には長養なり。宿業の所得は是を名けて報と爲し、或は飮食醫藥等の力を以て勝眼根を得るを、名けて長養と爲す。天眼に二有り。一には現の色像を照す。色根を體と爲す。二には未來を照見す。智慧を體と爲す。色の中に二有り。一には方便、二には是れ報なり。方便と言ふは、禪に依つて修得す。『是義云何。』『毘曇』に說くが如し。上禪に依つて天眼を修習し、其上地の淸淨の四大を得て下の肉眼と同じく一處に在り。之を用て遠く見るを名けて天眼と爲す。若し『成實』に依らば、禪定の力下の肉眼を轉じて遠く見るに堪えしむ。卽ち天眼と名く。更に異生無し。大乘の所說は『毘曇』と同じ、上の四大所造の眼根を得て、下の肉眼と同じく一處に在り。之を用て遠く見る。』方便是の如し。言ふ所の報とは、報に二種有り。一には佛菩薩は宿世の行業因緣力の故に、所生の處に隨つて報得の天眼能く遠色を見る。二には諸天等天中に生在して、報得の淨眼能く遠色を見る。天報の中に就いて復二種有り。一には散善の業果、謂はく、欲界の天なり。二には定善の業果、謂はく、色界の天なり。若し復通じて論ずれば、無色にも亦有り。大乘に無色界の中にも亦色有りと宣說するが故に。彼天眼の中慧を體と爲すとは、小法の中には唯方便有り。大乘法の中には其二種有り。一には方便、禪に依つて修得す。二には是れ報、諸佛菩薩も亦修力の故に、報得の淨智生じて便ち能く未來世の事を見る。慧眼に二有り。一には是れ方

【七】第三に五眼の修成次第の義を明す。

【次第の等】後の三眼について二種の次第を明すに、一に觀入の次第を明し、中に四義を說く。

便、二には是れ報生なり。方便と言ふは、現在の時中に友に近きて法を聞き、思惟修習して諸法の空を見る。報生と言ふは、「地論」には名けて報生の識智と爲す。本修を以ての故に所生の處に隨つて、自然に一切法空を照見して修習を待たず。法眼の中にも亦二種有り。一には方便、二には報生なり。慧眼と同じ。唯所見の境界に別異有り。佛眼の中にも亦二種有り。一には方便、實性を學觀す。二には報成、本の修習を以て任性成就す。報成を以ての故に、經論の中には說いて報佛と爲す。體相是の如し。

(七)次に第三門に、共修成次第の義を明す。行者は己が身を長養せんと欲するが爲に、先に肉眼を修す。肉眼有りと雖も但能く麁を見て細を見ること能はず、但能く近きを見て遠きを見ること能はず、但能く明を見て闇を見ること能はず、但能く前を見て後を見ること能はず、但障內を見て障外を見ず。是の如き等の衆多の障礙有るが故に天眼を修す。天眼を以ての故に一切悉く見る。此前の二眼は次第是れ定れり。後の三眼は次第定らず。中に於て具に論ずれば、次第に二有り。義別に八有り。次第の二とは、若し觀入に依らば、先に法、次に慧、後に佛眼を明す。若し寂に從つて起用の次第を論ずれば、先に慧、次に法、後に佛眼を明す。義別の八とは、前門の中の義別に四有り、後門も亦爾なり。前門の四とは、其第一門に前の天眼を修して但色の事を見、未だ一切の法相を照見すること能はず。故に法眼を修す。法眼は一切の法相を見ると雖も、未だ破相の空理を照見すること能はず。次に慧眼を修す。慧眼は破相の空理を見ると雖も、而も未だ窮盡せず。不盡なるを以ての

故に、次に佛眼を修す。佛眼を以ての故に、破相畢竟じて空を見ること窮極す。此門の中に於て佛眼と慧眼は同じく空理を見る。盡不盡の異なり。龍樹の說くが如し、「菩薩の波若、佛に至れば轉じて薩婆若智と名く」と。義此に當る。其第二門には前の天眼を修して、但色の事を見て一切の法相を見ること能はず。次に法眼を修す。法眼は一切の法相を見ると雖も、而も未だ破相の空理を見ること能はず。見ざるを以ての故に、次に慧眼を修す。慧眼は破相の空理を見ると雖も、而も未だ如實の眞空を見ること能はず。見ざるを以ての故に、須く佛眼を修すべし。佛眼を以ての故に、如實の空を見る。龍樹の說くが如し。菩薩は生空、法空を修學して漸漸に不可得空を修得す。不可得空は是れ眞空なり。如來藏性は本より以來不起不滅にして自性常寂なり。法を破して然して後に空を爲すことを待たず。故に名けて眞と爲す。其第三門には前の天眼を修して、但色の事を見る。法眼は一切の法相を了見し、慧眼は破相の空理を了見し、及び眞空を見る。故に彼『無量壽經』に說いて言はく、「慧眼は實を見る」と。此見と言ふは、『涅槃』に說くが如し、「法として見るべきもの無きが故に、空を見ると名く」と。慧眼は一切の空理を見ると雖も、而も佛性の眞有を見ること能はず。見ざるを以ての故に、次に佛眼を修す。故に法界如實の眞有に了達す。此先の三門は別相の佛眼に約對して以て論ず。其第四門は總相の佛眼に約對して以て說く。前に天眼を修して色の事を照見す。法眼は一切の法相を了見し、及び眞實如來藏中の善有の法を見て而も窮盡せず。慧眼は破相の空理を照見し、亦眞實如來藏中の如實の空

【起用の次第等】次に起用の次第を明して四義もて分別す。

【龍樹の等】大智論第三十九。

義を見て而も窮極せず。前の四眼の所見は窮めざるを以て、次に佛眼を修し。佛眼を以ての故に、前の四眼の盡さざる所の處に於て一切悉く見る。此門の中に於て向前の四眼究竟成滿するを、便ち佛眼と名く。觀入の次第の四義是の如し。『起用の次第の四義云何。』『其第一門には前の天眼を用て色の事を見て、而も未だ破相の空理を見ること能はず。次に慧眼を修す。慧眼は空を見て、而も未だ一切衆生の根欲性心及び一切種の化衆生法を見ること能はず。次に法眼を修す。法眼は一切衆生の根欲性心及び化生の法を見ると雖も、而も窮盡せず。盡さざるを以ての故に、次に佛眼を修す。佛眼を以ての故に、之を見ること窮極す。此門の中に於ては、佛眼と前の法眼とは同じく見る。盡不盡の異りあり。龍樹の說くが如し「菩薩の法眼佛に至るの時は、轉じて佛眼と名く」と。義は此門に當る。其第二門には前の天眼を用て色の事を見る。次に慧眼を修して破相の空を見る。次に法眼を修して諸の衆生の根欲性心及び化生の法を見て、而も未だ如來藏中の法界眞有を見ること能はず。次に佛眼を修す。佛眼を以ての故に、眞有の法に於て一切悉く見る。此門の中に於ては、佛眼と前の法眼とは見ること別なり。其第三門には前の天眼を用て色の事を見る。次に慧眼を修して破相の空を見る。次に法眼を修して衆生の根欲性心及び化生の法を照見し、幷に眞實如來藏中の法界眞有を見る。此法を見ると雖も、而も未だ非有非無如實眞空を見ること能はず。次に佛眼を修す。佛眼を以ての故に、法性如實眞空を了達す。此前の三門は別相の佛眼に約對して分別す。其第四門は總相の佛眼に約對して以て論ず。前に天

【八】第四に境に約して分別す。

眼を修して色の事を見、次に慧眼を修して破相の空を見、及び佛性如實眞空を見て而も窮盡せず。次に法眼を修して法相の有を見、及び眞有を見て而も究竟せず。前の四眼は究竟せざるを以ての故に、須く佛眼を修すべし。佛眼を以ての故に、前の四眼の窮盡せざる處に於て一切窮極す。此れ則ち向前の四眼滿足するを、便ち佛眼と名く。更に異法無し。修成の次第は其相是の如し。

(八)次に第四門に、境に約して分別す。境別に四重あり。一には事、二には法、三には理、四には實なり。陰界入等の差別の事は是れ其事なり。苦無常等の通相の法は是れ其法なり。破相の空義は是れ其理なり。如來藏中の一切種の義自性常爾なるは是れ其實なり。此四重は五眼の所見なり。『是義云何。』『今は先に別相の五眼に約就して分別を爲し、然して後に總別の五眼に約就して分別を爲す。』『分別の五眼の分別は云何。』『肉眼、天眼は唯事中の一の色の麤事を見て、餘は悉く見ず。『涅槃』に說くが如し、「菩薩の天眼は直に色を見るのみに非ず、亦彼色の生滅の相を見る」と。若し是義に從はば、亦分に法を見る。少なるが故に論ぜず。法眼は陰界入等の一切種の事を見、及び法を見る。慧眼は破相の空理を見、佛眼は實を見る。』『別相是の如し。』『總別の五眼の境を見ること云何。』『前の四眼は是れ其別なるが故に、別して四境を見る。後の一の佛眼は是れ其總なるが故に、總じて四境を見る。前の別の中に就いて、肉眼、天眼は一の色の麤を見て而も窮盡せず。法眼は陰界入等の事相の法を見、及び一切の苦無常等の生滅の法數を見、并に眞實如來藏中の善有の法を見て

【龍樹の等】　大智論第三十九。

【龍樹釋して等】　大智論第四十。

【九】　第五に人について分別す。中一に相に隨つて分つ。

【二には等】　二に勝を簡んで劣に異にす。

亦窮盡せず。慧眼は破相の空理を見、亦眞實如來藏中の白體眞空を見て而も究竟せず。佛眼は前の四重の法を見て、悉く皆窮盡す。故に龍樹云はく、「當に知るべし、佛眼は見ざる所無く、聞かざる所無く、知らざる所無し。其總を以ての故に」と。『問うて曰はく、『佛眼は正しく見と言ふべし、云何が聞と云ふ。』『龍樹釋して云はく、「耳識に從つて智慧を生ずるが故に、說いて聞と爲す。又復諸根は佛眼の眷屬なるが故に、說いて聞と爲す」と。』

(九)次に第五門に、人に就いて分別す。人とは、謂はく、凡夫、聲聞、緣覺、菩薩及び佛なり。此人に約就して五眼を分別す。中に於て三門あり。一には相に隨つて分つ。肉眼、天眼は事相を見る。是れ凡夫の法なり。判じて凡夫に屬す。假使聖に有るとも、性は凡夫に屬す。法眼、慧眼は人に配すること不定なり。若し觀入の次第に就いて以て論ずれば、法眼は苦無常等の生滅の法數を見る。判じて二乘に屬す。故に二乘の人見道に入る時を法眼淨と名く。慧眼は平等の空理を見る。判じて菩薩に屬す。若し寂に從つて用を起す次第に依らば、慧眼は陰界入等の空無我人を見る。判じて二乘に屬す。法眼は一切衆生の根欲性心を見、及び一切の化衆生の法を見る。判じて菩薩に屬す。佛眼は佛に在り。義の在ること知るべし。二には勝を簡んで劣に異す。上は下を兼ぬることを得、下は上に及ばず。此門の中に於て、凡夫は唯肉眼、天眼有つて餘の三種無し。聲聞、緣覺は其義不定なり。若し向前の觀入の門に依らば、彼に法眼、肉眼、天眼有つて餘の二種無し。若し向前の起用の門に依らば、彼は慧眼、肉眼、天眼を具して餘の二種無し。菩薩の人は前の四種を具し

【三には等】三に大を簡んで小に異にす。

【(一〇)】第六に其五眼所見の分齊を明す、一に肉眼について。

【龍樹の等】大智論第三十九。

【大品】大智論第三十九。

て未だ佛眼を得ず。諸佛如來は五眼を具足す。故に經に說いて言はく「五眼を具足して菩提を成ずるなり」と。三には大を簡んで小に異す。凡夫二乘は是れ其小なり。諸佛菩薩は是れ其大なり。彼小の中に就いて、下は上に及ばず、上は下を兼ることを得。義は前に解するが如し。彼大の中に就いて、諸佛菩薩は齊く五眼を具す。滿不滿の異なり。人に約すること是の如し。

(一〇)次に第六門に、其五眼所見の分齊を明す。先に肉眼を論ず。龍樹の說くが如し。凡夫の肉眼は極遠に百由旬を見ること能はず。轉輪王の如し。斯より已還は近遠定らず。問うて曰はく、『日月は此を去ること四萬二千由旬なり。世人同じく見る。云何が百由旬に滿ずること能はざらん。』『論に自ら釋して言はく「日月は光有つて、反つて自體を照す。故に人之を見る。是れ眼力に非ず」と。又人見ると雖も實に稱ふ能はず。故に見と名けず。』『云何が稱はざる。』『日月は方圓五百由旬なり。見るに扇許の如し。故に稱はずと云ふ。』聲聞、緣覺の肉眼は凡に同じ。菩薩の肉眼は遠近不定なり。『大品』に說くが如し。近は則ち一百由旬を見、遠は三千大千世界を極む。問うて曰はく、『近處は何の定准有つてか近見一百由旬と言ふ。』『龍樹釋して言はく、「凡夫、轉輪王等を別たんが爲の故に、見百と言ふ。其れ實には不定なり」と。』問うて曰はく、『遠處は何の義を以ての故に、多く見ること能はずして而も極めて遠くは三千界を見ると言ふ。』『論に釋するに三有り。一義に釋して言はく、「三千界の外虛空の中に大風輪有つて肉眼と違す。此障を以ての故に遠く見ること能

はず」と。第二に釋して言はく「若し天眼無くんば强ひて勝福を修し、應に能く遠く見るべし。天眼有るを以て、更に殊異の勝福を修習せず。故に遠く見ず」と。第三に釋して言はく「菩薩の肉眼も亦能く遠く見る。但佛に說かず」と。後の釋應に善なるべし。『何が以に知ることを得る。』『經の中に說くが如し。阿彌陀國報得の肉眼は無數三千界の事を徹見す。明かに知んぬ、一三千界に局らざることを。『大品』に說いて言はく「三千界を見る」と。此に據つて言ふのみ。』問うて曰はく、『肉眼は障外の色を見ること能はず。云何が能く三千界の事を見る。』『論に釋するに二有り。一義に釋して言はく「三千を見ると雖も、障處を見ずして障無き處を見る」と。第二に釋して云はく「菩薩は復人中に生存すと雖も、彼宿世の淨業の因緣を以て報得の天眼は彼肉眼と同じく一處に在り。此天眼の開導力を以ての故に、彼肉眼をして障外の所有の色を見ることを得しむ」と。』問うて曰はく、『若し天眼をして導かしむるが故に肉眼障外の色を見ることを得ば、闇中の色は天眼開導して能く見ることを得るや不や。』釋して言はく、『得ず。故に論に說いて言はく「夜闇の時は天眼獨り肉眼を用て見ず」と。』『何が故に是の如くなる。』釋して言はく、『彼障外の色處に於て空有り、明有り。生識の緣具するが故に、天眼開導して闇中の色を見しむることを得。闇中に於ては、色處に明無し。生識の緣闕くれば天眼導くと雖も、而も見ること能はず。此は是れ一理なり。又障外の色は障中に在らず。彼處顯了にして心を牽く義强し。故に天眼導いて卽便ち能く闇中の色を眼る。闇中に在らば心を牽くの義無きが故に、設ひ之を導

【次に等】二に天眼所見の分齊を論ず。

くとも亦見ること能はず。菩薩是の如し。』『如來の肉眼の所見幾何ぞや。』『論に釋するに二有り。一に云はく、「如來は菩薩と同じく三千界を見る」と。第二の釋に言はく、「佛法は難思にして所有の肉眼も亦能く遠く見る。能く遠く見ると雖も、佛は多く用ひず、以て實と爲さず。」と此義は佛聖自在通の中に宣說するが如し、「佛は好色に於て貪等の樂を生ぜず。彼惡色に於て厭惡を生ぜず。此二色に於て或時は捨を行ず。是義を以ての故に肉眼は餘人に勝過することを得と雖も、而も愛樂せず。愛せざるを以ての故に、數〻之を用ひず」と。論釋是の如し。』問うて曰はく、『若し如來の肉眼をして能く遠色を見しむれば、何の義を以ての故に天眼と名けずして肉眼と名くる。』釋して言はく、『此れ肉眼の因に從つて得るが故に肉眼と名く。又天眼の開導と爲つて能く見る。獨り自力のみに非ず。故に肉眼と名く。』肉眼是の如し。次に、天眼所見の分齊を論ず。龍樹の說くが如し。凡夫の人修得の天眼は極く遠きは能く一四天下を見る。凡夫の人の報得の天眼所見の分齊は經論に辨ぜず。今は宜しく其住處に准じて之を論ずべし。經の中に說くが如し。初禪の住處は千四天下の如く、二禪の住處は三千四天下の如く、四禪の住處は寬廣にして無量なり。無量と云つて多少を定めずと雖も、前の階降に准じて應に四千四天下許りの如くなるべし。亦當に所見の應に爾るべきのみならざるべし。文に成判無し。未だ專ら定むべからず。聲聞の人の中に大有り、小有り。其小聲聞は小千界を見る。彼初禪の梵王と相似せり。言ふ所の異とは、龍樹の說くが如し。梵王身は千世界の邊に在つて、向內は能く見、向外は見ず。

【先づ等】三に慧眼。

【次に等】四に法眼。

【次に等】五に佛眼。

聲聞は爾らず。身の所在に隨つて向內向外は恆に千界を見る。其大聲聞は中千界を見る。阿那律を除く。阿那律は專ら修力を以ての故に、三千界を見る。是故は說いて天眼第一と爲す。緣覺の人の中に大有り、小有り。小は能く中千世界を見、大は能く大千世界を見る。菩薩の天眼に其二種有り。一には修起、二には報得なり。其修起とは、人の大小に隨つて所見不定なり。其極者を論ずれば、一切界を見る。故に『地持』に云はく「菩薩は其一切の世界を以て通の境界と爲す」と。其報得とは、『大品』に宣說すらく、「極遠は能く一の三千界を見る」と。如來の天眼にも亦二種有り。一には修得、一切界を見る。二には報得、菩薩と同じく三千界を見る。亦能く無量の世界を見るべし。前の肉眼に準ずるに其義應に爾るべし。後の三眼は復方所を以て之を論ずべからず。唯法の淺深に約して分別することを得。先づ慧眼を論ずれば、聲聞、緣覺所得の慧眼は唯生空を見る。『地持』の如きも亦然なり。設ひ法空を得とも少にして言ふに足らず。菩薩の慧眼は具に二空を見て而も窮盡せず。如來の慧眼は空を見ること畢竟す。次に法眼を論ずれば、聲聞、緣覺所得の法眼は但能く陰界諸入及び四眞諦、十二緣等を見る。此法を見ると雖も、總相麤觀にして微細なること能はず。菩薩の法眼は衆生の根欲性心、及び一切の法を了達す。若は總、若は別、麤細悉く知れども而も窮盡せず。如來の法眼は衆生の根欲性心及び一切の法を了知して、悉く皆窮極す。次に佛眼を論ずれば、二乘に全く無し。菩薩の人の中には進退不定なり。一義の分別は地前の菩薩佛性を聞見す。聞見を以ての故に大聲聞と名く。地上の菩薩は佛

【涅槃】南本第二十五。
【二】第七に五眼の因を辨定す。
【龍樹自ら等】大智論第三十九。
【三】第八に十眼に約對して共に相收攝す。

性を眼見す。眼見を以ての故に、之を說いて證と爲す。若し『涅槃』に依らば「九地已還は佛性を聞見し、十地に眼見して未だ明了ならず。但自身所有の佛性を見て衆生を見ず。故に不了と名く」と。又自身に於て十分に一を見る。故に不了と名く。如來の佛眼は性を見ること窮極す。五眼所見の分齊是の如し。

(二)次に第七門に、共因を辨定す。五眼の因に通有り、別有り。通じて之を論ずれば、一切の諸行悉く共に之を得。故に『大品』に云はく「菩薩は波若波羅蜜を修學して五眼を淨む」と。波若既に然なり。餘行も皆爾なり。『何が故に五眼を生ずと言はずして乃ち淨と云ふや。』『龍樹自ら釋すらく「菩薩の人は先に肉眼有り。亦四眼の分有つて結使覆ふが故に淨を得ず。鏡の性明なるが如し。垢なるが故に見ず。若し其垢を除かば照明本の如し。彼天眼、慧眼、法眼及以佛眼の如きは是れ新起に非ず。故に生と名けず。本有今顯の故に但淨と言ふ」と。斯を以て準驗するに佛德は本有なり。義在つて虛ならず。蓋し一相の言なり。中に於て分別するに亦生の義有り。』通相是の如し。若し別して之を論ずれば、燈明淨物を布施する因緣は肉眼を得、持戒禪定の因緣力の故に天眼を得。持戒の因緣は欲界有報の天眼を得、禪定の因緣は色界上の一切の天眼を得、無量の淨慧を修習する因緣は餘の三眼を得。又論に宣說すらく「無量の功德智慧を修習して餘の三眼を得」と。

(三)次に第八門に、十眼に約對して共に相收攝す。十眼は彼『華嚴』の中に說くが如し。一には是れ肉眼、一切の色を見る。二には是れ天眼、諸の衆生の此に死し彼に生ずるを見

【三】淨法聚果法の中第十四段に六通の義を釋すに九門の別あり、第一に釋名。中に三、先づ其名を定む。

る。三には是れ慧眼、一切衆生の諸根の差別を見る。四には是れ法眼、一切法の眞實の相を見る。謂はく、諸法の第一義の相を見る。五には是れ佛眼、佛の十力を見る。六には是れ智眼、一切種の法を分別し了知す。七には是れ明眼、謂はく、一切諸佛の光明を見る。八には出生死眼、涅槃の法を見る。九には無礙眼、一切の法に障礙有ること無きを見る。十には是れ普眼、謂はく、法界平等の法門を見る。十が中の初の一は是れ前の肉眼、亦天眼を兼ぬ。細遠の色を見るは是れ天眼なるが故に。第二の天眼は是れ前の天眼なり。第三の慧眼、第五の佛眼、第六の智眼、第七の明眼、第八の出生死眼、第九の無礙眼の此六種は是れ前の法眼なり。第四の法眼は是れ前の慧眼なり。眞諦を見るが故に。第十の普眼は是れ前の佛眼なり。佛眼は普く平等の眞法を見るが故に普眼と名く。五眼の義之を辨ずること略爾なり。

六通の義に九門分別あり。一には名を釋す。二には體を論ず。三には修得の義。四には大小の不同。五には三性の分別。六には三業の分別。七には通明示現等の分別。八には修起の次第。九には經に依つて相を辨ず。

(一二)第一に、名を釋す。作用に壅無き之を名けて通と爲す。通別の不同は一門に六を說く。『名字は是れ何ん。』『一には身通と名け、二には天眼と名け、三には天耳と名け、四には他心智、五には宿命智、六には漏盡通なり。是れ其名なり。』中に於て解釋するに、曲くは三門有り。一には其名を定め、二には其義を釋し、第三には眼等の諸根に共立通不立通の

義有ることを料簡す。『之を定むること如何。』『六が中の天耳、他心、宿命の此三通は名義是れ定れり、天耳の一通は根に就いて名を彰し、他心、宿命は境に從つて稱を立つ。他心を知るを他心通と名け、宿命を知るを宿命通と名く。漏盡の一通は其名是れ定れる。其義定らず。經論の中には唯漏盡と名く。故に名は是れ定る。』『其義を論ずるに及んでは、別して二種有り。一には無學の聖智能く諸漏を盡すを漏盡通と名く。此一通は能に就いて名を彰す。能は漏を盡すが故に、亦名けて遣患に稱を立つと爲すことを得。二には漏盡を知るを漏盡通と名く。此一義は境に從つて目を立つ。身通、天眼の此二種は名と義と並に皆不定なり。身通の中には或は身通と名け、或は神通と名け、或は神足と曰ふ。是れ名の不定なり。名を尋ねて義を解す。其義各異なり。是れ義の不定なり。』『異相は如何。』『其身通とは、或は所依に從つて以て其名を彰し、或は復境に從ひ、自己の假名の色身に依つて運變自在なるを、名けて身通と爲す。此れ則ち其所依に從つて名を彰し、外の色身に於て轉變自在なるを名けて身通と爲す。此れ則ち其境界に從つて稱を立つ。其神通とは、能に就いて名を彰す。所爲の神異なる之を目けて神と爲し。作用に壅無き之を謂つて通と爲す。故に能に就くと曰ふ。其神足とは、能に從へ喩に就いて以て其名を立つ。神とは能に從ふ。義は前に解するが如し。足とは喩に就く。遊渉往來の事脚足に同じきが故に、名けて足と爲す。天眼通の中には、或は復說いて生死智通と爲す。是れ名の不定なり。名を尋ねて義を解す。其義各異なり。是れ義の不定なり。』『異相は如何。』『天眼通とは根に

【次に等】二に六通の名義を解釋す

就いて名を彰し。生死智通は境に從つて稱を立つ。是義を以ての故に、身通、天眼は名と義と並に皆不定なり。之を定むること龐爾なり。次に須く解釋すべし。其身通とは、色形聚積の故に名けて身と爲し、此身中に於て作用に壅無きが故に身通と名く。其神通とは、窮潜測り難きが故に名けて神と爲す。又復神異も亦名けて神と爲す。通の義は前の如し。神足と言ふは、神は前の釋に同じ。所爲自在にして遊渉足の如くなるが故に神足と云ふ。天眼通とは、一切の禪定を名けて天住と爲し、禪に依つて眼を得るが故に天眼と名け、照矚無壅なるを天眼通と名く。生死智通とは、未來の起盡を說いて生死と爲し、此生死に於て照見無壅なるを生死智通と名く。然るに此天眼と生死智とは、說くに離合有り。彼『增一阿含』の中の如き、別分して二と爲す。別分するを以ての故に、彼經の中には七通を建立す。『此に何の別か有る。』『現の色像を照すを名けて天眼と爲し、現の所見に因つて尋ねて未來に此に死し彼に生ずと知るを生死智と名く。此別有るを以ての故に、分つて二と爲す。又『華嚴』の十明の中の如き、亦分つて二と爲す。現の色像を照す、之を說いて以て天眼智明と爲し、能く未來に此に死し彼に生ずと知る、之を說いて以て盡知未來際劫智明と爲す。其餘の經論は多く合して一と爲す。然る所以は其天眼の現の色像を照すに由つて、尋ねて未來に此に死し彼に生ずるを知る。此相由有るが故に合して一と爲す。天耳通とは、天は前の釋に同じ。禪に依つて耳を得るが故に天耳と名け、聽聞無壅なるを天耳通と名く。他心通とは非己の慮を名けて他心と曰ふ。此他心に於て照知無壅なるを他心通と名く。『問

【次に等】三に眼等の六根に共立通不立通の義有ることを料簡す。

うて曰はく、『此通は、直他心を知るのみに非ず、亦想等を知る。何が故に偏に他心通と名くる。』『心は是れ主なるを以ての故に他心と名く。又復想等の諸の心數法を、通じて名けて心と爲す。故に他心と名く。』宿命通とは、事、往に謝す、之を目けて宿と爲し、往法相續する、之を名けて命と爲す。此宿命に於て照知無壅なるを宿命通と名く。問うて曰はく、『此通は直命を知るのみに非ず。亦過去の八種の事、六種の同行を知る。何の義を以ての故に、偏に宿命と名けて、宿世の名性等と言はざる。』『命報主なるを以ての故に偏に之を言ふ。又命は最後なり。後に據つて以て彰すが故に宿命と云ふ。』漏盡通とは、結患斯に已むを稱して漏盡と曰ふ。此漏盡に於て照知無壅なるを漏盡通と名く。又無學の智能く諸漏を盡す。是故に亦漏盡智通と名く。名義且く然り。次に須く料簡すべし。眼等の六根に共立通不立通の義有り。六根の中に於て三根は通を立つ。謂はく、眼と耳と意となり。天眼通とは眼根に依つて說き、天耳通とは耳根に依つて說き、自餘の四通は、意根に依つて說く。三根には立てず。謂はく鼻と舌と身となり。『何が故に然る。』『若し唯佛に就かば、諸佛如來は六根互に用ふ。齊く通を立つることを得。但六通の義は餘人に該ね及ぶ。今は宜く通じて餘人に約して之を釋すべし。六根の中、眼耳の二根は離中に知を生ず。能く遠見遠聞の義有り。故に通を立つることを得。意根の一種は離合俱に知り、最も自在を得るが故に多通を立つ。鼻舌身根は合中に知を生ず。塵、根に來至して方に始めて覺知す。遠通の義無きが故に通を說かず。』問うて曰はく、『六が中に共身通有

【華嚴經】第四十二。

【二四】第二に六神通の體性を辨ずるに五門の分別あり。一に色心等の三乘に約して分別す。

り。云何が說いて身根の中には通を立てずと言ふ。』釋して言はく、『身通、彼假名の色身の中に於て運變自在なるを、名けて身通と爲す。身根の覺知自在なるを名けて身通と爲すには非ず。是を以て說いて身根には立てずと言ふ。』又問ふ、『若し鼻舌身根、塵合して方に知るに通を立てざらしむれば、『華嚴經』に說く、「菩薩の鼻根は無色の宮殿の香を聞く」と。又『十住斷結經』の中に、「鼻通有り」と說くが如き、眼耳に過ぎたり。云何が說いて鼻に通を立てずと言ふ。』釋して言はく、『六通は、三乘の共法なり。二乘の人の鼻舌身根は通の義有ること無し。是が爲に立てず。若し大乘不共の法の中に於ては、諸佛菩薩の六根互用して一一の根の中に一切の用を具す。通を說くに過無し。又佛菩薩の法身は自在用にして障礙無し。一切の諸根は悉く皆是れ通なり。彼を取つて將に六通を難ずべきを得ず。』名義是の如し。

【二四】次に第二門に、其體性を辨ず。中に於て、曲くは五門の分別有り。一には色心非色心等の三乘に約して分別し、第二には六識に約就して分別し、第三には十一智義に約就して分別を爲し、第四には十明に約就して分別し、第五には慧心二種の解脫に約就して分別す。初に色心非色心等に約して分別すとは、有人釋して言はく、「眼耳の二通は色法を體と爲す。淸淨の色根を通の體と爲すが故に。餘の四通は心法を體と爲す。慧を體と爲すが故に」と。此義然らず。須く分別有るべし。天眼と天耳は體實に是れ色なり。眼耳を以て通の體と爲さず。當に知るべし、通の體は悉く是れ智慧にして心法を體と爲すことを。『何

【毘曇】雜心論第十七。
【華嚴】經第二十九。
【地論】第五。
【次に等】二に六識に約就して六通を分別す。

を以てか知ることを得る。』『毘曇』の如きに依らば、其十智を將つて六通を分別す。六通は悉く是れ十智の所收なり。明かに知んぬ、色に非ざることを。又『成實』の中に、六通の義を辨ずるに、創始に樹てて六通智品と言ふ。若し四通は體性是れ智、二通は非ならしむれば、彼に應に樹てて四通智品と言ふべし。何が故に乃ち六通智品と云ふや。又『華嚴』の中に六通を開分して以て十明と爲す。十明は是れ智なり。何んが說いて二通は是れ色なりと言ふことを得んや。又『地論』に云はく、「四通を智と名け、天眼を見と名く」と。四通智とは、身通と天耳と他心と宿命となり。彼論に既に天耳を說いて智と爲す。明かに知んぬ、天耳通の體は色に非ざることを。天耳既に爾なり。天眼も亦然なり。但彼論の中には眼の照矚を以て、用に就いて見と名く。體を論ずれば是れ智なり。故に經に名けて生死智通と爲す。「色等に約就して分別すること是の如し。此一門竟る。次に第二門に六識に約就して六通を分別す。論者不同なり。若し『毘曇』に依らば、眼耳の二通は其眼耳二識相應の慧趣を以て體と爲す。此二通は定外の用なるを以ての故に。餘の四通は意識相應の慧數を體と爲す。良に定用なるが故に。彼宗の中には、諸心心法同時に有り。故に相應の慧趣を說いて體と爲す。若し『成實』に依らば、六通は皆第六意識の後の行心中の慧を以て體性と爲す。彼宗は五識には全く智慧無し。故に五識の中の慧は之を以て體と爲すと宣說せず。又彼宗の中には、諸心心法は前後別に起る。故に相應の慧を通の體と爲すと宣說せず。大乘法の中には、凡夫二乘の神通を宣說するに多くは『毘曇』に同じ。亦心法

【次に等】三に十一智に約して分別す。

同時に有りと說くが故に。佛菩薩所得の神通は悉く意識相應の慧を以て、之を以て體と爲すと說く。如實の慧を以て通の體と爲すが故に。此二門竟る。次に第三門に、十一智に約して分別を爲す。十一智とは、謂ゆる、十智及び如實智なり。是れ十一なり。『何者か十智なる。』苦智、集智、滅智、道智を卽ち以て四と爲し、法智、比智を前に通じて六と爲す。前の四諦の智欲界に在るを名けて法智と爲し、上二界に在るを說いて比智と爲す。盡智、無生智を前に通じて八と爲す。向前の六智、無學果に在るを說いて盡智、無生智と爲すなり。此前の八智は一向に無漏なり。第九には等智、一向に有漏なり。第十には他心なり。漏無漏に通ず。『十智是の如し。』此義は前の十智章の中に、具に廣く分別するが如し。如實智とは、諸佛菩薩增上慢を離れて一切の法に於て悉く實の如く知る。是を知らずして妄に知ると稱するに非ざるが故に如實智と名く。若し其體を論ずれば『地持』に說くが如し。謂はく、淸淨智、一切智、無礙智是れなり。此れ向前の三智章の中に、具に廣く辨釋するが如し。今は此智に約して六通を分別す。小乘の六通は十智の所收なり。大乘の六通は如實智の攝なり。小乘の六通は十智の所收なり、『其相云何。』『毘曇』に說くが如し。身通と天眼と天耳と宿命の此四通は一の等智性なり。唯有漏なるが故に。他心の一通は五智性を具す。若し他人の有漏の心を知るは則ち等智の性、若し他人の無漏の心を知るは則ち是れ道智法比智の性なり。欲界の無漏の他心を知るは則ち法智の性、上界の無漏の他心を知るは則ち比智の性、上を知り下を知るは通じて道智の性なり。有漏及與無漏を知る

【論大】雜心論第六。

は、通じて皆是れ其他心の智なり。是故に他心は五智の性を具す。問うて曰はく、『無漏の他心を知るは何の義を以ての故に、則ち名けて道智の性と爲すことを得るや。』『無漏の他心は體性是れ道なり。故に此心を知るを道智と名くることを得。』『若し爾らば所知の有漏の他心は、體是れ苦集なり。能知の智を何が故に苦集智と名けざるや。』釋して言はく、『應に齊かるべし。但彼所知の無漏の他心は體性微細なり。彼道諦と淺深相似す。彼心を知らば則ち能く道を知る。故に彼心を知るは則ち道智の性なり。有漏の他心は事相浮麁なり、苦集の理は其義微細なり。夫智の麁なる者は其細に及ばず。是故に有漏の他心を知るを、名けて苦集の智と爲すことを得ず。此釋麁似たれども細に窮むれば猶非なり。更に須く微に窮むべし。』問うて曰はく、『他の無漏心を知るとは、當に他の無漏の心事を知るべしとや爲ん、當に他の無漏心の上の道如迹乘の四義の通理を知るべしとや爲ん。』釋して言はく、『正しく論ずれば他心の事を知る。若し當に理を知るべくんば、理は相互に通じて自他を分たず。云何が他心智と名くることを得んや。』問うて曰はく、『若し此れ他心の事を知つて理を緣ぜざれば、論文に自ら判ず、『十六行に於て闇を除くと雖も無漏に非ず」と。云何が名けて道智と爲すことを得んや。』釋して言はく、『此義實に難くして易からず。須く消息有るべし。正しく此通を論ずれば、他心を知る時是れ無漏に非ず、亦道智に非ず。而も彼論の中に無漏と名くるは、無漏に近く、無漏に似たるが故に名けて無漏と爲し、又無漏に近く始末通じて說くが故に無漏と名く。又復之を說いて道智と爲す。亦

道に近く、道觀に似たるを以て道智を具すと名く。又復道に近く始末通じて說いて道智を具すと名くるなり。』『是義云何。』『凡そ他の無漏の心を知らんと欲する時は、要ず先づ其道如跡乘の通相の理を觀じて、然る後に上に就いて他心を測知す。是故に始終通相して之を說いて、名けて道智と爲し、名けて無漏と爲す。始を簡んで終を論ずれば、此れ無漏に非ず、亦道智に非ず。』問うて曰はく、『何が故に他人の無漏心の事を知らんと欲すれば、要ず先に理を觀じ然して後に上に就いて他心を測知して、直に望めて他心の事を知ることを得ざるや。』釋して言はく、『道如跡乘の理は煖等より來た、數觀じて純熟す。心に擬すれば則ち無漏の他心は本來未だ知らずと見る。那含已上は方に始めて學觀す。凡そ難を知らんと欲すれば、必ず須く易に從ふべし。是故に無漏の他心を知らんと欲すれば、必ず先に理を觀ず。理觀は是れ彼決定の近因なり。故に通じて之を說いて道智を具すと云ふ。』問うて曰はく、『若し無漏の他心を知るには必ず先に理を觀じ、近方便に從つて道智と名くとせば、有漏心を知るも亦應に是の如くなるべし。何を以てか近方便に從つて苦集智と名くることを得ざる。』釋して言はく、『類せず。彼無漏の中の理觀は前に在り、心を知るは後に在り。先は易く、後は難し。故に先に理を觀じ、然して後に心を知る。彼の有漏の中には、凡夫は本より來た數他心を知る。本數知る時未だ苦集を觀ぜず、是故に苦集の觀に從つて入らず。從つて入らざるが故に、之を說いて苦集智を具すといふことを得ず。又復他人の有漏の心は本より來た數知る。之を知ること則ち易し。苦集の理は

【次に等】四に十明に約對して分別す。

本より來た未だ見ず。煩等より已來方に始て學觀す。之を知ること則ち難し。易く之を知る者は難知を藉つて方便と爲さず。苦集の觀は彼近因に非ず。通じて說いて苦集智と爲すことを得ず。意見且つ然り。縱ひ異釋有るとも都て是れ難しと謂ふ。』他心是の如し。漏盡通の中には智を攝すること不定なり。或は六或は八、或は十智を具す。若し漏盡を知るを漏盡智と名くれば、則ち六智の性なり。謂ゆる、滅智、法智、比智、盡無生智及與等智なり。欲界の滅を知るを名けて法智と爲し、上界の滅を知るを名けて比智と爲し、上を知り下を知るを通じて滅智と名け、無學の滅を觀ずるを盡無生と名け、有漏心緣ずるときは則ち是れ等智なり。苦集道及び他心智を除く。彼は盡に非ざるが故に。若し彼聖人の無學の聖慧、能く諸漏を盡すを漏盡智と名くれば、則ち八智の性なり。彼等智及び他心智を除く。等智は究竟して結を盡すこと能はず。故に等智を除く。無學は息求にして他心を推せず。故に他心を除く。餘の八は皆能く究竟して結を盡す。故に八智を具す。問うて曰はく、『法智は云何が能く究竟して結を盡すことを得れば、法智を具すと說くや。』釋して言はく、『欲界の滅道法智は能く上結を斷じて無學を得るが故に、若し當に漏盡の人を漏盡通と名くることを得と宣說すべくんば、則ち十智の性なり。小乘是の如し。大乘法の中には如實智の攝なり。『其相云何。』『彼初の五通は皆一切智、無礙智の收なり。』漏盡通の中に漏盡を知るを漏盡通と名く。亦一切智、無礙智の攝なり。若し漏盡を證するを漏盡通と名くれば、清淨智の收なり。諸智に約就して分別すること是の如し。此三門竟る。次に第四門

【次に等】五に惠心の二解脫に約對して六通を分別す

【彼文】南本涅槃經第三十三。

に、十明に約對して六通を分別す。十明は彼『花嚴經』に說くが如し。彼には六通を說いて以て十明と爲すが故に、須く之を約して六通を分別すべし。『相狀は如何。』他心通をば彼には說いて一の他心智明と爲し、宿命通をば彼には說いて一の宿命智明と爲す。餘の四通は各分つて二と爲す。身通を二と爲す。一には安住無爲神力智明と名く。轉變自在にして十方界に於て往來無礙なり。二には種種色身智明と名く。能く種種の諸身の差別を現ず。天眼に二を分つ。一には天眼智明、現の色像に於て照矚分明なり。二には盡未來際劫智明、未來に此に死し彼に生ずるを了達す。天耳に二を分つ。一には天耳智明、能く遠聲を聞く。二には無量種種の音聲智明、一切衆生の語言音聲の差別を解了す。漏盡に二を分つ。一には如實智明、法の實性を證して能く諸漏を盡す。二には滅定智明、三乘滅盡の法を了知す。十明に約對して分別すること是の如し。此四門竟る。次に第五門に二脫に約對して六通を分別す。二脫と言ふは、一には慧解脫、二には心解脫なり。經に二脫を說くに共兩種有り。共一義とは、愛結を斷除して定心自在なるを心解脫と名け、無明を斷絕して智慧無礙なるを慧解脫と名く。故に經に說いて言はく、「癡を斷じて慧明かに、愛を除いて心脫す」と。『維摩』に宣說すらく、「永く癡愛を滅して明脫を起す」と。亦此門に當る。此門の中に於て、六通は悉く是れ慧解脫の收なり。智慧の故に。心脫は乃ち是れ六通の所依なり。六通の因にして正く通の體に非ず。第二義とは、『涅槃』に說くが如し。一切の性結煩惱を斷除して眞心障を出づるを、心解脫と名く。彼文に說いて言はく、「貪欲

【又彼文】南本涅槃經第二十三、

【彼文】同前。

【一五】第三に其六通修得の義を明す

瞋癡永く斷滅す。滅するが故に心解脱と名く」と。故に知んぬ、性結の煩惱を斷除するを心解脱と爲すことを。又彼文に言はく「是心本性は貪欲瞋癡と共に和合せず。譬へば日月煙雲塵霧等の爲に覆はると雖も、而も彼五翳と和合せざるが如し。合せざるを以ての故に、諸佛菩薩永く貪欲を破するを心解脱と名く」と。故に知んぬ、眞心の煩惱障を出づるを心脱と名くることを。事無知を斷じて一切の法に於て照見無礙なるを、慧解脱と名く。故に彼文に言はく、一切の法に於て所知無礙なるを慧解脱と名く」と。此門の中に於て、六通は是れ其二脱の所攝なり。『攝相は云何。』『前の五通は慧解脱の收なり。故に『涅槃』に云はく「慧解脱に因つて昔聞かざる所を而も今聞くことを得、昔見ざる所を而も今見ることを得、昔到らざる所を而も今到ることを得」と。亦應に說いて言ふべし「昔知らざる所を而も今知ることを得」と。文には略して辨ぜず。聞かざるに聞くことを得るは是れ天耳通なり。見ざるに見ることを得るは是れ天眼通なり。到らざるに到ることを得るは是れ其身通なり。知らざるに知ることを得るは、是れ其他心、宿命の二通なり。漏盡通の中、義に兩兼有り。一には自ら漏盡を證するを漏盡通と名く。心解脱の收なり。二には他の漏盡を知るを漏盡通と名く。慧解脱の攝なり。體性是の如し。

〔一五〕次に第三門に、其六通修得の義を明す。得に二種有り。一には離欲得、二には方便得なり。下欲を斷離して上禪を得る時、即ち禪に依つて所有の神通を得るを離欲得と名け、方便を修するに從つて得る所有るを方便得と名く。『毘曇』の如きに依らば、彼六通の中漏

【毘曇】雜心論第六。

【彼宗】成實論第七。

盡の一通は唯離欲得、天眼、天耳は唯方便得、餘の三通は亦は離欲得、亦は方便得なり。『何が故に漏盡は唯離欲得なる。』『結盡の處は無漏の聖德なり。卽ち是れ通なるが故に。此に乃ち宣說すらく、「自ら漏盡を證して漏盡通と爲すは、唯離欲得なり。若しは他人の漏の盡不盡を知るを漏盡通と爲すは、他心通なるを以て應に方便を須ふべし」と。今は一義に從ふが故に、略して說かず。『何が故に天眼、天耳の二通は唯方便得なる。』『毘曇』に宣說すらく、「眼耳の二通は體是れ無記なり。定外の作用にして定と俱ならず。下欲を斷離して上定を得る時、此通を得ず」と。是義を以ての故に、離欲得に非ず。定を得るの後別して方便を修して、方に始めて之を得。是義を以ての故に、唯方便得なり。『何が故に餘の三は亦は離欲得亦は方便得なる。』『彼性は是れ善にして定心と俱なり。下欲を斷離して上定を得る時、卽便ち之を得。故に離欲得なり。下欲を離るる時復之を得と雖も、但成就すべくして而も現前せず。現用を得ざれば、更に方便を作して乃ち現用を得。故に方便得なり。財處を異にすれば復已に屬すと雖も現用を得ず、方便往取して始めて現用を得るが如し。彼も亦是の如し。若し『成實』に依らば、漏盡の一通は唯離欲得なり。『毘曇』と同じ。餘の五通は唯方便得なり。『何が故に是の如くなる。』『彼宗』に宣說すらく、「一切の功德修得の後成就して失せざるを、方に名けて得と爲す。未修未現の法を豫め名けて得と爲すこと有ること無し」と。』是義を以ての故に、身通等の五の下欲を離るる時、未だ名けて得と爲さず。修の後に乃ち得。故に方便得なり。若し大乘に依らば、諸佛菩薩自ら

漏盡を證するを漏盡通と名くるは、唯離欲得なり。他の漏盡を知ると、及び餘の五通は亦は離欲得亦は方便得なり。『何が故に是の如くなる。』『大乘の六通は如實の慧を用て、之を以て體と爲す。彼體は卽ち定なり。煩惱を斷離して內に寂滅如實定を證する時、卽ち彼定通を得。故に離欲得なり。初修の時假想の方便眞心を熏發して、中に作用隨つて生ず。故に方便得なり。』『云何が大乘の六通は、皆定と俱なることを知ることを得る。』『維摩』に說くが如し。「諸佛如來は常に三昧に在つて悉く佛國を見るに二相を以てせず」と。』天眼既に然なり。餘の通も亦爾なり。故に皆卽ち定なり。卽ち定なるを以ての故に、悉く離欲得なり。問うて曰はく、『漏盡の離欲得とは、何の地の欲を離れて漏盡通を得るや。』釋して言はく、『分別するに三有り。一には終を簡んで始に異す。非想の欲を離れて漏盡通を得。下地の欲を離るるは漏盡に非ざるが故に。二には終に據つて始を攝す。非想の一地の欲を斷離し已れば、下の諸地の中の對治の無漏悉く皆增明なるを、通攝して以て漏盡智通と爲す。三には分に隨つて通じて論ず。諸地の中に於て、分に隨つて欲を離れて得る所の無漏は皆漏盡通なり。故に『地持』の中に宣說すらく、「菩薩は漏盡通有り」と。』問うて曰はく、『漏盡の離欲得とは、下の欲を離れて上の功德を得るとや爲ん、上の欲を離れて下の功德を得るとや爲ん、當に自地の欲を離れて自地の德を得べしとや爲ん。』釋して言はく、『兼ねて有り。』『是義云何。』『欲結を斷じて初禪地の無漏の功德を得るが如き、是の如きの一切を、下の欲を斷じて上の功德を得と名く。二禪より非想に至つて結を

斷じて初禪地の勝分の無漏を得るが如き、是の如きの一切を、上の欲を斷じて下の功德を得と名く。』『何者か初禪勝分の無漏なる。』『毘曇』の如きに依らば、初禪の無漏は能く初禪より非想に至つて結を斷ず。成實、大乘の初禪の無漏は、能く三界の一切の煩惱を斷ず。此治の中に於て能く二禪より非想に至る惑を斷ずるを、名けて初禪勝分の無漏と爲す。此無漏は要ず上結を斷じて、方に始めて之を得。已前には得ず。初禪の結を斷じて還つて初禪の無漏の功德を得るを、名けて自地の煩惱を斷除して自地の德を得と爲す。是の如きの一切なり。』問うて曰はく、『一切の離欲得とは、當に先の所得の法を得べしとや爲ん、當に先に未だ得ざる所を得べしとや爲ん。若し唯先の所得の法を得れば、無漏の功德は本より來未得なり。離欲の時應に之を得べからず。若し通じて先に未だ得ざる所を得れば、是れ則ち凡夫離欲の時應に無漏を得べし。聲聞、緣覺離欲の時は、應に初禪の一切の功德を得べし。若し具に之を得れば、應に諸佛に同じかるべし。餘地も亦爾なり。』釋して言はく、『離欲の所得は不定なり。或は但先の所得の法を得る有り。凡夫本來曾得の諸禪は、乃ち禪に依つて生ずる所の功德を得。有時は下地の煩惱を退起して上の功德を失はん。後に下結を斷じて還つて本昔失ふ所の法を得、無漏を得ず。良に以れば凡夫は無漏の法に於て、趣向の方便有ること無きが故に。或は通じて先に未だ得ざる所を得る有り。聖人下地の結を斷離する時、通じて上地の無漏の功德を得。先に趣向の方便有るが故に、復之を得と雖も各分限有り。量を過ぐることを得ず。是が爲に小聖は佛に同じきこ

とを得ず。『是義云何。』『今は且く初禪に約就して之を釋す。餘類は知るべし。初禪地の中の無漏の功德は品殊無量なり。中に於て具に聲聞、緣覺、菩薩、佛の德有り。其分限に隨つて未離欲の前に方便を作すとは、離欲已後に則便ち之を得。方便無しとす、欲を離れて得ず。是が爲に聲聞離欲の時は、但聲聞の無漏の功德を得て、餘人の無漏の功德を得ず。是の如きの一切なり。又初禪の德障に三種有り。一には下地障、欲界の煩惱は初禪の德を障ふ。二には自地障、初禪の煩惱は初禪の德を障ふ。三には上地障、二禪已上の一切の煩惱は初禪の功德を障ふ。下障の中に就いては麤細無量なり。聲聞は麤を斷じて初禪の中の麤品の功德を得。緣覺の人は所斷漸く細にして所得漸く勝る。乃至諸佛は之を斷ずること方に盡して所得窮極す。自地障の中の品も亦無量なり。聲聞は麤を斷じて初禪の中の麤品の功德を得。緣覺は轉細にして所得漸く勝る。佛に至つて乃ち窮まり、所得方に極まる。上地障の中の品も亦無量なり。分に隨つて斷除し、所得各別なり。初禪既に然なり。餘禪も亦爾なり。是義を以ての故に、欲を離れて先に未だ得ざる所を得と雖も、即ち佛に同じからず。問うて曰はく、『若し初禪の煩惱還つて能く初禪の功德を障へ、二禪已上非想の結に至つて亦能く初禪の德を障ふと言はば、菩薩の十地初地の中の障還つて能く初地の德を障ふるや不や。二地乃至佛地の障も亦能く初地の德を障ふるや不や。』『釋するに同異有り。異にして之を論ずれば、八禪は是れ其生得の處なれば、初禪地の中の所生の無漏は能く三界の一切の煩惱を斷ず。所斷の煩惱を其能斷に望むれば、齊しく障ふの義有

り。餘禪も亦爾なり。十地は斷障の分齊別處なれば、初地の解は二地の處の障乃至佛地の障を斷ずること能はず。斷ぜざるを以ての故に、二地が家の障乃至佛障は初地を障へず。餘地も亦爾なり。見道の解と修道の解とは對治を雜えざるが如し。』又問ふ、『十地は是れ斷得の處なれば、下過を斷じて上地の德を得べし。八禪既に斷得の處に非ず。下過を離る時應に上禪の功德を得べからず。』釋して言はく、『淨禪は是れ斷德の處にして十地と同じ。故に下欲を離れて上禪の德を得。淨を無漏に望むれば、是れ生得の處なり。故に下禪所發の無漏に依つて、能く自地及び上地の中の一切の煩惱を斷ず。彼結を斷ずる時下地の中の無漏の功德を得。設ひ餘禪を用て上煩惱を斷ずとも、亦下地の無漏の功德を得。同治修の故に。十地の位位別斷には同じからず。異の義是の如し。同じく之を論ずれば、十地の位法一一の位の中麤細障算にして、障も亦無量なり。且く初地を論ず。餘は類して知るべし。初地の中の麤品の障に於ては、淨心の時斷じて初地の中の麤品の功德を得。其微細なる者は二時の時斷じて、初地の中漸勝の功德を得るなり。初地が家の障は佛に至り、乃至所得の功德は佛に至つて乃ち窮まる。初地の障諸地共に斷ずるを以ての故に、諸地の中の所斷の障は同じく初地を障ふ。餘地も亦爾なり。『華嚴』に宣說すらく、「菩薩の一地は普く一切諸地の功德を攝す」と。義此門に當る。此を法位に望むれば禪地と同じ。問うて曰はく、『前に說かく、「漏盡智通は是れ離欲得なり」と。離相は云何。』『前の斷結章の中に具に辨ずるが如し。更に論ずべからず。』問うて曰はく、『『毘曇』に說かく、「身通等も亦

【雜心】論第七。

離欲得なり」と。所離の欲と障通の壅とを、一とや爲ん異とや爲ん。釋して言はく、『不同なり。彼所離の欲は染汙の煩惱なり。障通の壅は不染の無知なり。又所離の欲は斷離の時禪を得、通を得。障通の壅は斷じて唯通を得。又所離の欲は偏に身通、他心、宿命に望む。障通の壅は遍く五通を障ふ。又復彼欲斷除して通を得れば離欲得と名け、障通の壅斷除して通を得れば方便得と名く。是が爲に全く別なり。』問うて曰はく、『此壅は五住の惑の中何の住の所攝ぞ。』『釋するに兩義有り。一には麤を分つて細に異にす。是れ四住が家の眷屬の煩惱は無明地に非ず。無明住地は二乘は斷ぜず。障通の壅は凡夫二乘能く斷ずるが故に。二には末を攝して本に從ふ。是れ無明の中の不染無知なり。若し是れ無明ならば、凡夫二乘安んぞ能く斷除せん。學に隨つて暫く遣す。永く離るること能はざれば、猶斷と名けず。』又問ふ、『此壅は彼三界九地の中に於て繫は何地に屬するや。』釋して言はく、『此壅は染惑に同じからず。定んで諸地に屬す。而も是諸地壅隔の心は欲界より第四禪に至つて在り。此地の中に在つて壅障有るが故に。又此地に隨つて麤細有るが故に。』問うて曰はく、『向に說く、「身通等の五は皆方便得なり」と。方便は云何。』『五通は四根本禪に依つて之を修習す。故に『雜心』に云はく、「五通は四禪の根本に在つて餘定に非ず」と。』且く初禪に約して修通の相を明す。餘は類して知るべし。身通を修習するに三種の通有り。一には方便道、先に初禪の根本定心に入る。此は即ち是れ止なり。後に飛行往來の想を作し、或は大小轉變の想を爲す。此は即ち是れ觀なり。還つて定中に入り、復飛行往

【毘曇】雜心論第六。

【毘曇】雜心論第六。

來等の想を作す。是の如く多返す。此は是れ身通の方便道なり。二には無礙道、前の方便熏發の力に由つて、定に入つて慧を發し、一無礙道に障通の壅を斷ず。三には解脫道、無礙道の後、一解脫道に彼障を證除す。是より已後所爲に前の如きの心想有らんと欲すれば、即ち能く之を爲す。身通是の如し。他心通を修するにも亦三種の道あり。一には方便道、亦先に定に入り、次に他心を觀じて其心想を測る。是の如きの多返を方便道と名く。二には無礙道、前の方便熏發の力に由つて、定に入つて慧を發し、一無礙道に障通の壅を斷ず。三には解脫道、無礙道の後、一解脫道に彼障を證除す。後時に他人の心を知らんと欲すれば、即ち能く之を知る。宿命通を修するにも亦三種の道あり。一には方便道、先に定中に入り、次に心想を起し、尋ねて過去所更の事を憶す。近より遠に至つて次第に之を尋ぬ。還つて定中に入り、是の如く多返す。二には無礙道、三には解脫道、前と共に相似す。天眼通を修するに、『毘曇』の如きに依らば、但し二道有り。一には方便道、先に定心に入り、次に日月燈明等の相を取り遠見の想を作す。還つて定中に入り是の如く多返し、極めて純熟せしむ。二には無礙道、前の方便熏發の力に由つて、定に入つて慧を發し、一無礙道に障通の壅を斷ず。後時に定を出でて見んと欲すれば即ち見る。彼に說かく「天眼は是れ無記なるが故に定中に解脫道有ることを得ず」と。若し『成實』及與大乘に依らば、天眼は是れ善と定心と倶なり。是の如く修すれば解脫道有り。前の身通他心等と同じ。天耳通を修するに、『毘曇』の如きに依らば、亦二道有り。一には方便道、先に

【二六】第四に六通について大小不同あり、の義を明すに五あり、一に體性の不同。

【二には等】二には縁心の不同。

定心に入り、次に諸聲を取りて遠聞の想を作し、還つて定中に入る。是の如く多返し極めて純熟せしむ。二には無礙道、前の方便熏發の力に由つて、定に入つて慧を發し、一無礙道に障通の惑を斷ず。後時に定を出でて聞かんと欲すれば卽ち聞く。解脱道無くば天眼と同じ。成實、大乘にも亦解脱有り。前の天眼に似たり。問うて曰はく、『諸通に離欲得及び方便得有り。此二の所得に寬狹有りや不や。』『義釋するに三有り。一義の分別は、離欲得は狹く、方便得は寬し。其離欲とは、但得は先來曾て得る所の法なり。先に未だ得ざる所の勝妙の神通は、皆現在に由つて方便修起す。第二義とは、離欲得は寬く、方便得は狹し。其離欲とは、無始已來曾て得る所の法なり。一切皆得。其方便とは、現在世に於て能く入る者は得、入ること能はざる處は則ち之を得ず。第三義とは、離欲方便は所得齊等なり。佛大菩薩は其離欲所得の者に隨つて皆能く現に入る。修得是の如し。

(二六)次に第四門に、其大小の不同の義を明す。不同に五有り。一には體性の不同、六通皆智慧を用て體と爲す。小乘の六通は事識の中の慧數を用て體と爲し、大乘法の中には始修の時は事識の中の慧數を用て體と爲す。心外に法有り。中に於て自在なるを說いて、名けて通と爲す。次に修は彼妄識の中の慧を用て、之を以て體と爲す。一切の法は但心より起り、心外に法無しと見て、自心法の中に無礙自在なり。究竟終成は眞識の中の實慧を用て體と爲す。法は唯眞なりと見て、其自體眞實の法の中に於て無礙自在なり。二には緣心の不同、小乘の六通は凡の爲作する所緣に攀りて、分別するに緣無きこと能はず。大乘法の

【三には等】三には常無常の不同。
【四には等】四には依定の不同。
【五には等】次に作用の不同。中に六通別說す。先づ身通。
【地持】第二、【龍樹の等】大智論第五。

中には始修は緣有り、次修は緣を息むるも緣無きこと能はず。究竟終成は平等無緣にして、日の普く照して分別無きが如し。一切の所作法力にして而も爲す。都て作心せず。三には常無常の不同、小乘の六通は無常生滅す。大乘の六通は始は則ち無常、究竟は眞常なり。物に興廢を見れども體恒に不變なり。四には依定の不同、小乘の六通は但事定に依る。事中の住心は是れ事定なり。大乘の六通は始は事定に依り、次は理定に依る。破相の住空は是れ理定なり。究竟終成は眞實自體の寂定に依る。眞心性寂は是れ體定なり。是定中に住して其心動ぜず。三昧法力自然に用を現ず。又小乘の中には前の五通は唯四禪の根本定に依つて起り、漏盡の一通は四禪、未來、中間及び三無色に依る。大乘法の中には始修は小に同じく、究竟終成は一切禪に依つて悉く能く之を起す。又聲聞の人は隨つて何の定に依るも、發す所の神通は餘定の中に入つて用を起すこと能はず。諸佛菩薩は則ち是の如くならず。隨つて何の定に依るも、發す所の神通は餘定の中に入つて悉く能く用を起す。龍樹の辨ずるが如し。五には作用の不同、六通別に說かば身通の中の不同に十有り。一には上下の不同、聲聞、緣覺は初禪に依つて發す所の神通は但初禪に至り、上に至ること能はず。地度を以ての故に、餘定も亦爾なり。但自地に至り過るを得ること能はず。諸佛菩薩は則ち是の如くならず。初禪に依つて發す所の神通は一切地に至る。餘定も亦爾なり。二には寛狹の不同、『地持』に說くが如し。聲聞の人は一千國土を通の境界と爲し、緣覺の人は三千國土を通の境界と爲す。又龍樹の云はく、「小聲聞の中に不作意の者

【地持】第二。

は一千國土を通の境界と爲し、若し作意の者は二千國土を通の境界と爲す。大聲聞の中に不作意の者は二千國土を通の境界と爲し、若し作意の者は三千國土を通の境界と爲す。緣覺人の中に大有り、小有り。其小緣覺の不作意の者は二千國土を通の境界と爲し、若し作意の者は三千國土を通の境界と爲す。其大緣覺は作意及び不作意を問ふこと莫く、皆三千大千國土を以て通の境界と爲す」と。此等を狹と名く。諸佛菩薩は一切世界、一切衆生界を通の境界と爲す。故に名けて寬と爲す。三には多少の不同、聲聞緣覺は一心一作にして衆多なること能はず。諸佛菩薩は一時に十方世界の一切の色像を化現し、一時に能く五趣の身を現ず。四には大小の不同、聲聞緣覺は大身を化現すれば小に入ること能はず、小身を化現すれば大を容るること能はず。諸佛菩薩は大身を化現すれば三千界に滿じ、能く大身を以て一塵の中に入り、小身を化現すれば猶微塵の如く、能く小身を以て一切を容受す。又佛菩薩は世の色物に於て、大能く小に入り、小能く大を容る。二乘は能はず。五には遲速の不同、聲聞緣覺は遠處に至らんと欲すれば多時にして乃ち到る。其如意通を得ざるを以ての故に。諸佛菩薩は一念に能く十方世界に至る。其所得の如意通を以ての故に。六には虛實の不同、聲聞緣覺は凡そ化現する所の一切の境界は相似する而已にして實用を得ず。諸佛菩薩は凡そ化現する所皆實相を得。『地持』に說くが如し。七には所作の不同、諸佛菩薩は無量の人を化して各心有らしめ、一事を作すに隨つて人をして異辨せしむ。二乘は能はず。八には所現の不同、諸佛菩薩は但一身を現じて人をして異見せしめ、但一

【涅槃】南本第二十一。
【天耳通の等】次に天耳通。
【他心通は等】次に他心通。
【毘曇】雜心論第六

聲を出して人をして異聞せしめ、一土に安住して十方倶に現ず。二乘は能はず。九には根用の不同、『涅槃』に說くが如し。諸佛菩薩は六根互用するも、二乘は能はず。十には自在の不同、『涅槃』に說くが如し。諸佛菩薩は凡て爲作する所身心自在にして相隨逐せず。其身大を現ずるとも心は亦大ならず、其身小を現ずるとも心は亦小ならず、其身喜を現ずるとも心は亦喜ならず、其身憂を現ずるとも心は亦憂ならず。是の如きの一切なり。二乘は能はず。身通是の如し。天耳通の中の不同に六有り。一には上下の不同、聲聞緣覺の初禪に依つて得る所の天耳は、但初禪已下の音聲を聞き、上は則ち聞かず。餘禪も亦爾なり。自地に過ぎず。諸佛菩薩の隨つて何の禪に依つても得る所の天耳は一切の聲を聞く。二には寛狹の不同、前に准じて知るべし。三には頓別の不同、聲聞緣覺は諸の音聲に於て別別に聽聞して一時なること能はず。諸佛菩薩は一時に頓に聞く。四には麁細の不同、『地持』に說くが如し。乃至耳語極微細聲をも諸佛菩薩は一切悉く聞く。二乘は能はず。五には遲速の不同、諸佛菩薩は諸の音聲に於て、心を發さば則ち聞く。二乘は能はず。多く方便を作して乃ち聞知することを得。六には虛實の不同、諸佛菩薩は諸の音聲に於て所聞謬らず。二乘は爾らず。錯謬有るべし。天耳是の如し。他心通の中の不同に七有り。一には上下の不同、『毘曇』の如きに依らば、三種の度有つて其心を知らず。一には人度、下人は上人の心を知らず。二には根度、鈍人は利人の心を知らず。三には地度、下禪地に在つて上地禪定の人の心を知らず。成實法の中には、唯人度及與根度を說いて地

【天眼通の等】次に天眼通。

度を說かず。『成實』の所說を監るに大乘に同じ。大乘の所說は諸佛菩薩は下に依つて通を發し、亦能く上地の人の心を知る。二には寬狹の不同、聲聞緣覺は極めて唯一三千界の衆生の心を知り、諸佛菩薩は能く一切を知る。三には頓別の不同、諸佛菩薩は頓に能く一切衆生の心心數法を了知す。二乘は能はず。四には麁細の不同、聲聞緣覺は但凡夫小聖の麁心を知つて細に及ぶこと能はず。諸佛菩薩は所知微細なり。乃至佛心も亦能く之を知る。五には遲速の不同、諸佛菩薩は一切心に於て知らんと欲すれば卽ち知る。二乘は能はず。多く方便を作して方に乃ち之を知る。六には虛實の不同、諸佛菩薩は所知謬らず。二乘は爾らず。所知謬るべし。七には時分の不同、聲聞緣覺は但現在の衆生の心を知り、諸佛菩薩は能く三世の衆生の心を知る。他心是の如し。天眼通の中の不同に十有り。一には上下の不同、聲聞、緣覺は隨つて何の禪に依つても得る所の天眼は、齊しく自地を見て上に及ぶこと能はず。諸佛菩薩は一切悉く見る。二には寬狹の不同、三には頓別の不同なり。前に准じて知るべし。四には麁細の不同、諸佛菩薩の所見は微細乃至隣空微塵色等一切悉く見る。二乘は能はず。五には遲速の不同、六には虛實の不同なり。前と相似す。七には時分の不同、聲聞緣覺は極めて遠きは能く未來世の中の八萬劫の事を見、諸佛菩薩は窮めて後際を見る。八には自他の不同、『涅槃』に說くが如し。聲聞、緣覺は但外色を見て自の眼を見ず。諸佛菩薩は能く自の眼を見る。九には見法の不同、『涅槃』に說くが如し。諸佛菩薩所有の天眼は能く諸色の念念生滅を見、及び自他不淨の骨人を見る。二乘

【宿命通の等】次に宿命通の大小不同。

【漏盡通の中に等】次に漏盡通の大小不同。

は能はず。十には知根の不同、『涅槃』に說くが如し。諸佛菩薩は人の形色を見て即ち其根の利鈍大小を知る。二乘は能はず。天眼の不同差別是の如し。宿命通の中の不同に八有り。一には上下の不同、聲聞緣覺は隨つて何の禪に依つても得る所の宿命は、唯自地及び下の衆生宿命の事を知つて上を知ること能はず。諸佛菩薩は一切悉く知る。二には寬狹の不同、三には頓別の不同なり。前に准じて知るべし。四には麁細の不同、諸佛菩薩は過去の事に於て巨細悉く知る。二乘は能はず。五には遲速の不同、諸佛菩薩は過去の事に於て心を發さば即ち知る。二乘は能はず。六には虛實の不同、諸佛菩薩は所知謬らず。二乘は同じからず。七には時分の不同、二乘は極めて遠く能く過去八萬劫の事を知り、諸佛菩薩は所知極り無し。問うて曰はく、『經に說かく、「迦毘羅仙は能く過去八萬劫の事を知る。未來も亦然り」と。聲聞緣覺は既に是れ聖人なり。所知應に遠かるべし。何が故に彼に同じき。』釋して言はく、『此れ世俗齊を用て知る。世俗齊の中利根の數習は所知則ち遠く、鈍根の少習は所知即ち近し。凡聖の人を簡ばず。』八には自在の不同、『地持』に說くが如し。諸佛菩薩は自ら宿命を知り他の宿命を知り、能く他人をして已が宿命を知らしめ、能く他人をして自ら宿命を知らしめ、能く他人をして他の宿命を知らしめ、乃至彼をして其餘の衆生に展轉して相知らしむ。二乘は能はず。宿命の不同差別是の如し。漏盡通の中に其二種有り。一には他の漏盡を知るを漏盡通と名け、二には自ら漏盡を證するを漏盡通と名く。他の漏盡を知る不同に七有り。一には上下の不同、聲

【一七】第五に三性もて分別す。

聞緣覺は但自地及び下の漏盡を知り、上を知ること能はず。諸佛菩薩は一切悉く知る。二には寬狹の不同、聲聞緣覺は一世界に於て他の漏盡を知り、諸佛菩薩は盡く一切を知る。三には頓別の不同、聲聞緣覺は別に緣じて別に知り、諸佛菩薩は一時に頓に知る。四には麁細の不同、聲聞緣覺は所知麁淺にして、諸佛菩薩は所知深細なり。五には遲速の不同、諸佛菩薩は方便を假らず。心を發さば即ち知る。二乘は能はず。六には虛實の不同、聲聞緣覺は所知虛謬にして、諸佛菩薩は所知眞實なり。七には時分の不同、聲聞緣覺は現の衆生の漏盡不盡を知つて過去を知らず。諸佛菩薩は一切悉く知る。他の漏盡を知る不同是の如し。自ら漏盡を證する不同に三有り。一には證法の不同、聲聞緣覺は證法麁淺なり。但人空のみを得。諸佛菩薩は所證淵深にして、窮めて二空を解し、幷せて甚深如來藏性を證す。二には除障の不同、聲聞緣覺は但四住を斷じ、諸佛菩薩は五住斯に滅す。三には取捨の不同、聲聞緣覺は寂を得て證を取る。諸佛菩薩は滅を得て住せず、大涅槃を得て世間を捨せず、世間を捨せずして常に涅槃なり。大小の不同差別是の如し。

（一七）次に第五門に、三性もて分別す。善惡無記は是れ三性なり。六通の中漏盡の一通は體性唯善なり。其餘の五通は汎論するに四有り。一には是れ報通、上の諸天の報得の五通の如し。是の如きの一切なり。二には藥通、諸仙等の藥力を以ての故に飛行自在なるが如し。三には呪通、波羅捺に婆羅門有つて呪を以て身を持して帝宮に飛上し、身を變じて釋と爲り舍支夫と共に欲事を行ずるが如し。是の如き等の比は是れ其呪通なり。四には修通、禪

【地持】第五。

【一八】第六に三業もて分別す。

【地論】第五、

に依つて修得す。四が中の前の三は是れ其無記、後の一は不定なり。『毘曇』の如きに依らば、他心、宿命は一向に是れ善、天眼、天耳は一向に無記なり。身通の一種は體性是れ善、所起の化心は是れ其無記なり。他心、宿命は意識相應の慧數を體と爲す。禪定と倶なり。故に性是れ善なり。天眼、天耳は眼耳二識相應の慧數を以て通じて體と爲す。定と倶ならず。故に性無記なり。身通の體は亦是れ意識相應の慧數にして定心と倶なり。故に性是れ善なり。所起の化心は定前の作意、諸事を爲さんと欲して、然も其起す所は或は自地の心、或は他地の心なり。定と倶ならず。故に性無記なり。若し『成實』に依らば、五通皆意識地の中の慧行を用て體と爲す。悉く衆生を利益せんが爲の心より起る。故に性皆善なり。乃至化心も亦衆生を利益せんが爲の心より起る。故に性も亦善なり。大乘に世俗の五通を宣說すること多く『毘曇』に同じ。故に『地持』の中に、無記化化禪を宣說するなり。諸佛菩薩所成の五通は實慧を體と爲す。乃至所起の種種の變化皆定を離れず。悉く是れ三昧法門力より起る。體性皆善なり。三性是の如し。

〔一八〕次に第六門に、三業もて分別す。身口意業は是れ三業なり。其體性を窮むれば、六通皆智慧を用て體と爲す。慧の內心に在るは皆意業の性なり。相に隨つて之を論ずれば三業の所攝なり。『地論』に說くが如し。初の一は身通、身業清淨なり。天耳、他心は口業清淨なり。宿命、天眼は意業清淨なり。漏盡の一通は彼論に辨ぜず。身通の一種は變化形に在り。是故に說いて身業清淨と爲す。天耳、他心は之に依つて說を起す。是故に說いて

【一九】第七に通明示現の三種分別。【雜心】第六。

口業清淨と爲す。『云何が說を起す。』『天耳有るを以て佛菩薩に從つて正法を聽受し、及び衆生の種種の音聲を聞いて之に依つて說を起す。他心通を以て物の心欲を知り、之に隨つて說を起す。此二通は、說を起す中に强きを以ての故に、論に說いて口業清淨と爲す。宿命、天眼は過去未來の事を了知す。過去未來隔世は知り難きも、意に了せざるに非ず。是故に說いて意業清淨と爲す。漏盡通の中自ら漏盡を證するは內心染を離る。亦意業淨なり。他の漏盡を知るを漏盡と名くるは、此れ乃ち他の衆生の心中の惑の盡不盡を知る。之に依つて說を起す。他心通に似て亦口業清淨なり。』『三業是の如し。』

(一九)次に第七門に、通門示現の三種を分別す。『雜心』に說くが如し。六皆是れ通なり。無礙を以ての故に。明と示現とは義に隱顯有り。四句に之を辨ず。一には示現にして而も是れ明に非ず。謂ゆる、身通、及與他心なり。此二通は、衆生を化益して信を生ずること顯了なり。故に示現と名く。三種の愚を除離すること能はず。故に名けて明と爲さず。三愚は後の如し。二には是れ明にして而も示現に非ず。謂ゆる、天眼及び宿命通なり。宿命は其先際の愚を除き、天眼は其後際の愚を除く。故に說いて明と爲す。物を化して信を生ずること極めて顯了ならず。故に示現に非ず。『云何が顯ならざる。』『宿命は其過去世の事を知り、過去の事を說いて衆生を化益す。世を隔てて知り難ければ人多く信ぜず。故に示現に非ず。天眼は其未來世の事を知り、未來の事を說いて衆生を化益す。世を隔てて知り難ければ人亦信ぜず。故に示現に非ず。』第三には亦は明亦は是れ示現なり。謂はく、漏

【龍樹の等】大智論第五。

盡通なり。眞諦を了達して漏盡を證成し、眞諦の愚を除くが故に名けて明と爲す。他の漏盡を知つて彼衆生心の中の、煩惱の盡不盡有るとを說いて之を勸化す。彼則ち信を生ず。信を生ずること顯了なるが故に示現と名く。第四には明に非ず亦示現に非ず。謂はく、天耳通なり。前の三種の愚を除くこと能はざるが故に、明と名くることを得ず。此を將て他を化するに信を生ずること顯ならず。故に示現に非ず。『云何が顯ならざる。』『天耳は能く遠聲を聞くと雖も、此を以て他に語る。他人聞かざれば多くは信受せず。故に不顯と曰ふ。又設ひ彼所化の人の屏遠の言を導いて之を化せんと欲すとも、前人便ち他に從つて傳へ聞いて是れ自力に非ずと謂ふ。故に多く信ぜず。』明と示現との隱顯是の如し。通じて之を論ずれば、悉く皆是れ明なり。故に『華嚴』の中に、六通を開分して以て十明と爲す。亦悉く示現なり。諸佛菩薩は此德を顯示して衆生を化するが故に。問うて曰はく、『宿命、天眼、漏盡を經に說いて通と爲す。復說いて明と爲す。又云はく「三達なり」と。何の差別か有る。』『通じて釋すれば義齊し。中に於て別して分たば、差異無きに非ず。』『異相は如何。』『龍樹の說くが如し「直に過去八種の事等を知るを宿命通と名く」と。中に於て、過去に業を知り果を知る因緣の道理を宿命明と名く。未來世に此に死し彼に生ずるを知るを天眼通と名く。業を知り果を知る因緣の道理を天眼明と名く。直に漏盡を知るを漏盡通と名け、更に生ぜずと知るを漏盡明と名く。又道に從つて滅を得る不同を知るを、亦は名けて明と爲す。是の如き等に於て之を知ること窮盡するを、說いて三達と爲す。盡に四重

【二〇】第八に六通を修する次第を明す。中に三、一に修成の次第。

有り。一には事を知る。盡は事として知らざること無し。二には因果法相の義を知る。盡は義として知らざること無し。三には眞諦の空理の同じきことを知る。盡相を窮むれば皆空なり。四には性を知る。盡は是の如きの法は悉く本性如來藏より起る相にして卽ち是れ實なりと知る。此四を窮達するを名けて三達と爲す。通を論ずれば凡に共にす。唯漏盡を除く。明は二乘に共にす。達は唯如來のみなり。」通明示現の分別是の如し。

（二〇）次に第八門に、六通を修する次第の義を明す。理實には六通に次第を定むること無し。今且く之を言はば、次第に三有り。一には修成の次第、佛に據つて之を論ずれば、佛將に成道せんとするに、魔王波旬、佛の道成を恐るるが故に來つて惱亂す。如來時に須く神力を以て之を降伏すべし。是義を以ての故に、先に身通を修す。魔既に降せられて形を空中に隱す。如來時に所在を知らず。須く天眼を以て其所在を知るべし。故に次に第二に天眼を修起す。眼に形を見ると雖も其言を解せず。須く天耳を以て其所說を聽くべし。故に次に第三に天耳を修起す。耳に言を聞くと雖も其心を測らず。內心を知らざるを怯とや爲ん勇とや爲ん。故に次に第四に他心通を修す。此通を以ての故に、其內心惶怖して安らかならざるを知る。現心を知ると雖も過去の福德の多少を知らず。福若し我に勝れば或は能く障礙して我道成を妨げん。往福を知らんが爲に、次に宿命通を修す。魔過去に一の無遮の大會を作す。因緣もて今此報を受け、吾は過去無量億劫に於て、諸の衆生の爲に身手足頭目髓腦を捨てて種種の苦を受く、我福彼に勝るを見る。既に彼に勝るを知つて彼障

【又龍樹の等】大智論第二十八。

【二には等】次に修成の次第を明す

を懼れず。便ち能く結を斷じて漏盡を證成す。故に次に第六に漏盡通を明す。又龍樹の說かく、「佛は初夜に於て一通一明を得。一通と言ふは、一身通を得、一明と言ふは、宿命明を得るなり。中夜の時に於て一通一明を得。一通と言ふは、天耳通を得、一明と言ふは、天眼明を得るなり。後夜の時に於て一通一明を得。一通と言ふは、他心通を得、一明と言ふは、漏盡明を得るなり」と。『何の義を以ての故に、先に其通を得、後に其明を得る。』『論に自ら釋して言はく、「六通の中に從つて三明を求む。持用の功力弱きが故に、先に通を得、後に其明を得」と。『問うて曰はく、『何が故に是の如く次第する。』』『論に自ら釋して言はく、「初夜に魔來つて憹亂を行はんと欲す。之を降伏せんが爲に先に身通を起す。既に魔を降し已つて卽ち自ら思念す、我一身に於て何の因緣あつて、能く是の如きの大力を得ると。便ち宿因を求むるに、已過去に多く福善を修して是の如きの力を得るを見る。故に宿命を起す。中夜に魔去つて寂漠として聲無し。佛便ち一切の衆生を慈念し、其音を聞かしめんと欲す。故に耳を求む。天耳を得て十方五道の衆生の苦樂等の音を聞くを以て、其形を見んと欲す。故に天眼を求む。後夜の時に於て物心を知り、隨つて教化を爲さんと欲す。故に他心を求む。諸の衆生皆苦を離れて其樂を求めんと欲するを知る。自ら我漏盡の樂を得ずんば、能く之を與ふること無し。故に漏盡を求むと。此も亦是れ其修成の次第なり。」一義是の如し。二には修成の次第を明す。亦佛に約して說く。律の中に辨ずるが如し。佛初夜の時宿命明を得。無明盡きて明生じ、闇盡きて光生ず。中夜の時に於て

【第三には等】三に起化の次第を明す。

【三】第九に經に依つて相を辨ず。【地持】第二。

天眼明を得。無明盡きて明生じ、闇盡きて光生ず。後夜の時に於て漏盡明を得。無明盡きて明生じ、闇盡きて光生ず。此三は是れ其修成の次第なり。漏盡を得已つて衆生を化せんと欲す。何等の衆生にか化を須ふるを知らず。須く天耳を以て諸の衆生の苦樂等の音を聽くべければ、次に天耳を起す。衆生の苦樂差別を知ると雖も、彼此隔別して往いて攝化し難ければ、次に身通を起す。其所に到ると雖も所欲を知らず。宜く法を授くべき無ければ、次に他心を起す。此後の三種は起化の次第なり。第三には直に起化の次第を明す。亦佛に約して說く。人を化せんと欲するに所在を知らざれば先に天眼を用ふ。既に所在を見ば須く往いて攝化すべし。次に身通を用ふ。既に其所に到れども其言を解せざれば、次に天耳を用ふ。其言を解すと雖も其根を識らざれば、次に宿命を用ふ。其過去の根性の大小を觀る。往根を識ると雖も現欲を知らざれば、次に他心を用ふ。其心を知ると雖も心中の煩惱の有無を知らざれば、次に漏盡を用ふ。其心中の煩惱の有無を觀じ、爲に對治を說いて漏盡を證せしむ。次第是の如し。

(三)次に第九門に、經に依つて相を辨ず。『地持』に說くが如し。身通に二有り。一には變、二には化なり。舊質を改換する之を名けて變と爲し、事として現ぜざる無きを說いて以て化と爲す。是變多種なれども要は十六と爲す。一には震動、謂はく、能く一世界を震動す。二には熾然、身上より火を出し身下より水を出す。是の如き等なり。三には充滿身、光明を放つて世界に充滿す。四には示現、一切の沙門衆等と爲る。五には轉作異分、地を變じ

て水と爲し、水を火と爲す等なり。六には來去、充行往來無礙自在なり。七には大小、小を變じて大と爲し、大を變じて小と爲す。八には色像入身、一切界の一切衆生をして悉く己身に入らしむ。九には所往相似、其至る所に隨つて現じて、彼衆生に同ず。音聲語言悉く彼と同じ。十には隱顯、現に出で還つて沒す。是の如き等なり。十一には自在、能く衆生をして、若は來り若は去り、若は住し若は臥し、一切心に隨はしむ。十二には障他神通、上及び等を除いて悉く能く障弊す。十三には與辨、無辨の衆生に能く辨才を與ふ。十四には與念、失念の衆生に能く正念を與ふ。十五には與樂、無樂の衆生に能く其樂を與ふ。十六には放光身、能く光を出して普く一切を照す。變の義是の如し。化も亦無量なり。要攝すれば三有り。一には化身、化して一切衆生の形類と爲る。二には化語、化して種種の音聲語言を爲す。三には化境界、化して一切の飮食等の事を爲す。化身の中に就いて、略して五種有り。一には化似自身、二には不相似、三には似他身、四には不相似五には自身他身相似不相似一切化現す。化語に七有り。一には妙音の說法、其聲微妙なり。二には廣音の說法、所出の音聲一切普く聞く。三には自身より起す、化作の語言身より起すに似たり。四には他身より起す、化作の語言他より起すに似たり。五には無所從つて起する所無し、六には正法を說く、七には事に隨つて敎責す。化語是の如し。化境界の中の作事無量なり。身通是の如し。天眼に二有り。一には現在の色像を見、二には未來に此に死し彼に生ずるを見る。天耳通の中、一切六趣の衆生の音聲、聖非聖聲、麁聲、

【地持】第二。

細聲、辨不辨聲、化非化聲、遠聲、近聲、一切悉く聞く。他心通の中の一切衆生の心心數法は悉く實の如く知る。問うて曰はく、「此通は、直に心を知ると爲んや、亦は所緣を知るや。」『毘曇』の如きに依らば、唯他心のみを知つて所緣を知らず。若し所緣を知らば、則ち前人作意して我心を攀緣す。我彼心を緣ぜんに便ち自心變じて照すの過有り。故に唯心のみを知つて所緣を知らず。若し『成實』に依らば、正しく他心を知り兼て所緣を知る。大乘も亦爾なり。設ひ心自ら緣ずるとも竟に何の咎か有らん。」宿命通の中の差別に六有り。一には自ら宿命を知る、已が過去の八種の事等を知る。『何者か八事なる。』『一には如是名、二には如是性、三には如是生、四には如是飲食、五には如是苦樂、六には如是長壽、七には如是久住、八には如是壽限なり。』已が過去の是の如きの八事を知るを、名けて自知と爲す。二には他を知る、他の衆生の六種の同行を知る。『何者か六行なる。』『一には如是名、二には如是性、三には如是生、四には如是飲食、五には如是善惡、六には如是壽命なり。』他の此事を知るを名けて知他と爲す。三には他の衆生をして已が宿命を知らしめ、四には他の衆生をして、自ら宿命を知らしめ、五には他の衆生をして他の宿命を知らしめ、六には餘の衆生をして展轉して相知らしむ。漏盡通の中に其二種有り。一には無學の聖智能く諸漏を盡すを漏盡通と名け、二には漏盡を知るを漏盡通と名く。漏盡を知る中、義別に四有り。『地持』に說くが如し。一には自ら漏盡を知り、二には他の漏盡を知り、三には漏盡方便の已起未起悉く實の如く知る。聖道は是れ共漏

盡の方便なり。四には漏盡増上慢の有起不起悉く實の如く知る。未だ得ざるに得たりと謂ふを増上慢と名く。六通の義之を辨ずること略周なり。

大乘義章卷第二十本

大乘義章　卷第二十末

遠法師撰す

十號の義

(一)其十號とは、是れ佛如來の名稱の功德なり。名に通別有り。釋迦、彌勒、阿閦佛等は是れ其別なり。如來等の十は是れ其通なり。應相須らく分つべきが故に別名を立て、實德須らく顯すべきが故に通稱を立つ。實德は無量なり。德に依つて名を施さば名も亦無邊なり。今は一數に據つて且く十種を論ず。謂ゆる如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊なり。此十は經の中に之を說いて號と爲し、或は名稱と云ふ。通じて釋すれば義齊し。相に隨つて分別すれば、體を顯すを名と爲し、德を樹つるを稱と云ふ。名稱外に彰れ天下に號令する、之を說いて號と爲す。十の中前の五は是れ自利の德、後の五は利他なり。自利の中に就いて、分つて兩對と爲す。初の二の一對は前に道圓を明し、後に滅極を彰す。後の三の一對は前の二は因圓、後の一は果極なり。初に如來とは、外國には名けて多陀阿伽度と爲し、亦は多陀阿伽馱と云ふなり。此には如來と云ふ。斯れ乃ち德に就いて以て其名を立つ。德の中は不定なり。解するに兩義有り。一には佛に約して解す。『涅槃』に釋するが如し。三世の佛の如く所說不變なるが

【一】淨法聚果法の中第十五段に十號の義を辨ず。

【十の中等】十號を自利利他に分つて說く中、自利の中について兩對を明す中、一に初の二の一對について。

【如來】タターガター(Tathāgata)。

【涅槃】南本第十六。

【龍樹の等】大智論第二十四。
【涅槃】南本第十六。
【應供】アルハン(Arhan)。
【涅槃】南本第十六。
【涅槃】右同。

故に名けて如と爲し、佛の如くにして來るが故に如來と名く。若し此釋に從はば、義に就いて名を立つ。二には理に約して釋す。如とは如理、來とは是れ德なり。故に龍樹の云はく、「如實道に乘じて、來つて正覺を成ずるが故に如來と曰ふ」と。『涅槃』に宣說すらく、「六波羅蜜十一空に乘じて來るが故に如來と曰ふ」と。當に知るべし、此も亦理に約して釋するなり。若し是義に從はば、如來の名は境德合して目く。又此等に就いて分つて異釋を爲す。謂つて言はく「如に乘じて來つて正覺を成ずるを如來と名くるは、其證道に就いて如來の義を解す。不如に非ざるを說くを如來と名くるは、其敎道に就いて如來を解釋す。六波羅蜜十一空に乘じて來るを如來と名くるは、不住道に就いて以て如來を解す」と。分相且く然なり。究めて此等を尋ぬれば共に一義を成ず。佛は理に依つて成ずるが故に、如に乘じて來つて正覺を成ずと說く。乘如は猶し行のごとし。行は、謂はく六度なり。故に復宣說すらく、「六波羅蜜十一空に乘じて來る」と。十一空の義は上に廣く辨ずるが如し。此れ猶し如のごときなり。內證は彰し難ければ、言に寄せて以て顯す。是を以て復不如に非ざるを說くと言ふ。第二の應供は、外國には名けて阿羅呵と爲すなり。此には應供と云ふ。此も亦德に就いて以て其名を立つ。得の中は不定なり。解するに四義有り。一には障に對して解す。『涅槃』に說くが如し。一切の惡法は佛應に斷ずべきが故に、之を名けて應と爲す。二には法に對して解す。寂滅涅槃は如來應に證すべきが故に、名けて應と爲す。三には人に對して解す。一切の衆生は如來應に化すべきが故に、名けて應と爲す。故に『涅

槃」に云はく、「應を名けて樂と爲す。諸佛は過去に菩薩爲りし時、無量劫に於て衆生の爲の故に諸の苦惱を受け、終に樂ならずといふこと無くして常に之を樂むが故に、名けて應と爲す」と。此前の三義は直に內德に就いて以て其名を立つ。四には供に對して解す。中に於て二有り。一には佛を將て人に對して應供を解釋す、如來は諸過悉く已に斷盡し、福田清淨にして應に物の供を受くべし。故に應供と名く。此一義は供に對して德を顯す。二には人を將て佛に對して應供を解釋す。『涅槃』に釋するが如し。一切の人天、種種の香華等の事を以て佛を供養す。故に應供と名く。此一義は緣を擧げて德を顯す。此初對竟る。第二對の中、前の二は因圓、後の一は果極なり。復前の二の中の正遍知とは其解圓を明し、明行足とは其行圓を彰す。正遍知とは、經に亦は名けて等正覺と爲すなり。此も亦德に就いて以て其名を立つ。然るに德の中に就いて、境體合して目く。正とは是れ理なり。理は漏の助くる無し。故に名けて正と爲す。此は境を擧ぐるなり。理に於て窮解するが故に遍知と曰ひ、理に稱つて知るが故に等覺と曰ふ。等は猶し遍のごときなり。覺は猶し知のごときなり。此は德體を擧ぐ。『涅槃』の中の如し。更に多義有り。具に論ずべからず。明行足とは、此も亦德に就いて以て其名を立つ。佛德は衆多なり。德に隨つて名を釋す。義も亦一に非ず。略して五種有り。一には唯因に就いて明行足を解す。明は是れ諸行、證法顯了にして闇無きを明と曰ふ。行は是れ敎行、六波羅蜜戒定慧等の修起を行と名く。是二圓に備はる、之を稱して足と爲す。二には唯果に就いて明行足を解す。『涅槃』に說く

【涅槃】南本第十六。

【第二對の等】二に第二對について

【正遍知】サミヤク、サムボーディ (Samyaksambodhi)

【涅槃】南本第十六。

【明行足】ボドヤーチヤラナ、サムパンナ (Vidyā-caraṇa-saṃpanna)

【涅槃】南本第十六。

【涅槃】右同。
【涅槃】南本第十六。
【龍樹の等】大智論第二。
【涅槃】南本第十六。
【涅槃】右同。
【涅槃】南本第十六。

が如し「明は、謂はく、解脱なり。無明の闇縛を離るるを以ての故に。行は、謂はく、菩提なり。道行滿ずるが故に。足は、謂はく、涅槃なり。果窮極するが故に」と。三には果に據り因を尋ねて明行足を解す。『涅槃』に說くが如し。明とは、謂ゆる、阿耨菩提なり。此は果を擧ぐるなり　行は、謂はく、戒慧なり。此は脚足なるが故に。『云何が足なる。』『此は其因を出すなり。』四には因に從ひ果に趣いて明行足を解す。『涅槃』に說くが如し。明とは、謂ゆる、不放逸心なり。癡濁を離るるを以ての故に說いて明と爲す。行とは、謂ゆる、六波羅蜜なり。足とは、謂ゆる、阿耨菩提なり。果極まるを足と名く。五には義に隨つて汎く論ず。明は、謂はく、三明なり。龍樹の說くが如し。宿命、天眼及與漏盡は是れ其三明なり。『涅槃』に說くが如し。一には菩薩明、二には諸佛明、三には無明明なり。是れ其三明なり。菩薩明とは、謂ゆる、波若波羅蜜なり。諸佛明とは、謂ゆる、佛眼なり。無明明とは、謂はく、十一空なり。彼は智慧照明の性に非ず。故に無明と曰ふ。是智境界は能く智明を生ずるが故に、復明と名く。言ふ所の行とは、龍樹の說くが如く、戒定慧等之を名けて行と爲す。『涅槃』に宣說すらく「衆生の爲の故に諸の善業を修す。之を說いて行と爲す」と。足とは、彼『地持』の中に釋するが如く、止觀具足するが故に名けて足と爲す。『涅槃』に宣說すらく「明かに佛性を見る。所見窮極するが故に足と名く」と。問うて曰はく、『此明行足を解する中、因果備に有り。何が故に前に遍知、明行は其因圓を彰すと言ふや。』『此は初の義に從つて具に判を爲すなり。』又經論の中には多く因

【善逝と等】　次に善逝を解す。

【善逝】　スーガタ(Sugata)。

【涅槃】　南本第十六。

【世間解等】　次に世間解。

【世間解】　ローカヸット(Lokavit)

【華嚴】　經第三十八。

に就いて解す。多言に從ふのみ。』善逝と言ふは、此れ德義に從つて以て其名を立つ。善とは好に名け、逝とは去に名く。如來好く去るが故に善逝と名く。問うて曰はく、『如來は果德窮極す。更に何の處に去つてか好く去ると言ふや。』釋して言はく、『此果は因に從つて去る。因を果に望むるに據るが故に、說いて去と爲す。又佛如來は去る處無しと雖も、去ること能はざるに非ず。故に善逝と名く。劫盡の火の所燒無しと雖も、燒くこと能はざるに非ざるが如し。彼も亦是の如し。』中に於て分別するに、略して三種有り。一には修敎の行、果に趣くを以て釋す。『涅槃』に說くが如し。善とは、謂ゆる、初に道心を發す。逝とは、心に由つて大涅槃を得。二には修證の行、果に趣くを以て釋す。『涅槃』に說くが如し。善とは、謂ゆる佛性を見る。逝とは、見に因つて大涅槃を得。三には唯果に就いて善逝を解釋す。『涅槃』に說くが如し。善とは、卽ち是れ如來の心なり。佛心柔濡にして慢高有ること無し。故に名けて善と爲す。逝とは、高に名く。阿耨菩提は位分高く出づ。故に名けて逝と爲す。前の五は自德、後の五は化德なり。中に於て前の四德は能く物を化し、後の一種は世の爲に欽敬せらる。前の四の中に就いて、初の一は其化他の智を明す。世間を解了す。第二は其化他の能を明す。能く物の心を調ふ。第三は其化他の德を明す。師德具足す。第四は其化他の行を明す。覺行窮滿す。世間解とは、德に就いて名を施す。然るに德の中に就いて境體合して目く。世間は境なり。解は是れ體なり。『華嚴』の如きに依らば、世間に三有り。一には衆生世間、二には器世間、國土住處なり。三には智正世間、二

【涅槃經】南本第十六。
【無上士等】次に無上士調御丈夫。
【無上士】アヌッタラ(Anuttara)
【調御丈夫】プルシャ、ダムヤ、サーラティ(Purusa-damya-sārathi)
【地持】第三。
【涅槃經】南本第十六。
【天人師とは等】次に天人師、デーヴ、マヌシヤ、シヤーストリ(Deva-manusya-śāstri)
【佛とは等】次に佛。

諦の諸法此に於て悉く解すれば世間解と名く。『涅槃經』に依らば、世間に五有り。一には衆生世間、如來能く知るを世間解と名く。二には五陰世間、如來能く知るを世間解と名く。此二は衆生の差別なり。三には國土世間、如來能く知るを世間解と名く。四には五欲世間、如來能く知つて中に於て著せざるを世間解と名く。五には八法世間、如來能く知つて傾動を爲さざるを世間解と名く。此三は器世の差別なり。彼智覺世間の解に通じては、義別に六有り。無上士調御丈夫は共に一號を成ず。人に就いて稱を立つ。無上士と名くるは其勝を嘆ずるなり。調御丈夫は其能を彰すなり。士とは、是れ其人の別稱なり。人中に最勝なり。餘は加ふること能はず。無上士と名くるは分別するに七有り。『地持』に說くが如し。一には身無上、相好身を具す。二には道無上、自利利他の道を具足す。三には正無上、四正を具足す。謂ゆる、正見と正戒と正威儀と及與正命となり。四には智無上、四無礙を具す。五には神力無上、六神通を具す。六には斷無上、煩惱障を斷じ及び智障を斷ず。七には住無上、三住を具足す。謂ゆる、聖住と梵住と天住となり。空無相願、滅盡正受は是れ其聖住、四無量心は是れ其梵住、八禪地定は是れ其天住なり。此七種を具するを無上士と名く。『涅槃經』の中には、但五種有り。道無上、神力無上無し。調御丈夫とは、佛は是れ丈夫にして能く丈夫を調ふ。是故に佛を調御丈夫と號す。天人師とは、人に就いて稱を立つ。師匠と爲る益人に在るが故に、能く衆生を敎へて惡を斷じ善を修せしむ。故に名けて師と爲す。如來は實に是れ六道の師なり。天と人とは能く聖道に入る。益を受く

【涅槃】南本第十六。

【世尊と等】次に世尊、バガヷット(Bhagavat)【涅槃】南本第十六。

ること最も多し。是故に偏に天人師と名くるなり。佛とは、德に就いて以て其名を立つ。佛は是れ覺知なり。斯に就いて稱を立つ。覺に兩義有り。一には覺察を覺と名く。人の賊を覺するが如し。二には覺悟を覺と名く。人の睡寤の如し。覺察の覺は煩惱障に對す。煩惱侵害の事等は賊の如し。唯聖覺知して其が爲に害せられず。故に名けて覺と爲す。故に『涅槃』に云はく、「人賊を覺すれば賊は能く爲すこと無きが如し。佛も亦是の如し。能く無量の諸煩惱を覺し已つて、諸の煩惱をして能く爲す所無からしむ。故に名けて佛と爲す」と。覺悟の覺は其智障に對す。無明昏寢の事等は睡の如し。聖慧一たび起らば朗然として大悟すること睡の寤を得るが如し。故に名けて覺と爲す。既に能く自ら覺し、復能く他を覺して覺行窮滿す。故に名けて佛と爲す。自覺と言ふは凡夫に簡異し、覺他と言ふは二乘に異することを明す。覺行窮滿は菩薩に異することを彰す。是故に獨り此を偏に佛と名くるなり。世尊と言ふは、佛は衆德を備へて世の爲に欽重せらるるが故に世尊と號す。經の中に或は復其世尊を隱して婆伽婆を彰す。婆伽は胡語なり。義を翻ずるに七有り。『涅槃』に說くが如し。一には婆伽を破と名け、婆をば煩惱と名く。能く煩惱を破すれば婆伽婆と名く。二には能く諸の善法を成就するが故に婆伽婆と名く。三には能善く諸法の義を解するが故に婆伽婆と名く。四には大功德有つて、能く勝る人無きが故に婆伽婆と名く。六には能く種種に大惠施するが故に婆伽婆と名く。七には無量阿僧祇劫に於て女根を吐くが故に婆伽婆と名く。諸惡煩惱は是れ女根本なり。如來は盡く捨するが故に、名け

【二】淨法樂果法の中第十六段に十力の義を釋するに八門の別あり、第一に釋名。

【地持】第八。

て吐と爲す。十號是の如し。

十力の義に八門分別あり。名を釋す一。體を定む二。相を辨ず三。分齊の差別四。作業の不同五。次第の義六。教化教授の分別七。大小所說の不同八。

(二)第一に、名を釋す。十力と言ふは、一には是れ如來是處非處智力、二には自業智力、三には是れ定力、四には是れ諸根利鈍智力、五には是れ欲力、六には是れ性力、七には至處道力、八には宿命智力、九には天眼智力、十には漏盡智力なり。佛乘の邊に二乘を化するに隨ふが故に此十を說く。故に『鴦掘魔羅』に云はく「佛の十種力を說くは是れ則ち聲聞乘なり。是れ摩訶衍に非ず。大乘は無量力なり。故に佛不思議なり」と。初に如來是處非處智力と言ふは、『地持』に釋するが如し。苦樂等の報差別の因に依るを名けて是處と爲し、差別の因相違するが故に非處と曰ひ、此を照すの解は之を名けて智と爲す。力に兩義有り。『地持』に說くが如し。一には自行に就く。一切の魔に於て捨離して勝ることを得るが故に名けて力と爲す。二には利他に就く。能く一切種に堪へて衆生を利益するが故に名けて力と爲す。理實には此力は一切法の是非の義を知る。諸の外道多く因果に迷ふを以て、佛之を化せんが爲に、是故に多く因果に就いて以て釋す。自業智力とは、造作を業と名く。能く果を作すが故に。外道所說の無因顚倒の因等の業に簡ばんが爲の故に、說いて自と爲す。善は是れ其樂家の自業、不善は是れ其苦家の自業なることを明けし。此を照すの解を業智力と名く。問うて曰はく、『此力は直業を知るのみに非ず。亦煩惱及び四法受を知

【四地持論】第八。

る。何の義を以ての故に偏に業力と名くる。』釋して言はく、『經に不盡の法門有り。即ち此は是なり。良に以れば業は是れ煩惱家の果、苦樂家の因なり。中に據つて擧ぐるが故に偏に之を言ふ。』『果を尋ねて因を知るが故に共業を擧ぐれば亦四受を知り、因を尋ねて果を知るが故に共業を擧ぐれば亦四受を知る。』『何者か四受なる。』『法現に苦にして後に樂を受くる有り、法現に樂にして後に亦苦を受くる有り、法現に苦にして後に亦樂を受くる有り、法現に樂にして後に亦樂を受くる有り。此等を名けて四法受と爲すなり。』『定力と言ふは、心住不亂なる之を名けて定と爲し、定に於て自在なるを名けて定力と爲す。又能く定を知れば亦定力と名く。此定力は直定を知るのみに非ず。亦不定を知る。定を以て主と爲すが故に定力と名く。漏盡通の直盡を知るのみに非ずして亦不盡を知り、盡を主と爲すを以て漏盡通と名くるが如し。此も亦是の如し。根力と言ふは、信進念等の宿習今成じて能く後を生ずるが故に名けて根と爲し、根の大小利鈍等の別を知るを名けて根力と爲す。此力は直善根を知るのみに非ず、亦不善無記根等を知る。知は法を授くるが爲なれば、經には多く善と說く。欲力と言ふは、經の中に或は復悕望力と名け、或は解力と名く。解力と言ふは、始に就いて名と爲す。先に信解を生じ後に悕欲を起す。是故に始に就いて、名けて解力と爲す。前の信解に因つて後に悕欲を起す。是故に後に就いて、名けて欲力悕望力と爲すなり。此力は直善欲を知るのみに非ず、亦不善無記の欲等を知る。知は法に授けんが爲なれば、經に多く善を說く。性力と言ふは、『地持論』の中に界智力と名く。或は

【成實】第一。

復名けて使智力と爲すなり。性と言ひ界と言ふは、通じて善惡を知る。若し使力と言はば、偏に不善を知る。習欲改めざる之を名けて性と爲す。界は是れ界別、三乘は性別なるが故に復界と名く。此を照すの解を名けて性力及び界智力と爲す。習惡の性成じ、人に隨つて捨せず。又能く繋縛す。其れ猶公使のごとし。故に名けて使と爲す。此を照すの解を使智力と名く。此に依つて對治を授けんと欲するが爲の故に使を知ると說く。至處道力とは、苦樂等の報を所至處と爲し、善惡等の因を至處道と名く。此を照すの解を至處道力と名く。問うて曰はく、「初力已に業果を知る。何んが此力を須ふる。」『成實』に釋して言はく、「初力は總じて知り、此力は別して知る。是の如きの因は、是の如きの果を受くるを知り、是の如きの果は是の如きの因に酬ゆるを知る。又復初力は是を知り非を知る。此力は因能く果を生ずるの義を知り、亦復果は因より生ずる義を知る。是不同有るが故に別して說くことを須ふ。』宿命力とは、事を往に謝する之を名けて宿と爲し、往法相續する之を目けて命と爲す。此を照すの解を宿命力と名く。問うて曰はく、『此力は直命を知るのみに非ず、亦過去八種の事、六種の因行を知る。何が故に偏に宿命力と名くるや。』『此は向前の六通の中に釋するが如し。命は是れ報の主なり。故に偏に命を說く。又復八が中には命を分つて多と爲す。故に偏に命を說く。又命は最後なり。後に據つて命を說く。』天眼力とは、經の中には亦生死知力と名く。未來の起盡を名けて生死と爲す。此を照すの解を生死智力と名く。一切の禪定を名けて天住と爲す。禪に依つて眼を得れば名けて天眼と爲し、

【三】第二に體性を定むるに五あり一に總じて體を定む。

【地持】第八。

【次に等】二に五眼について分別す

天眼に依つて照見自在なるを天眼力と名く。漏盡力とは、結患斯に已むを稱して漏盡と曰ひ、此を照すの解を漏盡力と名く。此は直漏盡を知るのみに非ず、亦不盡及び漏盡の方便已起未起を知り、漏盡增上慢心の有起不起を知る。盡を以て主と爲すが故に偏に之を言ふ。名義是の如し。

(三)第二に、體を定む。中に於て曲しくは五門の分別有り。一には總じて體を定め、第二には五眼に約就して分別し、第三には七通に約就して分別し、第四には十一智に約就して分別し、第五には四念に約就して分別す。初に總じて體を定む。人說不同なり。『地持』に辨ずるが如し。有人宣說すらく、「信等の五根を力の體性と爲す」と。有人宣說すらく、「智慧を體と爲す」と。『地持』に存する所は智慧を體と爲す。故に彼文に言はく、「經には處非處智力と說いて處非處信等力と說かず」と。是の如きの一切なり。明かに知んぬ、十力は智を用て體と爲すことを。是れ信等に非ず。總じて定むること是の如し。此一門竟る。次に第二門に五眼を分別す。其五眼とは、上に辨ずる所の如し。一には是れ肉眼、二には是れ天眼、三には是れ慧眼、四には是れ法眼、五には是れ佛眼なり。五の中肉眼は色法を體と爲す。天眼の一種は義に兩兼有り。一には色法を體と爲す。現の色像を照す。二には智慧を體と爲す。言はく、「未來生死の事を知る。餘の三種は唯智を體と爲す。五眼是の如し。十力は是れ其四眼の自性なり。其肉眼を除く。十力の中に就いて初の處非處は境を知ること寬廣にして、通じて一切諸法の是非を知り、四眼の性を具す。第七の至處道力も亦爾なり。未

【大に等】三に七通に約就して分別す。

來所至の處を了知するは、即ち天眼なるが故に。五度門を知るを至處道と爲るは即ち是れ法眼、空無我を知るを至處道と爲るは即ち是れ慧眼、佛性如來の藏を了知するを至處道と爲るは即ち是れ佛眼なり。業力の中には二眼の性を具す。性に身口等の業を造作するを見るは即ち天眼の性、煩惱及び意思等を起すを見るは即ち法眼の性なり。定、根、欲、性、宿命、漏盡、此六力は是れ法眼の性、天眼力は即ち天眼の性なり。五眼是の如し。此二門竟る。次に第三門に七通を分別す。前の六通の上に法智通を加ふ。是れ七通なり。諸の法相に於て了知すること無礙なるは是れ法智通なり。十力の中宿命力とは即ち宿命通、天眼力とは即ち天眼通、漏盡力とは即ち漏盡通なり。定、根、欲、性、此四力は是れ他心通なり。心を知るを以ての故に。處非處力、業力、及與至處道力、此三種は是れ法相智通なり。麁判是の如し。中に於て細論すれば、處非處の中に即ち四通を具す。其過去の因果の是非を知るは即ち宿命通、其未來の因果の是非を知るは即ち天眼通、其漏盡の是非の義を知るは即ち漏盡通、一切の法の是非の義を知るは即ち法知通なり。業力の中には具に三通有り。過去世の業果の差別を知るは即ち宿命通、未來世の造業の得果を知るは即ち天眼通、一切の因果の道理を了知するは即ち法智通なり。至處道の中には具に四通有り。過去世の所行の道を知るは即ち宿命通、未來世の所至の處を知るは天眼通、所至の處の漏盡の果を知るは即ち漏盡通、二諦所行の道法を了知するは即ち法智通なり。略して身通及び天耳通無し。『何が故に是の如くなる。』『智用の强盛なる、之を說いて力と爲す。身通は但能く

【次に等】四に十一智に約就して分別す。

【毘曇】雜心論第六。

現の事を轉變するも、法に於て窮知無礙なること能はず。智力强ならざるが故に力と名けず。天耳は但能く現の聲を聽聞するも、法に於て窮知無礙なること能はず。智力强ならざるが故に力と名けず。』『若し爾らば天眼は現色を照矚す。何が故に力と名くる。』『若し天眼を論ずれば、直に現の色を了するをば力と名けず。其天眼は諸の衆生の未來際を盡して此に死し彼に生ずるを見るを以てなり。一衆生の未來際を盡して此に死し彼に生ずるを見るは、尙用て難しと爲す。何に況んや一切をや。此知り難きを而も能く知るを以ての故に、之を說いて力と爲す。耳は此能無し。所以に類せず。』『此三門竟る。』次に第四門に、十一智に約して分別を爲す。十一智の義は上に具に辨ずるが如し。苦智等の十及び如實智は是れ十一なり。小乘法の中には佛の十力は十智の所收と說き、大乘法の中には佛の十力は如實智の攝と說く。『相狀は如何。』『先に小乘を論ずれば、『毘曇』に說くが如し。初力は寬通にして十智性を具す。一切の法の是非の義を知るが故に。第二の業力は八智性を具す。滅道智を除く。滅諦は業に非ざるが故に滅智を除く。無漏の聖道は生死を破壞して後果を集せず。業の所收に非ざるが故に道智を除く。』問うて曰はく、『業力は其業果分段の麁事を知つて理に及ぶこと能はず。何に緣つてか苦集智を具することを得る。苦集の兩智は、義既に備はり難し。何に緣つてか法智比智盡無生智を具することを得る。』『釋するに三義有り。其一義は、如來の業力は直業を知るのみに非ず。亦業果を知る。所知の業果は事に通じ理に通ず。所知の六道差別の因果は是れ事門の收なり。能知の解は是れ等智の攝なり。彼因の

上に於て其因集有緣の義を知るは、是れ通相の理即ち是れ理集なり。彼果の上に於て苦無常空無我等を知るは、是れ通相の理即ち是れ理苦なり。此通相の因と果とを知るは亦業力の收なり。故に苦集智等を具することを得。第二義は、如來の業力は直世別の因果を知るのみに非ず、亦念念相生の因果を知る。彼六道の上に於て其念念相生の因果を知るは、是れ苦集の理なり。故に能觀の智は說いて以て苦集智等と爲すことを得。第三義は、十力は義を辨ずれば法を知ること窮極す。事に達し理を窮めて本末倶に知るを、方に名けて力と爲す。若し本を窮めざれば、知ると雖も力に非ず。故に業力の中に其業相を知り、亦業性を知る。其業相を知るは即ち是れ等智、其業性を知るは苦集の理即ち苦集智、法比智等なり。故に八智を具す。』定と根と欲と性の此四力は各九智の性なり。其滅智を除く。此等所知の有漏は即ち是れ等智及び苦集智、所知の無漏は即ち是れ道智、法比智等なり。此等を通じて說いて他心智と爲す。滅は心法に非ざるが故に滅智を除く。問うて曰はく、『此等は其心の事を知る。何に緣つてか苦集智等を具することを得る。』『此は前に釋するが如し。事に達し理を窮むるを方に名けて力と爲す。故に之を具することを得。』至處道の中には十智性を具す。所知寬きが故に。宿命、天眼は一の等智の性なり。所知の世別は通理に非ざるが故に。問うて曰はく、『前に事及び理を知るを方に名けて力と爲すと說く。此は既に是れ力なり。何んが理を知らざる。』釋して言はく、『聖力實に能く理を知る。但此二は世別の局法なるを以て通理に乖く。理は必ず寬通す。別は則ち理に非ず。是故に苦集智等を

【次に等】五に四念處に約して分別す。

具せず。』漏盡力の中には智を攝すること不定なり。若し漏盡を知るを漏盡力と名くれば、則ち六智の性なり。苦集道及び他心智を除く。彼は盡に非ざるが故に。若し漏盡を證するを漏盡力と名くれば、則ち八智の性なり。其等智及び他心智を除く。等智は有漏、結を盡すこと能はず。所以に之を除く。無學息求にして他心を推すこと無きが故に他心を除く。若し漏盡の人を漏盡力と名くることを得れば、則ち十智の性なり。漏盡の人は十智を具するを以ての故に。小乘是の如し。大乘法の中には、如實智の攝なり。『其義云何。』『地持』に釋するが如し。離增上慢智を如實智と名く。是を知らざるを妄に知ると稱するに非ず。故に名けて如實と爲す。』『何者か是なる。』『彼文に自ら辨ずらく「謂はく、淸淨智、一切智、無礙智なり」と。是淸淨智とは、是れ其諦理の第一義智なり。一切無礙は是れ世諦智なり。知法寬廣なるを一切智と名け、知法自在なるを無礙智と名く。前の三智章の中に具に釋するが如し。彼十力の中の初力は是れ其三智の所攝なり。業と定と根と欲及與性力は是れ一切智、無礙智の收なり。至處道力は亦三智の攝なり。宿命と天眼とは亦一切智、無礙智の收なり。漏盡智力は亦三智の攝なり。自ら漏盡を證するは是れ淸淨智、他の漏盡を知るは是れ一切智無礙智の收なり。此四門竟る。次に第五門に、四念處に約して十力を分別す。四念處觀は體性是れ慧なり。故に約して之を辨ず。身受心法は是れ四念なり。義は上に解するが如し。『毘婆沙』に依らば、欲力及與宿命智力は唯法念處にして、餘は四念に通ず。其言に餘有り。更に須らく分別すべし。初力は寬通にして四念處を具す。義の在る

と知るべし。第二の業力も亦四念を具す。善不善の二種の五陰能く業因と爲ると知るは、是れ因の四念なり。苦樂の陰は是れ共業果なりと知るは、是れ果の四念なり。第三の定力は名に卽して以て求むれば唯一の法念なり。定は是れ行陰法念の攝なるが故に。義に隨つて通じて論ずれば、四念處を具す。定共戒を知るは亦定力の收、卽ち身念處なり。又定に依つて變化等を起すを知るは亦定力の收なり。當に知るべし、亦是れ身念處の攝なり。諸禪の中の善樂等の受を知るは亦定力の收、卽ち受念處なり。定心を知るは是れ心念處、定數等を知るは是れ法念處なり。根力の中に信等の根を知るを名けて根力と爲すは、唯法念處なり。若し通じて二十二根を知るを名けて根力と爲すを論ずれば、則ち四念を具す。眼等の根を知るは是れ身念處、五受根を知るは是れ受念處、所知の意根は是れ心念處、信等の根を知るは是れ法念處なり。第五の欲力は名に卽して以て求むれば唯法念處なり。欲は是れ行陰法念の攝なるが故に。『毘婆沙』の說は此意に據るのみ。若し大乘に依らば、通じて所欲を知るは則ち四念を具す。欲色等を知るは卽ち身念處、欲の諸受を知るは卽ち受念處、彼樂欲相應の心を知るは卽ち心念處、欲を知り及び所欲の法を知るは卽ち法念處なり。性力の中に欲の不改を知るを名けて性力と爲るは、唯法念處なり。汎く一切の諸法の性別を知るを名けて性力と爲すは、則ち四念を具す。至處道の中には所知の法廣し。亦四念を具す。不淨等を知るは是れ身念處、所至の處の苦樂等の報を知るは是れ受念處なり。著我多き者には分別界を敎ふ。界の中の有心は卽ち心念處、慈悲等を知るは是れ法念處な

【四】第三に十力の相を分別するに三あり、一に總別の分別。

り。宿命智力は名に卽して以て求むれば唯一の法念なり。命は是れ法なるが故に。『毘婆沙』の說は此に據つて言を爲す。理實には中に於て亦四念を具す。「其相は云何。」「是宿命力は過去世の八種の事、六種の同行を知る。彼八事の中に是の如きの色、是の如きの飮食を知るは卽ち身念處、是の如きの苦樂は是れ受念處、其名字及び壽命等を知るは是れ法念處、彼過去の受報心別を知るは卽ち心念處なり。又宿命力は其過去の一生二生より無數生に至るを知る。生陰の身を知らば卽ち四念を具す。天眼も亦爾り。生の未來所受の陰身を見るは四念處を具す。漏盡力の中に、漏盡を知るを漏盡力と名くるは唯法念處なり。若し漏盡を證するを漏盡力と名くれば、則ち四念を具す。一切法を觀じて煩惱を斷ずるが故に、總性是の如し。

(四)次に第三門に、其相を分別す。中に於て曲くは三門の分別有り。一には總別の分別、二には寬狹の分別、三には長短の分別なり。總別と言ふは、初の一力は亦は總亦は別にして、餘の九力は一向に是れ別なり。九を統攝すれば皆是れ非の收なるが故に、初は是れ總なり。中に於て餘の九力を別分して餘の九を攝せざるは、復初力の中なるが故に、初は是れ別なり。十二部經の中の修多羅部は亦は總亦は別にして、餘は唯別なるが如し。此と相似す。彼は諸部を攝して皆一の修多羅を成ぜざること莫し。故に初は是れ總なり。義に隨つて餘の十一部を別分し、餘部を收せざるは還つて復修多羅の中に在り。之を說いて別と爲す。又亦彼三聚の戒の初の律儀戒は亦は總亦は別にして、餘の二は唯別なるが如し。三聚を統

【次に等】二に寛狹分別。中に於て先づ因果に約して分別す。

【次に等】次に有爲無爲の法に約就して辨ず。

攝すれば皆律儀の收なるが故に、初は是れ總なり。餘の二を別分して餘を攝せざる所は復律儀に在るが故に、初は是れ別なり。此も亦是の如し。此一門竟る。次に第二門に寛狹の分別なり。中に於て初に因果に約して分別し、次に有爲無爲に約して分別し、後に理事の二門に約して分別す。初に因果に約して分別すとは、因及び果を知る之を名けて寛と爲し、因果別に知るを說いて以て狹と爲す。十力の中に就いて、處非處力、至處道力は名體倶に寛なり。名の中には通じて因と果とを彰す。故に名是れ寛なり。理實には此力は因果倶に知る。故に體是れ寛なり。業力、宿命、生死智力及び漏盡力の此四種は、名は狹、體は寛なり。業力の中には唯業因を擧ぐ。故に名是れ狹なり。理實には此力は業煩惱及び四法受を知る。故に體は是れ寛なり。其宿命力、生死智力及び漏盡力は唯果を彰す。故に名は是れ狹なり。理實には此力は通じて因果を知る。故に體は是れ寛なり。宿命力の中過去世の是の如きの名を知る等は、是れ其果なり。六同行の中善を知り惡を知るは、是れ其因なり。天眼力の中に生の身口等の行を造作するを見るは、是れ因を知るなり。身壞し命終して地獄に生ずる等は、是れ果を知るなり。漏盡力の中自ら漏盡を知り、他の漏盡を知るは、是れ果を知るなり。漏盡の方便の已起未起を知るは、是れ因を知るなり。是故に此を名狹體寛と曰ふ。定と根と欲と性とは名體倶に狹なり。名は唯因を擧ぐ。故に名は是れ狹なり。力も亦因を知る。故に體は是れ狹なり。理實には此四は亦通じて果を知る。經には多く因を說く。多に從つて判ずるのみ。此一門竟る。次に第二門に有爲無爲の法に約就して以て寛狹を辨ず。

【次に等】次に理事に約して辨ず。

【地持】第八。

す。通じて知るを寛と爲し、別して知るを狹と爲す。色心及與非色非心は是れ有爲なり。虛空數滅及び非數滅は是れ無爲なり。十力の中に就いて、處非處力、至處道力は名體倶に寛なり。初力は通じて生死涅槃一切の因果に約して、以て是非を知る。第七は通じて生死涅槃二種の至處に約して、以て其道を論ず。名の中には此を具す。故に名は是れ寛なり。力は實に此を知る。故に體は是れ寛なり。漏盡の一力は名は狹、體は寛なり。名の中には唯漏盡無爲の法を知ることを彰す。故に名は是れ狹なり。理實には此力は直盡を知るのみに非ず、亦漏盡方便の道の已起未起を知り、及び漏盡增上慢心の有起不起を知る。通じて有爲を知り及び無爲を知る。故に體は是れ寛なり。餘の七力は名體倶に狹なり。名は有爲を彰す。故に名は是れ狹なり。力は有爲を知る。故に體は是れ狹なり。此二門竟る。次に第三門に理事に約就して寛狹を辨ず。眞諦を理と名け、世諦を事と名く。通じて知るを寛と名け、別して知るを狹と名く。十力の中に就いて、初の處非處及び至處道は名體倶に寛なり。初力の中には通じて一切に就いて、是を說き非を說く。故に名は是れ寛なり。力は實に通じて理事の是非を知る。故に體は是れ寛なり。至處道の中には、五度門等を至處道と爲す。是れ其事なり。『地持』に說くが如し、「空無我の理を至處道と爲す」と。是れ其理なり。名の中に此を彰す。故に名は是れ寛なり。力は實に此を知る。故に體は是れ寛なり。漏盡の一力は名は狹、體は寛なり。名は盡を知ることを彰す。故に名は是れ狹なり。理實には此力の盡を知るは是れ事、盡を證するは理を知る。若し理を知らざれば、漏終に盡きず。體に

【次に等】相分別の三に長短分別。

【五】第四に十力の分齊差別を彰す

斯義を具す。故に體は是れ寛なり。餘の七力は名體倶に狹なり。名は唯事のみを彰す。故に名は是れ狹なり。體は唯事のみを知る。故に體は是れ狹なり、寛狹是の如し。此二門竟る。次に第三門に、長短を分別す。時に約して之を辨ず。時とは、謂はく三世なり。十力の中宿命の一力は、前は長、後は短なり。前は無窮を知る。名けて前長と爲す。後世を知らざるが故に後短と名く。天眼の一力は、前は短、後は長なり。過去を知らざるを名けて前短と爲し、能く現在及び未來世を知るを說いて後長と爲す。餘の八は所知三世に統通す。前後倶に長なり。相を辨ずること是の如し。

（五）次に第四門に、其十力の分齊差別を彰す。『地持』に說くが如し。善は樂を得と知り、惡は苦を得と知る。顚倒して受くるに非ざるを處非處力と名く。善惡業の得果の不失不作不受を知るは是れ其業力なり。乃至彼禪解脫等は此れ業にして彼に非ずと知るも、亦是れ業力なり。禪解脫三昧正受の三種示現して衆生に教授するを知るは、是れ其定力なり。身業に通を現じ、口言に說法し、意地と念とを三示現と名く、乃至彼諸根相應の禪定の心を知るを、亦定力と名く。故に『地持』に云はく、「乃至彼淨等倶生相應の心を知るを、禪解脫三昧智力と名く」と。淨は是れ信なり。精進念定慧根を等取するが故に淨等と云ふ。此と相應して倶に定心を生ずるを、名けて淨等倶生心と爲すなり。是の如きの義を知るは前の定力に屬す。正しく衆生の軟中上根を知るは、是を根力と名く。乃至彼諸根方便は悕望を生ずと知る。前を尋ねて後を知るをも亦根力と名く。正しく衆生の種種の悕望を知るを、

【地持】第八。

【地論】第五。

名けて欲力と爲す。乃至欲の種種の性を成ずるは世の種子の各別不同なるが如しと知る。前を尋ねて後を知るをも亦欲力と名く。正しく衆生の心性各異にして世の種子の各別不同なるが如しと知るを、名けて性力と爲す。乃至性の道を起し果に至る各別不同を知るも、前を尋ねて後を知るをも亦性力と名く。故に『地持』に云はく、「乃至涅槃法及び順界道迹を知るをも、亦種種界智力と名く」と。涅槃法は是れ前の性所至の處に依り、順界道も亦是れ前の性所起の道に依ると知る。界は猶し性のごときなり。小性に隨順して小道を起し、大性に隨順して大道を起すを、順界道迹と名く。是の如きの義を知るを名けて界力と爲し、亦性力と名く。一切の道の種種の煩惱、種種の清淨は各所至有りと知るを、至處力と名く。乃至其過去の宿命一切因に趣くと知るを、亦至處道智力と名く。正しく過去八種の事、六種の同行を知るを、宿命力と名く。八種の事とは、前の六通の中に已に其名を列す。今更に之を辨ずれば、論說不同なり。『地持』の如きに依らば、一には如是名、其過去の名字の不同を知る。二には如是性、其過去の氏族に異り有るを知る。謂はく、張王等なり。三には如是生、其過去の生處に別有るを知る。謂はく、貴賤等なり。四には如是飮食、食する所等しからず。五には如是苦樂、受報に殊り有り。六には如是長壽、命天算を極む。七には如是久住、命長年に至る。八には如是壽限、中年にして夭喪す。若し『地論』に依らば、如是色を加ふ。謂はく、好醜等なり。命の中二と爲す。命天算を極むるを名けて久住と爲し、餘の二種は合して壽命と爲す。當に分別して知るべし。說いて

【六】第五に十力の作業の不同を彰す。

此八と爲す。彼此共に同じきを名けて同行と爲す。『何者か是なる。』『一には如是名、二には如是性、三には如是生、四には如是飲食、五には如是善惡、六には如是壽命なり。』正しく此等を知るを宿命力と名く。乃至其過去の生死を知るをも亦生死智力と名く。未來の生死を知るは是れ生死智力なり。乃至其未來世の中に未だ漏盡を究竟することを得ず、自ら我所有の生死を知るをも、亦生死智力と名く、其漏盡を究竟して自ら我涅槃法を得と知るを漏盡力と名く。分齊是の如し。

(六)次に第五門に、其十力の作業の不同を彰す。『地持』に說くが如し。處非處力は眞實の因果なり。實の如く了知して因果諍論の沙門、婆羅門を伏す。沙門、婆羅門は是れ理を求むる人なり。故に偏に之を擧ぐ。彼人或は善を行じて苦を得、惡を行じて樂を得と說く。正說に翻違するを名けて諍論と爲す。初力は正しく因果の是非を知る。故に能く之を伏す。自業智力は自所作の業なり、此業は報を受くと實の如く了知して施福諍論の沙門婆羅門を伏す。有人は布施に福有りと宣說し、有は福無しと言ふを施福諍論と名く。第二の業力は施に福有りと知る。故に能く之を伏す。理は一切を伏す。布施は行の初なれば且く約して言ふのみ。第三の定力に二種の業有り。一には禪定に依り三種示現もて衆生に教授す。正化の業なり。二には能く對治相違諍論の沙門婆羅門を伏す。邪を伏するの業なり。有人は聖道能く治すと宣說し、有人は苦行能く治すと宣說するを、名けて對治相違諍論と爲す。定力に依つて法の如く正しく教ふ。故に能く之を伏す。第四の根力は諸の衆生の上中下

【地持】第八。

【七】第六に十力の次第を明す。

【地持】第八。

【一には等】十力現前の次第に三ある中、一に世諦智に依つて化を起す

【次には等】二に第一義に依つて化を起す。

根を知つて爲に法を說き、第五の欲力は諸の衆生の軟中上解の教化淨の解、離不淨の解を知り、第六の性力は諸の衆生の心性各異なるを知つて、爲に對治を說いて教授利益し、第七の至處道力は五度門を以て衆生を教授す。聲聞地の如く又菩薩に空無我の義を授く。『地持』に說くが如し。宿命智力は宿命を觀察し、現は彼に由ると知つて斷常論の沙門婆羅門を伏す。生死智力は諸の衆生の所往生の處を說いて、斷滅論の沙門婆羅門を伏す。漏盡智力は善く漏盡を知つて、疑惑解脫の沙門婆羅門を伏す。作業是の如し。

(七)次に第六門に、其次第を明す。『地持』に說くが如し。佛は阿耨三菩提を得る時頓に十力を得、後に化用に隨つて次第に現前す。中に於て三有り。一には世諦智に依つて化を起す。次第は先に是處非處智力を以て世諦の因果の部分を觀察し、次に業力を以て欲界の業を觀じて、爲に法を說いて惡業を離れ、善業を修行せしめ、次に定力を以て上二界の禪定の業を觀じて諸の衆生に敎へ、世俗道に依つて諸欲を斷離せしめ、後に根乃至漏盡力を以て諸の衆生に敎へ、出世道に依つて永く諸欲を斷ぜしむ。此分の中に於て、先に根力を以て衆生の諸根の利鈍を觀察し、次に欲力を以て其悕望を觀じ、次に性力を以て其使性を觀じ、次に至處道力を以て患の不同に隨つて、五度門を以て爲に教授して攝して心を住せしめ、次に宿命生死智力を用て諸の衆生に敎へ、斷常を離れて中道に安住せしめ、諸の衆生の止所得の爲に煩惱を斷ぜず增上慢を起すもの有るが故に、後に其漏盡智力を用て衆生を教授して、煩惱を斷じ漏盡を究竟せしむ。此一門竟る。次には第一義智に依つて化を起す。

【三には等】三に緣起法界の智に依つて化を起す。

【八】第七に教化教授の二門分別。初二力は教化力。

【後の等】後八力け教授が中初四は物の心器を知る。

次第は此門の中に於ては、先に是處非處智力を以て第一義を觀じ、次に業力を以て在家分の種種の業を造るを觀じて淨業を修せしめ、次に定力を以て出家分を觀じて定行を修せしめ、後に根乃至漏盡力を以て諸の衆生をして苦に於て解脱せしめ、道を以て之を度す。其中の次第は初門と同じ。此二門竟る。三には緣起法界の智に依つて化を起す。『次第は何ん。』『此緣起法界なる法相の行は是れ其世諦、法相の空は是れ第一義なり。有無俱に如來藏の中の過恒沙の法を離れて緣起の相成ずるを、緣起法界と名く。中に於て先に處非處力を以て緣起法界を觀じ、次に業力を以て世の衆生の是の如きの業を作り、是の如きの果を受くるを觀じ、次に定力を以て苦の衆生の爲に三種示現して、之を教授して信解を生ぜしめ、後に根乃至漏盡力を以て道を以て度脱して衆苦を出さしむ。中に於て次第は初門と同じ。次第是の如し。

(八)次に第七門に、教化教授の二門を分別す。『地持』に說くが如し。初の二力は是れ教化力、後の八力は是れ教授力なり。汎く因果を宣し、衆生に教示して信解を生ぜしむるを教化力と名け、行儀を辨彰し心を指し曲く授けて行修を起さしむるを教授力と名く。前の二力の中、初の處非處は衆生を教化して無因無果を遠離せしめ、第二の業力は衆生を教化して其をして顚倒の因果を遠離せしむ。後の八力の中、初の四力は物の心器を知り、後の四は法を授く。前の四が中に就いて、初に心求とは心求を知る。『何者か是れ心なる。』『謂はゆる、禪定なり。』『何が故に心と名くる。』『定、緣に住するを以て其外用を息む。用を息

めて體に從ふが故に、名けて心と爲し、心に趣法有るが故に、名けて求と爲す。餘の求も亦爾なり。』『何が故に心を明す。』『龍樹の說くが如し、「散心の中の慧は法に入るに堪へず。綵に膠無ければ塗物に任せざるが如し」と。要ず定心に依つて方に法に入るに堪ふ。故に須らく心を明すべし。』『何の義を以ての故に、先に定心を明す。』『經說不定なり。『花嚴』の如きに依らば、一處の文は性力の後に方に始めて定を說く。一處の經文は至處の後に說く。諸經は多く根力の前に在つて說く。釋するに兩義有り。一には自に就いて釋す。諸佛如來は自ら禪定に住して方に化用を起す。故に先に定を明す。二には所化の衆生に就いて以て釋す。衆生の五根は慧を以て主と爲し、慧の前に定を說く。義の次第なるが故に先に心を明す。二に根求とは根求を知る。『何者か是れ根なる。』『謂ゆる、信進念定慧等なり。』『何が故に根と名く。』『此れ前に解するが如し。先に習つて成ぜしむるは能く後を生ずるが故に、名けて根と爲す。』『何が故に根を明す。』『道法を授けんと欲すれども、根無くんば入らず。故に須らく根を明すべし。』『何の義を以ての故に、次に其根を明す。』『解するに兩義有り。一には前に對して釋す。五根の中には、慧を以て主と爲し、定の後に慧を說く。義の次第なるが故に、次に根を明す。二には後に對して解す。根は是れ先に成じ、欲は是れ現に成ず。先に成ずれば前に在り。故に次に根を明す。』三に悕望求とは悕望求を知る。『何者か悕望なる。』『謂はく、樂欲の心なり。』『何が故に悕と名くる。』『欲心もて法を求むるが故に、名けて悕と爲す。』『何が故に悕を明す。』『道法を授けんと欲するとも、欲

「上來の等」次四力は法を授く。

無くんば取らず。故に須らく悕を明すべし。』『何の義を以ての故に、次に悕望を明す。』『解するに兩義有り。一には前に對して釋す。根は是れ先に成じ、欲は是れ現に成ず。根の後に欲を說く。義の次第なるが故に、次に悕を明す。二には後に對して解す。法に於て始めて求むる、之を名けて欲と爲す。習欲改めず、方に始めて性を成ず。性の前に欲を說く。義の次第なるが故に、次に悕を明す。』『四に使求とは使求を知る。』『何者か是れ使なる。』『謂はく、煩惱性なり。』『何が故に使と名くる。』『性は煩惱を成じ人に隨つて繫縛す。故に名けて使と爲す。』『何が故に使を明す。』『其患に隨つて對治を授けんと欲するが故に。』『何が故に次に辨ずる。』『解するに兩義有り。一には前に對して釋す。習欲改めず、方に使性を成ずるが故に、欲の後に於て其知使を明す。二には後に對して解す。要ず先に病を知り、然して後に藥を授く。是故に彼至處道の前に於て知使性を明す。』上來の四力は物の心器を知り、下の四は法を授く。中に於て初の一は授くるに事法を以てし、諸の衆生をして事中に安心せしむ。宿命、天眼は授くるに理法を以てし、其事を捨し、中道に趣入せしむ。後の一の漏盡は授くるに果法を以てし、其をして究竟せしむ。初の中人に隨つて使患不同なり。五度門を以て之を教授す。多貪の衆生には不淨を觀ずることを教へ、多瞋の衆生には慈悲を修することを教ふ。問うて曰はく『貪瞋は欲界の煩惱にして正しく定と違す。禪定を得れば必ず此過無し。向前の定力は他の定心を知る。定心有る者は已に貪瞋を離る。今何を以てか多貪の衆生には不淨を觀ずることを教へ、多瞋の衆生には慈悲を修すること

【毘曇】雜心論第六。
【涅槃】南本第三十三。

を教ふと言ふ。』釋して言はく、『凡夫は禪定を得ると雖も、但纒起を伏して性使猶在り。故に此に之を教ふ。又前の定力は定を主と爲すを以て名けて定力と爲す。中に於て亦定心無き者、定心有る者は貪瞋無しと雖も、有る者には之有りと知るが故に、此には不淨門等を觀ずることを教へ、愚癡多き者には因緣を觀ずることを教ふ。』問うて曰はく、『聲聞は鈍根を以ての故に、四諦を觀ずることを教へて因緣を教へず。緣覺は利根なれば因緣を觀ずることを教ふ。今何を以てか、愚癡多き者には因緣を觀ずることを教ふと言ふ。』釋して言はく、『愚癡に其二種有り。一には闇鈍無知にして牛羊等の識別する所無きが如きを、名けて愚癡と曰ひ、二には機性聰利にして妄に建立すること有り、正因緣果に迷ふを名けて愚癡と曰ふ。今愚癡に因緣を觀ずることを教ふと言ふは、義後の門に當る。愚癡と名くと雖も性は實に聰利なり。故に因緣を教ふ。過去の無明行等を觀ずることを教へて、往因を知つて無因の見を離れしめ、未來の生老死等を觀ずることを教へて、後果を知つて無果の見を離れしむ。現在の名色等を觀ずることを教へて因果俱に知らしむ。』問うて曰はく、『向前の處非處力、及與業力は已に因果を教ふ。今は因緣を教へて因果を知らしむ。前と何の別かある。』釋して言はく、『向前の處非處等は因果を教ふと雖も、語に隨つて信を生じ麤の邪見を離れ、心未だ法を見ず、性使還つて生ず。今此中に於て因緣を觀ずることを教へ、自ら法を見しめて使性を除かしむ。著我多き者には分別界を教ふ。『毘曇』の如きに依らば、六界觀を教ふるを分別界と名く。四大空識は是れ六界なり。『涅槃』には爾云ふ。

又『涅槃』には十八界觀を說いて分別界と名く。覺觀多き者には、教へて息を數へしむ。此等は前の五度章の中に、具に廣く分別するが如し。事より理に入り、次に宿命、天眼を以て之に教ふ。其宿命力は過去を觀ずることを教へて、現法は過因より生じて體性常に非ざることを知らしめ、其天眼力は未來を觀ずることを教へて、現法は後を生じて絕えず、體性斷に非ざることを知らしむ。常に非ず斷に非ざるを、名けて中道と爲す。問うて曰はく、『向前の至處道の中、愚癡の衆生には因緣を觀ずることを教ふ。因緣を觀ずる時已に過因を知る。何んが須らく復天眼智力を以て、當果を觀ずることを教ふべき。』釋して言はく、『宿命、天眼の教ふる所は因緣に異らず。但心、法に入れば必ず階漸有り。前に因緣を教ふるには直に過去の因果の事を知つて、未だ事を將て以て其理を測ること能はず。今是中に於ては事を將て理を驗む。淺深等しからず。故に須らく重ねて教ふべし。所教の衆生は心、理に入ると雖も、此の爲に縛せられて未だ究竟處に究竟の想を生ぜず。是の故に多く四種の慢心を起す。一には不作作增上慢、二には不得得增上慢、三には不觸觸增上慢、四には不證證增上慢なり。是故に須らく漏盡智力を以て教へて四慢を除き、終に漏盡を證せしむべし。『四慢は何の別ぞ。』『行に二門有り。一には教、二には證なり。事中の所行、教に依つて修起するを名けて教行と爲し、理を合するの契如を證と名く。此二種の行に、各始終有り。教行の始は造緣修起す。之を名けて作と爲す。此に於て未だ作さざるに自ら已に作すと謂ふを、不作作增上慢と名く。教行の終成、之を名けて得と爲す。此に於

【地持】第三。

【九】第八に其大小乘所說の不同を明す、中に七、一に體性の不同。

【二には等】次に智行の不同。

【三には等】次に心緣の不同。

て未だ得ざるに自ら已に得たりと謂ふを、不得得增上慢と名く。證行の始は法來つて心に現ずるを心の覺知と爲す。之を名けて觸と爲す。此に於て未だ觸せざるに自ら已に觸すと謂ふを、不觸觸增上慢と名く。證行の終は情を泯ぼして法に會す。之を目けて證と爲す。此に於て未だ證せざるに自ら已に證せりと謂ふを、不證證增上慢と名く。初慢を破除して其をして實に作さしめ、第二を破除して其をして實に得せしめ、第三を破除して其をして實に觸せしめ、第四を破除して其をして實に證せしむ。實德成就するを漏盡を證すと名く。『地持』に說くが如し。此八教授は三處の所攝なり。初の五を一と爲す。未だ心を住せざる者をば念を緣の中に繫けしむ。次の二を一と爲す。已に心を住する者をば說いて自義の正方便道を得しむ。漏盡涅槃の義自己を利するを名けて自義と爲し、理に合して正觀し彼が與に因と爲つて彼義に趣向するを、名けて自義の正方便道と爲す。後の一を一と爲す。未だ究竟せざる者をば終に究竟せしむ。教化教授、之を辨ずること略爾なり。

(九)次に第八門に、其大小所說の不同を明す。不同に七有り。一には體性の不同、小乘の所說は妄心を體と爲す。彼には事識を說いて力の體と爲すが故に。大乘の所說は眞心を體と爲す。八識眞心を力の體と爲すが故に。二には智行の不同、小乘法の中には佛の十力は十智を體と爲すと說き、大乘法の中には佛の十力は如實智を用て之を以て體と爲すと說く。三には心緣の不同、小乘法の中には佛の十力は法に於て攀緣分別して知ると說き、大乘法の中には佛の十力は法に於て無緣にして能く普く知り、鏡の物を照すが如く都て緣念無し

【四には等】四に知法の不同。

【五には等】五に多少の不同。

【龍樹等】大智論第二十四。

【六には等】六に常無常の不同。

【七には等】七に得度の不同。

と說く。諸德齊しく爾なり。『何が故に然る。』『小乘の所說は、心外に法有り、法外に心有り。心法別體なり。別體なるを以ての故に、外に向つて境を取る。智は緣の中に於て攀緣して覺了す。之を名けて力と爲す。故に緣念有り。大乘の所說は心外に法無く、法外に心無し。心法同體なり。同體なるを以ての故に、須らく外に向つて攀緣して法を取るべからず。一切の諸緣悉く智中に現ずるを、名けて力と爲す。世の萬像の鏡中に現ずるが如し。故に緣念無し。』四には知法の不同、小乘法の中には佛の十力は但能く陰界の諸入、十二因緣、四眞諦等を了知すと說き、餘義を論ぜず。大乘法の中には佛の十力は窮めて一切を知り、乃至甚深の如來藏性悉く能く了知すと說く。五には多少の不同、小乘法の中には十力を宣說して多ならず、少ならず。大乘法の中には衆生を化するに隨つて佛の十力を說く。理實には佛力は無量無邊なり。故に彼『鴦掘魔羅經』に言はく、「佛の十種力を說くは是れ則ち聲聞乘なり。斯れ摩訶衍に非ず。大乘は無量力なるが故に佛不思議なり」と。問うて曰はく、『佛力は實に無量有り。何の義を以ての故に、衆生を化するに隨つて但十種を說く。』『龍樹釋して言はく、「此十種に度生具足するを以ての故に」と。』『云何が具足する。』『初の二種は教化力足し、後の八種は教授力足す。前に具に辨ずるが如し。』六には常無常の異、小乘法の中には佛の十力は體性無常にして終に磨滅に歸し、無餘に趣入すと說き、大乘法の中には佛の十力は用に興廢有り、體は眞常にして無爲に住し不變なりと說く。七には得度の不同、小乘法の中には、佛は十力を菩提樹下成佛の時に得と說き、大乘法の中

【地持】第三。

【龍樹等】大智論第二十四。

【龍樹の等】大智論第二十四。

【二〇】淨法聚果法の中第十七段に十八不共法の義を釋するに六門の別あり。第一に釋名辨相、中先づ釋名。

【大品】大智論第二十六。

には佛の十力は種性已上分に隨つて之を得、佛に至つて乃ち滿ずと說く。故に『地持』の中に宣說すらく、「菩薩如來の十力種性を成就するを力種性と名く」と。問うて曰はく、『彼の三藏教の中に於て、「十力は是れ佛の功德にして餘人は未だ得ず」と宣說す。何を以てか之を說くや。』『龍樹釋して言はく、「聲聞菩薩の信を增さんが爲の故に。又彼をして願求を生ぜしめんと欲するが故に。復彼をして念佛三昧の心を起さしめんと欲するが故に。幷に彼の外道をして伏せしめんと欲するが故に」と。是の如く一に非ず。』問うて曰はく、『此十力の中に於て何者か最勝なる。』『人說種種なり。龍樹の辨ずるが如し。或は有が說いて言はく、「漏盡力ぞ勝る。涅槃に至るが故に」と。或は有が說いて言はく、「初力最勝なり。十力を攝するが故に」と。或は有が言はく、「十力は各自事に於て最も殊勝と爲す。處非處を知るは初力を勝と爲し、乃至漏盡は第十力勝る。是の如きの一切なり」と。有が言はく、「十力は皆無礙解脫を以て本と爲す。並に皆增上にして優劣有ること無し」と。』十力是の如し。

十八不共法の義に六門分別あり。名を列し相を辨ず一。是非を辨定す二。體性三。處に就いて分別す四。三業を分別す五。四緣を分別す六。

(二〇)初門の中に就いて、先に總じて名を釋し、次に別して後に解す。十八不共は『大品』に說くが如し。如來の功德他と同じからざるを不共法と名く。通じて之を論ずれば、一切の功德は悉く不共と名く。故に『地持』の中に百四十の不共の法を說く。今は一門に據つて且く十八を論ず。『名字は是れ何ん。』『三分して之を數ふ。初の六の一分は、一には身

【地持】第八。

【初の等】二ヽ相を辨ず、先づ身口意の無失。

【無異想とは等】次に無異想。

【無不定心とは等】次に無不定心。

【龍樹等】大智論第二十六。

【無不知已捨とは等】次に無不知已捨。中に二、一に自行門、中先づ三受に約對して分別す。

無失、二には口無失、三には意無失、亦は念無失と名く。四には無異想、五には無不定心、六には無不知已捨なり。次の六の一分は、一には欲無減、二には精進無減、三には念無減、四には智慧無減、五には解脫無減、六には解脫知見無減なり。後の六の一分は、一には身業隨慧行、二には口業隨慧行、三には意業隨慧行、四には知過去無礙、五には知現在無礙、六には知未來無礙なり。此を以て前に通じて合して十八と爲す。』初の身口意無失とは、如來の三業過を離れて純ら淨なるが故に過失無し。『何の因緣の故に此無失を得る。』『四種の義有り。一には習無く過を離れ、諸惡盡くるが故に、二には常に念慧を守つて對治堅きが故に、三には滅定慧を修して對治具するが故に、四には第一義に住して對治深きが故に此無失を得。』無異想とは、佛は等心に住し、諸の衆生に於て、常に捨心を行じて怨親の想無きを無異想と名く。『何に緣つてか能く爾る。』『佛は無量劫に、諸の衆生に於て常に平等一子の想を修するが故に我人無しと見、怨親を離るるが故に法空寂を見、彼此無きが故に、諸の衆生は同一の佛性法身と見るが故に。』無不定心とは、佛常に一心にして散動行ること無きを無不定と名く。問うて曰はく、『定とは未來禪より乃ち滅定に至る。若し佛常に定ならば、云何が能く人の爲に法を說き、四威儀を具することを得ん。』『龍樹釋して云はく、「欲界に定有り。佛は諸禪を出でて欲界定に入る。故に能く說を起し四威儀を現ず。又佛は實相定の中に住して妄想永く滅す。故に定ならざること無し。三昧法力は爲さざる所無し。故に能く說を起し四威儀を現ず」と。』無不知已捨とは、分別するに二有り。一に

【龍樹の等】大智度論第二十六。

【第二には等】次に止擧捨等の三門に約して分別す。

【化他門の等】二に化他門、先づ四無量の化心について分別。

【二には等】次に身口の化行に約して分別す。

は自行門、二には化他門なり。自行門の中分別するに二有り。第一には三受に約就して分別す。龍樹の說くが如し。餘人は鈍根にして多く苦樂を覺す。樂は貪を生ずと知り、苦は瞋を生ずと知つて心に厭離を生ず。不苦樂に於ては覺知すること能はず。捨心を行じて癡使の爲に使はる。佛は三受に於て咸く皆覺知す。知り已つて厭離し、知らずして偏に捨心を行じ癡使の爲に使はるること有ること無し。故に佛は不知已捨有ること無し。第二には止擧捨等の三門に約就して分別す。如來は善く七覺分を修するが故に、心沈まば則ち擧し、心掉かば則ち止す。二邊を離れて方に始めて捨を行ず。是れ知らずして直に捨を行ずるに望むるに非ず。化他門の中の分別も亦二あり。一には四無量の化心に就いて分別す。如來は善く無樂の衆生を知つて慈悲應じて之に與へ、有苦の衆生には悲もて當に之を拔くべく、得法の衆生には喜もて應に之を慶ばすべし。共究竟じて解脫を得る者を知つて、方に始めて捨を行ず。是れ知らずして直に捨を行ずるに望むるに非ず。二には身口の化行に約して分別す。如來は時有つて身口に化を息め、禪定に入ること一月、二月なり。餘人謗を生ず「如來の出世は衆生を化せんが爲なり。今我等の須らく化すべきを知らずして、捨して定に入るべけんや。」佛、言はく「我種種の因緣を知るが故に禪定に入る。是れ知らずして捨して定に入るに非ず」と。『何の因緣を知つてか須らく捨して定に入るべき。』謂くするに三種有り。一には世人常に見て心に厭惓を生じて渴仰を增せず。渴仰せしめんと欲するが故に捨して定に入る。二には人をして說に依つて修行せしめんと欲するが故に、捨

【欲無滅とは等】次に欲無滅。
【大智論】論第二十六。
【論】大智論第二十六。
【精進無滅とは等】次に精進無滅。
【龍樹の等】大智論第二十六。

して定に入る。三には法を以て弟子に付囑し其をして宣說せしめんと欲するが故に、捨して定に入る。此多義を具するが故に、佛は不知已捨有ること無し。』『欲無滅とは、佛德滿ずと雖も而も諸法に於て常に欲して息まざるを、欲無滅と名く。問うて曰はく、『經に「佛は一切の善法の中の欲を斷ず」と說く。云何が佛は欲無滅と言ふ。』『論に言はく「佛善法の欲を斷ずとは、欲に二種有り。一には未得欲、二には已得求增長欲なり。佛の德滿ずるが故に此二欲を斷ず」と。今不共の中の欲無滅とは、佛德滿ずと雖も、久習を以ての故に樂欲無滅なり。又善法に大利有ることを知るが故に、樂欲不減なり。轉輪王の所有の馬寶は至處に到ると雖も、去心止らず死に至るまで已まざるが如し。又亦彼劫盡の火は所燒無しと雖も、火熱息まざるが如し。又如來の白善滿ずと雖も、所化未だ盡きざるが故に欲無滅なり。』問うて曰はく、『所化の衆生は未だ盡きず。如來は何が故に捨して涅槃に入る。』『論に言はく、「衆生に共二種有り。一には現度、佛已に度し竟んぬ。二には後度、佛當に之を度すべし。今は未だ度せざるに由るが故に涅槃に入る」と。』精進無滅とは、龍樹釋して言はく、「欲の中に說くが如し」と。欲と精進とは其義相似せり。問うて曰はく、『若し欲と精進と同じならば、今不共の中に何んが別に說くことを須ふる。』『解するに三異有り。一には始終の異、欲は初行と爲す。是欲增長するを說いて精進と爲す。樂欲の始は渴して水を須ふるが如く、精進の終は灌便を集めて方便して水を求むるが如し。二には內外の異、欲は內心に在り、精進は外に在り。造修緣に在るを名けて外と爲すなり。三には通局の異、

【念無減とは等】次に念無減。

【論】大智論第二十六。

【龍樹等】大智論第二十六。

【慧無減とは等】次に慧無減。

【論】大智論第二十六。

【解脱無減とは等】次に解脱無減。

【解脱知見無減とは等】次に解脱知見無減。

【龍樹等】大智論第二十六。

欲は唯意に在り、精進の行は遍く三業に通ず。是不同有るが故に別に說くことを須ふ。』念無減とは、三世の法に於て持念して失はざるを念無減と名く。問うて曰はく、『向前の意無失をば、經の中には亦は名けて念無失と爲す。此と何の別ぞ。』『論に自ら釋して言はく、「前の念無失は錯謬を離る。今の念無減は減少を離る。又念無失は彼威儀所作の事の中に於て無錯無失なり。念無減とは諸の禪定神通憶念去來現在一切の法の中に於て通達無減なり」と。』問うて曰はく、『聲聞も亦四念牢固にして失はざる有り。何が故に偏に念無減失を說いて佛の不共と爲す。』『龍樹釋して言はく、「二乘の人は四念牢固にして失はざる有りと雖も、而も猶減失し三世の事に盡達すること能はず。故に過去極遠に於て能く八萬劫の事を知つて已外を知らず。未來も亦然なり。佛は則ち盡く知る。又見道十六心の中に於て、聲聞は念念に具に知ること能はず、佛は此等の生住滅の時に於て念念に悉く知る。故に不共と說く」と。』慧無減とは、諸佛如來は一切智を得、一切の法に於て善く分別して知るが故に慧無減なり。問うて曰はく、『何に緣つてか此無減を得る。』『論に自ら釋して言はく、「久習を以ての故に、又多佛に從つて廣く受持するが故に、復無量の功德を以て助くるが故に智慧無減なり」と。』解脱無減とは、佛心慧二種の解脱を具し、亦有爲無爲の解脱を具し、又法界無量無邊の諸の解脱門を具するを解脱無減と名く。解脱知見無減とは、佛は一切の諸佛解脱の中に於て、知見了了にして闇障有ること無きを、名けて解脱知見無減と爲す。問うて曰はく、『直爾に知を說けば便ち足る。何んが勞しく見を說くや。』『龍

【龍樹等】大智論第二十六。

樹釋して言はく、「如來は所知の事に於て、深く知つて牢固なることを明さんが爲の故に、知見と說く。兩重の繩の物を縛するは則ち牢なるが如し。此も亦是の如し」と。又復彼小乘法の中の如きは、但其知を說いて慧を攝することを盡さず。但其見を說いて攝すること亦盡きず。故に須らく並べ說くべし。』『云何が盡きざる。』『慧を說くに三有り。一には知にして見に非ず。彼五識相應の慧及び盡無生智の如し。五識の中には慧心微劣なるを以て推求すること能はず。所以に見に非ず。盡無生智は是れ息求の心なり。亦推求無し。是が爲に見に非ず。二には見にして知に非ず。謂はく、五邪見及び見道の中の八忍の慧なり。五見は推求なるが故に見と名くることを得、顚倒の推求は法理を知らざるが故に知と名けず。八忍は推求なるが故に見と名くることを得、疑の得と俱に法に於て決せざるが故に知と名けず。三には亦は見亦は知、餘の一切は慧なり。此別有るを以て偏に擧ぐるも盡きず。故に須らく並べ說くべし。又人に從つて法を聞いて思量するが如きを名けて知と爲すべく、自身に證を得るを方に名けて見と爲す。又復耳に聞くを名けて知と爲すことを得、自ら覩て疑無きを方に名けて見と爲す。故に須らく並べ說くべし。』『問うて曰はく、『二乘は解脫の中に於て亦は知亦は見なり。何が故に偏に解脫知見を說いて、佛の不共と爲す。』釋して言はく、二乘は解脫の中に於て知ると雖も、見ると雖も、知見盡きざるが故に減少有り。佛は解脫に於て知見窮盡して減少する所無し。故に不共と名く。』問うて曰はく、『佛德は無量無邊なり。何が故に、但欲精進等の六事の無減を說く。』『龍樹釋して言はく、「佛

「身口意業隨慧行とは等」次に三業の隨慧行。

「論」大智論第二十六。

「知三世無礙智とは等」次に知三世無礙智。

は自利利他の徳の中に於て、四種の事有つて能く成辨すること有り。一には樂欲、能く一切の善法の根本と爲り、二には精進、能く諸善を作し、三には念心根門を守護し、四には智慧得失を觀察して悪有れば斯に斷ず。此四事を以て二の果報を得。謂ゆる、解脱及び解脱知見なり。故に但六を說く」と。』身口意業隨慧行とは、諸佛如來は先に智慧を用て得失を觀察し、然して後に身口意業を造作するが故に過失無し。諸の羅漢等の身口意業は慧に隨はざるが故に過失有り。憍梵婆提の如きは食已に吐し竟つて更に之を食す。摩頭槃比丘は檀越の家に至り、跳んで棟閣に上り、樹に上り、壁に上る。諸の是の如き等は身業の失なり。畢陵伽婆蹉の恆水の神を罵る等は口業の失なり。舍利の習瞋、難陀の習貪、諸の是の如き等は意業の失なり。佛には悉く之無し。問うて曰はく、『如來も亦調達を罵る。云何が悉く無けん。』釋して言はく、『此等は化の爲の故に爾なり。過失と名けず。』問うて曰はく、『前に三業無失と說く。其義已に足る。何んが復三業隨慧を說くことを須ふる。』『論に言はく「前に三業無失と說くも、未だ何に因つて此無失を得るやを明さず。故に今其智慧に隨つて行ずるが故に、無失を得ることを明す」と。』知三世無礙智とは、佛は三世の一切の事の中に於て知ること無礙なり。問うて曰はく、『過去已に滅して今無し。未來は未だ有らず。現在は住すること無し。云何が佛、三世の事に通ずと言ふ。』釋して言はく、『過去は復已に滅すと雖も曾て有らざるに非ず、未來は當に有るべく、現在は假に有り。故に佛之を知りたまふ。』問うて曰はく、『前に智慧無減を說く。知らざる所無し。

【二】第二に十八不共法の是非を辨ず。

【龍樹等】大智論第二十六。

【又論等】大智論第二十六。

【論】右同。

【大智論】右同。

何んが復知三世を說くことを須ふる。』釋して言はく、『前に慧無滅を說くは、諸法の相に於て通達無滅なり。此說は彼三世の事の中に於て了知無礙なり。故に復之を說く。』相を辨ずること是の如し。

(二)次に第二門に、是非を辨定す。十八不共に三種の說有り。一說は前の如し。二は迦栴延尼子の所說なり。如來の十力、四無所畏を即ち十四と爲し、大悲は十五、三念處を加へて合して十八と爲す。此一說は龍樹之を非す。此說を作すに由つて、是故に名けて迦栴延子說と爲す。若し釋子の說は則ち是の如くならず。佛德は海の如く無量無邊なり。云何が還つて如來の十力四無畏等を說いて不共法と爲さんとなり。又論に說いて言はく、「羅漢、辟支及び諸の菩薩は亦能く是處非處乃至漏盡を知る。云何が十力の功德を宣說して不共法と爲さん」と。問うて曰はく、『若し十力の功德は餘人の分齊にして不共に非ずと言はば、身無失等の二乘の人も亦少分有り。云何が之を說いて不共法と爲す。』論に自ら釋して言はく、「我身無失等を不共法と爲すと宣說せず。我身等の常に過失無きを說いて不共法と爲す。是故に聲聞緣覺には之無し」と。』三には『大智論』の中に、更に一說有り。一には如來は一切智を具す。所知寬廣なり。二には無量の功德を具し、三には大悲心を具し、四には智慧自在にして所知無礙なり。五には禪定自在、六には變化自在、七には能く人に無量の記莂を授け、八には所記虛しからず、九には言無失、十には慧無滅にして所知退せず。十一には常に捨心を行じ、十二には時非時を知る。謂はく、衆生の應に化を受くべき時を

【一三】第三に十八不共法の體性を辨ず。
【龍樹】大智論第二十六。

知り、及び衆生の未だ化すべからざる時を知る。十三には念無失、十四には無損惱習、十五には能く如法に共過失を出づること無く、十六には能く共頂を見る者無く、十七には足下柔濡にして、衆生の遇ふ者は即ち樂を受くることを得、十八には神通力を得て衆生の心を轉じて化度し易からしむ。是を十八と爲す。此一說を龍樹亦非して言はく、「此は是れ三藏の中の說に非ず。斯れ乃ち聲聞諸論師等、經の中の讚佛の言を撰錄して此十八と爲す。共言無失及び念無失智慧無減常行捨心は、此れ大乘の不共法の中に於て取つて以て論を爲す。無見頂相足下柔濡は是れ佛の相好なり。若し此等を說いて不共法と爲さば、不共衆多なり。何んが止十八ならん」と。此三說の中初の說を是と爲し、後の二を非と爲す。是非の如し。

(一三)次に第三門に、共體性を辨ず。中に於て、曲くは四門の分別有り。一には善惡無記の三性を分別す。龍樹の說くが如し。十八不共は體性唯善なり。二には有漏無漏に就いて分別す。龍樹の說くが如し。十八不共は體唯無漏なり。三には功德智慧に就いて分別す。論說不定なり。主に從つて言を爲さば、十八不共は體唯智慧なり。故に龍樹の云はく「大乘の中には十八不共を說くに、一切皆智慧を以て義と爲す。智慧を主と爲すが故に、說いて慧と爲す」と。相に隨つて別分すれば、十八不共は、功德智慧二門の所攝なり。故に龍樹云はく「如來の智慧功德を宣說して不共法と爲す」と。自然の相好等の報を說いて不共法と爲さず。十八の中に於て、無不知已捨、智慧無減、知見無減、了達三世、此六は是れ慧、

【論文】大智論第二十六。

【一三】第四に處について分別す。

【一四】第五に三業分別。

【一五】第六に四緣分別。

【論】大智論第二十六。

慧は是れ功德なること亦可なり。前の六及び解脫の中の智慧解脫の體性は是れ慧、餘は是れ功德なり。四には如來の五陰に約して分別す。十八の中に就いて、身口無失、及與身口隨智慧行、此四は色陰なり。無異想とは是れ共相陰、無不定心は應に是れ行陰なるべし。而るに論文の中には、說いて識陰と爲す。良に定中は用を息めて體に從ふを以ての故に、說いて識と爲す。正しく定を論ずるに非ず。餘は是れ行陰なり。略して受陰無し。體性是の如し。

（一三）次に第四門に、處に就いて分別す。論に兩說有り。一說は十八は第四禪に在り。佛成道の時第四禪に依つて菩提を得るが故に。第二家の說は身口無失、身口隨慧は欲色界に在つて、五地の所攝なり。欲界と四禪は是れ五地なり。餘の不共法は遍く三界に通じて、九地の所攝なり。欲界と八禪は是れ九地なり。處に就くこと是の如し。

（一四）次に第五門に、三業もて分別す。身業無失、身隨慧行は是れ共身業、口業無失、口隨慧行は共口業、餘の不共法は悉く是れ意業なり。三業是の如し。

（一五）次に第六門に、四緣もて分別す。論の中に說くが如し。身口無失、及與身口隨智慧行は是れ色法なるが故に、唯二緣生ず。謂ゆる、因緣及び增上緣なり。心法に非ざるが故に、緣緣、次第緣より生ぜず。餘の十四は心法の功德なり。四緣生を具す。其過去の善業より熏じて起るは是れ因緣生、心法相起するは次第緣生、境を緣じて起るは是れ緣緣生、萬法障へざるは增上緣生なり。十八不共、之を略して云ふこと爾り。

【二六】淨法聚果法の中第十八段に百四十不共法を明す、に三門の別あり。第一に辨相。
【地持論】第八。

【今は等】辨相の中先づ三十二相八十種好を辨ずるに、先づ其果を明す、中には一に列名。

【涅槃經】第二十六。
【地持】論第八。

百四十不共法の義に三門分別あり。相を辨ず一。作業二。十八不共に對して相攝す三。(二六)第一に、相を辨ず。百四十不共法は『地持論』に出づ。如來の功德下と同じからざるを不共法と名く。分別するに二有り。一には凡夫二乘の人等に對す。有無の不同を名けて不共と爲す。二には菩薩に對す。滿不滿の異を亦不共と名く。德に隨つて廣く論ずれば、不共無量なり。今は一門に據つて百四十を說く。『其名は是れ何ん。』『謂ゆる、如來の三十二相、八十種好を合して一百一十二法と爲し、四一切種淨を合して一百一十六法と爲し、十力を前に通じて百二十六、四無畏を加へて百三十と爲す。大悲を一と爲し、不忘法は二、三念處及び三不護を加へて、前に通じて八と爲す。斷除諸習は九、一切種妙智は十なり。前に通じて一百四十の不共を、百四十不共法と爲すなり。』名數是の如し。今は門別に隨つて次第に之を釋す。三十二相八十種好は色形の功德なれば一處に之を辨ず。福狀外に彰る。之を名けて相と爲す。又內德を表すも、亦名けて相と爲す。姿媚愛すべく人情を悅する、之を說いて好と爲す。此相好を辨ずるに、略して三門有り。一には其果を明し、二には其因を辨じ、三には修の所爲を明す。果を明す中に就いて、曲しくは五門有り。一には正しく列を辨じ、二には多少を定め、三には眞應を論じ、四には得處を明し、五には優劣を辨定す。初に正しく列を辨ず。『何者か是れ其三十二相なる。』『涅槃經』及び『地持』に說くが如し。一には足下安平、奩底の相の如し。二には足下千輻輪、三には纖長指、

【地持】第八。

【次に等】二に多少を定む。

四には踹足跟、五には手足網縵、白鵞王の如し。六には手足柔軟、七には臃膊踼、伊尼延鹿王の如し。八には踝骨不現、九には平立手摩膝、十には馬藏、馬王の如し。十一には身圓滿、尼拘律樹の如し。十二には身毛上靡、十三には一一毛右旋、十四には身金色、十五には圓光一尋、此は釋迦を論ず。餘佛の身光は遠近不定なり。十六には皮膚細軟、塵垢著せず。十七には兩手兩足兩肩及び頂の七處滿、十八には上身如師子、十九には臂肘傭圓、二十には缺骨滿、二十一には身體直、二十二には四十齒、二十三には齒齊密、二十四には齒白淨、二十五には頰車方、師子の如し。二十六には次第得上味、二十七には肉髻及び無見頂、共に一相を成ず。二十八には廣長舌、二十九には梵音聲、三十には目紺色、三十一には眼上下睫、牛王の如し、三十二には眉間白毫なり。』三十二相の名字是の如し。『何者か是れ共八十種好なる。』『地持』に說くが如し。手足の二十指悉く皆妙好なり。卽ち二十と爲す。兩手兩足の表裏の八處平滿なり。前に通じて合して二十八種好と爲す。兩跟、兩膝、兩髀、兩肩、兩肘、兩腕、兩股、兩臂、藏相、兩圓、兩膊、兩腨、兩腋、兩乳、腰脊、心齊及與咽腹、悉く皆妙好なり。三十二と爲す。前に通じて、合して六十種好と爲す。此れ咽已下の六十好なり。上下の牙齒悉く皆妙好なり。卽ち以て二と爲す。兩脣、兩齗、兩頰、兩鬢、兩眼、兩耳、兩眉、鼻の兩孔、額の兩角、悉く皆妙好なり。復十八と爲す。前に通じて合して二十種好と爲す。此れ咽已上の二十好なり。是を八十と爲す。『相好是の如し。』此一門竟る。次に第二門に、多少を辨定す、問うて曰はく、『相好

【次に等】三に眞應を辨定す。

は止此のみ有りと爲んや、更に有りと爲んや。』『花嚴經』相海品に說くが如し。前の三十二相の處に於て、一一に各無量無邊阿僧祇等の相好功德有り。是の諸の相好は名字各別なり。十方界に於て功德作業利益も亦異なり。是の相有りと雖も微妙にして見難し。梵天王の頂上の寶珠の如し、因陀羅と名く。一切の諸天都て見る者無し。又亦彼如意珠王の如し。是珠に具に無量の勢力有り。珠形は見るべし。是珠の力用は見ることを得べからず。佛の相も是の如し。化身の麁相は目を以て覩るべし。實德の妙相は一切の人天能く見る者無く、唯大菩薩のみ少分を知見す。佛乃ち窮了す。但聲聞凡夫を化度せんが爲の故に、但現に三十二相、八十種好を說く。』問うて曰はく、『經に說く、「如來の胸中に一の金剛萬字の相有り。名けて無比と曰ふ」と。何が故に向前の三十二の中に其の名を列せざる。』『此れ乃ち衆多相海の所攝なり。故に三十二の中に於て列せず。』多少是の如し。此二門竟る。次に第三門に眞應を辨定す。問うて曰はく、『向に相好の功德を說く。眞と爲んや應と爲んや。』『分別するに二有り。一には離相微妙の身に對して示現すべき所の、三十二相八十種好の王宮に生を現ずるを、悉く名けて應と爲す。是れ應なるを以ての故に、終に盡滅に歸す。二には所現の三十二相八十種好に就いて、義に隨つて分別するに亦は眞亦は應なり。自業の所起は之を名けて眞と爲す。故に『地論』の中に、此相好を名けて實報身と爲す。即ち此相好は諸の衆生に隨つて精麁異現し、或は生或は滅なり。即ち名けて應と爲す。良に眞應相離れざるを以ての故に、現生の身は常に不生、現滅の身は亦不滅なり。生滅既

【次に等】四に其得處を明す。

【地持】論第八。

【次に等】五に優劣を辨定す。

【地持】論第八。

【次に等】相好を辨ずる中二に相好の因を明す。一に相因を明すに四、一に正しく因を辨ず。

【地持】第八。

【涅槃】南本第二十六。

に然なり。大小精麁の義も亦同じく爾なり。』眞應是の如し。此三門竟る。次に第四門に其得處を明す。因の不同に對して得處も亦異なり。若し地前所修の善業に對すれば、淨心已去の相好は報生なり。若し地上所修の因に對すれば、諸地の中の次第に隨つて報生なり。此兩義は『地持』に說くが如し。得處是の如し。此四門竟る。次に第五門に優劣を辨定す。『地持』に說くが如し。佛を降つて已還一切衆生の福德は、積聚するも如來の一毛の相に等し。一切の毛相の福德は積聚するも彼如來の一隨形好に等し一切の隨形の福德は積聚して、增して百倍に至つて乃ち一相を得。白毫の相、肉髻の相、梵音聲の相を除く。此三相を除いて餘相を得るなり。餘の一切相の功德は積聚して、增して千倍に至つて白毫の相を得、白毫の相の功德增して、百千倍に至つて乃ち肉髻無見頂の相を得、白毫相の功德增して億百千倍に至つて乃ち如來法螽音の相を得。是故に如來は意に隨つて聲を發す。清淨の梵音は乃ち十方無量世界に至る。是の如く如來は無量無邊の功德積聚して思議すべからず。上來の一門は相好の果を明す。次に第二門に、相好の因を明す。經には相因を明して好因を論ぜず。相因を明す中に四門を分別す。一には正しく因を辨じ、二には位に就いて分別し、三には此因に三無量を具して能く相好を生ずることを明し、四には大小所說の不同を明す。正しく因を辨ずる中、義に三門を別つ。一には別因、二には共因、三には通因なり。別因と言ふは、三十二相の得因各異なり。『地持』に說くが如し。持戒忍辱惠施するが故に、足下平安を得。『涅槃』に說くが如し、『持戒動ぜず、施心移らず、實語に安住して足下平を

得と」。父母和上師長を供養し、苦惱の衆生の爲に救護を作す。故に足下千輻輪の相を得。衆生を害せず劫盗の想無く、尊重する所に於て先話問訊合掌恭敬し、愛念の財を以て供養を爲し諸の慢高を破して纖長指を得、卽ち上に得る三相業もて傭足跟を得、四攝の事を以て衆生を攝取するが故に手足網縵を得。尊重する所の爲に塗身洗浴捉持案摩するが故に、手足柔軟の相を得、諸の善法を修し轉進して厭ふこと無ければ、傭腨踊を得。『涅槃經』に說かく「專心に法を聽き正法を演說して鹿王蹲を得、自ら正法を受けて廣く人の爲に說き法の爲に走使して踝骨不現の相を得、次第に修行して三業清淨に、病を瞻て藥を施し、諸の我慢を離れ、知足を修習して手摩膝を得、分離する者を見ては法を以て和合し、慚愧を修習し人に衣服を施して馬藏の相を得、三業を淨修し亦人を敎へて修せしめ、飲食量を知り、病者に藥を施し、離業を攝受して難財を集聚し、四大增損能く調順せしめて身圓滿の相を得、卽ち上の傭腨踊を得る業もて身毛上靡を得、諸の善法を修して智慧明達し、諸法微細の義を思惟し、尊重する所に於て樂んで供養を修し、同住の者に於て善友を以て攝し、敎へて義に入らしめ一一毛右旋を得、上衣食車輿瓔珞嚴身の具を以て一切に施し、嗔恚を起さずして身金色圓光の二相を得、卽ち一一毛右旋を得る業もて皮膚柔軟を得、廣く衆生に施し大會を供設して七處滿を得、已起未起の一切の善法を導首と作すが爲に、我慢を離れて其性柔和し、不善を除かんが爲に敎ふるに善法を以てし、上身如師子を得。卽ち上の纖長指を得る業もて臂肘傭圓、缺骨滿、身傭直の三相を得、兩舌を遠離し、壞する者

【地持】第八。

を和合し、四十齒、齒齊密の二相を得、欲界の慈を修し法義を思惟して齒白淨を得、衆生に隨つて等しく歡喜施與して頰車方を得、勝法の味を施し諸味を壞する者は爲に共味を淨めて次第得上味を得、五戒を受持し轉じて以て人に授け、常に悲心を行じ大法に廻向して、肉髻無見頂相、及び廣長舌の二相を得、常に實語、愛語、時語、如來語を修し、方便して法を說いて梵音聲を得、普く衆生に於て等しく慈心を行ずること猶し父母の如ければ、目紺色、眼上下瞬の二相を得、實德の者を見て稱揚し、彼を讃じて眉白毫の相を得。別因是の如し。次に共因を明す。衆多の相好共に一因にして生ずるを、名けて共因と爲す。中に於て兩門有り。「地持」に說くが如し。第一には四修に約就して分別す。諸の善法に於て、決定修の者は足下安平の相を得、專心修の者は足下千輻輪、傭腨腸、手足網縵、手足柔軟、七處滿、缺骨滿、臂肘傭圓、身傭直、廣長舌の九相を得、常修の者は纖長指、傭指、傭足跟、立手摩膝、身圓滿、齒齊密の五相を得、無罪修の者は餘の諸相を得。二には八種の淨業に約して分別す。諸の衆生に於て忿恚の心無くして、手足柔軟、皮膚細濡の二相を得、次第修の時傭腨腸相を得、歡喜光明にして供養を爲し、善心音聲にして讃嘆を爲し、圓光一尋、身金色、齒白淨、眉間白毫の四相を得、譽を聞いて喜ばず、功德を覆藏して馬藏相を得、所修の善根を菩提に廻向して、身毛上靡、四十齒、次第得上味、肉髻の四相を得、勤修精進して上身如師子、頰車方の二相を得、衆生心を安んじて一子を視るが如く、齒齊密、眼紺睫、眼上下瞬の三相を得、修善厭くこと無くして餘相を獲得す。共因

【地持】第八。

【涅槃】南本第二十二。

【次に等】二に位について分別す。

【次に等】三に相好の因の三無量を具して相好を生ずることを明す。

【地持】第八。

【次に等】四に大小乘所說の不同。

是の如し。次に通因を論ず。一切の證和因行に別無きを、名けて通因と爲す。此門の中に於て、差別するに三有り。第一には總じて戒行を說いて因と爲す。『地持』に說くが如し。三十二相は差別の因無く、皆是れ持戒なり。若し戒を持たずんば、尙下賤の人身をも得ること能はず。況んや大人の相をや。第二には百福を宣說して因を爲す。『涅槃』に說くが如し。三十二相の一一皆百福を爲して主を嚴る。其百福とは、五品の心中に十善を修行す。謂はく、下、中、上、上中、上上を卽ち五十と爲す。始に五十を修し、終に五十を成ず。是を百福と爲す。此百は猶是れ戒行の差別なり。三には一切の諸行に就いて因と說く。理實に通じて論ずれば、一切の諸行は一一皆相好の果を得、差別有ること無し。因體是の如し。此一門竟る。次に第二門に、位に就いて分別す。理實に通じて論ずれば、始め發心より、終り法雲を盡すまで、一一の地の中に具に相好の因を修せずといふこと無し。相に隨つて具に分たば、善趣地の中に方に始めて修習し、種性已上に種子成就し、解行地の中に方便して果を生じ、初地已上に果現前することを得。位に就くこと是の如し。此二門竟る。次に第三門に相好の因に三無量を具して、能く相好を生ずることを明す。『地持』に說くが如し。一には劫無量、亦は名けて時無量と爲すことを得るなり。種性已上は三阿僧祇大劫に修行す。故に相好を生ず。二には心無量、一切の衆生を安樂し饒益す。故に相好を生ず。三には行無量、一切の善業備に修せずといふこと無し。故に相好を生ず。此三門竟る。次に第四門に其大小所說の不同を明す。十一門有り。一には界に就いて分別す。大乘の人の說かく、「相好の因

【龍樹等】大智論第四。

は唯欲界修にして上二界に非ず」と。龍樹宣說すらく「欲色界修にして無色界に非ず」と。理も亦之に通ず。一切の善業は皆悉く能く相好を生ずる因なるが故に。二には趣に就いて分別す。小乘の人說かく「人中に修習す」と。龍樹宣說すらく「五趣に通ず」と。彼娑伽龍王等の輩の如き、皆是れ菩薩にして同じく佛因を修す。三には處に就いて分別す。小乘の中に說かく「閻浮提に修して餘方に在らず」と。龍樹宣說すらく「三天下に修し、鬱單越を除く」と。理も亦之に通ず。菩薩は遍く一切處に在り。修は皆悉く能く相好の因と爲るが故に。四には身に就いて分別す。小乘の中に說かく「男女の身に修す」と。龍樹說かく「通じて不能男等も亦能く修習す」と。五には具に就いて分別す。小乘の中に說かく、「唯意に在つて修し、身口に通ぜず」と。此一言は龍樹破せず。理三業に通ず。一切の禮拜讃嘆等の善は皆悉く能く相好の因と爲るが故に。六には識に就いて分別す。小乘に宣說すらく「意識の中に修す」と。龍樹の說も通ず。七には多少を分別す。小乘の中に說かく、「彼一一の相は一思を因と爲し、後の多思は助成す」と。龍樹の說かく「一一の相に於て無量の思を以て、以て因と爲す」と。八には時に就いて分別す。小乘の中に說かく「佛出の時に修し、餘時には修せず」と。龍樹宣說すらく「一切の時に修す」と。九には位に約して分別す。小乘の中に說かく「菩薩は三阿僧祇劫を度し別して百劫に於て相好業を修す。極少は九十一劫に修習す。釋迦佛の如し」と。龍樹宣說すらく「初發心より佛に至るまで恒に修す」と。十には境に約して分別す。小乘の中に說かく「佛身を緣じて修す」と。龍樹の說

【次に等】相好を論ずる中三に修の所爲を明す。

【涅槃】南本第二十二。

【四一切種淨等】上に相好を辨じ、下四一切種淨等を明す。

【地持】第八。

通ず。第十一門には次第分別す。小乘法の中、有人、宣說すらく「先に足下安平の相を修す。要ず先に足立し後に能く餘を起す」と。或は有人の說かく「先に如來の紺青眼の相を修す。此眼相を以て衆生を慈視するが故に、先に之を修す」と。龍樹此を破す「明かに修は次に非ず」と。上來第二に相好の因を明す。次に第三門に、修の所爲を明す。理實には齊しく通ず。義に隨つて且く分たば、諸相を修習するは、身器を淨めて阿耨菩提の淨法を攝受せんが爲なり。王を請ぜんと欲して先づ舍宅を嚴にするは、妙食を盛らんと欲して先づ寶器を嚴にするが如し。此も亦是の如し。『涅槃』に說くが如し。此を自利と爲す。諸好を修習するは、衆生を攝して愛敬を生じ、樂んで所說を受けしめんが爲なり。又『涅槃』に說かく「世間の衆生は八十神に事ふ。佛爲に攝取す。是故に八十種好を修習す」と。其八十神は、『涅槃經』の十德の中に說くが如し。相好是の如し。

四一切種淨とは、謂ゆる、身淨、心淨、境界淨、智淨なり。義は上に解するが如し。

其十力とは、處非處より乃ち漏盡に至る。義は上に釋するが如し。今更に經に依つて略して其相を轉ずれば、經に初力を說くに其九句有り。一には如來、人の別德を樹つ。『地持』に釋するが如し。言語に說く所如に乖かざるが故に如來と名く。二には是處非處、其力の境界を擧ぐ。淨不淨の果は差別の因に依るが故に是處と名け、差別の因違するを名けて非處と爲す。三には如實智、其力體を出す。『地持』に釋するが如し。離增上慢智は是れ知らざるを妄に智と稱するに非ざるが故に。四には是力、力の名義を辨ず。『地持』に釋するが

【論】地持論第八

如し。一切の魔に於て捨離して勝ることを得る、之を名けて力と爲す。自行の力なり。能く一切に堪へて衆生を利益す、之を名けて力と爲す。化他の力なり。五には成就、果を簡んで因に異す。『地持』に釋するが如し。攝受を修習して欲に從つて自在なり。故に成就と名く。攝受を修習すれば力體成ずるなり。欲に隨つて自在なれば力用成ずるなり。六には勝妙、其果間を彰す。無上涅槃を名けて勝妙と爲す。七には安穩、其因熟を顯す。八聖道を得て一切の惱亂恐怖を遠離す。故に安穩と名く。八には能轉梵輪、九には能師子吼なり。此二は力用、善人を化益す。惱を除き寂を得しむるを轉梵輪と名け、邪衆を摧伏して異見を捨せしむるを師子吼と名く。九が中の前の七は是れ自安の道にして、後の二は安他なり。第二の業力は經に七句有り。一には三世の業を知り、二には身口意の三種の業を知り、三には四法受を知る。法の現苦後樂有り、法の現樂後苦有り、法の現苦後苦有り、法の現樂後樂有り。論に廣く是四法受を辨ずるが如し。四には衆生數の造業の人と爲ることを知り、五には衆生及び非衆生の造業の境界を知り、六には業因を知り、七には業果を知る。定力に二有り。一には如來定に於て自在に種種現化することを明し、二には衆生の定心の有無を知つて力に隨つて修を敎ふ。他の衆生の軟中上根を知るを名けて根力と爲し、他の衆生の軟中上欲を知るを名けて欲力と爲し、他の衆生の三乘の性別及び煩惱性の種種の不同を知る、是れ性力と名け、諸處門を知つて衆生に教授し、及び衆生の種種の異見に各所至有るを知るを至處道と名け、過去世の八種の事、六種の同行を知るを宿命力と名く。八種

【七】第二に作業を明す。

の事、六種の同行は前に具に辨ずるが如し。天眼力とは、如來の天眼は淨を扶け人に過ぎ諸の衆生の好色惡色を見る。又衆生の身口意等の善不善の行は身壞命終して、或は善道に生じ或は惡趣に墮するを見る。漏盡力とは、如來は自漏悉く已に盡きて一切の德を具し、亦衆生の有盡不盡を知つて宜しきに隨つて教授す。十力是の如し。四無畏とは、謂はく、一切智乃至能く盡苦の道を說く。義は上に解するが如し。三念處とは、如來長く我法の最勝を念じ、然して受者及び不受者に於て惱心を起さず。衆に三種有り。一には正衆、二には邪衆、三には非正非邪なり。此三衆に於て正念心を以て增減無きを三念處と名く。三不護とは、佛過永く盡きて身口意業に防護を須ひざるを三不護と名く。大悲と言ふは、四無量心を總じて大悲と名く。不忘法とは、如來は身口意等に於て作すべき所の事を常に念じて忘れざるを不忘法と名く。斷諸習とは、如來の動止觀瞻言說一切の煩惱所起の相似の餘習を離るるを、斷諸習と名く。一切種妙智とは、佛は三法を知る。一には義饒益、是れ其善法なり。二には非義饒益、是れ不善法なり。三には非義非非義、是れ無記法なり。前の二に同じからざるが故に、非義非非義と云ふなり。此三の中に於て、惡無記を知るを一切種智と名く。善法を知るを名けて妙智と爲す。此二を合說して一切種智と爲すなり。百四十法の相別是の如し。

(一七)次に第二門に、其作業を明す。此不共法は十方界に於て衆生を利益す。十種の業有り。一には衆生をして信心淸淨ならしめんと欲して、丈夫の身を受け諸の相好を起す。二

【一八】第三に十八不共法に對して相收攝す。

には一切の所作無礙自在にして四一切種淨を起す。三には衆生を念し一切の疑を斷ぜんが爲に佛の十力を起す。四には如來一切の知見を聞き一切の問に答へ、諸の邪論を伏し正義を建立せんが爲に四無畏を起す。五には如來の智慧、衆生を調伏し諸の衆生に隨つて、正法の中に於て若は住不住、惱心を起さず、三念處を起す。六には一切の所作、過失有ること無く三不護を起す。七には常に佛眼を以て世間を觀察して大悲心を起し、八には衆生の一切の所作に於て皆已作するが故に不忘法を起す。九には如來の所行は如に隨順して餘過有ること無く斷諸習を起す。十には不善無記の一切は諸の善法を遠離し、分別顯示するが故に一切種妙智を起す。作業是の如し。

（一八）次に第三門に、彼十八不共の法に對して共に相收攝す。十八不共は上に廣く辨ずるが如し。彼十八の中の三業無失、三業隨慧は、百四十の中の三不護の收なり。無異想とは、諸の衆生に於て平等心に住して怨親の想無し。百十の中の定力の所收、無不知已捨は百四十の中の不忘法の攝なり。智慧無減、知見無減は三世を了達す。百四十の中の一切種妙智の攝なり。解脫無減は百四十の中の斷諸習の攝なり。彼十八の中の欲念精進の三種の無減は、百四十の中には略して論ぜず。百四十の中の三十二相、八十種好、四一切種淨、十力、四無畏、大悲は、彼十八不共法の中に於て隱して彰さず。佛德無量にして隱顯して互に擧ぐ。具に責むべからず。一百四十不共佛法、之を辨ずること略して爾なり。

大乘義章卷第二十末

昭和六年十二月五日印刷
昭和六年十二月十日發行

昭和新纂國譯大藏經宗典部第廿一卷

不許複製

編集者　昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者　三井晶史

發行者　東京市神田區一ツ橋通町二番地
東方書院
十藏寺宗雄

印刷者　東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者　非波康三郎

發賣所　東京市神田區一ツ橋通町二
株式會社東方書院
電話九段三八四二
振替東京六八六一一

印刷所　西村山太郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3449